

奇譚クラブ

● 新しい風俗文献誌

12



奇譚クラブ

1970.12

昭和四十五年十一月二十日印刷 昭和四十五年十二月一日発行 七二頁 定価 二十四円 送料 二円 毎月一回 日曜刊 昭和四十五年四月二十日第三種郵便物認可 昭和四十二年四月二十日国鉄大塚特約販売店登録第 〇〇号

作 鬼 団



決 定 版

昭和37年8月号に端を発してより絶讃を博し続ける「花と蛇」の文字通りの決定版が堂々八百有余頁の超豪華本として完成致しました。驚異的な人気を生み出したこの長篇サディズム小説は、現在尚『奇譚クラブ』誌上に連載中でありましたが、過去四回の特集にも拘らず数多くの要望にお応えして、今回の総集篇発刊となつた訳であります。八カ年の集積を味読して下さい。

● 瞠目のサディズム小説総集篇遂に成る!!

|| 略号『花決定版』 || 定価一、〇〇〇円 (送200円) ||

第一章 発端 第二章 人探し 第三章 麗人 第四章 救済 第五章 救済 第六章 餓魔 第七章 恐怖 第八章 恐怖 第九章 淫蛇 第十章 美姉 第十一章 色事 第十二章 美津 第十三章 落花 第十四章 密室 第十五章 脱走 第十六章 華やか 第十七章 地獄 第十八章 翻弄 第十九章 千万円 第二十章 身代金

第二十二章 身代金奪取の失敗 第二十三章 涙の宣誓 第二十四章 連命の逆転 第二十五章 奇妙な三々九度 第二十六章 飼育される白い動物 第二十七章 悪魔と悪女の悪業 第二十八章 屈辱の地獄図 第二十九章 逃走の恐怖と失敗の結末 第三十章 悪鬼達の残忍な所業 第三十一章 落花無残の修羅場 第三十二章 淫らな美女の調教 第三十三章 すさまじいショーの展開 第三十四章 汚水にまみれた宝石 第三十五章 華々しき美女の屈伏 第三十六章 対峙する美女と美女 第三十七章 あくどい陥穽 第三十八章 羞恥図絵の展開 第三十九章 清純な令嬢の屈辱 第四十章 人身御供の令夫人 第四十一章 深窓の美少女とズベ公 第四十二章 小夜子への執拗な調教 第四十三章 変性色事師の登場

第四十四章 生れかわるスター京子 第四十五章 激しいスターへの訓練 第四十六章 低脳男と令夫人の結婚 第四十七章 愛弟子を調教する静子夫人 第四十八章 羞恥と屈辱の日本舞踊 第四十九章 悪魔たちの哄笑 第五十章 地下室の羞恥と汚辱地獄 第五十一章 珍芸を開陳する令夫人 第五十二章 淫靡な時代劇ショー 第五十三章 華々しきショーの展開 第五十四章 野卑な妾二人のいたぶり 第五十五章 ズベ公達の邪悪な責め 第五十六章 屈辱の中に泳ぐ奴隷たち 第五十七章 悪党の執拗ないたぶり 第五十八章 文夫と小夜子の屈辱的対面 第五十九章 勝ち誇る悪党一味 第六十章 中国伝来の秘法 第六十一章 緊縛された美女の涕泣 第六十二章 新しい餌食への触手 第六十三章 苦痛と屈辱の生地獄 第六十四章 恐怖の責め続く 第六十五章 結末なき責めの結末 第六十六章 甘美な拷問に悶える夫人 第六十七章 新しい穢の到来と静子の狂態 第六十八章 あくなき汚辱に泣く美女 第六十九章 ニューフェイスに飼育開始 第七十章 肉体の悪魔に魅せられた女 第七十一章 熱気を帯びたマゾの競演 第七十二章 女盛りの妖美な肉体 第七十三章 優雅な木馬夫人の崩壊 第七十四章 美女と野獣の奇妙な闘争

お申込は大阪市住吉郵便局私書函第41号。 558 暁出版株式会社宛

女性モデル募集

勇敢な女性の出現を望む

▽規定△

一、応募作品は編集部にて慎重銓衡の上、入選決定しましたものは速かに筆者に通知致します。入選作品に對しましては掲載の如何に拘らず、入選作品に對しましては掲載の如何に入選作品の著作権は当社に移行することを前

[illegible]

○本誌の内容充実刷新のため、並に本誌の文献資料性向上のため、女性の写真モデルを募ります。本誌の女性読者の方で写真モデルとして活躍を望まれる方は、どうか勇気を奮って御応募下さるよう、お願い致します。

○本誌愛読者の女性の方でしたら、国籍、年令、遠近は問いませんから御遠慮なくお申込み下さい。採用の方には壹万円以上拾万円までの謝礼を差し上げます。

○応募されました方々の個人的な秘密は絶対に漏洩致しませんから御安心の上御応募下さい。尚その際、お好みの傾向を出来るだけ詳しくお書き下されば幸いです。

○誌上掲載を原則としておりますが、若し掲載を望まれない方がありましたら、その旨添記して下さい願います。御都合に依って分譲用又は助手介添え或はプレイのみの出演をして頂きます。その時の報酬については改めて御相談に応じます故御照会下さい。

○モデルに關してのお申込みは、年令、略歴の他に身長と体重をお書き添え願います。写真を同封下されば尚結構ですが、若しお手元に適当なものがなければ、なくとも差支えありません。

申込先 Ⅱ 大阪市住吉郵便局私書箱第41号
暁出版株式会社編集部宛

THE KITAN CLUB

Published Monthly By Akatsukisyupan

Osaka Japan



12月号 ¥350

沖繩美人の明子嬢

妖麗な縛られぶり

股間縛りの痛さか

悶える厳しい縛り

椅子で演ずる痴態

大手札三枚一組 四〇〇円

大手札三枚一組
座間明子
略号四〇〇円
△ほあ▽

大手札三枚一組
座間明子
略号四〇〇円
△人ほさ△

美しさ抜群の正面

飼育女性好美夫人

本誌十月号のカメラハントで計
村隆氏が『悦虐の甘き戯れ』と題
して渡部好美夫人の悦虐ぶりを紹
介しておりますが、それとは別に
編集部にて渡部氏の依頼に依つ

悦虐にむせふ美貌

責められて恍惚境

足挙げと開股縛り

超羞恥責めの極致

股縄は知っている

大手村三校一組 四〇〇円

鼻責めの悦楽境地

鼻を愛撫する責め

蠟燭責めと臀打ち

喰い込む股間縛り

みは大阪市阿倍野局私書箱第14

（大星）社外資金でお願いします。

徹底の肅自誌本

一、本誌は特殊な風俗文献を研究する平和で
 穏健な社会生活を営む真面目な成人を対象
 として編集しておりますが、青少年の保護
 育成に関する条例には抵触しないよう、十
 分な配慮を今後更に徹底いたします。

一、本誌では従来巻頭を飾っておりましたグ
 ラビア写真並に口絵を全廃し、文中の挿絵
 の削減に努め、読む雑誌としての体裁を順
 次整えて参りましたが、更に挿入写真の減
 少及び見出し、キャッチフレーズの改訂な
 どによって煽情性を排除してゆきます。

一、本文の内容についても、刺激の強いもの
 は極力掲載しないようにするのは勿論、掲
 載した文章は十二分に検討を加え、いやし
 くも青少年の健全なる育成に支障を与えな
 いよう努力いたします。尚、本誌の発行部
 数は最低限度にとどめ、その増大を企るた
 めの努力はいたしません。



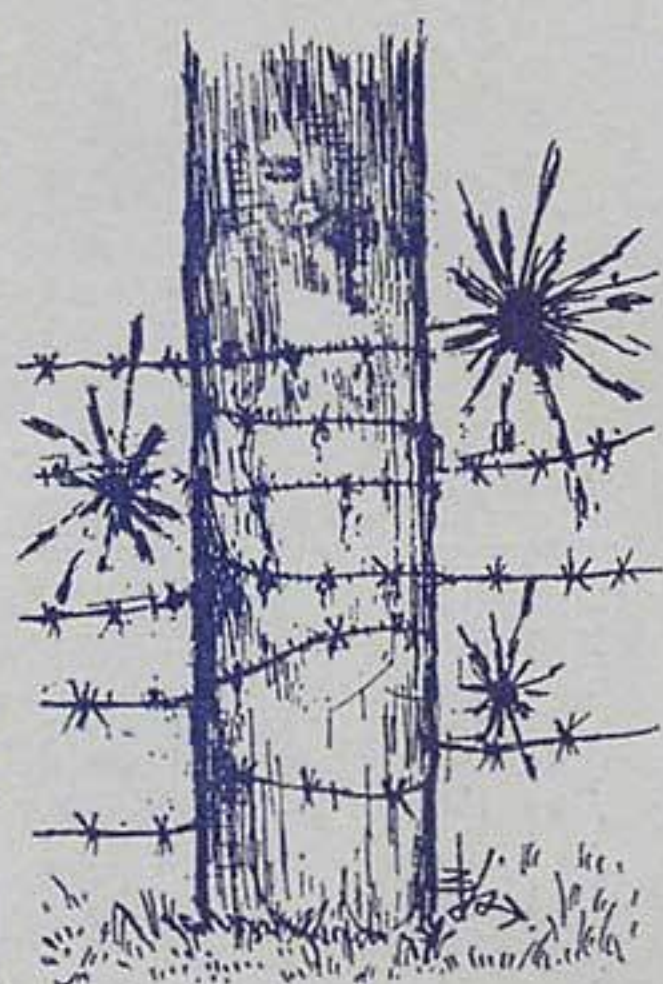
奇譚クラブ

△第二四巻 第十二号・通刊第二七三号▽

(昭和四十五年) 十二月号 目次

△本 文▽

- 扉で一言 「SM短詩十二章」……………三輪 昂(9)
- 告白『マゾ願望の女』……………渡部 好美(10)
- 体験告白 ひそかな愉しみ△附稿・雑誌通信▽……………伊里賀 透(14)
- 連載・Mの傾斜『壺中の園』(8)……………真砂十四郎(24)
- 随想・ある劇画から “さき” の責め……………早木 夢二(33)
- (水田真紀子)「正月の乙女」……………水田真紀子(34)
- (習作シリーズ)「正月の乙女」……………水田真紀子(34)
- 女責め図絵の系譜 “毛吊るし女地獄”……………南 彦造(42)
- SMカメラ・ハント△三浦敬一・純子夫妻の巻▽……………辻村 隆(44)
- 『夫婦愛虐図絵』……………辻村 隆(44)
- 異国のM “凌辱”……………三原 寛(65)
- 美女緊縛作法 『八重垣流秘聞』(三)……………風流極道軒(70)
- 告白 魅惑のオシメ……………安田 隆夫(85)
- 懸賞告白入選『鼻 輪』……………美枷 輪生(86)
- 佐野みさ子さんへ “おねがい”……………羽鳥 水江(95)
- 連載小説 “大噴火”(第20回)……………千葉 青鬼(98)



奇ク回顧二十年	塚本 剛水
短詩「剃毛開眼」	清水 康子
鼻責めの同志「東京YY様」へ	増田喜代司
サロン楽我記「第七十八回」	辻村 隆
短信往来 妊婦ファンの皆様へ	佐野みさ子
「渡部ご夫妻へ」	阪東 太郎
新婚縛り行脚	福井 太郎
編集部だより	編集 部
想い出「あの娘」	青井 松造
読後感「奇ク」をひねくれて読む	加瀬 好男
美少女無惨絵秘帖「竹藪の怪」②	桐原 紫門
コント「密室の怪事件」	津軽 壤
イメージ画「拷問開始」	須坂 旭
ゴム衣裳デザイン 婦人用ゴム引雨具	梅川 幸子
乗馬女性 アマゾンの面影	佐野 寿
Mフォト 変態犬のトイレ掃除	犬 畜 生
奴隷妻「八重子」の近況	橋本 二郎
夢の殿堂 プレイ用住宅	黒田 貴夫
感想と批評 ある新聞記事から	石部 金吉
「和装縛り」のマニアから	山本 五郎
「あなる・せつくす」について	阿那 丘志

ある愛好者の弁 おむつ愛	井上 俊彦 (106)
被虐の旅シリーズ 続・仙人掌の夢	由利美千子 (112)
懸賞応募作 チャコの場合	城野 洋之 (122)
連載・マゾ紳士行状記「M派交友録」(12)	鬼山 絢策 (132)
外国映画猿ぐつわのシチュエーション	鳴山 能平 (142)
創作光り煌く鞭(結)	宇光 仙 (152)
「カメラ・ハント」に酔う「羞恥ポーズ」	高野 原美 (161)
青春の陥穽(11)「二組の夫婦」	芳野 眉美 (164)
懸賞入選 甘美なる月経帯	工月 洋一 (172)
懸賞告白「浣腸責め考」	丸鬼土佐渡 (183)
連載小説「花と蛇」(続篇第六十九回)	団 鬼六 (186)
創作 女中ツ子	中山 久司 (193)
告白 プレイの夢想	ロマン派生 (198)
M小説「鬼女の面」	浅羽やすし (200)
セミ体験記 魅惑のブルーマー	田中 央人 (215)
カメラ・ルポ「M女の生態」	塚本 鉄三 (218)
読者通信	編集部選 (252)
読者ギャラリィ	「CMページ」室井亜砂路・「ある一刻」
	春川ナミオ・「いけにえ」
	岡 たかし・マンガ「街角で」
	目次カット
	扉カット
	「宴」札幌・S・U
	九美 淳
	「影」あらい・かず

縛られるのはいや

卓上の裸身は躍る

大手札三枚一組 五〇〇円

シーラ・ケニー 略号△いて▽

テールブルの固い板の上に正座させられた白人の美女が縦横に縄を掛けられて二つ折りになっているのを正面側面背面から狙った。

両手吊りの全裸像

大手札三枚一組 五〇〇円

日本式縛りの痛さ

と伸びた肢体とが両手を吊られて拘束されることによって諦めきつた被虐美を最高に發揮している。

白人をいたぶる手

縛られた彼女の心の中にマゾの芽が芽ばえているかどうかかわからないが、全裸で縛られたこのポーズの中に諦めきった相が見える。


金髪美女も台なし

大手札三枚一組 五〇〇円
 シーラ・ケニー 略号△いゆ▽
 ドス黒い麻縄は情容赦なく白肌
 に埋まり青い目を曇らせて、この
 異様な緊縛に耐えようとする。

...


.....

~~~~~



.....

...



...

~~~~~




札幌・S・U・画

SM短詩十二章

虐げられたわたしの顔を映す鏡は、嗜虐の光りを放っている。

冷やかに眺めるだけの鏡は、あなたの鞭より痛い。

折り曲げられ、たわめられ、ああ縄が織りなすデフォルメ。

あなたを縛ったら、その縄のつづきでわたしを縛ろう。

こうして、わたしたちは陶醉する。乳房をクレーンで引きあげよう。乳房

にふさわしい鎖のクレーンで——乳首にかけた鎖輪、垂直にたれ下っている金色のくさり。

ろうそくの灯りに身をひたした貴女。縄目のかげが何とうつくしい。

あなたの鼻腔を花で飾ろうか。さて、何がいいだろう。

鼻翼のうごきほど被虐をあらわし、嗜虐をたかめるものはない。

あなたの白いからだをキャンバスにしよう。鞭で、赤い絵具で、彩ろう。

鞭は筆だ。白い背中に赤い筋でエクスタシーをうかばせる。

わたしたちの昂まりは、緊縛のままの交接でおわろう。

わたしたちを人間として認めるために



八年前のあの日、あの映画館での主人との出会いがなかったなら、そうして主人と結婚していなかったら、今頃、私の人生はどうなっていたでしょうか。

おそらく、平凡な家庭の主婦として、ただなんとなく、その日その日を送っていることでしょう。長い人生の中での、小さな出来事が、私を今日のような女にしてしまったのかと思うと、なんともたえようのない、せつない思いが、心の底からつき上ってまいります。

「ああ、私はどうして、こんな女になってし

＝＜告白＞＝

マゾ願望の女

渡^{わた}

部^{なべ}

好^{よし}

美^み

まったのだらう」

結婚間もない若い夫婦が、何か新しい刺激がほしい、そんな思いで始めた私達夫婦のプレイは、ある時は激しく、ある時は平凡に、二人の感情の高まりにまかせて行なっていてまいりました。しかし、それは二人だけが、そっとお互いの心の中にしまっておきたいものでした。

それなのに、夫婦の間に差し込んできたプレイへのマンネリ化に気付いた私達は、またあの頃の新鮮な刺激を、いつしか求めておりました。写真撮影をすることも、その一つでした。今日まで、二人が誰にも秘密にしていた二人だけの世界を、奇ク誌上に写真と共に

さらけ出す、そうして、奇クファンの方々とお友達になりたい、その願いをこめて、あの告白文を書いたのです。

あの告白文発表以来、たしかに、今まで忘れかけていたプレイへの楽しみが、よみがえりました。私の心の片すみには、いつも誰かが私のあられもない姿を見ているのかと思うと、恥かしく、そうして肉体は熱く燃えひろがり、私の願望は、日増しに強まってまいりました。

一度、主人以外の男性とプレイがしてみた、麻縄の下で快感をかみしめ、ローソクの熱いしたたりに、そうしてあの針責めの喜びを、主人以外の方によって与えられたいとい

う大それた考えを抱くのでした。

私のそんな姿を主人に見せてあげたいという気持ちさえ持つようになりました。それは又主人の願いでもあるのです。

神様が、もし私達夫婦のために、それをお許しになるのなら、その夢をかなえてほしいと、私はそう願いました。でも、現実には、そのようなことが出来るでしょうか。

奇クの中には、交換プレイのお話や複数プレイのことが、よく発表されておりますが、どうして、そんなチャンスをおつかみになったのか、私には大変うらやましく思われてなりません。やはり、夢は夢でしかないのかとも思いました。

四月中旬のある日、その日は午後から激しい雨が降っておりました。いつものように、私は主人に命じられるままに、麻縄で縛られ肛門へ鳥の羽根のクスグリ責めを受け、お尻に針責めと、レギュラーの責めを受け、それから、生まれて初めて乳首にローソク責めを受けました。

じーんと頭の芯につきさすような、激しい熱さと、そして底知れぬ痺れるような快感に気が遠くなる思いでした。

激しいプレイの陶酔から目がさめた時、主人から、「奇クのモデルになるよう」とモデルの志望を命ぜられました。一瞬、どきっとしましたが、プレイの後の痺れるような、な

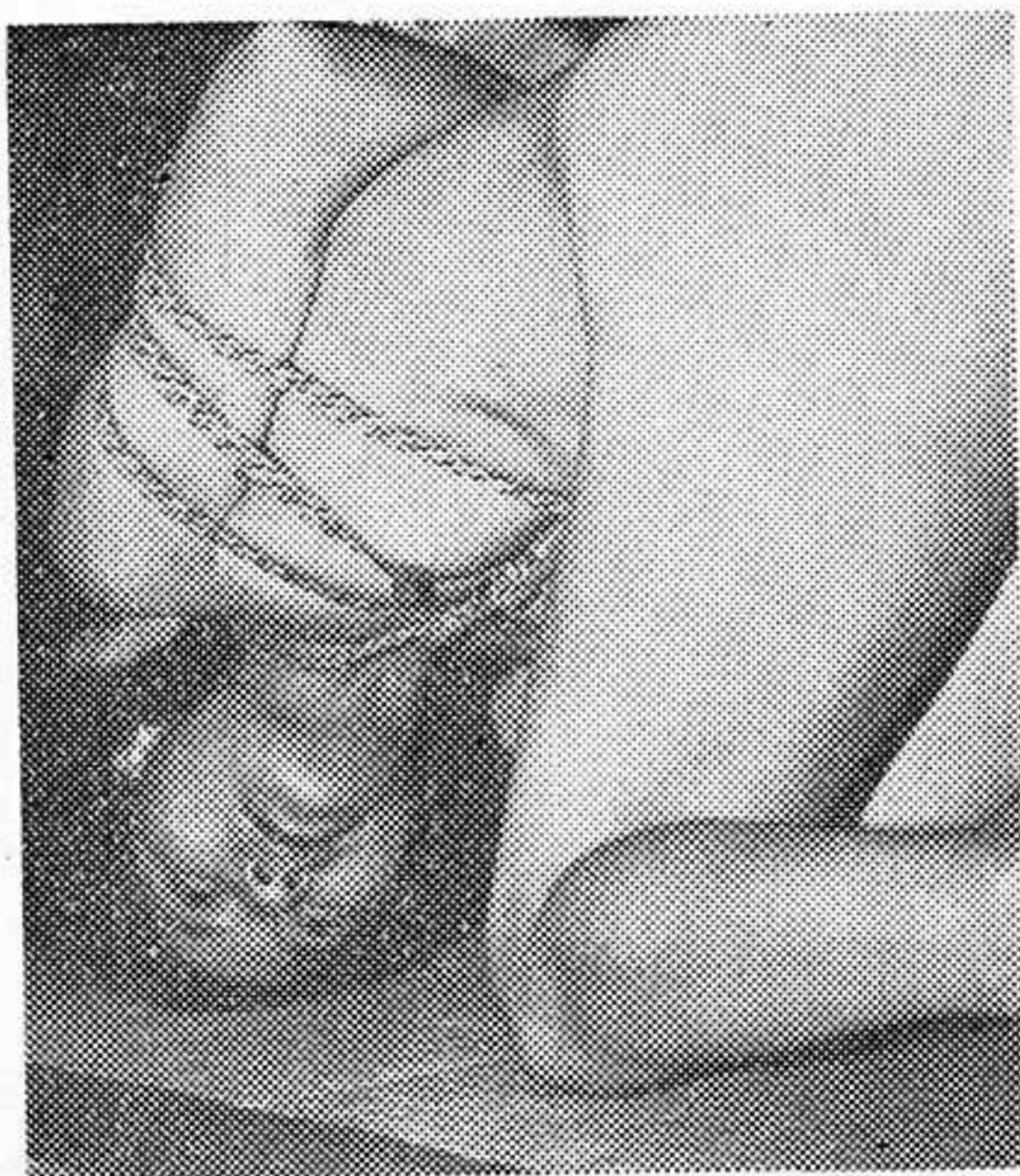
んともいえない気持ちが、そうさせたのか、私は、あっさり「はい」と返事しました。

もしも、モデルに採用して戴けたら私と主人の長い願望が、現実のものになる——そう考えると、体がぞくぞくする思いで、奇クへ、その旨、お願いしたのでした。

それから、しばらくは、「私なんかモデルになんかなれないわ」と思ったり、「もし採用になったら、どうしようか」などと、期待と不安めいたものに、私の心は千々に乱れ、それとなく動揺しましたが、毎日の主婦業に忙しく、私の願いごと、心の片すみに、小さくうずいてはいても、奇クからは何の返事もありませんでした。

「やっぱり、私のような、オバーちゃんでは駄目だったんだなあ」と思い、主人も「せっかくのチャンスも、かなえられないのか」と残念がっておりました。ところが、奇ク6月号を手にして、びっくりしました。編集部だよりVの中に、私がモデルを志望していること、辻村さんにお逢い出来ることが書かれているではありませんか。

なかば諦めていた私達夫婦の願いが、やがて辻村さんの手によって、夢から現実になるという喜びは、何物にもかえがたいものでし



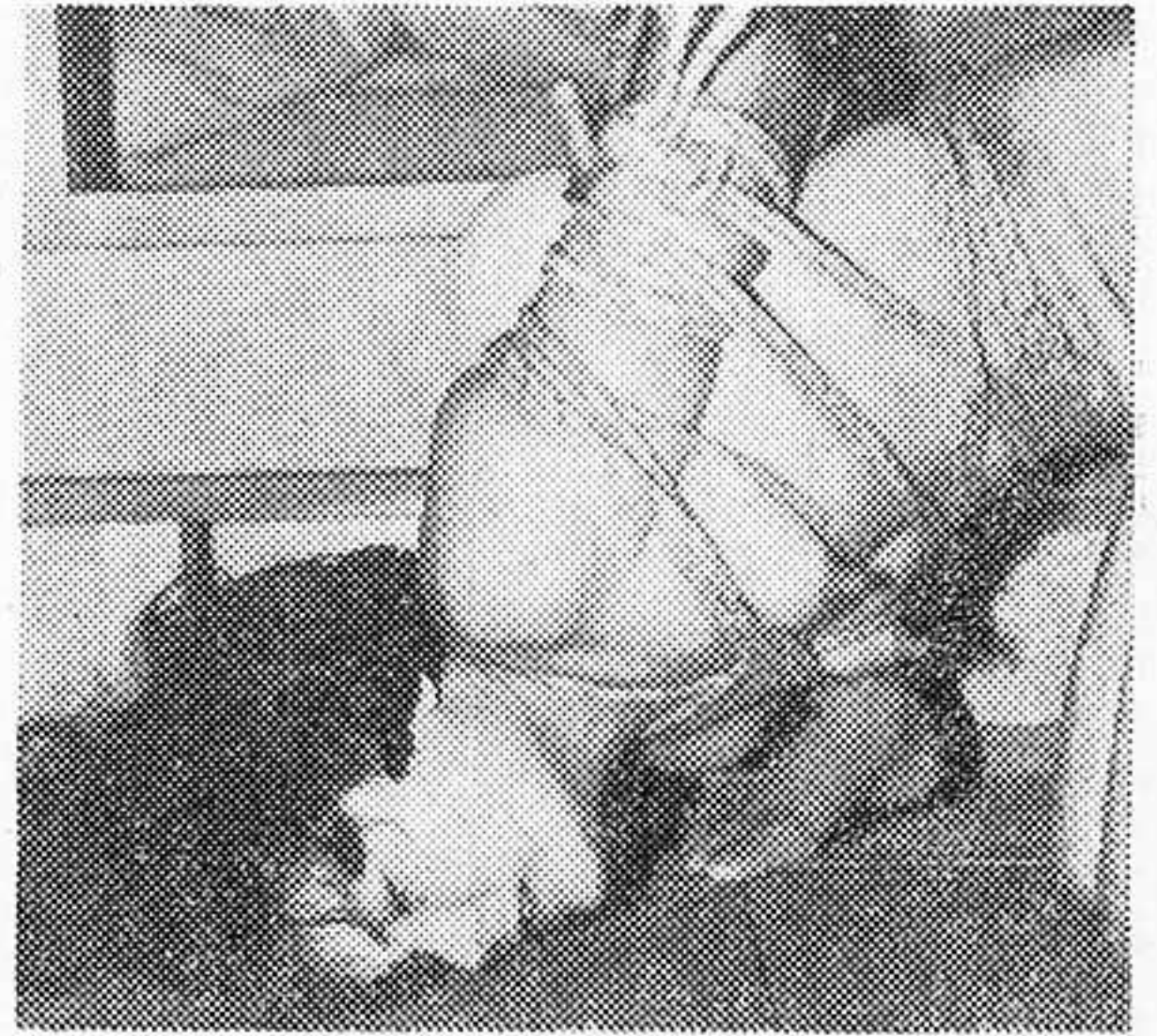
た。

辻村さんといえば、奇クとは切っても切れない常連寄稿家のナンバーワンだし、M的願望の女性にとって、誰もが一度は頭で考え、ひそかに願い求めるその人でした。

その辻村さんに、私が縛られ、写真に撮られる——私のような女性にも、奇クは、その願いをかなえてくれたのです。

私は感謝の気持ちでいっぱいになりました。辻村さんから、一通の手紙を受取ったのは、それから間もなくのことでした。

なんでも、お仕事が忙しくて、中々手紙を書くことが出来ないとのこと。そして、私達夫婦と逢ってプレイについて、いろいろお話



しましう。若し逢った上で気持が許せば、プレイをしようといった内容の手紙でした。

辻村さんにお逢いする前日は、私にとつて、それは小学生が遠足に行く前日の気持と同じように浮々しておりました。でも、母親となつて五年間、主人と二人っきりで外出するなんて、これが始めてなんですもの、美容院へ行ったり、着てゆく洋服をあれやこれやと取り揃えたり、主人が仕事から帰宅してからも、ロープはどれだけ持ってゆこうか、責め道具は何を持ってゆこうかなど、とても、あわただしい一日でした。

当日の朝、目がさめた時、真夏の太陽が明

るく窓辺にさし込んでおりました。

急いで朝食をとり子供達を近くの知り合いに預けて、家を出たのは十一時少し過ぎた頃でした。かねて辻村さんと約束してありまして、苔寺の前の駐車場へ行きますと、もう辻村さんが待っていてくれました。

私を見つけると、「渡部さんですか、辻村です。よろしく」と、とても明るい挨拶を受けました。その時まで、私の心は責められたいと願う気持とはうらはらに、これから、どうなるのだろう、みっともない結果にならないだろうかと不安な思いに、小さくなつてふるえておりました。

でも、辻村さんの第一印象が、とても明るく、やさしく感じられ、私の不安な気持は、どこかへ消えてしまい、目的地までの車の中でも、今お逢いしたという感じは少しもなく何かもう、何年も前からのおつきあいのある方のように、気安くお話が出来、自分でも、びっくりするほど、リラックスしているのに気がつき、辻村さんとは、本当に徳のある方だなあーと、しみじみ思いました。

その思いは、小さなモーターに入ってから、そうして、お別れしてから今日までも変わっておりません。辻村さんの前に出た女性なら、自然とプレイを求め、命じられるままに、恥かしい恰好だつて出来るような、とても不思議な神通力があるように思えました。

そうして、とても女性に対してやさしい心づかいの方でした。私が緊張してはいけなないと、飲物やお菓子を持ってきたり、何度もお風呂の湯かげんを見に行つて下さったり、本当によく気を使って戴きました。

お風呂を戴いた私は、いつも主人から受ける縛りと同じ気持で、自然に何の抵抗もなく縛られることが出来ました。

一通り写真を撮られた私は、辻村さんからテレビの上に正坐するように言われ、全裸で大きく足を開いてテレビの上にあがらなければなりません。不安定な小さなテレビの上で後手に縛られ、一番太いロープで胴体と一つに締められ、前後左右から写真を撮られ、しばらく、そのままの恰好でいるように命じられました。

ふと、辻村さんの方を見ると、大きなカバンの中から、いろんな器具が取り出されていくところでした。太いローソクや今まで見たこともないような大きな浣腸器具など、私はどきっとしました。あんな大きなので浣腸されたら、と不安に思いました。

テレビの上での縛りから、今度は三面鏡の前に坐らされてのフォト撮影と、次から次へとポーズを変えて緊縛され、私の体は、すっかり汗ばんできました。

ここで突然、私の心の隙を狙うかのように辻村さん得意のバイブレーターが襲つてきま

した。体の奥深く差し込まれた器具は、私のM的欲望をかきたて、つきあげてくる感情は甘くせつなく、何度も何度も、くり返す潮の高なりに声をあげて泣きました。

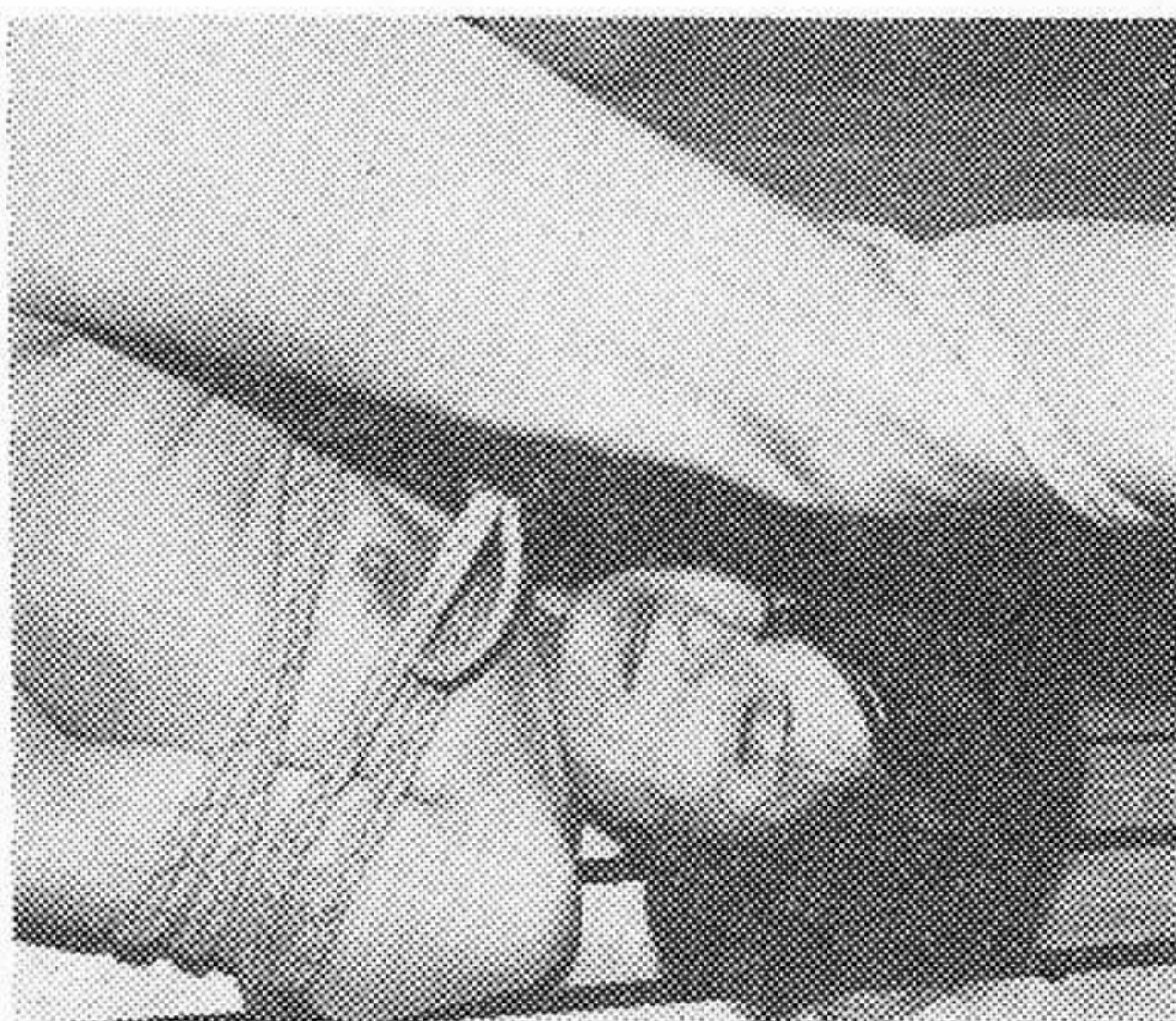
もう、どれほどの時間が経ったのか、後手に縛られた手は、すっかりしびれてしまい、辻村さんのなされるままに、体をあずけ、大きく口で呼吸しながらも、自分から責めを求めてゆきました。そして、心で叫びました。

「あなた、あなたの長い夢が、今、現実になりました。あなたがいつも言っていた、あなた以外の人の手によって、私は縛られ恥かしいことをされています。私は本当にうれいんです。どうか、こんな私をよく見て下さい」
快いバイブレーターの響き、揉みあげられる乳首、あたりかまわず、ちくりちくりと突き刺される針の雨。

私は、もうどうなってもよいから、もっともっと、責めてほしいと願いました。

辻村さんは、そんな私の心を知ってか、私の両方の乳首に洗濯挟みをはさみました。頭の芯へ、ツーンとつき抜けるような激痛に、一瞬、目の前が暗くなるような気がしました。その苦しさ、ゆがんだ顔をまともに狙って、またもカメラはシャッターを切つてゆくのです。

大きくお尻を持ち上げられて、私が一番恐れていた浣腸がされる時が来ました。これだ



けは、少量にしてほしいとお願いして許して戴きました。そのかわり、私はローソクのしたたりを、十分受けなければなりませんでした。今まで、ビニールの上からだ、かなりの量を我慢できましたけれど、今日は、直接肌に受けなければなりません。

声を出してはいけないうと、ロープで口をふさがれ、お尻に一滴、二滴、三滴――。

熱蠟のあつさに、体を動かすと、一すじ、二すじ、肛門に流れてきます。

熱く、苦しく、私は泣きました。再びバイ

ブレーターの洗礼を受け、やっと縄から解放されたのは、長い夏の日も、すっかり西の山に傾き、窓に映えている樹のかげが風に揺れていました。

「お気持はどうですか、満足しましたか」

と辻村さんから尋ねられ、私はいいようのない恥かしい思いに、耳の中まで赤くなる気持でした。辻村さんも「とても楽しかった、また、お逢いしたいものです」と、言ってお下さいました。私は、何かしら、ほっとした気持と、辻村さんとなら、もう一度プレーしてみたいという望みに、体の熱くなるのを禁じえませんでした。

私達夫婦が、夢として長い間、さがし求めていた願いが、辻村さんという方によって、やっとかなえられました。

その夜、家へ帰った私には、夫からの激しい責めが待ち受けておりました。夫のどこにこんなスタミナがあったのかと、驚くくらいハッスルしました。

長い間の情性で少しマンネリ気味だった私達夫婦のプレイも、これを機会に気分が一新して、今までにない縛りと責めの楽しみを味わいました。

私は奇クのある限り、M的願望の強い女として、あられもない数々のポーズのフォトは編集部のファイルムケースの中に、永久に納められることでしょう。

室井亜砂路・画



体 験 告 白

ひそかな愉しみ

伊 里 賀 透

1 10円の愉しみ

マニヤにとっては、もっとも馴染みの深い「イチジク浣腸」の製造過程を、なんとかして一度見たいものだと思っているのだが、製薬会社に気易く頼める知人がいるわけでもなく、思案の末、思い切って電話で訊いてみることにした。

部厚い都内版の電話帳を開き、たんねんに

電話番号を探す。「イチジク製薬株式会社」で出ている。

顔の見えない電話だから、断わられてもそれ程恥かしくもないだろうと、勇気を出して、ダイヤルする。相手が出るまでの一秒程の間が長く感じられ、胸がドキドキする。止めるなら今の内、受話器を下げさえすればいいのだからと、自問自答している内に美声が流れて来た。

「モシモシ、こちらイチジク製薬でございますが」

「イチジク浣腸を作っておられる会社さんですね」

「そうですが。あの、どのような、ご用件でございましょうか」

声から察するところ、二十歳前後の、実にもの柔らかな感じのする女性だ。

「実は私、薬局を経営している者ですが、お宅さんの会社を見学したいと思って、お電話してみたのですが、工場見学、させて戴けますでしょうか」

「少々お待ち下さい。ただいま、係と代わりますので」

勿論、薬局経営なんて嘘である。しかし、私は浣腸マニヤで、普段愛用のイチジク浣腸の出来る過程を見たいとは、いくら顔の見え

ない電話でも、言えやしない。電話をする前に、どんな理由をつけたら、もっともらしくしかも自然に事が運ぶだろうか、考えた末に、思いついたのである。それが、思ったよりスムーズに事が運ばれようとは。

私は、ここまでで電話を切ってしまおうかと思う反面、係の人に取り次いで下さった受付嬢の好意が嬉しく、出たとこ勝負、なり行きに任せようという気になった。

数秒して、男の声と代わった。

「モシモシ、電話、代わりましたが、どのようなご用件で」

「私、薬局経営をしている者ですが、私の店で扱っています浣腸薬では、お宅さんのイチジク浣腸が最も売れているのです——」

「それはどうも、ありがとうございます」

「それで私、浣腸薬のトップメーカーであるイチジク製薬さんの工場を、見せて戴きたいと思ひまして——。こんな便利な浣腸薬が、一体、どんな過程で出来るのかと思ひましたので」

「そうでございますか。おかげ様で私どもの製品のシェアは高いようでございます。工場見学と申ししても、ほとんどオートメになっておりますので、見るべきものがあるかど

うか判りませんが、どうぞ、いつでもいらして下さい。会社の受付にその旨仰言って下されば、ご案内いたしますので」

「どうも有難うございます。それでは近い内にお伺いいたしますので、その時はよろしく願ひします」

「ハイ。ところで、お越しになるのは何人様でしょうか」

「店の従業員と三人位ですが」

「わかりました。いつなりとどうぞおいで下さい」

「失礼いたしました」

受話器を置き、近くの喫茶店で休みながら今掛けた電話の問答を、もう一度反芻してみた。こうスムーズに行くとは思ってもみなかったし、工場見学というものがこんなにも簡単に許可されようとはと、むしろ、驚きであった。

それにしても、イチジク製薬株式会社の受付嬢の感じの良さ（おそらく美人の女性だろうと思うのだが）係の方の応待の柔らかさ。数多く出ている浣腸薬の中で、イチジク浣腸

と言えばそれらの代名詞となっている程の市場占有率の秘密を、私はこのお二人からつかみ取ったような感じを受けたのだ。

まだ工場見学は実行されていないが、「いつでもどうぞ」と言われた言葉を思い出すたびに、私は、ますます、「イチジク浣腸」に愛着を持つのである。

出来得ることなら、イチジク製薬で働いておられる女子従業員さん達と話したい、どんな気持ちで仕事と取り組んでいるのか、現在貴女方の造っている浣腸薬が、本来の医薬として以外の目的に、ひそかに使用されていることを知っているのであらうか等、訊いてみたい思いにかられる。

それはそれとして、十円一枚で、浣腸薬メーカーの受付嬢と話の出来たことは、大きな愉しみであった。

○ ○ ○ ○ ○

それから数日して、街を歩きながらフット目についた薬局、店主らしい中年の女性が店に出ているので、又しても10円の愉しみが頭をもたげてくる。

看板に××薬局、その下に電話番号も書かれており、おあつらえ向きに、薬局の目の前に電話ボックスがある。これなら、相手の顔を見ながら電話がかけられるし相手もよもや店の前のボックスから電話しているとは思ひもしないであらう。

「モシモシ、××薬局さんですか。お忙しいところを恐縮です。こちらイチジク製薬の営業部ですが、私どもの製品をお取り扱い下さいまして、まことにありがとうございます。」

今日は市場リサーチとしてイチジク浣腸の売れゆきとか、購入者の層などについて、薬局さんの、生の声をお聞きしたいと思ひましてお電話してみました。」

「ハア、そうですか——」

「ところで、浣腸薬、お宅さんでは、どの製品が一番出ていますか」

「そうですね、私のところでは、イチジクと〇〇〇を置いていますが、九割まで、イチジクですね、お客様が第一、イチジクと指定されて買いに参りますので——」

「それはどうも、まことにありがとうございます。おかげ様で、浣腸薬メーカーとしましては業界のトップを保っていると自信を持っております。ところで、私どもでは、小児用10g、大人用20gの他に、特大、あるいは強力の名で30gのも発売しておりますが、お宅さんでは、三種のうちのどれが一番よく売れていますでしょうか」

「そうですねえ……やはり、20gの大人用が全体の六割、三割が小児用10g、一割が強力

の30gというところですね」

「そうでございますか。私どもでは、強力の30gをもっとご利用して戴きたいと考えておりますが——。是非とも、これからは、強力30gをお客様に、おすすめ願いたいと思ひます。で、お客様の性別、年齢などは——」

「ハイ、そうですね、性別から申しますと七割が女性のお客様、残りが男性で、小児用をお求めになるのは、家庭の主婦が多いようです。夏は年間を通じて、一番小児用が出ますね。それから、二十歳前後のオフィスレディの方ですね。男のお客様は、大体が中年の方が多く、しかも、強力の30gをお求めになる方が多いようです」

「ハア、そうですか。十代の方は」

「ハイ、時々、お見えになります。先程もセーラー服の高校生の嬢さんが、20gを三箱お買い求め下さいましたが」

「変わったお客さんなんていませんか」

「……。先日のお客さんは、四十代の男の方ですが、20gの大箱をお買いになった方がありました。そう、昨日は、お二人とも二十歳位のアベックのお客様がお見えになって、30gよりもっと大きい浣腸は無いのかって、お訊きになりました、無いと申し上げる

と、二人で何か小声で話し合っておりましたが、結局、30gのを四箱、それに50ccのガラスの浣腸器をお買いになって帰られました。そう、面白いって言えば、BGの方なんか、数人で来られて、そのうちの一人がお買いになると、私も私もって、皆さん、お買いになりますね」

「そうですか、やはり便秘の方は、女性に多いそうですね。ところで、浣腸薬を買われる方は、それだけを求められるのが多いのでしょうか」

「半分位は、浣腸薬だけのお客様ですが、残りの半分の方は、化粧品を買われたついでとか、他のお薬と一緒に——そうそう、先だっのお客様、中年過ぎの男の方でしたが、浣腸薬と、エネマシリジと、生理帯を三枚もお買いになった方がありました——」

ちようどその時、お客が店に入って行ったので、礼を述べ、電話を切ったが、思わぬ愉しみであった。

〇　〇　〇　〇

新宿Sデパート正面入口の案内嬢、すこぶるチャーミングなので、またしても私は10円の誘惑にかられ、ワクワクし始める気持を抑えながら電話ボックスへ。

「ハイ、Sデパートですが」

受話器を流れてくるソフトな声。

「一寸お伺い致しますが、薬局はどこに
ていますか」

「薬品でございますね。西側一階の奥になっ
ておりますが」

「あ、う、イチジク浣腸、いま、ありますで
しょうか」

「はあ？」

「イ、チ、ジ、ク、浣、腸。便秘の時なんか
によく使うでしょう」

「浣腸ですか、少々、お待ち下さい。ただ今
薬品売場の方へ、お電話、おつなぎ致します
ので」

私の目当ては、受付嬢であって、顔の知ら
ない薬品売場の店員さんではと、少々、当て
がはずれたが、それにしても、美人の若き女
性の口から、「浣腸」という言葉を言わせた
喜びは、格別である。ほどなく、
「こちら、薬品売場でございますが」

「浣腸薬がほしいのですが、イチジクの30g
用、ありますか」

「ええっと、強力でございますね。ハイ、ご
ざいますが」

「浣腸薬では、他に、どことどここの製品があ

りますか」

「大正製薬の『薬局浣腸』なら置いてござい
ますが」

「その30g用はありますか」

「いえ、薬局浣腸には20g用しかございませ
ん」

「洗滌器、ありますか」

「センジヨウキ？」

「女性用の、家庭で使える腔洗滌器」

「ああ、わかりました、洗滌器でございます
ね、ございます」

「メーカーはどこでしょうか」

「タイヨーと、ビデノンホームの二種類なの
ですが」

「どんなタイプなんですか」

「どちらも、スポイト式で——」

「わかりました。どうも、ありがとう。そち
らへ伺います」

電話ボックスを出た私は、もう一度、受付
嬢の前を通った。先程の「浣腸ですか」と答
えた声を思い出しながら。

受付嬢は、今、目の前を通る人間が先刻の
電話の主とは知らないであろう、「いらっし
やいませ」の言葉とともに、うやうやしく、
職業的なお辞儀をしながら私を迎え入れてく

れたのである。

薬品売場の、電話器の前に立っていたのは
眼鏡を掛けた三十過ぎの女性で、興味もなく
ガラスケースに置かれた浣腸薬の見馴れた箱
を横目で見ながら、素通りした。

○ ○ ○ ○ ○

渋谷に向かう国電の中で、デパートという
所は、受付から各階の売場に電話を交換する
のだから、どうしたら、受付嬢と電話で話が
出来るか、いろいろ考えた末、次の手を思い
ついた。

渋谷、Tデパートの受付嬢、どうしてこう
も、デパートの受付嬢は、美人揃いで、チャ
ーミングなんだろう。Tデパートの受付嬢も
私好みの、可愛い女性なのだ。私の足は
自然と電話ボックスへ。

三人いた受付嬢の誰が受話器を取るか、そ
れはわからない。しかし、誰でもいい、とに
かく、三人とも、とてもチャーミングな女性
なのだから。

「モシ、モシ、こちら、○○○○の編集部で
すが」

と、私は、有名な女性週刊誌の名前を借用
したのである。

「ハイ、Tデパートでございますが」

「突然、電話でたいへんに失礼ですが、私ども〇〇〇〇では、今月下旬発行の雑誌に、特集といたしました、都内有名デパート受付嬢さんたちの、『生活と行動』というテーマを取り上げることに、電話でインタビューをしております。お仕事中、誠に恐縮でございますが、取材にご協力をお願い出来ませんでしょうか。ほんの二、三分でよろしいのですが」

「ハア、それはまあ——。でも、お役に立ちますでしょうか」

「では早速、質問させて戴きます。まず、お名前をお伺い致したいのですが」

「あ、う、それは、一寸、困ります。いろいろと——」

「ハア、そうですか、ご事情もおありのことでしょうから。じゃそれは結構です。では、お歳だけでも」

「二十歳です」

「そうしますと、高校を卒業されて、二年目になりますか」

「ハイ」「そうですか。ところで、デパートで、最も華やかで、同僚の皆さんあこがれのポストは、受付係だということをお伺いしますし、どこのデパートさんでも、一番美しい

女性を配置する方針だとか。そういうポジションに着かれての感想などを——」

「別に——。私、美しいとも思いませんし、上からの命令で現在の係りをしておりますしこれと言って——」

別に私は本気で、『生活と行動』のインタビューをしている訳ではなく、狙いは別なところにあるのだが、一応、〇〇〇〇の編集部と名乗った以上、それらしくしなければならぬ。仕事上の悩みとか、苦しみとか、収入はどの位で休日は何をするのが楽しいとか、恋人の有無など、適当に質問した上で、『冷房の効いた職場で長時間勤務していますと、健康上、いろいろと弊害があるようです——。特に女性の場合は、そういった面ではいかがですか』

「比較的私は健康なので、別にたいして害になるようなことはありませんけど、お友達の中には——」

「お友達の中には、どうなんですか、生理不順とか、貧血とか——」

「ハイ、生理不順になる方が多い様ですわ。アラ、厭だわ、私、こんなこと、申し上げてしまつて——」

「続けて健康の話になりますが、貴方は便秘

など、ありませんか——」

「——。困りますわ、そんなご質問」

「現代女性、特に、職場のハイトップとして活躍されている女性には、毎日の緊張した生活と頭脳の使い過ぎにより、胃腸障害が多く便秘にかかり易いというのは、医学の常識で貴方たちのように、最も気をお使いになるお仕事をしていては、当然、便秘になりがちだと思い、お訊きしたのですが、失礼だったでしょうか。勿論、貴方のご承諾なしには、記事に致しません」

「いいえ。失礼だなんて、そんなことは思いませんが、意外な質問だったものですから、恥ずかしいんですけど、多少は、便秘しますね」

「なるほど、やはりそうですか、他のデパートのお嬢さん方も、そうおっしゃってましたよ。で、そんな時には、やはり浣腸なさるんですか」

「か、ん、ち、よ、う？」

「ええ、浣腸です。ほら、あの、おじいさんも、おかあさんも、おねえさんも、ぼくも浣腸の、イチジク浣腸なんかを、ご自分でなさるのですか」

「——私、知りませんわ、そんなこと」

「今迄に、浣腸を他人からされたことがありますか」

「浣腸するの、好きですか、嫌いですか」

「――」

少し単刀直入過ぎ、電話魔じみたかなと思
っている内に、

「あの、失礼ですけど、この辺で終わらせて
下さいませんか」

と、少々、怒ったような口調で、電話が切
られた。無理はない。それにしても、前半は
我ながら上出来だと、自信？ を持って電話
ボックスから離れたのである。

○ ○ ○ ○ ○

書店巡りは、浣腸とは直接には関係なくて
も、これ又、楽しいものである。特に二十五
日前後は、私の足は自然に本屋へと向かう。
私の住む市には、一軒だけ「奇ク」を置いて
ある本屋があって、二十五日過ぎると、新し
い号が店頭飾られるまで、毎日、足を運ぶ
のだが、一度購入した号を、新しい号と間違
いして買ってしまふことが再三ある。という
のも、奇クを求めると自宅まで持ち帰る時間
が待てず、本屋から一番近い喫茶店でまず包
み紙で表紙を覆い読み始める習慣になっ

るので、表紙の絵はほとんど見てないのであ
る。それに、八月下旬には10月号というよう
に二カ月先の月名で出るので、時折り、錯覚
を起こし、八月二十六日頃、本屋を覗いて、
9月号の表紙が目に入ると、既に七月に購入
していたことを忘れ、つい、手が出てしま
うのであり、喫茶店で本文を開いて、旧号だ
ったことが判った時の残念さ。

しかし、同じ雑誌を二冊買ってしまっても
損したとか、惜しいことをしたとは、一度も
思ったことが無いというのは、やはり、「奇
ク」の魅力だろうか。それはそれとして、私
の住んでいる市でも一番大きい書店に行った
時のこと、N書房刊の「淑女と浣腸」という
本が、一冊、書棚にあった。

この本は既に、出版と同時に購入したのだ
が、その時は確か六冊位置いてあった筈。内
容はともかくとして、書名に堂々と「浣腸」
という名前が使われていることに私は拍手を
贈りたいのだが、その本を目にした時、私は
またしても、10円の愉しみにかられた。

電話ボックスから「〇〇〇書店さんですか
「淑女と浣腸」という本がほしいのですが、
ありますでしょうか」

「少々お待ち下さい、ただ今、探して参りま

すから」

若い女性の声である。待つこと数分、駆け
足で探して来たらしく、荒い呼吸音のまじる
声で

「あの、一寸、見当たらないのですが――」

「そうですか、N書房の本で、B6版、シリ
ーズものの中の一冊なんですがね。書名をも
う一度いいますよ。『淑女と浣腸』淑女はレ
ディの淑女、浣腸は――便秘の時、お尻から
薬を注入する浣腸、イチジク浣腸って名前を
聞いたことあるでしょう、その浣腸ですよ。
是非、ほしいので、もう一度、探してみ

けませんか」

私は、大きな書店で一冊の本を探すのがど
んなに大変なことかよく判っているので、断
わられるのを覚悟していったのだったが、
「済みません、もう一度、探して参りますか
ら、お待ち下さい」

という声と同時に、電話器から足早に去っ
ていく足音を聞いたのである。かなりの時間
待っていたような気がしたが、実際には三分
位だったろうか、

「モシモシ、ございました。一冊だけだった
ものですから、気がつきませんでした」

夢中で探したのだらう、前よりもっと激し

い息使いなのだ。今時、これ程まで真剣になつて本を探す、その責任感の強い店員に、私は思わず

「どうも有難う、大変でしたね、探すの。これから伺いますから、取って置いて下さい」
ここまでにして置けば良いのに、いつもの癖が出て、

「あの、挿絵が入っていると思うんですが、何葉あつて、どんな絵か、見て戴きたいのですが」

六葉ぐらいの口絵で、多色刷り、勿論、女性が無防備で縛られ、鞭打たれたり、強制的に流腸されている絵で、若い女性が見たら、驚きの余り卒倒しかねない絵である。卒倒しないまでも、極度の羞恥感か逆に嫌悪感を抱くに違いないだろう絵を、見て下さいというのだから、私の行為はハレンチそのもの。

しかし、相手の店員はどんな絵か知る由もなく

「ハイ、承知いたしました。挿絵でございますね、えーっと、一枚、アッ——」

暫くの間、無言が続く。電話器を通して相手の驚き、困惑、羞恥、そういった雰囲気を感じられ、さすがの私もこれ以上相手を苦しめるに忍びず、その俚無言で訥びながら電話

を切った。

一時間程街をぶらつき、帰りしな、その書店に寄ってみた。店内の一番奥、カウンターの前に女子店員が二人。そのうちの一人はセーラー服の上着の腕に、アルバイトの腕章を付けた、高校生。しかも、その高校生の傍に「淑女と流腸」の本が一冊、置かれてあったのだった。

〇 〇 〇 〇 〇

日活映画「東京女地図」の中に流腸シーンが登場することは、既に何人かの方が本誌に紹介しているので触れないが、出張で、ある地方都市へ行った時のこと、この映画が上映されていた。

東京で四カ月前に観たのもう一度観る気にもなれず（流腸シーンのところだけうまい具合に見られるのなら別だが）その俚去るのも——という訳で、また例の愉しみが頭をもたげて来たのだ。

「モシ、モシ、〇〇〇映画館ですか」

「ハイ」 女性の声である。

「『東京女地図』の映写時間を知りたいのですが」

「ハイ。この次の回は3時15分からになっておりますが」

「どうも有難う。ところで、その映画に流腸シーンがあるっていうことを聞いたのですが本当に流腸シーンが出てくるのですか」

「カ、ン、チ、ヨ、ウ？」

「ええ、流腸です。肛門から薬を注入する、あの流腸ですよ」

「——」

「なんでも、縛られた女性が男達の目の前で無理矢理、流腸され、おまけに、ガラス製の便器にまたがって排泄させられるシーンがあるのだそうですが」

「あの、私、忙しくて映画は見えないからわかりませんので、今、電話、代わります」

続いて男の声で、

「モシ、モシ、私、支配人でございますが、どのようなご用件で——」

即座に電話を切ったのはいうまでもない。

映画館の従業員なら、映画を見ているだろうと思ったのは私の誤りで、仕事、仕事で映画を見る暇がないのは、勤務である以上、当然のことだろう。私は、私のうかつさに思わず苦笑したのである。

2 ショッピングの愉しみ

セルフサービス形式の、マーケットでの買

物には、別の意味での愉しみがある。デパートや専門店とは違って、売場に店員がついていないということが、いろいろな楽しみを与えてくれるのだ。

デパートではとても入って行けない婦人下着売場でも、店員の目を気にすることなく入って行けるし、色とりどりのパンティが十二分に目を楽しませてくれる。きまって下着売場の一隅には、生理帯コーナーが設けられていて、色々な型の生理帯をじっくり眺めることが出来るし、他に客さえいなければ、手に取って楽しむことも出来るから好きだ。

それにも増して、最大の楽しみは、買物カゴに入れられた品物が丸見えだということ。ハツとするような美人の手にしたカゴの中に、インスタント・ラーメンの袋が入っているなんていうのは、実に面白い。

セーラー服の女子高校生の手にしたカゴの中に、むき出しの生理用カット綿や、パットの類が入っているのを見たりすると、私は楽しくて楽しくて、たまらないのである。

私の女友達の一人は、「生理用品だけは絶対にマーケットでは買わない。いくら高くても薬局で、包装紙にくるんでもらって買う。マーケットだとカゴの中が丸見えだし、レジ

で代金計算の時、一つ一つ品物を別のカゴに入れ換えるので、二重の恥かしさを味わうことになる」といつていたが、私の見るところマーケット利用客の女性は、いとも無難作に生理用ナフキン類を、平気な顔でカゴに入れていたのである。

街で、マーケットが目に入ると、私は必ずといっていいくらい店内に入り、雑貨か化粧品売場をのぞき、生理用品をカゴに入れる女性の顔を見ては、私だけの愉しみにひたるのである。

○ ○ ○ ○ ○

私の住む市に「二葉医療器具商会」という店があり、私のほしいと思う器具類は、殆どそこから購入しているのだが、最初の頃はなかなか店に入りづらく、なるだけ店員の少ない時を見て、入ったものだ。ところが一カ月前頃から、その店の卸部が別な所に店を構えそこは小売部だけになり、今迄大勢いた店員も、女性二人だけになったので買い易くなった。私はそこで、10 cc、20 cc、30 cc、50 ccの浣腸器を別々に購入したのだが八月に購入した時は10 ccも30 ccも値段が同じなのである。そこで店員に、大きさが違っても同じ値段なのかと訊いてみると価格表を見せてくれたが

同じ定価なのである。以前(今年の春頃)は大きさによって値段が違ったもののにと、私は面白く感じたのであるが、店員もそのことに始めて気がついたらしく、「お値段が同じなら、大きい方が得ですね」という。その店員というのは、二十三歳位の女性で、美人というのではないが感じの良いチャーミングな顔立ちで、もう一人は三十五、六歳の女性だが、こちらの方は店にはほとんど顔を出さず、奥で事務を執っているようである。その方が私には好都合なのだが……。

先日、店の前を通ると、店内に客はおらず若い店員だけだったので、入って行き、洗滌器がほしいのだけど、というと、

「センジョウキ? 女性用の、膣洗滌器ですか」と訊くので、そうだとすると、こちらへといって、ガラスケースの一隅へ案内し、二種類の洗滌器を台の上に取り出してくれた。

「クリン・ペット」と「タイヨー婦人衛生器」である。両方とも私は持っているのだけど、「クリン・ペット」の使用法についていろいろ質問したのだ。商売と割り切っているせいか、淡々とした口調で説明してくれる。

タイヨーとクリン・ペットと、どちらが売れてますかと訊くと、「クリン・ペットの方

はお値段が高いので、余り出ません」とのこと。結局、クリン・ペットを買い、ついにて「タイヨーの（スポイト式）洗滌器を浣腸に使えないかしら」と訊くと、「使えば使えますが、浣腸用なら、これがいいです」といつて取りだしてきたのが、ゴムのエネマシリンジ。「これは鼻洗器というのですが、これを

先端につけて——」と、浣腸用の嘴管をつけ使用法を詳しく説明してくれる。せつかく出してくれたのだからと、それも包ませ、更に、腔洗滌用の太い嘴管と15号のカテーテルも買い、ガラス製の浣腸器を一本注文すると、売り切れて無いとのこと。十日程前に、10 ccの浣腸器を買った時には、10 cc

附 稿

雜 誌 通 信

アサヒグラフ 45年8月21日号

海の公害として、海岸に打ち寄せられたアキビン、ビニール製品、その他もろもろの漂流物の写真に、イチジク浣腸の容器が一コ、写っていた。カラー写真だし、海岸を散歩していて、イチジクのカラはしばしば目にするのだが、こうして、グラフ雑誌にとり上げられた写真の中に、それを見出した時の喜びはマニヤだけにしか判らないものだろうか。

○

プレイ情報 45年8月増刊号

「家畜人間を演じて狂喜する紳士淑女群」の記事の中に

「室内の窓を閉めきり、3LDKのマンシ

ョンで、俗にいわれるサド・マゾプレイを紳士淑女たちがやらかしていた。サド・マゾプレイを詳しく説明するのはここでは省略せざるをえないが、犬の首輪を使ったりクサリや皮手錠、ゴムパンティ、大型浣腸器なんかを小道具にして——」

○

情報トップ 45年8月1日号

「女性が泣いて喜ぶセックス小道具」の記事の中

また、最近目立って増加してきたのが、医者を使う大型の浣腸器。とくにS・M趣味にはよく使用されているという。

M型女性にとっては、浣腸器は欠かせない小道具とか。男も女が浣腸器をもってい

20 cc、30 ccの浣腸器が30コ近くケースに入っていたのにと驚き、

「そんなに浣腸器、売れるのですか」

「ええ、売れてますね。特に夏は多いようです。いつも今頃になると全部売れてしまうんですよ」

「どんな人が買いに来ますか」

「お年寄りや小さいお子さんのある方なんか。若い方もお見えになりますよ」ということ。なお、この店では、イチジク浣腸だけは取扱っているところからみても、浣腸薬の利用者の多いことがうかがえる。

○ ○ ○ ○ ○

本郷の医療器具店で100 ccの浣腸器を求めた時のこと。最初に見せてくれた浣腸器は、嘴管部の形が不格好で気に入らず、別なのを見せてほしいというと、今はこれ一本しか店にないので取りに行かせる、と言って、電話でどこかに注文し、女店員を取りに行かせた。

10分位して、女店員が戻り、3本の100 ccの浣腸器を見せてくれ、そのうちで、嘴管の最も形の良いのを購入したのだが、女店員が来る迄の間、商品棚を見ていると、以前からほしくてたまらなかった、戦前の浣腸器が一本あったのだ。30 ccの、白硝子製で、内筒の上

たら

「ねえ、これどうするんだ？」

とオタオタしてはダメで、

「おれもぞくぞくするな」ぐらいのハッタリをきかせる方がいい。

本当にS・M趣味の女性もいるが、中には異常性愛の体験をしてみたい、と生意気な考えの女もいる。

だから、実際に使わなくてもお守りみたいに、ただもち歩くだけ。

「浣腸をして、ゴム製のパンティをはいてぎりぎりまで我慢するの。そのあとでスカッとするわ」(BG・22歳)
なんていう告白もある。

(ところで、右の記事中、浣腸の文字が原文では全部「浣腸」となっている。「浣」という文字は無いので、浣腸とあえて訂正して引用したが、おそらく、この記事を書かれた方はS・Mにおける浣腸プレイの実際を、ご存知ないのではあるまいか。そう言えば、よく週刊誌に広告を出しているA商会の商品案内に浣腸器と書いてあり、気になったものだが)

○

プレイパンチ 45年9月号

劇画「サド」の中に

カバンの中に鞭、縄、ローソク、イチジク浣腸、ガラス製浣腸器の入っている絵と「ふふふ まだ まだだよ もっと もっと もだえさせてやる」の男のセリフの次に「ふたつ してやるぞ うんと苦しめ」と言う男の手にイチジク浣腸が握られている絵、「あう……」という縛られた裸身の女の顔のアップ、続いて床にころげおちた二つのイチジク浣腸、
「お、お願い。ト、トイレに行かせて」と苦しむ女の顔のアップ 以下四コマ程苦しむ絵が出ている。

○

週刊漫画Q 45年8月5日号

ドッキリ・ニヤリのページ

『H度テスト、次のSMパーティの絵を、一分間ジッと見てくれ。見たら本を閉じ質問に答えてくれ。キミのエッチ度がわかるぞ』の説明文の次の絵に、両脚を上げて寝ている女性の足元に、ガラス製浣腸器を持ってニヤリとしている男の絵。

以上最近の週刊誌から。△伊里賀 透▽

部のところに、赤い輪ゴムのついた、全体的に細身で、嘴管部の、何ともいえない、丸やかなふくらみのあるもの。「これ、珍しいですね」というと、店の主人は笑いながら「中古品ですが、貴重な浣腸器ですよ。骨董的価値が、ありますかな」「これ、売って戴けますか」と訊くと、「いいでしょう」と、タダみたいな値段で売ってくれたのである。その後で、女店員相手に、尿道洗滌器、子宮鏡、肛門鏡と、女性にとっては恥かしがるものばかりを注文し、その時の相手の反応や、顔の表情を楽しみながら、シヨップینگを済ませたのである。

腸洗滌用のY字管がその店になく、別の店で訊くと、これでいいのですか、とY字管を出し、値段は、というと、いいです、差し上げますという。男の店員だったが、余りの気前良さに、目についたガートルの200cc用を求めたのだが、本郷というところは、何軒もの店があるし、先方ではこちらを医者だと思ってくれるらしく、何の気がねもなく購入出来るし私は大変好きだ。医学書専門店も何軒かあって、婦人科、消化器科などの、一冊八千円もする本を開いてみると、豊富な写真や絵があって、一時間位、すぐ経ってしまう。

連載・Mの傾斜

壺^こ中^{ちゅう}の園^{その}

(8)

真砂 十四郎

25

郁子さまがお使いになるお便所の掃除に心をうちこんだ日の感激は、その後もながく消えませんでした。

気随気尽に浮気をする玉枝にも惹かれますが、魅力のニューアンスがまったく異質のもので比較になりません。

今となってみると、私はつくづく後悔の念にかられる思いがするのです。以前、郁子が矢沢と温泉マークのホテルで逢引きを重ねていたとき、私は「いっそ矢沢君と二人でこの二階で暮したらどうだい？ 僕は階下^{した}でも寝るから、この部屋を二人の部屋にして矢

沢君はここから会社へ通い、君はこの店で働くことにしたら、今よりずっと便利になるじゃないか」と口の先まで出かかってやめたことがありますが、あるとき私が率直に思ったとおりの提案をしていたら、郁子は渡りに舟と喜んで応じたことは確実です。とすれば、自然のなりゆきで郁子と矢沢がこの家の主人になり、私が下男になることはわかりきっていましたが、一抹の「打算的なはからい」が心のうちにあったため、口に出さずに終ってしまいました。

それが実現していたら、その後の玉枝の登場はなかったでしょうし、私はおそらく独身のままで暮すことになったでしょうが、その



カット・春川ナミオ

方が今よりはるかに私の心になった暮しかたではなかったか……。

私は純粋に郁子さま一人を拝み崇めることができますし、矢沢と一緒に介在することは仕方がありませんが、それも玉枝と郁子という異なる御神体ではなく、御神体はあくまで郁子さまお一人であり、矢沢は郁子さまのお好みあそばすセックスの御相手……というだけのこと、いわば郁子さまの付属物です。郁子さまがお召しになるスリッパやストッキング

グなどと同じように、私はこのパートナーもともども拝むことにはなりますが、御神体はすべて郁子さまお一人なのですから、玉枝のような「異る神」にとまどうようなことはありません。今の私は、宗教でいえば仏教とキリスト教を同時に信仰しているようなもので「余のかたへ心をふらず、一心一向に阿弥陀仏と深くたのみまいらせてこそ往生をばとぐるなり」という教えにそむいて、きょうは郁子さまを拝み、あすは玉枝さまを拝む、どっちつかずの私には、心からの法悦感をこうむりようもないのです。

「物も金も、自分の所有する一さいのものを神に捧げてこそ、真の信心が生まれ、真の神の恵みが受けられる」という信仰の説話のとおり、私は郁子さまに自分の金も家もすべて捧げて、身一つになって拝んでこそ、真の幸福が得られたものを、すべてを捨てきれぬ利己的な打算が、私の心を安定のない心満たざる状態にしているのだ——と、このごろつくづく思うようになりました。

今となつては、郁子と私の間に玉枝が厳然と介在して、私の行く道をはばんでいます。玉枝に内緒で十日に一度、郁子さまの家へ抜け参りするのがせめてものなぐさめで、あと

の大半は玉枝にあごでこき使われ、玉枝の意のままに、ただただ動きまわらされている私なのです。

いっそ、玉枝がいなかったら——という不遜な思いが、ときどき私の頭の中をかすめます。そして、以前のように私一人の状態にして、それからあらためて郁子夫妻にこの家へ来てもらう。……こんな逆心がうかぶのですが、しかし私が玉枝と離婚して、といっても二人の結婚は郁子の工作で結ばれた仲であり玉枝は郁子の姉だけに、郁子がこころよく承知してこの家に来てくれるかどうか、はなはだ疑問です。玉枝と離婚をするわ、郁子は感情を害してこの店をやめてしまうわとなるとこれはまったく蛇はちとらずです。だから玉枝がこの家から消えるためには、玉枝自身の意志で彼女が勝手に出てゆくか、或は何か不慮の出来事が突発して、無作為のうちに玉枝がいなくなることを願うよりほかに、打開の方法はありません。

そんな手段がうまいこと構じられるかどうか？ 郁子夫婦にも私にもなんの関り合いもなく、そういう結末にいたる方法はないものか……などとあれこれ考えてもみるこのごろの私なのでした。

こんな私の心の動きを玉枝はもとより知る由もありません。相変わらず私をなめきって勝手気ままな暮しをつづけています。清水さんとは月のうちにまあ三、四度でしょうか、十日に一度ほどの割合で外泊をつづけていますし、十九才の学生、加納敏夫との情事はあの日一度だけの火遊びで、その後はたち消えになったものかどうか。そのほか私の知らない相手が、まだ一人や二人いるのかもしれない。

充分調べていませんのでなんとも言えませんが、仮りに私が探察して彼女の不行跡をなじったところで「お客の足をつなぐためじゃないの。しかたがないわよ」と一蹴されてしまうことはわかりきっていますし、もともとが浮気な玉枝のことですから、現在も、今後、何人かとの男出入りは続けられてゆくものと見ていいでしょう。それも「内緒で」と「から次第に」公然と平気で「行なわれるようになり、いまのところ、玉枝が私に承知させた相手は清水さん一人ですが、そのうちAが現われ、Bが現われ「今夜はAさんよ」「きょうはBさん」などと玉枝からぬけぬけと言われて、私は「へい、へい」とかしこまり、桃色の長襦袢やティッシュペーパーなど

を風呂敷に包んで、ホテルへ行く彼女に「はい、どうぞ」と手渡したりする枕芸者の男衆の様な存在になりはてるに違いありません。

それにしても、玉枝は私の存在を相手にどう説明しているのでしょうか。

「別に秘密というわけじゃないけど、お客にはあんたはこの店のバーテンということにしておくから、そのつもりでいてね」と、開店の日、玉枝から言われましたが、清水さんなどに対して、今もって私はバー「タマエ」のバーテンなのでしょうか。玉枝もはっきり言うてくれませんが、私もまた、はっきり聞きただしてもみないのです。

当然、相手の男から「あのバーテンは君のコレじゃないのかい？」と玉枝がきかれているに違いありませんが「まあ、なに言ってるのよ。あの人は店のバーテンで、あたしとは全然あかの他人よ」と平然と否定するか「そんなこと、どうだっていいじゃないの。こうやってあたしとあんたと二人で楽しんでるとき、そんな野暮なこと言いつこなし」と、どっちつかずにごまかすか「そのとおり、あたしの夫よ。でもお店をはじめの便宜上、夫ということになっただけで、本当はあたし、夫ともなんとも思っちゃいないわ。あんな人

より、あたしの大事な人はいまここにいるあんなだけじゃないの」などと、殺し文句をならべて相手に抱きつくか、サテこの三様の答のうち、どう男に説明しているか知りませんが、そのいずれにしても玉枝は、どうのこうのとイチャモンをつけるような気のきいた亭主じゃないから「あんな人のこと、気にしなくともいいのよ」と相手に納得させて情事を楽しんでいるのに違いありません。

清水さんとの仲は、かつて私がほんのちょっと玉枝に抗議したとき、玉枝の腰の下におさえつけられて、息がつまりそうになり、二人の行為を否応なく認めさせられて以来、公然とまでは言いきれませんが、なかば平然と逢引きがつづいているのです。そのあと、どう進展してゆくか……は知れたことで、玉枝はもちろん、清水さんもともに次第にあつかましさを加えて、あげくのはては私の目の前でも遠慮なく見せつけるような始末になってくるのですから、全くもって呆れはてたというほかに言いようありません。

26

十一時ちょっと前に郁子が先に帰り、十一時に閉店で店の鍵をしましたが、清水さん

が一人残って、店で玉枝と酒をのんでいました。私は郁子が帰ったとき二階へあがってポツンと一人テレビを見ていましたが、十一時半になっても清水さんが帰る模様がありません。二人だけで階下で何をしているのか……気になりながら、玉枝が清水さんを送り出す気配を待っていたのですが、その気配もないうちに玉枝が二階へあがってきました。

「おや？ 清水さん、帰ったのかい？」

「あんた、テーブル出してよ。きょうは清水さんをここへ招待することにしたの。この部屋でゆっくり飲むのよ。畳の方がずっと落ちつくから」

「おいおい、まだ飲むのかい？ 何時まで飲むんだい？」

「何時だっていいじゃないの。適当なとき帰るわよ。これから新宿の方へ行くっていうのを引きとめて、ここで飲むことにしてもらったのよ。新宿で金をつかうのを、ここでつかってもらったら、それだけうちが儲かるわけじゃないの」

「それで僕は、どうしたらいいんだい？ ここにいていいのか？」

「どこにいたっていいわよ。じゃあよくってね。清水さん、つれてくるから……」

玉枝は、階下へおりてゆきました。私はあわててお膳をだしてきて座敷の真ん中に据えるやら、座布団を二つ並べるやら支度にとりかかりました。

「やあ、失礼します」

清水さんが、玉枝につれられて入ってきました。

「さあ、どうぞどうぞ。ここへどうぞお坐り下さい。いますぐお酒を用意しますから」

「あんた、階下でおかんして持ってきてよ。」

それから冷蔵庫にかまぼこやハムがあるでしょ。適当に持ってきて」

「はい、はい」

私は亭主にもあらず、使用人にもあらず、玉枝の必要によってどうとも説明のつくようなあいまいな態度でお愛想笑いをしながら、急いで階下へおりました。

おかんの湯の中に徳利をいれる私の手が、急いでいるせいもありましようが、多少ぶるぶると震えていました。

玉枝にたしかめておけばよかったが、サテ私は清水さんの前に亭主として出るか、バーテンとして出るか？ 私が玉枝の夫であることは、いくらなんでも知らぬことはありませんまい。閉店になってもこの家の中にこうやっ

ているのですから、この家で寝起きしていることはレキ然たるものですし、今までの逢引きにも、一度や二度のことではなし、玉枝とて私との関係をかくしおおせるものではありません。それなら私が玉枝の夫であることは清水さんもわかつている筈です。それを承知で彼女のパトロンになっているのですから、まったく図々しいかぎりですが「だらしのない男なんだから、あんた、知らん顔していらいいのよ」と玉枝も清水さんに充分納得させているうえのことでしょう。

とりあえずお酒二本とオードブルを適当に盛って私は二階へ上りました。

あがると同時に、二人がサツと左右に離れた気配を感じとりましたが、もとより私は一さい関係なしといったジェスチュアで、つまみ物の小皿やら盃をお膳の上にならべます。お膳の上の灰皿には、吸いつけたまま置いたタバコの灰が、崩れずに長くなつたまま残っていました。

「お待ちどうさまでした。ママさん、こんなところでいいでしょうか？」

「結構。それでいいわ」

私は二人の前に盃をおいて

「たいへん遅くなりましてあいすみません。」

どうぞ一つ」

と、いかにもバーテンでございますといった卑屈なお追従笑いとともに、徳利の酒をつごとしました。

「あら、お酌は、あたしがするわよ」

玉枝は、私の手から徳利をとりあげて

「はい、おひとつどうぞ……。あらためて飲み直しよ。あたしもこうなったらもう、腰をおちつけてじゃんじゃん飲むわ。二人で競争よくって、酔っぱらっちゃった方が負けよ。バーテンさん、あんた階下へいってお酒の用意として。お酒ッって言ったらすぐに持ってくるのよ」

「へへへへへ、承知しました。清水さん、ではごゆっくり」

なんのことはない、私は階下へ追いやられてしまいました。遠慮して盃は二つしか持つて上りませんでした。玉枝は私に「あんたも飲んだらどう？」などとは言ってくれませんが。初めからバーテン扱いです。

私は階下で、とりちらかつたままの店のあとかたづけをしながら、次の「お酒ッ」になえました。

「ちよっとオ、お酒ッ」

二階から次の命令が出ました。

「はい、はい」

私は時をおかず、用意した酒を持って二階へあがります。清水さんと玉枝の座布団が並んでひつついて、二人がより添って飲んでいきます。

「かます、ごありがとうございます、持ってあがりましょうか？」

「ああ、そうね、持ってきて。サツと焼いて焦げめをつけて。醤油は二杯酢よ」

「はいはい、承知しました」

「いやア、どうも。めんどうかけて、すみませんな」

「いえいえ、どういたしまして。では只今すぐ持って参ります」

また私はさっさと階下へおりました。

次のお酒とかますごを持って上ったときには、清水さんは上衣をぬいでYシャツ姿になっていましたし、玉枝の姿はもう一つしどけなく、これも帯をといた伊達巻姿で清水さんに寄り添って、斜めに坐った裾から赤いものがちらついているばかりでなく、その間から白い内腿がのぞいて見えるくらい乱れていました。

「ちょっとオ、バーテンさん。バーテンツ、あんたはバーテンでしょ」

「へい、へい、バーテンです」

「バーテンだったら、あたしがお酒ツって言ったら、黙って持ってきたらいいのよ。それとも、なんか文句があるっていうの？」

「いえ、いえ、どういたしまして。文句なんかありませんよ。これはどうも、ママさんはちょっとからみ酒というところですね」

「なあに？ なに酒？」

玉枝は、酔ってくると、ますますあられもなく、なつてきます。初めてこの家で郁子と私と三人で飲んだときも、私を馬にして座敷を乗りまわした玉枝です。清水さんの前で、これは警戒しなければいけません。

「あはははは、これは早いとこ退参しとかないとあぶない、あぶない」

私は空の徳利を持って階下へおりようと立ちかけたところを「ちょっとお待ちッ」とYシャツのネクタイのところをぐっとつかまれて引っぱりよせられてしまいました。

「アイテテテ……」

襟首をつかまれただけに、私はもろくも玉枝の膝許に横倒しになってしまいました。

その背中の上へ玉枝はいきなり馬乗りにまたがったかと思うと、私の両手を持って背中へまわし、身動きもできぬようにおさえつけ

てしまいました。

「泥棒をつかまえたところよ。逃げようたってダメ。どうだ、降参か？」

「うわア、降参、降参。清水さん、助けて下さいよ」

清水さんは二人の格闘を酒の肴に、笑いながら眺めています。

「ママさん、勘忍してやれよ。降参って言ってるじゃないか」

「ダメ。くせになるからお仕置きよ。どうしよう、縛っちゃおうかしら」

なんのためのお仕置きか、もちろん理由もありませんが、この男はこの店の単なるバーテンであるという証明のためか、或は酔ったまぎれにかこつけて、あたしの亭主でも、こんな具合にあたしに降参する馬鹿な亭主なんだから、清水さん、あんた遠慮したり警戒したりする必要は全然いらぬのよ……ということ清水さんに見せるための一種のデモンストレーションかもしれせん。

「これから姐御が三下の乾分をお仕置きするところよ。清水さん、そこにあたしの腰紐があるでしょ。ちょっとそれ、とってよ。縛っちゃうから」

「アハハハハ、これか、ハイ」

腰紐をとって、馬乗りにまたがっている玉枝に手渡してやるところをみると、清水さんも一応このなりゆきに興味を持っているものとも思われます。

玉枝は、私の背中に馬乗りになったまま、うしろ手になった私の両手首を重ね合わせて腰紐をぐるぐると廻して縛りつけてしまいました。

「さあどうだ。これでも逃げるか。逃げられるものなら逃げてみる……」

玉枝は、口から出まかせなことを言いながら、またがった腰に反動をつけて私の背中をずしん、ずしんと^お圧しつぶします。私はそのひと押しごとに「フェッ、フェッ」と息を吐きだして苦しみますが、その苦しみの中に、どうあがいても逃げられず、男の目の前で玉枝の馬にさせられているわが身のおさましさに、締めつけられるような感動がぞくぞくと湧きあがってくるのを禁ずることができませんでした。

「ああ、かんにん、かんにん、もう勘弁して下さいよ。このままじゃ動けない。お酒のこともできないじゃありませんか。ほどいて下さいよ、この紐」

私は、うしろ手にくくられたまま、玉枝に

嘆願しました。

「ほほほほ」

玉枝は、ゆっくりと立ちあがって、私を放りだしたまま、再び清水さんにぴたりとより添いました。

「ああ、おもしろかった。乾分のお仕置きをしてから姐御が親分と一杯のむとこよ。ハイお酌」

いま持ってあがった新しい徳利をとりあげて、清水さんにお酌をするのでした。

「おい、紐をといてやれよ。かんにん、かんにんって言ってるじゃないか」

「いいのよ、こうやっておいても。朝までこのままにしとこうかしら」

「そんな殺生な。ほどいてやれよ、早く」

「親分からそんなに言われるんだったら、しかたがないわ。じゃアほどいてやるから、有難うございますってお礼を言うんだよ」

玉枝は、めんどくさそうにまた立ち上って私の許へ立膝で坐り、紐をほどいてくれました。私は身体が自由になるとともに、恥かしさがこみあげて「どうもすみません」という礼もそこそこに「あははははは」と笑い興ずる二人の声を背に受けながら、階下に駆けおりました。

いかに無力な男でも、これで怒らぬ亭主はない、というのは普通の男のことで、私は自分から馬の姿勢をとって乗ってもらう場合とちがって、自由がきかぬように縛られて馬にさせられた方が、どのくらい感動が深いのか、いま初めて知りました。「かんにん、かんにん、早くほどいて下さい」と嘆願しながら、心の中では、いかに嘆願しても許してもらえず、二人のそばに転がされたまま玉枝は清水さんと気俎な行為をすることをどれほど念願したか。私は階段下のところに坐りこんだまま、ひとり息をはずませて二階の物音に耳をかたむけたのです。

十分たちました。……十五分たちました。

二階から「お酒ッ」という次の命令が一向にかかりません。

二人で酒の飲みくらべなら、盃をあけるテンポも早い筈ですが、ひととき中休みというところでしょうか。

「ふフフフ」という玉枝の忍び笑いの声が間をおいて聞こえるだけで、あとは話し声も聞こえません。

つきすぎたお酒の徳利をそのままに、待ちくたびれた私は、あきらめてその場に寝ころんでしまいました。

「もう一本」という次の命令は遂にありませんでした。そのまま三十分もすぎたころ、階上から玉枝がおりてきました。

「清水さん、お帰りよ」

「おや、もうお帰りがい？」

私は、あわてて立ちあがりました。階上から清水さんもおりてきました。

「あんた、通りへ出て、タクシーつかまえてきてよ。あたし、こんな姿だからお送りしませんわ」

「ああ、結構、結構。どうもすいませんでしたな。お手数かけて」

「いえ、いえ、どういたしまして。ごゆっくりしたときは、またどうぞ二階でお飲みになって下さい」

私は、一足先へ出て通りへ走り、タクシーを呼びとめました。あとから来た清水さんは「いや、どうもすみませんでしたな」と言いながら、私の手に千円札を二枚、握らせました。

「いや、こんなことしていただいては、ママさんにおこられます」

と押し戻す私に「いいから、いいから」と手を払いのけて清水さんは車の中に入ってしまいました。

走り去るタクシーを見送りながら、私は胸に熱いコテを押しつけられたような屈辱の思いで、二枚の札を握りしめたのでした。

27

私と玉枝のこんな間柄^{あいだ}を知ってか、知らずか、郁子は「別にあたしに関係ないわ」といった顔で相変わらず毎日通勤しています。

午後六時ごろ店入りして、夜は玉枝の好意で閉店前の十一時ごろ帰るようにしています。が、もともと無愛想な娘で、お客に愛嬌をふりまいてサービスするといった柄ではありません。しかし、マダム玉枝とは比較になりませんが、郁子は郁子なりに「郁子の客」が出来てくるものです。

私は郁子の客に対しては、玉枝にわからないように、つまみものの量を多くするとか、その勘定をそつと安くつけておくとかしているのですが、そのほか、これはと思う客に対しては玉枝の目を盗んでときどき「これ、郁ちゃんからのサービスです」などと、ハイボールを一杯余計に出したりして、客に「ほほう？」と疑問の念を抱かしているのです。郁子も若いだけに、客の方も大たいにおいて若い会社員ですが、勘定を安くつけたり、

余分のものをサービスに出したりしますと、自分だけ特別扱いされていると思う自負心とともに（なんのために郁子が俺にこうするか）複雑な思いを抱く様子が私にもよくわかるのです。

私の狙いは、その客に（郁子は俺に好意を持っているな）と思わせることなのですが、もう一つ奥の狙いは（郁子は、もし機会があったとしたら、浮気をするものかどうか？）たしかめてみたいところにあるのです。

郁子は、こんな私のおせっかいに、ちらりと私を眺めるだけで別に詮索もしませんが、心のうちではどう思っているでしょうか。私としては（それほど俺に好意を持っているのなら、これは誘ってみたら脈があるかもしれないぞ）と郁子の客に思わせるための一つのテスト手段なのですが、郁子の方では私のこのテストサービスをどう解釈しているか？せいぜい（あたしに参っているマスターが、あたしのためにサービスにつとめている）程度にしか考えていないでしょう。

それでいいのです。私は第三者のままで郁子の身辺に生ずるハプニングを待ってみるだけなのです。

しかし、郁子が夫の矢沢を家に残しておい

て客の一人と浮気する、この事実をたしかめるのはなかなか容易な仕事ではありません。

郁子も浮気な玉枝の妹であり、デパートの食堂ガールから、あっちこっちの女店員を転々としたアプレ女なのですから、お膳立てさえととのえば、浮気する可能性は充分にあると思うのですが、しかし住込み時代とちがって通勤している現在、店から出た後の彼女の行動を探索するのはちょっと至難のわざです。

だが、もともとだらしない女ですし、尻尾をつかまれずに自分の行動を隠匿しおおせることはまず不可能でしょう。どこかで必ずわかる――。

夫の矢沢にも、姉の玉枝にも内緒のまま彼女の密通を私だけが知るためには、まず私が二人の仲をとりもつ使い奴にならなければいけません。両方にうまいこと逢引きの機会をあたえて、ひょうたんから駒が出るムードをつくりださなければいけません。

などといいますと、奥方様をそそのかしてお家滅亡をはかる悪家老のようですが、私の真意は、お家滅亡などとはもってのほかで、ご夫婦お二人の仲はますます睦まじく安泰のこと。その間の奥様のリクリエーションとして、郁子さまのおなぐさみになるお遊びをお

はからいする……という以外になんの他意もないのです。

坂西喜久雄。二十五、六才の会社員です。両親は大阪だそうですが、東京の会社へ入社して彼一人が上京、この店の近所のアパートに気楽な一人住まいをしている独身の好青年ですが、十日に一度か一週間に一度、このバー「タマエ」にやってきました。スナックバーですから、誰の係りということはありませんが、お目当ては郁子であることは見ていたらすぐわかりますし、郁子もまたそのつもりで寄り添ってグラスにビールをついでいます。

私の「郁ちゃんからのサービス」エリートの人ですが、この青年はどうでしょうか。とすると、この坂西君から郁子に誘いをかけなければいけません。誘いをかけるまでの下地をどうしてつくったらいいか。まず郁子が坂西に気があるというしるしを坂西に示してやらなければいけません。ハイボールやオードブルで気を持たせているのはほんの前奏曲で、それくらいのことでは急速な進展は望めません。

「ねえ、坂西さん。郁ちゃんが、坂西さんと一ぺんデートしたいって言ってましたぜ」ある日、私は玉枝にも郁子にも聞かれぬよ

うに坂西の耳もとでそっとささやいてみました。坂西は「え、ほんとかい？」と身を乗りだしてきましたが「ほんとですよ」とうなずいただけにとどめておきました。あまり早急にたたみかけても事を仕損じます。

一、二日おいて、郁子にも私は同じことをささやいてみました。

「郁ちゃん、坂西さんがね、君と一ぺんデートしたいって言ってたぜ」

「ふーん」

店の中でしたので、郁子も興味があるのかないのか、あまりはつきりした態度はみせませんでしたが、興味がないう答はありません。

次の日曜日は矢沢の出勤日だそうです。私はその日曜日の午後二時から四時までのシネラマの入場券を二枚買ってきました。

玉枝は向こうの隅で中年の客と抱きついたり頬ずりしたりしてビールを飲んでる間に私はこちら側の坂西と郁子のそばへ寄って、そっと坂西の手にそのシネラマの入場券二枚を手渡しました。

「こんどの日曜日のシネラマの券ですよ。余っちゃったんでね、進呈します。郁ちゃんと二人で見に来たらどうです」

坂西は私の顔を見あげて

「へーえ、いいのかい？ 郁ちゃん、どうする？」

と郁子に諾否を求めました。

「こんどの日曜日？ 何時からのなの、その切符」

「午後二時から分だ。上映時間は二時間ぐらいだから、終るのは四時だね」

「そう。そんならまあ……でも、どうしようかしら」

「行きなさいよ、郁ちゃん。たまには映画ぐらい見とくもんだよ。坂西さんも別に差し支えはないんでしょう？」

「うん、僕の方は差しつかえないけど、郁ちゃんが行ってくれるかどうか……」

「行こうか」

郁子もその気になったようです。

「だけど、ママに内緒よ」

「そりゃあ、もちろん、ママにも誰にも言いませんよ」

私は、すぐ合点しましたが、その言外に「矢沢にも、もちろん言いませんよ」という意味が含まれていることは郁子も察したようです。

日曜日、何処で会って、どうするか。あとは二人にまかせておいたらいいことです。私

は胸の中でホクホクと手をすり合わせて、その場をはずしました。

さて、次の日曜日の午後四時ごろ。私はシネラマの出口が見えるタバコ屋のかげで、出てくる二人をそっと待ちました。二人が出てからどうするか？ 別にそこまで探索する必要ありませんが、まあ、どうせ暇な体だし尾行してみるのも面白いじゃないか、ぐらいの気持ちで待ったのです。

坂西と郁子が手をつないで出てきました。

郁子は、淡いレモンイエローのセーターに目もさめるように鮮かなブルーのプリーツスカート。それに薄いパールグレーのストッキング。セーターと同色のメッシュのパンプスという、ほどよくコーディネートされたスタイルは適当にラブリーで、適当にセクシーでウエストからヒップにかけての曲線や、ミニスカートの下から露出しているたくましい足の線が目射るように映えています。

私は、三〇メートルほどはなれて二人のあとをつけましたが、二人はすぐ付近の喫茶店に入りました。

しかたがありません、また待ってみることにしました。

三十分ほどして出てきました。二人は何や

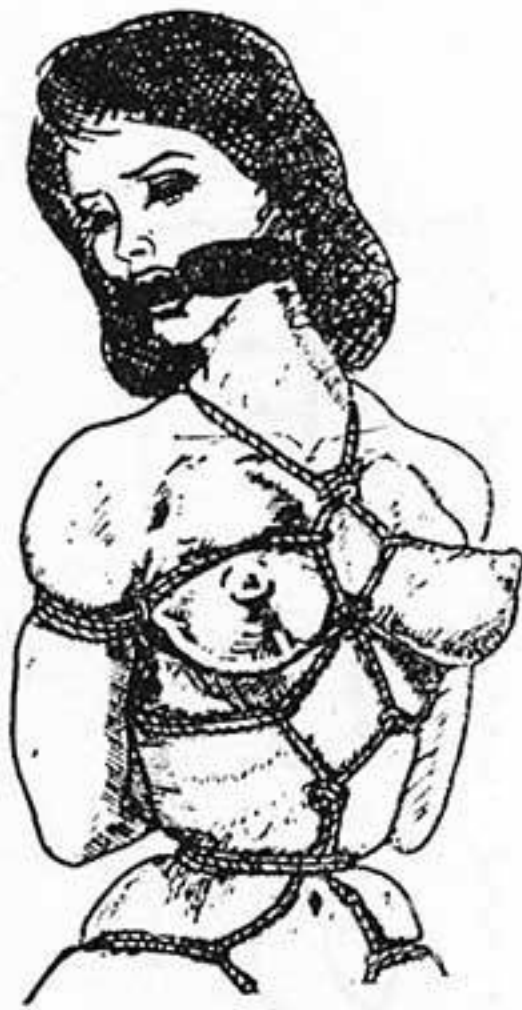
らひとこと、ふたこと話しあったかと思うと右と左へ別れてしまいました。私はあわてて路地のかげに逃げこみました。坂西に何か用事があったのか、郁子も六時ごろには夫の矢沢が帰ってきますので、それまでに家へ帰っていたいためか、二人のデートはその喫茶店で「終り」となっていました。

まあ、いいさ、いいさ。私はぶらぶらと雑踏の中を歩きながら、さてどうしたら郁子と坂西を結びつけられるか？ 交通公社の周遊券でも買って、二人を一泊旅行に誘ってみるか……。しかし外泊は夫の矢沢に疑念をおこさせて、詮索されたらうまくありません。昼間、都内のホテルに二人を送りこむことができたなら一ばん簡単なのですが、いきなりそれでは少々露骨すぎます。

第二回目のチャンスは、どうしてつくったらいいか……。

私は、街のアクセサリ商店のショーウィンドーをのぞきこんで、郁子のネックレスやブローチの品さだめなどしながら、あの手がいいか、この手がいいか、次の打つ手を思案するのでした。

—(つづく)—



カット・名古屋 S生

—— 随 想 ——

さき、の責め

—— ある劇画から想うこと ——

早 木 夢 二

「週刊ポスト」八月十四日号の、さいとうプロ作品の「影狩り」は前号で一責めされたさき、が、全身に縄目の跡をくっきり見せて、「ご前さま、もっといじめて下さいませ」と言う。「責めの味を覚えおったな」と悦に入ったご前さまが、さきの全裸にがっちり縄をかけをする。

両手は頭の後ろでくくり合わせ、乳房をきっちり縛り、へそを中心に菱形の縄をかけている。ご前さまが握って「どうじゃ、どうじゃ」と絞り上げて責めているのは、両手をくくった縄と下半身の菱縄を股間に回した縄と思われる。

あああ、と激しく悦悶するさき……。

慶子も絞り責め（と私はいっている）が大好きで、どちらかといえば、石抱きのようにオーソドックス？ な拷問が好きな私と、ちよつと違うのだが私とても、いつも縄がけした彼女を、膝を大きく開かせて坐らせた後ろに回って、両手を縄のかかった彼女の二の腕にかけ、ぐうつと絞り上げると、そうでなくともしっかりかかっている縄が更に裸身に喰い込み、みるみる縄の喰い込んだ辺りの肉が盛り上り、赤く染まってきて、菱形にせかれた双の乳房がピンと突き出している眺めはそれは慶子の好きな責めであるだけに、私にも彼女の悦びがぐんぐん伝わってくるようであ心たのしくないとは義理にも言えないのである。

る。

時には、棒を縄の間に挟んで締め上げることもあるが、やはり、じかに私の手を彼女の体に触れて責めるのが一番、楽しい。

もっとも画で見ると女は美人でもあり、体も美しく、その彼女に縄の喰い入っている姿はとても慶子などの及ぶ所ではない。生身の姿の裸体には、やはりどこかに欠点があるものだと思う。

比較するのが初めからムリというものだが責められているさきのような画を見ると、すぐ身辺の慶子の責めと比べてみるのは、私にとって無理からぬところであろうが、理想化されている女体と比較されては、慶子としては堪えたものではあるまい。

私とどう？

などと彼女は言うが、私にとっては、やはり生身に、しかも私の生涯の望みであった菱縄縛りを喜々と受け入れてくれて、拷問プレイにいそしんでくれる彼女の方が、ずっといいのに決まっている。

旨いこと言っている……。

と、慶子は私を冷やかすが、その彼女だって、すっかり菱縄縛りが板についた感じで、二の腕を絞り上げられて苦悶しているその姿には、長い年月の安らぎと落ちつきさえ、ほのかに窺えるのは、夫婦プレイの功德といふべきであろうか。

水田真紀子習作シリーズ

正月の乙女

水田真紀子

控え目なノックの音に、一彦はひとりでに

顔がほころびてきて

「ほんとうに、来たぞ」

と、嬉しくなってくるのである。

ドアを内側からあけてやると、やはり桃代であった。

「やア、よく来てくれたね。さ、あがんなさい」

一人だけの部屋と分かってはいても、桃代はチラッとのおきこんで、

「いいのかしら、お邪魔しても！」

と、遠慮するような仕草で足をふみ入れる

のである。

男一人の部屋に入ってくるだけで、殺風景な部屋中が急に花が咲いたようになる。

「やあ、ずいぶんきれいだなあ。見ちがえるようだよ」

「あら、そんなにごらんになっちゃ、恥かしいわ」

今日の桃代の和服姿は、いつも見馴れている洋服姿と違って、別人のように見えるのである。桃代は部屋に入ると、きちんと坐って新年の挨拶をした。

その動作までが、ふだんのものと違って、

一彦には新鮮であった。

年末に会社の忘年会があつて、なんとなく解放感に寛いだその帰り途、

「お正月休みといつても、一人者は退屈だなあ」

「じゃあ、遊びに行ってもいい？」

「ああ、ずっとごろごろしてるから、いつでもおいでよ」

そのときは、アルコールの勢いも手伝って無難作に、そんな会話をかわしたが、半分冗談、真面目ともつかず、あてにするような、しないような気でいたが、こうして現実に桃



代に訪問されてみて、一彦は嬉しくなってきたのであった。

改まって挨拶するのが、面映ゆい感じがして、すぐに

「もう、そんな四角ばらずに、ゆっくりしよーうや」

殊更にくつろぐように、あぐらをかいて頭をがりがりかくのである。

「どう。寒いから、とにかく、こたつにでも入らない？」

今まで自分が坐っていた、ふとんを裏返しにして向こう側にやって、席を作ってやると一彦は先に手を入れていったが、桃代は、きちんと正座した位置を崩さずに、しばらく、はにかんでいたが、そのうちにだんだんと打ちとけてくる。

桃代としても独身の男一人の部屋に、こうして訪れてくるくらいだから、決して一彦が嫌いではない。むしろ一彦を憎からず思っているのである。ただ若い娘としての、つましき、処女性のはにかみが、どうしても、動作のひとつひとつに現われるのは止むを得ない。

だが、その態度が一彦から見れば、たまらないほど好ましいのであった。

遠慮しいい従ってくるふるまい、それが特に今日の和服姿のために、ことごとに新鮮であった。

「ほんとうに、きれいだなア」

着物の肩の線、重なった襟もとのたたずまい。その、どれもが新鮮な刺激として写るのである。

「いやですわ、そんなに見ちゃ」

恥かしそうにうつむく髪に、正月の髪型らしく稲穂がゆれる。

そして若い女の化粧の香りが、ほのかに漂って来るのが一彦には、たまらなかった。

会社では課が違っていて、特に今まで深い交際はなく、同僚と一しよに、四、五回、お茶をのんだくらいで、こんなに身近かにこの女性を観察したことはなかったが、顔だちも明るくて、ミニスカートのよく似合う可愛い娘として、内心すてきだなと思っていた。今、こうして目の前でゆっくりとながめてみると、一層、可愛く見える。ほんのりと薄化粧した顔だちが若さにあふれている。

「そんなにみつめないで——」

伏目がちに投げかける瞳も、きれいだし、形のいい唇の赤さが、一彦の心を完全にゆすってきた。

「いいじゃない。あんまり美しいから、ついみとれちゃって……」

ニッコリ笑う一彦を、桃代も、すてきな方だわと思えるのである。

桃代たち会社のOL仲間では、まだ若く独身の一彦は、いつも噂のまどであって、誰がこの殿方のハートを射とめるかが、いつも話題になっていたくらいである。

勿論、それは純粋な、あこがれの対象としてのものであって、恋愛の偶像であった。

しかし、男の場合は必ずしもそうではなかった。この一彦が桃代をながめる目も、これほど純粋ではない。それに一彦はアブノーマルな嗜好を持っていたのである。

こうして誰もいない部屋の中では、絶好の条件が揃いすぎているのである。

それを実行に移せる可能性は充分にある。

桃代を見ているうちに、どうしても、この美しい相手に、それを試みたいという誘惑が起こってくるのを、もうどうしようもなくなってきたのであった。

だが、あまり急にその動作に移するのは危険であり、彼女の気持も計りかねたので徐々にくつろがせてゆくようにした。

しばらくは世間話をしたり、他愛もない冗

談を言ったりしていたが、ふと、こたつの下で指先がふれたとき、一彦は意識してじっと握りしめた。

はっと話がとぎれて桃代が本能的に手をひっこめようとしたが、それを離さずにじっと握っていたのである。

桃代の顔がパアッと赤くなった。

「きれいな手だなあ」

指先をいじった。

「すばらしい手ざわりだよ」

そんな文句に女は弱いのである。

桃代は一彦に手を握られた瞬間から、このままいたら、とりかえしがつかないことになるのじゃないかしらという疑念と、身体全体がジーンとしてくる思いに目の前がかすんでくる心地であった。

そのままになっていた。指先がいじられてからまってくる力に、男の意志を感じてそのままになっていた。

いつの間に寄ってきたか分からなかった。一彦が背後にまわっていて両肩を抱かれていたのである。

「アッ！」

と叫んだように思う。

が、そのまま男の強い力に抱きしめられる

と、これまでに味わったことのない、うずきが全身をジーンとさせて、気が遠くなるようであった。

「好きだよ……」

そんな言葉も聞いたようであった。

身体が横にねじ向けられると、一彦の顔全体が目の前にあった。

それっきり唇に生温かいものがかぶさってきて、強い力で吸われた。息がつまるくらい吸われた。

始めて体験した接吻に桃代は身体中の力がぐうっと抜けたようになり、男の熱い息にカーッと血が逆流してゆくの覚え、しばらくの間、クラクラッとなった。

長い長い時間のようにも覚える。桃代が我に返ったとき、両手がうしろに回されていて自由がきかないのである。そんな気がする。

「あら！」

正常にもどって愕いて一彦を見上げると

「どう？ 手を動かしてごらん」

一彦が笑っているのである。

動かせられない。

「どうして、くくってしまった」

桃代には、それが分からない。

「ちよっと、ハンケチでしばってみたのさ」

手首を無理に動かそうとすると痛いのである。

「くくられるのなんか、いや」

身をくねらせるのを一彦は

「ちよっとだけ辛抱してくれないかなあ」

桃代の肩をうしろから抱きしめながら

「きれいな女の人が、こうしてうしろ手にしばられて自由を奪われているってのは、とても素晴らしいんだよ。ね、いいだろう」

「まあ、ひどいわ」

「心配しなくていいんだよ。君が好きなんだから。君もキスをさせてくれたじゃないか」

それを言われると桃代はまた赤くなって、うつむく。

「では、ちよっとだけよ。変なことしちゃいやだわ」

「変なことって？」

「……」

一彦はそんな桃代の手首をなぜながら、「きれいな両手が、こうして組み合わされてしばられてるのは、ほんとうに素敵だな」

自由に動かせるのは指さきだけ。その白魚のような指をいじられて、桃代は何もいえなかった。

胸高に結んだ帯の結び目が羽織を大きくふくらませて、そのふくらみを抱え上げるように桃代の両手が背なで交差されてしばられていた。

手首が十字に交わって、それをしめているハンカチの白さが、よけい一彦の心を誘う。この女はしばられているのである。これから指さき一つで、どんな面白い遊びでもできるのである。

「桃代ちゃん、僕が好きかい？」

ニコリとする笑顔が、この男を女性のあこがれの的にするのもかもしれない。

「でも……」

桃代は、くくられると、それだけでぐったりとなって、上半身を曲げてこたつの上に恥かしそうにうつ伏した顔が不安気であった。

この一彦が好きなのである。だから……こうして遊びにきた。男一人の部屋へ若い女性が単独で訪ねるということに対して、理性では強く反抗したのである。しかし恋心？ がそれに打ち勝ってしまったのである。

まさか、という気持ちもあった。それがいきなりキッスされた。彼はこの私を好きだといってくれた。

嬉しいと思ったのである。

でも、どうして彼は私の手をくくったりしたのだろう。それが、ちょっと不安だった。「でも、くくられたりするのはいやですわ。あたし、なんにもくくられるような悪いことしていないのに」

訴える瞳が媚を含んでいる。一彦はそう思った。

「誤解しないでくれよ」

一彦は、そんな桃代の両肩をやさしく抱いて、

「罪人をしばってるんじゃないよ。罪人をしばるってことは、何もそこに美はないもの。桃代がこうして後手にしばられてるのは美だよ。女性の、それも美しい女性がしばられる姿ってものは、こんな美しいものはない。映画なんかで美しいお姫様がしばられてるところなんか、君は美しく感じないの？」

そういわれてみると、そんな気もするけど桃代には分からない。

「だって、女優さんそのものが、きれいですもの」

「いや、そうじゃない。現に君もこうして後手にされると、一段とすてきになった。ああボクは君が好きだよ」

片方の手で指先をまさぐっていった。

「君も、僕が好きなんだろ？」
返事ができない。

しかし、社の同僚の誰彼をしりぞけて、こうして一彦の言葉を受けられることになったことは、桃代にとってなんとなく心が躍る気がしないでもない。

「……………」

口には出せなかったが桃代は、こたつにもたれたままコックリとうなずいたように一彦には見えた。

「お互いに好きなんだよ、ね？」

一彦は桃代の肩をおこした。桃代は両手で顔をかくしたくなるくらい恥かしいのに、それができない。抱かれたまま顔を一彦の胸の中に埋めて行ったのである。

脂粉の香りがユラユラとたちのぼってくるのが分かる。

「美しいよ、ホントに」

耳もとでささやかれるのを桃代は、楽しい音楽のように感じていた。

顔を上向けにされると、桃代の上気した美しい顔がじっと眼をとじてふるえている。形のいい唇が心もち何かを期待しているように見える。

一彦はむさぼるように、その唇を吸ってし

まった。

「むっ、うう………」

桃代の小さな悲鳴が激しいキッスに吸いこまれてゆく。

前にも増して、たまらない刺激で桃代は、もだえていくのである。

自分から無意識に一彦の舌を求めている。

そのまま一彦の片手が着物の襟元からすりこんできたのに気がつかなかったくらいであった。着物だからブラジャーはしていなかった。

胸高に結んだ巾の広い帯に締めつけられて桃代の乳房は、そっとかくされているのに、一彦の指さきがそれをつかみあげたのであった。

「う、う………」

その感じに本能的に身を離そうとしたが、一彦の唇がそれをさせなかった。

そして、乳房が、ギューと帯の間からひきあげられて、手のひらの中でもまれ始められると、その強烈なうずきは完全に桃代を夢の世界に送りこんだ。

ほんとうに激しい刺激であった。乳房からジーンとしたうずきが桃代の全身に電気のように広がっていった。

足のさきまでに、そのうずきが伝わり、唇からうける男性のたくましい息吹きと、乳房からうけるなんとも云えないしびれが、桃代にとっては強すぎた。

いつの間にか思考がとぎれ、ふわりと身体全体がうき上ってくるような感じの中に、桃代はぐったりと力を抜いていた。

完全に失神したのである。

一彦はそれに気がついて、そっと身体をばなした。腕の中でぐったりとなっている桃代の身体をそのまま、たたみの上へ寝かした。

そのとき、少しウーンというような声があったように感じたが、気がついているのではなかった。

相変わらず桃代は意識がないのであった。

「何という、ほんとに——」

一彦自身も愕いたのである。桃代がこんなに感度の良い女であることは想像もしていなかった。

うしろ手になったままの桃代をみているうちに、一彦はもうたまらなくなってきた。

細い帯じめをはずした。きつく結んでいるのに愕く。

ゆっくりうつ伏せにしてから羽織をめくって、巾広い帯をとき始めたのであるが、なか

なか外せない。

一旦、桃代の身体を起こして、さっきのようにつぶせにこたつの上へもたれさせるように坐らせると、どうやら帯を解くことができた。シューシューと鳴る、その音にも一彦の血はうずくのである。

しごきをほどいて、腰ひもを外した。着物の上から感じられる女の柔らかい肉体がたまらない。

そうして置いて、うしろから羽織と着物をそっとはいだのである。

こんなにされる間、桃代はほんとうに気がつかなかったであろうか。

一彦にいじられた乳房のうずきは、それほど激しかったのである。もう身体の力がすべて抜けてしまつて何もできないのであった。

遠い夢の中で、一人の女が帯をとかれ、着物をぬがされてゆくの、おぼろ気に感じていた。

まア恥かしいのに、あの娘は着物を脱がされてゆくわ。と、いう感じはあった。

着物を背なでたくられて、うしろ手にしばらくられているので、そこにひっかかって脱がせられない。

改めて一彦は、そのハンケチをほどいて、

今といったばかりの腰ひもで改めて桃代の手首をしばり直していた。

腰ひもは長くて、何回も廻さなくてはならない。

「あら？」

そのとき桃代は始めて我にかえたのである。

（あ、恥かしいわ、あんなに乳房をいじられちゃって）と、思いなおしながら、ふと気がつく、いつの間にか着物をぬがされて長襦袢だけにされているではないか。

「いや」

立ち上ろうとして、今、改めて嚴重に両手が、うしろでくくられようとしているのを覚えてた。

「あッ、いや」

桃代はもがくのがあったが、もう手首は動かせなかった。

「ひどいわ、こんな——」

知らない間に帯をとかれ、着物を脱がされて、あさましい姿にされているのがなさけない。それに両手の自由を奪われているのである。

「ひどいわ」

うしろ手になったまま立ち上った。

その瞬間に、ひざの上にまだまとっていた着物がすっかり落ちて、長襦袢だけの姿が、たまらなく恥かしかったが、

「いや、ひどいわ」

咄嗟に言葉もでなかった。本能的にドアの方へ二、三步あゆんでから、今更、こんな恰好で帰れないことを覚り、そのまま崩れるように坐りこむ。

「すてきだなあ、桃代ちゃんのその姿」

一彦はニヤニヤ笑っている。

いま脱がされたばかりのきれいな着物や帯が乱れちらかっている中に桃代の長襦袢一枚でしばられている姿が、いよいよもなく艶めかしい。

もうこんなにまでされたら、あとはズルズルと一気に急転直下。

しごきをとあげて、胸もしばろうとする一彦、そうはさせまいと本能的に蹴く桃代。

「いや、いや」

その抵抗も空しく、しごきは桃代の乳房の下で二の腕をからめて、ひしひしとしばられる。

柔らかい二の腕は一彦がしめあげるたびにぐいぐいとひきしぼられ、そのたびに、

「あ………」

「う………」

桃代の息をつめた声がもれる。痛々しいまでにしめあげられた桃代は、半ばあきらめたかのように、力もなく、うつむいたまま、

「こんなにくくって、どうするの？」

うらむように見上げる瞳がいじらしい。

「さあ、どうしようかな？」

一彦は、そんな桃代を見下ろすのである。

抵抗したので長襦袢のもすそが割れて、可愛い膝頭がのぞいているのを、かくしも出来ない桃代なのである。

「一彦さんて、ひどい方ね」

弱々しいつぶやきである。

「ひどいなんて云わないでくれよ。桃代ちゃんが好きだからこそ、こうしているのさ」

「こわいわ、もうほどうして」

「何、こわい？……どうしてさ？」

「だって……」

「どうして、こわいのさ？ 普通の場合、こんなにされたら、どうなると思う」

「そりゃ」

「そりゃ何さ？……いじめられるとでも思っているんだろうが」

桃代はうつむく。

「こうして置いて、むちでぶたれたり」

「まあ」と、愕いて見上げる。

「ヒイヒイ云わされて折檻されるってのは、よくあるね。だけど、ボクは桃代ちゃんをこれから可愛がってあげるのさ」

「ひどいわ、こんなにして——」

しかし、一彦はそれにとり合わない。

「桃代ちゃんの乳房って、きれいだろうな、見せてもらえる？」

一彦は桃代に近づいていくのである。

「あッ、いや」

身をもがくけど、こんなに自由をうばわれていては、どうしようもない。

もがいたあげく、長襦袢のえり元が大きくひろげられて、丸く形よくふくらんだ乳房が二つとも無残にひき出される。

「あッ、ひどい」

顔を真赤にして、うつむく桃代。身をよじって、かくそうとすると、肩からなめらかな衣裳がするりとすべって、よけいに肌があらわれる。

強くしめつけられたしごきの上で、そのふくらみがかすかに震えている。

「すてきななあ……」

すべすべした膚（はだ）を一彦がもみ始めると、

「うーッ」

せつなく、のけぞって悶えていく。恥かしい姿にされても、いじられると、女の本能がもだえ始めて、それが余計に恥かしい。そして桜色の乳房が固くなっていく。

「いや、許して……」

眼の前で乳房をいじられている。

ぎゅうとつままれて、ひっぱられたり、昂奮した乳房を指先でピコピコはじかれたりするのである。

それを逃れることも出来ない、うしろ手にひしひしとしばらくされている桃代であった。

「キミが好きなんだ。好きなればこそ、こうして可愛がっているのさ。この乳房、この柔らかな素肌、みんな僕がもらっちゃうのさ」

「あ、あ、あ」

こうされている間にも次第にもり上ってくるうずきに、桃代は苦しい声をおあげる。

ツーンと頭の先まで応えて来るうずきに、桃代の肢体はもがかされるばかり。

かくしたいもすも割れて、はちきれそうなふとももが、赤い布からチラチラとのぞいて、一彦の視線をとられる。

「ああ、あ、もう」

くねりぬいて桃代は失神する。

ぐったりとなった桃代。これはなまめかしい限りである。

長襦袢は胸をしばられたしごきと、それ自身をまとった下ひもだけが身体をかくすばかりである。

乳房から上は素裸にひきむかれているし、ひざっ小僧の上までめくられた下半身の素肌の白さ。

ピチピチした若い女体は、そのままぐったりと気を失っているのである。

一彦は、もうたまらない。

思うままにできる生きた玩具が、そこにあるのであった。

抵抗できない女体。ひしひしとしばらくしてころがされている女体。

どんな好きな遊びでもできる女体が、そこにあるのであった。

「うーん」

抱き上げたとき、ひと言もらしたが、桃代の身体は思うようになった。

一彦はその女体を、こたつのやぐらの上に仰向けにねかしたのである。

やぐらが小さいから桃代の顔は向こう側にのけぞってこぼれている。

ふくよかなヒップから下は、こちらで反り

央がもち上っている。

桃代は再三の一彦のテクニクに、身も心もすっかり虚脱状態にされて寝かされている

桃代はもだえぬいた。だが、数分後にはパ
ンティを脱がされたまま、死んだようになっ
ていた。

柱と樺利用の開股責めを初めと
川路むら子 略号ハカわV
大手札三枚一組 四〇〇円
柱縛り棒責め、両手挙げ責め
などで痛めつけた大写真し。

女責め図絵の系譜

毛吊るし女地獄

文と絵

南

彦

造

昔から、丈なす「黒髪は女の生命なり」と伝えられているが、漆黒で、水々しい日本女性の頭髪は、外国人の憧れのまとであった。

外国女性はブロードよりも、房々とした黒い髪の毛に憧れの眼を注いでいるのに、肝腎かんじんの日本女性は、わざわざ薬品などで、茶褐色に染め抜き、天然の恵物に、感謝のまことを捧げようとはしない——と外国人のインテリたちは不思議がっているようだ。

実際——フランスのパリなどでは、いともおかしな色に染色した在仏日本女性の姿を、かなり多く、見かけると云う。

困った島国根性で、何から何まで外国に憧れて、猿真似をしようとするのだから、あき

れるほかはない。

○
もっとも、その長い丈夫な黒髪の故に、酷い利用のされかたをした日本女性の数も、歴史を眺めると、意外に多いのに愕く。

○
封建時代に於ける女性の黒髪は、多かれ少なかれ男の愛玩用としての対象とされたり、逆に、手痛いお仕置の具として、サディステックな権力者に利用されたりもした。

○
印象的な史実としては、殺生関白（豊臣秀次）が、男としての興味から、意に従わぬ美女どもを、素裸に剥むいて、宙吊りに女体を責

め揚げ、恰好な緊縛縄の代用に長い頭髪を捻り合せて使った——のは余りにも有名で、女どもは、頭皮が剥けるか（？）と思わんばかりの泣き声を張りあげ、叫喚し、手足を鬼のように、バタつかせ、悶絶した——と伝えられている。

○
以上のような史実は別として、事実、女を吊るし責めにして、責め殺した例は、明治の末期——埼玉県浦和在の農家で起こった。

当時、検視に立ち合った井上警部の談によると、恋女房の姦通を怒った某労働者が、この女房を縛り、その髪の毛で、天井の梁に吊るして、自分は酒を飲みに行って終まった。その後で、この女房は、体の重量と苦痛に耐えられず、宙吊りのまま、死んで終まったのだった。

○
死体の肉は腐って落ち、髪の毛だけが梁に残り、落ちた女の腐肉からは、ウジ虫が匍はい出したのを、近所の人々が見つけ、空家からこの女の死体を見つけ出し大騒ぎとなった。

○
この事件については、故伊藤晴雨氏が昭和36年4月5日発行『画報風俗奇譚（臨時増

刊) 吊り責めさまざ
ま〃〃の末尾に掲載し
ていたから読まれた方
も多いと思うが、此処
で晴雨氏は『このよう
な、聞くからに身の毛
のよだつような凄惨な
話も、不幸、日時とか
その加、被害者の姓名
もわかりかねるが……
浦和地方裁判所の書類
が残っていたら、判然すると思われるのだ。
井上警部は、現在、文京区千駄木林町九十番
地にいる私の知人であるから、事実であると
信じる』と述べていた。



責められし隣家の女が
毛吊り苦痛にあえはよい
と思つた。

とても哀れだったが、私の心には何故か理性
とは裏腹に(お姉様が、もっともって虐めら
れればよい〃と秘かなる愉悅に浸っていたの
を、不思議と、またよく記憶していた。

私は子供の頃——隣家の若い夫婦が、喧嘩
でエキサイトし、美しい妻の結い上ったばか
りの日本髪もどりの髻を掴んで、畳の上を引き摺
りまわすのを目撃し、激しいショックとリピ
ドを覚えたのを記憶している。

その若妻は有名な名門の女学校を卒業して
おり、才色兼備の、私にとっても優しいお姉
様と云った感じの方だったので、その苦痛に
歪む表情(?)とか許しを乞う泣き声とか、

その後になって、彼女が、私に△痛くて痛
くて、ヒイヒイ泣いちゃったの。だって頭の
毛が皮ごとそっくり抜けそうだったの。ここ
を御覧なさい。血が滲にじんでるでしょう〃と円
い襟足の後れ毛おくのあたりや横髻よこびんのほづれ毛の
抜けた辺りを、しなやかな指先で痛そうに撫
であげて、見せてくれたのだった。

私は、その時、彼女の長い頭髮をたばねて

天井の梁から吊るしたら、結果はどうであろ
うか(?)——と想像した。

彼女の夫は、吊るしあげるような残酷な真
似はしなかったが、私は、ふと、そんな凄美
な彼女の姿態を脳裏に浮かべ、彼女の吊り上
った両脇まぶたの不自然な眺め——とか、声になら
ない苦痛に歪んだ紅唇——よだれも牛のよう
に流すであろうし——赤いお腰の下から、苦
悶のあまり失禁が流れ落ちるであろう(?)
そして緊張し切り、限界に達した毛根は、最
早、彼女の体重をささえ切れずに……一本、
また……一本……と鮮かな血痕を毛穴に残して抜
け去り、そのたびに彼女の四肢は激しい苦痛
に硬直し……緊肉だけが不随意に蠢動しゅんどうを続け
るに違いない——と想定もした。

そんな勝手な想いをめぐらす私だったが、
それは、彼女があまりに美しく、また私には
肉親の姉のように優しかったからであろう—
と、今になって懐かしい。

責められる女というものは悩ましく、その
姿が美しく、苛酷であればあるほど男には寵
愛され、その加虐味も倍加するものである—
と、昔の賢人は云った。それは美しい女性の
業か……宿命か……。

(終)

夫

婦

愛

虐

図

絵

辻村

隆

夫 婦 愛 虐 図 絵

このところ夫婦プレイは、正に花盛りの感がある。十月号の奇クサロンは、さながら夫婦プレイ特集のようで、開放されたSMのモラルが、まざまざと誌上に躍動していた。

一昔前と違って、フォトも美しいし、その構図や緊縛も斬新で、カメラ・ハントなどと銘打って、掲載している私のフォトより、遙かに勝れているのだから、汗顔のいたりである。

特に私の目を惹いたのは「緊縛は夫婦生活の活性炭」と題する、三浦敬一氏のプレイ・フォトであった。奥さんの顔を巧みに陰影でボカし、それでいて大胆なポーズの緊縛を強

調して、その使用する縄すらも、日頃私が好んでよく使う、袋ものの芯にする柔軟なまだら縄で、緊縛そのものも、過去に掲載されていたグラビアを参考にしたのか、優等生式なオーソドックスな緊縛を踏襲していた。

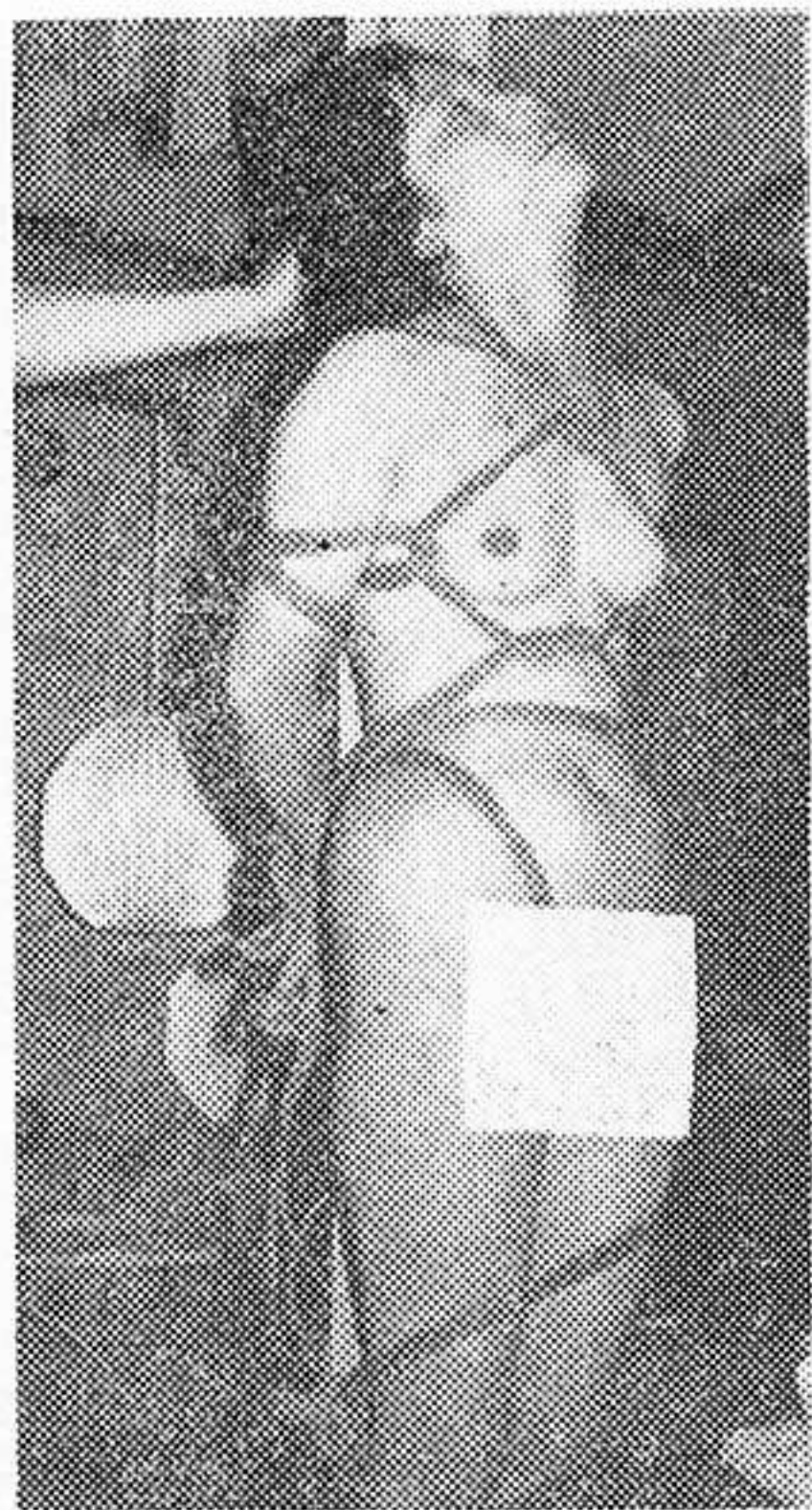
三浦氏の短い告白には、住居の明示はなかったが、若し関西近辺なら、このプレイ歴五年の夫婦に、一度会ってみたい気が頻りに起こった。それは彼の緊縛の余りの鮮かさと手記による夫人の協力的な様子からであった。

私はハントの連絡や近況にかこつけて、箕田氏に電話した折、さりげなく三浦氏のことをそれとなく打診してみた。

「おととい塚本君からも聞いてきたよ。どうやら思いは同じらしいね。プライバシーの問題だから、一度御本人の意向も確かめねば何ともいえないが、三重県四日市の人だから、そう遠くもないがね。御執心のようなだから、早速電話で問い合わせるよ。先方が差支えないようなら、折返し電話番号を知らせるから、その時はあんたからじかに交渉したらいいよ」

と、何もかも察したらしい口吻である。

電話を切って半時間ばかり経った頃、思いがけず、三浦敬一氏本人より、私に直接電話がかかって来た。私の心の動きを知って、箕



田氏が電話番号を教えたらしい。

「唯今、奇クより連絡をいただきました三浦です。突然で驚きましたが、辻村さんが私達に興味を持たれたとお聞きして、光栄のいたります。カメラ・ハントはかかさず愛読しておりますが、家内に相談しました処、辻村さんなら構わないと承知してくれました。ただ私は商店街に店を持って商売しておりますので、そちらまで夫婦で出向くことは出来兼ねますが、お越し下されば、何とか時間を都合出来ると思います。いろいろと御厄介なことを申しあげますが……」

きおい立った口調で、一気に喋って、殆ど私の口をさし挟む隙もない。

「よく分かりました。じゃあ、いつが宜敷い

でしょうか？」

「商店街は火曜日が定休になっておりますが今度の火曜は生憎と、家族で万国博へ参りますので……。何しろ、もうあと五日間しか会期がございませんからね。その次の火曜日ならいいんですが、ひょっとすると家内の生理時期に当たるかも知れませんので、無理かも知れません。困りました」

電話口に、彼自身の昂奮の口調がまざまざ感じられる。思いがけぬ私という人間の出現で、二人きりの夫婦プレイに第三者の介入する事態となって、三浦敬一氏は驚きあわて、それでいて急に身近になった奇クとの距離に期待と微かな不安が交錯して、自分でも何を喋っているのか分からぬうろたえぶりが、ありありと感じられた。

「じゃあ、貴方の定休日はこしばらくはダメということですね。定休日でないといけないのでしょうか」

「いえ、いつでもいいのですよ。店を早いめに閉じて出掛けてもよろしいし、何なら店員

に数時間、留守番をさせても構いません。そうですね、定休日でなくともいいんですね。

子供達は親がみてくれますから、どうにでもなります。定休日なら一日中、朝から夜までゆっくり出来ますから、つい、それにこだわりました。遠いですが、こちらまでお越し下さいますか？」

「お差支えなかったら伺います」

「公害都市で空気の悪いところですが」

「いずこも同じ公害です。でもお近くに湯の山温泉などあって、プレイに手頃でしょう」

「かえって近くにあると、余り行かないものです。国道沿いのモーターを利用したりするんです」

「奥さん、御承知ですね」

「私のそばで今、耳をすませて、辻村さんの声をきいておりますよ」

「よかったら、善は急げで、それじゃ明後日にでも車で走ります」

「四日市の市街に入りましたら、最寄りのところからお電話を下さい。私も車がありますから、すぐお迎えに参ります」

念の為、住所と電話番号をきいて電話をきる。カメラ・ハントも、もうそろそろピリオドをうつつもりでいるのに、こうして、新し

い同好者の出現を知ると、忽ちにして前言を
 繰えし、ハント根性丸出しに探究したくなる
 ところをみると、どうやら持って生まれたこ
 の習性、雀百までやめられぬものらしい。

× × ×

九月の声をきいても残暑は厳しい。連日、
 激しい夕立の伴う炎暑がつづいたが、約束の
 九月四日、からりと空は晴れ渡って、暑さの
 中にも、ふと秋の気配が漂っていた。

西名阪、東名阪道路の開通で、四日市まで
 は快適な山間の舗装道路を一気に飛ばせる。
 なまじっか市内をうろうろするより、気も使
 わず、スピードも適当に上昇出来た。

四日市の市内へ入り、名四道路につながる
 中心街を一寸外れたところで車を止め、煙草
 店の赤電話を借りて彼に連絡する。三浦敬一
 氏が店舗を張る商店街は、ここから歩いても
 数分足らずのところであった。

電話をかけ終わって車内に入り、煙草をく
 ゆらせていると、待つ間もなく、三浦氏がか
 けつけて、車窓ごしに会釈した。

助手席へ乗り込んだ彼の指示で徐行しながら
 駐車禁止外の小道に車を入れ、最寄りの喫
 茶店へ入る。時計をみると未だ十一時半であ
 る。予想以上にスムーズに到着したらしい。

改めて私達は初対面の挨拶をした。見掛けた
 処、三十才を少し過ぎたばかり、物腰の柔ら
 かい、青年の面影を偲ばせた好男子で、電話
 では、あれほど独りでよく喋ったのに、今、
 面と向かうと、もじもじして、一向に口を切
 りそうにもなく、私からの発言を待っている
 ようであった。クリームソーダーでのどを潤
 して、私はおもむろに問いかける。

「早速、図々しくお呼び掛けして、御迷惑じ
 やなかったでしょうか」

「いえ、とんでもない、私の方こそ。始めて
 投稿したような駆出しの私に、辻村さんのよ
 うなベテランの方から御連絡をいただき、ま
 るで夢かとはかり、家内と二人で感激してい
 るのです。今迄沢山の夫婦プレイの方がいら
 っしゃるのに、どうして又私などに仰有って
 いただけたのかと不思議なくらいです」

「三浦さんのあのフォートの素晴らしさに惹か
 れたのですよ。到底、私などの及ぶところじ
 ゃありません。それと共に、お近くにおられ
 たのも都合よかったのです」

「フォートは下手の横好きで、高等学校当時か
 らやっておりますが、あの緊縛フォートは、奇
 クのグラビヤや、分譲フォートをその真似た
 だけで、私の独創は何一つありませんよ。縛

るのが好きなくせに緊縛は苦手で、もう一つ
 うまくゆかないのです。家内を御自由に縛っ
 ていただいて、とっくりと拝見させていただ
 きたくて、今日の日を凄く愉しみにしている
 のです。私が一緒では御邪魔でしょうか？」

「勿論構いませんとも。奥さんとは初対面だ
 し、その方が私も気がラクです。むしろ最初
 はプレイの雰囲気にも馴れるため、三浦さん
 の手で始めていただきたいくらいですよ」

「私なんか、とんでもない。今もこうして辻
 村さんと向かい合っているだけでアガってい
 るんです。家内が私以外の男性に縛られた時
 どの様な差恥を示すか、どんな反応を起こす
 かを、じっとこの眼で、確かめてみたいので
 す。どうぞ私に遠慮なさらず、一対一でプレ
 イなさっているように、妻を自由自在に虐め
 て下さい。辻村さんが妻の体をどの様に扱わ
 れても、決して口出ししませんから……」

「そう仰有られても旦那さんがそばに居るの
 を意識しては、事実上そうは行きませんよ。

でもその様に仰有っていただくと、私もリラ
 ックスしてプレイ出来ると思えますが」
 「あのう、こんなことお聞きして失礼ですが
 プレイでいつもお使いになる、バイブレータ
 ーなどお持ちになられたのですか——」

「ええ、一応、まあ……」

「是非、使ってやって下さい。家内はどういうものか、私のプレイに対しても余り反応を示さないのです。女のたしなみというか、慎重深いというのでしょうか、精一杯、自分を懸命に殺してアクメの状態を示さないのが、私にとって、も一つ物足りないのです。駆出しで、未だパイプを使ったことがないので、若し反応がある様なら、今度仕入れに大阪へ出た時、買求めるつもりなんですよ」

「夫婦二人切りのプレイでも、慎重深く、懸命にこらえておられる様なら、私という第三者が介入すると、尚更ダメでしょう。まあ日頃の式でやってみますがね」

「是非お願いします。本来ならば、家内を辻村さんにお任せして、私は遠慮すべきなのですが、私の今の心の段階では、どうも家内だけを独りプレイさせる気持にはならないのです。嘸かしお目ざわりと思いますが、家内も一人だけでは心細いと申しますし……」

三浦敬一は、しきりにハンカチで顔を拭い乍ら、自分の立場を説明するのに大童であった。それは最愛の妻を、他人の私の手に委ねる夫として、当然の危惧であった。

「三浦さんも、一緒にフォトを撮ればいいじ



やないですか」

「えッ、構いませんか、撮っても——」

「そんなに御遠慮なさることの方が可笑しいですよ。もっとリラックスムードで、のびのびとやりましょうよ。三浦さん自身が、その様に几帳面な性格だから、奥様もプレイの時存分にリラックスできないのでしょうか」

「ええ、よくいわれるんです。お前は堅苦しいって、組合の連中なんかに——。もって

生まれた性分なんでしょうね」

「それが貴男の手記に掲載されたフォトにもよく出ていますよ。グラビヤや分譲フォトとそれこそ寸分違わぬように縛って、一つの型に嵌っていますからね。とてもお上手でも、貴男の個性や独創力に乏しいように思えるのですよ。それにしても、私や編集部で使う縄とよく似ていますね」

「ハイ、思い切って奇クに投稿したいと考えつきましてから大阪へ材料の仕入れに出掛けました際、あちこち歩き廻って探し求めたのです。余り縛れないくせに、縄だけは、それを集めるのが、まるで趣味のように沢山ございます。硬軟とりどり、それこそ太いのや細いのと、数十本近く鞆にぎっしりつまっておりますが、若しおよろしかったら、私のをお使い下さい」

「縄に憑かれて手当り次第、欲しくなる心はよく解りますよ。フェチシズムの人が、パンティや下着を集めて、その女性を脳裡に浮かべる如く、縄をみているだけで、緊縛のあれこれを想像するものです。私にしても、数十年前、緊縛に手をそめ初めた頃、店頭に並べたある手頃の縄をみると、無精にほしくなったのを覚えています」

「その通りなんです。買求めて、早速試してみるのが、硬さに家内は悲鳴をあげ、結局は古びて柔軟になった縄を使用することになるんですよ」

歳月と共に、私にもそうして集めた数十条の縄が今、あの人、この人に時偶、使用するうち、いつしか使い馴れて柔軟になり、纏れた俵、段ボールのケースに束になって眠っていた。三浦氏も亦、緊縛愛好者が辿る一つの過程を、無意識のうちに踏襲しているようであった。

「奥様のお名前を、おききしていませんが？」

「ああ申しおくれました。純子と申します。二十七才になる二人の子供の母親ですが、私が常々、体の手入れを喧しく申しますので、夫の口から申し上げるのもヘンですが、余り



体の線は崩れておらないつもりです」
「新婚勿々から、プレイをなさったそうですね」

「ハイ、独身時代から、そうした欲求をもっておったのですが、残念乍ら、その機会には恵まれませんでした。一つには、先程辻村さんが仰有いましたような、ソッな性格が禍いして、私に女性が近寄らなかつたのかも知れません。私達は見合いによって結ばれましたが、半年の交際期間のうちに、お互いに恋人同志のような感情を抱くことが出来ました。

伊豆、伊東への新婚旅行中には、流石にためられました。心はいつも妻を縛った姿におき換えていたのです。旅行から帰って十日目、やっと私の思いは果せたのです」

「無かし奥様は驚かれたことでしょう」

「家内には、そうした予備知識がなかつただ

けに、私という人間がHの塊りみたいに思えたのですが、緊縛と夫婦生活が微妙なコントラストを描いて、そうした時に私が非常にエキサイトすることを知ってからは、妙なも

ので、協力的に受入れてくれるようになりました。家内の体は、はつきり燃えているのです。そのくせ、慎しみ深さというか、はしたなさというか、そうした殻を破ることが出来ず、絶えず辺りや何かに気を配って、赤裸々に激しく燃え立たせないのです。子供や両親への気兼ねもあるのでしょうか、そうした悲しい習性は、二人きりでモーターなどへいっても矢張り芯から積極的になれきれないでいるのです。堅苦しい高級官吏の家庭に育った娘時代の、周囲の環境もあるのかも知れないのですが……」

「でも告白では、思い切りハッスル出来るなんて書いてあったじゃありませんか」

「緊縛のプレイは、周囲の気兼ねもなく、存分にハッスル出来るのですが、やはりここぞという時に、何か物足りないのです。ハントの読み過ぎで、誰しもがそうであると思う。

私の独りよがりかも知れませんがね」

「女性によって、完全に燃焼しても、人、それぞれの特徴があつて、それが不完全燃焼とはいえませんが。燃えたとすべてを忘却して動物的になる川路むら子さんや滑川幾代さんのような場合もあるし、ひそと声をしのばせて啜り泣く梨花悠紀子さんや渡部好美さんの

様な人もいます。今、名を挙げた人はすべて人妻ですが、その燃焼度は、見た眼には違っても、悦楽のバロメーターは懼らくは余り変わりない筈なのです。女性によって、悦楽のツボというか、ポイントというか、そうした個所も、皆違ってきます。或る個所を刺激した場合、Aには強烈な愉悦となっても、Bにはさして感ぜず、時によっては搔痒感や、苦痛に感じる時もあるのです。純子奥さんの、悦楽のポイントを探求することも、よりエキサイトさせようとする、肝心な一つの要素じゃないでしょうかね」

喫茶店でこんな論議をするつもりもなかったが、しきりにうなずき感嘆する三浦氏の態度に釣こまれて、場所柄もわきまえず、私はい流の性愛論を一席ぶっていた。気がつく、彼がいつの間に注文したのか、軽食のサンドイッチが運ばれてきてあった。

「まあプレイして、当たってみましょうや。お役に立つようなアドバイスを、させて貰いますよ」

「それを聞いて安心しました。これから自宅の方へ家内を呼びに行つて参ります。近いですから——」

「何なら車で、お近くまでゆきましょうか」

「そう願えたら有難いです」

彼は立上つて、店へ留守中の手配をするため電話していたが、やがて私を促すと表へ出た。つけのきく喫茶店らしい。

彼の言う俚に走つて、表通りから少しはずれたところに車を停める。小走りに走つて、数メートル先を曲つて消えると、既に身支度を整えて待機していたらしい純子夫人を伴つて数分後に現われた。右手に、かなり大きめの旅行鞆を提げている。

三浦氏は助手席にのり込み、純子さんはチラッと羞恥のかげらいを覗かせて、私に会釈すると、そそくさと後部のシートに坐った。

一瞥したところ、フォトからは予想もなかった大柄のグラマー美人である。

涼やかな花柄のミニのワンピースを着て、白いハンドバッグを提げたスラリとした容姿からは、とても二児の母とは思像も出来ぬ、若やいだ装いである。どことなしに育ちの良さが、彼女の物腰からにじみ出ていた。

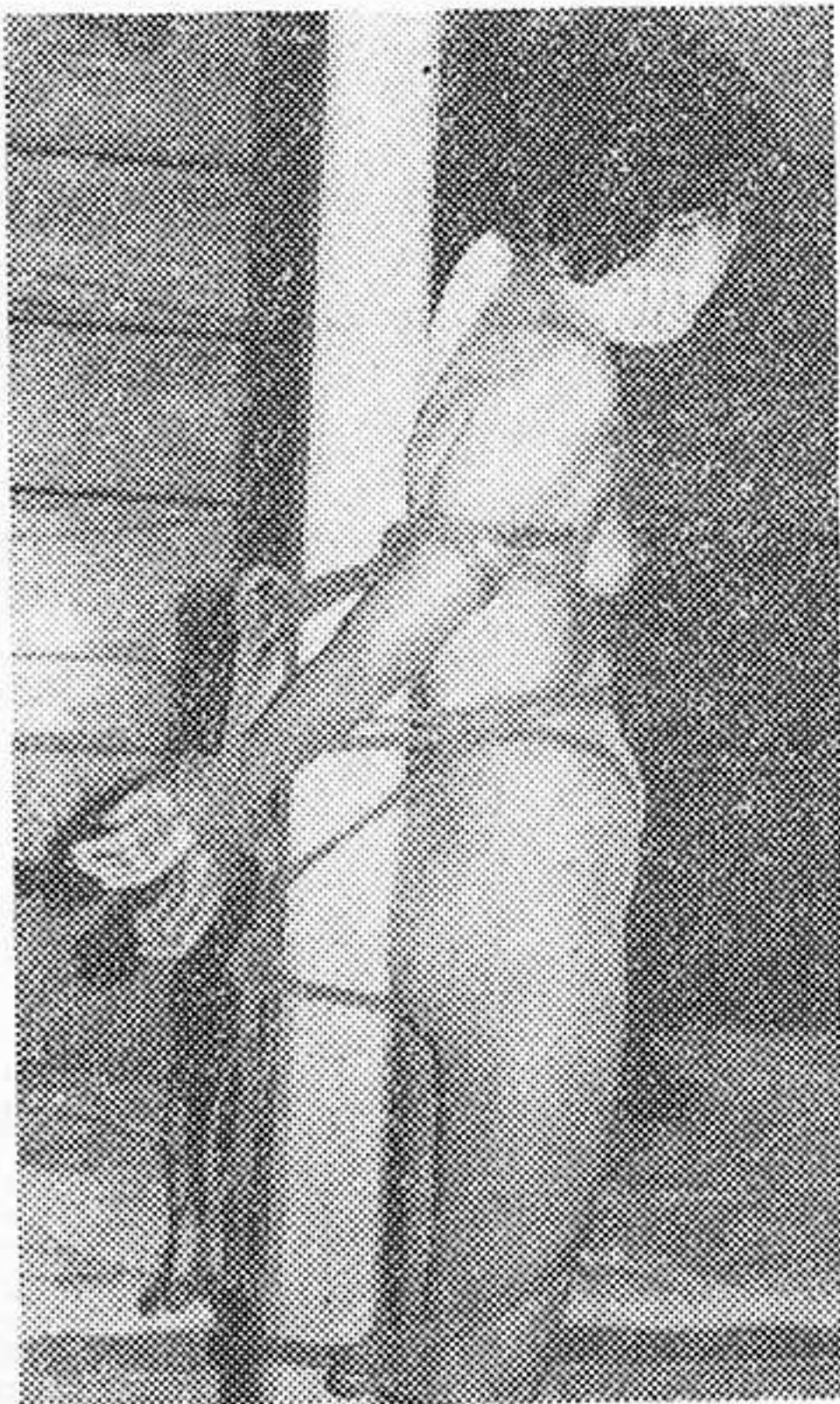
「名四道路沿いに、モーターもかなりありますが、三人ですから都合いいのじゃありませんか？」

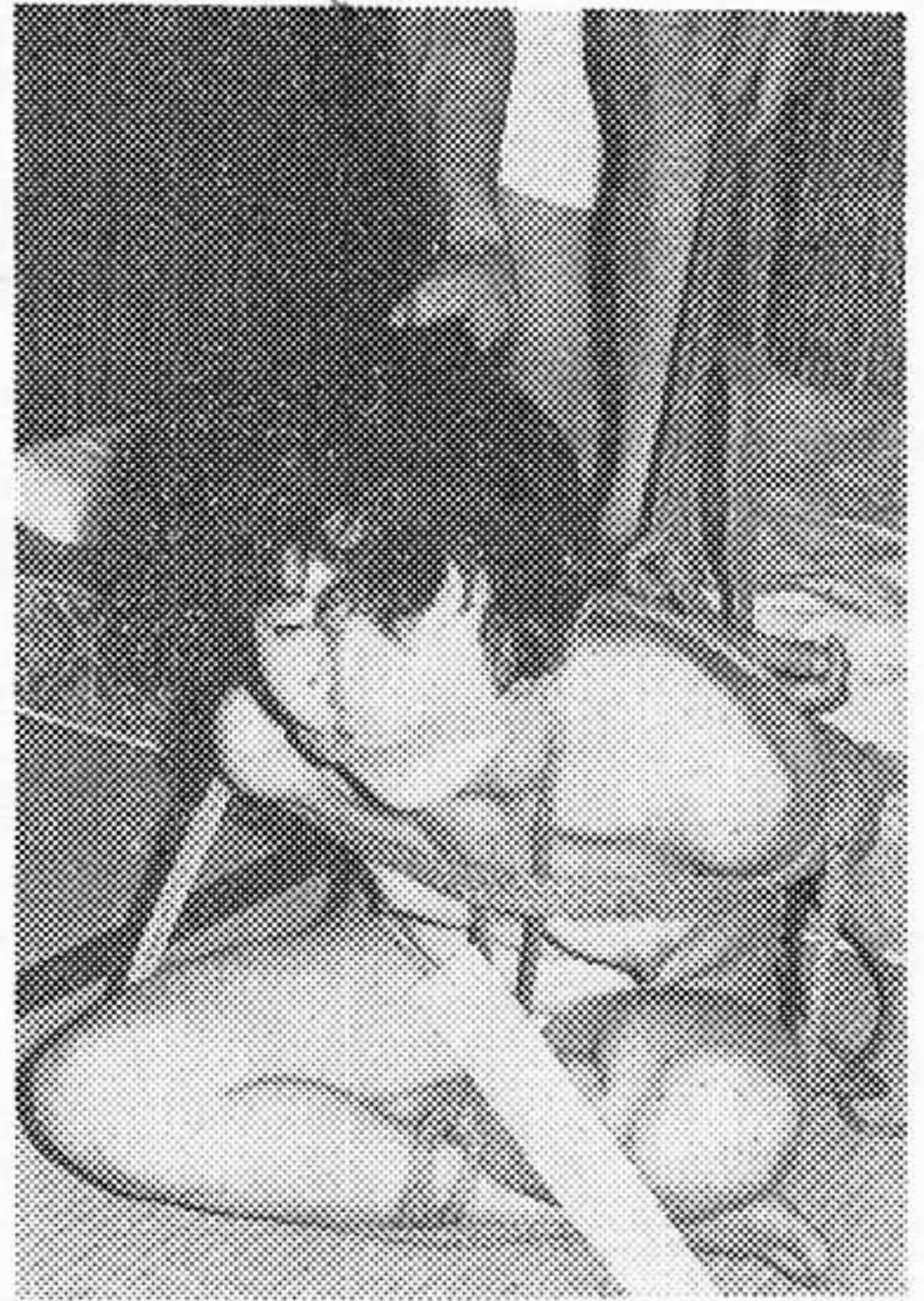
「でも折角ここまで走つて来たのですから、湯の山温泉で、ゆっくり温泉にでもつかつたあと食事して、夕方までのひとときをプレイしたら如何です」

「そりゃあ勿論、有難いですが、かなり高くなりますよ」

「いいじゃありませんか、その方は私に任せて下さいよ」

三浦氏の指示通り、車をターンさせ、国道一号線の信号を横断して直行すると、湯の山へと向かった。距離にして大体、一三・四キ





口程度らしい。

「湯の山には思い出があるんですよ。去年の夏の終わりでしたが、家内と二人、御在所岳へロープウェイでのぼり、人気のない山の奥へ入って、縛ったことがあるんですよ」

「裸で？」

「万一、人が来た時、困りますので、パンティとブラジャーだけはつけていましたが、撮る時にパンティをずり下げて、殆ど裸に近いポーズです」

「レジャーブームで、こう人出が多くなっては、野外の緊縛も気を使って、仲々大変だったでしょう」

「数枚撮って、縄を解いていた時、四、五人の若い娘のグループが、いきなり現われてドギマギしました。まるで私が暴行魔か痴漢に見えたのでしよう。びっくりしたのか、あわてて小道へ立ち去りましたが、こうした時、女の方が反って大胆なんですね。家内は案外、平然としているんです」

「ドキッとするのは男の方です。海岸の松の木にも縛ったとか書いておられましたね」

「夏の夜で蚊が多くて弱りました。あれは津市から、少し離れた海岸べりの松林ですが、海水浴場もシーズンから外れると、夜になると殆ど人が通りません」

「結構いろいろ、なさっている様ですね」

「その点、家内が協力的ですから、喜んでいられるですよ。その代わり、近頃、家では全然やれなくなりましたからね。子供や両親と同じにしていると、どうしても気が散って……」

純子夫人は終始無言で、バックミラーから覗くと、ややうつむき加減に、キッチンと両手

を膝の上で組んで、何ごとか物思いに耽っているようであった。夫以外の男性に縛られる不安と危惧に、心を強ばらせているのかも知れない。

ウィークデーだからと、タカをくくって、予約もせずに突っ走り、近鉄湯の山線の終着駅前の、温泉旅館の案内所へ訊ねに入る。昼食、休憩となると、さして上客でもないが、夏場の終わったあとの閑散期で、どこでもお好み次第であった。

値段の交渉を終わって、駅前の観光案内地図を頭に入れて湯の街を昇ってゆく。御在所岳が蒼く前方に聳えている。迂余曲折する狭い道を昇って涙橋を渡ると、目指す温泉ホテルU館は、もう間近である。

古え、沙門浄薫が、薬師如来の霊夢によって発見したというこの菰野のいで湯は、伝教大師も来浴し、大石良雄や俳人芭蕉も湯あみしたという曰くつきであるが、浴用に加熱してあって、私にはも一つ名泉とも思えなかった。しかしプレイの地としては閑静で、どんなより濁りきった四日市公害都市からくらべると、雲泥の差であった。

六階建のU館はかなりデラックスな方で、テレビ番組のロケ隊がここを訪れたらしく、

笹みどりが、大広間の舞台で歌っている写真などが大きく掲げられてある。

食事はなるべく、夕食に近い時間の方がいいというホテルの女中さんの言葉で、四時過にもってくるように連絡し、その間に入浴とプレイをすることにきめた。

彼は提げて入った鞆を開くと、ぞろぞろと縄束をとり出す。如才なくカメラもチャンと準備してきていた。

「辻村さん、どうぞ始めて下さい」

「おや、もういきなり。ゆっくりお湯につかってからでいいじゃありませんか」

「お会いする前に、躰をきよめさせて来ましたから、あとでいいんです。早く脱がせて、縛ってやらないと、いつまでも恥かしがっていけません。どうぞ辻村さん、家内に脱げと命令してやって下さい」

意馬心猿の三浦敬一は、寸時も惜しむように、部屋をウロウロ歩き廻っていた。

「いいんですか」

「純子には因果を含めてあります。辻村さんの命令には絶対服従するようにいつけました。いやがったり、ぐずぐずしていたら、しりを引っぱたいてやって下さい。私に遠慮や気兼ねはいりませんから、思う存分にやって

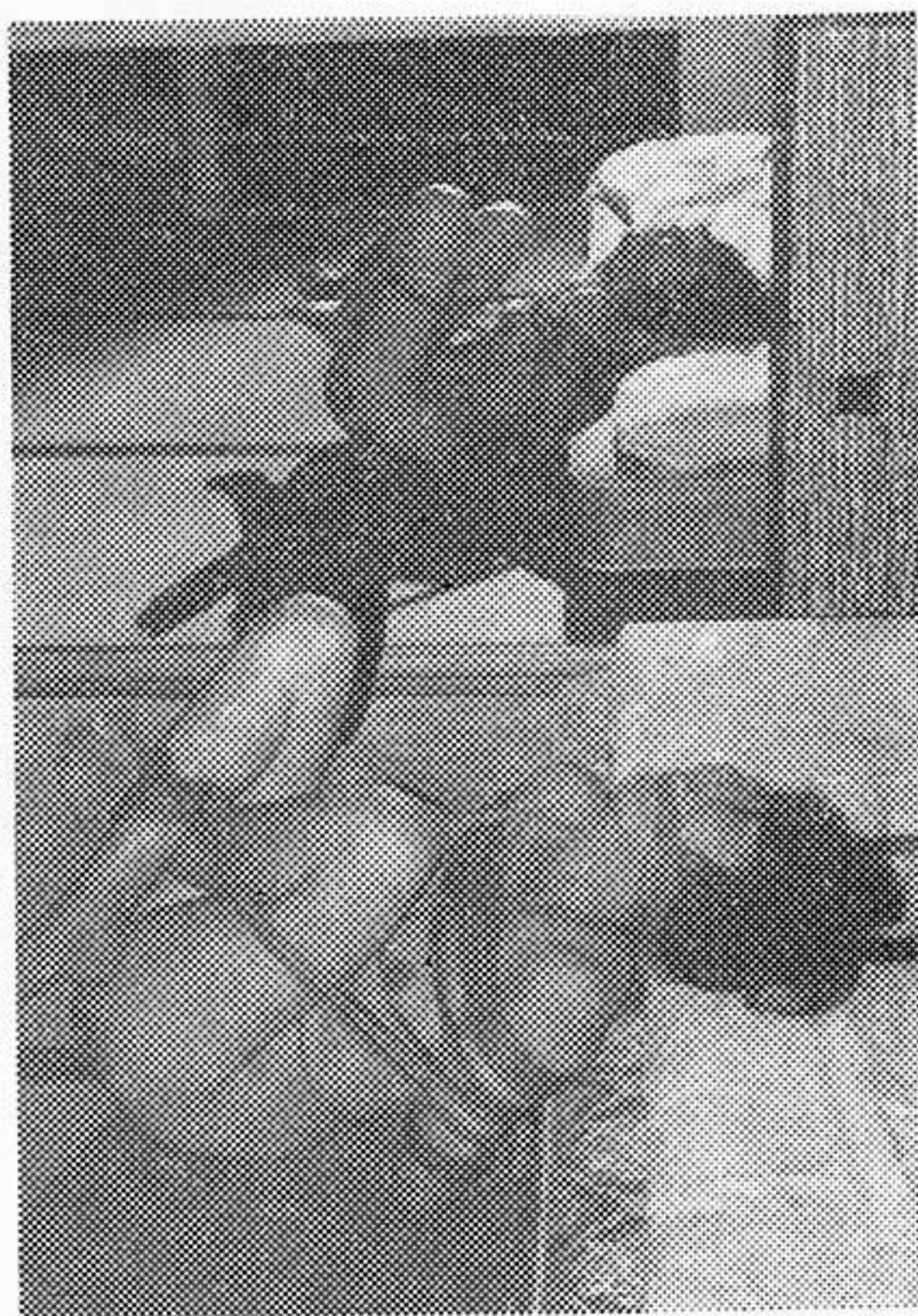
いただいて、結構なんです」

といわれても、到着勿々の落着かぬ雰囲気では何となく気分が乗らなかった。懼らく彼は、車中も、ずっとプレイのことのみを思いつづけていたに違いない。

クーラーが入ったばかりで、未だかなり部屋は余熱が残っていた。暑いのでズボンとスポーツウエアを脱ぎ、私はやや困惑気味で純子夫人に近づく。

「御主人が仰有ってますので始めますよ。さあ、お立ちなさい」

耳朶を赧らめて、私をチラッと見上げると気愧かしげに忽ち眼を伏せた夫人は、それでも潔ぎよく肯くと、静かに立上った。背後に彼の息を嚙む気魄を鋭く感じて、私の神経は急速にSに傾斜していった。これみよがしに思いきり苛めたならば、果して、彼はどの様な反応を起こすだろうか——その一事が私の嗜虐の血を更にあほり立てていった。



極度に神経を昂ぶらせている彼を意識して私は純子夫人に冷たく命令する。

「裸になりなさい——」

ピクリと肩を顫わせ、私の背後にチラリと怯えた視線をやったが、怨ずるように眼を伏せて、のろのろと服を脱ぎ始める。

「愚図々々しないで、早く——」

両手が慌てて、うろたえ乍ら素早くなる。シュミーズを外し、ブラジャーと薄い桃色のパンティだけの姿になって、純子夫人は立ち辣んだ。

不躰けな私の手が、非情に彼女の最後のと

りでを雀り取る。アッと小さな悲鳴をあげて夫人は前踢みになる。

チラリと振り返ると、顔を強ばらせた夫が黙々と一条の硬いシャコシャコした麻縄を差出した。大東でかなり長そうである。めくばせすると、暗黙のうちに私は彼女の手をとって裸身を柱に添わせる。軽い抵抗を腕に感じたが、おとなしく夫人は柱を背に直立した。両手を柱の背後で合わせて、犇々と素早い緊縛が始まり、斟酌のない硬い麻縄が、彼女の柔肌を強烈に締め上げていった。

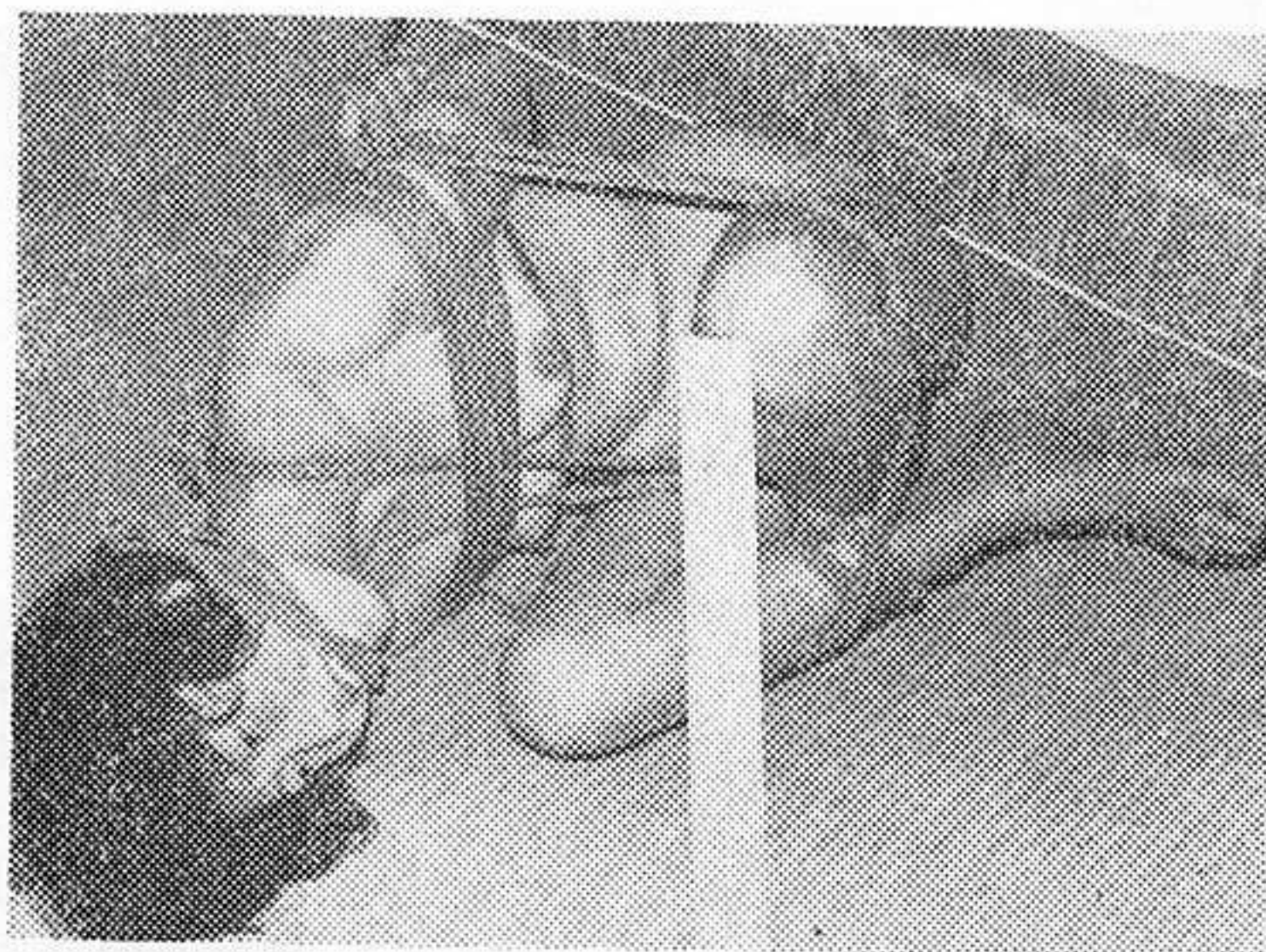
「どこか痛い？」

ときく私に、夫人は無言で首を振る。正対して私はゆっくりと眼を落として行く。羞恥を全身に湛えて、夫人は固く眼を瞑ってうなだれていた。

「流石に早いんですね、全く驚きました。どうだ、純子。辻村さんに縛られた気持は？」
興奮をまざまざと露呈して、夫は純子夫人の髪を掴み、緊縛の感想を迫った。

「……………」

口籠って応えず、夫人は羞かし気に言い濁んでいる。第一発の閃光がそれに走る。嗜虐の官能をもて余して、三浦敬一は掴んだ髪をゆさぶる。



「どうなんだ、気持は？ いわないのか」

「でも——う」

「ボクと辻村さんと、どちらがいい？」

夫人は皓い歯をわななかせて、返事のしようもなく、恨めしげに逡巡していた。訊ねる方が無理な質問と知りつつ、それが一つの言葉の責めとして、じわじわと夫人の心を圧迫していった。

「辻村さんか？」
微かにうなずく。

「ボクの縛り方はダメだというのだな」

あわてて、かぶりを振る。

「分からないんです、そんなこと」

かぼそい声で、やっと呟くようにいう。

「ベテランの辻村さんに、これから苛めてもらえるのだぞ。嬉しいだろう？」

「ハイ」

やっと満足したように、彼は掴んでいた髪の毛を離した。

「辻村さん、これを口に押し込んで手拭で猿轡をしてやって下さい」

彼はかなり薄汚れたハンカチをとり出すとくるくると丸めて差出した。軽い異臭が漂い黄濁の汚点が、しみついていった。

「セックスのあとの処理用のハンカチなんです。わざと洗わないで、とってあるのです」

汚辱を与える一つの手段として、夫婦間によく使われるプレイである。受取って、云われる俚に、堅く喰い縛った歯をこじあげ、ぐいぐい押し込むと、その上から豆絞りの手拭で堅く猿轡をはめる。

顔をしかめ、慄然として、夫人は私の行為を甘受していた。



三浦敬一はうな
ずいて、

「恰度、十日目で
すが、案外伸びる
のは早いものです
ね」

と、さも当然の
ようにいうのであ
った。

「度々？」

「ええ、まあ気が

向けば——過密現象は怪我のもとですから。
それにカット面もうんと少なくて済むことで
すし、近頃は伸びると、家内の方から要求す
るくらいです」

「まあ、あなた、そんなこと……」

夫人が恥かし気に口を挟んだ。確かにそれ
はフォトを撮る面で有難かった。側面から撮
っても、夾雑物は覗かず都合よかった。

「じゃあ、私も少し撮らせて下さい。構いま
せんか？」

と、夫はカメラをとり上げる。

「ああ、いいですとも。どうぞ」

良い場所を引退ると、彼は前後左右、或い
は寝そべった低姿勢より、しきりに妻の緊縛

に光を放って、シャッターをきった。

「済みませんが、私のカメラで二、三枚とっ
ていただけませんか？」

うなずいて、やつこらさと立ち上ると、彼
のユニカを受取る。三浦敬一は手早く猿轡を
外し、唾液でべつついたハンカチをとり出す
と、ヒタと緊縛の裸身を正面から抱きしめ、
ついで顔をだきかかえるようにして、貪るよ
うに妻の唇を吸い始めた。私の面前を憚って
盪躑し、身悶えする夫人の、唇の端から、や
がて甘い吐息が微かに洩れ、身悶えは、官能
の疼きに転換していった。

「ああ、もうやめて、お願い。羞かしいわ、
やめてえ」

という声もきれぎれに掻き消されて、既に
欲望の虜になった三浦敬一の触手は、私の存
在を忘れたかのように、いや、むしろとりよ
うによっては、私の存在を反対に意識して、
夫人を殊更に昂揚させようとしていたのかも
知れない。私はその刹那々々の動きを、忠実
に彼のカメラに納めていた。

燃え上る官能の疼きを、ともすれば自制し
ようとする妻に、夫は第三者の介在で、新鮮
な興奮に酔い痴れ、激しい意欲を燃やして挑
戦しているかのようにあった。

「三浦さん、ついでに撮って下さい。私のカ
メラで」

依頼するとうなずき、私のカメラをとりあ
げると、気前よくパッパッと閃光を走らせ、
忽ち数枚とったシャッター音を背で感じる。

一対一なら当然セルフタイマーにすべきとこ
ろを、助手的存在の彼がいるので便利であっ
た。先程から気付いていたことであるが、こ
の夫婦も又、例外ではなく、剃毛儀式を挙行
した歴然たる状況に微笑を禁じ得なかった。
まるで近頃の夫婦プレイの人々が、そうしな
くてはならぬように得度することが、一種の
流行のようであった。

「やったんですね？」

いつしか純子夫人は羞恥のヴェールをかなぐり捨ててゆく。吐く息は次第に荒く、慥かに愉悦が漂い始め、うるむ瞳には、媚が流れていた。

夫はやがて我に返ると、私に一瞥を投げ、うなずくと、縄を解いていった。噴き出した汗が頬を伝っている。一風呂さっと浴びたあと、引続きすぐさまプレイにとりかかる事にきめる。

私達は展望のきく大浴場にプレイとドライブの汗を流すべく、ゆっくりとひたる。楕円形の浴槽の中心に太い支柱が一本、どっかりと沈んでいる。

純子夫人は最初大分ためらっていたが、夫にうながされて広い大浴場に入って来た。早着きの客は、私達三人だけらしく、広いホテルは、深閑としていて、この大浴場を訪れる侵入者もない。

私と三浦氏からずっと離れ、広い浴槽の対角線の彼方に、純子夫人は羞恥をかげらせて豊かな輝くような裸身をそっと沈めていた。白い肌に薄桃色の縄目の跡が印象的である。「こっちへおいでよ。どうせ辻村さんの前で裸になって、すべてを曝したのだから、恥かしかるこゝろ、ないじゃないか」

三浦氏は浴場に声をワーンと反響させながら、大声で呼びかけて手招きした。

ためらっていたが、夫人はやがて意を決したかのように、湯をかきわけて、裸身をゆらゆらと、ゆらめかせながら近づいてくる。

爛熟した白バラ一輪、湯玉を弾いて、縄目を烙印された白い肌が、官能をくすぐるように羞恥に揺れている。

「随分、均整のとれた綺麗なお体ですね」
讃嘆して呟くと、三浦氏は妻を誇らしげに見て、

「お蔭様で——。あれで相当、気を使っているんですよ、自分なりに」

「そうでしょう。とても子供さんを産んだ体とは思えませんよ」

「私以外の男性に、妻の裸をおみせするのは始めてですが、眼の肥えられた辻村さんに、そう仰有っていただければ本望です」

三浦敬一は、さも嬉しげに眼尻を細めて、露骨に、純子夫人の裸身に眼を向けた。

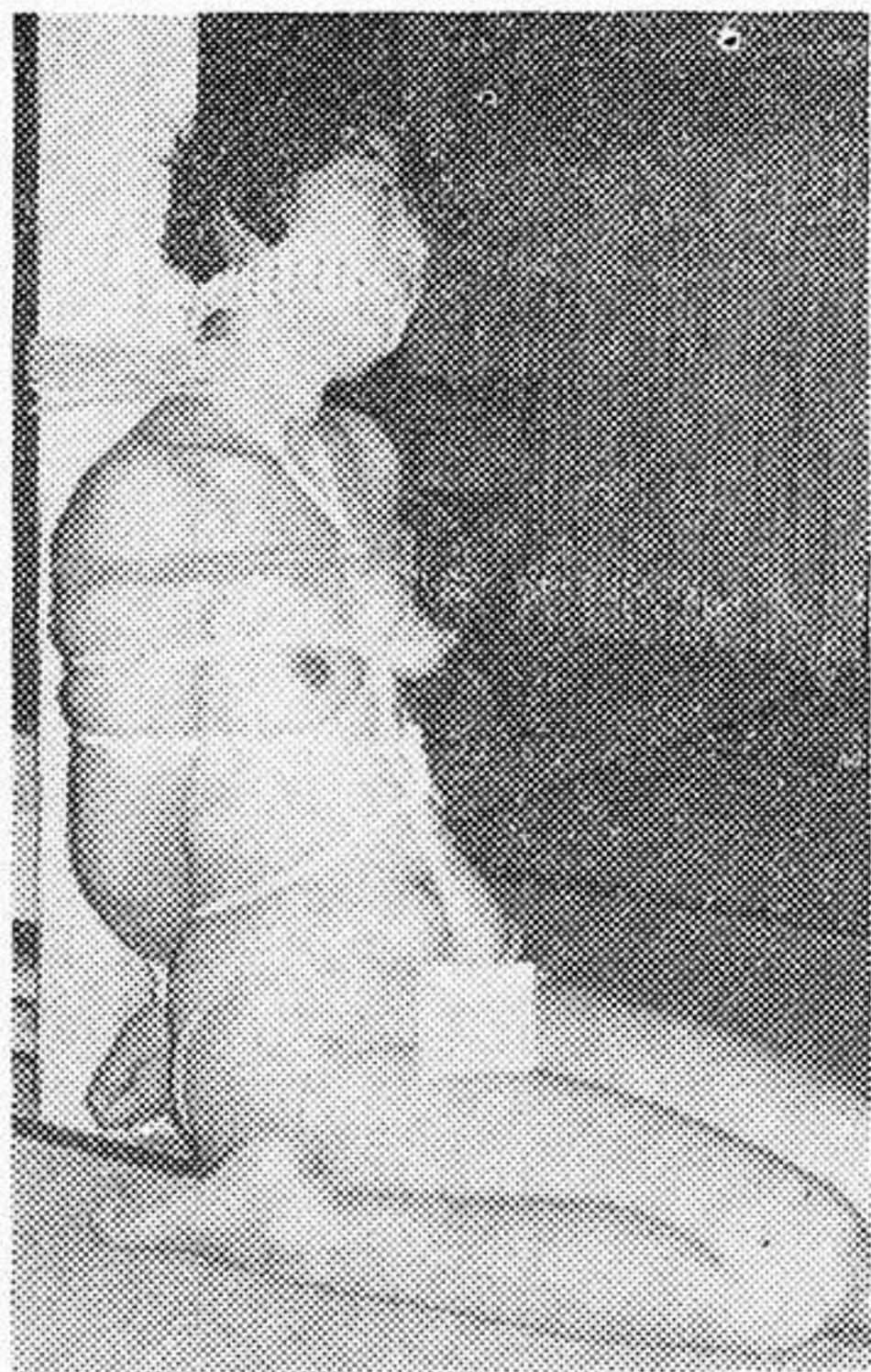
後向きに、さっと湯から上った夫人の、く



びれた胴、豊かに盛り上った臀部、しなやかな脚線が、私の眼を裸身に釘付けにした。あの豊満なぬめつく肌を、これから思う存分、犇々と緊縛出来るのかと思うと、こみ上げる歓びに、思わずグビリと私のノドはなった。その刹那、この貞淑なる純子夫人と、一対一でプレイ出来たらという、望外の不逞の欲望が、ムラムラと頭を拾げてきたのである。

× × ×

傍観者でいる筈の三浦敬一が、プレイがリラックスにエキサイトすると共に、もう矢も楯も堪まらず自からもプレイヤーの一員として加わりたい感情をもつことは、夫婦プレイなら、当然ありうる帰結であった。私の手前



自由に振舞うよう心で納得させても、信頼する最愛の妻が、わが眼前であのように冒瀆されては、夫たるもの徒らに手を措ねて傍観する気持になれないのは当然のことであった。

大浴場からそそくさと立去った二人に、わざと少しおくれであがり、ロビーで少し時間をつぶして、部屋に戻ると、てっきり私の予想通り、夫はあの硬い強靱な麻縄で、ぎりぎりと海老責めに縛り上げているさいちゅうであつた。私をみとめた彼は、あわてて縛る手をとめて、

「余計なことを始めて済みません。お帰りがおそいので、時間が勿体ないと思って、海老責めを始めてみたのですが、いけなかったで

しょうか」

「とんでもない。大助かりですよ。是非つけて下さい」

「うまくゆきませんが、じゃあお言葉に甘えて——」

ハッスルした彼は、相当の力をこめて、硬い麻縄で、容赦もなく締め上げてゆく。私なら、夫の眼前で到底、縛り得ない強烈さであつた。微かに苦呻を洩らしながらも、夫人はそのきつい縄目を耐えていた。

縄の猿轡を皓齒で噛みしめて、夫のなすが俚にされる夫人の被虐のポーズは、ハッと息をのむ切実な緊縛感に溢れていた。

縛り終わると、彼は愛妻の髪を俄破と掴み

片足を背に掛けて、こじ上げるように、ぐいぐいと引っ張る。あぐらに組んだ両足が宙にうき苦しげにググとのどを鳴らして妻はのけぞる。一幅の美しい夫婦の責めの絵図に、私のカメラはしきりに焦点を合わせて、カチカチとなりひびく。

思い切り強く引っ張られて、組んだ両足を高々と揚げた俚、女体は遂に背後に倒れ、敷かれ

たベッドの端を枕にして、無慙に転がった。

しめつけられた後手の縄が、肌に激しく喰いこむのか、縄の猿轡の奥から、苦悶の呻きが断続して洩れている。私は立上って、部屋の壁間の襖を開く。部屋一杯にうつる大きな鏡が現出して、二つの海老責めの女体が、妖しく苦悶にのたうっていた。

三浦敬一は私に近寄ると耳許で囁く。私はうなずいて、責め具袋から小型バイブを取り出して彼に手渡した。

「辻村さん、どうぞ」

流石に一寸行き過ぎを感じたのか、彼は私に押し返した。

「いいじゃありませんか、試しに貴方の手でやって御覧なさいよ」

「構いませんか」

「構いませんよ、あんたが今、そう仰有ったのでしょ。さあ、どうぞ」

「では手始めに……、すぐ交替しますから」彼は妻の足許へ体をよせると、このチャームな愛悦の器具をひねった。微かに響く振動音が愛妻の肌に近づく。

ビクンと豊かな臀部が雀躍りし、足指がケイレンして微かに慄え、苦悶の呻きに交錯して甘い悦楽の吐息が須臾にして洩れ始めた。

駭きに似た表情を泛かべた三浦敬一は、陶醉の浮き上った妻の顔に唇をよせ、

「おい、もっと声を立てろ。欲びの呻きを上げるんだ。声を大きく出さないと、いつまでも続けるぞ。辻村さんと入れ替り立ち替り責めてやるんだぞ。さあ、もっと……」

と顔をひきつらせて、叫ぶようにいう。心猿に駆り立てられた彼の眼中には、もはや私の存在はなかった。

モーターの振動音は、物懶く、浅く深く、きれぎれに私の耳朶をかすめる。純子夫人の慎しみ深さ、そのたしなみを、今こそ一挙に破壊すべく、三浦敬一は、息を弾ませて激しい攻撃を続けていた。今や私は完全なる傍観者であった。台風一過を待っていると、激しい呻きがおしつぶされたように流れて、尾を曳いて消えていった。

やや照れ臭げにバイブを握りしめた俣、彼は私を振り返る。

「御免なさい、すっかり我を忘れてしまっています——交替しましょうか」

「いいんですよ、私に気を使わなくても。大分、奥さん苦しそうですね」

「なあに、もう少し辛抱させます。何かなさいますか？」

「鞭打ちは、なさったことがあるんですか？」

「余りやったことはありませんが、少々だったら耐えると思います。どうぞ、叩いて欲ばせてやって下さい」

ぐったりと息も切なげに、縛られた胸を大きく弾ませる夫人を俯瞰し、三浦敬一は嗜虐の欲情に血走った眼を私に向けた。

比較的、柔らかそうな縄を、

持ち頃合に束にすると、私は女

体に近づく。×字に組んで縛られた両足が、ねじれてひきつり、私の眼に火照るような強い印象となって飛び込んできた。夫に羞恥のベールを剥ぎとられて、夢中で、羞かしい声を立てた純子夫人は、私の眼を恐れるかのよう

に、しっかりと両脛を閉じ合わせ、眉間にありありと苦悶の忍耐をきざんで転がっていた。麻縄は無慙に柔肌を容赦なく締めつけ、肌の色すらも変色していた。苦しいのだろう夫人は必死にこらえて、苦悶の吐息を殺しているが、圧縮された眼尻や眉間の刻みが、強烈な苦痛を物語っていた。足指に手を触れると、冷たい感触が伝播してくる。縄ムチを握

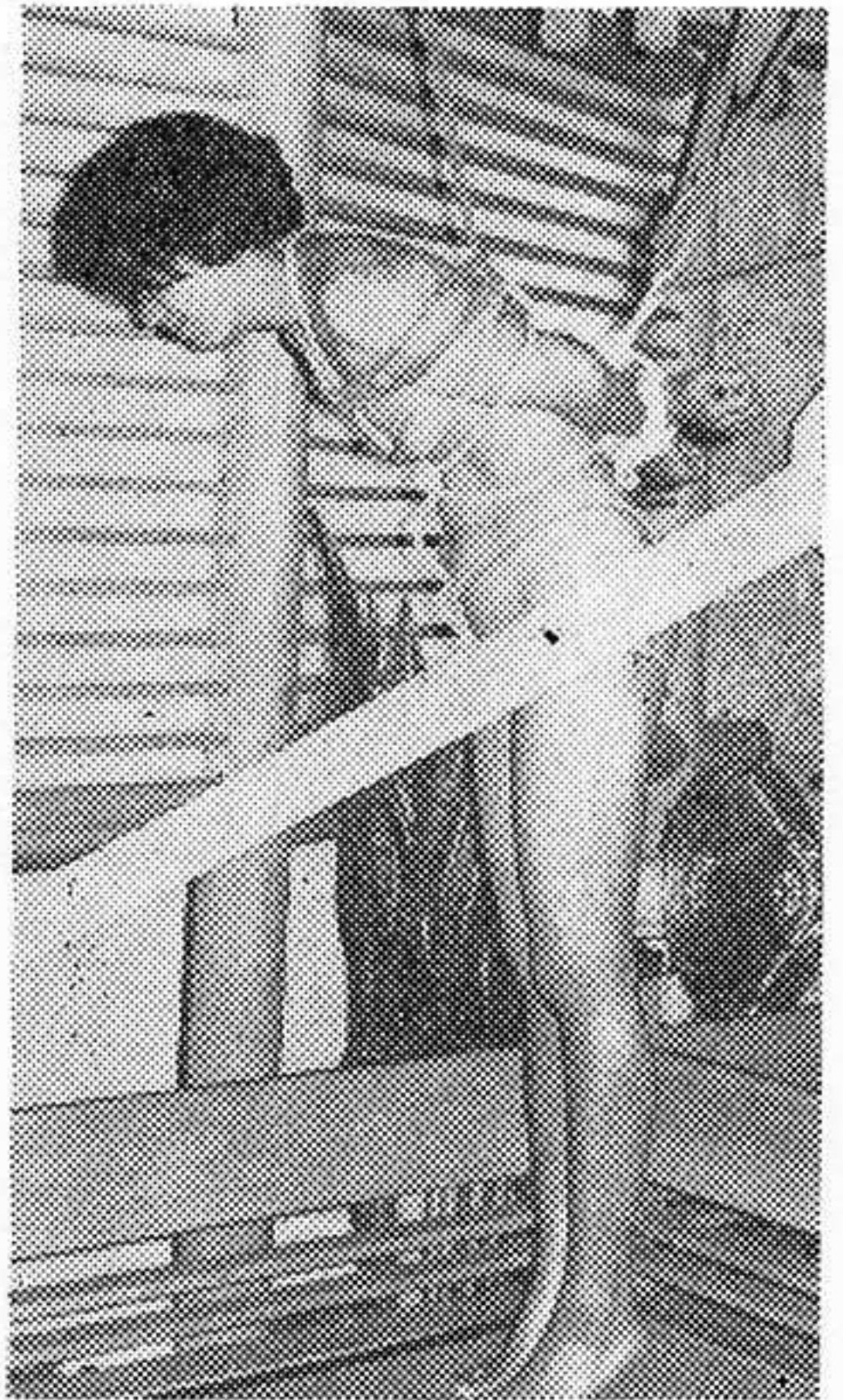


って、ピシリと剥き出しの臀部を打つと魂切る悲鳴がもれて、女体は重心を失ってドタリと横ざまに倒れる。倒れた背後に回り、憑かれた様に数度、縄ムチは空気を引裂いて、臀部に撥ね返った。

苦痛の限界に、いじらしくも夫人は挑戦して必死に耐えている姿を、夫は傍らから、いたわりの熱い眼で、じっとみつめていた。悪鬼のように鞭を振るう私を、三浦敬一はどのような思いで眺めていたことであろうか。

「あうッ、あ……な……た……あ、もう許してエ。く、くるしいわ」

それが限界なのか、白い顔がぐたっと力抜



けて落ち、失神したように声もなく静止した時、彼は愕然として飛びつき、震える手で、もどかしげに縄を解き始めた。私の心にサッと軽い恐怖が走った。

「すっかり感覚が麻痺した上、圧迫されて息苦しかったのです。少し海老責めが長すぎたようです」

無然とした顔付で、三浦敬一はしきりに妻の縄目の痕を撫でさすっていた。されるが俤に、純子夫人は長々と寝そべっていた。

「私の縄ムチがきつかったのですかね」

返事のない彼女に、彼は代わって、
「叩かれていたかった？」

ときく。

「ハイ、少しばかり……。でもそれは辛抱出来たのですけど、もう切なくて苦しくて。貴方とだけなら、とうの昔に音をあげていますわ。辻村さんがいらっしゃるから、出来るだけ辛抱したのですけど……」

それにも限界があったといいたかったのだろう。仰向けに寝そべった姿に、羞恥をおぼえて、そっと起き上ると下半身を浴衣でくるみ、ホッとした様に大きく息を吐いた。

「少し一服したら始めるよ。いいだろう」
詮方なげに、そっと妻はうなづく。エネルギーの大半を海老責めに費消したのか、彼女の体は物懶げであった。被虐の間隙に乱れに乱れた陶酔も疲労の一因をなしているのであろう。

谷山久美子のようなマゾヒスティクアニマルなら、いざしらず、夫の性癖に合わせて、努めて協力している程度の彼女にとって、今のプレイは確かに苛酷すぎた様であった。思

わず力をこめて鞭を振った私にしても、失神させた後味は、なんとなく興ざめの思いであった。夫の眼前では、なすべきではなかったと、淡い悔恨がフト胸をよぎる。默然としている私に視線を投げた彼は、白けかった空気を、再び紅に染めかえようと、己れを励まして、いさぎよく立ち上ると、

「さあ、辻村さんやりましょう。元気を出して——。どうぞいいように縛ってやって下さいな。純子、いいだろう」

と、手を添えて立ち上らせると、彼女の体を私に押しつけるように引張ってきた。

「いいんですか、縛っても」

「いいね、純子」と夫は妻を振りかえる。

「ハイ、どうぞ」

「よしっ、辻村さんに、縛って虐めて下さいといいなさい」

「ハイ、辻村さん。どうぞ縛って……虐めて下さい」

けなげで素直な純子夫人であった。その貞淑さに胸うたれる気持で、渡部好美夫人と、一脈相通ずるものを感じながら、私の心は再び徐々に燃え始めた。

首縄、股縄にして、数本の縄で、しっかりと夫人を縛り、部屋の片隅の、半坪たらずの

飾り庭に直立させる。植木の鉢をあしらって数枚とるが、縛られたポーズは固く、不慣れで、如何にもぎこちなかった。人妻が、こうした緊縛のポーズをうまくとれないのは当然で、そのぎこちなさが、尚更に純子夫人の育ちのよさを物語っているようである。とりよ

うによっては、どうともとれるものだ、大柄の純子夫人の、ややとまどった表情に悦に入り乍ら、カメラは女体の数種のポーズをとらえて行く。

手招きすると、素直に近づいてくる。柱を背にして行儀よく坐らせると、たおやかな首と柱を、一本の縄でグルグル巻きに締めてゆく。豆絞りの手拭を、くわえるように猿轡して、私はそっとバイブをとり上げる。女体責めの羞恥の様相を眼近く確かめるべく、ポツンと突出した乳首に、そっと当ててみる。

ビクツとしたケイレンが、私の手にもじかに感じられたが、純子夫人は声もなく、甘い恍惚の表情を泛かべて、微かに悶えた。

背後に、夫の喰い入るような視線をヒタと感じながら、私のバイブは次第に滑っていった。猿轡の奥から洩れる呻きは徐々に高まり甘く息づいていたようだったが、しっかり締まった縦縄が、皮肉にも私の作業の邪魔をし

た。

私はあきらめてサジを投げると、バイブレータ―を止めた。我乍ら一向に面白くもない緊縛の構成である。夫は妻の被虐のバロメーターを心得ているから、相当、強烈に扱えても、第三者の私にとっては、夫の手前もあって、どうしても手加減

せざるを得なかった。ましてや、純子夫人は自分の自由意志ではなく、彼好みの妻になるうと努力して、夫の意に随っているだけのよくな状態では、私としても誠にやりにくかった。だれ気味になって投げ出したくなかったが折角こうして縛ったのだから、もう少し変化を持たせて、この緊縛を活用しようと、首縄を外して立ち上げると、爪先立ちに吊り上げてみた。ここで縄打ちをしたいところだが又ぞろ失神されても厄介と、夫に縄を差出し「あなた、一度、責めてごらんさい」と責任の転嫁をする。

「さあね、快感を伴わないムチ打ちは、痛いばかりじゃないかと思うのですが……。欲ば



せてやって構いませんか」「ええ、どうぞ、好きな様に。正直云ってどうも私は、やりにくいですよ」「私の存在が、邪魔なんですよ」「というわけでもありませんが、被虐の度合いが分からないでしょう。旦那さんなら一番心得ていらっしゃる」

これ以上、どうにも進展しようのない、謂わば監視付めいたプレイに、私は最初の意気込みはどこへやら、今は投げ出した気持であった。夫婦プレイの赤裸々なかずかずを、傍観者として撮っている方が、むしろ気楽である。どっちつかずのプレイというものは、お互いに相手の気持を忖度して、誠にやりづら

かった。

相手が人妻である場合、渡部好美のように夫の渡部氏に遠慮してもらうか、谷山久美子川路叢子等のように、夫に内密でプレイした場合、私の充満した嗜虐心もどこかへはかせられた。或いは秋山夫妻や、佐倉絹子のように、最初から夫が主導権を握って、存分に振舞う場合、私の位置はおのずから定まってもいた。この三浦夫妻のように、夫の眼前で妻を苛め、プレイしようとするのは、その程度が擱めぬだけに、もっともやり難いケースの一つである。それというのが、純子夫人の場合、真正のM性ではなく、夫に協調し、夫を意識して、燃えるべきも、努めて殺そうと



している処に、感興のも一つ湧かぬ原因があるようであった。

三浦敬一は、敏感に、この中途半端な私の気持を察したらしい。この際、彼自身がこの場から消えるか、然らずんば、主導権を握ってプレイするか岐路に立たされていることを、私の表情から見てとったのか、

「じゃあ、やってみます」

とキツパリといい切った。

重心を保つのに精一杯で、ともすれば危うくゆらめく爪先立ちの妻に、一曳して激しい縄ムチをくれた。

「あっ、いたいッ——やめてえ」

と叫ぶ妻に、豆絞りの猿轡にかえて、細紐をきつく口に挟み締めつけると、片足をぐいと持ちあげ、二度、三度、強く臀部に縄ムチを叩きつけた。その強さは、何か私に対する面当てのようにもとれる程、意外に激しかった。

黙してカメラをのぞく私はもう冷たい傍観者である。所詮、夫婦プレイは夫婦がそれに徹し切らなければウソである。妻にしても私と一対一であれば、夫の眼の届かぬ気軽さか

ら、つい心を許して甘い呻きの一つも立て、秘かな戯れに酔い痴れも出来るのである。夫の眼前では、如何に私という人間に興味を惹かれたとしても、ヌケヌケと甘え、その手の中で快楽にひたることも出来ないのは当然であらう。

裏返せば、そうした妻の不倫を懼れて、三浦敬一は随行して来たのではなかったか。とすれば、このハントは最初から無理の上に計画されていたのであった。

私の緊縛の手並を拝見したいというのは、所詮、表面上の美辞麗句であって、妻を独り野放しに出来ぬ夫の不安が、プレイという名で許容しながらも、渡部氏のように割り切れなかったのであらう。

面当てのように、妻に縄ムチをふるう彼を私は、とめようとしなかった。カタストロフに近い白けた雰囲気プレイの結末は、彼が何らかの恰好をつけるだろうと、冷たい気持で凝然とみまもるのみであった。

彼がいった様に、被虐の悦楽が伴わぬ鞭打ちは、激痛ばかりが情なく、女体に撥ね返るばかりで、それはもはや、プレイのルールを逸脱した行為に過ぎない。苛酷の苦痛、眼を蔽うような、純子夫人の痛々しさに、彼は私

の制止の言葉を期待していたらしかった。打つ手をフ
ト止めて、

「辻村さん、もっと続けま
しょうか」

と、暗に制止を促した言
葉に、

「ええあなたの御自由に」

と、妙にこじれはじめた
私の心は二べもない返事と
なって口をつく。初心者
の彼に、何もその様に突っ放
すこともなかったが、困ら
せてやりたいような気持ちに
かられ、これも嗜虐の現わ
れかと、そんな自分に軽い
自己嫌悪をおぼえつつも、

心はもうどうにも仕様のない虚無感に襲われ
ていた。自分で味気ない縛り方をしておき乍
ら、今更彼の存在に腹立たしくなるなんて、
俺も随分気配な男だと苦笑して、

「もう、縄を解いてあげたらどうです」

と助言する。ホッとした様に、彼はいそい
そと妻の体から縄を外していった。

「数々の縛りとか、緊縛というものは出来て



も、夫たるあなたの前
で、SMのプレイは出
来難いですよ。分かる
でしょう、私のいうこ
とが……」

「ええ、私の観念も少
し違っていた様です。
家内の心を全然無視し
ていたことが一つと、
緊縛フォトを撮ること
と、プレイの違いが、
こうして辻村さんを含
めて、三人でやってい
て、やっと分かりまし
た」

「夫婦プレイの主導権
を、あなたが握ればよ

いのです。私という人間を忘却して、第三者
の私を、プレイの刺激の材料ぐらいに考えて
没頭すれば、それは又それで愉しいのです。
私に気兼ねし、律気に私という人間を一応、
立てていらっしゃるからやり難いのですよ。
もう夕食をもってくる時間まで、余り余裕も
ありませんが、最後に一度思いきり夫婦のプ
レイに耽溺して御覧なさい。叩かれて痛いば

かりの奥さんを、ウンと喜ばせて上げること
ですよ。私はもう一度、大浴場でつかってき
ますから、お好きな様にどうぞ。ねえ、奥さ
ん。それがいいでしょう」

三浦敬一はうなだれ、純子夫人は微かにう
なずいた。

「さあ、何も気にしちやいせんよ。残るひ
とときを、愉しくやりましょうよ」

明るくいつて私は立ち上ると、浴衣を引っ
掛け、タオルを握って、部屋を出た。いで湯
にゆっくりとひたって、重苦しくなった雰囲気
を払拭するために――。

× × ×

適当に時間をみはからって、部屋の扉を開
くと、いきなり耳に飛び込んで来た愉悦の大
きな呻きが、パタリと止まった。ノッソリと
部屋に入り込んだ私の眼に映じたものは、座
敷の柺木に後手に縛られた夫人が、女体を逆
さに彎曲させて、両足首を縛られて引っ張ら
れ、苦しいポーズで、臀部を屹立させている
ところであった。三浦敬一の手に大型バイブ
が握りしめられている。

「ああ、どうぞ続けて下さいよ。私に遠慮な
く」

「じゃあ――」

ひたいにベツトリと汗をにじませ、性欲の昂揚のありありと分かる、興奮した顔で、彼は屹立する豊満な臀部に近づいた。私が近寄って小声で、

「どうぞ、私を意識しないで下さいよ」

と囁くと、大きくうなずき、彼の手は、先程迄の繰り返しを続行するように、双臀を捗猟していった。片手が、もてあそぶようにパチパチとむき出しの臀を叩き、押し殺した悦楽の呻きが、屈折した底辺から、徐々に潮騒のように洩れてくる。

プレイに冗漫な数多くの縄は必要でなかった。私はよくそれで失敗をくり返している。女体の数カ所を束縛して自由を奪うだけで、十分にその効果は発揮される筈であった。純子夫人の自由を奪った縄は、両手を杵木に縛りつけ、余剰を両腿へ通した一本と、両足を縛った二本のみであった。或る程度は体に自由を与え乍ら、しかも緊縛による苦痛を感じさせず、巧みに被虐悦のツボを攻めてこそ、プレイの真髄である。三浦敬一はちゃんとそれを心得て、無駄で、徒らにくどくどしい縄は使用していなかった。

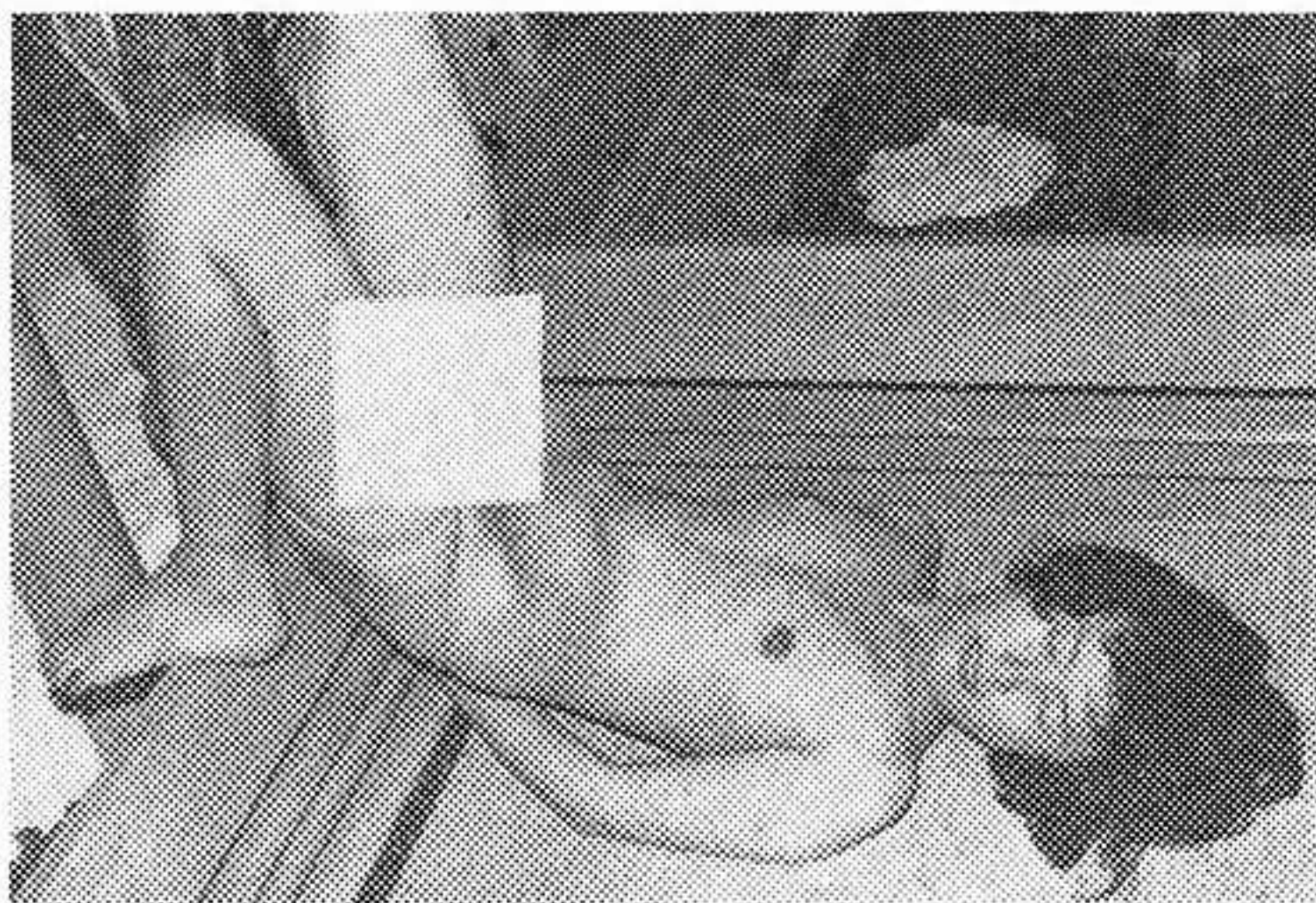
愛虐の歎歎がヒソと洩れ、それは次第に伝播し、今は見栄も外聞もなく、純子夫人は激

しい恍惚の鳴悦を高らかに演奏していた。

それでいい、それでいいのだ。あるが俚に自然に振舞い、虚飾をかなぐり捨てて、夫婦が混然一体となって、一途にプレイに耽溺している姿に、私の割り込む余地は毫もない。唯、時偶、気が向けば、ストロボの光を瞬間に光らせるだけであった。

恍惚の極致からさめて、夫人は彼に不自然なポーズの苦痛を、そつと囁いている。黙って彼は両足を解放してやる。姿勢を立て直して夫人は疲れた両足を杵にのせてそつと腰を浮かせて休養をとった。

眼を閉じた夫人の、その安らいだ満足げな表情をみて私は何故ともなく救われた気持ちになった。夫婦プレイといっても、SMのプレイといっても所詮帰する処は、セックスの満足に逢着する。妻はより以上の恍惚と、官能の昂まりを求めて、夫



の愛虐を甘んじて受けているのではなからうか。SといいMといっても、それはプレイの色わけの前提のルールである。三浦純子夫人の満ち足りた、陶酔のさめやらぬ表情が、何よりもそのことを物語っていた。

快い嗜虐に憑かれた夫は一息入れると、妻の体を、杵の直角になったコーナーに引きずり、両手を杵に結びつけた。体を抱き上げるようにして臀部を屹立させ、両脚を杵に結びつけた。

大いなる変化が女体に現われ、早くも夫人は鼻をならせて、甘い吐息を洩らし始めていた。既に疼きに疼いているようであった。

貞淑な、たしなみの良い夫人の、それはすべてのベールを剥ぎとった赤裸々の虚心胆懷さである。

そのポーズは、私が左近麻里子、谷山久美子、笹原八千子等に、

京都のHホテルでやったそれを、そっくりその俣、再現させたかのである。部屋を取り囲む桢木が、こうした緊縛の知恵を授けるのであろうか。

左近には蠟燭を立て、谷山には蠟涙で埋め、たて、笹原にはパイプ責めをしたが、彼は、この同一のポーズに何を試みようとしているのか、私にはかなりの興味のあるこれからであった。

彼はやおら、持参した旅行鞆から一本のプラスチックパイプをとり出してきた。長さ十センチ、直径三センチ足らずのグリーンのパイプである。洗面所へ小走りに走って、それを洗ってくる、私がパイプを見た瞬間に予感できた作業が始まった。臀部を対象としたその手際よさは、今日が始めてでないことをあきらかに示していた。

彼は手品師のように、続いて鞆から、一コの卵をとり出すと、割った殻で、巧みに白味と黄味をえりわけて、卵黄をパイプの中へポトリと落とし込んだ。私はあきれた気持で、それを眺めていた。こうした夫婦プレイを予測していたかの様に、パイプや卵を持参した彼の用意周到さ、にであった。

あの鞆の中には、まだまだ未使用の、夫婦

プレイの妙手が隠されている様な気がする。チャンスがあって使用出来ればそれにこしたことはなく、使う機会がなければ、その俣持ち帰るつもりであったにしろ、夫婦プレイの知恵が、思いもかけぬ方向に転換して、私はやや啞然たる思いである。卵使用のプレイは田宮夫妻、安井夫妻について三人目の経験であった。

田宮恭介は、私に介添させて、卵一コ全部を割り、うまそうに吸い尽し、安井夫妻は、花電車めいた飛び出しで眼をそば立たせられたが、三浦夫妻はさて、どうしようというのであろうか。

私は眼を皿のようにして、二人を凝視していたが、帰するところは田宮氏と同傾向で、パイプは漏斗の役目を果すものであったらしく、すぐに用済みとなったのである。私は捨てられたパイプを見詰め、いささか飽気ない思いで、三浦敬一のチュウチュウと鼠啼きめいた吸り音を聞くとともに聞いていた。

純子夫人の臉を閉じた表情は、甘い恍惚とも、苦痛とも受け取れるものであった。

もどかしげに、彼の手が空を切り、やがて妻の足首の縄を手探りでといて行く——交替した手が反対の足を——。

すべてが手探りのうちに解除された女体はなだれのようにくずれ落ち、堰をきった妻の手が、それを待ち構えていたように、彼を犇と抱きしめていた。

洋酒にVAT 69というのがある。このオカシナ、オカシナ名前が、瞬間、私の脳裡をよぎった。

私はめくるめくような、夫婦の巻き起こす激しい波濤に、息ぐるしく押しつぶされそうになって、再び当てもなく、部屋をそっと抜け出していった。

× × ×

車を運転して戻る道中を考えると、ビールものめない。夫婦に奨めて、私は義理のよう

に一寸、口をつけてやめた。
遥々湯の山くんだりまで、私は夫婦交歓のピエロの役を、果しに来たようなものであった。エネルギーを使い果したあとの、虚無の飽和感にくるまって、夫婦は軽い放心状態であった。

「すっかり勝手ばかりしてしまいました……こんなつもりではなかったのですが」
(何がこんなつもりなもんか、予定の行動だろう)とは口には出さず、

「いやいや、夫婦はお互いに、プレイに満足

しないとウソですよ。よかったじゃないですか」

と、心にもない気安めが口をついて出てしまう。

「何だか、辻村さんに悪い様です」

「私のことは気に掛けないで下さい。所詮、お互いに信じ合った夫婦、これを機会に、もっともっとエスカレートするようになれば、今日の半日は無駄じゃありませんよ」



「それは又急に、——一体どういうことなんです」

「家内が、自分等だけで遊んで辻村さんに悪いというものですから、どうしたらいいかと相談の結果、お差支えなければもう一度、家内と二人だけでゆっくりプレイして頂きたいということになったのです」

それは愛妻家の三浦敬一にとっては最大の譲歩であり、私に対する感謝の現われであったのだろう。

思いも掛けぬ申し出に、思わず私の胸は弾む。先刻のしてやられたという観念は忽ちに

雲散霧消して、げんきんなもので頬の筋肉が思わずゆるんで笑顔が泛かび上って来た。

「本当に構わないんですか」

「いいんです。但し、一つだけ条件が御座います。快楽の道具はお使いになっても結構ですが、セックスそのものだけはお許し願いたいです」

「そんなこと、考えてもいませんが——」

「そうだろうとは思いますが、カメラ・ハントをよむと、大半の女性が、辻村さんの膝下に崩れておりますので、それだけが、チョイと気掛りなのです」

「ハントはフィクションですよ。私の夢と願望が、ああいう風に描かれているのです。御安心下さい」

私の声は思わずうわずうわずっていた。フト抱いた不逞な欲望が案外スムーズに実現しそうである。

今日一日、こうして費したことも、それが布石となって無駄ではなかったと思うと、私は改めて、この淑かなグラマーの人妻を、熱い眼でじっとみつめた。

いつでもいいという彼の言葉を真に受けて心変わりせぬうちに善は急げ、旬日ならずして相見えんと、私の心は弾みに弾む。

「本当によかったと思います。それで先程、家内と相談していたのですが、私も家内を信じまして、辻村さんと家内だけで、どうぞ次回はプレイなさって下さい。いえ、私の考えだけではないのです。決して家内には押しつけておりません。すべて納得ずくで、そういう結論に達したのです。なあ、純子——」

と夫人をかえりみる。彼女は口許まで運びかけていた料理を元に戻し、箸をおいて、つましく頭を下げ、

「よろしく願います」

と、頬を赤らめていうのであった。

カメラ・ハントは大半フィクションだと彼にいったが、この三浦夫妻のハントを読んで彼等はどう思うだろうか。フィクションにしようと思いつつ、何処かに本心が覗けて、つい書かずもがなの真実を書いてしまう私に、私自身がいつも一番辟易しているのである。

すき腹にビールの酔いの廻ったらしい彼は、よろめきながら小用に立った。その僅かな空隙、

「奥さん、本当にいいんですか？」

と囁きかけると、

「ええ。主人と一緒にでは、何だかお気の毒に思えましたわ。だから、私のようなものでよければ——」

「感激ですよ」

「まあ、お世辞のうまいこと」

「ハント、お読みになった？」

「ええ、時々——、でも帰りましたら、全部読み直しますわ」

「一対一じゃ、危いですよ」

「その時はその時のこと。——余り仰有らないで」

めーつとにらんで、夫人は艶やかに微笑をうかべた。

「いつでもいいんですね」

「生理日以外なら——。主人は多分、許してくれるはずですよ。自分から、そう申したのですから……」

「愉しみにしていますよ、その日を」

夫人は応えず、眼許だけが妖しく笑っていた。貞淑な夫人の、魔性の深奥を覗いた思いであった。

「何を愉しそうに喋っていたの？」

小用から戻った三浦氏が、私と純子夫人を等分にみて言った。

「いえね、夫婦プレイをよくやるんですかとお訊ねしたのですが、お応えがなかったんですよ」

「ああ、そんなことですか。白状しますが、昨夜は辻村さんにお会い出来る嬉しさに、興奮して寝つかれず、妻も眠れぬようでした。夜の夜中、フトきざして、二時間ばかり、プレイに溺れてしまいましたよ」

「さぞ眠いでしょう」

「気が立っているんですね、ちっとも眠くないんです。多分ここ暫くは、今日の日のことを連想して、プレイの数が殖えることでしょう。ほんとに近いうち是非、妻を苛めてやって下さいよ」

酒気が彼を雄弁にさせていた。早い夕餉に思わぬ時を過ぎ、外界をみると、既に御在所の山は、暮色に黒ずんでいた。

暮景と共に、さんざめき始めた温泉街に名残りを付けて、私達は山合いの道を下ってゆく。しばしの別れに気をきかせたのか、純子夫人を助手席にのせた三浦敬一は、やがて数分もすると、軽い寝息を立てて、後部シートに沈んでいた。

右手でハンドルを握りながら、そっと左手で、夫人の指を探ると、手を引くでもなく柔らかな指先が、私の指に絡んだ。

「どうも好きになりそうですよ。困ったなあどうしましょう」

「あらッ、本気にしますよ」

チラッと甘い視線が横顔に流れて、絡む指先に力が入った。この美しい清潔なひとりの妻——。

すでに、よわい五十才に近い私にとっては三十才前後の円熟した人妻が、何ものにもまして魅力の対象であった。

どす黒い空に蔽われた四日市は、もう指呼の間であった。

—(おわり)—

— 異 国 の M —

凌辱

三原

寛



カット・岡 たかし

「男は主君なし。女を主人と思ひ敬ひ慎みて事べし。輕しめ侮るべからず」

女「いい加減にしたらどうなのよ！ しつこいのって、キライ！」

男「スミマセン」（そっと退き、煙草に手を伸ばす）

女「こんなに汚しちゃって……早く始末してよ！」（と、太った足を投げ出す）

男「スミマセン」（急いで、台所にタオルを

取りに行く）

「惣じて男の道は女に従ふに有り。女に対するに顔色言葉遣ひいんぎんにへりくだり和順なるべし。女問ふことあらば、正しく答ふべし。女若し腹立怒る時は、恐れて順ふべし」

女「もっと下の方を、ちゃんとやってよ」

男「ハイ」（女の指示に従う）

女「ダメね、あんたって。唾液が少ないんじゃないの？ もっと上手におやり！ アメ玉

をしゃぶってんじゃないのよ！」（と舌打ちする）

男（ますます下の方へ下って、あわてる）

女「ああ、バカ！ そこはガス栓じゃないの！」（と言ってプツとオナラをする）

テーブルの下に、誰かが置き忘れていった表紙のとれかかった「A芸能」誌の黄頁欄の一節である。

ここはアテネの、船員相手の三流バーである。この店は、特に日本人船員専用のバーであった。店の方で、そう名乗りをあげている訳ではないが、国籍の異った船員同志では好みも違い、店のムードが統一できないだろうし、それに喧嘩や口論が絶えず、店の方でも困るのである。そういうことで、この店にはホステスも片言の日本語を話すのが集まって何となく日本人船員専用ということになっているのである。

また、ここは背広を着てネクタイをしめて行くところではない。そんなことをしたら、一杯のウイスキーに、べらぼうな値段をふんだくられて追い出されるのがおちだし、バカ騒ぎをしている船員達に、いんねんをつけられて、袋叩きにされるかもしれない。だから私は、この店に通うときは、洗いざらしのく

たびれたシャツに作業ズボンである。私は、いつも店の一番隅のテーブルで、一杯のウイスキーを、ゆっくりと時間をかけて飲むことにしている。シャンペンをとらないから、ホステス達が相手にしてくれないのである。

この店はホステスが六人で、カウンターの端の所にはレジスターを前にして、脂肪の塊りのように肥え太った五十女のマダムが坐っている。肩のいかつい、色の浅黒い用心棒らしい男は店の中には入らず、いつも店の入口の壁にもたれ立っていた。

バーテンはいないので、マダムがバーテンの代わりをした。

カウンターの横にカーテンで仕切られた入口があつて、その奥は、窓もなく他に出口もない狭い部屋になっていて、部屋の半分は低いベッドが占領していた。

二十ドル出してシャンペンをとると、ホステスの一人をこの部屋に連れ込むことが出来た。ウイスキー一杯は一ドル。同じウイスキーをホステスに飲ませると、一杯が二ドルになつて、半分がホステスの収入になつた。

私のお目あては、ホステスのマリナである。ティーン・エイジャーから、やっと二十台に入つたか入らないかぐらいの年令で、ボ

ーイッシュに栗色の髪を短く刈り上げ、すつと伸びた襟足の線が新鮮で、かもしかのように引きしまった四肢が、健康な少年のような印象を与えた。彼女もまた、この店のホステスといつても、つまりは娼婦の一人で、シャンペンをとる客とは誰とでも寝るのは、私も何度も目にしているのである。彼女だけは日本語を全然、話さず、従つて彼女につく日本人は、何とか片言の英語で彼女に話しかけるのだった。彼女は馴染みの客が席につくと、その膝の上に向かい合つて馬乗りに跨がり、何かというとアッハハハと男のように大きな口をあけて笑いながら、男の頬を平手打ちするのが癖だった。

私が、この店に來始めて最初についたのはローザという赤毛の、胸のはち切れそうな、大柄のホステスだった。

席につくなり首に手を廻してきて、ウイスキーをねだつたので、私の分と合わせて二杯注文したのだが、片言の日本語で「アナタ、スキヨ。……スルカ」と言つたので、私は途端に興ざめして、首に廻してきた手を、それとなくはずした。それから彼女が片言の日本語で何やかや話しかけてきても、私の方で渋い顔をして相手にならないので、他の客が入

つて來たのを汐に、彼女は席を立つてしまつたのである。

その後、何回かは、このバーに入ると、まるで私の係のようにローザがついたものであるが、その度に私は同じ態度をとり、彼女も結局、最初の一杯をお義理でつき合うといった風で、私は直ぐに独り取り残されたように隅のテーブルに置き忘れられるのだった。

私は、はじめからマリナが気に入っていたのだが、彼女にはいつも客がついていた。あの独特の高笑いをしながら賑やかに騒いでいて、私の方を見向きもしないのだった。

一度だけ、ローザが私の席についていたのを無視し、マリナがちょうど客を送り出してきたところを呼んで、シャンペンを注文してやったことがある。マリナは、その時もうかなり酔っているようだった。ふらふら泳ぐようにカウンターのところへ行つて、マダムから受取つたシャンペン・グラスを片手に私の席に戻つてきて、そのグラスをテーブルに置いた途端、入口から入つて來た馴染み客を見つけると、もう私のことは忘れたようにそちらへ行つてしまつたのである。そして、彼女のために注文したシャンペン・グラスだけが、私のテーブルに、ぽつんと残されたの

である。

その時以来、ローザも気を悪くして私の席につかなくなり、私は、いつもお定まりの隅のテーブルに独り取り残されて、私のことなど全然、念頭になく騒いでいるマリーナを見つめては時を過ごすようになったのである。

大体、このバーでは、私の坐る隅のテーブルだけを例外として、他のテーブルには、まだ客のつかないホステスが待機していて、客は指名でシャンペンを注文して奥の部屋に消えるなり、或は部屋がふさがっているときはカウンターに並んで坐って、ウイスキーか何かをとって飲みながら、部屋の空くのを待つのである。だから、いくら店が混んでも、賑やかになるのはカウンターの方で、そうなる、ますます私の坐る場所は、そこだけひとつと隔離されたように取り残されるのである。

それが今夜は、私が少し早目に出てきたせいか、それとも、ちょうど港の船が出払ってしまったところなのか、私の他には一人の客もなく、ホステス達は六人共、ずらりと並んでカウンターの止まり木に坐っていた。

マリーナはカウンターの一番、端にいて、私のテーブルの直ぐ近くなので、この機会を

逃がしては滅多に彼女はつかまらないうと、気は焦るものの、ずらりと並んでいるホステス達の前で、マリーナにシャンペンを注文するのが気おくれして、途惑っていた。

マリーナはカウンターのの方に背をもたせて夢中で横のホステスとしゃべり合っている。すらりとした恰好いい足をぶらぶらさせるたびに、踵の方を外して指の先だけに引っかけてサンダル式のハイヒールが、今にも落ちそうに揺れて、私の目の前に突き出されているのである。きれいに揃えてカットされた足指の爪には、銀色のエナメルが塗られている。

じつとりと湿ったような白い足である。私はまるで祭壇の前に跪かされたように血が騒ぎ口の中がカラカラになってきた時、ことりと音がしてハイヒールが床に落ちて転がった。私は催眠術にかかったように、そっとテーブルを離れ、拾ったハイヒールを両手に捧げるようにして彼女の足許に跪いた。彼女は相変わらず足をぶらぶらさせながら、何も気づかずに話に夢中になっている。その時、彼女の足先が、捧げ持ったハイヒールに触れ、驚いた彼女が大きく足を動かしたので、私は思いきり彼女の足で顔を蹴られた結果となった。そして床に手をついた私を、驚いたように彼

女は見下ろした。

“Your shoes slipped off”

(あなたのくつが落ちたのです)

かすれた声が出た。

彼女は、なおも黙ったまま私を見つめていたが急に、にっと唇を曲げたような笑みを浮かべると、いきなり両手をのばして、私の左右の耳をつかんで引き寄せるようにして

“You want me to accept your champagne?”
(あたしに、シャンペンを飲んで欲しいのかい?)

と言った。私は真赤になったまま、うなずいた。シャンペングラスを片手にした彼女に押されるようにして私はカーテンをくぐり、奥の部屋に入る。ベッドのシーツは汚れて、シワが寄っていた。

「もう二十ドル、お出し」

彼女は手を出した。受けとった二十ドルをスカートをめくってストッキングのガーターに挟んだ彼女は、シャンペングラスをベッドのテーブルに置き、自分はベッドに腰を下ろし、

「急いでズボンを、お脱ぎ」

と、指図するように言った。私は下半身だけ剥き出しという、ぶざまな恰好になって、

彼女の前にひざまずいた。

「ちょっと待って」

と彼女が私を押すようにして、部屋を出て行こうとした。私は慌てて彼女の片方の足にとりすがった。

「トイレットよ」

彼女は眉をひそめて私を振り払うようにした。彼女は私が感違いして慌ててると思ったらしい。

「分かっています。あなたのオシッコが飲みたいのです」

“What?”

(何だって?)

彼女は向き直って立ちはだかると、大きく目を見開いて私を見据えた。私は放り出してあるズボンのところまで床の上を膝でいざっていった、ポケットから十ドル紙幣をとり出して捧げるように彼女の方に差し出した。

“Please piss in my mouth I beg you”

(私の口にオシッコして下さい。お願いします)

しばらく私を見つめていた彼女は、急に例の男のような高笑いを始めた。

彼女のしなった白い手がひらめいたかと思うと、ぴしっと平手打ちが私の頬に鳴った。

続いて、もう一つ!

アッハッハッハ。両手で捧げ持った十ドルを、すっと抜きとると、彼女は高笑いを残して部屋を出て行った。私は痴呆のように床の上に横坐りになっていた。

マリーナを先頭に六人のホステスが部屋に入り込んで来て、私を取り囲んだ。誰かがギリシャ語で何か言うと、どっと笑い声が続いた。口々にマリーナに向かってけしかけるような口調で大声を出している。マリーナは私の髪を掴んで、ぐいっと仰向けに引き起こして、跨ぐようにして立ちはだかった。

“Beg again!”

(もう一度、お願いしな!)

私は先刻の言葉を繰り返して、皆がどっと沸いた。

「口を開け!」

私は、しばらく口を開いたまま、じっとしていた。シャーツと生暖い液体が私の口の中にほとばしり、途端にキャアッという叫ぶような笑い声が、いっせいに起こる。私は目をつむって、ごくごくぐくと咽喉を鳴らして飲み下した。

排泄が終わった彼女は、邪慳に私を突き放す。私は崩折れるように床に両手をついた。

私は肩を蹴られて仰向けに転がった。ローザだった。どっと、笑い声が上る。誰かが私の火のように熱くなった体を、ぐいっとパンプスで踏みつけた。私の頭のところに立っていたホステスがチュッと吐いた唾が、私の唇の横に当たり、私が舌を出して舐めようとする。とまたも笑い渦をまく。マリーナが立っていった私のズボンをとり上げ、ポケットに手をつっ込んで札束を引っぱり出し、ホステス達に十ドルずつ配った。私に分からぬギリシャ語で何か言っては笑い合っている。金髪を肩に波を打たせた大柄のホステスが私の胸を跨いで立ち、中腰になってパンティをずり下ろした。誰かが拍手をする。激しい勢いで暖いしぶきがシャツ越しに私の胸を打ち、両わきを伝って流れた。今度はローザが私の顔に放尿し、髪がビショビショになる。部屋中を足で蹴って転がされながら、つぎつぎにホステス達の放尿を全身に浴びてズブ濡れになった私は、今度は四つん這いになって背や腰を足蹴にされながら、床に溜った彼女達の生暖い液体を、床がすっかりきれいになるまで舐め廻されたのである。それから、髪からシャツまでビショ濡れになった私は、しっしつと野良犬でも追いたてるように店から追い出

されたのである。

打ちひしがれた私が、バーを出て角を曲ったところで、マリーナが追いついて来た。

「お前のうちは、この近くかい？」

「車で十分ぐらいのところですよ」

「じゃあ、着更えて直ぐおいで！ うんと、お金を持ってよ！ もっとやって上げるからさ」

私は屈辱に唇を噛んで、うつむいた。

「どうなのさ？」

声を荒げた彼女は、ハイヒールで私の足をいやというほど蹴りつけた。

「ううっ！」私は呻いた。

“With pleasure!”

(よろこんで！)

彼女は、きめつける

“Yes with pleasure……”

(はい、よろこんで……)

アッハッハッハ……。彼女は例の男のような高笑いを残して去った。

急いで着更えた私がバーに戻った時、時計は十時半を指していた。今度は、かなり混んでいた。マリーナにも客がついていて、カウンターの上まり木に横坐りした男の膝に馬乗りになり、時々男の頬を平手打ちしては大声

で笑っていたが、私の姿をチラッと見ると立ち上ってやってきた。

「遅いじゃないか、いくら持って来たのさ」

「百ドルです、い、いえ、二百ドルです」

薄い色の瞳で、じっと私の目の中を覗き込むようにしていた彼女は、

「ふん、兎に角、お前が遅いから、もう客がついたわよ。お前のせいなんだから、ここでお待ち！」

と言うと、もう後も見ずに戻っていった。

それからのマリーナは、もう私のことなど忘れたように振舞った。時々他のホステス達がひとり隅のテーブルでウイスキーのグラスを前にしている私の方に、チラッチラッと目を向けては顔を見合わせて肩をすくめた。マリーナは私の方は見向きもしない。客は入れかわり立ちかわり、マリーナはその間に二度、男と奥の部屋へ消えた。彼女に送り出されながら、肩を抱くようにしてキスしようとする男の頬にピシッと平手打ちを加え、

“Next time!”

(今度ね！)

と言って、アッハッハッハ、と笑うのである。私は惨めな思いをして三時半を待った。二時で閉店である。客が引き揚げ、ホステス

達もハンドバッグを手にして、化粧を直したりして帰り仕度を始めた頃、マリーナがもう一人のホステスと連れ立ってやってきた。マリーナのつぎに私に放尿した金髪の大柄のホステスである。

「お前、まだ居たのかい。アッハッハハ」

と笑ったマリーナは、金髪の方に向かってギリシャ語で何か言うと、金髪の女は肩をすくめて、くすくすと笑った。

「ソフィアも一緒に行くわよ」

三人はバーを出てタクシーに手を挙げた。マリーナとソフィアが後ろの席に乗り込み、続いて乗り込もうとした私は助手席に追いやられた。

“We're comin' your place, you mind?”

(お前のうちに行くのよ。いいわね?)

車に乗っている間中、彼女等はギリシャ語で何か話し合っては大声をあげて笑い転げ、私はもし自分のことをしゃべっているのだとしたら運転手に聞かれはしまいかと、恥かしくて、いたたまれぬ気持だった。私は一寝室(ワンベッド・ルーム)、サロンに浴室(バス・ルーム)、キッチン付きのフラットを借りていた。私は扉の鍵をあけて二人を中に導いた。

(未完)

カット・岡たかし



酒宴の捌られもの

「じゃあ君香姐さん、そのお羽織^{はおり}からぬがせて頂きますぜ」

新吉が、金銀糸を織りこんだ羽織紐に、手をかけた。

ムツとした表情で、よこを向く君香であつたが紐がとけると、弥之助が右、新吉が左とそれぞれ袖をぬがせ、部屋の間にはおった。

続いて新吉は、丸くけの帯締めをぬきとり黒のビロード地^{おみなえし}に女郎花を刺繡した一尺五寸

の中広の帯に手をかける。

その手を、君香が、思わず払った。

「おっととととと、手むかいはいしねえって約束したじゃあねえか」

おおげさな身振りで、打たれた自分の手をふってみせた新吉が、背後から再び手をかけ力一杯、ひっぱったものだから、よろよろと君香の躰が一回転して、床に手をつく。

「たちなせえよ。みっともねえ」

弥之助がちかよりざま、江戸紫の羽二重の襟に手をかけ、ぐいっと左右に押しひろげながらずり下げていく。

美女緊縛作法

八重垣流秘聞

(その三)

風流極道軒

「あ、なにをするの……」

両肩を君香がすばめたが、袖がもう肘の下までぬがされて、鶯色の長襦袢が、ぷうーんと甘ずっぱい香料の匂いを漂わせ始めた。

「たちなせえ」

弥之助は、君香の両手をひとつににぎって云う。よろけながらたち上るにつれて、竹に雀を織り出した着物の裾が、ゆらりとゆれて床におちる。

黒駒勝蔵を始め男たちはここ数日來の思いがけないできごとの今日は骨休めとでも思っているであろう。まわりに莫塵ざぶとんを

敷いて、酒、肴までを持ちこみ始めたのである。

「君香姐さん。その長襦袢は、自分で脱いでもらいましょうか」

新吉が、意地悪い口調で云った。

反抗の気配を躰全体で示したものの、君香は、命令に従うほかはないと、ぐいっと下唇をかんで、腰紐をとく。

「渡して下せえ、その紐を」

新吉のさし出した掌に、柑子色の紐がのせられる。両手で襟もとを合わせて体をかたくしている君香に、

「早く脱がねえかよう」

狐六が、盃をあげながら云う。

君香は、恨めしそうに狐八を睨みながら、長襦袢の袖を左、右とぬいていく。

あとはもう、桃色の肌襦袢と、真紅な鎖縮緬の湯文字いちまいで、じいっと切長な眸を閉ざし、屈辱に耐えている君香であった。

前号までの登場人物——君香、辰巳の鉄火芸者、情夫の千次郎の身代りに拷問される。お千賀、女岡引き、百万両の謎に絡んでいる。三千代、笹川安女の妻。お蘭、義賊夢売又平の情婦で南蛮屋・黒駒勝蔵に対立している。黒鍬左弁、老中の配下。

新吉がその耳元で再び、何事かを囁く。いや、いやと顔を激しく振った君香であったが、

「千次郎の生命がねえぜ」

と、すぐまれると、

「あ、ああ……」

と訴えるように、天井に向かって呻きながら、

「弥之助さん、あのときは、こっぴどくあなたを振って、かんにんね。その、そのかわりいま、ここで、妾の、妾の……」

君香は、ここで絶句したが、

「早く！」

と新吉にこづかれて、

「妾の肌襦袢をぬがせてくださいな。お、お湯文字も……そ、そして、裸の妾を、な、賜ってくださいまし、縛って……縛って……」しかめっつらをしていた南蛮屋までが、ニヤッと笑った。弥之助は、一同の羨望の視線を受けながら、君香の右よこに寄り添うと、

「君香、いいのかい……」

とからかうように、あかく染まった頬を指でつつく。三度四度とこっぴどく振られた女であった。その女を自由にできる……弥之助と新吉は、興奮を押えながら、君香の肌襦袢

の紐をとくと、左右にわけて、きらめくように美しい双つの腕から袖をぬがせていった。

君香の肌の匂いが、二人の鼻をうごめかせる。何の花の匂いだ、これは——と新吉が考える。蘭でもなし菊でもなし、

「紅梅、紅梅の花の匂いだぜ、これは」

「なるほど」

弥之助が、肩から腋へと顔をうごかせていく。新吉は新吉で、しみひとつない、まるで生きている宝石のように輝く双つの乳房に顔を埋めるようにして、嗅ぎまわる。

「あう！ アッ！ イヤ、イヤよ……う」

たまりかねたように狐六や牛造までが、君香のまわりを取りかこむ。

「フッフッフ……こいつは、丁度よい骨休めだ……丹波さん。どうです、食指は動きませんか。深川で三本の指に入る売れっ妓芸者まだ匂いのこぼれているうちに方円流の縄捌きを試みて見ちゃあ」

雲つくような大男の南蛮屋が、酒の入ったあから顔で、黙々と盃を口にはこんでいる赤鍬丹波をけしかけるように云った。

丹波の片目が妖しい光をおびた。

「狐六、のけい！」

懐からとり出したのは、赤と白のまだらの

五つ打ち縄——。

「南蛮屋さん。おのぞみにまかせて」

弥之助たちが退いて、くろずんだ床板ゆかいたの上に、円くなって蹲まっている君香の、大きく波打っている肩を見おろしていたが、

「女にかける縄じゃあないが、先王形仕込縄をひとつ」

と前置きすると、まだら縄を二つに折って四つの結び目をつくり始める。

「ヘッヘッヘッ……君香。おて、をうしろに回しな。丹波さんが縛ってくださいとさ。手を、うしろに回すんだよ」

新吉は、なおも君香を勵るように、必死で合わせている両膝のあいだに、手をさし入れようとする。

「な、なにをするのよう！」

乳房を抱えていた双の手で、新吉の腕を払った、そのしなやかな君香の右手首を、がちりと捕えた丹波は、ぐいっと後にねじあげまだら縄の第一の結び目の輪におし、左手首も背後にねじて、同じ輪にさし込み、ぐいっと、ひきしぼる。

無防備になった君香の前面で新吉が、双つのむき出しの乳房を、ゆっくりとなぶり始める。丹波は、第二の輪を、首にすっぽりとか

ぶせると乳房の谷をとおして、へその下に結び目をあてて、左右にわけ、腰を半回りさせると、湯文字の上から、尻に回して、君香の左半身をうかせて、股間におし、へその下の結び目と交わらせて再び、背後に。

新吉は、その縄目にそって、血走った眼をうごかしている。

紅梅の花の匂いが、いよいよ濃くなり、その上に、にじみでる君香の汗の香りがまじり合い、男たちの淫らな気持をいやがうえにもあおりたてる。

丹波は、背後に回した縄を、高手に喰い込ませ、背中に鋭い菱形、乳房の下で、四角形をつくると、手首にとどめ縄を施して立ち上がるやいなや、その縄尻をとったのは新吉であつた。

「立ちませえ！」

芝居じみた声をあげ、手首の痛さによるめきながら立ち上がった君香を、南蛮屋の前に連れていく。弥之助と狐六が、君香の左、右によりそう。

「さあ、君香姐さん。旦那に申し上げな。その湯文字をとってほしいと、さあ！」

もうすっかり崩れてしまった投島田のびんのおくれ毛を、かいなでながらいう新吉であ

つた。俯向けば、胡座して酒をのんでいる男たちの顔、仰向けば、弥之助や狐六の、よい気味だと云わんばかりの視線。

「あう、あ、あ……」

羞恥であかくそまったのを、激しく振った君香は、とぎれとぎれの声で、

「旦那さま。どうか、妾、妾のお湯文字を、ぬ、ぬがせてくださいませ……」

と血を吐く思いで云う。

「フッフッフ……間夫まぶとは、そんなに可愛いもんかねえ。千次郎のためなら、全くこの女、火のなか水のなかでも入ろうという心意気だな。ハッハッハッ……では、お言葉に甘えるか……」

南蛮屋は、たち上ると、真紅な鎖縮緬からの湯文字のまっ白な紐に、大きな指を絡ませ、君香の顔をのぞきこみながら、ゆっくりと解いてゆく。

解けた瞬間、ふと君香が目をあける。

その眸と、新吉の目が、もろに合う。

「イヤ！」

「フッフッフ……何が、い、い、い、い、い！」

よこにそむけると、そこには弥之助の視線が待ちうけていた。

「フッフッフ……辰巳たつみの鉄火姐御もいよい

よ、おし、やかか、裸弁天、一糸まとわずの赤裸！」

弥之助の言葉といっしょに南蛮屋が湯文字の紐を手離した。

音もなく、真紅な布が腰からおちて、股間の縄で、支えられる。

「よいしょ！」

新吉は、その湯文字を、縄目からひきずり出す。

「い、いたあ！ い、い、いたい！」

「フッフッフ……どこが痛いのかい」

新吉は、もう、乳房のあたりまで真赤にそめている君香をのぞきこみながら、湯文字をとり去ると、自分の顔にかぶせながら、

「紅梅の花の匂いだ……こりゃあ、いいや……フッフッフ……」

弥之助に渡す。

「いやだ、いやだ、いやだよう……」

君香が、なまめいた声をあげた。

「さあ、君香姐さん。ひとりひとりにご挨拶をしましょうぜ」

狐六に縄尻を持たせ新吉と弥之助が、左右に寄り添って、黒駒勝蔵の前につれていき、

「かがみなよ。それ、両膝をひらいて」

と肩を押さえて両かかとの上に尻をつけさ

せる。

新吉が、右よこから、乳房を狙う。

「あら！ なにするのよう！」

激しく君香はのけぞったが、狐六が、縄尻を上手に捌いて、上半身の倒れるのを防ぐ。

女の肌からにじみでる香りが、酒の匂いに混じり、もう、男たちは、百万両の謎のことにも忘れ果てたように酔い痴れ始める。

△紫色の鳥の羽根▽

一方、隣のお千賀の部屋では――

千春と、その許婚者、望月秀之進の見ている前で、お千賀がのたうっていた。

床板に、一枚敷かれた莫座の上に、後手のまま横たえられたお千賀の右に熊七、左に馬吉が寝そべっている。

「鶯の谷わたり、じゃなく、馬と熊との谷争いってところだな」

眺めながら寅松たちが笑っている。

「なにを云ってるのさ。さっさと始めるなら始めるといいさ。このお千賀姐さん。なみのことでは、音はあげないよ」

「まあ、あせるなってことよ」

熊七の毛むくじゃらの手が、お千賀のすべ

すべした乳房を狙ってうごめく。

「こっちを向きなよ、女岡っ引きさん」

馬吉が、お千賀の顔を自分の方に向かせる

と、じつくりと眺めながら

「いい面してるじゃあねえかよう」

と、唾を吐きちらしていい、鼻といわず、唇といわず舐めまわす。

「今度はこっちだ」

熊七が、お千賀の頭を抱いて向きを変えさせ同じように舐めまわし、鼻を包みこみ、せわしげに喘ぐ舌をつまみあげ、もてあそぶ。

「ウウッ……痛！ 痛いじゃないかよう」

「何が、痛い。痛いのは、こっちじゃあねえのかい」

やおらたち上った寅松が、南蛮屋の子分たちに見配せして、はげしく踏んばられているお千賀の両足を押えさせた。

「鉄火姐御を責めるにゃあ、これが一番」

と懷から、物干ばさみを取り出す。

「動くんじゃねえぜ。動きやがると、どこをはさむことになるか判らねえからな。それ、それ、動かなくてことよ！」

寅松、そのひとつを右手に持つと、ニヤリと笑ったかと思うと、次の瞬間にはお千賀の柔肌にはさみ、が噛みこんでいた。

「キャアッ！」

お千賀が、ものすごい悲鳴をあげた。

「フッフッフッ……ひとりのこのこ、乗り込んできた罰だよ、お千賀」

寅松が二つ目、三つ目と声をかけながら挟んでゆく。

再びお千賀が耐えられないような絶叫をあげて、のたうった。縛られている両手首の苦痛を数倍、上廻る激痛であった。

「まあ、しばらくすりゃあ、なれるさ」

寅松は、五つの物干はさみに、あらかじめつけておいた強い糸のはしを、それぞれ、自分どもに渡すと、自分もその一本を指にからませて酒をのみ始めた。

子分たちの持つ糸の動きにつれて、お千賀が、もう減茶苦茶に悶え廻る。これを、左、右側の熊七と馬吉が、押え込みながら、賜りつつける。玉のような汗をほとばしらせてお千賀が白いけだもののようにのたうち廻る。

「このざまを亭主に見せてやりてえやな、お千賀姐さん。お前の亭主は、朱房の重蔵って奴だそうだな。こともあろうに去年、長州藩のご浪人を捕えようとしたらしい。長州藩といえ、俺たちの大将、その大将の家来を捕えようとした罰もあるしな。フッフッフッフ

ッフッ……もっと、苦しみな、もっと！」

寅松は、ぐいぐいっと糸をひっぱったり、ゆるめたりし続ける。

秀之進は勿論のこと、千春までが、もう生きた心地もなく、自分たちの身代わりになってくれる女のこの無残な姿を、ぼんやりと放心したように眺めていた。

「ひでえことをしやがる」

屋根裏で呟いた男がいた。

「南蛮屋、黒駒勝蔵、赤鯉丹波……うしろで糸ひく長州藩。お千賀さんを始めいま責められている女たちのうしろにゃ誰もいねえ。黒鯉組も勘定奉行小栗上野も老中稲葉美濃も幕府たて直しの百万両が欲しいだけのこと……フウム。どっちの味方でもねえ俺さまだが、八重垣大学の息子の千次郎さんや君香さん、このままにしてはおけねえ。かといって、俺さまひとりの力じゃあ……」

一日二十里はかける義賊、夢売の又平であった。お蘭を谷中にある黒鯉組の隠れ家から救い出したあと、千次郎たちが行方不明になったことを知り案じつつづけていたのである。「貧乏な人たちに、ささやかな夢を売って歩くこの俺だ。ほかのことに、あまり深入りは

したくねえが……こうなりゃあ、仕方あるめえ。黒駒の勝蔵に対抗できるのは清水の次郎長以外にはあるめえ……清水まで三十里……どんなことがあっても、無事でいて下せえよ千次郎さん、君香さん」

夢売の又平、誰気づかれることなく屋根裏をぬけ出すと、塀を苦もなく乗りこえて、やぶのなか。そこで、待っていたお蘭に、

「ちよっくら、清水まで行ってくらあ。奴等はこちらからは動くまい。見張ってな、この前のようにどぎを踏むんじゃあねえぜ」と云いのこすと

「あいよ。安心おしよ」

というお蘭の言葉を背中に、黒い陽炎のように消えていく。

「どうやら、一雨きそうだぜ」

お蘭が見張っているとも知らず、塀ひとつへだてた部屋のなかでは、相変わらず君香とお千賀が責めたてられているらしい。

手打水をつかいながら

「おい新吉。この分じゃあ明日は大雨だ。だとすると、旦那も勝蔵親分も身動きがとれねえ、ということは、フッフッフッ」

「ということは、弥之助さん。あの君香を、ずうっと、思いのままにすることができんっ

「てことですね、こたえられねえ！」

「どちらが、さきかってことだな新吉」

「弥之助さんにゃあ負けられませんか」

二人は、顔を見合わせて笑うと、君香が責められている奥の部屋へと、もどって行く。

南蛮屋に、勝蔵一味五人、それに浪人たち六人に弥之助、新吉と、十四人も男たちの前で、一糸まとわぬ身を、方円流先王形仕込縄で縛られた君香は、部屋の中央の奇妙な椅子に腰かけさせられ、なおも狐六と辰五郎の慰みものになっていた。

奇妙な椅子——というのは、和蘭渡りの椅子という意味ではない。仕掛け椅子とよべばよいのであろう、白木造り、両手をひろげて左右に一直線に伸ばして、鉄輪で手首と肘のあたりを固定され、これにほぼ平行するよう横木が、腰かける部分から伸びている、つまり「エ」の字形に、手足を開かれきって、頭をがっくりと前に、垂らしているのであった。勿論、両足首と膝のあたりに、鉄輪が、がっちりとはめこまれている。

「弥之助さん、新吉どん。あんたたちは、随分とこの女に振られなすったとか、どうぞ思ふ存分、胸のつかえをはらすがいいぜ」

勝蔵は、もう相当に酔っている風である。

「有難うございます、親分さん。新吉とただいま相談をいたしました、これからいよいよ最後の責めに移らして頂きます」

もう、睨をしっかりと閉じて、観念しきった表情の君香に、猫撫声で、弥之助は、

「君香姐さん、御気分はどうですかい」

よびかけに、君香がうつすらと眼を開く。

「姐さん。いよいよ始めるよ、覚悟はできてるだろうね」

ながい睫毛の下の眼が憎しみに燃える。

「千さんが、どう思うだろうねえ、私とお前とが深い仲になったら……」

弥之助は、肉体だけでなく、心のすみまでもてあそぶつもりらしく、

「千さんは、お前の間夫、^{まぶ}そのまた私は間夫ってことになるのかねえ……」

そういいながら「フッフッフ」と笑い、

「よいざまだねえ……君香。ひとつ、千さんをここに呼びこんでやろうか知ら……」

ぐったりになっていた君香の身体が、はじかれたようにびくっとなる。

「なにを驚いてるんだよ。間夫の前はいやだと先刻は云ったけど、私は許さないよ。千次郎の前でお前をおもちゃにしてやる」

「許してえ！ ねえ、弥之さん、それだけは

勘忍して、ねえ、お願い！」

「フッフッフ、じゃあ云いな。君香、これからここにいらっしゃる皆さま方、全部の自由になると。それから、まっさきに弥之さんに抱かれないと。云うかい、云わないかい……どっちだい！」

弥之助の合図で新吉が、鳥の羽を手にしてちかよると、縄一筋かかっていない乳房から腋、二の腕の内側、脇腹と、撫ぜはじめる。

「どうなんだい、君香。千さんをよぶよ」

「や、やめて頂戴」

君香は睨を閉じたまま、訴えるように云った。いくら千次郎の生命を救うためとは云え当人の前で、惚れて惚れぬいた千次郎の眼前にこんな姿をさらすことだけは、どうしても耐えられないことである。

「云うわ。お願いするわ、なんでもいたしますから、千さんだけはつれてこないで」

「じゃあ、云ってごらんよ」

君香は、奥歯をがくがく震わせていたが、やがて、すすりなくような声で、

「弥之さん。妾を、抱いて、早く。そして新さんも。妾、そのあとで、ここにいらっしゃる皆様方全部に、思いのままにされます……」

云い終った君香は激しく嗚咽しはじめる。

が、その鳴咽も、弥之助が、新吉から渡された紫色の鳥の羽を軽やかに、舞わせはじめると、また、違った意味のすすり泣きにと変化していった。

「もうよからうよ」

別の鳥の羽で、君香のあしの裏をなでていた新吉がいう。

「じゃあ、旦那さま、ここで失礼を」

弥之助は、着物の裾をはたいてニヤリと皆を見廻した。そして間もなく、

「あ、あうう……」

押しこらした呻きが、君香の唇から洩れ始めたのであった。

「呼べ、千次郎を！」

勝蔵の声で、狐六が、とび出していく。

君香のこの惨めな姿を見たら、ひょっとして、黒赤縄十六方の秘密をあかすかも知れない、あくまで強情をはりとおしたとしても、間夫の目の前で、他人に弄ばれる女の表情をたのしむこともできよう。勝蔵の気持を知った南蛮屋もニタツと笑う。

弥之助が、惚れ抜き、振られつづけた女を自由に出来る果報に、恍惚の境をさまよっていた時、狐六が千次郎の縄尻をひいて連れ込んできた。

「ムッ、ムムム……」

千次郎の顔が、激しい怒りにふるえ、猿ぐつわの下から声にならない狂ったような呻きがあがる。

「じたばたしなさんな、千次郎さん」

狐六が、意地悪そうに、千次郎を、君香のそば近くまでつれていき、表情をのぞき込ませようとする。

ふと、開いた君香の眸に、千次郎の顔がうつったとき、

「キャアッ！ 千さん！ 千さあん……いやいやよう！」

激しく悶える君香であった。

ゆかしい紅梅の花の香りはもう匂わなかった。どすぐろい男の体臭が、部屋中にたち込めていた。

隣室のお千賀も、同様な身の上だった。

陰雨がしとしと降りつづく、なまぐさい夜であった。

△晒される女△

陰湿な雨が、大粒となって、それに風まで加わって、夜が明けた。

宏壮な南蛮屋の別邸の庭、渡り廊下の角に

白い裸身をさらしているのは、お千賀であった。七人の男たちに弄ばれた上に、ここにひきずり出されて曝しものにされているのであった。両腕は、青竹で左右にひらかれ、両足にも六尺棒が喰い込み、「大」の字の形で、廊下の軒から吊るされている。丸髻はもうまったく形をとどめず、さんばら髪となり、その一端が、齒型のついた乳房に垂れている。

「フッフッフ……お千賀姐さん。きぬぎぬの気持はどうけえ」

熊七が、寅松、馬吉たちと現われると、お千賀の俯向いた顔をあげさせる。

その時、

「ペエッ！」

お千賀が憎悪のこもった眼眸を熊七に向けると唾を吐きかけたのである。

「クソッ！ この阿魔！」

額にとばされた白いものを、袖で拭きながら熊七は、

「まだ、こりねえと見えるな」

というやいなや、身動きもならぬお千賀の乳房をぐいっと、つねりあげる。

「ウッ！ イタ！ イタいじゃあないか」

それは、激しい痛みであった。女が一番敏感な神経を憎悪を持ってつねられる苦痛は、

味わった女でなければわからない。

「イタ！ アウ！ ち、ちくしょう！」

弓なりになって、少しでも熊七の攻撃から身をさけようとするお千賀を、ニタニタと笑いながら、馬吉たちが眺めている。

一方――

君香は、昨夜、責められた部屋の廊下に、べたっと尻をおろした姿で、縛られていた。

（千、千さん……妾、とうとう、こんなみじめな姿に……）

君香は、昨夜の受難を千次郎に見られたというだけで、真赤になる。

（どうしたらよいのか知ら……あの人、とても許してくれやあしない……千さんのためにしたことなのだけど……）

ちかよってきたのは、狐六と辰五郎であった。小半刻の仮眠のあとなので、充血した目で、ニヤニヤしながら君香のそばに蹲まると「君香姐さん。昨夜は大奮闘だったねえ……ヒッヒッヒ」

と辰五郎は、必死で合わせる君香の膝へ手をのばしてくる。

狐六は、乳房をまさぐりながら、

「この雨じゃ、二、三日は、身動きもとれねえ。と、すると、君香姐さん。今夜と云わず

朝めしがすんだら、またまた罵られることになりそうですぜ。まあ、せいぜい、お躰を休めておきなせえ」

一糸もまとわず身悶える君香を満足そうにジロジロと眺めまわす。

「それにしても自分の情婦を、ここまでされても白状しねえとは、あの千次郎という男もてえしたやつさ」

牛造が、やってくる。南蛮屋の子分たちが目をさます。さらには、女中たちまでが、やってきて、人垣のなかの君香を見下ろして、ヒソヒソと囁いている。

「お千賀も、このざまだとよ。そっちの方を見物しに行くか」

狐六たちがたち上った。

雨足が、いちだんと激しくなる。

その雨に――

この別宅を見はっていた夜桜お蘭も、万が一、南蛮屋一味が動き出す気合はないと、びしょ濡れの着物をかわかすために、隠れ家へと急いだ。

同じ頃、日光へ向かった黒鍬左弁一行も、白根嵐しに、篠つくような雨が加わって、いらいらしながら男休山の麓で立往生するほか

はなかった。

ただ一人、行動をつづけている男がいる。

夢売又平――車軸をながす雨も、ものかわと、箱根の裏街道を、沼津から蒲原へさしかかっている。清水はもう、目と鼻のさきに迫っていた。

△千春初縛り▽

「これはこれは、刑部様。この雨のなかをようこそ」

玄関までいそいそと出迎えた南蛮屋の挨拶に、応えもせずこの根岸の別邸を、奥へとずいっと入っていく武士がいた。年の頃は五十恰好、猫頭巾をかぶっている。おつきのいずれも、ひとくせふたくせありそうな武士が三人、これまた笑顔ひとつ見せず廊下を渡る。

長州藩江戸詰御勘定役木更津刑部、倒幕運動の旗頭である長州藩のきけものとして、云わば、敵中である江戸にあり、維新回天の運動の財政面を一手に牛耳っている男である。

「南蛮屋、まだ、謎はとけぬか」

猫頭巾をとった目がきらりと光る。

「はい。黒駒の勝蔵から報告させましたとおり、最後の一句がどうしても……」

「して、老中や、小栗美作のうごきは」

「これも未だ、明確には」

「つかめておらぬと申すか」

「はい」

「伊皿子の別宅を襲ったのも、勝蔵の隠れ家をおそったのも、同一人の仕業。これが老中稲葉の手のものでなければよいが……もし、そうだとすると、八重垣大学が白状させられ吉宗の埋蔵金は最早、奴等の手に渡っておるやも知れぬ」

「ま、まさか。まだ、そのようなことは」

あわてる南蛮屋に、

「今日、余がこうしてじきじき参ったのは、大学の息子とかいう千次郎を取り調べてみたいからじゃ」

「昨夜も相当に、いためつけましたれど」

「なまぬるいわ！ 白状いたさぬところをみれば、お前たちの責め方が足りぬのよ」

「申し訳ございませぬ」

「案内いたせ、余が、責めてみる」

南蛮屋と勝蔵は、顔を見合わせるとうなずきあって、さきに立つ。

庭に、三棟並んでいる土蔵のひとつ。

その二階に、ひきすえられているのは、お

千賀、君香、千春の三人であった。

稀頭の肌襦袢に、純白の湯文字姿の千春をのぞいて、あとの二人は昨夜のままの素裸である。じろっと見下ろして、供侍に、

「白木、工藤、安田、遠慮容赦するではないぞ。徹底して責めい！ 余は、階下で、千次郎を責めよう」

と云い放った刑部は、足音も荒く階段を下へとおりていく。南蛮屋が二、三人をつれてこれに従う。階下では千次郎と望月秀之進が緊縛されつづけた身体をいも虫のように横たえていたが、刑部たちをみると、

「俺は、ほんとに何も知らねえぜ。女九双までは知っているが、黒、赤、縄十六方なんて聞いたこともねえ！」

千次郎が叫ぶ。

「聞きあきた台詞だぜ。もちっと別のこたあ云えねえのかね」

南蛮屋が、あごで天井を指した。

ギヤマンの天井であった。すきものでもある南蛮屋が、時々、子分夫婦を階上に追いあげて、下から眺めて楽しんでいたのである。

「千次郎、今からこの上で、どんな修羅場が展開するか、よく見てるがいいぜ、必ず白状したくならあな」

大雨のため、うす暗い土蔵のなかに、蠟燭が次々と、ともされていく。

刑部は、唇を結んだまま床几に倚る。

「さあ、始めるぜ」

南蛮屋の子分たちが、千次郎と望月を床に仰向けて、縛りつけ、その喉の上下に按摩膏薬をはりつけて眼を閉ざさないように固定する。ギヤマンの上に先ず現われたのは、君香であった。よろめくように坐ったが、尻から腰、太腿と異常に大きくてなまなましく、顔を見なければ、君香とは思われない。ギヤマンのいたずらであろう。それにしても、産毛の一本にいたるまでが、刻明に、見とおされる。

安田がもうみるかげもない島田崩しの髷の付根を持つと俯伏にさせ、ばたつかせる両足を、背後で縛った手首と縄で結びつけると、押しつぶされた乳房のあたりが、くもってみえる。

工藤が滑車をおろすと、その鉤に君香の手首の縄をかけ、力一杯ひっぱっていく。ギヤマンの上で君香の躰が、徐々に引き上げられていく。

両眼を吊りあげ、顔をくしゃくしゃにして苦痛に耐える君香の姿は無残であった。もう

女というよりも、一箇の肉塊が、吊り上げられていようである。安田がその君香の軀をくるくるくると、回転させ始める。涙か汗かばたばたとギヤマンの上に水滴をこぼしながら、君香は廻る。

言語に絶した苦痛である。

思わず、顔をよこに向ける千次郎のそばに子分がちかより、上を見つめさせる。

何をわめいているのか、必死で、唇を上下させる君香——、刑部は、千次郎を眺める。まだ白状する気配はない。

二十回も回転させた頃、君香は遂にがっくりと反らせていたうなじをおとし、全身の力を抜いた。安田が急いで滑車をおろす。ギヤマンに押しつけられた君香の顔には、もう苦痛よりも恍惚に似た表情がうかんでいた。

ひきおこされ視界から消えた君香に代わって本紋綸子の湯文字が、丸く、白い花のように舞う。

「千春、いよいよお前の番だぜ。おぼこのままだと思わぬこともなかったが……」

階上で、勝蔵がニタツと、こう云と、
「安田さま。せめて、その白いものは、子分どもにとらせてやっちゃあくれませんか」

安田がうなずくのと、辰五郎、狐六がとび出すのが同時であった。せわしげに縄をとくと、べりっべりっと音をさせて、肌襦袢をむしりととり、ぽっくりとあらわれた雪のように白い処女の乳房に、下卑た声でひきつるように笑った。

「ヘッヘッヘッ、このお嬢さん。生まれて始めてこの乳房を、あつしに触られることになるんではない……ヒッヒッヒッ……」

千春が、何度、絶叫しても二人は、その動作をやめようとはしない。

辰五郎のどすぐろい掌に、珊瑚樹の実のようなみずみずしい乳首が可憐にゆれる。と、熊七の手が、湯文字の紐をひきちぎる。ハアツと、坐りなおすひまもなく、本紋綸子が、宙に舞う。

「やめてくれい！」

階下で、望月秀之進が叫んだが、もうその声には、意地もはりもなく、早くこの悪夢から、解放されたいという、訴えるような響があった。

千春の初縛りは、どうやら赤鯢丹波が、買って出たらしく、例の赤白まだら縄を手にすると、奇妙な形に縛りあげていく。

「方円流早蜘蛛糸縄か……南蛮屋。丹波なか

なかやるのう」

刑部が一言、洩らした。

早蜘蛛糸縄は、早縄の一種である。

捕縄術には、早縄——二尋半の縄でかける逮捕用のものと、本縄——五尋半の縄でかける強訊用のものがある。早縄は速度が問題である。いかにして相手の抵抗を早く止めさせるか。いま丹波のかけた早蜘蛛糸縄は両手首に絡め、双のてのひらに斜めに施縄し、余った縄を首に回すだけという一番簡単な、しかも、抵抗を完全に封じられてしまうというものであった。従って、千春のきらめくように輝く前面にも、背中にも下半身にも、縄は一筋もかかっていない。

処女の裸身を鑑賞するのに、もってこいの縄がけであった。

丹波が千春の軀から離れると、安田がちかより縄尻をとって立たせる。

ギヤマンをとおして下から見上げる千春の裸身は、内股や、太腿が、きわだって大きく見え、得も云われぬ美しさであった。

縄尻を鉤にとめられ、立ったままの千春の前に、白木が、蠟燭を手にして近寄ると、恐怖におののく瞳をのぞき込むようにしながら

その腋の下に焰をちかよせていく。

絶叫が天井をとおしてかすかに聞こえる。

踏んばった足のうらがいたましい。その足首を辰五郎と狐六が持つと、一寸刻みに割っていく。白木の手の蠟燭が次第に下におりていき、腰をかがめ、望月たちの目には、千春のすらりと伸びた左脚だけがうかぶ。

「ギャアッ！」

はつきりと、絶叫が望月の耳に入ったが、望月はもう、焦点の合わない目をうつろに開いているだけであった。

階上では、生臭い匂いが漂うなかで、千春が、がっくりと首をおとしていた。

「さすがに白木さまだ。徹底した責めかたをなさる」

勝蔵がひとり言を洩らす。ニヤリッと笑った白木又五郎は、お千賀に目をつけると、千春の足もとにひっぱってきて、手足を「大」の字に部屋の四隅から伸びた縄に固定するとその額に一本、へその上に一本、そして太腿に一本と百匁蠟燭をたて、さらに一本を、横倒しになったままで焰をとす。

さすがのお千賀が、慄然となる責めであった。全裸の軀を四本の蠟燭で責められて、動

くこともならず、お千賀は、熱い蠟涙を、ただ無抵抗でうけるほかはなかったのである。

格子窓のそとは、雨が降りしきっていた。どうしても白状しない千次郎に業をにやした刑部は、今度は、当の千次郎と望月秀之進を、拷問にかけ始めた。

駿河問い、石抱き、逆さ吊り……。

まるで地獄さながらの陰惨な光景が、午の刻をすぎ、夕暮が迫る頃まで展開されたが、黒、赤、縄、十六方の謎を知っているのか、真実知らないのか、千次郎は、遂に白状しない。

「しぶとい奴よのう」

刑部は床几からたち上ると、酒宴の準備のとのつっている座敷へと、番傘をさして敷石を踏んでいった。

次の日も、丸一日中、拷問されつづけたが千次郎は、頑強に口を噤んだままであった。

△次郎長殴り込み▽

夢売の又平から、事の次第を知らされた清水の次郎長が大政・小政・大瀬半五郎を始め三十四人の子分たちと、雨のなかを壮絶ななぐり込みをかけたのは、南蛮屋での二日目の夜を刑部が過ごした朝、七時半の頃である。

甲州は黒駒村の名主の子である勝蔵と、次郎長との対立は嘉永五年に始まるから、もう十年も前になる。駿河・三河・遠江と、縄張りを広めようとする勝蔵のうごきは、山国である甲州人の宿命とも云える。武田信玄がそうであり、それを迎え討ったのが徳川家康であった。その家康のように、どうしても甲州勢の進出を防がなければならないのが、次郎長に課せられた、云わば使命であった。

伊豆の大場の久六、武蔵の小川幸八、伊勢の安濃屋徳次郎などは、勝蔵の勢威になびいていた。

対する次郎長は伊豆の石屋重蔵、武蔵の高萩万次郎、三河の吉良の仁吉、同じく寺津の間之助などを配下におさめ、つい二年前の元治元年四月八日、世に名高い勢州は鈴鹿郡荒神山で大喧嘩を演じたばかりである。あのでいりは、次郎長側の死者二人、重傷者十三人そのうち、吉良の仁吉が翌日、死んだのに対して、安濃屋徳次郎をたすけた黒駒側に死者はなく、軽傷者六名というありさまだったのだから、実質、次郎長側の敗北であった。

その黒駒勝蔵に目をつけたのが、長州藩の桂小五郎であり、以後、勝蔵は、勤皇倒幕を旗印とする薩摩・長州両藩のために、こまめ

に働いてきたのである。

次郎長は神君家康公を祭る久能山と目と鼻の清水の生まれ、どうしても佐幕派にならざるを得ない。また、幕閣に勝海舟を始め二、三の知名を持っていたのである。

夢売の又平からの報せで、好機と判断した次郎長は雨のなかを昼夜兼行、江戸に潜入。いったん高萩万次郎の家につき、仮眠をとり敵状をさぐるや、一挙に、夜襲策に打ってでたのであった。

寝込みをおそわれた南蛮屋たちが、驚きあわてたのも無理はなかった。

斬られ、たたき伏せられ、座敷に連れ込んで弄んだままにしておいた千春と望月秀之進それにお千賀を奪いとられてしまったのであったが、次郎長側にも誤算があった。

それは、万一、動き出す気合はないとお蘭が、隠れ家に帰り着物を乾している間に、別邸に入っていた木更津刑部達四人の武士の存在であった。

四人の武士に対して、やくざ剣法では到底太刀打ちはできない。

夜のあけそめる頃には、次第に斬り立てられて、結局は、黒駒の勝蔵はじめ赤鯺丹波、辰五郎、狐六たちには傷を負わせることもできず、ひき揚げるほかはなかった。

途中——人数を改めた次郎長は、ほぞをかんだ。一生一代の大喧嘩と無理に云うので参加させた女房のお長、大瀬半五郎、その女房で男まさりのお豊、それに豚松と四人の姿がどうしても見えない。

取って帰そうとする小政たちを次郎長はとめた。明るくなれば、箱根の関所を通らず裏街道を抜けた次郎長側にとって不利である。しかしこのまま見捨てるわけにもいかぬ。ともかくも高萩万次郎の家に帰った次郎長は、軍師格の大政と相談して、勝海舟に一切を打ちあけることにしたのである。

仔細を知った海舟は、直ちに心きいた旗本二十数人を次郎長に加勢させ、根岸の南蛮屋別宅を襲撃させたのである。

慶応元年と云えば、もう江戸の町の治安は乱れに乱れ、打ちこわしや百姓一揆が頻発し夜盗、辻斬りの類が横行していたので、海舟のためには生命も捨てようという若い血気の旗本たちが、かねて長州藩と結托していると噂される南蛮屋を襲ったとしても、南北両江戸町奉行は、目くじらたてて詮議することはなかった。

が——、もぬけのから——。

次郎長たちが捕えたのは、浪人風の男と数人の三下やくざたちだけで、南蛮屋をはじめ黒駒一家は影も形も見えず、千次郎、君香、それにお長たちの姿もない。

齒がみして口惜しがる次郎長たちに、「親分、心配しなさんな。お蘭もどうやらいっしょらしいから、どんなことがあってもお長さんやお豊さんには、指一本触らせねえよう、うまくやりませう。フッフッフ……草の根分けても両三日のうちに、南蛮屋の新しい隠れ家をきつと探し出して見せますぜ」

夢売の又平は威勢のいい啖呵をきくと、小降りになった雨のなかを利休ねずみ色に煙っている町へとび出していったが、小路をまがると、ひとり、こう呟いていた。

「お蘭のバカ野郎……なぐり込みの失敗は、おめえが見はりを怠ったせいばかりじゃあねえのに。フン、柄になく責任を感じやがってよ、いっしょに捕まるなんて、いってえなんて女なんぞでえ。この又平さまの気持ちも知らねえで……」

千春が、九カ月ぶりに、望月秀之進を伴って、両親のいない小者の権三だけが、しょんぼりしている我が家に帰り、浅草は伝法院の

裏長屋で、お千賀が、亭主の朱房の重蔵からこつぴどく叱りつけられている頃――

黒鯨組の黒鯨左弁が、活動を再び開始していた。

△お節あぐら縛り▽

三日間、日光の男体、女体の山々をかけずり廻った黒鯨左弁は、男六双にして起つ、女九双にしてすすり泣く、陰陽相なかばず、という文句を解いただけではどうにもならないことを知ったのである。

――黒赤縄十六方、三方より十二方に至る二十七町。

「稲葉様、小栗様。この三方より十二方に至るが、多分、方角を示すものと思われます。

その方角へ二十七町……要は、八重垣流の秘伝に必ず伝えられている筈の黒赤縄十六方の縛り。これがわかりませぬと……」

老中稲葉美濃が、懨然とした表情で、

「されど左弁。南町奉行筆頭与力たる八重垣大学、いかに責めても知らぬ存ぜぬと申し立てるとか申すが」

「いかにも。が、それは、我等の素姓を存ぜぬゆえのことかと。そこで、老中稲葉様がじ

きじきお訊ねあそばしますれば、奴も幕臣、幕府存亡の危機なれば、一切を申し上ぐるやと思われます」

「まこと存じておればのう」

勘定奉行小栗上野が口をはさんだ。

「左弁、大学はまこと存じておるのか。八重垣流捕縄術にまこと黒赤縄十六方という縄がけがあるのか、どうじゃ」

「残念ながら、そこまでは。……されど、男六双、女九双、いずれも八重垣流のもの」
「稲葉殿」

小栗上野は、決断を迫るように云った。

「老中ご自身の出馬はいかがとも思われますが、何事も徳川家の御為め。まげてじきじきのお取り調べを」

稲葉が細く小さい耳をたてに振った。

八重垣大学、その妻、節。大学の高弟である笹川妥女夫婦が、小塚っ原のお仕置場に近い金杉にある黒鯨組の隠れ家から、老中稲葉美濃守正邦の本所大川端にある中屋敷に連れこまれたのは、その夜も九つに近い頃であった。四つの駕籠が、表門よこの潜戸から、やぶかんぞうやのあざみの花が咲いている広い庭を横切り、内庭の廊下の下にすえられる。

よろめきでた四人のまわりをひしひしと取りかこんで、一団となった黒い影が、奥の座敷牢へと消えた。

四十坪はあろう広さ。二間幅の板間いたのまをはさんで左右に四つの牢。つきあたりの壁には、突棒、さすまた、袋がらみなど捕物道具が並べられてあり、ちらっと見えるのは、三角木馬の尻であろうか、くろずんだ鈍い色を妖しげに高灯台の光をうけてきらめかせている。五百匁はあろう大蠟燭に、次々と火がともされ、牢内は昼のように明るくなる。

一人ずつ牢に入れられた四人は、いずれも囚衣を着せられ、その上を黒鯨流中陰縦交縄できびしく縛られていた。

「お節、すまぬ、申し訳ない……」

大学が、前の牢で、しっかりと膝を合わせているお節によびかけた。

「あなた様……千、千春たちは、いかがなっておりますようか……」

伊皿子の南蛮屋で、無惨な姿を見たきりの二人にとって、愛娘千春のその後だけが気がかりであった。

「先生。まこと黒赤縄十六方という縄捌き、八重垣流にはないのでござりまするか」

妥女の血を吐くような声であった。八重垣

流を修得しているというだけで、ここ十日ほど、全く思いがけぬ危難と屈辱をうけつづけた女であった。前の牢で、しのびないでいる妻の三千代のためにも、大学が、黒赤縄十

毎月確実に入手されるために

本誌予約購読者を募る

毎月二十五日確実発売!

一月分	1冊	三五〇円(送20円)
三月分	3冊	一〇五〇円(送共)
半年分	6冊	二一〇〇円(送共)
一年分	12冊	四二〇〇円(送共)

郵便番号
558

○本誌の入手がなかなか困難であるとか、或は地方のため、入手することが出来ないとかいう声を聞きます。又、毎月確実に、早い目に、手に入れたらという御要望をよく承ります。そういった方々は、どうぞ是非月極御予約下さるようお願い致します。毎月製本完成と同時にお手元までお届け致します。

○直接予約購読のお申込みを下さるのには大阪市住吉局私書箱第四十一号曉出版株式会社宛(郵便番号五五八)表記予約購読料をお払込みの上、何年何月号より何カ月分と御指定下さい。

○三月分以上お申込みの節は、送料、包装代などは、総べて当社にて負担致します。但し一冊毎お申込みの方は、送料として一冊分二十円の御負担を願います。

○御送金下さる場合は、『現金書留、小為替、定額小為替、(切手代用は一割増)振替

六方の秘技を知っているのであれば、白状してもらいたい思いである。

「先生、どうやらこの屋敷は武家の住居、今までのならず者とは異なっております。事と

(大阪四二七八三番)のいずれかをご利用願います。現金の場合、普通郵便封入は違法です。必ず『現金書留』にして下さい。

○予約お申込みの方には、毎月二十日、印刷完成と同時に、外部から見えないように厳重包装の上、一斉に発送申し上げます。

○毎月一冊お申込み下さる方は、誌代送料三七〇円をなるべく毎月十五日頃までに御送金頂ければ、印刷完成と同時に、予約購読者の方の分と一緒に発送致します。

○予約購読のお申込みの際は、必ず何月号から何カ月分送れとお書き願います。第一回分発送の際、明細を雑誌に添付致します。何月号からとお書きにならないときは、重複や欠号をきたします。御留意願います。

○予約金が切れましたときは、封筒の上に△本号にて前金切△の判を捺印致します。△継続お払込み願います。△継続のお払込みでも何月号からと御明記願います。

○局留にて雑誌をお受けとりになられる方は、毎月二十五日頃、局へおいで下さい。局留郵便物の受取り方は、先ず御注文の際お受取りになりたい郵便局(特定郵便局でも結構です)と受取人のお名前とをお知らせ下さい。当方では御指定の局留としてお送りいたします。数日後その局で御受領願います。局での留置期間は十日間でその間にお受取りにならないときは、発送人に返戻されます。

次第によっては、教授なされては……」

女言葉の途中で、扉の金具の軋む音がして、数人の男たちが入ってきた。その先頭の男をみた途端、

「おお、稲葉、稲葉さまではございませぬか！」

大学が、大声をあげて格子に顔をすりよせる。

老中稲葉美濃、年に数度は、江戸城内の大広間で、はるか上座ではあったが見上げた顔である。

「それに、小、小栗さまも！」

大学の顔には喜びの色がうかんだ。地獄に仏とはこの事であろう。南町奉行筆頭与力、何ものとも知れぬ七人組に捕えられ、拷問され、運ばれた場所に、上司である老中がいたのである。(救われた!)と思うのが当然であろう。

が、しかし——するとあの七人組の男たちは、老中と何の関係があるのか……そうか、やはり黒鯨組であった……大学は、老中のそばにたっている黒鯨左弁たちの顔を見つめてハツとなる。

「すると! 稲葉様、このたびの件、老中様がうしろだて!」

大学の顔は、驚きのため、みるみる蒼白になっていく。

「存、存じませぬ！ 真実、八重垣流に黒、赤、縄十六方などと呼ばれる術はございませぬ。まことでござりまする。武士に二言とてはありませぬ！」

必死で叫ぶ大学に、

「それは、これから取り調べればわかることよのう」

と稲葉は、冷たく云い放つと、側用人の久松伴太夫に目配せして、小栗上野とともに床几によって腕を組んだ。

「善七、お仕置を存分にいたしてみい。そち流にな」

伴太夫の命令ですすみでたのは、非人頭の車屋善七とその手下の因州、野州、予州たちであった。

非人には氏名はなく、それぞれの国の名でお互いに呼び合うのが習慣である。

「予州、誰からいくかのう」

因州は、舌なめずりしながら四つの牢を見廻していたが、

「この女からいくか」

とお節に目をつけると、三人で牢内に入っていく。

ぞろぞろと、ぼろぼろのむさい着物をつけた非人たちに縄尻をとられたお節が、

「あ、あなたさま！」

と悲痛な声をあげる。

ムツとするいやな臭いがお節の鼻につく。

予州はお節の縄をいったん解くと、あわてて居ずまいを直すのもかまわず、真新しい囚衣の双肌をひっぺがえした。

「アレッ！ なにをするのです！」

武士の妻らしくお節が叱りつけたが、そんなことにはトンとお構いなしで、

「ヘッヘッヘッ、この女、いい肌してるじゃあねえかよう」

よだれを垂らしながら予州が、

鬱金色に輝くお節の肩に手をのせたものだから、

「お、おやめなさい！」

パチリッとお節がその手を払う。刹那、無

防備になった乳房に、得たりとばかりに因州がかじりつく。

「ヒ、ヒャアッ！」

お節がのけぞる。

三人の非人が、お節の上半身をなぶりつづけるのを眺めながら、

「大学殿。早く白状なさることですな。そうでないと、あたら旗本二百石取りの奥方が非

人風情の思いのままに戮られますぞ。ごらんなされい」

伴太夫の言葉に、大学は、

「存じておりませぬ！ 存じておれば必ず申し上げておりまする！ 当八重垣流に黒赤縄十六方と申す秘伝は、まこと無い！ 無いのでございまする！」

と絶叫したが、稲葉たちの顔色は少しも変わらなかった。

赤松材の格子を通して、お節が、もてあそばれつづけている。

「お節！ 許してくれい！ 僕は、僕はほんとうに知らないのだあ！」

血を吐くような大学の叫びも耳に入らないように、野州はお節をひきずり出すと、大学の牢のすぐ前で、高手小手に縄をかけ、すんなりとのびた両脚をあぐらに組ませた上で、ニタツと笑ってお節の囚衣を支えている腰の荒縄をひきちぎり、囚衣を高々とほうりなげてしまう。

お節はこうして、一糸まとわぬ肉体をあぐら縛りで、夫の前に曝したのである。

——(つづく)——

カット・並田新二



魅惑のオシメ

告 白

安 田 隆 夫

四十才の社会的地位も多少はある中年男が毎日、オシメを当て、オシメカバーでピッチリ覆いながら仕事に励んでいる……正常な？

人達からみれば、全く噴飯ものでしょうね。

自分でもわからないのです。何故、大柄な模様のオシメ、飴色やピンクのゴムカバーにこれほどの断ち難い魅力を感じるのか……。

絶えずこんな疑問を持ちながら、子供達には勿論のこと、家内にも内密で、朝、車の中の狭い座席で、やりにくいのにオムツを当てオムツカバーをしなければ落着けず、スタートするまでの日課となっています。

職場に就いたらバリバリ仕事はします。しかし、その合間々々に少しずつ洩らすのです

が、その時にはホンの一息、注意をそらさざるを得ません。

休憩時間になり、意識をオムツに向けてみると、全体にしみこんでズッシリとした重みと、ぴっちりと締まるオムツカバーの緊縛感が感じられ、えもいえぬ恍惚境に導いてくれるのです。

オシメカバーは「宇都宮ゴム」に頼んだもので、大人用の小サイズですから、私には、2・3枚のオシメを当てただけで充分以上に緊縛感があり、この締め具合はオシメマニアならではの味わえない妙味といえるだろうと思っています。

勿論、一日分の全量となると、たちまち溢

れて身動きがとれなくなりますので、時折は大便所へとびこんで小便をしなければなりません。が、一刻、はずしておいたのを再び当てる時の楽しさは、又、別なものを感じとれるのです。氷のような冷たさがじゅくりと腰を包みこみ、しばらくの間は特に、オシメとオシメカバーの存在をいやが上にも私に意識させてくれるのです。被虐感といえるのでしょうか？

この冷たさは、私の夢を容易にしてくれるようです。私はこの濡れたオシメを、女性の尿のせいだと幻想し、後手に縛られた私が女性の汚したオシメを当てられているのだと思いつくことにしているのです。

毎日、皆が退社した後でその日愛用したオシメを洗うのがまた楽しい日課となっていますが、干し場に苦労します。それでも止められずに続けているのですが、幼児願望というのとも、また違うような気がします。

花模様のオシメは自分で縫うのですが、出張の時には四六時中当てたままで、宿の女中さんに不思議がられたり、気の毒がられたりするの、テレくさいながらも愉しいことなのです。いつかは「どんな病気なのですか？」と真剣に訊ねられて、嬉しい困りかたをしたものでしたが、その女性の身内入院患者がいたらしいのでした。オシメやオシメカバーに興味のある方はいないでしょうか。

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表

鼻

(はなわ)

美

枷

輪

生

輪



鼻中隔に穿孔する——それは確かに痛いことです。だが私はそれを自己催眠をかけて行なっているのです。自己催眠などというとか難しいことのように思われましょうが、極めて簡単なことで、役者が芝居を演ずるにあたって、その役の人物になりきる、ちょうどそんなようなものだと思自身は思っています。私の場合、次のようなストーリーを幻想し、主人公になりきるといふ自己催眠を用いているのです。

× × × × ×

輪生(かずお)は、無人の駅を後にして山道をわけいり、鳴きすだく虫の音にふと足をとめて聞きいつていた。と、ふいに虫の音がピタリとやんだ。輪生も何となく人の気配を感じて辺りを見廻したが、その様子はない。「気のせいかな」と思い、再び山道を辿り始めた。だが、この時に輪生を凝視している女の視線が草叢のかげにあったこと、そして、それが輪生の運命を、地獄への道と大きく変えてしまうことになるうとは知るよしもなく澄みきった秋空と未知の山道を辿る楽しさに輪生は心からひたりきっていた。

やがて、むこうから来る和服の中年女とバツタリ行きあった。せまい山道のこととて、輪生は身をよけて女をやりすごしたが、その時、女の体と軽くすれあった事も輪生は格別注意もしていなかった。再び歩を進めて行くと四、五分も過ぎた頃だろうか、後から「おい！」と呼ぶ声がする。ふり返ると、先程の女が急ぎ足でやってくるではないか。待っている輪生に追いつくなり、女はいきなり輪生の右手首をつかみ、荒い言葉で云った。「おい、お前は妾の財布を拾っただろう！」一瞬ポカンとした輪生も、全く覚えのないこととて否定すると、

「拾ったんじゃないのなら、さっきすれちがった時に掏り盗ったんだな。お前はスリか。あの中には大切なお金が十万円も入っていたんだ、サア、返せ！」

「とんでもない。本当に掏られたのなら僕ではない、人違いです」

「いいや、そんなはずはない。そんなにいうならお前の身体検査をさせておくれ、お前が掏ったにきまっているから……」

「というので、しらべさせればあらぬ疑いもはれよう、と承諾すると、女は輪生のナツプザックをひろげてみたり、ジャンパーのポケットへ手をつっこんだり、ズボンのポケットの上をさすってみたりしていたが、いきなりズボンのポケットへ手を入れ、

「あった！これだよ、これが妾の財布だ。これでも知らないというのかい？」

「え？ そんな財布、僕はみたこともありません、どういふことですか？」

「とぼけるんじゃないよ。とらない財布がどうしてお前のポケットに入っているんだい？」

「オヤ、中は空じゃないか。入っていたお金はどうしたんだえ？ あのと十万円がなくて、妾は首をくくらずにちやなくなるんだよ。サア、早く返しておくれ！」

「いいえ、本当に知らないんです。何かの間違いだと思います。どうかわかって下さい、決して僕はお金などとりません。もしかすると、僕の知らないうちに、本当のスリが空の財布を僕のポケットへ……」

「何をいつてるのさ、そんなに言うならお前を裸にしてしらべさせておくれ。それで出なければ妾が謝るが、お前もこうなった以上いやとはいえないね。妾の家はすぐそこだから来ておくれ！」

「というなり、輪生の手首をグイグイひっぱって、今来た道をもどり出した。暫くして傍道に入ると竹藪に囲まれた中に粗末な一軒家があった。

「サア、ここが妾の家だよ。では、徹底的にしらべさせてもらうから、着ているものを全部脱いでおくれ！」

物置小屋の前でようやく掴まれていた手首をはなされ、輪生も、しらべさせればわかることだ、といわれるままに服を脱ぎ出した。

「シャツも、靴下も、パンツも全部脱ぐんだよ！ スリにくせして何も恥かしがること

なかりうに……」

「でも、パンツだけは勘忍して下さい。本当にお金なんか持っていないから……」

「そんなに恥かしがるところをみると、お前は、まだ童貞なんだね。フッフ、まあ、いいや、パンツだけは残しておいてやろう。その代わり、手を動かさないように両手を上にあげて頭の後で組んでそのまま立っておいで！ 持物を順番にしらべてやるから。——おやかしいね、どこにもお金がないじゃないか。」

「すると、そのパンツの中があやしいな。そんなに脱ぎたくなければ上からさわってみるだけで許してやるから、足を開いてそのままじっとしているんだよ！」

「とアチコチ撫でまわしていたが、いきなり急所を力まかせに一撃したではないか。どう



してたまろう、「ぐ、ぐうっ！」とうめいたなり輪生はその場に悶絶する。ニンマリ笑った女は、苦もなく輪生を素裸にした上、

「馬鹿なヤツだよ。サッサと金を返せばいいのに、こうなった以上は拷問にかけてでも白状させてやるからね、覚悟おし！ フッフ、自分の汚れたパンツでもくわえておいで！」

と、後手に縛りあげ、パンツを口の中へねじこんだ上からサルグツワをし、僅かの間隔をあけて両足首を縄でつないでしまったのである。(写真①)

股間縛りにした縄を手にした女は、

「いつまでも寝ているんじゃないよ。サア、今からこの物置小屋でお前が白状するまで責めぬいてやるからそのつもりでおいで！」

と縄をグイグイひっぱり、縛りあげられて転っている輪生の体を下駄でところきらわず踏んだり蹴ったり、ムチでたたきのめす。

やっこのことで立ちあがった輪生は、

「もうこうなったらこちらのものね。妾の好きなように、お前のその体を拷問にかけて白状させてやるからね。フッフ、何をされてもされるがまま、妾の思いどおりになるより仕方ないものね。サア、トットとお入り！」

と、縄尻で尻をうたれながらヨチヨチ歩き

で小屋へ追いこまれる。(写真②)

「じゃ、今から始めるからね。覚悟はいいかい？ お前が本当のことを白状する気になるまで、責めて責めて責めぬいてやるからね！ どうせ白状するまであの手この手と拷問され続けるんだから、最後までシラを切ることはできやしないんだよ。アッサリ白状してしまえばいいのに、バカな子だよ、お前は……」

地獄の拷問部屋となった物置小屋の中で、輪生は、後手吊り、逆さ吊りから海老縛り、逆海老、鞭打ち、水責め、ソロバン責め、つねる、噛む、ペンチ、タバコ、針、焼火箸、灸、蹴ったり踏んだり、急所にオモリを吊られたり、とありとあらゆる責めをその体に加えられる。

「許して！ ちがう！ ごめんなさい！ イヤ、イヤ！」

と必死になって訴える声もサルグツワにおさえられてうめき声としか聞こえず、懸命にふる首も頑強に否定しているとしか受けとられない。「これでもか！ どうだ、これでもまだ白状しないか！

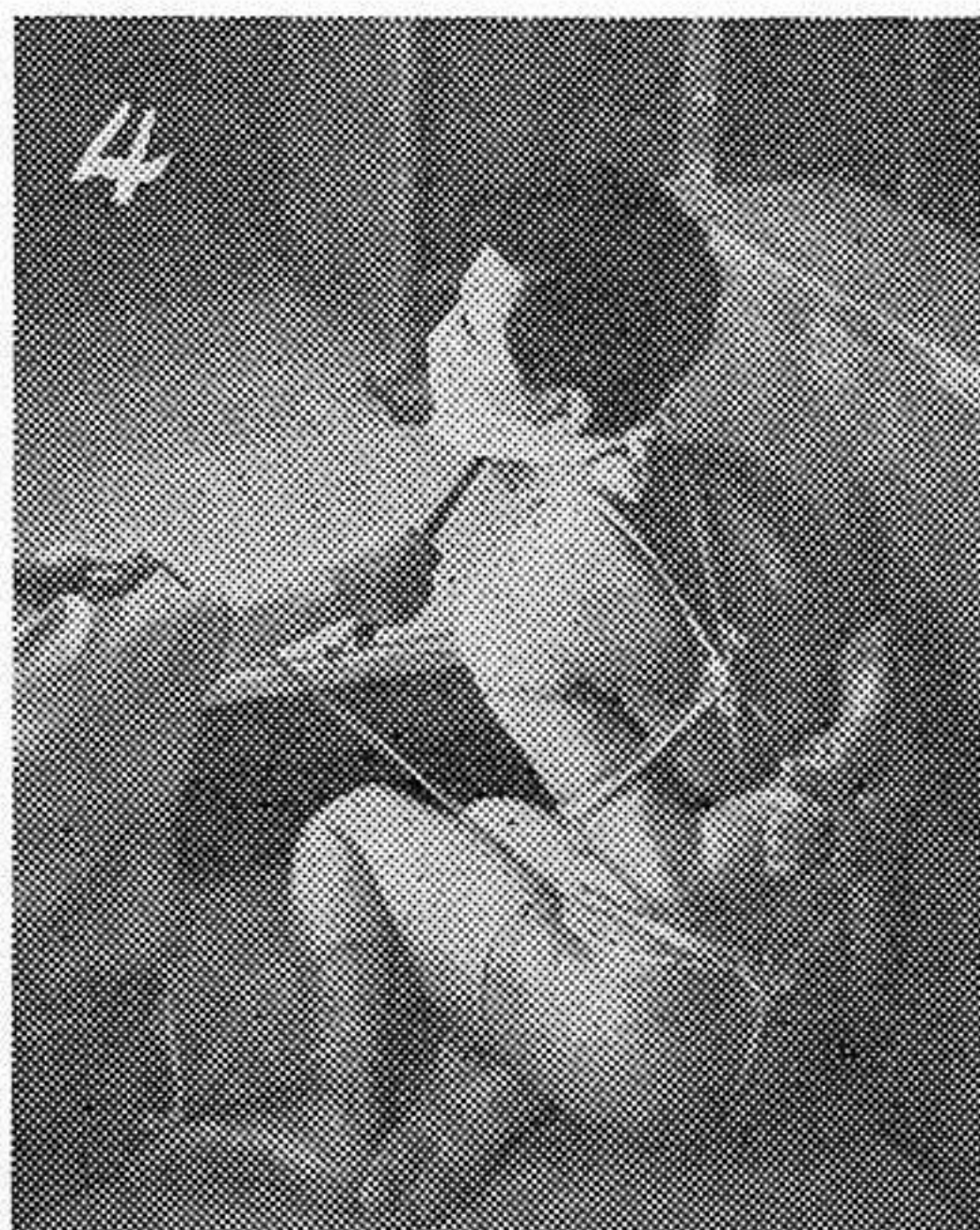
——サルグツワされていて

首を横にふるか、うなずくかで返事はできるだろうが……。

——おや、まだ白状しないつもりだね、本当に強情なヤツだよ。それともまだ責めたりないから、もっと責めて欲しいとでもいうのかい？ ヨーシ、そっちがその気ならまだまだ拷問の手はあるからね。妾はお前が苦しみ悶えるのを見るとゾクゾクするほど嬉しくなって、もっともっとその体をいびりぬいてやりたくなくなるくらいだから、いくらお前が強情をはっていても少しも構わない、その方がありがたいというものさ。まア、せいぜいがんばって、妾をタップリ楽しませておくれ！」(写真③)

一昼夜にわたって輪生は責めぬかれた上、最後に再び海老縛りにされ、ひきずり廻され





てた輪生は、ついに首を縦にふって拘り盗ったと自白する。

吊り上げからはやつのことで解放されたものの、サルグツワも一切の緊縛もそのまま、意識もモウロウとしたままの輪生を、ムチでつついたり、頭髪をつかんでゆさぶったりしながら、

「じゃ、今から聞くことに素直に答えるんだよ！ 口はきかなくっても、首の合図で答えりゃいいからね。フフフサルグツワをとって余計なことや泣きごとをいわれてはうるさいだけだから

な。——お前は妾の財布をすりとったね？

ウン、その調子でいいのよ。

早く白状すれば、拷問にかけられなくて済んだのに。バカだよこの子は。——じゃ、掏

った財布の中の十万円はどうしたのさ？——中から出したんだろう？——そして、どこ

かへ落としたんだね？——ウ

ン、それじゃそのお金を弁償して貰わなくちゃならんが、

どうしてくれるの？——帰ったら弁償する？ そんなのは

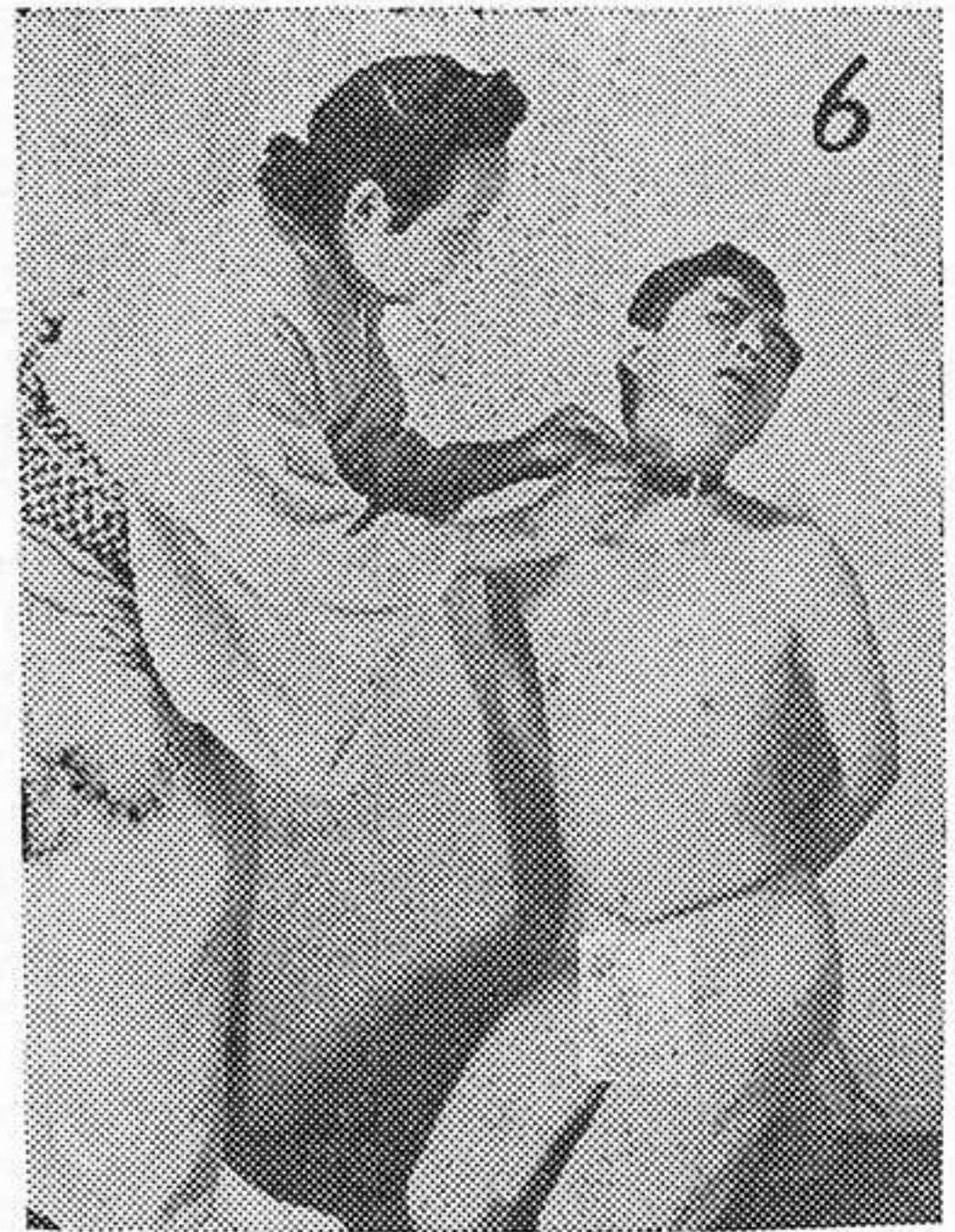


駄目よ。スリのいうことなんか信用できないものね——妾はね、お前のその体で弁償してもらいたいと思うんだけど……。なに、いや？ もっと責めて欲しいのかい？ どう？ え？ 承知だね——だがね、ただ下男として十万円分だけ働けばいいというんじゃない、お前の体を十万円の弁償として妾がもらって、その体を奴隷として死ぬまで使うっていうことなのよ！ そうすると、お前の体はもうお前のものじゃなくて、毛の一本から血の一滴まで妾のものになってしまうのだけど、それも承知だね？ フフフ、そう、素直ないい子になったわね。じゃ、約束したよ！ お前の体

体中をムチでうたれ蹴られたあげく、吊り上げられて、ムチ、キリ、ローソク、と責めを集中されたのだった。

「フフフ、どうだい、これでもまだ頑張るつもり？ もうそろそろ白状する気になったろうね。ええ？ それとも、このままもう一日放っておいてやろうか？ そうするとお前の体は、もう駄目になってしまいかも知れないよ。それでもいいのかい。ええ？ どうなんだい？」

身に覚えのないこととはいえ、一昼夜半におよぶ生地獄さながらの拷問に、脂汗にまみれ悶絶をくりかえさせられて精も根も尽きは



と輪生の縄をとくが、二昼夜におよぶ緊縛と拷問に、輪生はもはや指一本動かす力もなく、女のなすがままにされている。両手首を前でくられ辛うじて爪先立ちになるように吊られた輪生は、

「奴隷にこんなものはいらないからきれいに抜いてしまつて、これから、生えないようにしてあげるのよ!」と、腋毛はもちろんのこと、太股から胫にいたるまで、体毛を一本残らずきれいにむしりとられて毛根

は十萬円の弁償として妾がもらつて、妾の好きなように使うつてことを。——じゃ、今日はこのまま休ませてやろう。明日になったらその体を奴隷に向くよう、一寸手を加えて仕立てあげてやるからね」

と何も彼も上の空でうなづく輪生を、縄もとかずにそのまま柱へつなぎ、女は輪生を蹴倒して小屋から出て行った。(写真④)

翌朝、小屋へ入ってきた女は、着物を脱いで腰巻一つになりながら、

「サア、今日は約束どおりお前の体を奴隷としてつくりなおさせてもらふことにするからね。覚悟はよいかえ?」

破壊のクリームを全身にぬられた上、急所を針でチクチクさされて真赤にイレズミされてから、錠をはめられ、足首にもガッチリ足錠をかけ、「この体は永久に妾のものだというしるしをつけておこう!」と額とヘソに焼印をおされてしまふ。両手吊りからおろされた輪生はすぐさま後手錠を施され、

「歯はない方が、これからお前の口や舌ペラを使う時に便利だし、噛みついたたり自殺したりの予防にもなるから、とってしまおうね」

と頭を女の太股でシッカリおさえこまれ、上下の前歯をペンチでスッカリ抜きとられてしまふ。さらに「奴隷に人間のおしゃべりは

不要」と、キリを咽喉に突っこみ声帯を破壊して啞にされた上、「最後の仕上げに鼻輪をつければお前はもう立派な奴隷よ」とペンチで鼻をつままれ、顔も動かせずうめいている輪生の鼻へ、キリをさして穿孔し鼻輪をはめてしまふ。(写真⑤)

「サア、これでもうお前は完全な奴隷になったのよ。でも、まさかこんなにまでされるとは思っていなかったらうね。でも、お前が拘った十萬円の弁償として、この体を妾がもらったのだから、お前の体はもうお前のものではなくて妾のものになったのよ。だから妾が妾のものをどうしようと妾の勝手にして当り前でしょう。というわけで、妾の好きなようにお前の体をつくりなおしてやったのさ。お前の体はもう何一つさえお前の自由にはならないのよ! 煮て喰おうと焼いて喰おうと妾の自由になる所有物になったのだということ、これからも忘れるんじゃないよ。フフフお前はもう一生ここから外へは出られないんだから、まアその体で一生懸命妾に奉仕をして、気に入られるよう心掛けることね。思うさまこき使ったり、いびったり、なぶったりしてやるからそのつもりで覚悟おし。——お前はこの世から蒸発してしまつたんだから、

逃げようなどと思わないことよ。もっとも、その体ではシャバへ出ても仕方ないわね。フフフ

と引導をわたしながら着物を着た女は、さらに首輪をはめ、

「妾の言うことを聞かなかったり、逃げ出そうなどとしたら、どんな目に合わされるかわかっているわね。半殺しになるまで責めぬいて、それで足りなければ目玉をくりぬいたり、舌ペラをひっこぬいたり、手や足をチョン切ったりしてでも、絶対逃げられないような体にしてしまうからね。そのつもりでいておくれ。もっとも、お前の舌ペラは妾には大切なんだから、めったなことでは抜きはしないけどね。フフフ」(写真⑥)

こうして奴隷に仕立てあげられた輪生は、炊事、洗濯、掃除はもちろんのこと、風呂のたきつけから風呂場での世話、下着や着物の着せつけ、脱衣類の後片づけ、フトンのあげさげ、マッサージ、縫い物、下駄の手入れ、まき割り、水汲み、と、時には首輪、時には鼻輪に鎖をつながれ、ムチで追われ、或いは足にオモリを吊られるなどして拘束された体を、昼となく夜となくこき使われるばかりでなく、女の寝室での一切の奉仕、トイレット

ペーパーの代用やら便器の役割までその体に勤めさせられたり、女の気まぐれから犬や馬としての奉仕を強制されたり、一寸した落度を口実にお仕置きと称して、輪生にとっては死ぬ思いの責苦を面白半分に与えられたり、退屈しのぎや憂さばらしのなぶりものにされて楽しまれたりの毎日を送ることになった。

(写真⑦)

やがて、便利な奴隷、生きた道具であり、気ままにいびられるペット、そして、家畜、オモチャとしての日々を送ることになった輪生は、とらえられて数カ月を経たある日、女の気まぐれから、

「ねえ、妾、お前のその邪魔物を喰べてみたと思うんだけど、どう？ それ

を妾に頂戴な。——鎖でつないで飼いならしたり、仕込んだり自由に操ったりするには、便利なんだけど、どうせ、お前にはあっても役に立たないんだし、妾にはお前の舌ペラさえあれば充分なんだから……。フフフ」

と否も応もなく小屋へ連れ込み鼻輪を吊りあげて直立させた上、後手錠のまま鎖で身動きもできぬ

よう縛りあげ、

「じゃ、いいわね。もっとも、いやといってもこれではもうどうしようもないわね。どうされようとお前の体は妾の好きなようにされるしかないものね。諦めて頂戴な。——でもお別れの前にせいぜいお名残りを惜しませてやろうよ。フフフ、お情深い妾に感謝することよ。——奴隷のお前にはマスイもいらないわね。これは若返りのホルモン料理としてすばらしくよいそうだよ。お前だって妾の役に立つんだから嬉しいでしょう？——じゃ、ぼちぼち始めようね。どう、痛い？ フフフ、そりゃ痛いにきまっているわね。でも、痛くても自分ではどうしようもないわね。身動き



一つできなくっちゃ、妾の思うままにされるしか仕方がないんだものね」

といいながら切り取った傷口を糸で縫い合わせ、ようやく鼻輪吊りからおろして転がされた輪生に、

「どう？ サッパリしたでしょう。これでお前は、男でも女でもない、本当の奴隷になったのよ。こうした方が気立てもおとなしくなるそうだし、まア、これからもその体でせいぜい妾に尽くしておくれ。これは、あとで自分に料理してもらうことにしようね。フッフ自分で自分のものを料理するなんて面白いじゃない？ それにフクロはなめして妾の財布にするのよ。縁起がいいわ」

哀れにも男ではなくなった輪生は、体中とところきらず生傷、火傷、新旧のムチあとやらアザの絶えたことのない、今までにもまして苛酷な毎日を奴隷として過ごさねばならなかったが、一年近くもたった頃、後手錠のまま鼻輪をつながれて、女の寝室の隅におかれたオリの前にうずくまっていた輪生の体をふと見た女は云い出した。

「オヤ、お前は、イヤに肥って来たじゃないの？ そういえば去勢した豚は肉も柔らかくって脂ものり美味しくなるそうね。フッフ、

お前を豚や牛のように料理して喰べてみたくなつたわ。どう？ いいでしょう？ 料理させておくれね。お前は妾の物なんだから、どうしようも妾の自由にしていいんだものね。——お前が妾の奴隷になってから、仕事は全部やってくれるし、たっぷり楽しませてくれるし本当に便利で重宝させてもらったわ。でも、もうソロソロお前にも飽きて来たし、今度は可愛い女の子でもお前の代りに使ってみたいと思うから……」

輪生は肥るようにと脂肪分の多い餌を毎日タップリ与えられ、日常の家事やサービス、便器などは続けさせられながらも、あまりひどい仕事やお仕置きはされず、豚としての毎を送ることになる。(写真⑧)

やがてそれから一カ月も過ぎた頃、まるまると肥った輪生の体を尻や太股、肩とあちらこちらつまんでみた女は、

「フッフ、大分よく肉もついてきたようね。では、いよいよ今日は料理させてもらうことにするわ。覚悟はいいわね。かわいそうだけど、妾にみこまれたの

が運が悪かったと思って諦めておくれ。もうこうなっては、どうにも仕方がないものね。

——今だから言うけど、お金をとられたなんていうのはウソで、人違いでも何でもなかったのよ。お前を誘拐して奴隷にするためのお芝居だったのさ。フッフ、今さら驚いても悔んでもはじまらないし、どうしようもないことだけど……」

と鼻輪の鎖をひき、短刀で尻をつつきながら土間へと追い立て、「料理を始める前に、お腹の中をきれいにしておかなくっちゃ……」と浣腸した輪生を、





「サア、すんだらいよいよ始めるからこちらへおいで！」

と引立て両足を別々に吊って逆Y字吊りにし、水をぶっかけながらタワシでゴシゴシと丁寧に全身を洗い、頭を下にしてぶらさがっている輪生を撫ぜたりつまんだりしながら、「ここが奴隷豚の屠殺場というわけね、この刀でその体を生きたまま切り刻んで料理するのよ。フッフ、考えただけでも、身ぶるいするほど楽しくなってくるわ。——まず、首筋に刃を入れてこのカメの中へ生血をすっかりしぼってから、目玉や舌ペラを抜いてあげようね。その次は、足の先から頭のテッペンま

で生皮をすっぱり剥いてしまうの。それから心臓や生肝、胃腸、と内臓をそっくり取出してあげるわね。まア、その頃にはオダブツでただの肉のかたまりとなつてぶらさがっているだけでしょけどね。そうそう、脳味噌もとらなくっちゃ……。そして最後に、その脂がのっておいしそうなお肉を切取ってあげましょうね。フッフ、豚の体にはどこも捨てるところはないのよ。お肉や内臓はお料理に、腸を使ってソーセージもできるし、生血や生肝もよいおクスリに、皮はなめして使えるし骨だって、細工していろいろなものがつくれるし、シャレコウベは飾りものに、残ったところはスープのガラに、……とね。——そうそう、血で汚れるといけないから、妾も着物を脱ぐとしようか。いや、いま脱ぐから一寸、待っていておくれ。

——最後の最後まで妾に尽くしてくれお前のために、ひとおもいに殺すようなことはせずに少しでも長く生きていられるように、生きたままできるだけゆっくり時間をかけて解剖してあげようね。フッフ、有難く思っ

てお念仏でもとなえておいで！」(写真⑨)

× × × ×

そういう状態に、今、自分はおかれているのだ。

腕いてもビクとも動けないまでに体を縛りあげられ、固定されてしまっているのだからいくら痛くても苦しくても自分ではもうどうしようもない。いくらもがいてもあがいても女の好きなように扱われ、女の勝手にされるしか仕方がない。

濡衣をきせられて、身に覚えもない罪で強制的に女の所有物にされてしまい、歯は抜かれ啞にされイレズミや焼印をおされ、体毛は一本もなくなり鼻輪をとおされて、こんな生まれもつかぬ体にされてしまった上、手錠や足錠、腰の鎖や首輪と、自分の体でありながら、何一つさえ自分の自由にはならぬほどの拘束を受け、逃げることはおろか、抵抗一つできないまでにされてしまっているのだから鎖とムチで女の自由に扱われるしか他に仕方がない。

どんなにいやなつらい仕事でも女の思うままにされる以外に自分ではどうしようもない状態におかれているのだ。——

と想定することによって、自己催眠がかけ

られた状態になり例えば、鼻中隔に穿孔する時の痛みとかいろいろな自虐の苦痛を楽しんでいるのです。

また、私の場合、日常の仕事に際しても、例えば、暑い炎天下での荷物運びのようなつらい仕事、または夜おそくにどうしても片附けてしまわねばならぬいやな仕事などがある時に、自分は奴隷なのだ、女主人に命令されたのだ、と考えることによって、むしろ楽しみながらその仕事をおこなうことができています。

× × × × ×

ところで、最後に、私のおこなった鼻中隔穿孔体験のことを述べさせていただきますと思います。

まず、考えた末に用意した物は、三角錐と太さ二ミリの釘とヤスリ、それに毛抜きと消毒用アルコールとペニシリン軟膏です。

以前、ただの千枚通しで穿孔しようと何度も試みたのですが、これはどうしても成功しませんでした。一応は、錐の先が片方まで出るのですが、意外に鼻中隔の皮膚が強く、抵抗が大きくて孔を拡げることができなかったのです。

それに、翌日、同じ孔を刺して拡げようと

思っても孔の位置がわかりませんでしたし、放っておくとすぐ癒着して孔がなくなってしまうのでした。

そこで三角錐を用い、鼻中隔をひっぱって穿孔の位置をきめ、そこへ刃先を当てて徐々に力を加えて行き、先端が片方に少し出たところで、一気に力を入れて押し通してしまったのです。要するに、三角錐の刃先で切裂いたわけですが、案外簡単にいきました。砥石で刃先をよく砥いでおいたのがよかったのでしょうが、ペニシリン軟膏を塗って、しばらく指で両側から強くおさえていたら出血はすぐに止まってくれ、ホッとしました。

せっかく穿ったのに、また癒着されては困りますので、太さ二ミリの釘をヤスリで短く切って栓のように加工したものを、アルコールで消毒して、孔へとおしておきました。この釘は、頭を真赤に焼き、水につけて黒く酸化させたものを使ったのですが、サビ止めにもなるし傷口の消毒にもなると思ったからです。

最初の十日ほどは、傷跡がズキズキとうずいて困りましたが、前述の自己催眠で耐え、そのうずきがなくなった頃、今度は二・五ミリの釘で、同様に加工したものをおしこみま

した。勿論、ペニシリン軟膏は毎日つけていましたが、再びうずき始め、八、九日ほども苦しみました。そのうずきがなくなった頃今度は三ミリの釘で……、というように、うずきを感じなくなるたびに〇・五ミリずつ太い釘に変えて孔を拡げていったわけです。孔が大きくなるにつれて、うずく期間も、短くなったようでしたが、釘も太くなるにつれて少しずつ長くし、釘の頭も大きくなるのでヤスリで適当に削って使いました。

こうして私の場合、六ミリまで拡げてありますが、鼻中隔の肌の色に近い色をしたプラスチック棒を、糸巻きの変形のようにヤスリで加工して、ふだんはこれを孔にはめておきます。こうしておかないとせっかく拡げた孔もだんだん小さくなって行くからです。他人からはメッタなことではみつきりませんが、無色透明のプラスチックでつくったものを使ったところ、友人から、「むこうの光がみえる」と指摘されて、大いにあわてたことがありました。

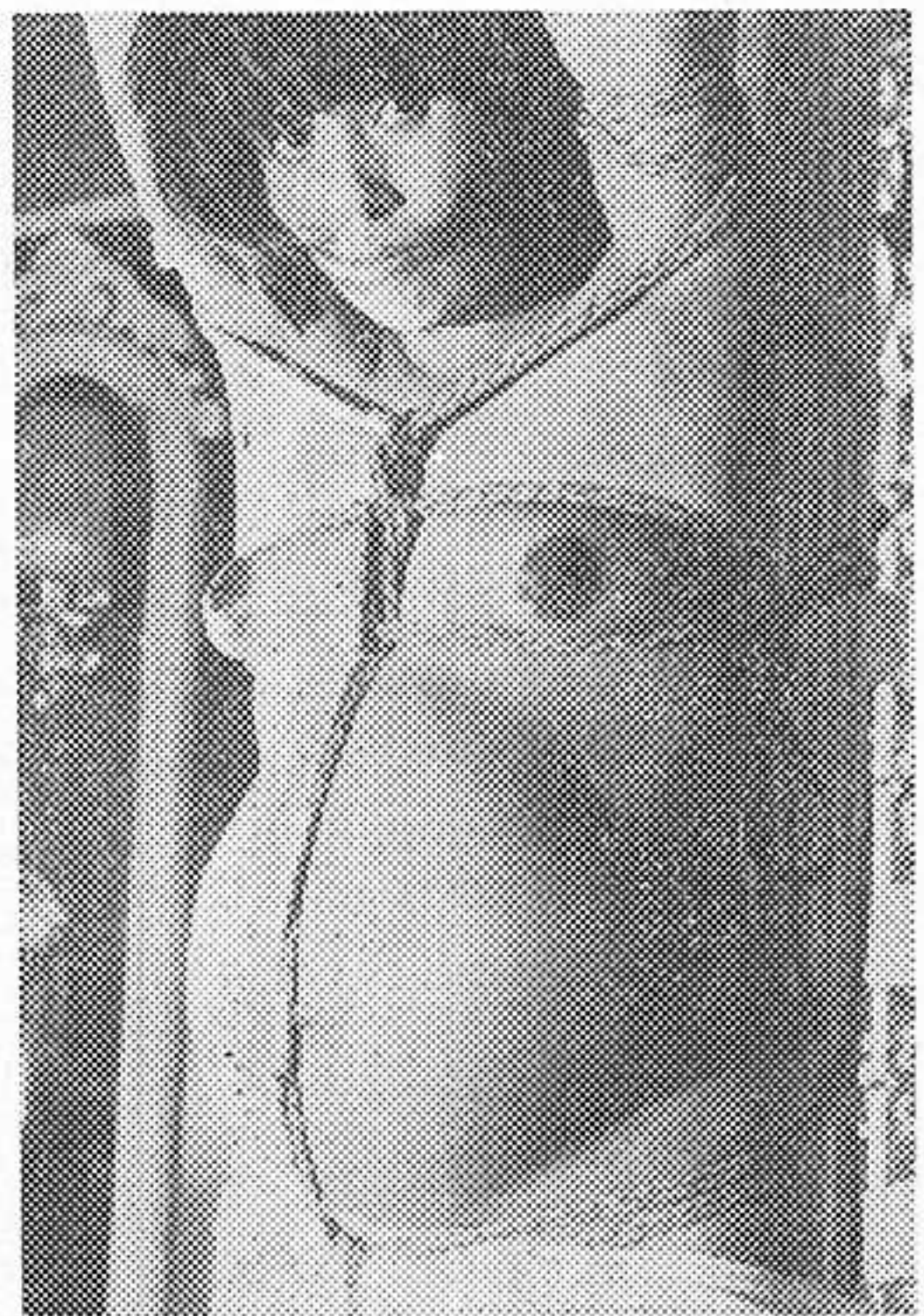
日常使う鼻輪としては、キーホルダーの輪を利用してありますが、本格的に牛の鼻輪を使ってみることもあります。

妊婦腹を晒したい

佐野みさ子さんへ

おねがい

羽鳥水江



木戸悦子さんの妊婦プレイ

九月号奇クサロンで、数カ月前からご自分の縛り写真を投稿していらっしやった佐野みさ子さんが、突然、現在妊娠中で、いずれ臨月近くなったら、ご自分の全裸妊婦フォトを発表したいと意向を述べておられます。このところ新しい妊婦フォトの公表・分譲がしばらく絶えていただけに、大変期待のもてる朗報と言わなければなりません。十月号には、あるいはと予期していたその後の経過が何ものっていなかったのは残念でした。今、間もなく十一月号が見られるという時期に、急いで投稿しますのは、この小文が十二月号に間

に合わない、と、どうやら私の注文も時期遅れになりそうなので、一言したため次第なのです。

佐野みさ子さん。あなたのようにSMに積極的な理解と興味をお持ちの方が、堂々と「妊婦腹を晒したい」「金原さんの妊婦フォトとくらべて下さい。きっと金原さんにまけないくらいまるまるしたおなかをお見せ出来ると思います」と言われるのに、深く敬意を表します。そういう決心をなさった勇氣に感謝します。是非その通り実行なさることを期待しています。それについて、二三の注文を

申し上げることをお許し下さい。

「いずれ九カ月のまるまるとした妊婦腹になりましたら」とあなたはおっしゃいます。妊娠九カ月といえば、子宮が一番上の方まで上って来る時期です。正確に言う、妊娠満九カ月、つまり分娩の約四週間前、いわゆる妊娠九カ月の終りから臨月に入るころです。その時に、お腹が一番上の方まで、言いかえれば一番胸に近いところまで大きく膨らむわけです。その時の写真を是非撮っておいていただきたい。それもいろんなポーズで、いろんな角度から撮ってほしいと思います。

臨月に入ると、間もなく、出産にそなえて子宮が下の方に移動して行くと言います。つまり妊娠末期になればなるほど、お腹がまんまるく大きくなって前方に突き出てくるとともに、少しずつその位置が下に下って来るのでしよう。その間の変化を時間の順序を追って、たとえば分娩四週間前、二週間前、一週間前、というふうに、そして最後に分娩予定日、もし予定日前に陣痛が始まったら、入院なさる直前に、是非撮っておいてほしいのです。もちろん、出来るだけ異なったポーズで異なった角度から。

次にお願ひしたいことは画面にできるだけ全身を入れていただきたいということです。そしてバックは黒一色か白一色で、臨月妊婦の全身裸像をくっきり浮き上らせてほしいのです。そのためには、前から編集部にはお願いしているように、キャビネ版の分譲が是非必要だと思ひます。

あなたの場合、ご主人でなく、SMプレイの相手の男性が撮られることになるのでしようが、強烈なプレイそのものは普通の体でないあなたには当然制約がありましよう。私の希望としては、むしろ完全な観賞用の資料を残すことに重点をおいていただきたい気持ちで

す。第三者が勝手なことを言っすすみませんが、それもあなたにとって十分意義のあることとすし、心理的な満足感もえられることではないでしようか。

ヌードを撮るといふことは、必ずしも他人の助けがなくても出来ることだと思ひます。相手がご主人であればともかく、そうでなければいろいろ機会も制限されるでしようからきちんきちんと時期を決めて、規則正しく撮りつづけるとすれば、あなたがみずから、セルフタイマーを使ってカメラの前に立たれてもよいのではないでしようか。一人だけで、誰に見られる心配もなく、カメラを操作されるのです。あるいは辻村さんのように長尺リリースを用いて、遠隔操作なさることも出来るかと思ひます。鏡を見てポーズを研究しながらシャッターを押せばいいのです。このごろのカメラは、ずい分扱いやすくなつていますものね。

私はさらに、次のようなことも考へているのです。街の写真屋さんに頼んで出張してもらうか、あるいはスタジオにおもむいて、大型カメラで記念写真を撮ってもらふのです。臨月妊婦の全裸の肖像写真、もちろん全身、といへば、普通の写真屋さんなら、びっくり

四馬孝画秀麗口絵八葉が巻頭を彩る 団鬼六作『花と蛇』特集第四弾

本誌S42/1よりS44/4までの連載分を収録し、四馬画伯の華麗なる口絵を附した集大成ですが、重版刊行は致しません。只今、若干在庫がありますので、未入手の向はお早いに是非蔵書の一部にお加え下さい。申込は大阪市住吉郵便局私書箱第41号 暁出版株式会社へ。
略号『花』 定価五〇〇円

して断わるかも知れません。でも、電話で交渉するなり、自身出向いて行って頼めば、引き受けてくれるかも知れません。このごろのご時勢のことですから、案外あっさり応じてくれそうな気がします。ご自宅からなるべく遠いところ、そして知らないところ、信用のおけそうなちゃんとした店で、ネガも一緒に買いとるのです。費用は、特別料金も払った方がよさそうですから、かなり高くつくと思ひますが、奇クの妊婦マニアたちがよろこんで負担するでしよう。結婚記念写真のように扉つきのデラックスな台紙に貼って、末長く保存用に特別に頒布したらどうでしよう。私もよろこんでそれを一部求めたいと思ひます。そして、もし私がみさ子さんなら、そんな行動にとってもスリルを感じると思ふのですけど。

粗御 類ノメ 似ハサ 品女印

政 府 登 録

タスリク
ーア
ル

乙女浣腸

ヲ娘様専用ノ美シイ箱ニハイリタ軽便浣腸

拾個入 一、五〇

史女子英村吉 薦推

トテモグワイ
良クキキマス
ノヨ・私クシモ
愛用シテイマスノ。
東京杉並・室井静子嬢
(17才)

全国ノヲ嬢様方ヨリ、ロノヤウナヲ手紙ガ
モウ、三万通モ届キバシタ。貴女モヲ試ム下
サイ。

元費販造製
会商路砂亞 社女資會

読者ギャラリー 『CMページ』 室井亜砂路

最後に、これはもし出来たらの話ですけれど、妊娠満九カ月、分娩予定日のちょうど四週間前に、あるいはそれ以後でもいいのですが、本格的な妊婦の逆さ吊るしを実行して、その写真を分譲して下さるようお願いしたいのです。辻村さんのSM方面のお知り合いにはお医者様もいらっしゃるようですから、何人も人の周到な準備を重ねて、臨月妊婦で

あるみさ子さんの全裸での逆さ吊りを試みるのです。これこそ、SM理解者のみさ子さんにのみ安心してお願いできることではないでしょうか。

同じ九月号の辻村さんの「SMカメラ・ハント」で、△マゾヒスチック・アニマル▽谷山久美子さんの逆さ吊りのように両脚を開いて、臨月の妊婦を逆さに吊るすのです。

「金原さんにまけない」とあえて言われるみさ子さんに、このことをお願いするのは、決して無理とは思えないのですけれど、どうでしょうか。この場合、やはり背景は、白か黒一色、どちらかと言うと黒の方がよいと思います。

× × ×

八月号にのせていただいた「逆さ妊婦」は本誌六月号まで読んだ時点で、書いたものです。七月号以降の奇クに毎号のようにあらわれる△アナル・セックス▽とか、私に興味のある大量注腸・蛙腹についても書きたい書きたいと、いつも思っています。

また、△妊婦▽をも含めて、相当資料もたまっていることですので、なかなかおっくうで筆をとらない自分が腹立たしく思われてなりません。以前は、毎号のように投稿したこともありましたのに。

今回は、とりあえず、佐野みさ子さんのことについてだけ、書きました。そのうち、すごい△妊婦小説▽でも書いてみたい気がします。

この記事が、もしのせていただけたらの話ですが、佐野みさ子さんのお目にとまることをのぞみます。



第二十七回

五段七階級

この国で、ある階級を与えられるためには必ず資格認定にパスしていることを必要とする。しかも、その認定は毎年、忠誠試験と同時に実施されて、許容限度以下になった場合には、容赦なく降等されてしまうから、ウカウカしていられないのである。

認定結果は五ケタのアルファベットで表示され、コンピューターにかけられる。夫々、容貌、容姿、健康、知性、総合の五段階を意味する。もちろん、Aが最上で、B、C……

と、これに次ぐ。したがって、この表示法によって想定される階級は、凡そ次表のようになる。ただし、これはその階級を得るための最低必要条件であって、必ずしも絶対条件ではないので、認定資格が上であっても、命令がなければ、下の階級に甘んじていなければならぬ。

五段階表示（最低）					想定階級	首輪
容貌	容姿	健康	知性	総合		
A	A	A	A	A	天階級	ナシ
B	A	A	A	B	地階級	金

格 外	C	B	B	B
	B	B	B	A
	B	B	B	A
	B	B	A	A
	F	E	D	C
物階級	畜階級	奴階級	婢階級	人階級
鉄		銅		銀

この国では、これを「五段七階級」と呼んで身分を判定しているが、新入りに限って最終判定、つまり総合判定をアルファベットの小文字、a、b、c……で表わすことになっている。ジャンヌこと、小林敏子に与えられた認定がBBAAdであったことを思い出し

ていただきたい。

そして一旦、階級が確定されると、その階級間における身分上の差別は確然として冒すことができない。女達は、その階級を示すために夫々定められた首輪を、嵌められるのである。

ただし、鉄、すなわち畜、物、両階級の者に装着される黒カワ磨きの鉄首輪が最も実用的で頑丈であるが、銅、銀、金と昇格して行くにつれて、首輪は次第に細く装飾的に変わるのである。とはいっても、すべて鉄ドメした上を、メタルで封印されているから、寝て

前号までIIガボンで巨富を築いた有明は傾国の実力を費やして秘密の王国を作った。そこでは数千の美女達が唯一人の男性である彼に隷従し畜従していた。全学連の女斗士、ジャンヌダルクとあだ名された小林敏子も、その一人である。有明の情けをうけるようになってから人が変わったように従順になって行った。予審で与えられた評点はBBAA dである。彼女ばかりではない。原子力潜水艦ネプチューン号によって誘拐された数百の新人り女囚が、今や惨烈なレセプションを待っている。

いる間すら外すことはできない。

鉄階級の首輪にだけは、犬の鑑札か迷子札のような丸いメダルが、ブラさがっていた。直径2センチばかりの銀メッキにイブシをかけたもので、表面に夫々「畜」「物」の文字が銀色に浮き出している。すべての首輪には着用者の肉体番号が刻印してあった。

さてここで、予審のときBBAA dと認定されたジャンヌの行方を、追ってみることにしたい。

彼女の獲得した認定階級は一部の例外（たとえば山本百合子などの場合）を除いて、新入りとしては最高のものだった。

その故であろうか、本審査の前に二日ばかりかけて十分な休養があたえられ、又、顔から全身にいたるまで行き届いた手入れが行なわれたのであった。

ジャンヌは、ともあれ、すこしも早く、この国のものになろうと努力していた。そして、すこしも早く懐しい有明のもとに近づきたいと願っていた。従順さとパティシペイトという点で普通の新人りとは、格段にちがっている。その上、審問官たちを当惑させているのは、彼女が「お手付」になってしまっている

ということだった。当の有明がハッキリ認めているのだから、問題にならない。

このことは、ここでは大変な出来事なのである。審問官たちは協議の上、異例のことはあるが、ジャンヌの審問に有明の臨御を願っていた。

審問室は華麗なゴシック造りの小部屋であった。大理石の床は鏡の様に磨きあげられ同心円状のモザイク模様を作りなしている。その中心、すなわち部屋の中心部の床には、直径一メートル程の穴がポッカリ口をあけ、地下へ通じていた。その穴を囲むようにして六脚の中世風彫刻に贅をこらした椅子が配置されていた。正面の最も背もたれの高い椅子が有明の玉座であることはいうまでもない。通常、有明が出席することはないから、この椅子は、いつも空席のままだった。だが今回だけは、ジャンヌの審問を親裁するため有明はここに坐ろうとしている。

玉座の左側、一つだけ背もたれが中位の椅子が置かれていた。首席審問官の席である。残り四脚は、すべて同じ寸法で、背もたれが丁度、頭の高さに近い。

定刻になると、揃いの白い寛衣に覆面を頭からスッポリかぶり、目だけ出したという姿

の審問官が五人、側の扉から音もなく入室して、夫々自分の椅子の前に立った。

数分後、チャイムの音が聞こえると、正面の扉がサッと開かれる。

完全軍装といっても、この国では完全なほど全裸に近いのだが、つまり、全裸に必要な武器と階級章をつけた近衛将校が二人、ドアの両側に直立して警戒にあたる。

次にネプチューン号の副長だった高橋敏子に先導されて有明が姿を見せた。真白な寛衣と覆面は五人の審問官と同じである。

無造作に寛衣の裾をひきあげ、例の飾り紐



の房門をまたいで入室する。その後を高橋敏子が続く。といっても、飾り紐の下を這うようにしてクグリ抜けるのである。房門のある扉口では、有明以外の者はすべて、こうしなければならぬということには前に述べた。

五人の審問官たちが、席をすべって床に平伏するところを、有明は悠々として、こともなげに自分の席についた。高橋敏子が脇侍する。右膝下にククリつけていた美しい宝石造りの短剣の鞘をはらって、有明を護衛するかのようにながまえるのである。すべてが仕来り通りなのだ。

「着席したまえ。

インキジトール（審問官諸君）」

有明が快活にいった。

「ありがとうございます。いますマスター」

首席審問官が床へ額を打ちつけるようにして叫ぶように拝答した。その声は予審のときと同じ、やや甲高

いが、しかし、よく透る美声だった。

六人が有明に叩頭礼をして席につくと、すぐ首席審問官が卓上の鈴を鳴らした。

リ、リーン。リ、リーンという鈴の音が静まりかえった室内に快く響き渡った。

すると、真中の開口部のあたりがパッとあかるくなって、スルスルと全裸の女性がせり上ってきた。いうまでもなく、ジャンヌだった。そのひきしまった、それでいて豊かな肢体は、適当な休養とメイクアップによって、光り輝くように見えた。今はもう、全く従順に運命に従おうとしか考えない気持が、その全身にあらわれていて、それがつましい女らしさを強調しているのであった。

「只今から、肉体番号F七五三号、俗名小林敏子の審問を開始します」

首席審問官が凜々しい声で開廷を宣した。

「先ず人定訊問を行います。おまえはF七五三号に相異なるいね」

「ハイ」

消え入りそうな声でジャンヌが答えた。法廷のあまりにも厳粛なありさまに、いささか圧倒されているかのようだった。

「それでは肉体番号の、ご確認を願います。

F七五三号、足を開き膝を曲げずに、手を前につきなさい」

パツと全身を赫くしたジャンヌは、いじらしくも命令されたように臀を高々とあげて四つ這いになった。ボリユームのある腰が羞恥で慄える。

「だめだめ。番号が見えるように、モット開くのですよ」

丁度、真後ろにいた審問官の一人が叫ぶと持っていた細い鞭でジャンヌの内腿を軽く突いた。ギクツとしてジャンヌは、いいつけられた通りに足を一層、大きく開く。

「そう、それでよろしい」

ジャンヌをセリ上げて来た台座が静かに廻りはじめる。鼠蹊部の、F七五三号と有明が手ずから入れ墨した彼女の肉体番号が、あらわに読みとれる。

台が一廻りした。

「皆さん、ご確認されましたね」

「はい」

皆が異口同音に答えた。

「それでは、おまえはF七五三号に相異なることが確認された」

「ハイ」

「立ち上ってよろしい」

ジャンヌは、ふたたび正面に向かって直立不動の姿勢をとった。

「おまえは光栄にも、マスター、おん自らのご臨御の下に、審問を受けることが出来るのだよ」

ジャンヌの瞳が、みるみる輝きを増した。正面の大きな椅子に黙って坐っている白衣の男を恋しい有明と認めたからであった。

「さあ、跪ずいてお礼を言上しなさい」

首席審問官が、やや声をおとしてさとす。

ジャンヌは反射的に有明の足下にひれ伏して、嗚咽しながら叫んだ。

「おお、マスター。どうかこの貧しい私を、

お受け入れください」

「ひかえろ」

甲高い声がした。

「許可なく台座をはなれてはいけない」

あわてて台座に戻った彼女は、平伏したまま身をふるわせて涕泣するばかりだった。

「審問官諸君」

有明が口を切った。

「この者はすでに、私に隷従を誓っている。私のもとに迎えられるためには、どんな苦痛でも甘んじて耐えると言った。その苦痛が大きければ大きい程、大きな未来が期待できる

ことも知っている。だから私の手がついていくからといって、決して手心を加える必要はないのだということを、予め断わっておく。それだけだ」

一瞬、息づまるような沈黙が流れた。首席審問官は、それを破る責任がある。よく透る声だった。

「F七五三号。この国に入るものは、先ず自らの罪を自覚せねばならぬ。おまえは如何なる罪を犯したのか」

「はい」

ひれ伏したままジャンヌは口ごもった。審問官にうながされて、ようやく泣き濡れた顔をあげると、

「私はもっともいやしい奴隷、いいえ、もっともけがらわしい畜生にすぎないのに、地上の世界ではそれを知らず、おろかにも人間として暮らしてきました。まして、マスターにお仕えすべき運命もさとらず、おろかな日々を送って来ましたことは、私の大きな罪でございます」

あらかじめ教えられたセリフなのだけれど今のジャンヌには心からそう思われてくるのだった。

「よくいました」

首席審問官の声は満足そうであった。

「その罪は罰せられなければならないということを知っていますね」

「はい」

「しかし、おまえがその罪を自覚し反省しているという情状は、酌量に価します。審問官諸君。投票して下さい」

投票は押しボタン式で行なわれ、直ちに首席審問官のテーブルに表示される。首席審問官は、うやうやしく有明の方に一礼して、
「本審問官は一致して被告F七五三号を原罪刑に価すると認め、一カ月の懲治檻入りを判決いたしたいと存じます。ご裁決願います」といった。

有明は一言もいわず、ただ右手をかすかにあげただけだった。このことは彼が審問官たちの意見に賛成したというしるしだった。

首席審問官は、ふたたびジャンヌの方に向き直って、

「それでは判決を言い渡す」

と厳かにいって、有明の承認を得た刑罰を繰り返した。ジャンヌは
「ありがとうございます。つつしんでお受けいたします」

と、いわなければならない。

テレタイプで速記された調書が、すぐ届けられる。各審問官がサインして、最後に有明がマスターの記号をしるした。

「マイクロ・フィルムが出来るまでの間に、鎖枷して下さい」

首席審問官が声をはりあげた。その声に応じるように数名のアマゾン女兵が入廷してきた。ジャンヌの施錠してあった未決首輪が外され、代りに赤銅色に磨きあげられた銅の首輪をはめられる。彼女は仰臥することを命じられた。丸くえぐられた枕のような金床に首をのせる。アマゾン女兵の一人が、首輪の継ぎ目に錠を入れて、タガネを当ててハンマーを振りあげる。

カン、カン、カン。

鋭い音がジャンヌの脳髓を貫く。心底からの恐怖が、つきあげてきた。それは、この奴隷の境涯から、二度と浮かびあがれないだろうという実感を確かめさせるような衝撃だった。

同じように、手首と足首にも夫々銅の金輪が装着された。手首の金輪にはフックがついているので、それをひっかけるだけで縛ったり、自由にしたり出来るような仕組みになっ

ている。足首の金輪には共に十五センチほどの鎖がついていて、その端が大きな錠前で連結されていた。従って、その錠前を外さないかぎり、三十センチの歩巾でヨチヨチ歩くしかない。

有明本陽三重菱縄

「牢に行くまで所定の通り、正式の有明本陽三重菱縄を打つ。有難くお受けしなさい」

再び床に額を打ちつけるようにして、
「ありがとうございます。つつしんでお受けいたします」

と、お礼の言葉を繰り返させられる。この国では、どんな恥辱でも苦痛でもあれ、上からくるものである限りは、このようにして感謝しなければならないのだ。

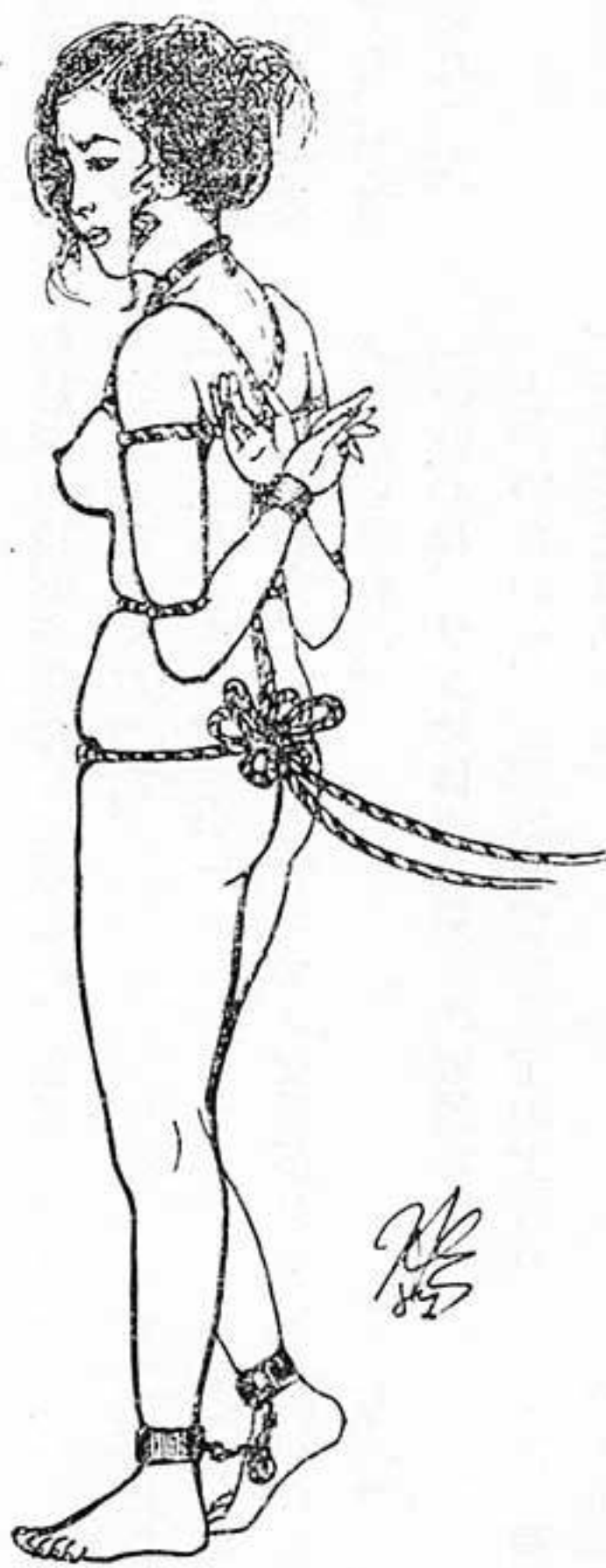
「立てッ」

アマゾン女兵が髪を掴んで引き起こした。何もそんな乱暴をしないでも、はじめから言うとおりにしているのにと、グツときたけれども、いまはもう逆らうことも出来ない囚人の身である。口惜し涙とも、諦めの涙ともつかない熱いものが再びコミ上げてきた。赤と黒に染め分けて、ダンダラによりあげ

た長い絹縄が、女兵たちの馴れた手さばきでキュッキュッと、しごかれて行く。

よろめきながら立ち上ったジャンヌの手首はたちまち後に回され、パチンとフックでとめられてしまった。その後手錠にダンドラ縄が結びとめられ、高手小手にひきあげられた縄尻は、首から前に落ちる。

有明本陽三重菱縄とは、その名の通り有明が考案した礼式縛りの一つで、この国の制式になっている。主として銅のクラス以上に相当する未決女囚を「渡す」（連行すること）ときに用い、この場合の縄は、必ず赤黒ダンダラによった絹縄を使うことになっている。絹縄は柔らかいくせに延びないのがポイントで、肌にシッカリ喰い込んで結び目をゆるませない。正面から見ると菱形がタテに三つ並び、完全なタテ縄にもかかわらず何等の支障を来たさなという利点になるのである。本来、タテ縄は非常な屈辱感と苦痛を女性の被縛者に与えるものだけでも、又反面、一種の貞操帯のような効果を生じ、被縛者にある



種の安心感を、与えざるを得ない。これでは加虐効果を相当、減殺することになりかねない。有明は、そこに着目した。彼の考案によれば不安感が一層、増加する筈である。

熟練したアマゾン女兵は、おどろくほどの早さでジャンヌを縛りあげて行った。白く滑らかな臀部に喰い込んだ赤黒のダンダラ縄は無残にも、殆ど見えなくなってしまう程だった。有明考案の十文字の結び目は、綺麗な花結びになって、縄尻を飾っている。

「終わりました」
そのアマゾン女兵が、不動の姿勢をとって報告した。手にはジャンヌの腰から延びた縄をシッカリと握っている。

審問官の一人が立ち上って入念に結び目を

調べる。

「よろしい。上手に縛れたね。サア、F七五三号、よくマスターに見ていただきなさい」

審問官に押し出されたジャンヌは、恥かし気に身をすくませながら有明の前に立つ。

覆面の中から有明の鋭い目が光って、ジャンヌを頭の先から足の

ツマ先まで、ナメるように見廻して行った。その視線が当たった部分が灼けるように熱くなった。ジャンヌは何ともいえない快感に襲われたのである。

その刺戟で、膝頭がガクガクするのをどうしようもないのだ。

台座は、そんな状態の彼女をのせてユックリと一回転した。

三宝を両手で、うやうやしく捧げ持った女兵が入ってきた。

三宝の上の、小さな赤い座蒲団の上に銀色に光るカプセルがのせられていた。

直径十五ミリ、長さ五センチばかりのステンレス製の小円筒である。万年筆の半分ほどしかないこのカプセルは、マイクロ・ファイル

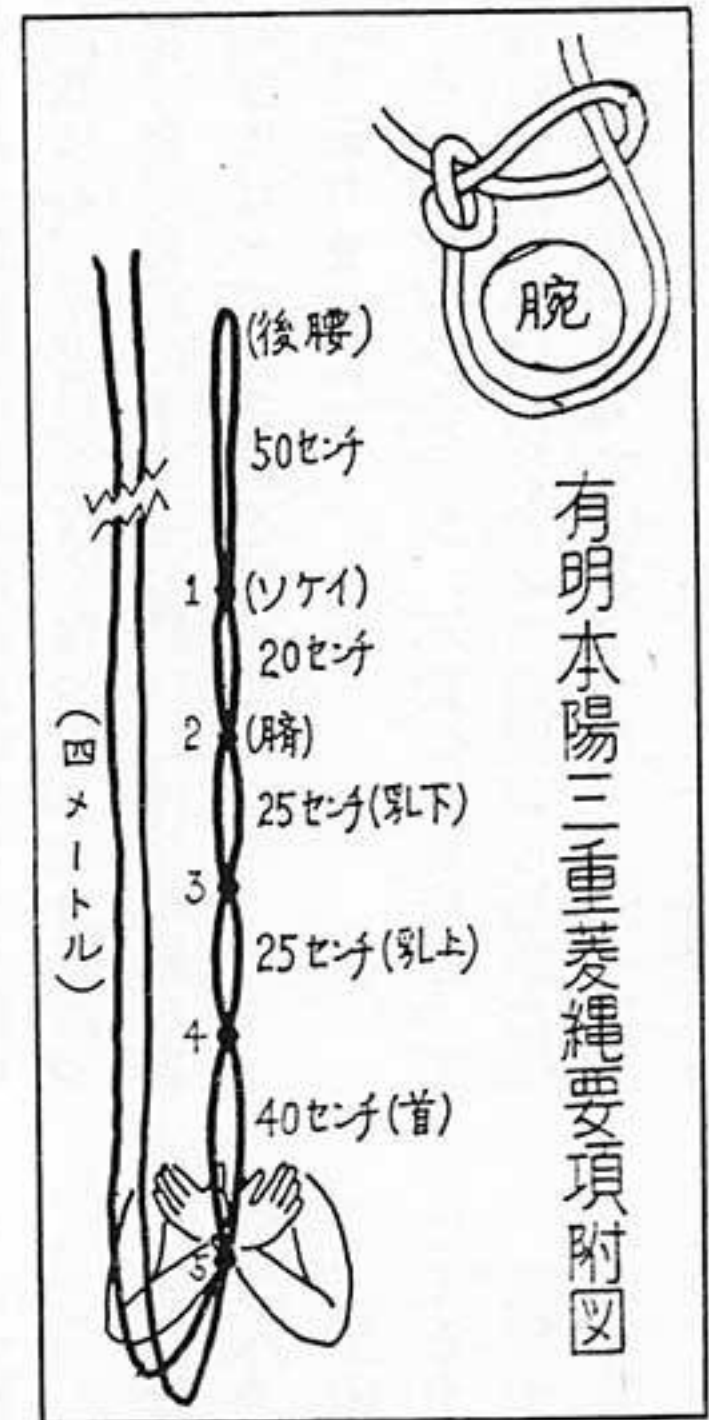
ムのファイルになっていて、ジャンヌに関するあらゆるデータが、写真とともに納められている。スペースが充分にあるから、これから先の年次検査の資料も追加して行くことができる。勿論、正本は有明の金庫に格納されているが、規則としてパレスエリアの住人は金のクラスから鉄のクラスに到るまで全員、マイクロ・フィルムに縮写した資料を身につけていなければならないことになっている。身につけるといっても、全裸の生活では、その場所は、ただ一カ所しかない。しかも自動車の免許証と同じように、これを持っていないかったり、あるいは失ったりすると重い刑罰に処せられる。

流石のジャンヌが悲鳴をあげて抵抗した。

「イ、イヤです。それだけは……」

全身に力をこめ、身をよじって逃れようともがく。しかし、ガッシリした二人のアマゾン女兵に脇をおさえられてしまうと、どうにもならない。いたずらに足をバタバタさせるだけとなってしまった。その足とても、足首三十センチの範囲しか自由がないのだった。反抗してもタカが知れている。

「よくお聞き」



有明本陽三重菱縄要項附図

ピシッとした声で首席審問官がいった。

「いくら抵抗しても、するだけのことはチャンとしてしまうよ。ネ、わかっているでしょう。けれど、自分の意思で有難く頂戴したのと、無理矢理にしたのでは成績がグンとちがってくるのよ」

「それだけ、私へ近づくのが遅れるわけだ」

有明が、つけ加えた。有明の声が不思議に鎮静剤の役割を果たしたらしい。急にジャンヌがおとなしくなった。

「手を放してやりなさい」

首席審問官にいわれてアマゾン女兵がジャンヌから離れた。

「いいわね、ラジオ体操の第一の要領ね」

といいながら、首席審問官が三宝の上のカーペルをとりあげた。

しおしおと、それでもいいつけ通りになって、歯を喰いしばって恥かしさをこらえているジャンヌだが、いざとなると、体のバランスがくずれ、危く倒れそうになった。三十センチの足鎖を忘れていたからである。

ピシッ！

アマゾン女兵が倒れかかるジャンヌの腕をささえながら、力一ぱい、その臀を叩いた。

「いたいっ」

ジャンヌが絶叫した。

ふたたび立ち上った首席審問官が云う。

「もう一度だけチャンスをおげましょうね。」

もう一度だけよ、いいわね」

猫なで声が、かえって残酷だった。

あきらめ切ったジャンヌは、白い腿を横一文字にした。といっても、足鎖があるので、どうしても腰をおとさなければならぬ。脚線が作る菱形が、三重の菱縄に連なって奇妙なバランスを示していた。

(未完)

(注) 有明本陽三重菱縄要項。

①本縄は十二メートル以上のものとし、これ

を二つ折りにして、夫々所定(図)の寸法で予め結び目を作る。体格、背丈等に応じて多少、寸法は変わるが、大体、この寸法で統一することとす。

②後手錠、又は後手縛りを本縄の第五結び目に固定。(本来なら、すべて一本の縄で手首から縛りあげるべきであるが、実用上、本縄が長くてさばきにくいので、手首縛りだけは別に行なうことが許されている)

③第四、第五結び目の間が首輪になる。(し

たがって、後手は高手小手の位置になるので、②の作業は③の作業のあとにする女兵もある)

④前に垂れた本縄はタテに股間をくぐらせ、再び後に回し小手に仮止めする。

⑤第五結び目から先、約四十メートルの二本縄を左右に開き、腋の下から胸乳の上に回し、二本のタテ縄、第三、第四結び目の間に一本ずつ引っかけ菱形に引きしぼる。

⑥腕のおさは、図のように乳(ち)結節を

作って、それに縄端を通し、締める。

⑦本縄は再び後タテ縄、小手の位置に戻り、そこでよく、からげる。

⑧そこから約二十センチ下で結び目を作り、左右横胴から前に回し、前タテ縄、第二と第三の結び目の中間点で、タテ縄にカラゲ左右に引きしぼって菱形をつくる。

⑨肘のおさは上膊の場合と全く同様。

⑩後に戻った本縄はタテ十文字にカラげる。

⑪さきに仮止めしておいた本縄をほどき、⑩の縄尻とククリ合わせる。この場合、結び目の位置は⑩の十文字から下十五〜二十センチ。

⑫右の結び目から、又、本縄を左右に開いて前に回し、第一と第二の結び目の真中に位置させる。

⑬前から回った本縄の余った端を飾り結びにして、縄尻の位置を飾る。

⑭前に回った⑫の縄は上の菱縄と同じようにヒップを回し、シッカリと押える。

⑮第一の結び目は肉体番号の入れ墨された辺りに位置せしめ、第二の結び目は臍上に止める。

⑯臍下菱形を作った横縄は再び臀部に戻り、飾り結びのところまで止める。

⑰前は正確な菱形が三つ、後はタテ縄が真直に通る、十文字が三つ出来るようにする。

(以上)

新発足 懸賞／告白、手記、体験／原稿募集

☆賞金☆

優作	一篇につき	参万円
秀作	一篇につき	五千元
佳作	一篇につき	三千元

☆規定☆

一、本誌の内容刷新、充実を期して、ここに新しく、「告白、手記、体験」の原稿を広く懸賞募集いたします。

一、従来、「告白」の分野で文献味豊かな告白特集を度々刊行して、輝やかしい金字塔をうち樹てた本誌が、あらゆる傾向の告白をもって誌面を飾る考えであります。一、真実味溢れる告白、万人の共感を得る

手記、数奇な体験、どうしても誌上に発表したいという熱意のこもった原稿を求めます。どうか奮って御応募下さい。

一、文章の巧みさとか、表現や描写のうまさとは求めませんから、実際に体験されたもの、事実の裏付のあるものが大切だと思います。従って必ず自作の未発表のものに限ります。

一、枚数に制限はありませんが、一回の掲載分としては、三十枚乃至五十枚が適当です。用紙はなるべく原稿用紙をご使用下さい。締切日は毎月十日。翌月号より発表。一、入選作には掲載誌発売後賞金をお送りいたします。応募原稿は読者原稿と区別するため「告白懸賞」とお書き下さい。



序

おむつは何のためにあるのでしょうか？
 と言うと人は私を何と愚かな者だと笑うかも知れませんが、それは無論解りきったことで、乳児が排便の自立のできるまで衣類や敷物を汚さぬように排便を受けるために他なりません。また大人であっても病気で寝たきりで一人ではトイレへ行くことが不可能な人におむつは欠かすことができないでしょう。でもそれらはおむつをあてがうことに必然性があります。おむつをすることが当然であり、仕方のない場合です。乳児はすなわちおむつに

ある愛好者の弁

お

む

つ

愛

井上俊彦 (カットも)

代表される如く、おむつとは切っても切り離せるものでなく、むしろ、おむつを必要としない乳児などは聞いたこともないし、また、おむつを必要としない乳児に大人は気味悪さを感じることと思います。

「家の子はまだ三カ月なのに、もうおむつがとれましてね」

そんな母親の自慢を聞いた人が、その話を信用するでしょうか。いいえ、そんな話は誰も聞かなかったことにするでしょう。乳児にどうしてもおむつが必要なのです。

しかし私がここで言おうとするのは、おむつを全く必要としない人におむつは何のため

にあるのか、ということなのです。(最もそれならおむつをしなければ良いではないか、という意見は論外です) それはひとつに本年五月号で岩手信夫氏が述べられたことに少なからず反撥を感じるからと言えましょう。というのは岩手氏は「私の執着」の中で「夜尿症願望の裏付けのない、おしめ好きは本物ではない」と断定されているからです。

夜尿症だと聞けば確かにすぐおむつをすることが考えられます。夜尿症の人は布団を汚して困る、汚した布団を干すのはみっともない等の理由でおむつをするでしょう(汚したおむつを干すのはもっと恥しいことでしょう

が)そしてオネシヨするのだから、おむつをするのだという理由も成り立つことと思えます。そこにおむつをする必然性が一応成立するからです。でもそれはおむつの「効用」の一面しか捉えていません。おむつには多くの効用があるのにおむつを排泄便を受ける布切れとしか考えていないと思われます。それに先日Y新聞にこんな相談がありました。オネシヨとおむつの関連性に、参考となると思いますので引用致します。

「二児の母なのに夜尿症……三十才の主婦。生れてこのかた夜尿症で、小さい時から思い悩んでいます。いつか大学病院の泌尿器科でみていただき「気持ちのもちようだ」と言われ、別の医師からは「結婚すれば直る」と言われ、結婚し二児の母となりましたが、少しもなおりません。失敗する時はトイレに行った夢を見た時や疲れた時が多く、寝しなに水分をとらぬようにしたり、目醒しで夜中に起きるようにも努力しました。よい治療法をお知らせ下さい。」

医師はそれに答え、決しておむつをするようにとは助言していません。夜尿症患者が防止のためにおむつを着用すると、おむつに安心し、治療に逆効果だからでしょう。オ

ネシヨをする人には、おむつは不必要でありまた、してはならないものとされるのです。

おむつの本質

おむつを全く必要としない体の人が、単に唯夜尿願望の故におむつをするならば、何時しかはおむつに飽きるでしょう。オネシヨをしたいという事とおむつとが結びついている以上、オネシヨをしたくなければおむつは不必要なものになるからです。この場合、おむつは夜尿願望の従属たるもので、夜尿の方に主体があることになります。しかし、一度おむつの柔らかさを肌に感じた人が、決しておむつを忘れることなく、絶えずおむつを着用していたいと願うようになるのは、夜尿願望の他に、おむつに別の感じなり、意味なりがあるからだと思います。

おむつの味を知らない人に対して、大人がおむつをしたいたなどと言ったら、さぞかし驚き、本人の顔をとくと眺めるでしょう。おむつの世話を互いにし合おうではないかと言って結婚話も破談になった人の話が本誌にもありました。

「一体この人は何だろう」

「大人がおむつをするなんて可笑しい」

そして笑い出すか、軽蔑するか、ともかくおむつをしたいたと言った本人の名誉ある地位は壊されてしまいます。私もそのとおりだと思います。おむつを必要とする体でもなし、乳児でもないのですから……。

私が暇さえあればおむつを着用していると聞いたら、きっと美しい婚約者も逃げ去ってしまうことでしょう。もし彼女に愛情がなかったならば。

この文章を書いている私自身、十二才の頃からおむつに異常なほどの強い関心を持ち、罪の意識もなく他家の物干しからおむつを盗み、隠れて自分の体にあてがっていました。大人になっておむつをあてがう、という他人と違うことをしている自分に気づきながら、何度も何度も止めようと思っても、二十才過ぎた現在尚まだ止められず、毎日毎晩おむつの魅きつけるような力に捕われておむつを着用しているのは、唯の布切れにすぎないと思われるはずのおむつが、特別の意味をもっているからに違いないのです。少なくとも夜尿願望の一言では言いつくせない何かが、おむつに秘められているのです。

私はおむつの本質は「愛」ではないかと考えます。おむつは本来は乳児のするものとし

て発達し、病人がするようにしたのは、おむつを着用させた方が手間がかからず便利だからにすぎません。本来乳児にあてがわれるおむつという一番単純なことにおむつの本質があるのです。乳児は生まれてすぐおむつをあてがわれ、そしてそのおむつは、それが必要でなくなるまで

「家の子はやっとおむつがとれましてね」

と母親が自慢するまで、彼女に取り換えてもらうのです。ですから乳児は乳房とおむつにより母親と密接な繋がりを持つのです。母親は自分の子が可愛いから、寒暑昼夜を問わず汚れたおむつの取り換え、おむつの洗濯・乾燥・整理という苦勞の多い仕事もできるので、愛情がなくては、とてもできるものではないかもしれません。乳児の尿便が汚いと感じないのも、乳児を愛しているからに外ならないのです。

柔らかな日差しの中で、母親が優しい微笑を浮かべて乳児を見つめながらおむつを取り換えているのは、真に愛らしい光景だと評することができるでしょう。おむつをしたくないというのは、その「愛」を求めたいからに違いないのです。

それが永遠の「愛」であってみれば、おむ

つに飽きないのも、手離そうと決心しながらいつの間にか再びおむつを着用しているというのも、理解できることだと思います。おむつをあてがわれたという願望は、その愛を求める「甘え」であって、おむつをしているのは「甘え」が満たされた状態です。オネシヨを望むのは、その「甘え」を本物にしたい、オネシヨをしておむつを汚しても叱られない「愛」を求めているからでしょう。乳房による授乳を願うのは、乳児に還っておむつをする正当性を得たいからです。授乳が得られれば、おむつと乳房の二つの繋がりを獲得し愛されていることに充分満足できるでしょう。

よく本誌の投稿中で表現される「おむつをしなければ安心して眠れないようになってしまった」という言葉も、おむつをあてがわれ愛に包まれていないと、安らぎが得られないからで、おむつを経験したことのある人、おむつの愛にくるまれたことのある人には理解できる最高の心境だと思います。おむつには「愛」という安堵感があるのです。

おむつの社会性

右は私一個人の見解にすぎません。けれども人間の社会性から充分に理由づけられると

思います。

人間は一人でこの世に生存しているのではなく、多くの人々と共に暮しています。そして社会共同生活を営む最少単位は夫婦ですから、結婚できないほどのおむつ狂であってはいけないうし、そうなくてもいけません。そうなるのは社会的人間ではなく、社会の孤児となってしまいますから……。

私のおむつに対する考え方は一人では成り立たないおむつ感で、少なくとも二人は必要です。すなわち、おむつをあてがわれる人とあてがう人の二人です。その二人は信頼と愛情で結ばれた夫婦・恋人を想定しています。（但し私は男がおむつをあてがわれる立場で論じていますが）

おむつ願望に愛を求める心があるならば、一人でおむつをするだけでは自己愛だけでおむつの社会性はありません。それに一人でおむつをするのは味気ないものです。おむつの社会性が最低でも満たされるには、愛情をもっておむつを取り換えてくれる人の存在が必要です。

夫のためにと晒木綿で幾組ものおむつを手縫いしてくれる人の存在、優しい微笑みで見つめ、軽やかな慣れた手つきでおむつを取り

換えてくれる人の存在、汚したおむつにしかめた顔ひとつせず洗濯してくれる人の存在、明るい日の下で洗濯したおむつを樂し気に干してくれる人の存在、充分に乾燥したおむつを、愛する人に今夜あててさしあげるのだと考えながら整頓し一人思い出し笑いを浮かべる人の存在、おむつをあてた後で恥かしさを殺しながらそっと胸元をひろげ、乳房をとり出して授乳してくれる人の存在、おむつに秘められた「愛」こそ、それを実現されるのです。このことを念頭におき想像を巡らせるからこそ、おむつの不思議な魔力から離れることができないのです。

おむつに表現される「愛」が「甘え」であってみれば人間は誰しも「甘え」に没中するでしょう。そしてその愛から逃げ出すことが愚かな事であることにすぐ気づくでしょう。おむつに包まれるという甘美な幸せを、自ら放棄してしまうのは自殺も同然だとはいえないでしょうか。

おむつの「愛」は母親と乳児に実現されます。そして大人が用もないのにおむつをしたいと願うのは、本来母親と乳児に表現されたおむつの「愛」を進化発展させて、自分も実現したいからです。そしてそれは恐らく、夫

婦・恋人の間で実現することができるとしよう。私はこれを「おむつ愛」と名づけようと思います。

お　む　つ　愛

結婚した人が初めての夜を迎え、夫が新妻の乳房を夢中になって求めるのに、新妻が夫を、赤ちゃんみたいだと感ずるのは、そこに「おむつ愛」があらわれている証拠です。乳房が本来授乳のためにあり、子供だけのものであるなら、夫が妻の乳房を求めるのは可笑しな話でしょう。人々は、でもそれを異常なこととは思いませんし、私も異常なこととは思いません。しかし乳房を求める夫が、おむつをあてがわれないと全く望まないとしたら本来乳児のためにある乳房を独占するのは、奇妙な話となります。少なくとも何%かの心の奥底で潜在的におむつをあてられたらどんなに素晴らしいだろう、と考えている人が居るはずだと思いますし、現に意識している人も居るでしょう。唯、言い出さないだけ、また、おむつの肌ざわりを知らないだけだと思います。というのも成長した後、おむつをずる機会に恵まれなかった人の方が多いでしょうし、おむつをあてがわれないと言い出す勇

気の無い人が多数でしょうから……。

しかし夫婦が信頼と愛情で結ばれていたなら「おむつ愛」を実現して何ら不思議のない下地は、授乳という事実で、もうできあがっているのです。むしろ「おむつ愛」については両親も仲人夫人も知らないのですから教えてくれないでしょう。また知って経験していても夫婦の楽しい秘密は隠しておくでしょう。今も昔も、大人がおむつをするのは考えもしないし、第一そんなことは可笑しい時代とされているのですから、尤もなことです。世の中に離婚が多々存することからみても男と女が心から愛し合うのは難しいのです。まして「おむつ愛」など、口に出したら逃げられてしまうでしょう。しかし、もし本当に真の愛情で結ばれた二人なら、妻が夫を本当に愛しているなら、夫の世話をすることに手を抜くことなど、とてもできません。夫の世話をしたい、この人のためになりたいと願うのが妻のまことの姿です。おむつも世話の一つに過ぎません。ただ手間がかかるだけです。普通の家庭が備える用具の他に、夫のために次の品々を準備しておかなければなりません。

おむつ……十〜十五組。おむつカバー。哺乳ビン。オマル。授乳用のブラジャーと

スリッパ。その他「おむつ愛」の強弱により乳児用品（おくるみ、よだれ掛等々）を夫に合うように製作したもの。

こんな手間は愛情の秤りにも掛けることのできない微々たるものです。それに右の品々は将来子供が生まれれば、すぐ役立つものばかりです。

「おむつ愛」の社会性の利点は、おむつをさりたいと望む人を、社会から締め出さないことです。おむつは「愛」を求めているのだとすれば、愛を得るために少なくともおむつをあててくれる人（相手）が必要だからです。愛は一人では成り立ちません。

愛のためのおむつ

「おむつ愛」が、愛の表現過程の一部とすれば、それは盲目であってはなりません。盲目ということは事実を事実として観察せず、美化し抽象化してしまうことです。それは病的だと言えるでしょう。我々は社会的人間である以上「おむつ愛」は他人に知られては都合の悪い二人だけの秘密であって、本当におむつの必要な体になることは危険とさえ申せません。経済的背景がなくては愛は保たれないのが世の常ですから、職を辞さなければならぬ

ほど、おむつに病的になってはなりません。おむつを通して愛を確かめ合うとも言えるのですから、おむつは愛のための手段であり、その意味では愛に奉仕するもので、従属的なものと思います。しかしこのことは一番大切なことで、愛に奉仕するものであるからこそおむつは不潔なものでなく、高尚なものとされ、美しいと看做されるのでは、ないでしょうか。一定の条件の下でオネシヨをする体も万一の場合を考えれば、危険なものだと思います。

おむつは孤独を誘うものではありません。社会性のある「おむつ愛」は豊かな愛情に包まれるものであって、遊びとしてのおむつを通して、愛を育むことができれば、最上と言えるでしょう。

おむつ愛の実現

おむつが本来乳児のものであることは誰も否定いたしません。そしておむつと授乳とが母子の愛情を育てるのです。「おむつ愛」はこの事実を直視し、これを進化させようとするものです。おむつと授乳を通して夫婦の愛情を育てようとするのです。妻が夫の汚したおむつを不潔と感じなくなれば、真の愛情が

そこに湧出るので。

「おむつ愛」を実現するにあたっては、妻は次のことに注意しなければなりません。

第一に、「おむつ愛」はその名のとおり、おむつが中心であるということ。このおむつが固い布地であっては、それだけで興奮めです。単に排泄物を処理するだけのものとは違います。晒木綿を何回も水洗いした肌のようになります。柔らかなおむつこそ妻の愛情のこもったおむつと夫は感ずるでしょう。乳児が使い古したおむつが、柔らかさとしては一番良く、理想のおむつですが、妻の浴衣をほどこたものであっても、晒おむつ地を手縫いしたものでも良いと思われれます。おむつカバーは乳児らしい可愛気のあるものが最良ですが、販売されているか否か疑問です。無理なくおむつを包むために、ゴム製のおむつカバーは避けたいものです。手縫いのおむつカバーならば文句はありませんが、洩れたりする心配があります。妻は夫の体に合うおむつカバーを注意して作らなければなりません。

第二におむつをあてがうに際しては愛情をこめて行ない嫌々であってはならないということです。「嫌がる」ということは全てを退化させてしまい、育てるものではありません。おむ

つは憩でもあるのですから疲れた気分を一掃させてしまうほどの愛情をもって、夫にあてがわなくてはなりません。また汚れたおむつは数分もすれば気持悪くなるのですから、汚したら早目に取り換えること。汚れたままのおむつをいつまでも身につけさせられては、ユーモアも最高の音楽も味気のないものになってしまいます。

第三に、おむつをあてたら夫を乳児だと思ふことが必要です。世に出れば七人の敵有り神経を使いへらして帰宅するのですから、夫が何をしても、怒ってはなりません。乳児のすることと見逃して、絶えず微笑を忘れてはならないのです。トイレという、夏は暑く、

【伝言板】○本誌では、寄稿家執筆者投稿者やモデル嬢などの住所氏名の照会には一切応じておりません故、御安心の上御送稿下さるようお願い致します。尚手紙の転送なども原則としては取り扱いは致しておりません故御諒承下さい。○如何なる理由に拘らず直接発行所への訪問や電話は固くお断り致します。御用件はすべて書面にてお寄せ願います。○編集者に面会を求められる方は、住所氏名職業を明記の上、用件を附してお申込み下されば、電話番号、連絡場所などを御返事申し上げます。予告なしに突然訪問されてもお逢い致しかねます。

冬は寒い所へ夫がはいることのないよう心がけ、室内便器（オマル）の準備を欠かさないこと。むろん。便器は病人用の味気ないものでなく、乳児用の愛らしいものが、排泄気分を高め、夫の自尊心を傷つけずにすみます。そして、時には乳房を与えて優しく抱きかかえることも必要です。

第四に、優しい言葉使いが欠かせません。

おむつをあてるとき、オマルを使用させるとき、授乳するとき、それぞれに応じた言葉が夫の気持を抵抗なく「愛」へ導きます。

例えば、おむつをあてがう時には

「さア、おむつを取り換えましょうね」

と何気なく口元に優しさをこめて言えば、

夫は無理無くベッドに仰向けるでしょう。要は夫の気持を乳児化させて、おむつをするのが当然だと思ひ込ませることです。そうなれば、おむつの中への排泄もスムーズに為され妻として、夫の汚したおむつを洗う喜びを味わうことができるのです。

第五に、夫が「おむつ愛」を望んでいない時を見極めること。おむつをされたいと感じないのにおむつを強制されるのは嫌なものです。大人なのですから、時には立派に夫として振舞うことを望むでしょう。そんなとき

「さア、おむつの時間ですよ」
 と言えば、かえって気まづくなります。帰宅したときの感じを上手につかみ、甘えていようなら「おむつ愛」の日で、優しいママとしての態度をとり、厳としていれば逆に甘えればいいのです。

終

とりとめもなく、また恥も外見もなく書き続けました。しかし私の「おむつ愛」を実現してくれる女性が、この世に果して存在するでしょうか。女らしい落着きがあって、しっかりした女性であれば、可能性はあると思うのですが……。

それとも読者の皆様は、

「大人になって、用もないのにおむつをあてたいとは、奇妙なやつだ」

と、お思ひになるでしょうか。でも、もし

そう言う人がいたら、私はいいたい。

「一度でいいから、おむつをしてごらんささい」……と。

きっとおむつの味が体に伝わり、忘れることなく残るでしょう。そして、もう一度、おむつをしたくなると思います。

被虐の旅シリーズ

続・仙人掌の夢

由利美千子

サボテンに包まれて、私はうめいていた。うめくといっても、のどの奥をならし、鼻の穴をいっぱいにひろげて、声にならない声を出しているだけだった。

私の口の中には小さな丸いサボテンが、おしこめられている。けれど、これは見た目よりは痛くなかった。

針山のようなそのサボテンを、目の前にみせられ、口の中へおしこめられそうになった時の恐怖にくらべれば、ヘーチャラといったいほど、らくだった。

栗のイガの方が痛いかもしれない。サボテンの針は見かけだおしで、ブラシの

ような、くすぐったさはあっても、痛さはひどくなかった。

体のあちこちにおかれたサボテンでも、痛いのと、我慢が出来る痛さのとある。じっとしていれば痛いことは痛くても、まだ我慢が出来る。

なまじ大げさに痛がって、息を荒くし、胸やおなかを上下させると、そのたびに鋭い針が、あらためて肌をさすようだった。

私はワナにかかった針ねずみのように、じっと静かにしていた。死んだように動かないのが、サボテンの針の痛さを我慢する一番いい方法だった。



それにしても彼はどこへ行ったのだろ。

風呂へ入ってくるといったが、男の風呂は女より長いのか――。

ベッドルームのワラ布団の上に、私は鎖で縛られて彼を待っているのだ。彼がいなくても、鎖の間にはさんでいったサボテンが私を責めている。彼が部屋に戻ったら、もっとひどい責苦があるとしても、やっぱり私は彼を

待っている。サボテンの針から解放されて大きく息をつきたかった。

カチンとドアを外からあける音がした。まさか女中さんが何か届けに来たのではないだろう。まさかこの部屋を、あけはしないだろうとは思ったが、私は不安で、一層息をつめた。

間の襖があいた。

私は、わずかに首をむけた。首輪で固定されている私の首は、むけようと思っても、ほとんど動かなかった。

「どうだ、サボテンと仲よくなったか？」

女中さんではなくて彼だったのに、ほっとした。

彼は猿ぐつわを、はずしてくれた。

私は口の中のサボテンを舌でおし出した。

舌が痛かった。

彼は私の首と腕を固定させた鎖はそのままにしておいて、胸にまきつけた鎖はサボテンごと、とってくれた。

「この青い鎖はきれいだが、細引の方が使いやすいね。やり直しだ」

彼はスリッパから細引をとり出してきた。彼は私の足を一つにして細引をかけた。

「痛い！」

思わず私が叫んだのは、両方の腿のやわらかい所へ、鋭い針のサボテンをはさんで、ぎゅうぎゅうと細引をしめたからだ。

サボテンの針をあまくみていた私も、その痛さに体が波打つようだった。

膝にも脛にも、まるでサボテンを、そえ木のようにはさんで、ぐるぐると細引がかけられた。私は出来るだけ、両足を開こうとしたが、男の力の前では無駄だった。

私は無防備な乳房がゆれる程、大きな息であえいだ。

「やっぱり細引の方がしまるね」

彼は平然という。

「胸の方はどうしようかな」

彼は乳房を見おろした。

「面白いね、見ているだけで君の乳首はかたくなってくるんだね」

彼がいいながら、右の乳房をつかんだ時、

「痛い」

と、私は小さく言った。

それは乳房をつかまれる痛さではなく、何かトゲがささっているのにふれたような痛さだった。それをいうと、

「サボテンの針がささっているのかな」

彼は私の乳房に顔を近づけた。

そして、乳房全体をゆっくり舌でなめた。舌のさきでなければわからないような、小さなトゲがささっているのだろう。

しかしそれは何といていいのかわからない感じだった。

両足の痛さにあえいでいるのに、彼の舌がなめまわす乳房は、くすぐったいような、ころよいような、ピンク色の靨がひろがるような感じなのだ。私は足の痛さと、乳房の快さが一つになって、責められているという感じが、よけい濃くなった。

「あ、これだ」

彼はいうと、スリッパの中をかきまわしていたが、七つ道具の入った革ケースをとり出した。トゲ抜きが入っているのだろう。

私は乳房のトゲよりも、足のサボテンから解放されたかったが、彼はトゲ抜きで丹念に乳房のトゲをぬいた。

「他にも、トゲがささっているかもしれないね」

彼は私の首すじから順に舌でふれようとする。愛撫の口づけではなく、舌の先でトゲをみつけようという口づけなのだが、私が皮膚の上に感じるものは一つだった。

くすぐったく、甘い感触……。

私はまだ彼に、こんな風に愛撫してもらったことはなかった。私はつきあげてくるよろこびに身をくねらせた。

すると、足が動き、サボテンの針が腿をさした。

「ああ……」

と、私はのどをならす。

彼の舌は首から衿もとの広い平らな所をなめまし、二つの山の間を通る。そして、はい上るようにもう一度、二つの隆起を静かになめまわした。

痛さと快感がまじって、私の体はくずれていくような気がした。

その興奮が彼にも伝わったのか、彼はトゲをさがすのではない、口づけの仕方で乳首を口にふくんだのだった。

私は思わず足をくねらせた。

「痛い！」

足のサボテンが鋭く肌をさした。

「痛い……とって……痛い……」

私は、あえいだ。しかし、そのあえぎの中に他の感覚の吐息が混じる。

「ああ……ああ……」

私の声は上ずって、自分でも何を訴えてい

るのか、わからなかった。

彼は私の乳房から唇をはなした。

「うるさい子だ。じゃあ、あしのサボテンをとってやろう」

彼は、やっと細引をととき、足の間に入れたサボテンを、タオルを厚く折ってつかんで、部屋の隅にすてた。

私は痛さから解放されて、ほっとした。

しかし、まだ、私の首は首輪につながった鎖でベッドの上に縛りつけられていたし、腕も、手首も自由にはならなかった。私は、とらわれた獣のようにベッドにつながれているのだ。

彼は私の足首を、別々にベッドへ縛りつけた。

「さあ、足のトゲをぬいてやろう」

彼は足のさきから腿の方へ、逆なでに手でなでた。

「痛……」

やっぱりどこかに、サボテンの針がささっているらしい。

彼はスタンドをつけると、私の腿を照らした。

無防備な姿で、彼に見られることは恥しかった。しかし、手の自由をうばわれている

以上、どうすることも出来なかった。

「これは、お灸のあとだね」

彼は私の腿に、小さな白い点をみつけたらしい。

「そうだ、キミはまだ白状していなかったんだね」

思い出したように彼は言った。

それは私が自分で自分の腕につけた歯型を誰かにつけられたのだらうと疑って、クリッパーやお灸で責めた名残りだった。

「今日は白状するね」

彼は言った。

「もういや、そんなしつっこい人きらい！」

私は、わざとさからった。

「言ったな」

彼は、いきなり、とげぬきで私の皮膚をはさんだ。

「あっ！」

それは鋭い爪のさきでつねられるのと同じだった。

「よし、先ずサボテンのトゲをとろう。トゲをそのままにしておくと化膿するといけなからね。これは愛撫しているのではないんだよ。うぬぼれるな」

彼は言う、又、舌のさきで私の足をなめ

た。

「くすぐったいわ」

私は身をよじった。

「静かにしないか」

彼は、もっているトゲ抜きで私の肌をはさむ。

「あ、痛っ！」

はさんでキュウツとひねられる痛さ……。

「ううっ……」

私は歯をくいしばった。

するとそのあとを、彼は舌でなぶる。

痛さとくすぐったさと快さが、交互におしよせる。

その度に私は違った音色をあげた。

私の肌は汗で、じとっと濡れてきた。

首や手首の鎖がジャラジャラと鳴って、私

は彼の思い通りの楽器になった。

しかし、彼は彼の楽器の神秘的な音色を楽しもうとしたことはない。彼は私をじらしているのだろうか。

それとも彼にとって、私という女はとらわれた獣のように、いじめさいなむのにふさわしい女で、男女の深い喜びを味わうには、熟れない果物のように食欲がわかないのだろうか――。

私は彼に、いけにえのように、身も心も、

すべてをささげているのだ。何をされても、

どう抵抗しようもないのに、彼は最後の線から突入しようとししない。

「先生……」

私は甘えた声で誘ってみた。

「もうだめ、だめなの……」

私は、もっと強い力で屈伏されたいのだ。

失神したいのだ。

どんなに痛くされても、くすぐられても、気が遠くならない私の体を本当に気が遠くなるようなめにあわしてもらいたいと思った。

「先生……」

私は体の底から彼によびかけた。

しかし、彼は冷たかった。

責めることも、愛撫することもやめて、私

の傍に立つと、冷たい目で私を見おろした。

口元に薄い笑みをうかべ、自分の獲物に満足する獵師のように、もだえる私の姿を見おろすだけだった。

両手両足を縛られ、首輪をはめられた白い

獣に、どんな殺し方がふさわしいかと考えているような、冷たい目なのに、それは残忍でも、淫蕩でもなかった。むしろ神秘的な湖の蒼さのような、はかり知れない美しさに満ちて

いた。

室内電話がなった。

「ああ、いいよ」

彼が答えた。

食事をはこんでもいいかと言ってきているのだろうか。

私は、やっと鎖から解放される。

そう思ったのは、まだ彼を知らなすぎたのだろうか。

「まさか声は立てないだろうが、静かにしているんだよ」

彼は私が私のお仕置場をこしらえるためにはがしたベッドのふとんを、私の顔の上からどさりとかけた。

「あっ」

と起き上ろうとしたが、ただ首輪の鎖が私の首をしめただけだった。

一枚、二枚……。

彼は、はがしたふとんや掛布団を私の上にかけた。

「むう……」

私は息苦しくなった。

彼は、ベッド全体にかかっていた被いまですっぽりとかけているらしい。私の姿はベッ

ドの中へ埋もれてしまったのだ。

私は鎖のゆとりのゆるすかぎり、首を横に向けて、布団がまともに私の鼻の穴を圧迫しないようにした。

足首も別々に分けてベッドに固定されているから、動かしようもなかった。

女中さんが座敷の卓の上へ夕食を並べているらしい。

(早くして……早く……)

私はおなかの中で訴えた。

長いことこのままにされていたら、窒息するのではないかと不安だった。

敷布団が二枚に、毛布と掛布団がのせられその上にカバーがかけられているのだ。顔をどう右左に向けようと息苦しかった。

女中さんが去っていった気配がしたけれど彼は襖をあけなかった。

私は体を動かしてみた。しかし膝を立てることさえ出来なかった。わずかに腰と背中あたりが何程かもち上るだけだった。そしてそんな努力は、私をよけい息苦しくした。

「先生」

たまりかねて大きな声を出そうとした時、又、女中さんが座敷に戻ってきた様だった。

一度で運びきれなかったのだろう。

まだ何回もくるのだろうか。

(苦しい……死んじゃう……)

私は不安だった。

こんな思いをするなら、痛いめにあわされている方がましだった。

やっと彼が襖をあけてくれた。

「きこえるかい？」

彼は言った。ふとんどしにきこえるかと言っているのだ。

「ええ」

私は大きな声で言った。

「ハハハ、元気らしいな」

「先生、布団をとって……死にそう……」

○

体中が汗べつとりになっている。その暑さだけでも死にそうだった。

彼はドシンと私の上へ腰をおろした。

「あっ」

苦しさは、よけいに増した。

「どうだ、白状するか」

彼はドシンドシンと、わざとはずみをつけて腰をおろした。

「キミには彼がいるんだろう？ この間の歯型といい、一昨日の晩、キミは確かに何かしている。ボクはそれを、とやかくいうのでは

ない。ボクに隠しているのが気にいらないんだ。正直にいつてほしいんだ。ボクは女のウソは、あきあきしている」

「本当に……ウソではないんです。とって…

布団をとって……」

「よし、布団はとってやる。しかし、それははっきりするまで、鎖は絶体にとってやらないよ」

彼は、やっと私の上から布団をとってくれた。分厚い布団の中から私の裸身があらわれた後、彼はふっと溜息をついた。

「きれいだ」

彼は、つぶやいた。

私は大きな息をついた。

汗をかいた裸身の上をスーッと風が通り、寒いとさえ思った。

「さあ、今日はどんな折檻をしてやろうか」という彼に、

「もうさんざん折檻されたわ。この上、何をするの？」

私は泣き声になっていた。

「まだまだ、こんなことでは許さないよ」

彼はスーツケースから革の鞭を取り出した。きた。

「いや……ぶっちゃいや……」

私は打たれない前に、その革鞭を恐ろしく思った。

「どうだい、いい鞭だろう」

彼は私によく見えるように、両手いっぱいひろげてみせた。

黒い革でかたく編みである鞭は、二メートルぐらいある程長く、さきに赤い房がついていた。

「この鞭の値段をあてたら許してやる」

「本当？」

私はシメタと思った。

私はその鞭を売っていたのを見て、知っていた。万博の会場の中でパキスタンの土産物売場にぶらさがっていたのだ。

私は革鞭で打たれたことはなかった。

しかし、その牛を追う鞭は日本では手に入らないものに違いない。それを部屋に飾っておいたら、その鞭で打たれなくても、体がしまってくるような気がするだろうと思った。打たれることを想像するだけで満足出来るような気がしたのだ。

しかし、牛がいそうな農村の娘ならいざしらず、都会の娘がそれを買うのは何の目的だろうと思われやしなかと躊躇してしまったのだ。

同じ鞭は国際バザールにも出ていた。しかし、そこはパキスタン以上に人が多くて、よけい恥かしかった。

だから私は値段を知っていた。

「二千五百円でしよう？」

私はズバリといった。

「よく知ってるね。じゃあ、どこで売ってたかも知っているんだね」

「ええ」

「ということは、こういうものにめをつけて買おうと思ったことになる。カケには負けだが、打たれたいなら打ってやってもいいんだよ」

彼は言った。

「いつか……今日はいや……」

私はサボテンと布団責めで、クタクタなのだ。

「いつか……といったね。約束するか？」

彼の言葉に私は、うなずいてしまった。

「よし、これはおあずけだ。この長い鞭をふるには、ここでは無理なんだよ。いつか戸外で牛のようにこれで追い立ててやる。裸のキミを牛にくくりつけて、牛のお尻を打たずにキミを打ったら面白いだろうな」

私はそれが随分残酷なことだと思う半面、

そうされてみたいという思いがわいてくるのをどうしようもなかった。

「さて、ごはんにしようか。キミの分まで食べてやるよ」

彼は私をそのままベッドに縛りつけたまま間の襖はそのままにして卓の前へ坐った。

「ほう、なかなか御馳走があるよ。先ずビールだ」

ビールをコップに注ぐ音をきいているうち私は自分の、のどのかわきに気がついた。

私の体の水分は責められる苦痛のために、みんな汗になって出てしまっているのだ。

「先生、のどがかわいたわ」

「囚人が贅沢いうんじゃないよ」

彼はわざとビールのコップを片手にもって立ってきた。

「今日のキミは、白状するまで許されないんだ。ボクものどがかわいた」

彼は私の目の前でゴクゴクとのどをならしてコップのビールをのみほした。

「可哀想だから、アブクだけやろうか」

彼はコップの底に残った泡を私の口に注いだ。

私は小鳥が餌をもらうように大きく口をあけて、その泡を受けた。

「いい恰好だな」

彼が冷笑した。

「もう少し、めぐんでやるよ」

彼はコップに又ビールを入れてもってくる
と、私の顔の上から注いだ。

私は思いきり首をあげて、それを受けよう
とした。

しかし、彼は注ぐ位置を、私の口から少し
はなしているようだった。

私は必死にそれを受けようとするのだが、
首輪の鎖がベッドにくくりつけられているの
で、首をのばせば私の首は、その金属の細い
首輪でしめられてしまう。

「ハハハハ」

その姿を彼は笑いながら、コップを持つ手
を右へ左へ動かした。

私はくぐられた手も足も動かないと知りな
がら動かして、注がれるビールを口に受けよ
うとした。

しかし、その努力は空しかった。

私はガクンと首をおろした。鎖がジャラジ
ヤラと鳴った。

ビールは顔にも衿にもかかっているのに、
それをぬぐうことも出来なかった。

鎖のゆるす範囲で無理に体を動かした名残

りに、私は荒い息をついた。そして、のどは
よけいにかわいてきた。

私は、やっぱりとらわれた獣なのだ。

獣のように、生まれたままの姿で縛りつけ
られ、人間のなぶりものになっているのだ。

それなのに、私は自分が鎖でつながれてい
ることをみじめだと悲しんではいなかった。

そのみじめな自分が好きだった。

しかし、のどのかわきはどのようなもなか
ったし、おなかさえ、すいてきた。

彼は座敷へ戻ると、ビールをのみながら、
卓の上のものを食べ出した。

見なければいいのに、いじきたなく、私は
首をわずかに彼の方へ向けて、彼が食物を口

へはこぶのを、生唾をのんで見ているのだ。

「うまい。このエビは生きてるやつを料理し
たんだな」

彼は、わざと聞こえよがしにいう。

そして、部屋のテレビをつけて、私のいる
ことなんか忘れたように、ゆっくり食事をた

のしんでいた。

やがて再び室内電話が鳴った。

「まだだ。すんだら、よぶよ。もう一寸、待
ってくれ」

彼が答えているのは、食事の後片づけのこ

とをきかれたのだろう。

彼はやっと立ってきて、私をベッドへ結び
つけていた鎖をはずしてくれた。

「食べていいのね」

私は、かけるように座敷の方へ行こうとし
たが、彼は邪慳に私の首の鎖を引いた。

「あっ」

と、私はよろめいてベッドへ、どしんとぶ
つかってしまった。

「キミはとらわれているのだ。自由にはなら
ないんだよ」

彼は、さっき足を縛った細引で、私の手を
後手に縛った。

「さあ、お食べ」

いわれて私は、何よりも飲み物が欲しかっ
た。

しかし、後手に縛られていては、ポットの
お湯をお湯呑に注ぐことも出来なかった。

見廻すと、洗面所の水道が目についた。

私は首の鎖をジャラジャラならしながら、
洗面所に近づいた。私は洗面所に背中を向け

後手に縛られた手のさきで、蛇口をひねるこ
とに成功した。

水がジャーツと気持よい音を立てて流れて
いる。それを口で受けようと顔を近づける所



読者ギャラリー 「いけにえ」 岡 たかし

を、首の鎖を彼はぐっと引いた。

鎖を引かれれば、私の首は流れ出ている水に届かなかった。

(水が欲しい!)

私はおなかの中から手が出るように、水がのみたかった。

私は彼の手からのがれようと、もだえた。

しかし、それはただ、私の首を締められるだけだった。

彼は犬を引っぱるように、私の鎖を引いて

洗面所から離れさせ、蛇口をとめた。

そして部屋へ戻ると、首の鎖をはずしてく

れたが、後手に縛った縄はそのままにして、

私の体に浴衣を着せ、細紐をしめた。

「そのまま、そこに坐っておいで」

私は卓の前に坐らされた。

座椅子が後手の出っぱりをかくした。

「口をあけてごらん」

私はそのままの形で、彼が食物を口の中へ入れてくれるのかと思って、大きく口をあけた。

「ああ…」

私は、ものが言えなかった。

私の口は再びサボテンの小さな丸い玉が入れられたのだ。それは、さっきのブラシのよいうな針ではなく、もっと尖っていた、一寸でも舌を動かしたら、容赦なく針がささる。舌だけではない。口の中のやわらかい粘膜をチクチクと刺しているサボテンは、口にふくんでいるのが、やっとだった。舌で押し出すことも出来なかった。

私は、猿ぐつわをはめられたのと同じだった。

「どうだい、どうしようもないだろう」

彼は冷たく私を見ながら、室内電話をとった。

「食事がすんだから、たのむよ」

卓の上には、まだ私の分のお料理が残っていた。

彼は自分の方の、あいた皿へその二、三をうつし、少しは食べたようにみせかけた。

ハマチとエビと赤貝が盛ってある、おさしみの鉢……。鮎の塩焼……。野菜の煮付けの茄子の紫が美しかった。

私のおなかはグウーッと鳴った。

女中さんが入ってきた。

「よろしいんですか、おさげして……」

食卓に残っているものが多いのをみて、念をおした。

「ああ、いいよ。くる途中で鮎料理をたんと食べてきたので、まだおなかですいていないんだ」

「お客様はお車でいらしたのですね。途中には鮎料理のお店が、何軒かございますそうですね」

女中さんは言いながら、食卓の上のものをお盆にのせる。

私は、その一つ一つに未練を感じた。

(ひどい……)

縛られたり、打たれたりするよりひどいと思った。

私は、おながグーッと鳴りそうなのをこらえた。生つばさえ、もう湧かなかった。

「あら、ごはん召し上らなかったんですか」

女中さんがおひつをあけた時、私はふっくらと焚き上ったごはんを、どんなにおいしうに思えたことか……。

(どれか、残していつてくれないかしら?)

私は女中さんの手の動きをみつめた。

しかし、彼女はきれいに片づけて、部屋を去っていった。

「うまそうな料理だったろう」

彼は冷然という。

「さあ、口をおあけ」

私は思い切り大きく口をあけた。

彼はサボテンをつまみ出した。

「口をゆすいでおいで」

彼は、やっと私を洗面所へいかしてくれたのだった。

水のおいしかったこと……。

私は水道の蛇口へ口をよせて、のどをうるおした。

○

「さあ、少し寝よう」

彼は言ったが、私はおながすいて眠れそうもなかった。

しかし、私は再び私の硬いベッドの上に寝かされ、首輪をはめられ、鎖でつながれた。

その上へ薄い毛布を一枚、かけてくれた。

海が近いのに、波の音さえしなかった。何時間そのままでもいたろう。

「風呂へ入りに行こう」

彼が言った。

彼は私をベッドからおこし、首輪も腕輪もそのままに浴衣を着せかけた。

手に細引を持っているのは、私を縛るつもりなのだろうか。

私たちはシーンとした深夜の廊下をジャングル風呂へおりていった。

熱帯植物の大きな葉がいくつかの浴槽をかくしていた。

「キーキー」

と奇妙な声で鳥が啼いていた。

風呂場には誰もいなかった。

彼は私を後手に縛った。

「さあ、歩け」

私は全裸のまま縄尻をとられ、ツルツル滑りそうな岩やコンクリートの道を歩いた。

大きな浴槽のまわりに、いくつもの小さな浴槽があった。それを一つずつ、縄尻をとられた身で漬けられていった。

それは風呂に入るといふより、風呂に漬けられるという感じだった。

彼は浴槽の外にいて、私だけ湯にしたされ

る。あたたまつて出ようとしても許されなかった。

彼は細引のさきと、首輪や腕輪から垂れて
いる鎖を一つにしてもっているから、その握
り方で、私が出ようとすればするほど、湯舟
の中で転んでしまうことになる。

「もうダメ……かんにんして……」

私は湯気に当り、息苦しくなって訴えた。

「お風呂へ入れてやっているのに、ゼイタク
いった罰だよ」

彼は私の顔を湯につける。

「あっ」

私は鼻の穴から逆流するお湯にむせびなが
ら、息がつけなくなる。

彼が私の首の鎖を引っばると、私は首をも
ちあげて、コンコンと咳をし、又、湯の中へ
つけられる。

彼は私の頭をおさえる手と、鎖を引く手を
交互に使い、ジャブンジャブンと私の顔を玩
具にする。

私がクタクタになって、お湯の中もかわ
ず、くず折れそうになると、後手に縛った細
引を引っ張るのだ。

「さあ、歩け」

☆奇クサロン☆原稿募集

一、大好評の「奇クサロン」の掲載に適した
短文、写真、絵画を求めます。

一、内容は本誌の編集方針にふさわしいもの
で、寄稿家編集者執筆者に対する呼びかけ、
読後感、感想、批評、映画鑑賞、短信往来、
SM時評、図書雑誌紹介、見聞記、詩、歌、
川柳、漫画、諷刺、などなど。

一、投稿には必ず「奇クサロン原稿」と明記
して下さい。誌上の匿名は御自由ですからペ
ンネーム（筆名）を添記して下さい。

一、採用の可否に拘らず応募下さった方全員
に対して編集部作成のフォトを贈呈いたしま

す。贈呈フォトの枚数は作品の出来に従って
増減いたします故御承知下さい。

一、誌上に掲載しました作品に對しましては
枚数に応じて稿料又は謝礼を呈します。

一、奇クサロンに掲載可能な絵画、写真、映
画スチール、イラスト、漫画などに対しまし
ても応募者全員に編集部作成のフォトを贈呈
いたします。優秀な作品は誌上に発表の上、
画料をお支払い致します。

一、編集参考資料の提供に對しましては、出
来るだけ高価に購入したいと思しますので、
お手放し可能の方は内容の詳細に希望価格を
附してお申込み下されば、折返しお返事差
し上げます。

そして、私はヨロヨロと次の湯舟へ歩かさ
れる。

おながが空いているのに湯に浸されて、さ
すがの私も途中で膝をついてしまった。
すると、彼は首の鎖を引く。

私は後手のまま、這うより仕方がない。
冷たいコンクリートの通路の上へ、体をな
げ出して、首を引かれて這って行く。

やっと次の湯舟につくと、ボチャンと蹴と
ばされて、お湯の中へしたされるのだ。

「かんにんして……もう……」

私は泣き声をあげた。

それを笑うように鳥が啼いている。

どこに鳥がいるのかわからない。

ケツケツケツケ——という奇妙な鳴き声
私の仕置にいい効果音だと彼は思うのかもし
れない。

薄ぐらい真夜中の浴槽を、私は彼に引きず
りまわされ、よろめき、這いつくばり、くた
くたになっていった。

ジャングル風呂全体が私の仕置場なのだ。
白浜へ遊ぶ今の、誰がこの私の責苦を知っ
ていただろう。

鳥さえもが、鳴き声だけで、姿をみせなか
った。

（この章終り）

カット・辻 梟太郎



懸賞創作応募作品

チャコの場合

城野洋之

今年十九才、短大生の久子は、別段、美人という訳ではないのだが、頬のあたりには、まだチラホラとニキビのあとが見える幼なさを残した顔と、洋服の上からでも容易に想像できるボリリュームは、精神と肉体のアンバランスな年令にふさわしいベビー・ドールのなセクシーな魅力があった。親しい者は、彼女をチャコとかチャコちゃんとか呼んでいる。

チャコが山形の高校を卒業して、東京の短大に行きたいと言い出した時、両親は猛烈に反対した。

それというのも、彼女は学校でもよく男子

生徒との間を噂されたりする目立った存在で、事実、柄の良くない男友だちとつき合ったりかくれてタバコを吸ったりするような子供だったからである。両親にしてみれば、危くってとても一人で都会へなんてやれやしない。けれどもチャコ自身は、こんな田舎の町で青春時代のもっとも楽しい時期を過ごすなんて耐えられないことだ、と思っていた。そこでチャコは、こっそり上京し、目ざす女子短大の試験を受けて、合格してしまったのである。

これには、さすがの両親も折れざるを得な

く、東京にいる叔母の家に下宿するという条件つきで彼女の東京行きを許したのである。叔母の家は、下町で小さな時計屋をやっていたが、チャコとは血のつながりのない叔父に、叔母が気がねしている様子だった。それでも叔父は、いかにも気の小さい庶民的な感じの人で、初対面のチャコに、あれこれ気を使ってくれた。

その家から短大へ通うようになってから早くも三カ月以上が過ぎた。全てが、もの珍しかった都会の生活にも大分なれ、学校では気の合った女ともだちもできて、たまには映画

を觀にいたり、ボーリングもするようになったが、まだまだおとなしいものである。

夕方の食事の仕度も自分から進んで手伝ったし、日曜日などは、いたずら盛りで手におえない子供達の遊びの相手をしてやったりした。そんな事は全然やる気はないのだが、安いで下宿代で置いてもらっている上、夫に自分が来たことで気がねしていると思う叔母さんのためにも、それくらいはやらなければと思うのである。

ある夜、自分の部屋で、ふとんにもぐって女性週刊誌を拾い読みし、ハイライトを吸いながらチャコは思った。

『いつまでも、こんな窮屈な家にはいられないわ。ずっとこのままだったら、せっかく東京に出てきたって何の意味もないもの……』

それに、チャコに対しては親切すぎる位の叔父が、最近だんだんと本性を現わして、危険な存在に思えてきたのも、いずれこの家を出なければ、と思う一因だった。

叔父の素振りから受ける危険信号は、ふいに襲われるといった恐怖感のようなものではなく、もっとネチネチとした陰性のものだった。そして、しじゅうどこからか自分を盗み見しているような気がしてならない。

この前の日曜日、チャコがたまった洗濯物を窓辺に干している時、下からそれを見上げて叔父が、「フフフ……チャコちゃん、ずいぶんハデなパンティはいてるんだねえ」といったものだ。「イヤッ。エッチね、おじさん！」と、チャコはにらみつけてやったのだが、とろけそうな顔をした叔父を見ると、思わず背中に虫でもいるような、実に不愉快な気分になるのだった。

それぐらいだけならまだいいとしても、叔母が買い物にいった留守の時など「いつ見てもチャコちゃんのオッパイはすごいね。まったくジャンボ・ボインだよ」などと言いながら、パツと手を伸ばしてきたりするから油断は出来ない。そのくせ、叔母の前では、もっともらしいことを言って結構、仲もよいのだから、余計に腹が立つ。

チャコは高校三年の時に、同級生のボーイフレンドにせがまれて処女はなくしていたけれども、こんな叔父のようなタイプの男にはたとえどんなにお金を出されても、絶対に手も触れさせるのは、いやだと思っていた。

けれど、この家を出るとしてもお金がないし、アルバイトでもしなければしょうがないかな、と思うのであるが、女の子のアルバイトなんて限られていて、短期間のうちに少しでもまとまったお金を手にするには、やはり水商売しかない。現に学校の友人の中でも夜喫茶店のウェイトレスをしたり、バーのホステスをしたりしている人もいるのだが、チャコには、まだそれだけの自信はなかった。

チャコは毎日、家を出ることばかり考えて暮らすようになった。

そしてこの頃では、チャコが余り騒がないのをいいことに、叔父のいやらしい行動は日ましに大胆になってくるようで、押入れの隅に丸めてつつこんでおいた、汚れた下着類などが、帰ってみると少し位置が変わっていたりした。

チャコは、もう我慢ができなくなり、あの叔父の蛇のような目を逃れるために休みの日など親友の恵子のアパートで、たびたび泊まるようになった。恵子は同じ地方の出身で、学校ではチャコの一歩の友人だ。

その日も、チャコは前の晩、恵子のアパートで泊まって、そのまま学校へ行ったのだが、帰ってみると、いつものように叔母から、さんざんお説教された。

「ほんとうにもう、お兄さんは、何てふしだらな娘に育てたんでしょ。きつと甘やかし

放題だったのね。今度こそは、お兄さんに言
ってやります。こんな娘は、ともうちでは
めんどろみきれないって！」

その言葉はチャコが胸にためていた怒りを
とうとう爆発させてしまったのだ。

「ええ、ええ。こんなうちには、もう頼まれ
たって居てやるもんですか。私が恵子のとこ
ろに、ちよくちよく泊まるようになったのも
みんなおじさんのせいなのよ。仲のいいおば
さん達をメチャクチャにしちゃいけないと思
って、今までずっと我慢してきたけど、今日
こそ言ってやるわよ。おじさんはねえ、変態
なのよ。おばさんは知らないんでしょうけど
おじさんは私の汚れたパンティのにおいをか
いだり、トイレだって覗き見るような人な
んだから、数えあげたらキリがないくらい、
私にエッチな事をするのよ」

アタマにきたチャコは、興奮にふるえる声
で一気にしゃべりまくっていた。

叔母はそれこそ、あいた口がふさがらない
といった表情で、いつまでもチャコの顔を見
つめていたが、それから先、叔母夫婦がどの
ようになったか、チャコは知らない。言うだ
け言っただけ、家を飛びだしてしまったのだから
……。

そしてその翌日、チャコは恵子のアパート
へ引っ越すことにした。二人で一部屋、借り
るのなら今の仕送りだけでも何とかやってゆ
ける。

あれこれと整理しているところに叔母が来
たが「やっぱり恵子さんの所に行くの？」と
いったきりで引き止めることはなかった。
めったに外出しない叔父が、その日は留守
だった。

恵子と一緒にアパート暮らしをするようにな
って、東京に出てから初めてチャコは、ほ
んとうにのびのびとすることができた。

二人で六畳一間に住むのは、ちょっと狭い
けれども、部屋の中ではどんなにだらしのな
い恰好をしていようと、とがめる者はいない
し勝手気ままな生活である。自然と服装など
もハデになってゆき、土曜日には夜の盛り場
を恵子と二人でブラブラしたりするようにな
った。

二人で歩いていると、決まって若い遊び人
らしい男達から食事やドライブに誘われる。
超ミニを着たプロポーションに自信のあるチ
ャコはそうしたことには、もう馴れていた。
適当にあしらって、さっさと帰ってしまう。
そうした男達の目的が何かということを、彼

女自身よく知っていたからである。

恵子は、「チャコはモテるから羨ましいな
あ」などと言うけれど、一緒に生活するよう
になって二人の仲は以前にも増して良くなっ
ていった。

時々、夜中に二人は、ふとんの中でふざけ
合うこともある。チャコとは反対に髪もショ
ートで大柄な恵子は、そんな場合、いつも男
性的な立場になっていた。そして別に決めた
訳でもないのに、いつの間にか、恵子はパジ
ヤマ、チャコはネグリジェを着るようになっ
た。

ある朝のこと、恵子は先に起きてコーヒー
を入れたり、トーストを焼いたりして、せわ
しく朝食の用意をしていた。チャコは、まだ
ふとんにもぐっている。

「ねえ、チャコ。もう十時よ。今日は学校へ
いけないの？」

恵子が聞いた。

「ううん、調子悪いのよ。今日は休むわ」
「どうしたの？ どこか具合でも悪いの？」

恵子が心配気にチャコの顔をのぞき込む。

「うーん」

チャコは言い出しにくかった。

「便秘なのよ。もう四日も、自然が呼ばない

の」

「ハハハ……なんだ、そんなことか」

恵子は朗らかに笑った。

「おかしい？ こっちは苦しいのに」

チャコが口をとんがらせて言う。

「いいわ、私が浣腸してあげる」

「えっ！ いやよ、そんなの」

チャコは驚いて、とび起きた。

「バカねえ、すぐに効くのよ。ちょっと待ってて、薬屋さんまで行ってくるから」

恵子はニヤニヤしながら、サンダルをはいて出て行ってしまった。

「待ってよ。おせっかい！」

チャコは、便秘だなんて言わなければよかったと後悔した。いくらなんでも、この年になつて浣腸だなんて恥かしくって……。

薬局はアパートのすぐ近くにある。五分もしないうちに、恵子は帰ってきた。

「そんなもの、よく平気で買えるわねえ」

チャコは感心して言った。

「平気よ。だって、お薬じゃない。さあ、やってあげるわね」

恵子はそう言って、明るい光の射す窓を閉めて、カーテンを引いた。

「いやよ。自分でするからいいわ」

チャコの抗議に恵子は耳を借さなかった。

手早く二個のイチジク浣腸に針で穴をあけると、パツとチャコのふとんを剥いだ。ブルー

のネグリジェは、胸のあたりまで、まくれあがっている。

「やめて、恵子」

恵子にうつ伏せに押さえつけられて、チャコは一生懸命もがいたけれども、高校時代バレー・ボールの選手だったという彼女の力には、とてもかなわない。

「おとなしくしないと痛いよ！」

そう言って恵子は、チャコの花模様のパンティを一気に膝のところまで引き下ろしてしまったのだ。こうなつてはもうチャコもあきらめざるを得なかった。「いいコ、いいコ」

などと言う恵子の声を聞きながら、チャコは続けざまに、二個のイチジクを施されたのである。

「あーん、お腹が痛い。恵子、早く放して」

「まだまだ、だめよ。今、行ったんじゃあ、何も役に立ちゃあしないわ」

恵子はチャコの背中を押さえつけた手を、なかなか放そうとはしない。くねくねと動かしている、ポツコリとして白くかわいいチャコのおしりには、ピンク色のティッシュ・ペーパーがヒラヒラしていた。我慢の限界を感じて泣き出した頃に、やっと許されたチャコは、凄腕でトイレに飛び込んでいった。

トイレの中で、彼女は余りの多量さに、我れながらあきれていた。それに、あんなに苦しかったのに、今程気持ちのいいのは生まれて初めてだと思った。

それ以来、少なからずチャコはイチジク浣腸に興味を持つようになったのである。

でもそれは、自分で買ってしてみようと思う程のものでもなかったし、恵子とのおふざけにもイチジクが登場することはなかった。

毎日が平穩無事に過ぎて行き、何か物足らなさを感じながらも、近づいた夏休みには山形の家に帰ろうかどうしようかと、チャコは迷っていた。恵子と二人でアルバイトをして関西旅行に行く計画があったからである。

しかしそれは、恵子の都合でオジャンになってしまい、結局、夏休みは山形へ帰ることになった。家に帰って驚いたことには、チャコが恵子と一緒にアパートへ住んでいることがバレていたのである。

秘密にすることを約束した筈の叔母が「うちでは子供がうるさいので近い所に替った」と言ってきたらしい。『叔母さんも苦勞する

わね。まさか自分の夫が変態ですから、なんていえないもんね」とチャコは心の中でクスクスと笑った。

叔母がどのように父に説明したのか判らないけれども、その事に対して父は余り大きな関心は示さなかった。

山形の家ではすることもなく、毎日、家中でブラブラしていた。そんな時、まだ十九歳になったばかりのチャコにお見合いの話がもち込まれたのである。チャコは結婚なんてまだ考えたこともなかった。

しかし両親は、早いところ、ちゃんとした相手を見つけておいて、短大を卒業したらすぐにでも結婚させたいらしい。最初いやがっていたチャコも、とうとう半ば強制的にお見合いをさせられるハメになってしまった。

見合いの相手の男は、郷原といって地元の銀行に勤める真面目そうな好青年だった。東京で、かっこいい青年を見馴れているチャコにとって、郷原はまるでお呼びでないと思っただけで、朗らかで、いかにも健康そうな浅黒い肌には好感がもてた。

彼は初対面で、すっかりチャコに熱をあげてしまったようである。

日曜日には決まって車でデートに誘いにき

た。ある日、ドライブをして海に行ったことがある。紺色のレザーのビキニを着たチャコは、当然、男達の注目の的になった。郷原は自分の連れてきている彼女が、みんなから注目されている、ということに得意満面で、彼女にあれこれ気を配ってくれる。

ここら辺りの海水浴場は、湘南などとはくらべものにならない程きれいで、人出も少ない。チャコは余り泳ぎが得意ではなかったが郷原に誘われて浅い所でじゃれ合ったりしていた。そして催すままに海の中で放尿した。道徳なんてだれも守っちゃいないんだから、という気持ちだった。

夕方になって、だれもいなくなった砂浜の岩影で、チャコは求められるままに郷原に体を許した。しかし、高校三年の時の初体験と何ら変わった感激は得られなかった。

長い夏休みは、まだ幾日か残っていたが、チャコは両親に、郷原とのことは、もうしばらく考えさせて欲しい、と言い置いて上野行きの急行に乗り込んでしまった。

夏休みを経たからといって別に毎日の生活が変わる訳でもない。朝、学校に行って、授業では真面目にノートをとる。そしてヒマな時には、喫茶店で気の合った仲間とガヤガヤ

とダべる。ボーイフレンドの話、ファッションの話、海外旅行へ行きたいという話、大体そんなことばかりだ。

アパートへ帰って恵子とする会話も、似たりよったり過ぎない。チャコは何か強烈な刺激が欲しいと思った。東京へあれ程までに出たかったのも、元をただせば都会の刺激が欲しかったからである。決して素敵な恋人が欲しいからではなかった。都会での生活、イコール、田舎では味わえない刺激であった。けれどもチャコには、それが何であるかはまだ判らない。満たされない気持ちで、やはり同じ事のくり返しの日を送っていた。

そんなある日、チャコは学校の近くの喫茶店でコーヒーを前に、文庫本の「緑の館」を読んでいた。

「ここ、よろしいでしょうか」

ふいに背後で男の声がした。ハッと我れにかえって後ろを向くと、そこにはきちんとした身なりの中年の男が立っている。

「ええ、どうぞ」

何か考える前に言葉が先に出ていた。

「どうもすみません。他にあいている所がなかったものですから」

その男はニコニコしながら彼女の前に腰を

おろした。

熱心に読みふけていたので気がつかなかったが、店内はいつの間にか満員になっている。チャコは構わず、残りの数ページを読み終えて顔をあげると、前席の男がパツと視線をそらせた。脚を組んでいたのでガーターが見えていたらしい。

『いやらしい。これだから中年ってイヤよ』
そう思ってチャコは、さっさと店をとび出したが、駅まで行ったところで、定期入れがないのに気がついた。

『どこで落としたんだろう?』
すぐに今来た道に戻って、喫茶店に行き、そして学校まで行ったのだが、とうとう見つからない。でも現金は入ってないし、学生証も一緒だから、そのうちきつと出てくるだろうと思った。

『切手代用』送金についてのお知らせ
○七月号広告でお断りとしておりましたが、当方の整理も一応つきましましたので、御注文の際の『切手代用を再開』して受け付けます。但し『一割増』は従前通りです。尚出来るだけ、『現金書留』『小為替』『振替』等の方法にてご送金下さることをお願い申し上げます。

チャコの想像どおり、さっそく翌日に拾い主からアパートに電話があった。それは、きのう喫茶店で同席した、あの中年の男だったのである。

「きのう、あなたが店を出られてから気がついたんです。すぐにあとを追ったんですが間に合いませんでしたよ」

「そうですか、ほんとに助かりました」

チャコは素直に礼を言った。

「いや、どうってことないですよ。それで早速お渡ししたいんで、明日午後六時に、丸の内まで来ていただけますか?」

その男が指定してきたのは、有名なホテルのロビーだった。チャコが、しる理由はない。指定の時間にそこへ行った。

「ヤア、ここですよ」男は立ち上って、ここにやかに手を振った。

その動作は一瞬、もう長いつき合いであるかのような親しみを、チャコに感じさせたのである。髪をピシッとなでつけ、趣味の良い上質の背広のその男はなかなか雄弁だった。

定期入れを受け取ったらすぐに帰るつもりだったのに、チャコは食事に誘われて、なぜか断ることができなかった。

高級レストランでワインを飲み、食事をし

ながら池永と名乗ったその男は、自分がヨーロッパ旅行をした時の話などをチャコにおもしろおかしくきかせた。いつの間には彼女はすっかり池永のペースにまき込まれていってしまったのである。

そして、更に池永に誘われるままに、チャコは何の抵抗も感じることなく、アベック・ホテルの門をくぐっていた。

明るい部屋の中で、池永はチャコの洋服を一枚一枚、脱がせていく。ジロジロと品定めでもするかのようなその目つきは、まったく叔父と同質のものだとチャコは思った。

しかし、今はその目を不快なものだとは思わなかった。

その目は、チャコに激しい羞恥を与えるとともに、奇妙にそれを上回る魅力を感じさせるのである。池永はチャコに動物的なポーズをとらせ、体の部分部分を露骨な表現でほめ上げながらネチツこく弄び始めた。チャコは全く思考能力を失う程の激しい嵐に巻き込まれたことを不思議にすら感じず、湧き上る衝動のままに溺れた。

それから三週間後、チャコは東京に来て二度目の引っ越しをした。

アパートといっても、小さいがバス、

トイレのついた鉄筋の二階建てである。その1DKの部屋に住むことになったのだ。

新しい家具やテレビなども、大会社で部長の位置にある池永が揃えてくれたのだった。

早い話が、チャコは池永の妾になったようなものだけでも、彼女にはそう言った意識は全くない。

親の目から離れて東京にいた間だけでも、人よりも良い恰好をして、楽しく遊んで暮らしたかった。そのためには、利用できるものは利用しなければ損だという考えである。真の恋愛と、肉体の快楽は別問題だと思っていた。

そのアパートで迎える初めての土曜日に、池永がやって来た。

団地サイズの応接セットに腰をおろして、ブランドをなめながら、しばらくの間、雑談をする。そのうちに池永は立ち上って、玄關脇に置いておいた、黒い大きな革カバンをとってきた。

「なあに？ それ」

チャコが訊くと、池永はニヤニヤしながらそのカバンのジッパーをあけて言った。

「今日は、いいものをもってきたんだ。これ見てごらん」

彼がカバンから取り出したものは、赤い表紙のアルバムだった。チャコは何げなくそれを受け取り、表紙をあけてみて、ギョッとなっていました。

そのアルバムにきれいにファイルされた写真には、若い女が全裸で縛られている姿が写っていたのである。

「すごいわ、いやねー」

などと言いながらも、チャコは好奇の目でゆっくりとページをめくっていった。

縛り方や、ポーズがいろいろ異っていても女性は同一人だった。そして、どの写真もすべてを曝け出しているポーズだった。がんじがらめに縛られて、肉のかたまりとしか言いようのない恰好で男に抱かれているのもあった。

あるページをめくった時、チャコの目はそこに釘づけになってしまった。縛られたその女性の臀部に、太い浣腸器が明瞭に認められたからである。

チャコは胸がドキドキして息苦しくなってくるのを覚えた。恵子にむりやり浣腸された時の記憶が鮮烈によみがえってくる。

「ほう、チャコは浣腸に興味あるのかい？」

横で一緒に眺めていた池永が訊いた。

「冗談じゃないわ、気持悪い。ねえ、それより早く」

チャコはそのアルバムを乱暴に閉じると池永にしがみついていた……。

小一時間後、ヨレヨレになったセミ・ダブルベッドのシーツの上に、チャコは全裸でグッタリと横たわっていた。乱れた栗色の髪の毛が、汗で頬にまとわりついている。

池永はパンツ一枚でそのベッドに腰かけ、ケントを吸いながらそんなチャコを見つめていたが、やがて、思いついたように立ち上った。

そして例のカバンから革のひもを取り出すと、いきなりうつ伏せに寝ていたチャコの両手首を背中であわせて縛り始めたのである。

「アッ、イヤ。なにをするの」

放心からさめて、事態に気がついたチャコが必死に手首を振りほどこうとする。だが、そんなことをすれば余計くい込んで痛くなるだけだった。

「フフフ……いいことをしてやるからな」

池永はうす笑いを浮かべて、彼女にガラス製の浣腸器を見せたのだ。

「やめて。イヤ！ 浣腸なんてイヤよ！」

チャコは顔を振って、子供のようにイヤイ

ヤをする。

「大丈夫、いくら暴れても痛くないようにするから」

彼は、ゆっくりと浣腸器に薬液を満たしていった。

そして、透明な液体がいっぱいになると、嘴管に黒く細いゴム管をはめる。そのゴム管の先端は、やはり浣腸器の先と同じような形をしていた。

近づいてくる池永をのがれようとしたために、チャコは無意識にとった自分のポーズに気付かなかった。

「みっともない。写真通りだよ、チャコ」

そう言いながら池永は、楽しげにゴム管の先にたつぷりとオリブ油を塗り始めた。

チャコは内心で、思ったより簡単なんだなと感じていた。しかし、その一瞬後にはすごい勢いで冷たいものがかけめぐり、猛烈な便意を催してきて驚いてしまった。

彼女の驚きはもう一つ、増えた。池永に抱かれて浴室へ連れて行かれたからである。

「どうしてこんな所へ連れてくるの。トイレに行かせて」

チャコは哀願した。

「だめだよ。ここが今夜のトイレなんだ」

池永は非情にいい放って、ドアのところに立ちはだかる。

「イヤ、イヤ」

チャコは顔をクシャクシャにして泣き出していた。池永は異様に輝く目で、そんなチャコを見下ろしているだけだった。

チャコは、確かにあの写真を見た時、秘かに池永から同じ事をされるのを望んだのだ。だから、ポーズでは拒否したけれど内心では嬉しかった。しかし、それにはもっとムードが欲しかった。急にこんなことにまで発展したとまどいに、チャコは怒りと恥かしさに頭が混乱していた。

後始末をした後、池永はしきりにあやまりながら、彼女の体にシャボンをたくさんつけて、ていねいに洗い清めた。でも、チャコは一言も口を利かず、ただ泣きじゃくるばかりである。

池永は、チャコが本当に怒ってしまったのかと思い、ひたすらにあやまり、気嫌をとり早々に帰って行った。

事実チャコはその乱暴さに腹を立ててはいなかった。けれども日が経つにつれて、チャコの心の中でその不愉快な記憶は、段々と甘美なものに変わっていったのだ。

それ以来、池永はさっぱりアパートにやっ来ない。心配になってチャコが会社へ電話してみると、九州へ出張中ということだ。

その時、急に池永が恋しいと思った。彼が帰ってきたら、うんと甘えて、そして、うんと恥かしい目に合わせてもらいたい、と願うようになったのである。

池永が出張から戻った日、チャコは初めて自分から「アパートに来て欲しい」と電話でたのんだ。そして、その夜のチャコの積極さには、池永もただあきれるばかりだった。

それを境に、彼と会うたびごとに、チャコは急速度で大人の遊戯という悦楽の沼に溺れるようになった。浣腸ばかりではなく、尿道をいたぶられたり、縛られた上でおしりをベルトで打たれることにも快感を覚えるようになったのである。

池永のおかげで金に不自由はしない。

チャコは流行の先端を行くスタイルで、毎晩のように恵子や、とりまきの男達と、赤坂や六本木で遊ぶようになった。

しかしこんな生活が、そう長くは続かないことをチャコは知っていた。たまに学校へ行くくと、恵子が手紙を持ってきてくれる。家には場所が変わったことを、とても教えられな

いからだ。

その手紙はみんな郷原からのものだった。早く逢いたい、結婚したいという綿々たるラブレターである。チャコはその誠実な文面を見るたびに思った。やはり卒業したら結局、この人と結婚することになりそうだ……と。そして、かわいい奥さんになることが、私の一番の幸せかも知れない……と。

しかし矛盾したことに、そう思えば思う程チャコは刹那の快楽に身を投げだしたい欲求にかられるのだった。

ある日、チャコはタクシーで一軒の家に向かっていた。チャコはこれから自分に起きることを想像し、期待と不安で胸がドキドキして下半身がだるくなるのを感じていた。

池永と、その友人だという二人の男に、これからさんざん、いたぶられることになっているのである。池永からその了解を求められた時、チャコは断わろうと思えば断われたのだが、あえて断わることはせず、こうして自分から苛められる場所に、急いでいるのだった。

やがてタクシーは繁華街から少し離れた目指す家の前に止まる。和風の普通の大きな家だと思っていたが、門の所でそれが旅館だと

判った。玄関のブザーを押すと、すぐに四十年配の、いかにも水商売あがりらしいその女将が現われて、すぐ案内された。

「もうみなさん、早くからお待ちかねですよさあ、どうぞ、どうぞ」

部屋のふすまが開かれると、そこには池永と、二人とも年は同じ位だが、でっぷりと肥った男、それにいかにもインテリそうな眼鏡をかけた男の三人がいた。テーブルの上には料理や、もう、かなりの数の徳利が並んでいる。

男達の視線は、遠慮なくチャコの体をなめまわした。チャコは自然に身がすくみ、動悸は一層、激しくなった。

「ここへおいで」

池永にそう言われて、チャコは彼のとなりに坐る。池永は二人を紹介した。肥った方が及川、眼鏡をかけている方が高橋と言うらしい。

「チャーミングだねえ」

すでに赤い顔をした及川が言った。

「まあとにかく、きれいなお嬢さんが来たことだし、もう少し飲みましょうよ」

高橋が言う。

チャコは池永から盃を勧められたが、それ

を断わった。

「どうした？ 気分でも悪いのかい」

「そんな事ないんだけど……」

「今日は思い切りハレンチになってくれないと困るんだよ」

チャコはそう言われて、そのつもりで来たことを思い出した。しかし、やはり二人の男の目の前だということに恥かしくなって下を向いてしまった。

「それじゃ、わしが飲ましてやろう」

及川はそう言って徳利を一本持つと、チャコの後ろに回り、いきなり彼女のあごを腕でかかえて、酒を口に流し込んだのである。

「ウウッ」

チャコは、この無理酒に、思わずムセこんでしまう。池永は、それを止めようとはしない。

「ふーん、いい体してるねえ」

高橋もそばに来て、白い絹のブラウスのボタンをはずしにかかった。

足をバタバタさせたのでグリーンのミニスカートはすっかりめくれてしまい、ガードルが丸見えになっている。茶色のストッキングとガードルの間にはみ出した白い太腿が、たまらなくエロチックで、男達を一層、刺激し

た。池永はただニヤニヤと、そんなチャコを眺めているだけだ。

「何でも言うこと、きくから手を放して！」
酒をふきこぼしながら、チャコが叫んだ。

「ほんとに何でもきくか？」
チャコは彼の酒くさい息をかきながら、大きくうなずいた。

手が放されて一息つくと、チャコは立ち上って、半分脱がされていたブラウスを取り、スカートを下に落とした。スリップはつけていない。ブラジャーをはずす。

「ホーッ。大きいだけじゃなくて、素晴らしく形がいいんだねえ」

高橋がうわずった声を出した。

痛い程の視線を感じながらチャコは、ストッキングを取り、ガードルを脱いだ。最後に残されたピンクのビキニ型のパンティは、腰

——ご投稿下さる方へお願い——

各種原稿募集に対しての応募は歓迎致しますが、作品に住所、氏名を書かずに送付されると、稿料送呈その他で整理がつかかねる場合が生じますので、投稿作品には必ず一作（イメーヅ画も）毎に、住所、氏名、ペンネーム附記を、原稿用紙使用、縦書きと共にお願い致します。

肌につきく、くい込んで苦しそうな横じわを作っている。

「この娘のパンティはねえ、いつもムレムレなんですよ。そうだろうチャコ」

池永はなんて恥かしいことを言うんだろうと、チャコは思った。

「そのパンティを、二人によく見せてあげたら？」

素直にチャコは前かがみになる。

今自分は、三人の男達の、あの叔父と全く同じような、陰湿なネチネチとした目にさらされている。そう思うと急に、得体の知れない情感が湧き上ってきて、自分をメチャメチャにして欲しい気持ちに襲われた。

それからの数時間、三人は考えつくあらゆる限りの恥辱をチャコに加え、チャコもまたそれに反応したのである。

男たちはチャコに犬の首輪をつけ、その汚れたパンティをくわえさせて、四つん這いで部屋の中を歩かせた。尻尾のかわりには、キウリが使われた。

動けなくなると、だれかが手加減せずにベルトで腹やおしりを打つのだ。そんなところに、さっきの女将が入って来て、

「まあまあ、若い娘さんがハレンチなこと」と笑って見ていたのにも、チャコは気がつかなかった。

それからのことは、チャコの頭の奥に夢のようにかすかに残っている。三人が代る代るにいろんな縛り方をしたこと、逆さに吊られたまま失禁させられたこと、後手のままで畳の上に投げられた物を食べさせられたこと、三人がかりで浣腸されたこと、エビ縛りのままで弄ばれたこと……等々。

ふと気がつくと、いつの間にかチャコは暗い部屋のふとんの上に、全裸のまま寝かされていた。縛られてはいなかったが、体中の汗腺から汗がふき出し、全身がしびれたように痛い。

池永達は、もうとっくに帰ったようだ。
チャコはなぜか、むしろ空しかった。

どうしてこんな事になってしまったんだろうと思うと、急に郷原になぐさめてもらいたという気がした。しかし、反面、体の隅々までしびれているようなこの快い倦怠感は何なんだろう。彼は私のことをあんな風にくれるかしら。そんな事を想いながらチャコはまた深い眠りに落ちこんでいった。

連載 アブ紳士行状記 仁科雅介の巻 (四)

M 派 交 友 録

(12)

鬼 山 絢 策

(カット・春川ナミオ)



香

「結局、あの小説はハッピーエンドなんですか、それともアンハッピーに終わるんですか」

「サア、どっちにしましょうか」

「M小説としてはアンハッピーに終わるのが本格的ではないんですか。例えばザッヘル・マゾッホの場合

合でも客観的に見てアンハッピーでしょう」

「私は始終、考えているストーリーがあるんですよ。泥棒、強盗、脅喝、詐欺から強姦、殺人まで犯し、世の中のありとあらゆる悪事を重ねた奴が益々栄えて幸せになり、善人の血を吸って、栄耀栄華をつくして出世して、

めでたしめでたしという小説を書いてみたいと思うんですがね。思うだけで書いているうちに、いつの間にか勧善懲悪になっちゃう」「それだけ先生は古いんでしょう。臆病なかな」

「臆病なんですね」

「ところで、僕の場合は完全なアンハッピーですからね」

仁科君は言葉とはうらはらに、さわやかな笑い声をたてた。

仁科雅介は、大場浩三が大の苦手だった。

地位も実力も金もないやくざの大場に、美子のこととなるといつも遠慮して、こめられていた。だが美子は、今や自分の妻である。

左前になった商売の巻き返しにと、やっと手に入れた百五万円の資金と、最愛の妻を奪われては、いくら苦手の男といえども黙って

男 女 の 湯 滝

「先生の「らぶ・すれいぶ」の主人公下条清二という人は実在のモデルが居るんですか」「ええ、居ますよ」

引っ込んでゐるわけにはいかない。

仁科は、まず美子の母親、多美子に相談した。美子は母親にも知らせずに姿を消したと見えて、多美子はびっくりし「申し訳ない」と詫言の百万言をくり返した。

その後、三、四日経って多美子のところへ美子から手紙がきて、大場と東京で暮していただい言ってきた。住所が書いてないので居所は分からなかったが、多美子は直ぐ仁科に知らせてきた。

居ても立ってもいられない気持の仁科は東京へ行って、心当たりを訪ねて、二人の行方を探した。特攻隊時代の大場の友達の話を聞いていたので、まずその友達を探し出して聞いたり、極東組の準幹部だという、大場の口へのぼった男とも会って聞いたが、否として二人の行方は分からなかった。

「時々多美子のところへ手紙がくるたびに、東京へ探しに行きましたよ。本所のバーに勤めていゝと言へば、本所のバーを軒なみ飲み歩いて探しました。その時、先生の中野の宅へもお寄りしたんです」

「その金のことですがね、どうして分かつたんですか」

「母親の多美子が、百五万円も持ち逃げされ

て仁科さんが困つてゐるから、せめて半分でも返せと言つてやつたら、イヤ三十五万円しか持つてこないとやつてきたんです」

「え？ おふくろさんが手紙を出したと言ふことは、居所をおふくろさんに知らせて来たんですね」

「イヤ、深川の赤塚方となつていましたが、そこには住んでいないんです。僕は直ぐ飛んで行つて赤塚という人に会つたんですけど、口を封ぜられてゐると見えて、どこに居るか知らぬ存ぜぬでとり合つてくれないんです」

「なるほど」

「それで福原が盗んだことが分かつたんですが、もうその時は、福原は会社をやめてしまつて、これも行方をくらましてしまつたあとなんで、どうにもならなかつたんですが、事務所の者から聞いたところによると、福原も美子と関係してゐたんですね。あんな爺いまで相手にするとは、美子も相当なもんでしたよ。ただし僕の想像するところでは、関係といつても普通の関係ではなかつたように思ふんです。美子としては福原の口を封じるための関係だつたんですからね」

「口を封じるために、文字通り福原の口を封じていたんでしょね。美子さんのグラマー

な肉体で」

「そうなんです。でなければ、あの事件の日の、あの異様な状態は、普通の関係では考えられませんか」

「たしかにそうですね」

「ただね、あの時の小便の量というものは、実におびただしい量だつたんですよ。畳も福原の洋服も、グッショリ濡れてたんですからね。美子一人だけの尿量では、とてもあれだけは出ないと思ふんですよ」

「と言ふことは、大場も一緒になつてやつたと言ふことですね」

「そうとしか考えられませんか」

「なるほど——とすると、恐らくそこまで行く前に、もっといろいろな凌辱が加えられたと見てもいいでしょうね」

「僕も、そう思います。いつも昼過ぎには福原が僕の家へ行つてましたからね。それがあの日に限つて福原が現われなかつた。美子は恐らく事務所へ電話して、僕や福原の行動を聞いたんじゃないかと思ひます。そして一日中、仕事で忙しいことを知つて、安心して大場を呼び寄せたんじゃないかと思ふんです」

「まだその時点では、二人で逃げるなんてことまでは考えてゐなかつた」

「そうでしょうね。そして二人で情事の最中に突然、福原が現われて邪魔された。しかも福原が三十五万円を書庫にしまうところでも見て、気が変わって、二人で逃げる気になったんでしょう。大場にしても美子にしても、刹那的な行動に出る性格ですからね。福原が抵抗する、それを縛りあげて——」

「無抵抗の状態になった男を見ると、美子さんはムラムラと、いつもの癖がでた——」

「恐らく美子は何も好んで、あんな爺いに関係するはずはありませんから、大場の見ている前で、思うさま凌辱したんでしょう。そしてギャアギャア騒ぐ福原の口の中へ、あと始末をした手拭いのさるぐつわをかませておいて、油蟬みたいに逃げぎわに小便を引っかけて行ったんですよ。面白がって見ていた大場もつき合った——」

「ウーム、凄いなあ」

「イヤ全く、僕は、あの小便の匂いを嗅いだ時、あれだけショックを受けていながら、それとは別に昂奮しましたよ。そして福原が何か羨ましく感ぜられたんです」

「福原の代わりに、自分をそのポジションにおき変えてもらいたいというような——」

「そうです。福原は台所でうがいをしたり、

ゲーゲー吐いたりしていましたからね、相当飲まされたと思いますよ」

「君なら吐いたりなんかしないでしょう」

「ええ、もったいないですよ」

「大場のを飲んでも？」

「そうですね。僕の心の中に拒否反応と、許容反応が摩擦し合って、結局、許容するでしょうね」

芸 妓 美 香

仁科にとって、失意の日が続いた。

借金の返済期日が刻々、迫ってくる。仁科は、やけになって柳が瀬で飲みつぶれ、女を買って遊んだ。

前に一度、遊んだ友子という芸妓には、自分の性向を打ち明けて、S的に振舞ってもらった。その妓は、おとなしい妓で、お客の好みに応じて、そうしてくれたものの、本質的に好きではなかった。その妓が、

「あんた、そういうことが好きなら、ちょうどピッタりのひとが居るわよ」

と言って紹介してくれたのが、美香という芸妓だった。美香が仁科の前に現われた時、仁科はハッと息をのんだ。あまりにも美子に

似ていたからである。

仁科は美香に夢中になった。

だが、その頃には仁科も、いよいよ切端つまった状態で、商売の方は二進も三進も行かなくなっていて、結局、彼のつくった会社は二年で倒産した。どうしても払わなければならない借金は、父親の雅太郎氏が持家を処分して返済してくれたが、それからは父親の家に戻って、薬局の方を手伝うようになって現在に至っているのである。

仁科君の物語は、これで終わっている。

この物語だけなら、私は何も岐阜に二晩も泊まる必要はないので、翌日、東京へ帰ればよいのだが、私は仁科君の過去にも興味を持ったが、それ以上に彼の現在の「恋人」である美香という芸妓に興味を魅かれた。そのために、もう一晩泊まることにしたのである。

翌日、名古屋へ出て仕事をして夕飯を食い麻雀を二荘ほどして時間をつぶし、九時頃、岐阜へ戻った。あまり早く帰ってもしようがないし、それに仁科君が薬局をあずかっている以上、店を閉める前に呼び出しては商売に差しつかえるし、父親の雅太郎氏にも悪いと思ったからである。

柳が瀬の「お定」から仁科君の家に電話すると、はりきってやってきた。

「美子さんの消息はその後、分らないのですか」

「ええ、母親の多美子の話では間もなく大場とも喧嘩して別れたということですが、そのうち、多美子が店を人に譲って居なくなってしまうので、僕としては手がかりを失ってしまったんです。恐らく多美子は、東京で美子と一緒に居るんじゃないのですか。所詮、美子は家庭の妻として暮せる女ではなかったんですね。僕も今では、諦めました」

「お定」で11時頃まで飲んで店を出た。

「ここが多美子の店だったんですよ」

と知らされた家は、今でも「花月」という看板はかかっていたが、代が替わっている。「前は、もっと汚い店だったんですが、いまじゃ、よくなりましたよ。店の権利も何倍にもなっているし、辛抱していればよかったんですがね」

昨夜、泊まった旅館へ行くのかと思ったら今夜は「松喜」という旅館へ案内された。

「いつもの、あの部屋、空いてる？」

仁科君は美香を呼ぶ時に何度か使っているらしい部屋を指定した。わざわざ指定したぐ

らいだから、よほどいい部屋かと思ったら、平凡な和室だった。

「あなたのお泊まりになる部屋は、この隣にとっておきましたから」

一ぱいやりながら美香という芸妓の来るのを待ったが、なかなか現われない。仁科君はジリジリしてきて何度も電話をかけていた。12時半ごろになって廊下に足音がすると、

「あ、来ました！」

と仁科君の顔が明るくなった。

障子を開けて私と視線が合うと、

「あら、お客さんが居たの」

と言いながら入ってきた女性を見て、私はハツとするほど緊張した。あまりにも綺麗だったからである。

芸妓と聞いていたから銀杏返しか何かのかつらに棲でもとって現われるのかと思ったらこれはまた何と、意外な服装だった。白い半袖のブラウスに黒いアコースジョンプリーツという、靴下も穿かない素足のままという姿はオフィスガールみたいなスタイルだった。

「お客さんがあるんだったら、も少ししな恰好して来るんだったわ。こんな恰好で、ごめんなさいね」

傍へ坐って徳利をとりあげたところは、ま

ぎれもなく芸妓である。

「仁科君と二人の時は、いつもこういう恰好で来るの。お安くないなあ」

「この人は、あたしの情人いとこですからねえ」

「いや、奴隷ですよ。いつも、ひどいめにあ

ってる」

「フッフ、何いってんのさ。それが楽しみで来るんだろう」

「あ、こちら東京の鬼山先生。小説家だよ」

「エロ小説や変態な小説ばかり書いてます」

「あら、じゃあ同じ穴のムジナなの」

「御挨拶だなあ。だがその通り。御明察だ」

「やっぱりマゾの方？」

パツチリとした大きな目で、まじまじと私の顔を見られて、さすがにちょっとテレた。

いま彼女の顔を想い出してみると、渥美マにそっくりな顔立ちだと思う。つり上った眉の下の目は瞳が大きく、鼻も口も大柄、いや身体全体が1・65米ぐらい、60キロもあるうかというグラマーだった。

私は、岩田美子の容姿について触れなかった。それは私が、この目で実際に見ていなかったし、仁科君にどんな容姿かと聞いても、「明日呼ぶ美香という芸妓にソックリなんです。美香を見てもらえばわかります」と言

うので見もしない女の顔を想像で書くのも気がさすので、触れなかったのである。

だが、こうして目の前に美香という女性が現われてみると、なるほどこれほどの女なら仁科君が夢中になるのも当然だと思った。

「あたし今日はお座敷がいままであってさ、さんざ飲まされちゃって、酔っぱらってるからね。今夜は荒れるわよ」

「おっかないな。でも、その方が歓迎だよ」

「ああ、暑い。あたし、これ脱がしてもらわ。少しは息を抜かないとね。失礼するわ」

美香は、半袖のブラウスを脱ぐと、白いナイロンのシュミーズ一枚になった。盛りあがった大きな乳房が、今にもこぼれんばかりのすばらしい肉体だった。

「あんた凄く、いい身体してるね。オッパイの恰好も、よさそうだね」

「ホラ、こんなのよ」

美香は、シュミーズから無雑作に乳房を出して見せた。

「あんたのヌードを撮ったら、素晴らしいな」私はカメラを持って来なかったことを後悔した。

「このひとのもっとも美しいところは足ですよ。太腿が素晴らしいんです」

「ホウ、ボリニームがありそうだな」

「よう、拝ましてくれよ」

「拝観料、高いぞ」

美香は、私と仁科君の間に坐っていたが、私の首へ手をかけて身を寄せると、坐ったままスカートを捲って白い足をテーブルの上にデンとのせた。仁科君は、そのふくらはぎを両手で抱えて頬ずりし、太腿の方まで頬をずらせて行って接吻した。

「足を見せてやると、すぐこれだからね」

美香は、私の顔に頬を寄せて、流し目に見ながら、いきなり私の頬にキスしてきた。

「いつも、そうやってんの」

「こんなもんじゃないわよ」

美香は、太腿の間に仁科君の顔を挟んで盃をとった。私が、お酌した。

「いまに口から泡を吹かせてやるから……」

仁科君の顔を見下ろして、うまそうに盃をほす表情は、長いまつ毛の下の目が妖しくもえて、たとえようのない妖艶さである。

仁科君は、豊かな肉に挟まれて、その感触に陶醉している。確かに素晴らしい足だった。膝から先は細っそりとしているが、太腿から急に太くなり、丸味のある肉は、仁科君の顔

の上で弾力をもてあましているように、顔の

上まで盛りあがっている。白絹のように肌理きめの細かな、しかもふくよかなこの太腿に挟まれたら、どんな男でも魔法をかけられたように魂をとばしてしまうであろう。

私の胸には、彼女のプリンプリンした乳房がおしつけられ、かなりの重量感で寄りかかってこられるが、甘い体臭とともに、ふんわりとした肉感、私をふるい立たせた。

「こうやって虐めてやって、お線香代もらえるんだから、いい商売じゃない？」

「女はトクだね。君は金の為にやってるの」

「フフ、そうよ。イエ、ほんとにさ、お金なんか貰わなくてもいいんだけど。だって面白いもん」

ギューギュー締めつけられて、仁科君は苦しそうに首を回そうとするが、動かない。

「でもさ、金を取ってやる方が値打ちがあるんじゃない？ 金持から金を取ったって、こたえないけどさ。此奴のような貧乏人から、ふんだくってやるのは価値があるわ」

この女は、確かにSの性格を先天的に持っている。苦しむ仁科君の顔を見下ろす瞳が慾情に濡れている。

「コラ、今夜は金を持ってきたか」

上の足を持ち上げて、ゆるめてやる。

「金は持ってこない」

「こん畜生、この前もツケで遊びやがって、宿屋の払いまであたしにさせといて今夜も持ってこないのか。殺しちゃうぞ！」

額をピシャッと叩く。

「勘弁してくれ。きつと払うよ」

「何言ってやがんだい。逆さにふってもないくせに」

美香は、ヒョイと尻を浮かすと、仁科君の額の上にドッシリと跨がって、シュミーズを引っぱってかくしてしまった。そして私を見てニツと笑った。

「お客さんは東京の人？」

「ああ、江戸っ子さ」

「あたし、東京へ行きたいわ」

「連れてってやろうか」

「ウン、連れてってえ」

苦しくなった仁科君が、シュミーズの下でもがくのを、お尻を振って抑えつけている。

「その下、どんな風になってるの」

「こうよ」

美香は、サツとシュミーズを捲って、また直ぐ下ろしてしまった。

ナイロンの透き通るパンティを、はいていた。その頃透き通るパンティは珍しかった。

こんなパンティもあるのかと感心したくらいだった。その大きな尻におし潰された仁科君は苦しうに目を瞑っていたが、目の前が明るくなると、パツと目をあけて、私と視線が合った、と思う瞬間、もう幕は下ろされてしまった。

「まるでストリップだな」

「柳が瀬のストリップ、凄いでしよう」

音に聞こえた岐阜セントラルのストリップも、まだこの時代では、大したことはなかった。岐阜セントラルが評判になったのは32年—35年ぐらいである。

「ストリップ並みに、やってくんないかな」

「ガツガツしなくなつて、だんだんいいところ見せてあげるわよ」

仁科君は、いよいよ苦しくなったと見えてプロレスのように畳を叩いて降参の合図をした。

「ふふ、参ったか、この野郎」

ニツコリ笑って、許してやった。

「今日は、ほんとにツケはだめだよ」

「大丈夫だよ。そこに金主がついてるから」

「あ、そうか。そいじゃ今夜はタッピー可愛がってあげる」

スカートを捲って覗きこんだ美香は、

「パンティが濡れちゃったわ。気持が悪いから脱いでくる」

と言ってトイレに立っていった。

蜜の味

「全く凄いひとだねえ。あんなすばらしい妓は見たことない」

「いい妓でしょう。あの妓抱いて見ますか」

「そりゃありがたいけど、あんたに悪いな」

「いや、いいですよ。今日は先生がお客さまなんですから」

そこへ美香が、パンティを片手にブラさげて戻ってきた。

「もう遅いから、このへんで切り上げて寝ようじゃないか」

仁科君が気をきかせて言った。

「あら、もっと飲もうじゃないの。これからタッピーいじめてあげようと思ったのに」

「イヤ、今夜は大切なお客さんがいらっしゃるから、きみはよくもてなしてくれよ」

「あたし、こちらとご一緒にいいの？ あんた、どうするの」

「遅いから此処へ泊まってくよ。帰ったって家へ入れてくれないよ。道楽息子におふくろ

は腹を立ててるから」

「可哀想に。指をくわえて我慢するのね。もつとも、それがあんたの性に合ってるわね。」

あんたは女の子をはりあう時は、いつも指をくわえて引っ込む方だからな。アハハハ」

美香も仁科君の過去を知っているらしい。

「今は違うよ。だが今夜は、しかたがない、

お客さまを遇するのがエチケットだからな」

「フン、うまく逃げたわね。じゃ可哀想だから、これあげるわ」

美香は、濡れたパンティを仁科君の顔へ、

ポイとぶっつけた。

「それでも被って寝んねしな」

美香は私の方に向かってニッと笑うと、両手を差しのべた。

「わるいな、ほんとに——」

私も腰をあげて、美香のやわらかい肩を抱いた。

「じゃ、おやすみ——」

隣の室には蒲団がのべてあり、スタンドがボンヤリついていた。

「すぐ寝る？」

美香は私の首を引き寄せてキスしてきた。

「ウン、これから飲むったって宿のひとを起こすのはわるいだろう。それに私は、あんま

り飲めない方なんだ」

「では、あの方一方？ ウフフフ」

私が洋服の上衣やネクタイを、どんどん脱いで行くと、坐ってそれを手ぎわよくたたんで行く、しぐさは芸妓である。だが、シュミーズ一枚の姿なので、何だかひとつ風情がない。

「暑いわね。あたし、はだかになっちゃう。いいでしょ」

美香は、シュミーズをおとすと、それだけで全裸になった。

実にみごとな肉体である。豊かな、まるみをもちあげた乳房は、左右に誇らかに張っていて、その目とも言うべき乳頭は、薄桃色に

愛らしく、絹ごしの豆腐のようなぬめ肌は、白く艶やかに、胸のくびれも、たまらない魅力がある。

下から見上げると、まるく大きな尻は女性の權威を誇示するようであり、その巨大な臀に連なる太股は、はちきれんばかりに円く、威圧を受けた。

総体によく発達しているが、まだ爛熟はしていない。若さがあふれていて、この女性は存外、若いのではないか？ プロの女性の中には年が若くても多くの男性に接して乳房が

黒ずみ、唇のふちなどにかくしようのない熟成をみせるのだが、美香にはそれが無い。この女性は、まだ男性とも多く接していないのだろう。

私の床へ入ろうとする美香の足を首に巻いた。肌は冷たく感じたが、弾力があって、つきたての餅のように柔らかい。

美香は、笑いながら私を見下ろし、次の動作を待っている。

「きみ、旦那があるんだろう」

「あるわよ」

首をちょっとかしげて平然と言った。

「でも、六十八のおじいちゃんよ。もっぱら舐めるだけね。仁科と同じよ」

私は、美香の丸いお尻を引き寄せた。彼女は膝について重味のかからないように加減していた。初対面だけに遠慮があるのだろう。

全くすばらしい味であった。美香は、慕い寄る蜂を狂喜させる甘い香りの蜜をもっている。仁科君が夢中になるのも無理はないと思

鏡のマジック

美香は、すべすべした肌を私の肌にこすり

つけるようにして蒲団の中へ入りこんでくると私の口に接吻して、

「ねえ、ほんとに東京へ連れてってちょうだいね」

「だってきみはえらい売れっ妓じゃないか」

「鵜飼いのシーズンだけよ。それが過ぎれば暇になるのよ」

「きみが浮気したら、旦那が怒るんじゃないの」

「フン、怒りやしないわよ。あんな爺いに束縛されてたまるもんですか。そんなことしたら旦那をクビにしてやるわ。若くてハンサムなひとが、いくらでも旦那になりたがっているんだから」

「じゃ、そういうのを旦那にしたらいいじゃないか」

「そういう奴は、あたしをひとり占めしようとするのよ。それこそ浮気したら怒るわ。そういうのイヤなの。その点、あの爺いは、あたしの身体を舐めさせてやってれば喜んでるんだから気楽なのよ」

これは彼女の本音かもしれない。芸妓はしなくても、氣にくわない男には安直に肌身を許す女ではないことを、彼女の肉体が証明しているのだった。

彼女を抱いてみると、キュッと締まっていた、処女みたいに初々しい感じがしたからだった。

「暑いわね」

美香は、蒲団を剥いでしまった。

男は、どんな場合に最高の調子が出るものであろうか。人によってそれぞれ違うであろう。

最高の美肌に出あった時、最も愛する人との場合、美しい女性の場合、他のエレメントに刺戟された場合、等いろいろあるだろう。

私は面喰いの方だから、自分の好みの容貌と肉体を持った女性の場合が一番よい。しかも、S的なエレメントをはさんだ今夜などは全く久し振りにハッスルできたのである。

美香は、いかにも芸妓らしい、と言うより女らしい気の使いようを見せた。

しばらくは、天国に遊んでいるうちに、快い疲労と眠気がさしてきた。

その時だった。

「この部屋ねえ、ちょっと面白い仕掛けがあるのよ」

裸のまま立った美香は、いたずらっぽく首をすくめて笑った。

「なんだい？」

「あいつ、どうしてるかな？」

美香は、隣の部屋との境の壁に近寄った。

そこには、美人画の色紙をはさんだ丸い額が下っていた。

美香は、その額を壁からはずした。

すると、その下に細長く矩形に切った穴があいていて、うすぐろく曇ったスリ硝子のはめられてあった。そこへ額をつけて、隣の室を覗きこんだ。

「ウフフフ、あのバカあんな恰好してるわ」

「どれどれ」

と私も立って行って美香と頬ずりしながら隣の部屋を覗いてみた。

仁科君は、美香のパンティを顔に当てて寝ていた。

美香は、私を見てクスツと笑い、

「可哀想だから少し可愛がってきてやるわ。いいでしょ」

「ああ、そうしてやりたまえ」

美香は全裸のまま襖を開け、廊下に人が居ないのを見すまして出て行った。

そうになると、勢い私は覗き窓から隣の室を覗きこまざるをえない。

仁科が特に「いつもの部屋」と、この二間を選んだわけが、いまになって、やっと分か

った。

もちろん、こちらから覗いていることは、向こうには分らない、はずだ。近頃は、表面は鏡になっていて、向こうは鏡の裏から覗くと素通しになって覗ける部屋をつくった温泉マークの旅館はザラにあるが、当時としては珍しかったのである。私もこの夜、こうした仕掛けに始めてお目にかかったので面白いと思ったが、後には珍しくも何ともなくなってしまった。

やがて、視界の中に美香のグラマーなヌードが現われた。美香は、いきなり足をあげてパンティの上から仁科君の顔を踏みつけた。

仁科君は、あわててパンティをどかさうとするが、手を腰に当てた美香は、ギョッと踏みつけて、それを許さなかった。

仁科君は、両手に美香の足を持って、やっ取りのけた。美香が笑いながら何か低い声で話しかけ、仁科君も低い声で話し合っていたが、声は聞こえるのだが、言葉の意味は分からなかった。

とたんに美香が仁科君の身体を跨ぎ、腰を下ろした。

まことに無雑作な行動だった。

私の覗き窓からは、横に寝た仁科君の上に

横向きに乗っている美香の姿があった。

私も、彼女に乗られたから、彼女が如何に重いかを知っているのだが、それでもその時は美香が加減していたから、ほんとの重量は分からない。だが、いまのポーズは違う。美香は両膝をピッタリ下ろしてしまっているのである。

これは相当、重いに相違ない。

「アハハハ、ばか！ どかせるものならどかしてごらん」

仁科君は、うめき声をあげながらもがき、あばれて、肉塊の正面攻撃を避けて、やっと顔を横に向けた。

「なんだよう、この野郎」

美香は、仁科君の薄くなった頭髮をつかんで仰向けにひん向けようとする。上と下との格斗で二人の体位が崩れ、仁科君の頭が、私の見ている方向へ傾いてきた。

美香は、仁科君の髪を引きむしるようにして暴れるのをおさえつけているうちに、いつしか最初の形から見て、90度に方向が変わり私の覗き窓から見て、美香の身体が真っ正面に向かい合う形に変わった。

そこで、仁科君の暴れがしずまった。完全に美香の重量におさえつけられてしまったの

である。

「イヤだって言っただって承知しないから。どうだ、参ったか」

勝ち誇った美香は、ギョウギョウおさえつける。

「これでもか、これでもか」

時に女らしさを見せる美香が、仁科君の上に打ち跨がった時は夜叉のように荒れ狂う。

美香は、私に、

「あの汚い痣を見ると癪にさわって、思いきり虐めてやりたくなるのよ」

と言っていたが、今その痣を責めている。

うすあおぐろい痣が、昂奮するとあかむらさき色に変わってくる。今は昂奮の極に達したのか、暗紫色にさえなっている。その痣も、やがて巨大な肉の下敷きになって見えなくなってしまった。

仁科君は完全に圧服され、失神してしまっ

た。
抵抗力を失った男に、更に女性の惨酷な加圧が何度もくり返され、完全にノビたのを見届けると、美香は首を、つと持ちあげて私の方を見て、ニッと笑った。

もちろん、美香の方から私は見えない、はずである。だが私が、そこから覗いているこ

とは、美香は十分、承知しているのだ。

してみると、暴れ廻って方向を変えたのも或いは美香の意識してやったことであろう。

私は、ここでもカメラを持って来なかったことを悔んだ。

あの美香の勇姿は何ともしようのない美しいものだった。惜しかった。もっともフラッシュなしでは、とても写らなかったであろう。だが、もしフラッシュを持っていたとすれば、たいしたところで、仁科君は気づかないだろう。美香は、気づいても許容してくれるに相違ない。

などと「釣りおとした魚」のことを一生懸命に考えていた。

「がいせん」した女將軍を私は再び求めた。

翌朝、早い汽車で私は東京へたった。

岐阜の駅まで見送りにきてくれた仁科君は

「また是非、来て下さい」

と名残り惜し気に言ったが、その顔は淋し気であった。別に私と別れるのを淋しがっているわけではない。何か現在の仁科君の環境から淋しいものを感じとったのである。

汽車の中で私は眠るつもりだったが目を閉じると、いやでも昨夜の強烈なシーンの数々

が臉に浮かんでくる。ほんとうに楽しい一夜だった。ひと晩、延ばした甲斐があった。

昨夜のシーンを、ひとつひとつ想い浮かべているうちに、私はハツと思い当たることがあった。

あのふたつの部屋は――

私の部屋の方から隣の部屋が覗けることは分かったが、あれは向こうの部屋からも、私の部屋を覗けるようになっていたのではないか？

そう言えば私の部屋にも、あの額の直ぐそばに、スタンドをはめこんだような細長い矩形の穴があいていたようである。

それよりも何よりも、美香が「暑い」と言っただけになったり、イザ本番という時に蒲団をはねのけたのは、考えてみれば、ちょっと不自然だ。あれは仁科君に見せるためにやったことに相違ない――

と気づいたのである。

仁科君のMとしての特色は、かつて最愛の妻だった美子に教えられて「三者関係」をたのしむMになっていたのだった。

その後、仁科君からは何回か手紙をもらった。私もその都度、返事を書いていった。

あの楽しいプレーを、是非もう一度やって見たいと思ったが、私も仕事が忙しくなり、わざわざ、そのためだけで岐阜へ行く気もしなかったし、いずれそのうち、また仕事で名古屋へ行くことがあるだろうと、その機会を楽しみに待っていたのだが、行ける時は一年に五回も六回も行くチャンスがあるのに、行けない時は、なかなかチャンスがないものである。そうこうするうちに、一年半ほど経った。やっと大阪へ出張する機会があったので帰りに岐阜へ寄ってみた。

彼の家に電話をしてみると、例の不愛想なお母さんが出て、

「雅介は亡くなりました」

とポツリと答えた。

「エッ、それはそれは……いつのことですか」「三カ月ほど前です」と答えたが、なお続け「質問しようとした時、ガチャンと電話が切られてしまった。お母さんは誰より雅介君を愛していたのだろう。お母さんから見れば、私は、ろくでもない馬の骨か、仁科君の悪友と見てとられたらしい。考えて見れば、まさにその通りである。」

だが、私にとっては惜しい友達を一人、失ったものである。
(この項終り)

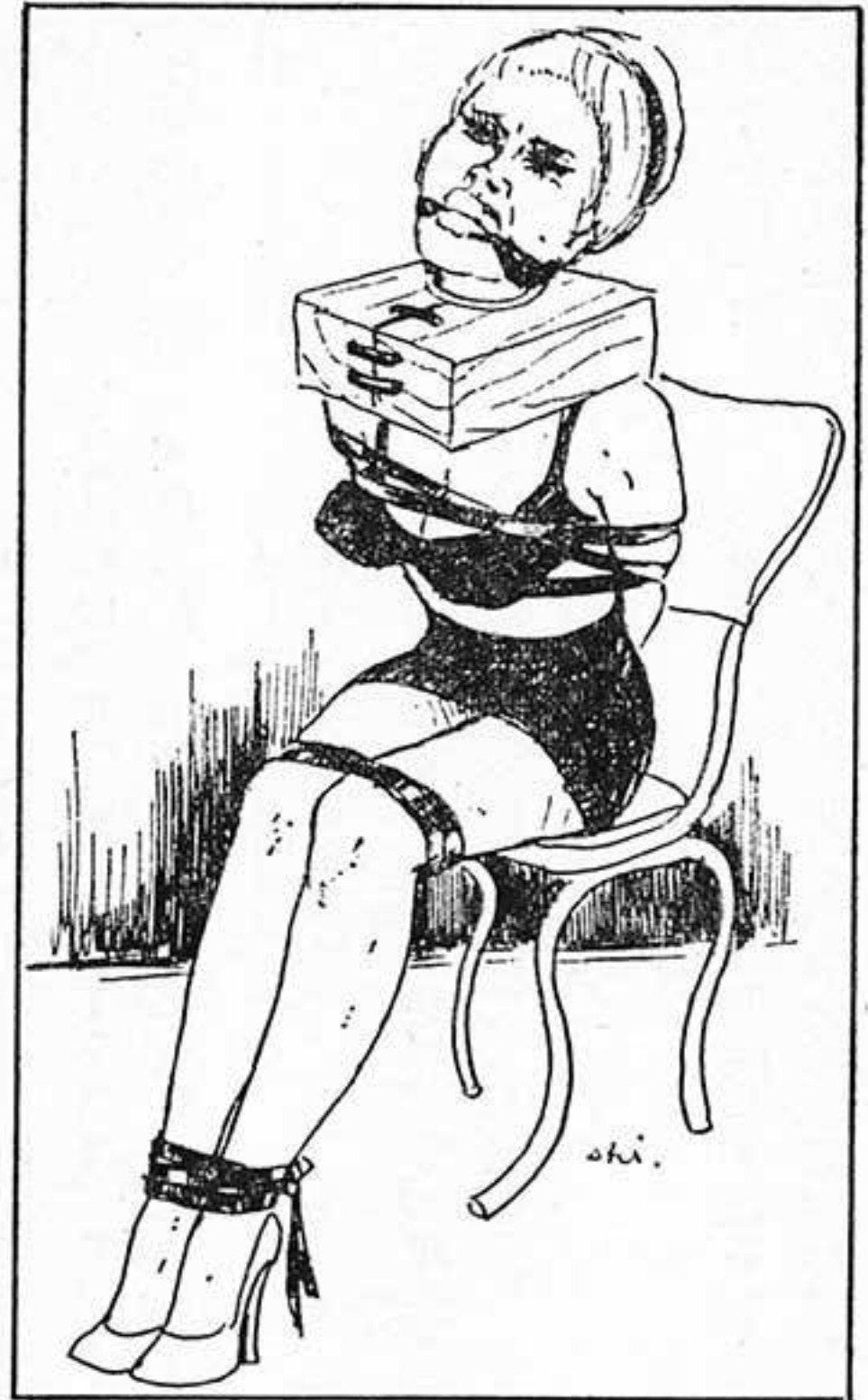
外国映画に現われた

猿ぐつわのシチュエーション

(環境設定)

鳴 山 能 平

イラスト・志羽利也



現在のドラマツウルギイ(作劇法)によると、その劇的シチュエーションは三十六あるという。そしてハリウッドの映画研究所のフレデリック・パアマはそれをそのまま映画の場合に適用している。実際にはどれほど参考になるのか疑わしいが、その項目の中に

1 哀願(嘆願) 2 救助(救済) 3
 復讐(復讐に追われる罪禍) 4 近親間の復讐 7 残酷な又は不幸な渦に巻きこまれる場合 10 誘拐 16 精神錯乱 17 運命的な手ぬかり(浅慮) 20 情熱のための自己犠牲 25 誤った嫉妬 26 監禁……などが、これらが映画の中に適当に按配されて、そこに劇的感情を盛り上げている

ことは確かである。

扱、猿ぐつわの登場するシチュエーションであるが、矢張り誘拐と監禁型が一番多いようである。日本の映画では婦女誘拐の場面は、一つの様式美として「責め場」などのようにほぼ似通った型があり、中には猿ぐつわを嵌められる瞬間を、アップで丹念に撮っているものもある。

ところが、外国物になると、女を縛ったり猿ぐつわをするのは面倒だとばかり、ピストルを突きつけて、車に押し込めば事足るとしているようだ。

殊に、縄を胸に回して後手に縛った上、鼻孔迄覆った猿ぐつわなど、皆無に近い。然し数ある中には、さすがに面白いものがあるので、その代表的な映画を挙げてみよう。

◎ 誘拐 監禁型

○ 続アニマル(米) 独立プロ

姉を犯された牧童が、犯人の首謀者である牧場主の妻を誘拐して廻りものにするサディスティックな描写を売りものにした天然色映画である。監督は、前作「アニマル」「世界猟奇地帯」などで猟奇派の才人として名を挙げたR・L・フロストで、主演は現生活でも

監督の夫人であるバージニア・ゴードンで、全裸になったの大熱演を見せている。

舞台は、テキサスのある牧場である。牧場主の妻スーザンが、朝の森に散歩に出た所を牧童のカルロが待ち伏せしている。

カルロは、何となく陰険な感じのする青年であり、昨夜も主人夫婦の寝室をのぞきみして、発見されリンチを受けたばかりである。

スーザンは昨夜の復讐とばかり思い込み、必死に抵抗するが、カルロは獲物をなぶるようにスーザンを縛り上げて、山の上の小屋に監禁してしまう。

そこでカルロは、スーザンの衣服を引き裂いて、全裸にして悪虐の限りをつくした。そして、一息入れた後、何故自分が、彼女を侮辱し、かくも虐待するのか、その事情を話すのだった。

だが、カルロが小屋の外へ出たすきに、スーザンはナイフを見付けて、後手に縛った荒縄を切って逃げようとするが、どっこい、カルロは戻って来て、こんどは両手首を前に縛り、天井から吊り下げて仕舞う。

スーザンの行方をさがし求めて、牧童達が小屋に近付いてくる。そして一人が中の様子をのぞいてみると、吊り下げられたスーザン

は、黒いネッカチーフで、口を割って猿ぐつわを嵌められている。

という趣好である。

この後、映画はカルロが、スーザンを鞭打って、猿ぐつわの下から、かん高い悲鳴がもれるのを聞かしたりするが、ストーリーとしては、日本の成人用独立プロの映画にも、よくある型である。

然し、ラストに、スーザンが自分を救い出してくれる牧場主の夫を、ナイフで刺し殺すあたり、矢張り、プロットにもヒネリが見られた異色作であろう。

結局、スーザンが許せなかったのは、彼女を虐待したカルロではなかった……という訳なのである。

それは、それとして誘拐に、復讐の要素がからんだ映画も相当あるが、復讐だけのシチュエーションで、猿ぐつわが登場するものもあるから、その代表的なものを二つばかり先に書いてみよう。

パジャマ姿で、両手を上に吊り上げられ、猿ぐつわを嵌められている女の上半身が、スチール写真になっている――。

○ 何が、ジェーンに起こったか(米)

という映画である。この内容は、復讐は復

讐でも、もっとも残忍である近親間の復讐であり、妹が姉にバンソウコウの猿ぐつわをはめるという代物である。

グロテスク映画の傑作? と云える。

なにしろ主役の二人が物凄い。往年の名女優ベティ・デヴィスの妹が、ジョン・クロフォードの半身不随の姉を、なにかにつけて虐待し、食器の中にねずみの死体を入れたり、足で蹴り上げて半殺しにしたりし、あげくの果は、ベッドの上に寝かしたまま、両手を吊り上げて縛り、口にバンソウコウを貼ったまま殺そうとする。

この姉妹は、少女時代は妹の方が人気ものだったが、成長してから、姉の方が映画スターとして人気をかちとる。妹は自分の栄光を奪った姉に対して、ここぞとばかり復讐しているのだ。そして廃墟と化したような館で、少女時代の自分そっくりの人形を抱きかかえては老いの足にステップを踏む、ナルシズムの世界が完全に現出する。醜悪なものもここまできると芸術となってくるものだ。

然し、婆に猿ぐつわというものは、あんまり乙なものじゃない。

○ ならず者(米)

かつて一世を風靡したグラマー女優ジェー

ン・ラッセルが、ハワード・ヒューズ監督のお目鏡にかなないデビューした映画である。

兄の仇と思い込んだ早射ちキッドを狙撃して、あべこべに犯された西部の娘が、キッドの水筒に砂をつめる。

それとは知らぬキッドが、シェリフや追手に追われて灼熱の砂漠に逃げていく……そして追手をまいたキッドは、再び娘の所に戻って来て、娘を充分犯した上、娘の両手を開いて吊るし上げ、縞のハンカチーフで歯と歯の間に猿ぐつわを咬まして、立去っていく。

ジリジリと、太陽が娘の縛られた体を焦がしていき、押し潰された呻き声が、サボテンの荒野に流れる……。目には目である。

どうも、愛憎がからむと毛唐達の復讐は痛烈である。

しかも娘を吊るすにしても、やっと足のつま先で立てるように皮紐で、サボテンの間に吊るすように仕組むし、娘の足元にはオアシスの泉が湧いている、という案配である。

ところで、映画のほうだが、追手のシェリフ(トーマス・ミッチェル扮)が、この附近にやって来て呻き声を聞きつけ、娘を一旦は自由にしてやるのだが、忽ち、一計を考え出して、娘をもとの恰好にして置く。

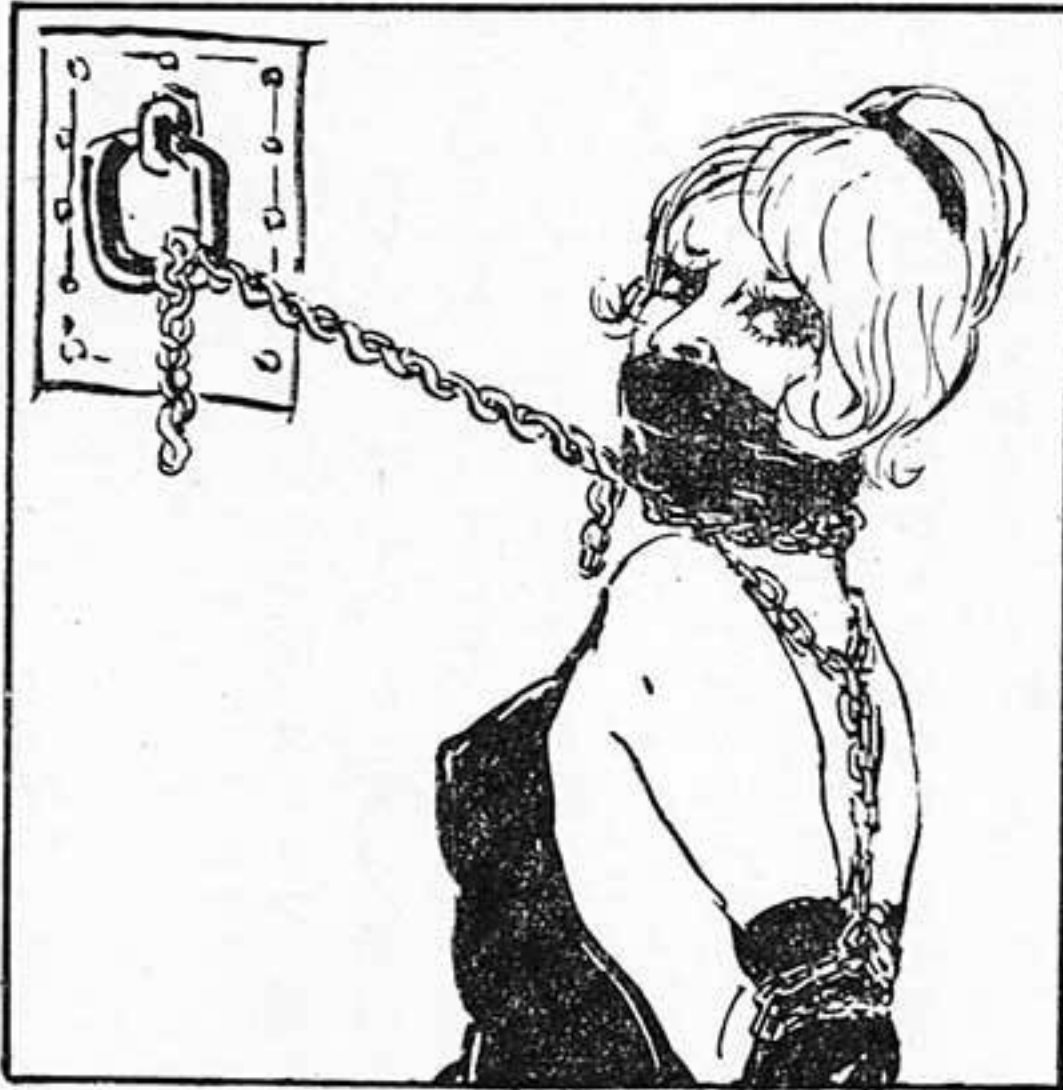
果たして、キッドは娘の所へ戻って来た。

そして、まず猿ぐつわをはずしてやる。そのハンカチーフは、娘の口の中に入っていた分が、はっきりと濡れているのが、よくわかった。

「おかしいな、もっと、キツく縛ったはずだが？」

と、キッドが又、娘に猿ぐつわを嵌めようとする時、隠れていた二人の男が銃を構えて出てくるのだが、この結果は、本稿に必要なないので、はぶくとしよう。

再び、誘拐型に入るとする。



○ タルファ駐屯兵(米)

タルファとは、オクラホマ州の北東に位置する都市タルサのことである。一八〇三年のルイジアナ購入で、オクラホマが米国に編入される前の出来事である。

ここには五大文明種族といわれるチェロキ族や、クリーク族が住んでいて、久しく白人をよせつけなかった。そしてチェロキ族の美姫テレサと、クリーク族の族長が結ばれる事によって、米国に対して反抗しようとする陰謀がある。

テレサ(ジーン・ピータース)は種族の為に、意に染まぬ婚礼衣裳に身を包んでいる所へ、米軍タルサ駐屯兵が現われる。

勿論、テレサを拐かしてこの縁談をぶちこわす計画で、首謀者はタルサ駐屯部隊切っ手の暴れ者の軍曹(パート・ランカスター)である。

扱、画面(天然色)は、赤茶けた砂じんを上げて駐屯兵の分隊が逃げてくる。そして姫は、軍曹の馬の鞍に乗せられているが、両手は前に手首を皮紐で縛られ、口には淡紅色の布で猿ぐつわを嵌められている。そのアップと、砂漠を馳ける分隊のロングが、交互に続いて……やがて、青い夕方に、分隊は前進基

地としていた、ある洞窟へ入っていく。

そこには、この誘拐作戦には参加出来なかったが、軍曹の友人である、チェロギー族の一人が傷ついて寝ている。

軍曹が、馬から降りて、友人の傍へよろうとした、その一寸した油断に、姫は、縛られた手首をあげて、猿ぐつわをずり下ろすと、

「裏切者！」

と絶叫して、馬の前脚で怪我人を踏み殺した。この後、怒り騒ぐ部下達を押しなだめてこのジャジャ馬を連れての逃避行中に二人の間に恋が芽生えるという趣向であるが、終り近く、追手に捕えられた軍曹を助ける為に姫が又婚礼衣裳を着る破目になる、という仲々凝ったストーリーが展開した映画であった。

○ シェラザード (仏) 天然色

古典の姫君に扮したら当代随一と云われるアンナ・カリナの主演である。

この映画は、千夜一夜物語と副題がついていた如く、バグダッドの都と、その砂漠に展開する大ロマンである。

バグダッドの後選びに、心ならずも合格したシェラザードは、ミス・ギリシャの嫉妬から、姦通の濡れ衣を着せられて処刑されようとする。だが、国の誇りを傷つけたシェラザ

ードは、首を斬る前に我等が罫り殺しにしようという乞食の集団に、後手に縛られたまま与えられる。

死より残酷な我身の運命に、遂にシェラザードは悲鳴を挙げるが、ターバンの白い布で猿轡をされて、魔窟街を担がれていくという設定である。

ただ、このシーンがロングのパン(移動)で撮っており、カリナのアップがなかったのが、いかにも残念である。

○ コレクター (米) 天然色

リアリズムの巨匠ウィリアム・ワイラー監督の異色作だがストーリーは簡単である。

蝶の蒐集より外に、これという取得のない内攻的な青年が、たまたまサッカの賭けに一億ぐらいの配当を受け、其れ以来、郊外に別荘を買い、好きな女の蒐集をはじめるというやつである。

すっかり準備をととのえた青年が、かねてから思い焦がれていた美少女を、夕方の街頭から、根気よく車でつけ狙い、恰好の場所ホルマリンを浸ませたガーゼを手にして襲いかかる。(この時のショッキングな音楽もさることながら、映画館の中で周りの女観客がハジかれたように身をのぞけらしたり顔を覆

ったり、思わずかすかな悲鳴を上げたが、いかに伏線が利いていたか判る)

さて、美少女を乗せた車が別荘に着くと、青年は獲物を地下室へ運び入れるのだが、この時美少女は両足を揃えて縛られ、両手も前手首で縛られ、口に大型のハンカチを押しこまれて、唇からはみだしたハンカチの上から黒い絹の布で更に縛ってあるという、念の入った猿ぐつわであった。

このスタイルはスチール写真にも、でかかとして出たが、今一枚のスチールには半裸の美少女が立って太いパイプに縛られており猿ぐつわは前と同じ様で、面白いことに大またを開いて、右足指でパイプの栓をひねろうとしている異様な姿が出ていた。

これは、この映画の最もショッキングなサスペンスの横溢した局面であった。

即ち、軟禁されたままの娘と青年の異常な生活がはじまり、青年は娘の歓心を買う為に娘が人目にふれる以外は、ありとあらゆる我儘を許しているのだが、或時、風呂へ入りたいと云う。ところが風呂に行くには一旦庭へ出て、別棟へ行く必要がある。そこで青年は娘の手を前に皮紐で縛り、猿ぐつわをする為に布を出す。

「声は立てないわ」

と娘は云う。

そこで諦めて布をしまい、娘を屋外へ連れ出して別棟の二階にある風呂へ案内する。

手の縛りを解いて、青年は風呂場の外で監視をしているのだが、その時、突然の来客があり、玄関のベルが鳴り出すのだ。(すごいサスペンス、流石、ワイラーである)

ギョツとした青年は風呂場へ駆け込んで、娘の使っているタオルをとり上げて、まず口に噛ませると、裸のまま湯の中から娘を抱き上げてパイプに縛りつけるのだが、よく撮ったものである。そして猿轡を二重にして、裸身を隠す為に毛布を当てがい、苦心惨怛して何喰わぬ顔で玄関で来客の応待をする。その間に娘は、大またを開いて水道の栓を足でひねる。風呂場を水びたしにして、下へ流れ落ちる水で、何か、他の人間の存在を知らせようとする必死の働きかけであった訳である。

だが、映画ではこの娘は死んでしまい、青年は新たな獲物を求めてまた街へ出ていくのだが、続コレクターをワイラー監督に撮って貰いたいものである。

○ 六年目の情事(米)

ゲリー・クーパーとハリウッドの貴婦人デ

ボラ・カー主演。

これは駅や目抜き通りの看板に、デボラ・カーが猿ぐつわを嵌められて、覆面をした男に、後ろから利腕をつかまれている絵が、でかどかとしていたので大いに期待して、ロード・ショウの封切りを楽しみにしていたのだが、そのシチュエーションはお粗末なので、いささかガッカリした。

クーパーの挙動に(或は、殺人強盗犯ではないか)と疑いを持った、妻のデボラ・カーは、郵便事故で六年目に配達された手紙からその潔白が判ったが、夫は、妻に自分が疑われた事に絶望を感じて、二人の仲は破局に近づいていく。

突然、犯人が二人の家に忍び入り、カーにバンソウコウの猿ぐつわを嵌め、浴室で窒息死させようとする。勿論、クーパーが気付いて救けられるのだが、警察へ知らせる為、電話の前まで走り寄りバンソウコウを一気に自分ではがした後、思わずその痛さに唇を押えるデボラ・カーの妖艶さには魅入られたものであった。

○ ボワニー分岐点(米) 天然色

エバ・ガードナーが部厚いタオルで猿ぐつわをされる。

ボワニーとは、インドの交通の要衝で東西への分岐点。そしてドラマは、インド駐屯部隊の英将校(スチュアート・グレンジャー)と、混血娘(ガードナー)の恋の分岐点を描いているが、この娘がガンジー暗殺を狙う首領と同じ貨車に乗り合わせたことから人質になる。ジープで追跡する将校。そして格闘。その最中に猿ぐつわの下から、

「ダーリン、ダーリン」

と、押し潰された声で呼ぶのが、年増女優にしては可憐であった。

○ 大強盗団(英)

スチュアート・グレンジャー主演の、プログラムピクチャー(常設館用の中級物)であり、ストーリーとしても取得のない代物であったが、ただこの映画のラスト近く、美人秘書がフラフラとさまよい込んだ修道院(実は尼僧達が強盗団であった)で、監禁される場面がある。ミニスカートのグラマーが、椅子に縛られて、やや厚手の一重の白布で猿ぐつわを嵌められている。……其処へ院長の甥で、頭の弱い男が、

「あたいの貰った、おもちゃだ」

とつぶやきながら入ってくる。

ハッと美人秘書が猿ぐつわの下で、息を飲



むアップがあり、背後に近寄る男の無気味さに、恐怖を浮かべてもだえるカットは抜群であった。

イギリス映画は、怪奇もの、サスペンスものに女の恐怖を出すことが堂に入っているようだ。

○ 殺しを呼ぶ卵（英）天然色

おかしな題名である。

大体、題名でストーリーの大半が判るようにプログラム・ピクチャーは出来ているものだが、この題は、何か人間の原罪にまで立ち入った深い恐怖を表現しているようでもあるが、くり返し読んでみると、最近の中でも最も陳腐な題名の一つである。

然し、主演のジーナ・ロロブリジーダが、

ソーセージ工場の大きな碎肉機の前で、やがて自分の肉がすり潰される運命を暗示するシーンなどには思わずぞっとする迫力がある。ジーナの夫が女房コンプレックスを抱いていて、コール・ガールを縛って、鞭打ち、赤い絵具を塗りつけるところや、その演技が終って、コール・ガールが自分で猿ぐつわをはずすところなどあったが何となく後味が悪い。

○ 武装市街（米）

ウィリアム・ホールデン主演の刑事もの。

金満家の一人娘が、身代金目当てのギャングに誘拐される。どうやって誘拐されたか、そのシーンはこの映画にはない。ただ結構楽しめるシーンが二カ所あった。その一つは、ギャングの隠れ家であるアパートの一室である。

娘（アリーン・ロバーツ）は室の中央の椅子に縛られている。傍で情婦が見張っているところへ、警察の捜査陣を手玉にとって、得々とギャングが戻ってくる。

「猿ぐつわは……」

まず、これだった。情婦は慌ててネッカチーフのような布で娘の背後から猿ぐつわを嵌めようとするが、娘が嫌がって顔を振るので一度は、鼻孔迄巾広く覆った布がすべり落ち

る。

「俺によこせ！」

舌打ちしたギャングが、女から布を取り上げると、クルクルと右こぶしに巻いて、娘のあごをなぐって失神させる――。

今一つは、いよいよ大詰め近く、警察の網の目をくぐって娘を乗せたギャングの車がすべるように地下鉄操車場の近くにくる。

だが、ここにもパトロールの警官がいた。

不審気に近よる警官が車中をのぞき込んで、客席の毛布で包まれたものを見る。

娘がつつまれてあるのだが、不敵な面構えで、ギャングは、

「どうぞ」

と云う。

云われるままに警官が、毛布をめくってみると、猿ぐつわの娘の顔がでる。

さてはこいつが、と腰の拳銃に手をやる時ギャングの消音銃が火を吹いて……と、いう一芝居の後、ギャングは娘の胸ぐらをつかんでさんざんに凄むと云うシーンがでてくる。

猿ぐつわの嵌め方も、相当リアルにキツく縛ってあり、布が少し頬をくびれさせているようであったが、残念なことにはこの娘は盲と云う設定になっているので、眼の動きが、ほ

とんどなく、そのワリに迫力がなかったようである。

前にも書いたが、洋画では鼻口を覆う猿ぐつわなどは絶対にはないと思っていいたのだが、ただ一つだけあった。

○ 海の征服者 (米) 天然色

題名の如く海洋ものであり、主演はタイロン・パワーとモーリン・オハラである。

パワーは、かつては海賊、今はイギリス女王に忠誠を誓う船長であり、オハラは、イギリスの宿敵スペイン領の一総督の娘であり、因果な事に二人は恋仲であるというメロドラマが展開する。そして場面は総督邸の庭。

咲き乱れる色とりどりの花の周りに、暮色が漂って、船長が娘と逢引をしている。

明日はこの総督邸をも、砲撃しなければならぬ立場にある男は、恋人をそっと連れ出そうとするが、事情を知った娘は、それを父総督に知らせようとする。切破つまって、男はいきなり、背中のマントを広げて娘を包み込んで力ずくで押し倒してしまふ。

そして、それから悲鳴を上げる娘の口を縛るのだが、まず娘の長いシヨールで一巻き鼻口を縛って、更にもう一巻き回して、こんどは口の上で結び目をつくって縛ると、マント



に包んだまま両手に抱き上げて連れ出していくという一編であった。

モーリン・オハラという女優は、イギリス映画でデビューしているが、そのデビュー映画が「ジャマイカ・イン」で、名優チャールス・ロートンにスカウトされたそうである。

○ ジャマイカ・イン (邦題「岩窟の野獣」(英))

この映画での誘拐場面は、丹念に撮っており、マニアを喜ばせてくれたものである。

ストーリーが進んで、殺された養父の身体に、跪ずいて悲しむ娘(モーリン・オハラ)に、うしろから白布で齒と齒の間を割って猿轡を嚙ませると後手に縛り上げて、無理矢理に馬車に乗せる男はチャールス・ロートン扮

する海賊の首領。

そしてこの首領が、自分と娘とのこれからの生活設計を楽しそうに話す時間、娘は縛られたまま耐えている。……このシーンが相当に長く、更に、馬車から降りて海岸通りを歩かされる恰好が、イカしていた。

娘を後手に縛ってあるのを人目から隠す為にマントを着せ、男は肩に手を回して連れ添って歩く。又、猿ぐつわを隠す為に、マントの頭巾をかぶせるという手のこんだ、また成程と思わせるようなスタイルにさせてあったのが印象的であった。

洋画の猿ぐつわは、この映画のように、齒と齒の間にするのが多いよういささか不満である。この嵌め型だと、だいたい唇が割れて大きくなり、美しさが割引かれるようである。

もともと猿ぐつわというものは、声を出させないという使命のほかに、女の自由の一部を奪っているという男の優越感、そして女にある程度の苦しみを与えているという加虐感などが男の官能をくすぐるものなので、そこには視覚的な美しさという事も当然要求される性質のものであると思う。

であるから被虐者は、美しい女でなくては

困るし、猿ぐつわの布に雑巾、棒切れなど使用するのは悪趣味ではなからうか？

例えば「荒野の襲撃」(米) 天然色の場合など、裏切者としてインディアンの仲間から焼き殺されそうになる娘の口に、木の枝の嵌口具が啜えさせられていたり、「いぬ」(仏) などたるんだ手巾を噛んだ女が鼻血を出している図など、興覚めであった。

これにくらべて「バグダッドの盗賊」(米) 天然色。この映画のジューン・デュナル扮するアラビアの舞姫は、透き通る様な紅の衣裳に、白い肌の二の腕が後手に縛られ、緑の布の猿轡がしっかりと唇を覆って、黒い髪の上からうなじに結ばれていて、月の光に照らされて盗賊の馬の背にゆられていた……。ホンの僅かなカットだが、堪能させられる絵柄であった。

この他に、

○ 荒野の抱擁 (伊) カルラ・デルボッジ
ヨが戦友の車で誘拐され、縞のハンカチで口を割った猿ぐつわ。

○ フェザー河の襲撃 (米) ヴェラ・マイルズが土人に誘拐され、土人娘になり切つて助けに來た騎兵隊にハンカチを口を割って噛まされる。

○ アパッチ (米) 天然色 ジン・ピータースが、たった一人で合衆国軍隊に反抗するアパッチの男の恋人に扮し、種族から結婚に反対され、探しに來た男の目から隠す為、テントの外に手足を縛られ、白布で猿ぐつわを嵌められて地面に転がされている。

○ アリゾナ (米) ジン・アーサーが、強盗団の為に寢室を襲われ、ベッドから立上る所を、後からシートで猿轡、手を吊るされてベッドに縛りつけられる。

この他、題名だけを列記すると

○ マッケンナの黄金 (米) 天然色

○ 洞窟の女王 (米) 天然色



○ 拳銃を売る男 (米)

○ Gメン (米)

○ 七連続危機 (米) 天然色

○ 非常のスパイ指令 (米) 天然色

○ 太陽への脱出 (米) 天然色

○ 地獄の近道 (米)

○ 地獄への暴走 (米) 天然色

○ 目撃者 (米) 天然色

○ 恋人の季節 (伊) 天然色

○ 殺人狂奏曲 (仏)

○ コロラドへの道 (米) 天然色

等々がある。

ところで、同じ型のくり返しでは、あきるので、こんどは、趣好の変わったのを紹介しよう。

○ クレオパトラ (米)

もっとも布広い猿ぐつわIIオールドファンにはなつかしい、クローデット・コレベールがクレオパトラに扮して、ファーストシーンからエジプトの戦車に、縛られて乗せられている。その時の猿ぐつわが、巾広く目かくしも兼ねたようなやつで、彼女の顔一ぱいを覆っていた。その時の設定としては、女王クレオパトラに反乱をくわだてた家臣たちが、宮殿より拉致したということになっていた。

○ 新モンテクリスト (米)

キッスの後で「デイル・ロバートソンとモ
ーリン・オサリヴァンの快活な演技が印象に
残る。

ロバートソンに復讐を誓うモンテクリスト
(岩窟王)であり、オサリヴァンは、彼を陥
し入れた貴族の娘である。

映画は終り近く、娘の寝室へモンテクリス
トが窓から忍び入ってくる。かつて二人が仇
同志と知らずに逢い引きした窓である。だが
この時はもう男の正体を知っていて、泥棒呼
ばわりをする。男は手に縄を下げている。

「何が欲しいの！」

と娘は叫ぶ。男は緊張の余り棒立ちになっ
ている娘の体へ、ゆっくり、ぐるぐると縄を
巻いていく。

「私の欲しいものは、左様」

と、いきなり娘の唇を奪う。

「う、うっ……」

と、腕くのをかまわず充分楽しんでから、
叫ぶ声も与えず、素早く唇の間に布で猿ぐつ
わを噛ませる。

そして、そのまま抱き上げてベッドの上に

寝かし、

「では、お寝み」

と窓から出ていく。

後には娘が、口惜しさの余り呻き声を上げ
てはね上っているという一幕であった。

○ 生きていた吸血鬼 (伊) 天然色

嵌め直し「イタリアの寒村にも吸血鬼がい
た。それも医者の娘である。

そこで医者は、娘の体内に流れる毒血を、
健康な若い娘の血と入れ替えようとする。

犠牲になる娘は手術台にバンドで縛りつけ
られ、白布で口をぴったり塞がれている。

普通この手の映画だと、被害者は失神して
いたり、麻酔を嗅がされていて、目を閉じて
いるのだが、この時の娘は、自分の腕に針が
指しこまれ血が体からしぼりとられていくの
を恐怖にみひらいた目で睨めているし、又、
途中猿ぐつわがはずれて医者が嵌め直すシー
ンもあり、その点凝った映画だった。

だが、嵌め直した時の感じでは、前よりゆ
るくなっていたのが不満だったが、嵌めかた
が一番きつく、それこそ頬に喰い込んでい
るという描写のあった映画があった。

○ 追はぎ (英)

緊縛「女優はワンダ・ヘンドリックス。

彼女は居酒屋の娘だが、駐屯部隊の兵隊た
ちのマスコットの存在で、舞台は十六世紀の

イギリス。

専制君主に苦しむ農民たちを助ける義賊が
題名の追はぎであるが、とある事から追はぎ
の正体を知り、娘は男を深く愛する様になる
くだりはメロドラマである。

然し、事情を知った兵隊達が逢引の場に娘
を縛り上げ、銃を構えて追はぎの来るのを息
をひそめて待つ、という設定になる。

やがて白馬に乗って近づいてくる男に、こ
の危険を知らせようとする娘は、粉摺小屋の
二階の柱にぐるぐると結かれ、口には嚴重な
猿ぐつわを嵌められている。

しきりに首を振って、猿ぐつわをはずそう
とするアップが続いて、ふと、わずかに動く
右手首の先で一挺の小銃を発見する。だが銃
口は自分の体に向かっていて……。馬の足音
は更に近づいてくる。もう一刻の猶予も出来
ない……。娘は決心をする。そして引金を引
くのだ。猿ぐつわの喰い込んだ頬が、苦痛に
ゆがんで——となる。

○ ビバ・マリア (仏) 天然色

拷問の巻「この映画には二人の大女優が
登場して、二人共縛られる。

一人は、単純で理性がなく、田舎娘のよう
にかざり気のないねんねのグラマーブリジッ

ド・バルドーで今一人はモードの本場花のパリで、シックな女優として最高の人気を持つジャンヌ・モローなのである。

この対照的な二人の女優の組み合わせに、ストーリーはジャンヌ・ダルクが発想になってゐる二人の女の何とも、奇妙な革命物語である。

であるから、この二人は宗教裁判にかけられる。二人共黒布で口を覆った猿ぐつわを嵌められているから、法廷で返事が出来ない。白状しないのなら拷問だと、次々に責め道具にかけられる。猿ぐつわの下で二人共、必死に呻いて暴れると、責め道具が次々にぶつこわれるというコミック版であった。

○ 恐怖の振子（米）天然色

拷問の二これはエドガー・アラン・ポーの短編の一つ「穴と振子」を中心に、有名な「早すぎた埋葬」を加えた恐怖・怪奇映画である。

主演は性格俳優ヴィンセント・ブライズとイギリス女優で、ハリウッドにこの作品でデビューしたバーバラ・スチールである。

十六世紀のスペインを舞台とするこの映画は、セット、室内装飾、衣裳など、すべてに背景にふさわしい荘重な美しさと、無気味さ

を持っており、特撮、特殊効果による恐怖。怪奇ムードは、アメリカ映画でも抜群であった。特に荒海につき出た崖に聳え立つメディナ家の陰うつな館の、地下拷問室の大道具、小道具には一際、不気味さが加わる。

鉄の断頭台、鉄釘を植えた拷問寝台、釘が内側一面に密生林立した鉄の拷問箱や檻などが処狭いばかりに置かれ、その間や壁面には拷問杖などの責め道具が並べられている。

第二の部屋は巨大な振子の拷問室で、この部屋の中心部の高い天井から、十余メートルの軸の先に刃渡り一メートル余の斧がついて、これが左右に揺れながら下って来て、やがて下の拷問台にくくりつけられた人間を真二ツにするというもの。その巨大な重い振子がキシミながら動くさまには、映画とは云いながら思わず慄然とさせられた。

この拷問室で、メディナ家の当主であったセバスチャンは、不義の名のもとに己の妻と実弟を惨殺した。これを目撃した子のニコラスは、それ以来人が変わったようになり、長じて英国から迎えた美貌の妻エリザベスが心臓発作で死んだ時も、本当に死なないうちに埋めてしまったとばかり思い込み、日夜罪の意識に怯えていた。——そんな時、唯一人の

姉の、エリザベスの死因を探るべく、遙々英国から弟のバーナード（ジョン・カー扮）が旅して来て、メディナ家に泊り込み、いろいろと探究していくのだが、映画はこの様なムードを背景に、クライマックスへと突入する。

すべては、エリザベスとメディナ家の持医レオンの密通から始まる陰謀であった。死んだものとして葬られたエリザベスを、レオンはひそかに救い出すと、地下室の片隅に隠れていて、時々エリザベスの亡霊を出してニコラスを発狂させその財産を横領して結婚する……それが二人の計画であった。そして遂に発狂したニコラスは、不義者を憎む父セバスチャンに変身した。

ニコラスはレオンを拷問室で撲殺し、エリザベスを羽交い絞めにして猿ぐつわを嵌めると、釘の林立した鉄の拷問箱へ押し込んでしまった。

そして自分はあやまって、深い穴に落ちてしまう。身動きも叫びもならず、エリザベスは唯死を待つばかり。そしてその彼女のアップが次第にしばらくられて映画はエンドとなるのだった。

この稿は以上で終るが、この次は、日本の現代物を取り上げてみたい。

創作

光
り
煌
く
鞭

— (その結末) —

宇
光

仙

第三景 無言劇

青年の企みがいかなるものであるか、わしはすぐに見抜いた。わしは全裸にせられ、肘掛け椅子に腰をおろさせられ、その両足は足元の直径三十センチはあろうかという鉄の球体につながる鎖によって固定され、両手は椅子の背の後ろでくくられたのである。わしをそのように拘束しておいて、寄ってたかって遊ぶ腹づもりらしい。

そんなたわいのない手で、わしとの賭けに勝てると思っているとしたら、こっけいなことである。たかが小童（こわっぱ）のなせる

ことにすぎない。小童めは小童めにふさわしく、照明によってその未熟な技を覆いかくしたいらしい。

部屋は一・二階を貫く、天井の高い一室である。この部屋には、わしの多くの思い出がこめられてある。

しかし今わしは、わしの過去におけるそのような思い出にドロを塗るかのよう、無意味な照明装置があたかも装飾電気器具屋のごとく、あちこちに取り付けられていることを見逃すことができない。そしてそれらの装置がかもし出す色彩は極彩色に近く、毒々しいことこの上ない。毒々しさは既に小童がその

技に行き詰まっている証である。

わしがこの部屋を使用していた時には、飾りっ気がなく、質素であったものだ。わしは純粹にプレイに徹したし、単純な責めによって快楽を獲得したものだ。またわしは若くもあった。現在の小童と同じくらいまでとはいかないまでも、すくなくとも、わしは五十の鞭打ちですっかり息切れなどを起こすような年寄りではなかった。

銭の光に魅せられる女共は幾らでもいた。女はわしから銭をせびり、わしは女から苦痛をせびった。

わしは生まれつき攻撃的な男であった。そ



カット・ユミヒコN

して負けを知らなかった。さらに快樂に貪欲な男でもあった。わしの日夜考えることは、いかにして新しい快樂を得るかの一つのみであった。

ところが少し落ち着いて考えるなら、その初めにわかったことなのであるが、わしが先程も申した通り、新しい快樂なんか無限にあるわけがない。

それこそ無限に開拓しようとするなら、人肉を食うとか殺人魔になるしか道はないわけである。だがそのことは、錢に踊る女たちに對してであっても、許されることではないのである。この世に生み出た命は絶対にむしばるではならんのだ。

色彩は淡紅色を主体としている。何もなく何も起こらない和やかな時が続いた。ところが突如一転した。

「キヤー！」

と長く尾を引く女の悲鳴が、天井からわしの上に降り落ちてきた。わしは度胆を抜かれかかった。しかし声は、わしのすぐ頭上で途絶えた。

小童めは事が始まるか否かの内に、あせり苛立っているようだ。そんなヒステリックな手でわしに勝てると思うなら、さらに愚かな

ことといわねばならぬ。

わしはかりそめにも紳士であり、物の道理に通じた男である。過去において快樂に溺れ快樂を見失った男なのである。そんなわしに對し、小手先芸の子供だましでは衰えを衰えでなくすることはおろか、衰えをより完全に完璧なものとしてしまうことだろう。

音楽が流れ出した。それはいわゆる十二音音楽という超現代音楽らしく、ことさらに不安と緊張と不快と恐怖に満ちた響きで、わしの氣を焦立たせずにおかなかった。どうしてもかくなる不調和音をつらねる理由があるのかわしには理解できないことである。

そういえば、今日はモダン芸術に名をかりて、奇抜さで世に名を売ろうとしている芸術家が巷にたむろしている。

髪型だけでは男か女かわからなくなり、衣服とて、男はことさらに女の、女は男に似せたものを着けて巷をうろうろしている。画一化された流行とかに便乗しようとした愚かな者の行き先きは、流行の流れに流される外に道はないのだ。

キャンバスがわりに、選りにも選って男女の裸体にペインティングする画家も現われる体制の鞭に打ちつけられることを承知の上で

立ち向かうマゾチックな税金泥棒たちが呻き声を張り上げる。『夜明けのコーヒー』云々という詞が受けると、電子計算機で製造したと思われる程、その手の詞が生み出され、齒ブラシのようなつけ睫毛の醜惡な女どもが口をパクパクしながら歌う。

およそテレビジョン程、人の心を荒廃させる凶器はないといってもさしつかえないであろう。映像は観客の拍手まで演出した番組を空々しくも拍手する観客の手だけをクローズ・アップして山奥まで送り届け、国中に、『今、流行している衣装はこれこれで、歌はこれこれ、そして話題の人は誰々』と押しつけ煽りたてているのだ。

そして「教育ママ」とか「女上位」とかの流行語を作り、『そうでないあなたは、少しおかしい』とでもいいたげに、ダメ押しをする……。

どういう仕掛けによってであるか、二人の若者がわしの眼前に浮かび出ていた。念のいったことに、二人は、今わしがあげた画一化された流行に便乗した画一化された若者である。髪は肩にまで達し、一人は鬚がぼうぼうである。二人のシャツとズボンも汗とほこりにまみれているようであった。わしと二人と

の距離は四メートルはあった。その距離はわしを救った。わしはその距離の縮まらないことを願い祈った。

幸いなことに二人は一度としてわしに視線を投げかけてこなかった。二人は互いが互いを含羞むかの様に見つめ合うのみであった。わしはこの現状がどのようなことを意味し、またわしとの関わりはどのようなことになるのか判断に迷った。

大方において、わしがある種の裁断をせまられるのは多くの手順を踏んだ後にである。ましてわしの眼前に繰り広げられているのは小童のいうわしが過去において『見落としてきた点』であるか否かは別として、きわめて目新しい特異なこととしてわしの目と心に映る。

奇異さはいよいよ確かになり、わしの脳裏をかすめるそれらへ浴びせるべき言葉が、何千・何万語の中から一語のみ選択され、咽を突き上がってきた。

わしは二人の若者を同じ年恰好にみたてていたが、実際には鬚の方が二、三年上であるようであった。もっともそれは、鬚が浅黒く筋肉質であるのに対して、他の方がきわめて色白で華奢な身体付きであることが、わしの

目を狂わせているせいかも知れず、確かではない。

しかし咽を突き上がってきた一語は確かであった。わしの眼前の事態は図に乗り、その目指すところに歩を早めていた。

鬚が華奢を抱き寄せていた。二人は接吻をかわし合っているのである。わしには醜惡として以外に目に映らなかった。わしの内にこのような光景に関心を寄せる芽があると、小童は踏んでいたのだろうか。だとしたら、大変なエゴイズムな小童である。

しかしまだ事は始まったばかりである。そのことから、早飲み込みで「小童、小童」と口から唾を飛ばすことはよすべきであるかも知れない。しかし眼前の光景が肩のこみほぐしであるか否かは別として、物事には戯れてよいことと悪いことがある。度を越してはいかないのである。

物事には、それぞれに息抜きが必要であるし、息抜きの範囲で寝そべるなり、談笑をするなり、歌うなり笑うなりしたらよい。だが度を越しては、息抜きは棘を持ち、思想を背負い、権力を振り廻し出す。わしは部屋の入口を見つめた。

全く陽気な笑い声と共に小童が現われ、

「やあ、御前。これは私の手違いです。お氣になさらないで下さい。御前、ただちに取りかたづけます」

という声が響くことを期待した。わしは長いこと待ち続けた。ところがそのようなことは、皮肉にも期待の域を越えることはなかった。そして眼前の光景は、今やその棘を晒し、思想をかかげ、権力を吹聴し始めていた。

華奢はシャツを脱がされ、さらにズボンを取り去られていた。鬚は女を愛撫する以上の優しさを込めて華奢を撫で回し、鬚の手がさらに流れ出した時、二人の身体の上に映像が映し出された。それはヴェトナム戦争ものらしかったが、あたかも三文映画以下の、いわゆる成人映画が、寢室シーンのくんずほぐれつをカモフラージュするための手にも似ていてわしを苦笑させずにはおかなかった。

小童は、わしとの賭けの約束などは全く忘れ、己れの自己満足だけのために、この幼稚な芝居をわしに見せつけているようにしか思えないのであった。

そういえばわしにも手ぬかりはあった。わしは小童との間に小童が勝った時に、この館を譲るという約束をかわしたが、わしが勝つ

た時については何ら話し合いがなされていなかったのである。

これは、小童の話術のせいかも知れなかった。小童は時々わしの心の揺らぎを見すましたかの様に高飛車に出てくる。その時の小童の言葉は実に濃密でかつ歯切れがよい。そのためわしはしばしば小童の術中に陥ってしまうのである。

ヴェトナム戦争は熾烈をきわめ出した。と同時にキャンバスはもつれ合いを繰り返して始めている。華奢は恋人の手ごめにされつつある娘にも似て、積極的に身体を投げ出すように鬚にあずける。不思議なことに、わしの目に映る不自然さが積れば積る程に、キャンバスはより親密さを増し出すのである。華奢は身体を落とし、四つん這いのような恰好になった。鬚はゆっくりとシャツのボタンをはずし始めた。

華奢は狼に捕われた仔羊のように震えを起こしてさえた。しかし鬚は一切の手加減とすることをしなかった。でも軽いステップをとりながら事を急がなかった。それは食べてしまうことを今少し後にしようとも思っていることによるらしかった。それでも軽いステップのみで鬚の息遣いは尋常を欠き、それ

につれて華奢の方も、序々に陶醉しつつあった。それは二人の様子から推し計って間違いはなかった。鬚の狼は少しのためらいの後に食べてしまうことを決断したようであった。鬚と華奢は互いが互いに対して哀願をかわし合った。

もっとも、わしに二人のかわし合う声が聞こえたわけではない。最初から二人の企みは押し黙って挙行されている。ヴェトナムの映画さえ、絵のみで声はぬきである。

したがって、わしは無言劇を見せつけられているといった方が、この場合、的を貫いているといえよう。

ここで注目すべきことは、無言劇であるということだが、この呪わしい光景の一つの救いということである。視覚の毒々しさを、言葉の毒でもって上塗りをしないことに、わしは胸をなでおろす。また言葉のないということが、わしが少しでも呪わしさを和らげるべく事を好意的に解釈することを妨げない。いわゆる、水をさすものが何一つとしてないのである。

鬚は調子づき、足を滑らして転びそうなまでに崩れかかることを数度繰り返した。

その時に照明は暗転した。そして全くの闇

が部屋に立ち込め、忌わしい光景をわしからかき消してくれたのであった。

わしは闇の中に目を光らせ、照明が明転する時にふたたび鬚と華奢が眼前に控えているかどうかということに関する情報を、一秒でも早くとらえようとした。わしは闇が嫌いである。

闇というヤツは人間の羽目をはずすことを道楽としているから油断がならない。羽目をはずした人間程に警戒すべき人間はいない。彼らは、とどまることを知らないのである。貪欲どころの話ではない。彼らは己れの生命の保全など頭においていないので、相手を殺害することなど、虫の息をとめることと大差がないようなのである。それらの理由から、わしは闇があけることを願った。ましてわしは拘束されているのだ。そのことはわしの神経を細らせ昂ぶらせる。

わしのそのような希望が小童に通じ叶えられたのであろうか。闇はとろけ流れ、夕焼けにも似た赤さが交り拡散し始めた。わしはその赤さの中に人影を認めた。

その人影が、先程の鬚と華奢でないことはそのシルエットから容易に読み取ることができた。そのことはわしの気分を落ち着け和ら

げることには役立った。わしはシルエットを注意深く観察し、一人が男で他の一人が女であることを見通した。さらに後に、わしはその男が小童であることを見通した。

小童は大変なる神妙さでもって事を起こしていた。それは単的に説明をするために調教日誌の言葉を借用するなら、『挨拶』ということになるかも知れない。『挨拶』とは実に意味深長な言葉といえよう。それは耳に不可思議な響きを残すだけではなく、見た目にも印象深い。小童は若さに物をいわせて、わしに対して誇っているかのようにもあった。

なるほどわしは衰えている。しかし萎えも見る目には美しいものだ。それは決して負け惜しみではない。わしは確かにふたたび活力を取り戻すことを願ってはいるが、それは単に過去への郷愁の感情によるに過ぎないのである。そのことはわしのみではなく世間一般によくあることである。

赤さの拡散は停止し、わしは定かでない明るさの中でシルエットを注目した。女は男に對して背を向けて正座をした後に、両手を前方に滑らすように投げ出し、それにつれて女は膝を立てた。その時に、女のシルエットは一層鮮かになった。

シルエットから窺われる姿体の形がわしの脳裏を激しく刺激し始めた。と同時に、小童のあの不敵な言葉が、耳の底で再びうごめくのである。

『慎ましいといえ、私は御前の奥方様を想い起こします。真に慎ましい奥方様でございます』

わしはそんなはずがないと思った。第一に妻は、わしが小童と家を出発する時に玄關で見送ったのである。小童は高飛車に出て、わしの頭の中を混乱させようとしているだけに違いない。

しかしうごめく声は、わしの落ち着きをゆり動かし始め、煽動し、混乱を狙って追い打ちをかけ出した。

『奥方様は今が三十歳。身も心も最も慎ましかでいらっしゃいます』

わしは頭に血を上らせている。それは嫉妬によるものである。わしは、久しく忘れていた他人を嫉妬するという感情を、しみじみと味わいかみしめた。

わしは欲しいと思ったものは、何であつても手にすることができた。わしは多くの妻を持った。わしは妻を金で買い、金でゴミ箱へ葬ってきた。わしは妻を自由に繰り自由に弄

び、自由に痛め傷つけてきた。わしは御前にふさわしく、いわゆる好色ぶりを発揮し、世間が驚き呆れて開いた口という口を、札というくついで封じつけてきた。それゆえに、わしには嫉妬という感情が宿らなかったのである。

「あの雌豚めが、よくも」

とわしは呟き、齒ぎしりをした。

シルエットは折れ重なるように一つになった。と、今まで停止していた赤さの拡散はのろろと再開されたのである。わしは目を覆いたい。ところがわしは後ろ手に縛り上げられていたのだ。わしに對し小童めは、

「是非とも、御覽遊ばされたい」とでもいいたげだ。

赤さは白さも加え、太陽の光にも似てまばゆく、わしの目を苦しめた。しかしそんなある時から、序々に暗転へとつらなり雪崩れ込んで行った。つまりところ温度の高い物体程白色になるという、物理の実験をわしに對して教授したのにも似ているのである。色彩の変化は白色を中心として対称性を持ち、また変化に要した時間も均等であつた。したがってわしはシルエットがシルエットでなくなり小童とわしの妻を長く認めさせられることに

もなった。

妻はわしを眼前において少しとして悪びれることもせず、小童に屈辱の『挨拶』をし終えたのであった。闇が張り出し、その中にシルエットとなって、小童と妻が沈み、消えた。

それは無言劇の終わった時でもあった。

第四景 光 体

小童はわしに対して心理的拷問を計算していらなかった。小童がわしに対してとった演出は全く無計画の思いつきによるものらしかった。

ところがわしは常に一つの演出、一つの照明の変化、一つの人物の仕草にもわし個人との関わり合いで判断し、とらえ様とするのである。わしはそれらのことが、どこかでわしと密接な関係を保っていると信じ込んでいるのである。それでわしは考え込む。しかし関係がないのであるからわかるわけがない。

そんな困惑はわしをうねうねとした精神的昂揚の袋小路へと追い込みつつあったのである。そうしておいて、いよいよ効果的な手はずを打ち出したのである。

闇がふたたび散り散りになり明るさに吸収

された時に、わしの眼前には二人の女どもが浮き出た。彼女らは着衣のままであったが、その容姿はグラビアのモデル嬢にも似て麗しかった。さらにわしは彼女らが外国人であることも理解した。彼女らの着衣は、黒と黒褐色に統一された地味な色調であって、わしはその装いから彼女らがハイ・スクールの生徒であることを想像した。

そのことを裏付けけるものとして、二人の装いはデザインが同一であった。頭には顎でバンドによってとめられた黒色の帽子を被り、黒色の毛糸のセーターの下から純白のブラウスが覗き、その襟には黒いネクタイが結ばれていた。スカートは膝上十センチ位の裾拡がりの形であった。足は素足で、膝下までの黒褐色のソックスをはき、靴は踵のごく低いものであった。

わしにこれまでにない陶醉を与えたのは、何はさておき二人の金髪と瞳の青さである。二人の内大柄な方は陰にこもった性格と受けとれた。彼女は髪を上で二つに割り、肩を覆っている。金髪はセーターの黒さに映えて見た目に鮮かであった。小柄な方はショート・カットであったが、その丸顔の顔型のせい彼女の性格は陽気と受けとれた。

わしは固唾を飲んだ。陽気に続いて陰気の方も口元に少しの微笑みを浮かべた。わしはその仕草がわしの固唾を飲んだことに対する嘲笑とは感じなかった。わしはそれが見知らぬ者同志が初めて顔を合わせた時に口ぐせのようにかわし合う、「今日は」という言葉に通じていると考えたのである。

わしは口元を崩した。すると彼女らはわしの微笑みに答えるかのように更に微笑んだ。そのことはわしに一つの馴染みを生み、わしを勇気づけた。わしは妻が小童と乳くり合うという考えも及ばない辱かしめの傷をいやすこともでき、と同時に嫉妬心の巨大な感激の流れは一転して、衰えという名の小川が回生という名の大河につらなり出したことを感ずることができた。

頭上に鎖のもつれ合う音を聞いた。その音は下降を始めた。実にまどろっこしい下降であった。鎖は二条であって、それはわしが腰にかけている位置から二メートル程前に、わしを中心として左右に一メートル程の間隔で、床から五十センチ位の高さに停止した。鎖の下端には鍵が解かれた手錠の輪がくくりつけられていた。

わしは二人の表情と仕草に注意を払った。

彼女らは、わしを感情のない目で見入っていた。わしを物として取り扱おうとしているらしかった。

わしは、眼前の女性二人によって、しかも天井から吊るされた鎖を強力なテコとして虐待を加えられることに間違いないことを感じとった。そのことは、わしを必ずしも快適な気分にはしなかった。わしにはマゾヒズムの芽はこれっぽっちもない。もしそのことを無視して事が運ばれるなら、わしにはもはや苦痛の感情以外のいかなる感情も生まれないはずである。

陽気は陰気を見た。陰気はそれに答えるかのように陽気を見た。そして互いに微笑み合った。わしは次の手品に唾を飲み込んだ。

陰気は、陽気のスカートの裾をつまみ、白色のステッキを引きずり出した。ステッキは直径が一センチ程で長さが十五センチ程の柄なものであったが。

陰気は右手にステッキを握り、左手でスカートの裾をつまみ上げた。陽気がそのスカートから静かに引き出した布切れは赤色のハンカチとなってわしの目に映り、わしを驚かした。

陽気はハンカチを陰気に渡した。二人はま

た元の慎ましやかな直立の姿勢に戻ったが、元と違っていた点は、陰気がその両手にハンカチとステッキを持っていることであった。

ディー・ゾンネゲイニング・ドウルヒ・ディー・ボルケン・アウフ
"Die Sonne ging durch die Wolken auf."

(太陽が雲間を貫きのぼりました)

と、陽気がわしを見つめたまま歌うように呟いた。すぐに陰気も同様に呟いた。

アム・モルゲン・イスト・ディー・ルフト・フリッツシュ
"Am Morgen ist die Luft frisch," (朝は

空気が新鮮です)

それから二人はどちらからともなく、首を回し見つめ合い、微笑み合った。

エス・イスト・アイネ・クローセルスト
"Es ist eine große Lust." (それは大きな

快樂です)

と陰気がいうと、陽気は、
デル・ゲザンク・デル・フェーゲル・イスト・フェルシユト・ウムト
"Der Gesang der Vögel ist verstummt."

(鳥の歌がやみました)

といった。

陰気はステッキとハンカチをひとまとめにし、口にかみはさんだ。そして陽気を置いたまま一人わしに近づいた。バレリーナのような、つつつつとした足取りであった。

グーテン・アーベント
"Guten Abend, Heer!" (今晚は)

と陰気はいった。わしは口をもぐもぐさせた後に、

グーテン・アーベント・フロイライン
"Guten Abend, Fräulein!" (今晚は)

と答えた。

陰気はわしの背後に回って、わしの手首をくくりつけていた鎖を解いてくれた。そしてわしの右手をとってわしに立ち上がることを求めるかのように上に引いた。わしはそのことに応じた。

陰気はわしと同じ位の背丈であった。わしが仁王立ちになると陽気はわしに近づき、背後に回って肘掛け椅子を部屋の隅に払いのけた。陽気はわしの足元にかがみ込み、わしの脛に帽子の底を突き当てながら鉄の球体に左右の壁からの鎖を結びつけた。その後陽気は壁のいくつかのボタンの一つを押した。すると鎖は球体を静かに引き、わしの足首はそれぞれに左右へ引かれた。三十センチの間隔であったわしの足首は一メートル程の間隔に矯正されたのであった。

陽気は満面に笑みを浮かべて、全く見窄らしい窮地に追い込まれたわしの頭の上から爪先までをぐるぐると見回した。

ディー・ゾンネ・シヤイント
"Die Sonne scheint." (太陽は輝いています)

と陽気は呟いてから目でわしの背後の陰気へ何やらの合図を送った。すると陰気はわし

の左側に進み出てきた。陰気は口に例のハンカチとステッキを咥えたままで、不明確な口調の無理押しで、

「*Die Liebe lockt.*」(愛が招きます)

といつてわしの左手首を押さえた。すると

陽気は、

「*Die Liebe erwacht.*」(愛は目覚めます)

といひながらわしの右手を押さえた。

二人は同時に同様な歩調と歩幅で前進を始め、わしの身体の重心は崩壊し、完全に二人の思い通りになってしまった。わしのバランスは二人によって支えられ出した。しかしそれは長く続くことなく、支えは天井から吊るされた鎖へと置き換えられたのである。

「*Ich sah.*」(私は見ました)

と陽気はわしの眼前でいった。

「*Wir sehen.*」(わたしたちは見ました)

と陰気は背後でいった。つまるところわしは「見られている」のである。

陽気がわしの頭の前に跪き、わしの頬を両手でかこった。陽気は目を閉じ、わしの唇に唇を押しつけてきた。わしはそのことを許しまた応じた。陽気はわしの口の中に舌を入れ込んできた。わしは全く不安定な体勢であったため、彼女のなすがまま、思うがままにな

らざるをえなかった。陽気の舌はわしの舌を弄び出した。しかしながらわしはそのことに耐える以外によい手立てがなかった。

わしはわしが理解できなくなった。なぜならわしの身体中に俗な言葉で表現をするなら「疼く」ともいふべき感情が漲り出したからである。疼きの高まりは、陽気から送り込まれた唾液を飲み込んだ時に火がとまり、その火煙はわしの衰えを埋葬したのであった。

埋葬の儀式は、陰気はわしの背後に回り、ステッキを用いて責め出した時に、クライマックスとなった。この感覚が、小童のいうわしの「見落とし」の感覚であることが確かとなった。

陰気はその部署についたにふさわしく、執念を燃やして責めることに努力し、全力を傾倒し始めた。

「*Liebling, Liebling.*」(愛しい人、愛しい人)

と陰気の、ハンカチを口にしたままであるうか、定かでない言葉が咬き続けられた。

わしの身体は不思議に熱気をはらみ、苦痛に膨脹し、神経はうつろに、もはやわしの理性の統轄するところではなくなった。そのことに磨きをかけるかのように陽気は責め、陰

気はそれまで口にしていたらしいハンカチまで動員し始めた。わしは目を閉じた。いや目を開けていることができなかった。

陰気の執念は度を強め、あたかも腸を抉られるかのような苦痛に、わしはもうろうとした頭を前後左右に振り回した。それにつれてわしの上体はシーソーのごとく揺れ動いた。ステッキによる苦しみを少しでも和らげようとする時、わしは上体をより前のめりにしてしまうのだ。

しかし、わしは、苦しみの中に輝かしい未来に向かって力強い一步を踏み出したことを悟っていた。わしは小童との賭けに負けようとしていた。それはわしにとって願ってもないことだ。気がつく、わしは賭けの相手である小童に声援していたのだ。

——小童よ。わしを打ち負かすのだ。

そうだ。わしはそのことによって、これまで冷たく閉ざされた古い世界の扉を開き新しい人生の歩みが出来そうに思えたのである。

——小童よ。わしはお前を見直した。

既にわしの衰えの埋葬は済み、真新しい墓標には焼香のにおいが満ちているのだ。衰えはわしと無縁となった。わしは自由である。手首が痛む。でもわしはそのことに耐えなく

てはならない。そして屈辱といふ不快さを快さに転じなくてはならない。この機に乗じて理性という厄介者の虫を、ひねりつぶそう。

——わしは御前などではない。わしはただの男だ。男という名の動物だ。獣だ！

突如、陽気が跪く床が沈み、彼女はわしから遠のいた。わしは我目でわし自身のみじめで素晴らしい獣の正体を確認した。

「御前、お美しい！」

という小童めの声が天井からこだました。

小童めは一部始終を窺っているらしい。しかし、敗北を知ったわしは、その無礼をとがめる気はさらさない。

——わしは美しい！

そう呟いてみると、にわかに気分が震えあがる。実にうまい言葉である。

「御前はお美しい」「御前はお美しい」

というこだまが続いて流れた。

その声は、内密話のようでもあったが、話している声の主はすべて異なり、また口調もすべて異なっていた。ある者は歌い、ある者は驚き、またある者は歓ぶのである。そのことはわしを満足させた。

そんな中に陰気の跪く床も沈んだ。わしは陰気に責められていたままの状態で放置され

たのであった。それはあたかも米国のアポロ衛星の打ち上げの、発射盤が自動点火され、単に機械の作動を待つ状態にも似ていた。

床を踏みつける靴音が背後で生じた。

靴音は部屋中に残響した。照明は暗転を開始した。靴音はわしの背後に近づいたが、わしはかすんだ人影より認めることができなかった。

皮の靴が床を踏みつける。

小童か、それとも妻か、それとも見も知らぬ者か。わしの身体の震えは奇妙な感情に移行した。闇がわしを包み込んだ。わしの眼前の床が直径五十センチ位のスポットによって照らし出された。

「御前、お美しい御前。スポットが照らし出した個所を見入るのです」

という小童の声がふたたび天井からこだました。

わしは答えなかった。わしは催眠術をかけられた者のように、焦点を失い出した目で、見つめるのではなく眺めるのみだ。

「ドサッ」という物音にわしは驚いた。それは背後に忍び寄った者のしわざによるものらしかった。眺めると、スポットの円の中に鞭が投げ入れられてあった。油で磨かれたよう

な赤色に塗られた鞭であった。それはわしがかつて愛用した鞭らしかった。

「御前、お美しい御前。まなこをお閉じになつてはいけません。御前の鞭がスポットに照らし出されているのです」

と小童のこだまがわしの耳に響き入る。わしは答えない。すると小童は、

「御前、お美しい御前。御前はその鞭に署名するのです。勝利の女神は私に微笑んだのです。私は御前との賭けに勝ったのです」

と例のどろどろした口調になり始めた。

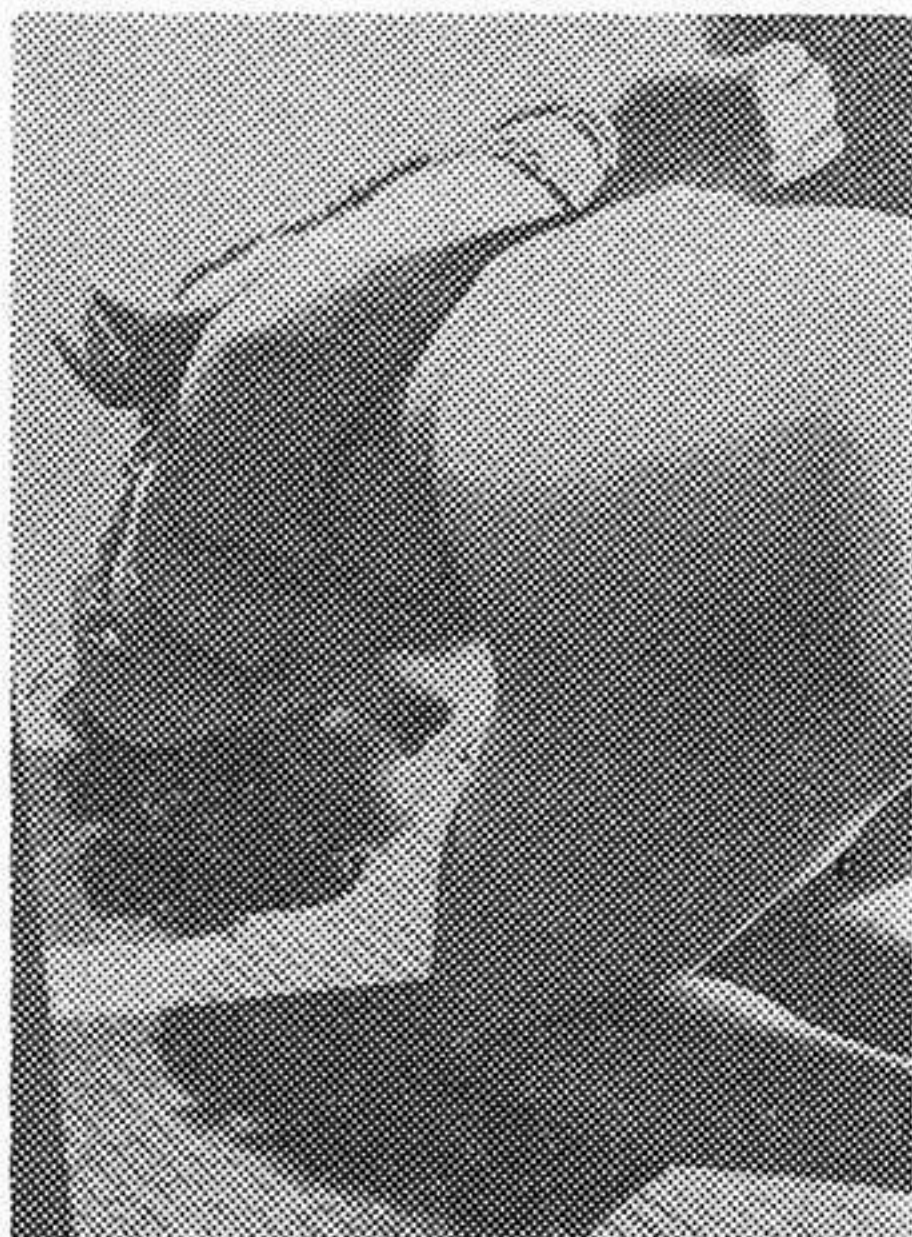
「私の愛しい者よ。引き金に力を込める時がきた」

と小童は歓喜に満ちた声を響かせ、すぐ後に、

「今だ！」と叫んだ……。

思わず閉じた瞼に赤い物が走った。わしは長らく忘れていた衝撃を受けた。

わしはその一分程後に目を開きスポットの浮き出た鞭が光り煌くのを改めて見た。赤いハンカチが横に落ちていた。小童のいう「愛しい者」はわしの妻である様な予感がした。光りは流れ、煌きはその流れに添った。鞭の赤さは一層なまでにあでやかとなった。



「カメラ・ハント」

.....に酔う

羞恥ポーズ

高野原美

誌上では、女性屈辱・羞恥文学？
 が花を咲かし、辻村氏のハントでも
 徹底的に若い女性の羞恥心を無視し
 たポーズが出現し、空想の世界を楽
 しませてくれる。

団鬼六氏の連載小説「花と蛇」は
 依然として好調で、静子夫人を中心
 に、美しい女性に次々と羞恥・屈辱
 責めを行ない、女性の肉体と生理的
 営みを白日のもとに曝して、美しい
 人間の花であり、最高の創造美とし
 て讃えられる女体を遠慮なくあばき
 立て、一個の動物、牝として追及の
 筆を進めている。私は、この「花と
 蛇」を、単に好色とか、羞恥の文学
 とは見えていない。逆に最高の人間追
 及の文学として高く評価している。

○

辻村氏の「カメラハント」は、団
 氏や山本一章氏に影響を受ける点が多
 かったようで、次第に羞恥責めが
 徹底してきた。

羞恥責めとしての種々のポーズが
 あるが、辻村氏の責めは、

1、椅子を利用した開股

これは多くの女性に行っており、女を椅子に坐らせ、その脚を椅子の上にのせ両脚立ちで開かせる方法。椅子の肘掛けに両脚を高くと掛けさせる方法が普通に取られている。

秋山夫人の場合に、秋山氏が行なった作業——両足を椅子の肘掛けにのせて、外れぬように足首を肘掛けにしっかりと縛り、椅子の背のうしろで両手を緊縛された秋山夫人の体は、宙に浮いているのである。両腿にかかった縄は、彼女の太腿を精一杯に拡大させて、しっかりと椅子に固定されていた——を見て氏は「このポーズが可能性の限界に一步近づくものであるとすれば、私の手段はまだまだ底の浅いものであることを知らされた」と独白している。

また、夫人は肘掛けの上で四つ這いの姿勢になり両手両足を椅子に縛られ、A感覚にうってつけのポーズを取らされる。

辻村氏は、次々と出される新鮮で、しかも女体責めに最もふさわしい恰好のポーズに驚かされる。

全裸の夫人を椅子に、半ば臥すように坐らせ、勢いよく片脚を高々と挙げて手首と足首を縛り合わせ、椅子のもたれに引張って、残る片手首をも、しっかりと椅子の背に固定し、

自由の片脚を、椅子の脚部にしっかりと結びつける。

この他、辻村氏は座位の海老責めとして、両足首を組み合わせて縛り、首にかけて高々と吊る方法も行なっている。

2、椅子を利用した海老責め

椅子に寝かせ、両足首に別々に縄を巻きつけてから体を二つ折れにさせ、足首を椅子の背に固定する。胴と太腿とを一つにして縄を巻く。

これは椅子では少ないが畳の上ではよく利用されている徹底した羞恥責めである。

谷山久美子の場合は、足は宙に上げられ不安定なまま、二つ折れの身体は太腿にかかった縄が肘掛けにかけられ、その縄で締めつけられ固定されている。

秋山夫人は、完全に自由を奪われた状態で椅子の上に転がっていると云う形容がピッタリするポーズで、足首と手首が固定され、猪吊りに似たポーズで横臥り、豊かな臀部が突き出している。

3、仰向け強烈開股

仰向けに寝た両脚を大きく開かせて足首を別々に縛り固定する。その時の状況によってマットレス、座敷机、柱等と変わっているが

左近麻里子の場合、脚を折って上に挙げ真横に開き足首と手首を縛っている。

4、開股仰臥海老責め

最近の辻村氏は、この責めが殊の他お気に入りで見えて、しばしば行なっている。

体を二つ折りにし、上げた足を固定する方法であるが、大島照代に行なった時は、身体にかけた縦縄が少し露骨さを救っていると書いている。続いて、肩と頭だけが畳につく位に腰を持ち上げて二つ折れにした時にも、卓上の紙を小さく折って最上部になっている双丘におくと記し、遠慮がみえる。

しかし、その後の責めを見ると、二つ折れになって豊かな臀部が浮き上り、羞恥のポーズに何の覆いも見られない。

この場合、誌上のフォートで見える限り谷山久美子のポーズは、極端に折り曲げられた脚の膝から先が畳について腰から上が垂直になっっているように思える。

5、強烈開股海老責め

笹原八千子の場合が最も強烈で、両脚を大きく拡げて足首を棒に縛り、頭を両脚の間に挟むように二つ折りにし、膝裏から胸に縄をかけ、その姿のままで棒をタンスにかけて吊っている。

6、開股磔

立った姿勢で開股させる方法。「花と蛇」では、よく出てくるポーズであるが、何でもないうで矢張り羞恥は強烈なものである。

7、その他

逆吊り、猪吊、逆海老などが行なわれているが、私としては、猪吊りが好きである。女の豊かな臀部を強調するには好適のもので、誌上のフォートの中でも左近麻里子の猪吊りは抜群であった。

8、浣腸責めと排泄

縛り責めをさせても、浣腸責めを受ける女性には少ないと見えて、辻村氏も余り行ないない。

大島照代、佐々木真弓、金原奈加子等僅かの女性にしか施していない。

浣腸はどうしても羞恥と屈辱的ポーズが強調される。その上に、緊縛と異なる点は、それによって起こる排便を耐える可憐な苦しみを引続く死ぬほどに羞かしい生理的現象を確認するサジスチックな喜びが、男性として魅力を感じるものである。

辻村氏は、増田みゆき夫人に夫君が水道水を大量に注入する様子をみてから、数人の浣腸を実施している。手元にあるハント記事で

は、先ず大島照代に強烈な浣腸をポンプ、エネマ、グリセリン、イルリガートルと、とことんまで施している。彼女は最初は羞かしさを感じていたが第二回から積極的に協力し、カメラについても排泄羞恥姿態を撮らせている。彼女は、浣腸、排泄を通じて、羞恥の中に悦楽を感じている。

金原奈加子は浣腸を嫌がっていたが、強行態度をとると、「どうしてもしなければならぬのなら、自分でやります」といい、自分で馴れぬ手付きで行ない、その後にエネマで注入される。

排泄については、便器に上った姿をとっただけで、カメラをあきらめる。しかし、氏はそっとドアを開いて覗き込んでいる。

これについて、奈加子の若さが、到底、このプレイの終焉に耐えられぬようであったと同情的であるが、自らの手で浣腸をさせた点は収獲であつたろう。

谷山久美子の大量冷水注入は、見事なものであつたろうと思う。妊婦裸身をカメラハントして来た氏が七カ月位に膨らむと記しているのだから、物凄い大量注入である。それは立上ると車軸を流す勢いで奔流したという形容から察せられる。

こうして得難い、モデルの浣腸を撮っておられるが、貴重な記録であり排泄場面のフオートは、是非拝見したいものである。

9、生理的現象

生理的現象の結果の排泄については、小原真澄が、悪びれた風もなくしゃがみ込み、氏は、激しい音を聞きながら、「私はつくづく芳野眉美の神経になりたい」と思っている。「イン・トーキョウ第一夜」で、幾代夫人の激しい音を耳にしながら、私の冷徹なカメラは、低いアングルから、それを捕えて光ると完全にカメラに撮ったことを記している。

この圧巻は、やはり川路叢子であろう。

第一回ハントから彼女は「急にオシッコをしたくなったわ。ねえ、ゆかせて」「うん、じゃ解いてやろう」と縄を解こうとすると、「いやーん、この尽連れてってえ」と羞恥のヴェールをかなぐり去り、痛められるマゾ女性として、牝としての赤裸々な姿をみせつけて自ら恍惚境に到達することを望んでいる。便器に跨った彼女は「いっちゃいやーん。私のこの浅ましい姿みていて」といっている。第二回になると、「あの時は随分、恥しかった。でも今ならいいわ。あたしのすべてをあなたにみせちゃったんですもの」といい

緊縛をうけるとトイレに躊躇なく背を向けてしゃがむ。

「それじゃ、みえやしない。向きを、変えてよ」

「ウフフ、やっぱり羞かしいなあ」と云いながらも方向を変えて沛然としぶきを上げる。

その後で彼女らしく、

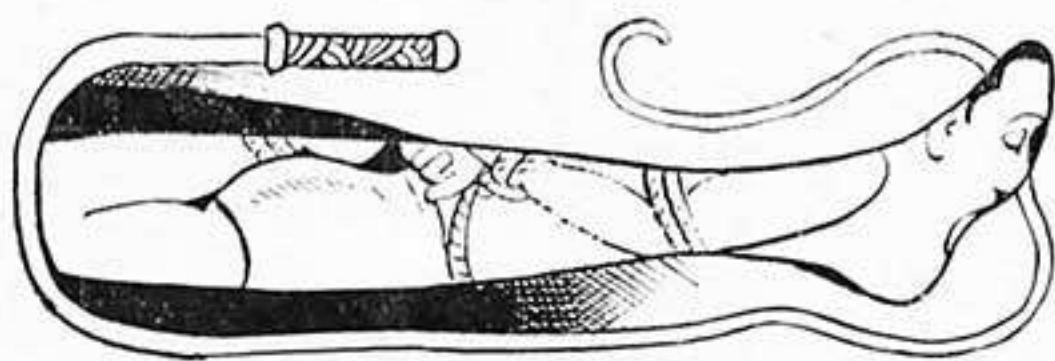
「このままでいいのよ。あなたのお口で……分かったでしょう」と大胆なポーズで破廉恥な振舞いをする。

氏は、その彼女の羞恥を脱した、徹底した牝のマゾ的な態度に感じいったのだろう、長々と奉仕してやっている。氏は、自らも陶然となり牝として振舞ったことであろう。

妊婦についても、九カ月の妊婦木戸悦子の失禁と、辻村氏の前に立ちはだかつて、きまり悪げに顔をそむけて、でっかい腹をつき出すようにして排泄する姿をみている。

○

私は今、氏の「カメラ・ハント」を横にして、その記事と妖精たちの姿に酔い痴れていく。辻村氏の今後益々の御活躍を願い、更に素晴らしいフオートにお目にかかれることを心から希求しながら……。



青春の陥穽 (11)

二組の夫婦

芳野眉美

カット・岡たかし

A

翌朝、勇の熱は下がったが、まだ微熱があるようであった。

葉子は、勇のひたいに手をあてて熱をみたのではなく、くるとお尻をまくり、勇のひたいに乗せてみて、

「まだ熱があるわ」

と勇を見下ろしていったのである。

起きぬけの葉子の丸いお尻は、アイスノンより、熱のある勇を気持良くさせたのに違いない。

高熱が続いたせい、勇の唇はからからでしきりに舌で唇を舐めていた。

「葉子のお薬をあげようか」

と葉子は、そんな勇を見下ろしたまま、

「唇をしめらせてあげるからね」

と優しく勇に声をかけ、器用にあたたかい雫をしたたらせたのである。

「葉子」

呻ったのは勇ではなく、起き出してきた葉子の夫の三田で、妻が勇の顔に小便を、ぽとぽとあてているのを見て、妻の神技に呆然としたからである。

呼ばれてもそのままの姿勢で葉子は、夫の顔を見上げて、

「まだ熱が下がっていないのよ」

表情もかえずにいった。

「今日一日、このまま寝かせておきましょう、あなた」

最後の、「あなた」が、妙に舌たらずの発音で悩ましく、三田は、

「そうするといいい」

とあべこべの言葉がでて、自分がいまいまいましくなった。

勇は細い目をあけて葉子を見上げ、唇を濡らしてくれる慈雨を、舌で舐め、のどをうるおしていた。

葉子の夫の三田が、棒立ちになって、この風変わりな光景を見ているのも気にせず、まるで赤ん坊が、母親からお乳を飲ませられているように、少しずつ吸っているのである。

葉子も、熱のある勇を気にしてか、いつものように勇の顔にべったりと坐るようなことはせず、精巧な注射器のように、勇の口に葉子独特の栄養剤を補給し続けていた。

こういうテクニクは、簡単にできるものではない。葉子がS的な過程を経てきたとはいえ、葉子の天性が、なせるわざだろう。

三田はその性向上、まことに得難い妻を手中にしたといえる。

「今日は休もうかなあ」

と三田が、つぶやくようにいった。

勇と妻を二人きりにしておくことに不安を感じたようであった。

「フン」

と葉子が鼻をならした。

「何をブツブツいっているんだい」

急に言葉が乱暴になった。

「病人の看護をしてあげないと」

「葉子がするわよ」

「それじゃ、よけいに熱がでてしまう」

「あんた、嫉んでいるのね」

おかしように葉子は夫の顔を振り返った。

「そ、そんなことはない」

「いいのよ、かくさなくたって」

葉子は勇の顔にぺたりと坐ってしまった。

「かくすものか」

三田は、もそもそと小声でいった。

「いいから、ぼやぼやしてないで、働きに行ったらどうなの」

声を荒げて葉子は夫にいった。

「うん」

と三田は、どうもさえない。

妻のお尻につぶされて、苦しうにもぞもぞと顔を動かしている勇が、どうしても氣になつて仕方がないらしい。

そのとき、

「くすぐったい」

と葉子が甘い声をあげた。

「馬鹿ねえ」

「うっ」

と、三田が唸った。

まるで勇のかわりに呻いているようであった。

「くすぐったい」

そわそわしている三田の様子面白いのか

葉子は、わざと悩ましい声をあげているようであった。

「だめったら」

「——」

「だめっていつてるでしょ」

「——」

勇の顔の上にべたっと坐り、葉子は長襦袢の胸をはだけて、もりあがった二つの乳房を両手でかきむしるようにしてみせる。

いつまでも出勤できずに、間が抜けたように棒立ちになっている夫を、葉子は気持良さそうにじらしているのだ。

「勇ったら、くすぐったくて」

くすぐす笑いながら、葉子は勇が熱をだしていることなど、すっかり忘れてしまっているかのような振舞いであった。

「葉子」

もぞもぞしていた三田が、あわれな声をだした。

「葉子」

目の前で、他人の男に、妻が露骨な見せつけをしているのである。勇に対する嫉妬と憤激が、三田の胸中をむかむかさせているのに違いない。

「葉子」

「うるさいわねえ。さっさと顔を洗って出て行ったらどう」

三田の顔も見ずに、葉子はいった。

葉子の声には、かなり怒気がふくまれている。三田は思わず二、三步、しりぞいた。

葉子の気嫌をそんじ、怒って去られることを、今の三田は一番おそれているのである。

「い、医者を呼んでくる」

と三田は、まぬけな声をだした。

「馬鹿」

おそろしいけんまくで葉子は三田をどなり返した。

「さっさと出て行け」

三田があわてて台所にかくれると、

「お待ち」

と葉子は叫んだ。

「洗面器を持っておいで」

三田は顔を洗おうとした洗面器をつかむとおそろおそろ葉子に差し出した。

「跪いて、洗面器を葉子にささげなさい」

勇の顔から立ち上り、葉子は三田の前に仁王立ちになった。

三田は、がくりと膝をおり、頭をたれて、うやうやしく洗面器を妻の葉子にささげた。

「そのまま、じっとしておいで」

シャーッという音が走った。

かなりの量が洗面器をはね、三田の頭にはねかえった。

洗面器を持つ三田の両手がふるえている。

「重いかい」

フフ、と葉子は三田を見下ろして笑った。

「さあ、それで顔をお洗い」

「――」

「最愛の妻のオシッコでは、顔を洗えないというの」

「そんなことはありません」

「それなら、早くおし」

洗面器を畳に置くと、三田は、おもむろに洗面器に両手を差し出した。

「ぐずッ」

と葉子は夫の頭をこづいた。

「いやならいいんだよ」

三田の顔が洗面器に近づけられた。くるりとうしろを向くと、葉子は、いきなり夫の三田の頭に腰掛けた。

びしゃッ、と洗面器の中に、三田の顔が沈んだ。

勢いよく、しずくが四方に飛び散った。

「ほれ、洗え」

ぶくぶくと、あわが浮かんだ。

「キレイになるよ」

葉子は三田の頭をぐいぐい洗面器におさえつけながら、痴呆のようによだれを流している勇に、にっこりと笑いかけた。

B

とうとう朝食ぬきで家を追い出された三田といれちがいに、隣家の大崎が、ぬっと入って来た。

ダークスーツの大崎は、中年の三田とくらべれば、やはり若々しくて魅力がある。

「あら」

三田を見送るところか、病人の勇の横に、べったりと添寝していた葉子は、不意の侵入者に別に驚きもせず、

「おでかけ」

と大崎に微笑んだ。

「出勤しようかと思ったのですが、やめました」

おごそかな顔で大崎はいった。

「どうかなさったの」

「どうかなさったかではありませんよ。御主人の車があるから、会社までチャーターしようかと思って来てみたら、とんでもないところを見てしまった」

大崎は一息にまくした。

「あらあら」

と葉子は、さほど驚いたふうでもなく口だけで驚いてみせた。

掛布団が、もぞもぞ動いて、大崎の目が落ち着かない。葉子は、わざと大崎を挑発しているようであった。

「覗いていたのね」

「覗くつもりはありませんが、雨戸も障子も開けっぱなしでは、外から丸見えですよ」

突っ立ったまま大崎はいった。

この場合、ネクタイはなんとなくそぐわな

い。

葉子は、わざと掛布団を半分だけ剥いだ。

寝巻の前がはだけて勇は裸同然であった。

葉子は何も着ていなかった。白い肌が、ぬめぬめと、粘着力を帯びた輝きを増しているように、大崎には思えたに違いない。

「穴の中に閉じ込めておいたら、熱を出してしまつて」

と葉子は大崎にいった。

「それはいけませんね」

「だから、葉子の妙薬を飲ませてあげていたの」

「葉子さんにお薬をもらったんじゃあ、熱があがるばかりですよ」

大崎の口調が、妙にねちねちとからむようになっている。

「フフ」

と葉子は、ふくみ笑いた。

「葉子の看護は、ちょっと違うのよ」

「病人は安静第一です」

「わかったわ」

からかうように葉子は、大崎を見上げた。

「早くそのネクタイをお取りなさいよ。葉子がほしいのでしょう」

「葉子さん」

大崎は病人の勇には目もくれず、掛布団をすっかりまくって、葉子を抱きあげた。

「くくく」

大崎の首に両手をまき、葉子は面白そうに笑って、大崎の腕の中で全身を反らせた。

「好きなようにしてもいいわ」

大崎が葉子の突起した乳首を狙ったのは当然のなりゆきといえるだろう。

「いたっ」

噛まれて葉子はよだれをたらした。勇のうつろな目が、立ったまま行なわれている大崎と葉子の痴態を追っている。

大崎に、こんな馬鹿力があるとは信じられないことであった。大崎は葉子を抱いたまま歩き始めた。

「どこに行くの」

うっとり葉子はきいた。

「ここではねえ」

と大崎は勇を見下ろしていった。

「病人がじゃまなのね」

「あまり刺激すると病気に悪いからね」

「大崎さんの家に連れていくつもり」

「まあね」

大崎はニヤリとした。

「このままで」

「踊りはヒフが衣装だといって、全裸で踊った有名な前衛舞踊家がいますよ」

と大崎は、いった。

「ハ〇嬢の物語」をバレー化した女流舞踊家で、〇嬢が完全に奴隷になるくだりでは一糸もまわぬ姿で、四本の太い鎖でつながれて舞台に立った」

「すばらしいわね」

「女流舞踊家の乳房に手をふれ、まさぐる客もいたと週刊誌の記事にある」

「もう、その通りじゃない」

大崎は照れもせずに笑った。

「馬鹿ねえ」

葉子の差し出した指を、大崎はしゃぶってみせた。

「ふむ」

「お味はどう」

「いける」

庭に出ようとして、

「おっと」

大崎はあわてて向きを変え、葉子をかくした。自転車を通り過ぎた人がいたのである。

「見せたっていいわよ」

「まさか」

葉子の家の庭には、別に扉はない。

庭が三田の車置場になっているから、使うこともないのである。大崎の家は、ぐるりと新しい塀で囲まれている。

庭に出て、

「まずいな」

と大崎は舌打ちした。

いくら廢墟に近い工場の長い塀と、畠と空地に囲まれた、人通りの少ない土地とはいえバイクも通れば、歩いている人もいるのである。大崎の家の門から入るには、どうしても人目に触れてしまいそうであった。

「いくじなし」

と愉快そうに葉子はいった。

わざと、大崎の唇に接吻する。

バイクが音をたてて通過した。幸い気がつかないようであった。

「それ」

と葉子が大崎をけしかけた。人影を背後に感じとったからであった。

呆然として棒立ちになった老人に、葉子はウインクをしてみせた。このあたりを、よく犬を連れて散歩している老人であった。

玄関をあけるなり、

「絵里子、布団を敷いてくれ」

と大崎は妻に叫んだ。

「どうなさったの」

台所から出て来た大崎夫人は、夫が隣家の三田夫人を、それもすっ裸の三田夫人を抱いているのに目を見張った。

「あら、まあ」

「奥様、御主人に強奪されてきたわ」

「布団だ、布団だ」

と大崎は、新妻をせきたてた。

「はい、ただいま」

大崎夫人は、夫と隣家の三田夫人のために夫に命じられるままに、布団を敷いた。

マットレスに、更に敷布団を二枚重ね、かなり厚くしてから、大崎はどさっと葉子を布団に、ほうり投げた。

「隣の奥様が裸なのに、絵里子が服を着ていたんじゃ、失礼だぞ」

大崎は、さっさと裸になっていた。

「でも……」

絵里子はおもいおもいして、台所のほうにあとずさりした。

「わたくし台所にいますからお二人で……」

「ぼくが葉子さんと浮気をするのを、公認するのかい」

と大崎は笑いながらいった。

「公認だなんて……」

「三人で遊ぶつもりで、奥様を裸のままお連れしたんだ」

「そうよ、絵里子さん。三人で遊びましょうよ」

わざと大崎にからみついてみせながら、葉子は絵里子にいった。もじもじと枕もとに立っている絵里子のうろたえるのが面白くてたまらないような葉子であった。

「御主人をいただくわね、絵里子さん」

「えッ……ええ」

「御主人は、とってもすばらしいわ」

葉子は眉をしかめて悶えてみせた。ただ面白半分にからかっているばかりではなさそうであった。

勇と三田の二人を相手にして遊んだせいかわれれば、すぐにでも発火してしまいそうであったかも知れない。

「ううう」

と、だらしなく葉子は声をたてた。絵里子が唇を噛んでいるのも知らないで葉子は大崎にしがみついた。

絵里子の足はすくんでいるようであった。

庭に車の音がして、三田がもどってきたときぐらい、寝ていた勇はびっくりしたことはないだろう。

まったく、勇は三田の車の音には驚かされる。はじめて葉子に責められて、庭の穴の中に首だけだしてうめられ、人間植物だと、葉子の肥料を頭から浴びせられたときも、三田の車の音に顔色が変わったものである。とっさに、勇は寝たふりをした。

「葉子」

と三田は呼んだ。

返事はない。

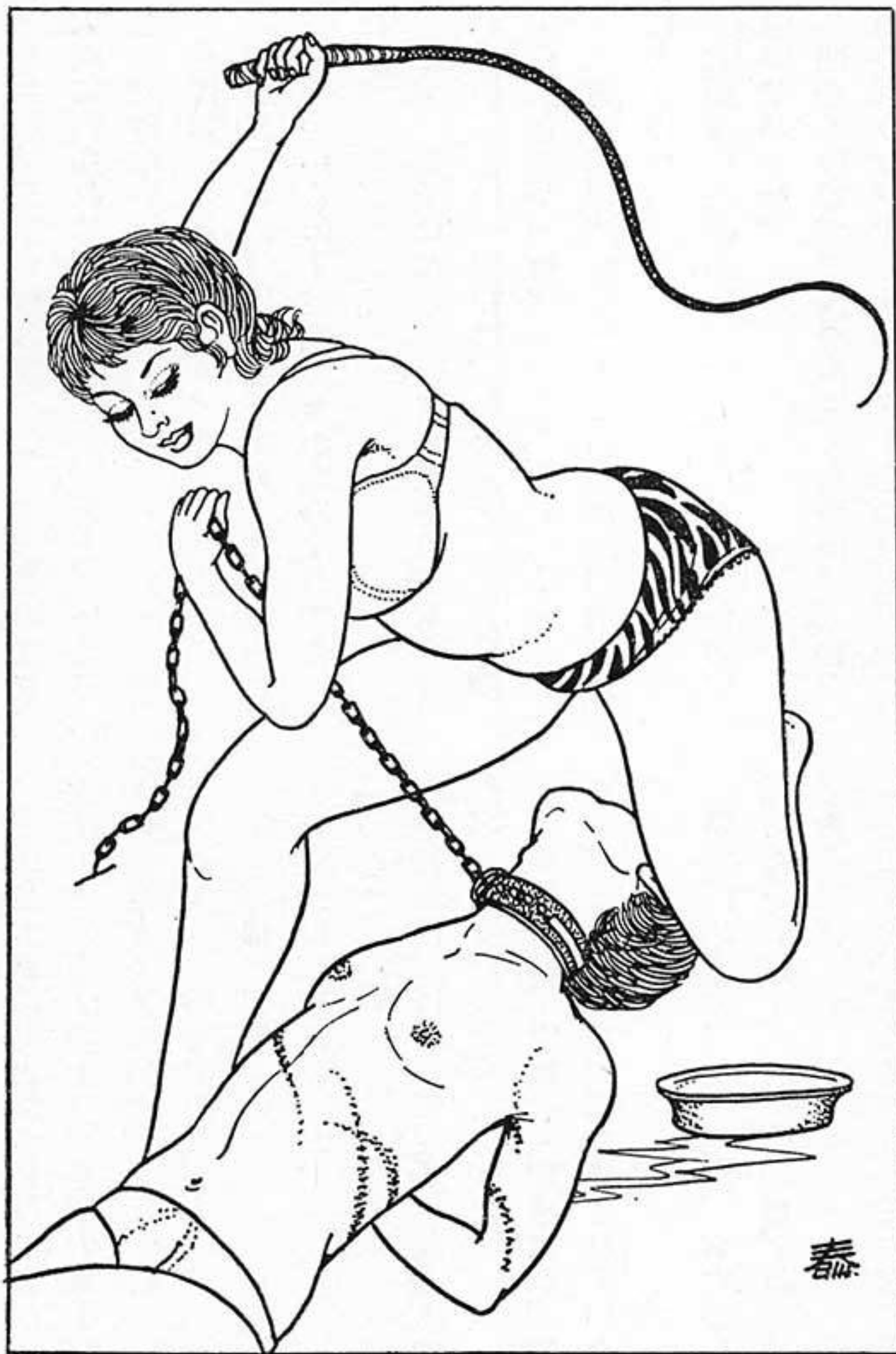
当然である。

「留守かな」

ひとりごとをいい、三田は脱いであった葉子の長襦袢をひろった。

勇の枕もとに寄り、

「勇君、起きてくれ」



読者ギャラリー 『ある一刻』 春川ナミオ

と、ゆすった。
いくらなんでも、これでは狸寝入りはできない。

「あっ、三田さん」

と演技した。

「起こしてすまないが、葉子はどこへ行ったか知らないかね」

「さあ」

と勇はウソをつこうとしたが、つけなかった。妙に三田が気の毒になったから不思議であった。勇だって、三田の妻を寝取っている男なのである。

「客でもあって、出掛けたのかね」

三田の嗅覚は、敏感に、第三の男の匂いを嗅いだのかもしれない。

勇は大崎に、あまりいい感じを持っていない。いってしまえ、と思った。

「隣の……」

と小声でいった。

「大崎が来たのか」

三田の声に、かなり怒気がこもっていた。「とろとろしていたので、よくわからないんですけど」

と、あわてて勇は答えた。

「よし、行ってみよう」

まさか、三田の妻の葉子が、すっ裸のまま大崎に抱かれて、隣に行ったなどと、いえるものではない。

勇は頭から布団をかぶった。

熱があるのに、目茶苦茶に葉子に責められて、せっかくの下熱剤がきかないようであった。

だが、葉子になら、いじめ殺されてもかわない、という気持は、いぜんとして勇の胸から去らなかつた。

大崎の家の門をたたく三田の声が、勇の耳にとどいた。

大崎は門を閉めて、家の中にこもったのに違いなかつた。

門をあけて、三田を出迎えたのは、天狗の面のようなレザーサポーターをつけた大崎であつた。

「お待ちしてました、三田さん」

と大崎は先手を打って三田にいった。

「奥様もお待ちかねですよ」

「そ、そうですか」

と三田は、氣勢をそがれて口ごもつた。

大崎がしているレザーサポーターを見て、M気がむくむくと頭をもたげたのかもしれない。M気がむくむくと頭をもたげたのかもしれない。

三田が大崎のあとから部屋にあがったとき大崎夫妻の布団の上で、全裸の葉子が大崎夫人を抱きすくめていた。

大崎夫人の唇を奪いながら、

「あら、帰って来たの」

と葉子は三田にいった。

「うむ」

と三田は、はじめて見る大崎夫人の裸体に返事も、うわのそらであつた。

大崎夫人は、手錠と足枷をされ、無抵抗のまま、葉子のなすがままにされていたのである。

隣家同志で顔なじみだが、おたがいの裸は知らないわけで、特に三田は、はじめてなのである。

「三田さん、ぼんやり立っていないで、服を脱いで下さい」

と大崎がいった。

「三田さんだけ裸でないと、なんとなくおかしいですよ」

「お脱ぎ、早く」

と葉子が舌打ちした。

葉子は、それこそ何もつけていないが、大崎夫人は美しい貞操帯のようなものをはめられている。

「拡張器よ、これが」

絵里子の、まだふくらみきれぬ小さな乳房をいたぶりながら、葉子は三田に説明した。

三田が裸になると、

「大崎さん、レザーサポーターを三田にはめてやってよ」

と葉子がいった。

「カギをかけて」

大きな錠前が、レザーサポーターにかけられた。

「フフ、それでお前はもう、どうあがいたって葉子や奥様を抱くなんてことはできないんだよ」

面白そうに葉子はいった。

恰好がつかず、うろろろしているうちに三田は、顔に全頭式皮マスクをすっぽりかぶされ、小さな穴から、目だけをきよろきよろさせていた。

大崎の家は、かなりSMプレイの道具がそろえてあるのである。

三田の足にはめられた足枷は、よくアメリカのマンガにでてくる、刑務所につながれた囚人の足枷と同じで、砲弾投げの丸い鉄の玉に鎖がついたものであつた。

三田の首に犬の首輪がはめられた。

レザーサポーターの三田と、手錠に拡張器をはめられている大崎夫人の見ている前で、大崎は三田夫人と抱き合せて、二匹の奴隷をなぐさみものにした。

まったく葉子の身体はしなやかで、アクロバットでも出来そうだと、大崎は思った。

大崎は三田夫人からはなれると、手錠と足枷でうずくまっている妻の髪をつかみ、顔を上向かせる。大崎は葉子の前で妻に奉仕させるぐらい平気であった。

顔をゆがめ、悲しそうに、いやいやをする新妻の頬をなぐり、

「夫の命令がきけないのか」と、否応なく思いどおりにさせてしまうのである。

「さて、実験を試みようか」

さんざん、妻に奉仕させると、満足したように大崎は葉子にいった。

「そうね、ああしておけば、三田は動けないし。面白いわよ、きつと」

二人の間に、何かたくらみがあるようであった。

「立て」

大崎は絵里子を立たせると、両手をあげさせて、手錠で天井から吊るしてしまった。

足枷をとり、

「足をひらけ」

大きく両足をひろげさせると、手頃に切った竹竿の両端を、両足首に縛って固定してしまった。

「寝るんだ」

大崎は、全頭式皮マスクの三田をこづき、首輪の鎖を引っ張って、絵里子のひろげた両足の下に、三田を長々と寝かせたのである。

葉子が近づいて、全頭式皮マスクにつけられた、口のチャックをはずして、三田の口を自由にさせた。

自由にさせたのは、ほんの一瞬で、三田は金属性の開口器を口にはめられて、目を白黒させたのである。

絵里子の両足首を固定した竹竿に、首輪の鎖が巻きついて、三田の顔は、絵里子の下に固定されてしまった。

足枷の砲弾投げの丸い鉄の玉のような重みにたえかねて、三田はぐったりと転がっていた。

「奥様の拡張器をはずしてちょうだい」と葉子が大崎にいった。

大崎は、妻の腰から、金属性の器具をはずした。

「さあ、奥様、この前のように、浣腸をしましょうね」

と葉子が絵里子にささやいた。

「いやです」

と絵里子が叫んだ。

「おっと、猿ぐつわをしておこう」

ロープを持ち出すと、大崎は、無惨にも絵里子の顔を、目茶苦茶に縛ってしまった。歯の間にロープがはさまり、鼻はひしゃげ耳はつぶれ、さんざんな大崎夫人の顔であった。

「これなら、うるさくない」

この間、葉子の前で実験済みの、三〇〇〇シンダーを持ち出すと、大崎はグリセリンを入れて、ぴゅつ、とはじいた。

絵里子の呻き声が、ロープに妨害されて、あえなく消えていた。

もう一本。続いて、もう一本。

敏感な絵里子の全身が、すぐ反応をしめしだした。ふるえている。

「絵里子さん」

と葉子は、いった。

「安心して、してもいいのよ。絵里子さんの下で、人間便器が口を開けて待っているわ」

懸賞入選

セミ体験小説

甘美なる月経帯

工 月 洋 一



カット・あらい・かず

私の躰は周りから柔らかく締め付けられていた。私は女子高校生達の若々しい香りに包まれ、電車が強く揺れるたびに、私の手は、前にいる女子高校生の若鮎のような手に触れた。弾力的で柔らかくすべすべした感触が私を夢の世界へ誘ってくれるような気がした。

この制服の下では、二つの魅力の丘が、ブラジャーで、きっちりと固定されていることだろう。女子高校生だから、たぶん純白のブラジャーだろう。血色のよい唇から、白い歯が、ちらりと窥え、その唇は、わずかに開い

たり、閉じたりしていた。その動きを見ているうちに、私はいつしか夢の想像の世界に引き込まれていった。

○

「私に、接吻してちょうだい」

と、みずみずしい唇が囁いた。

「うん」

と、頷くとともに、その女子高校生を抱き締めた。柔らかいけれども、ぴんと跳ね返りそうな弾力をもった温もりが制服を通して感じられた。女子高校生は、胸もとを開いた。

薄いピンクのすべすべした胸もとが私に誘いかけるかのように、息づいていた。私は純白のブラジャーを捲り下げた。その双丘は、下から押され、いっそうのふくらみと張りをもって、迫り上ってきた。私は、その双丘の甘ずっぱい香りと、すべすべした感触にうっとりとしていた。

○

『ガタン』という音で私は我に返った。女子高校生の躰が、私の躰に軽く触れていた。でも、この女子高校生は、私がいま夢想したこ

とは知る由もないだろう。夢想したため、親密な関係をもっているような気がした。

彼女のふっくらとした餅のような白い手は黒い艶光りのする皮靴をスカートの前で握っていた。このスカートの下のパンティは、どんなものだろう。と思ううちに、私は再び夢想にとりつかれていった。

○
女子高校生は、スカートを捲って、

「おじさん、どう？」

と、にこやかに言った。私の頭はスカートの包まれた。目の真近で、純白のパンティが息づいていた。スカートで覆われているので私は彼女をしっかりと独占しているような気がした。私は顔を動かした。そのたびに、ナイロンの肌触りが、私の顔のあちこちを楽しませてくれる。

○

軀を押されて私は再び我に返った。前の女子高校生が電車から降りようとしていた。

「さようなら、またね」

と、つい私は言いかけたが、実際に言葉になったのは、呟くような声であり、しかも、「さよ」までだったので、安堵した。私の目は下車する彼女の姿を恋人を見るように追いかけた。

○

外の景色を見ると、私の下車すべき駅は、あと二つ先だった。私は、いつもはもっと遅く出勤するのだが、今日は昨日やり残した仕事を始業までにやり終えておこうとして、いつもより三十分早く発車する電車に乗ったのだ。すると、丁度、私立女子高校生の登校時とぶかったのだった。私は、すばらしい発見をしたと思った。こんな甘美な世界が手軽に味わえるとは。あすからは、いつも三十分早く発車する電車に、乗ろうと心を決めた。

翌日、私は電車駅まで歩きながら、今日はどんな女子高校生を相手として夢想できるかと、心を踊らせていた。

私の学生時代——正確に言えば、高校二年生の時、私は、ふとしたことから、自らを慰めることを知った。そのうちに、自然と好ましく思う女性を想像するようになった。

同クラスの女子生徒に、二名魅力的なのがあったが、それは何度も想像の相手となったものだった。また、映画俳優も、その相手となってくれた。京マチ子は、屢々選ばれた。そのうちに、読んだり聞いたりしたことをもとにして空想を逞しくする方法も発見した。そ

んなことで、私には、そうした空想能力が目ざましく発達したのだった。大学卒業とともに就職してから五年目に結婚した後は、その空想力を使うことを忘れていたが、約十年ぶりで、その空想力が甦ったのだった。

狙った電車に乗ると、思った通り、女子高校生でいっぱいだった。魅力的な女性に出合えるようにと願ったが、そう都合良くいかず色の浅黒い顔の大きい女学生が前にいた。体を回して、周りの女学生を見ても魅力的な者はいなかった。

電車が止まり、人並みが動くたびに少しずつ場所を移動し、魅力的な女性と相對したのは、四つばかり駅を過ぎたときだった。ぽっちゃりした健康そのものの女子高校生と向き合った。上唇が少し上に捲れていた。腕も少し大きい方だった。なんの関係もなく、この女性は月経中かな、と思った。もしそうならどんな月経帯をしているだろう。またもや夢想が始まりだした。

○

その女子高校生は、私の前で、いそいそと上着を脱ぎ、スカートを取り、スリッパ姿になった。ピンクのブラジャーとピンクの月経帯がスリッパから透けて見えた。

「おじさん、スリッパを脱がせて」

甘えるように、女子高校生は言った。私はそのむっちりした肩からスリッパを外した。私の手は、そのすべすべした肌に歓喜していた。

スリッパを脱がし終えると、女子高校生は抱きついてきた。ブラジャーを通して、若々しい乳房が悩ましかった。私の首に腕を巻きつけた女子高校生は、

「おじさん、私の月経帯の始末をしてちょうだい」

私は、そのピンクの腰ゴムに手をかけた。それと共に、あの独特の臭いが私をウットリとさせてくれるのだった。

○

そこで私は我に返った。目の前の、ぽっちゃりした女子高校生は私の顔を見つめていた。瞼の長い黒い目が、いたずらっぽく笑いかけた。私は何か変なことを言ったのかと気遣ったが、そうでもないらしい。

毎日のように私は、魅力的な女子高校生との夢に耽って後、会社に到着するようになった。特に夢が快調な時は、仕事も涉るような気がした。

私の夢の内容は、女子高校生の太腿で長

靴下を吊るすガーター・ベルト、むっちりした下腹と腰を締め付けるコルセットに発展していった。しかし、それでも、もの足りなくなり、その女子高校生の下腹をゴムパンティでびったりと覆ったり、手錠で両手を拘束したり、貞操帯でその弾力的な肉体を締め付けたりすることも夢想するようになってきた。

私の欲望は、更に脹らんでいった。夢想を一層、生々しいものにするため、私はコレクションを持参して電車に乗ることを思い着いた。

私は以前より雑誌の広告で知って注文したり、友人の歯科技工師に頼んで作らせたりして、いろいろなものをたくさん集めていた。特に金属細工の造詣が深い歯科技工師に作らせた貞操帯は傑作の一つだった。

良いアイデアだったので、うれしくて、その夜はよく眠れないほどだった。翌朝、駅まで歩く道中、ぎっしりといろんな物が詰った黒いボストンバッグは重かったが、電車での夢想を思うと、苦にならなかった。

いつものような経過を経て、やっと魅力的な女子高校生の前に立った。小麦色の肌で、うりざね形の顔に眉が濃かった。手首の銀色の時計バンドが、その傍の肌を、ぷっちり

と盛り上がらせていた。この手首に手錠を嵌めるのだと思うと、もう私はわくわくしてきた。夢想を効果的にするため、ボストンバッグのチャックを半分開けて、バッグの中で手錠を握った。チャックの間から、手錠の黒い鉄の膚がちらりと窺えた。

しかし、私の周りの女学生がたとえチャックの間を見たとしても、暗いので、何が入っているか判る筈はないと思った。その頃から私の夢想は開始した。

○

女子高校生は、いそいそと裸になり、自ら手を後ろに回した。私は、そのぷっちりとした手首を握り、「カチッ」「カチッ」と両手に手錠を掛けた。それから女子高校生は、かもしかのように、すらりとした足を自ら挙げた。魅力的な太腿がまぶしかった。

○

その時、夢想が現実に働きかけた。私の右手は、黒バックの中を探って、貞操帯の穴や鍵の箇所を探り当てた。半分開けたチャックの間から、貞操帯の一部が見えた。そこから夢想は、また発展していった。

○

私は、貞操帯を彼女の腰に締め付けた。

「痛いわ」

と、彼女は私に流し目をした。鋼鉄の貞操帯の傍の肌が盛り上がった。「パチッ」という音と共に彼女は鋼鉄で締め付けられた。さらに、彼女の顔を仰むけにしてから、先端にゴムの玉の付いた直径二ミリぐらいの太さの鉄管を口から喉の中に差し込んだ。彼女の目は一瞬つりあがり「ぐえっ」という蛙を潰した時のような音がした。

その鉄管の根本は黒光りのする鋼鉄の嵌口具となっていた。その鉄板は、かわいい両唇を覆い、両頬を巻いて頸の後ろで「カチッ」と固定した。

○

そこで、私は現実に戻った。黒バッグから貞操帯の一部分がハミ出していた。私は急いでそれを中に押し込み、チャックを締め、前腰のあたりに黒バッグを持ち直し、前の女子高校生を見た。彼女も、また、私を見詰めていた。何か不審げな目つきだった。夢想では、あるが、この女子高校生の可愛い唇を、今さっきまで、鋼鉄の嵌口具で固定してやったかと思うと、その不審げな目の色さえ、いとおしく感じられた。

人間の欲望は際限なく成長するもののように

だ。四日後には、重い黒バッグを用意した上に更に、もっと夢想的に効果的にするものはないかと考え始めていた。女子高校生達を下の方から見上げてみたら、更に黒バッグ内の器具と結びついて、すばらしい夢を生むような気がした。

そうするため私は、思いついてわざと財布を床に落とした。

「すみません。財布が落ちたので」

と言いながら、女子高校生の足が乱立している中へ顔を突っ込んだ。若い女性の足の多数の柱は、第四次元の世界の景色のような奇異なものに感じられた。

財布を拾うと顔を上に向けた。それぞれの柱は、どれも暗いスカートの中へ何かを求め、るかにように伸びていた。顔を上げるとき、スカートの裾が私の顔を払った。そのまま顔をスカートの中に潜り込ませたい衝動を感じたが実際はそうは出来ずに私は立ち上った。

その時、周りの女子高校生の目が私に注がれているように感じられ私は俯向いてしまった。その注がれる目のうちに、私を強烈な体験に引き込む因子があらうとは、その時は思ひもしなかつた。その日は、回りから注視されたような気がしたせいか、残念ながら夢想は

できなかつた。

その二日後だった。夢にまどろんでいた私の、バッグを持たない右手に餅のような指がからみついて、我に返った。その指の主の顔、形をよく見ようとしたが、その女子高校生は、またたく間に、車外に出てしまった。右手に小さな紙切れを握らされたらしい。

私はすぐその紙片を見た。手帳を破り取った紙に女学生らしい、小さい柔らかい感じの字で、次のように書いてあった。

びっくりさせてごめんなさい。
SMプレイをしませんか。

五月三日、午後一時、笹川駅右の電話ボックスで会いましょう。必ず一万円を用意して来てください。私達は三人です。三人共、体は、わりと美しいらしいです。

私は文面を何度も読み返した。三日という日曜だ。行くべきかどうか迷った。行けば何か大変な事が起こり、会社をやめさせられそうに思えた。

やっと、一流会社の係長になったところなのに、やめされては大変だ。といって、こんな機会を、とり逃がすのも残念だ。一人で土曜の夕方まで迷っていたが、私は何かに憑か

れたように、妻の目をぬすみ例の黒バッグの中を再点検した。そして、その中に、貞操帯手錠、食道枷付嵌口具、首枷、鼻枷、ゴムパンティ、木綿の紐を入れて施錠しておいた。また、封筒に一万円札を入れ、妻の玲子にはあすは昼から技術研究所へ調べものに行くからと告げた。以前、妻が、黒バッグの中は何かと聞いた時、大切な機械の部品だといっておいたので、そのカバンについては妻は何も言わなかった。

私は、きっかり十時に指定場所に着いたがそれらしい女性はいなかった。十分位待った時、濃い黒めがねを掛けたミニスカートの若い三人の女性が近づいて来て、その中の一人が、私の耳元で囁いた。

「おじさん、用意していらっしゃった？」

黒眼鏡ゆえ、顔立ちは、よくわからないが三人共、肉感的な女性に思えた。

「用意した」

と私は封筒を出し、そこから、一万円札を三分の一ほど出して見せた。

すると、初めに声をかけた赤いミニスカートの女性が、

「これを読んでちょうだい」

と、また紙切れを差し出した。

これも、やはり手帳を破った紙に、小さい女性らしい、やさしい字で次のように書いてあった。

私達の家や名前を知られたくないし、また私達の身の安全のために、家に行くまでは、目隠しをし、話しができなくし、手の自由をうばいます。あなたの秘密も守ります。おたがい、危険なことはいないようにしましょう。

と、書いてあった。

「賛成ですか」

その、いかにも子供っぽい尋ね方で、まだ迷っていた私の心も決まった。この調子なら大変なことにはなるまい。

「よし、賛成した」

「では、少し待ってね」

という、その女性のうちの一人が向こうへ走り去った。

「やはり、重そうな黒カバンをお持ちなのですね。それを持って、私達のところへ来られるのですか」

「そうだ」

「何が入っているのかしら」

「行ってから見せてやるよ。それまでの、お

楽しみだ」

初めに話しかけてきた赤いミニの女性が、「それでは約束通りにさせて頂きますよ。いいこと？」

「うん。でもカバンを忘れずに持って行ってくれよ」

「いいわ」

という、私にしゃがませ、腕組みをさせた。太いテグスを二本出して、それぞれの片端で両親指の根元を括りつけ、そのテグスを背中に廻したかと思うと、右親指は左の方へ左親指は右の方へ強く引っぱられた。両親指を両側に引っぱられて、私は自分の胸を強く抱き締めるような形となった。背中でテグスの他の端を結んだらしく、腕は動かなくなつた。

私は不安になってきた。と同時に、何かぞくぞくとするようなスリルを感じた。黒眼鏡をかけられた。目の前が全然、見えなくなつた。眼鏡の内側に、黒画用紙でも貼り付けているのだろう。

さらに、眼鏡の縁が耳にかかるところを絆創膏で止めたようだ。

「口を開けて」

と言われ、口を開けると、口の中に鉄棒の

様な物が差し込まれた。それから「パチッ」と、音がすると同時に、上顎と下顎を思いきり突き開かされた。

「うあッ」

という声が思わず迸った。上顎と下顎を押す棒が邪魔をして、もう、僅かも口を閉めることはできなかった。差し込まれた鉄棒から上下に、また棒が突き出たのだろう。その上を大きなガーゼのマスクで覆われたようだ。

今までは、黒眼鏡の下の方は少しは見えていたのだが、この大きなマスクが邪魔をして下も見えなくなってしまった。横縁の広い眼鏡だろう、横も見えなかった。

そのまま奈落へ落とし込まれるような気がした。私は、この誘いに乗ったことを後悔した。でも、もう手遅れだった。特に口は堪まらなかった。上顎と下顎が、いやに痛んだ。これでは、まるで猛獣扱いだ。以前テレビで見た鰐に口を開かせ棒をたてに噛ます映像が頭に浮かんだ。人間も、こうなると俎の上の鯉のようなものだ。

「お乗りなさい」

私は車に乗せられた。車は右へ曲ったり、左へ曲ったりした。私は初めのうちは、曲がるようすで、およそどのあたりを走っている

か想像していたが、少したつと見当もつかなくなり、諦めてしまった。

私の両側に女性が坐っているらしい。行先も、運転手には予め言っていたのだろう。女性達は何も、しゃべらない。三十分も乗ったと思うころ、

「お降りなしてください」

と、私は手を引かれて車から降ろされ、少し歩いて家らしいものの中に入れられた。「おじさん、どうも御苦労さん。苦しかったでしょう」

黒眼鏡を外してくれた。私は、まわりを見廻した。

簡素なシャンデリヤが、かなり高い天井から下っており、下には赤い絨氈のうえにテーブルと、それを囲むようにベラクルの椅子が四つあった。片隅に洗面所があり、壁には風景画が掛けてあったが、窓と思われるところは、えんじ色のカーテンで覆われていた。

女性達は、私をベラクルの椅子に腰掛けさせ、心配していた黒バッグも、その横に置いてくれた。

「おじさんは、何かとても恐れていらしゃるようだわ」

「私達ね、万博に行く費用が足りないので、

アルバイトを思いついたのよ。おじさんは、いつも電車で変なことをしているので、きっとSMだと思ったのよ」

「財布を拾うとか言っただけがむのなんか、かなり大胆だったわ」

電車の女子高校生達に、私の心中はかなり前から見すかれていたようだ。恥かしさで顔が火照ってくるのを感じた。女性達は黒眼鏡をしているので、顔つきは、はっきりしないが、その話しぶりからは、悪い人間でもなさそうだ。

「でもね。おじさん、私達は、みなまだ処女だから、おじさんに犯されたりすると困るのよ。だから今からも、ある程度、自由は束縛しておくわ」

黒眼鏡で目の辺りを隠しているせいか、自然と女性達の赤い唇の動きにばかり私の注意が向いた。

「A子さん。私達、おじさんに何をしてあげるの？」

という言葉が、下ぶくれの小柄な女子高生、少し上向いた濡れたような唇から流れ出した。……いままでの経過と彼女達の言動から、この女性達もきつと女子高校生だと私は確信した。

「まず、おじさんの希望を聞いてあげるのがいいわよ」

と続けて、下ぶくれの女子高校生の、かわいらしい唇が動いた。しばらく、こそこそ三人で話していたが、赤いミニのA子といわれた女子高校生が、

「おじさんの希望することを、ここに書いてください」

と、またもや、紙切れをテーブルの上に置いた。だが、今度は西洋紙半分の大きさだった。そして、私の首に細いすべすべした紐が巻き付けられた。その紐尻を他の一人が持った。車に乗る前に結び付けられた親指のテグスをA子が外してくれた。腕が自由になり、ほっとした。

「おじさんが危ないことをすると、この縄を締めるわよ」

と首縄を引っぱられた。思わず、手を当てると、いっそう締めつけられた。その首縄は太いテグスらしい。

「手を触れると、こうしていくらでも締めつけるわよ。絶対、首縄に手を触れないこと」

下ぶくれの女子高校生が、
「B子さん、そんなにしては非道すぎるわ」
首縄の紐尻を持っていたBさんといわれ

た女子高校生は、

「でもねC子さん。もし、この男が暴れだしたらどうするの、油断大敵よ」

自分達の名前を隠すために、A子、B子、C子という呼び名にしているらしい。いろいろよく考えているなと感心した。私は紙切れに希望を書いた。もうこうなってしまったのだ。いくところまでいってやれと、半ば、やけばちで憶面もなく書いていった。

一、君達は、ブラジャーとパンティだけの姿になってくれ。

二、私の持参した貞操帯、手錠、猿轡、首枷、鼻枷を君達にさせてくれ。

三、君達のミニスカートの中に顔を潜り込ませてほしい。

四、君達のヒップで顔に坐ってくれ。

五、君達の乳房で顔をおさえてくれ。

六、君達を紐で縛らせてくれ。

七、もし月経帯を付けているものがいたら、それで私の顔を覆ってくれ。

「やはり、凄いことを書いているわね」とB子がいって、A子が、
「おじさんのいう通りになるのも面白くないわね。それは参考にするだけよ。いいわね」

私の口は内顎が上下に突き開けられているので、声を出して返事はできなかったが、私は頷いた。

「一番の希望は聞いてあげようよ」

A子がいって。三人は、するすると私の目の前で服を脱いでいった。裸の女性の匂いが漂ってきた。A子はスポーツマンらしく肉が締まっていた。いいスタイルだと思った。白いブラジャーが、ぴちちとその双丘の下半分を固定していた。パンティは白い木綿らしいが、やはりぴちちと締まって魅力的だった。B子は胸が太かったが、三十代や四十代の女の太さと違い、取りたての果物の感じを漂わせていた。ピンクのパンティを穿いていた。C子の肌が一番白く滑らかだった。嬉しかったのはピンクの網のパンティであることだった。月経帯だ。私は、やはり此処に来て良かったと思った。私もパンツ一つにされた。「バッグを開けてみましょうよ。見たいわ」と黒眼鏡の女子高校生は口々にいった。私がバッグの鍵を開けると、
「まあ、おっかなそうな物が、たくさん入っているわね」
「これらのものは、まず、おじさんが着けてみるからね」

とB子がいった。バッグの中の物を、もの珍しそうに見ていた女達は、

「これは何なの？」

と、食道枷付嵌口具を取り上げた。私が手ぶりで口に嵌めるものだと言っても、その使用法がわからないらしかった。私が手ぶりでいろいろ説明して、やっと判ったらしい。

「ずいぶん残酷な猿轡らしいね」

「おじさんに、これを嵌めようよ」

三人の意見は一致した。私は首を振って断わったが、きき入れられなかった。

この嵌口具は友人の歯科技工師が作ってくれたもので、好きな女性にこれを嵌める夢想はしたことはあるが、実際には、まだ私は勿論、誰にも嵌めたことはなかった。たぶん、ずいぶん苦しい物に違いない。

私に嵌められていた嵌口具を除けられたかと思うと、いきなり、先端にゴムの玉のついた直径二ミリくらいの鉄棒を口の中へ突っ込まれた。私は逃れようとした。B子が後ろから、私を羽交い締めにした。柔らかい肌の温もりが、電流のように私の背中に伝わって来た。C子の柔らかいすべすべした手が額を押えたので、私の頭は、仰向きになった。喉の奥深く、堅い物が押し込まれていった。息がで

きなくなった。唇を鉄板で強く圧迫されたと思うと両頬も、ぎゅっと締めつけられた。頭の後ろで「ガチッ」という鈍い音がした。

もう死ぬかと思った時、少し息ができるようになった。私は、その僅かずつ入る空気を必死で吸い込んだ。空気の必要性を、この時ほど、感じたことはない。慣れるに従って呼吸は少しは楽になったが食道に鉄棒が入ると足を動かしても胸の中が、痛み、息が止まった。口から鉄棒で串刺しにされたような思いだった。しかし、赤い絨氈の上で、ブラジャーとパンティだけのぴちぴちした若い娘達が私を責めつけてくれていることに、苦痛の中にも快感が沸き起こってきた。

「おじさん、ずいぶん苦しそうね」

「でも、自分で持って来たのだから自業自得というものよ」

「あら、おじさんたら」

少しソプラノのC子の言葉だった。私は恥ずかしかったが、彼女達はそんなに驚かなかった。これも昭和元禄の象徴かもしれない。「こんなにされて喜んでいるのね。男って面白いものね」

私は手錠を掛けられ、鼻枷も装着された。鼻枷は耳鼻科医が診察の際使う金属の管を二

つ繋ぎ、これに鉄輪が附いていて、これで両頬をまわして後頭部で固定さすようにできていた。これを付けられてみると鼻の奥が痛かった。顔を微動さしても食道だけでなく鼻の奥の痛みが増した。我ながら、大変な責め具だと痛感した。

「貞操帯も付けてみましょうよ」

「貞操帯は女性に付けるものでしょう。男性には無理よ」

というC子の言葉も退けられ、私は椅子から立たされた。体が動くたびに痛みが増すが今は食道と鼻を鋼鉄で拘束されている身ゆえ痛みを訴える術もない。されるがままになって、貞操帯を腰部に押し付けられた。

「小さいわね」

腰部を押されたり、締めつけられたりするたびに鼻の内部が痛んだ。仰向けに固定された私の喉のため、どのようにされているのか見ることもすらできなかった。貞操帯の調節ねじを弄ったり、いろいろしているらしいが、どうしても小さいらしい。

「足りないところは、黒バッグに入っていた紐で繋ぎましょうよ」

低音のB子の提案により、遂に私は女性の貞操帯を装着してしまった。身が引き締ま

るような痛さだ。のこぎり齒のようなギザギザの穴が、特に私を痛めつけた。体を微動させても痛いので、私は足を開け、頭を仰むけにしたまま静止していた。

「面白い見ものね。これで一万円儲かるのだから、こたえられないわ」

低音のB子の声だ。

「でも、あまりひどいことをすると、貰えないかもしれないわよ」

C子の言葉がきっかけとなり、責め具を外して貰えることになった。

一つ除けられるたびに極楽へ近づくような気がした。テグスの首縄とパンツだけになった時、私は、ぐったりと赤い絨氈の上に倒れこんでしまった。苦難の後の安らぎだった。

もう何も考えなかった。うっとりとした、ひと時を過ぎた時、弾力のある温かいものがふんわりと私の唇を覆った。私は静かに目を開けた。それは、乳房だった。いつまでも、そうしていてもいいと思った。ふんわりと乳房は唇から遠ざかった。それはC子の乳房だった。

「ありがとう」

C子の優しさに感謝した。

「おじさん。苦しかったでしょう」

労わるようにC子は言ってくれた。私は口が自由にきけることに気づき、
「君達は何年生かね。いままでに、こんなことをしたことがあるかね」
一番知りたいたいことを矢つぎ早に尋ねた。

「おじさんに喋らすと、うるさそうよ。やはり嵌めましょうよ」

「C子さん、脱ぎなさいな」

「もう喋らないよ」

と私が言っても、

「駄目」

と、A子もB子も強硬だった。C子は、ちょっと考えているようだったが、私に背を向けると、さっと月経帯を脱いだ。受取ったA子はそれを裏返しにして丸めると、私の鼻を摘み、口の中へ押し込んだ。その上をA子の外したブラジャーできつく縛られた。私は、痺れるような快感が体内に漲り出したのを感じた。その後、その快感は持続することになった。女たちは、かわるがわるパンティだけの姿で私の顔に軽く腰掛けてくれた。

私を拘束具で苦吟させた後は、彼女達の私に対する警戒心が薄らぎ、私を労わる気持が増したように思えた。私を特に喜ばしてくれたのは、それからだった。

「誰か、今度は、おじさんに拘束具を嵌めて貰いなさいよ。おじさんの体を見ると、どこにも痣も傷もできていないようよ」

B子も黙っていたが、しばらくしてB子が言った。

「C子さん、やって貰いなさいよ」

私も、一番C子を拘束したかった。しかし私の意見は、月経帯とブラジャーの猿轡のため、言うことはできなかった。女子高校生達は、いろいろ、いい合っていたが、遂にC子が、

「じゃ、やって貰うわ」

私の心は小躍りした。

「おじさんの書いた、二番目の希望が叶えられるわよ。さあ立って」

とB子がテグスの首縄を引っばった。私は起き上がった。C子の腰回りを紐で計り、貞操帯を調節した。

C子の足が小さく震えた。思わず私はC子の足へ軽く猿轡の口づけをした。C子は別にそれを避けようとはしなかった。

「おじさん、変なことをしないでよ」

上からB子の声がした。両手で貞操帯を当てがった。A子が腰回りを嵌めてくれた。
「バシッ」という音がした。



「ぴったりだわ。C子さん。貞操帯って、どんな気持ちをする？」
A子は楽しそうに尋ねた。
「そうね。冷たいわ。それに、おなかも締められて苦しいわ」
「こんなもの嵌められたら、不便だろうね。トイレの時、大変よ」
とB子が言った。

「鉄も厚く、丈夫そうな貞操帯だわ。ヤスリで切るとしても大変ね」
A子も感嘆していた。
私が手錠を出すと、C子は黙って両腕を後ろに回した。「パチッ、パチッ」と両手首を固定した。ブラジャーで締められた乳房は大きく息づき、かわいい唇はわずかに開いていた。私は食道枷付嵌出口具をよく洗ってから、

それを持って彼女の傍へ近づいた。C子は自らひざまずき、顔を仰向けにした。素直で、よく気のつくこの振舞いを見て、私はC子が可愛くてたまらなくなった。仰向けの唇に、私の頬をかるく当てた。湿った甘くすぐったい感触が体内を走り抜けた。C子は、そんな私を拒もうともせず、そのままの状態を保っていた。A子が

「おじさん、早く嵌めようよ」

と、私の手から嵌出口具を取ろうとした。私とA子とで静かに、C子の口の中へゴム玉が先端についた細い鉄棒を、噛まし込んでいった。時々彼女の顔が苦痛を示したが、だんだん安らかな表情になって、私の方へ、顔を向けてきた。A子は、嵌出口具の鉄板をC子の唇に押し付け、両頬を鉄輪でまいた。そして、「ガチッ」と後頭部で鉄輪を繋ぐと、ぎりぎりど輪を狭めていった。C子の表情はたちまち苦痛に歪んだ。私はA子の手を軽く押え輪の狭ばまりを、ねじを廻して、緩めてやった。

「どう苦しい？」

とA子は言った。勿論C子は答えられる筈はない。ついさっきまで、これで苦しんでいた私にはC子の苦痛が実感として判かり、こ

れ以上、鼻枷まで嵌めるのをためらう気持ちになつた。

「ねえ、ついでに、これも嵌めてあげましようよ」

だがA子はいそいそと、二つの金属管のついた鼻枷を持って来た。

C子の体は怯え、止めてくれとせがんでいるように思えた。月経帯を噛まされて声の出せない私は、首を振ってそれを止めようと身振りで示した。

「おじさんも案外、弱腰なのね」

A子は、口惜しそふだった。

「これならいいでしょう」

というが早いか、A子はC子の伸びきった白い首に鉄輪を嵌めてしまった。内と外から鋼鉄に挟まれたC子の咽喉は、どう感じているだろう。

だが、その姿は美しかった。赤い絨氈の上

—『花決定版』送料についての訂正—

団鬼六作「花と蛇」決定版は発刊以来送料五十円でお送り致しておりましたが今後「二百円」に訂正しなければならなくなりました。御申込みの節には、定価千円に送料二百円をお添え下さいますように、よろしくお願い致します。

に跪ずいたむっちりした腰は、銀光りするステンレスの貞操帯で締めつけられ、両手は後ろで手錠に固定され、純白のブラジャーで締められた二つの乳房は呼吸のたびに、高くなったり低くなったりしていた。伸びきった白い首の根元には黒光りのする無地の鉄輪が装着され、唇も頬も黒い鋼鉄で締めつけられていた。

体を動かすと苦しいのだろうC子の体は、そのまま動かなかった。A子も、私のテグスの首縄を持っているB子も、C子の姿を呆然と見ていた。

私は、この美を、このひと時だけで終わらしたくなかった。せめて、カラーの写真にでも収めておきたかった。

私は、改めて、C子がついさっきまで穿いていたピンクの網の月経帯が、私の口の中に詰まっていることを確認して、ぞくぞくするほど嬉しくなった。その月経帯を上顎と下顎とで押し縮めてみた。網目の感触と共に、ほんのり甘ずっぱい味がした。その時、C子をエキスにして飲んだような気がして恍惚となった。

○

帰りも来た時と同様に目、口、腕を拘束さ

れ、三人と共にタクシーで笹川駅まで連れて来られ、手早く拘束を外され、黒眼鏡を取られたかと思うと突き落とされるように黒バッグと共に降ろされた。そのとたん、タクシーは走り去ってしまった。

もう、あたりは暗かった。私は、その駅前に、しばらく呆然と立っていた。今までの強烈な印象に、まだ取り憑かれていた。私はそっとバッグを開け、C子が呉れた月経帯を見た。

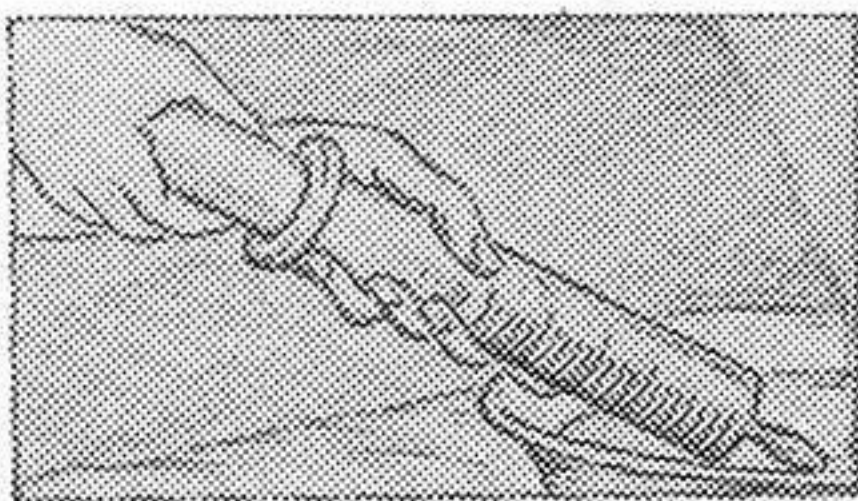
すると、C子の美しいポーズがまざまざと脳裡に浮かび上がり、甘美な世界が頭の中に漲ってくるのだった。

その後は、私は、もう三十分早く発車する電車には乗らなかった。あの三人の女性を代表とする女子高校生達に見られるかと思うととても乗る気になれなかった。

C子が呉れたピンクの網の月経帯は、私の大切なコレクションとして、黒バッグの中に納めて施錠しておいた。そして時々、秘かにその月経帯を取り出して弄んだ。その度毎にC子のすべすべした若い素肌に密着していたようすが、まざまざと頭に浮かんできて、私を恍惚とさすのであった。

—(おわり)—

懸賞「告白、手記、体験」入選作品発表



浣腸責め考

丸 鬼 土 佐 渡

小道具を使つての責め、これは晴雨氏の世界にはなかったのではないか。この場合、三角木馬や鞭等はこの範疇には入らない。小道具の代表は何といつても浣腸器ではなからうか。また、内臓に対する責めとして、古くはサドのボンボンとか、喉にガーゼをつめこんで、水をたらし込む陰惨な方法もあるが、優雅にして、簡単、しかも効果を生むという面から浣腸責めが最高であると思う。

フックスの「風俗の歴史」にも、イラストレーター横尾氏の作品にも浣腸場面が描かれている。映画でもはじめて「東京女地図」に

出て来て、反響を呼び、本誌でも何回か紹介された。しかし法律的な制限があるのかどうも控え目で、前述の映画にしても何か空々しいところがある。映画であれだけ描写されたことには敬意を表するが、あのガラス浣腸器の注入角度は、やりつけた人から見れば実感から遠くはなれていたと思われる。うつぶせになったイケニエへの注入角度は床から四十五度以上になることはありえないと考えられるが、映画の中ではそうなっていた。

とにかく浣腸責めが段々、責め的手段として多く使用されるようになるのではないかと

思われる。

私もそれを使用している一人である。しかしながら、これは内臓に対する挑戦であるだけに慎重を期して、まだ本格的にはやっていない。というのは、鞭その他による外傷は薬で時間がたてばなおるが、内臓については、うっかり変な薬品を使って腸をこわしてしまつてはという素人の懸念があるからだ。だから現在はずまず自分の体を実験台にしたり、専門医と拝察される方々の記事を中心に研究を進めている。勿論、妻にも害がないと考えられる範囲で（ときとしてそれ以上になることもあるが）責め具として使っている。

端的にいつて私の研究課題は、

一、どういった浣腸器があるのか。

二、どういった液を使えばどういった効果があり、大腸にどういった作用をもたらす、後の副作用、または害がないのかどうか。

三、液量はどの位までいけるのか。また空気浣腸でも腸に悪影響を及ぼさないか。

四、嘴管のイケニエに対する注入角度はどの位の時にどの位か。これについては、妻はガラス浣腸器を使用する際に苦痛を訴えることがあり、浣腸器によって傷つけないためにこれを知ることが必要である。

五、その他、腸責めとして浣腸責め以外に考えられるものはないか。

六、その場合でも、腸に対する影響はどう

なのか。

大体この六点に要約される。この中で特に二、三は素人の私には全然分からない。従ってそれだけに不安があるのだ。

私なりに、現在まで得られたものをまとめると、

一、浣腸器の種類

①イチジク。②ガラス浣腸器（三〇、五〇、一〇〇CC）。③エネマシリンジ。④イリリガートル。④米国製、仏製浣腸器。

この中、イチジク、ガラス五〇CC、エネマはもっているが、イリリはほしくても入手方法が分からず、現在は自分で作る考えもしている。欧米では①②は用いられなくなったとのことだが、米国製のものも入手したく、仏製は嘴管が大きいと聞いたが、是非入手したく思っている。

二、使用液、及び、三、使用量

文献によると、まず液は体温に温めて使用することとして、

①薬用石けん二〜五%液を、三〇〇〜五〇〇CC

②グリセリンを原液か、二倍にうすめて、二〇〜三〇CC

③食塩水一%液

④重曹水二%

⑤その他に燐酸ナトリウム、硫酸マグネシウム、等。

これは下剤としてだが、栄養浣腸としては①牛乳三五〇CC、②卵黄、③塩化ナトリウム。この場合、卵は黄味だけとり、布でこしてかすをとり、牛乳とまぜる。一剤、三〇〜一〇〇CCずつ、とあった。

私が試みたのは、

①牛乳。市販のものを温め、当初は五〇CCガラス器で注入、二十分後に便意をもよおし排泄。牛乳の水分が吸収されたのか、白いカス状になって出た。

次には二〇〇CC入れたが、異常はなかった。ただ腸が圧迫され、重くなった感じがした。十分以内で排泄、液状。

注入をしてから、ガラス器で再びぬきとり注入しただけ出たかどうか確かめたところ大体一〇〇CCまでだと全液、直腸近くにあるのか全部回収したが、二〇〇CCになると、ずっと奥へ入ってしまうのか、五〇CC位しか回収できず、二〇〇CC全液の回収は不可能である。またこの場合、便もまじって出て来る。五〇CCの時はこういうことはない。

ガラス器で回収する際は、素人として、余力を入れて吸い出すと、腸閉塞になると考え、腹圧をかけ、それに従った。

②ヤクルト。六五CCあるので五〇CCガラス器で注入。冷たいので気持よかった。少したつともよすが、あまりきつくはなかった。

た。

③水。二〇〇CC〜五〇〇CC。回収については牛乳と同じ。便意は、十分もすれば少し出てきたが、きつくなかった。注入すると腸がきつくはる。

④空気。五〇〇CCまで実験してみたが、回収は少量しかできなかった。注入ごとに、クークーという音をたてて入るのでマニアとしては楽しかったのだが、害はないものだろうか？ 五〇〇CCで腸がはり重く感じた。

⑤水と空気の併用。まず水を五〇CC直腸に注入しておいて、空気を入れた。七〇CC位までやったのだが、こうすると空気を注入するごとに、ゴボゴボという音と、物理的な腸刺激があるので一層効果的だった。これにしても、水だけ、空気だけにしても、排泄すれば一度に全部出ると思っていたのだが、そうはいかなかった。必ず大分残るように思えた。

⑥石けん液。これは顔あらいのものを白い液にとかして、五〇CC注入してみたのだがたちまち便意をもよおし、我慢していると冷汗が出てくるほどだった。

⑦薬用石けん、グリセリン。これはまだ使用していない。これら、特にグリセリンが排泄後はいやな感じが残らないということなので、今後はこれを使用するつもりでいる。グリセリンのみは、五〇〇CCをガラス器

で二倍液にして注入してみたが、即座に便意が来て五分もたたないうちに排泄。グリセリンは長時間腸に入れておくものとしては不適と思った。便意責めにはよいだろうが……。

その他ブドウ糖、ビール、酒、コンニャク等で試用された方もあるようだが、まだ私は使用していない。一度使用してみるつもりでいるのだが……。

四、嘴管の挿入角度

これには個人差が認められるようだ。以下は妻に、イラストの線引き用ガラス棒を用いて測定。

① 仰臥して足を平に伸ばしたとき。肛門から床に並行線を引いたとして、ガラス棒の角度は並行線の下へ一五度。

② 仰臥で、くるぶしが尻につく程度にして足をたてたとき。平行線の上へ二十度。

③ 仰臥で膝が腹にくっつく程度にきつく折りまげたとき。平行線の上へ三十度。

個人差があつて、平行線の上への角度が小さい人も見受けられるようだ。

④ 俯臥で四つばい。下へ十五度。

⑤ 俯臥で足をまっすぐのばした時。平行線の上へ四十五度。

⑥ 尻立てをやったとき。上へ四十度。この場合、足を四十五度位開くと、この角度は三十度におちる。

五、腸責めとして他にあるか

① 細い銅線をたばねて、ビニールで巻いた直径一・五ミリの電線で試してみたが、やわらかく、抵抗なくいくらでも入ったが、大腸は一・五メートル位だから、一メートル位に挿入をとどめた方が無難だと思った。ときにはぬきとったビニール線に血がついていたところからすると、このやわらかさでも、少しまだ、かたいようだ。

② 線引き用ガラス棒で、かきまわしてみたが、余り深く入らなかった。

③ 百貨店のオモチャ売場にあるゴム玩具でワニがあるが、これにはゴム袋からおし出した空気をビニール管で送ると、ワニの腹に通じているゴム袋のゼンマイがふくらんで、ワニが前進する仕掛になっている。このビニール管のついたゴム袋を使用した。カエルのもあるが、これは空気が注入されたあととはずばんでしまつて駄目であつた。この点ワニの方は、笛をつけた他の穴があるので、ここからエネマ的に空気が入る。

長さ五十センチ位のゴム管の先の角をカミソリでそいで使つた。火であぶって丸めようとしてみたが、逆に外側へそりかえるようになるので駄目であつた。

液体物を注入した時に分かつたのだが、笛の穴からは逆流しないからエネマと同じになる。

もう一つの特徴は五十センチもの奥で出来

るということだ。

特に空気を五十センチの深さで入れると、直腸でやった時よりも効果が大きく、大げさにいうと、腸が爆発するような感じをうけたことを附記しておかねばなるまい。

六、腸に対する影響

肛門も非常に微妙な器官であることが分かつた。肛門には歯状腺とか乳頭があるので、後で痔に近い症状が起こる場合があるのを知り、改めて取り扱いには慎重にやるべき必要を感じた。

大腸の長さは、一・五メートル。小腸は六・七メートル。二月号泉氏の弁によれば、大腸小腸の境界に回盲結腸弁があり、浣腸の場合は大腸だけということになる。

大腸の大きさは直径三センチ、内径が一・二センチで、長さが一・五メートルとすると約一六〇〇CCの容量になり、内径一・五センチとすると二六〇〇CC。二〇〇〇CC入るとすると、内径一・四センチ弱といえるだろう。

以上で、つたない報告をおわるが、今後は諸先生のお教えを乞いたい。まずもって、私は、イリリはどこへ行けば入手できるかも知らない。ご存知の方はお教え願いたい。

—(おわり)—

美沙江の足元に腰をおろしてビールを飲みながら映画を見る銀子と朱美は、真っ赤になった顔をはっきり横へそむけてしまった美沙江に腹を立てて再び立ち上り、頬を小突いた。乳房を指ではじいたりするのだ。

「今度、眼をそらせたりすると、ここにいたずらするよ」

朱美の手が伸びた途端、美沙江は悲鳴を上げて緊縛された美麗な裸身を狂ったように震わせた。

「嫌なら最後まで、ちゃんと見るんだよ」

膺のあたりを銀子に指ではじかれた美沙江は、涙に潤む綺麗な睫毛でかこまれた美しい黒眼を、しんと凍りつかせたようにして瞬きもせず画面に向けたのである。

捨太郎の手で、柔軟な静子夫人の裸身が夜具にそっと仰向けに倒されていき、やがて捨太郎がその足許に顔を寄せるや、美沙江の心臓は高鳴り、ひきつったような表情になる。

捨太郎のがっしりした両手に夫人の滑らかでむっちりした両腿が抱き取られ貪り吸われるままに慄えている。やがて落花微塵とばかり捨太郎の舌先は攻撃を開始するのである。

悶え泣く夫人の表情がアップになる。夫人は、おどろに乱れた黒髪を激しく揺さぶりつ

つ口を半開きにしてのたうっているのだ。

「如何が、お嬢さん。面白いでしょう。あれが遠山夫人なのよ。貴婦人でも、あんな事をすると思えば全く愉快じゃない」

やがて、迫りくる捨太郎に、夫人はためらいを最初のうちは見せて、二度三度顔をよじったが、遂に情痴に煽られ、巻きこまれる。

その一瞬、美沙江は呼吸も止まる程の衝撃を受けて、全身をブルブルと痙攣させた。

柔らかく、くすぐるように夫人は唇を摺りつけ、そっと舌をのぞかせて美しい顔をくねらせている。

あれは、この世の出来事か——知覚が段々と麻痺し始めた美沙江は、美しい象牙色の頬を真っ赤に染めながら、

「お願いです。もう止めて、映画を止めて下さい」

と唇をわなわなさせながら哀願するのだ。

「フッフ、お嬢さんには、一寸、刺戟が強過ぎたようね。でも、大家の若奥様だって一寸修業すれば、これ位の映画スターにはなれるという事を、お嬢さんに知ってもらいたかったのよ」

大塚順子はそう云って笑い、そっと立ち上ると美沙江が縛りつけられている柱のうしろ

へ回るのだ。

「あつ、な、なにをするのっ」

美沙江は順子の両手を乳房に感じると、激しく狼狽して緊縛された麗身を揺さぶり始める。

「まあ、柔らかいおっぱいね。まるで溶けてしまいそう」

「やめてっ、やめて下さいっ」

美沙江は肩にまで垂れた黒髪を嵐のように揺さぶった。

「うるさいわね。おとなしく見てなきゃ駄目じゃない」

銀子はたまりかねたように美沙江の頬をピシヤリと平手打ちするのだ。

画面は、完全なフランス式を組み始めた二人を、色々な角度から写し出している。

美沙江は、じっと息を殺して凝視するズベ

公達に同調したように、次第にねっとり潤みを持ち出した瞳を、まばたきもせず再び画面に向け出している。そんな美沙江の胸の柔らかい隆起を順子の掌がゆっくりと揉みほぐしているのだ。

やがて、画面は足を投げ出して坐った捨太郎の膝の上へ、静子夫人が尻もちをつくように乗っかっている。

くなくなと唇と唇を擦り合わせ、舌を吸ったり、吸わせたり、そして、双臀を躍動させながら、捨太郎と夫人は本格的な痴態を演じ合っているのだ。

スベスベした美しい背面の中程に麻縄で縛り上げられている夫人の両手首のあたりを捨太郎は両手で押さえこみ、激しい攻撃を開始している。

その噓せかえるような痴態を強制的に目撃しなければならぬ美沙江は、つい先程まで見せた反撥は影をひそめ、始めて見る桃源境の不思議さに次第に身心を酔い痺れさせていくようなうっとりした表情になっていく。

それは、背後から時には柔らかく、時には激しく、未だ固く凝^こっている紅色の二つの蕾を揉みほぐすような順子の手さばきの故にもよるのだろう。

時折、美沙江は、ブルッと全身を慄わせ、肩まで垂れる艶々しい黒髪を狂おしく揺さぶりながら、

「もう、もう、勘忍して」

と、哀れで傷々しいような哀願をくり返し再び、上にあげた顔は、十九の令嬢とは思えぬような妖艶な、そして、凄惨なばかりの表情となり、吸い寄せられるように、ねっとり

潤んだ瞳をものすさまじい画面に向けるのだった。

そんな美沙江の姿が頼もしくなったのか、銀子と朱美が左右からにじり寄り、ぴったり閉じ合わせている美麗な太腿のあたりに頬ずりし始める。

「や、やめて下さい」

その瞬間、美沙江は狂おしげに下半身を揺り動かして、はかない抵抗を示した。

「いいじゃないのさ。私達はお嬢様を少しでもいい気分にしてあげようとサービスしてあげるのよ」

「お願い、もうこれ以上、ひどい事はなさらないで」

美沙江は、長い黒髪を慄わせて、シクシクすすり泣くのだ。

「何も泣く事はないじゃない。こっちはお嬢様を悦ばせようと思ってるのよ」

美沙江の上半身は如何にも深窓育ちの令嬢といった華奢で色白でほっそりしていたが、

下半身の腰部は美しいまるみを帯び、太腿あたりは充分に成熟して粘着力もあった。

削いだように形のいい膝のあたりから上へ上へと指を這わせていき、接吻を注ぎ、それが次第に淡い繊細な柔らかいふくらみのあた

りに近づき始めると、美沙江はしきりに腰をもじつかせ出し、戦慄めいた悪寒と甘くうずくような感触にカチカチ歯を噛み鳴らすのだった。

その時、よくやく一巻の映画が終り、室内に電気がともされた。

同時に銀子達も手をひいたが、美沙江は額や唇のあたりに、べっとりと脂汗を滲ませている。

つづいて、静子夫人の出演する別の一巻を見せようと云い出す銀子達を順子は制して、「今日はこれ位にしておいた方がいいわ。毎日、少しずつ教育していくのよ」

順子は、えびす顔になって酒を呑んでいる田代に向かい

「これから私、このお嬢様に今後の事について打ち合わせしておきたい事があるんです。

元、お嬢様お付きの女中、友子さんと直江さん以外の方は、この部屋から一寸遠慮してほしいのですけど」

田代は上気嫌でうなずき、

「とにかくこのお嬢さんの事は、大塚女史に任せるとしよう」

と云って、いい加減酔った足を踏みしめるようにして立ち上る。

「銀子さん」

順子は、銀子の耳に口を当てて何かささやいた。

「わかったわ。じゃ、またあとからね」

銀子は含み笑いで部屋を出て行った。

「さて」

順子は、元、女中の二人を残して皆んなが部屋から出て行くと、口元を歪めて立ち縛りにされている美沙江の前に近づく。

「ごめんなさいね。いきなりあんな映画を見せたりして、フッフ、さぞびっくりしたでしょうね」

美沙江は象牙色の美しい横顔を見せ、眠ったように眼を閉じ合わせている。

そのかすかに上気した頬に細い涙がしたたり落ちるのだ。

「でも、やがてはお嬢様も、今の遠山夫人のようにああいう映画にも出演して頂く事になるのよ。その覚悟は今のうち、はっきり定めておいて頂きたいのよ」

ふと、美沙江は、切長の美しい眼を大きく開き、敵意をこめた視線を順子に投げかけたが、すぐに眼を閉じて凍りついた表情を横に見せ、小さくすすり上げるのだった。

「千原流生花家元の御令嬢の身でありながら

しかも十九才という若さで——フッフ、真にお気の毒とは思うけど、私も復讐のため、命、がけでお嬢さんを誘拐したのですからね。まあこれも運命と思ってあきらめて頂くわ」

固く閉じ合わせた美沙江の瞳から涙はとめどなく流れて、その美しい頬を濡らしつづけるのだが、直江も友子もさも楽しげに微笑を浮かべてそれに見入っているのだ。

「鬼源とかいう調教師の手にお嬢さんを渡す前に私が何日かここでお嬢さんを教育するのだけれど、助手として友子さんと直江さんを使う事にしたわ。ついこの間までは、この人達、お嬢さんお付きの女中だったでしょう。気心が知れてるだけに、お嬢さんもその方がいいと思うのよ」

順子は肩を動かして笑い出した。

「それじゃ、あんた達、これから私の助手として、お嬢さんの教育をするのだから、しっかり頼むわよ」

あいよ、と友子は気をきかしたつもりか、畳の上に落ちているビニールのバタフライを拾い上げて

「さ、お嬢さん。これをおはき遊ばせ。お小水袋の取りかえは毎日、うちと直江が交代でしたげるわ」

二人の女中は、顔を伏せてシクシクすすり上げる美沙江の左右へ寄り添い、面白そうにそれを当てがおうとする。

「友子さん、直江さんっ。美沙江は貴女達の事、死ぬまで呪いつづけるわ」

美沙江は美しい黒眼に一杯の涙を浮かべて口惜しげに唇を噛み、二人の女中に射るような視線を向けるのだ。

「一寸、待って。まだそんなものはかしちゃ駄目よ」

順子はバタフライを美沙江にはかせようとする友子を止めて

「あんな映画を見て、銀子さん達に体のあちこちくすぐられたりして、お嬢様の体は今、カッカと燃えているのよ。そんな状態のまま穴倉に押しこめるなんて、可哀そうじゃないの」

順子は、部屋の隅にある小さなベッドを指さして、こっちへ運んで来るよう友子達に命じた。

ベッドの肢には金属製の車がついていて簡単に部屋のあちこちへ移動出来るようになっていた。

「お嬢さんに教育をほどこすため、社長に頼んでこしらえておいたもののよ」

というそのベッドを友子と直江がガラガラと押して美沙江のすぐ前まで運んでくる。

美沙江はそれを眼にした途端、何かぞっとするものが身体の中を走り、思わず眼を伏せ肩をブルブル慄わせるのだった。

ベッドの二隅には不気味な鉄の輪が取りつけてある。それは生贄の足を裂き、人の字型に固定するためのものとはさすがに美沙江も気づかなかったが、得体の知れぬ恐怖感に美沙江の緊縛された裸身に粟粒が生ずるのだった。

「ねえ、お嬢様、フッフ」

順子は、美麗な太腿をびったりと合わせて顔をそむけ、スベスベした肩先を慄わせている美沙江の頸に指をかけた。

「ああいう映画を見せられて、このままおとなしく寝られないでしょう。だからさ」

「何を、何をおっしゃりたいの」

美沙江は顔をよじって、順子を睨むように見た。

「家元のお嬢様だって、女ですもの。十九才にもなれば何かの刺戟を受けた時、御自分で御自分の体を慰めたという経験はおありでしょう」

美沙江の顔が屈辱に歪んだ。

「不潔な事云わんというて、ちゅう顔してはるわ」

友子と直江が顔を見合わせて笑った。

順子も笑いながらつづけて

「でも、両手は固く縛られているので御自分ではどうしようもない。だから、お付きの女中に悩みを揉みほぐさせて——」

「や、やめて下さい」

美沙江は耐えられなくなったようにヒステリックな声を上げた。

両手が自由なれば耳を覆いたくなるような順子のいまわしい言葉——美沙江は緊縛された裸身を激しく左右によじり床の柱に背をすりつけさせて

「そんな事だけは嫌っ、嫌ですっ」

と、泣きじゃくりながら長い髪を嵐のように揺さぶるのだった。

憎い友子と直江の手でそのような羞かしめを受ける位なら一そ舌を噛んで死んだ方が、とさえ思う美沙江だったが

「これも修業の一つよ。友子さん達は今日からお嬢さんの主人筋に当たるんだからね。二人の前に腸まで曝け出して、今まで女中としてこき使った事の詫びを入れて欲しいのよ。わかるでしょう」

そういうと順子は柱につないである美沙江の縄尻を解いた。

「後生です。それだけは勘忍してっ」

美沙江はこれからベッドの上へ乗せられるのだと知ると、逆上したように身を揺さぶりその場へ腰を沈めようとする。

「何してんのよ。さ、おいでっ」

友子は美沙江の縄尻を力一杯引っ張り、直江が美沙江の黒髪をわしづかみにした。

三人の女に抱きかかえられるようにしてベッドの上へ乗せられた美沙江は忽ち上半身を台の上へ別の縄を使って固定させられてしまふ。

「やめて下さい、それだけは嫌っ、絶体に嫌っ」

足を取押さえようと友子と直江がのしかかってくると美沙江は激しい力で腰を揺さぶり両肢をばたつかせ、最後のあがきを示すのだった。

友子も猛然と襲いかかり、直江と一緒に美沙江の両肢を、やっとかかえこむ。

「離してっ、離して頂戴っ」

美沙江は泣きじゃくりながら、友子達に押さえつけられた太腿のあたりを揺さぶりつづけるのだ。

「うっ」

と、美沙江は突然、順子の口で口を覆われ必死になって首を振り、逃がれようとしたが順子は両手で美沙江の首を力一杯抱きしめ強引に唇を押し当てるのだった。

「好きなのよ、お嬢さん。好きで好きでたまらないのよ」

順子は、美沙江の頬を力一杯両手ではさみこんで溜息をつくようにそう云うと、再び、美沙江の美しい紅唇にぴったり口を押しつけるのだ。

恨みは恨みだが、美沙江に対する愛は愛だと順子はほざくように自分の心に云いながら美沙江の耳といわず首筋といわず、遮二無二接吻の雨を降らすのだ。

美沙江を誘拐し、こういう地獄の苦しみにのたうたせる事になったのも、つまりは、美沙江に対する異常なレスボスの愛が起因している。と順子は美沙江を思わず抱きしめた途端はつきり知覚したのである。

あまりにも激しい順子の愛撫に、美沙江は一瞬、とまどい、そして、次第に抵抗の気力が薄れていくのだ。

順子の手は美沙江の縄に締め上げられた乳房にかかり、甘い優しさで顔半分を覆い隠し

ていた黒髪をかき分けると、熱い口づけをうなじから肩のあたりに注ぎつつけるのだ。

それは女であるだけに女の感帯を知り尽したとでもいうように巧妙を極めていた。

やがて、美沙江はぼんやりと眼を閉じ合わせ、順子の支配下に置かれたように全身から力が抜けていく。

夢中になって美沙江を弄んでいた順子はふと我に返ったように顔を上げ、美沙江の両肢を押しえつけている友子と直江の方を見て照れ臭そうに笑って見せた。

順子に眼くばせを受けた友子と直江は、左右から美沙江の品位を帯びた美麗な太腿に手をかける。

「さ、お嬢様。もう聞きわけのない事云っちゃ駄目よ。いい子だからうんと大きく肢を開いて頂戴」

順子は美沙江の熱い耳たぶを唇でくすぐるようにしながら云うのだ。

友子と直江が左右から引くと、もうそれは美沙江の意志を離れたようにスルスルと左右に割れていく。

「もう少しよ。さ、今更、羞かしがっちゃ駄目。そら、勇気を出して」

友子と直江は、更に力を入れて美沙江の足

首を左右に鉄環の所へ持っていこうとするのだ。

美沙江は艶々しいうなじあたりを大きく見せ、細い眉根を悲しげに寄せて、友子と直江にたぐられるまま更に両肢を裂かれていく。

友子と直江は鉄環に美沙江の足首をかつちりと縄でつなぎ止めた。

堂々とばかり、人の字型にベッドへ固定された美沙江を見下ろして女三人はほっと息をつき、次に息をひそめて談笑するのだった。

「鬼源さんの手にお嬢さんを渡す迄、当分の間、ここでレズの修業をつませるのよ」

順子は友子達に云った。

火のように熱くなった頬を横に見せ、固く眼を閉ざしている美沙江を恍惚とした表情で眺めていた順子は友子と直江に眼くばせして

「あんた達で少し可愛がってあげなさいよ」

というハンドバッグの中からマッサージ用の小型のバイブレーターを取り出し、彼女達に手渡すのである。

「お嬢さん、一寸、キッスさせてんか」

と、友子は必死に顔を伏せようとする美沙江の赤らんだ顔を両手ではさみこんだ。

「友子さん。か、かんにんして」

相手が友子だとわかると美沙江は押しつけ

て来た唇をそらせ、しつとりと潤んだ美しい瞳を哀願的にしばたかせるのだ。

女中達になぶられるという屈辱感が、潰れ落ちかけた心身にふと反撥を起こさせたのだろう。

「もうこちら、あんたの女中と違うんや。立場は逆で、こちらはあんたの御主人様やからね。こんな事してもらうの光栄に思わんかいな」

友子は美沙江の長い黒髪をわしづかみにして、顔を自分の方へ無理やり向けさせると、強引に美沙江の唇に口を押しつけた。

美沙江の悲しげなうめき、それも友子の口に押し殺されて、大きく左右に割って縛りつけられた美沙江の高貴な細工物のような二股が、くなくなると、はかなく揺れ動くだけであった。

ぼんやり見つめていた直江も甘い陶醉のようなものが全身にこみ上げて来て、美沙江の縄に締めつけられている、柔らかい形のいい乳房に頬ずりし、赤い蕾に舌を押しつける。

すねてもがくように甘い身悶えを見せる美沙江であったが、直江が順子から借りたパイプを肌に押しつけ出すと、美沙江は、激しい狼狽を示し、顔を揺さぶって友子から口を離

した。

「な、なにをするのっ、直江さん。嫌っ、嫌よっ」

パイプは可憐な乳頭から鳩尾を通して臍のあたりを行ったり来たりする。

「これも自分の体を成長させるための修業の一つよ」

順子は美沙江の狂気したようなものがき振りを立てて笑い、自分もまた悦楽めいたしびれを感じて、美沙江の大きく割った優雅な白磁の太腿から内腿に至るまでに唇と舌を押しつけるのだ。

美沙江の悲鳴は、やがて、三人の女の手管に巻きこまれて、身も心も溶け始め、優雅で繊細な、すすり泣きに変わっていく。

「やっぱり処女っていいわね。きれいだわ」

ねばっこの口づけを美沙江の内腿に注ぎながら順子は、まだどことなく幼い淡い翳りを凝視して云った。

「一寸、それを貸してごらん」

順子は直江から武器を受け取ると、繊細で優美な下肢から膝頭のあたり、美麗な太腿に至るまでに甘い攻撃をしかけるのだ。

「ああ、そ、そんな、ねえっ、やめてっ」

美沙江はそう叫びながらも、陶醉の火照り

で真っ赤に上気した顔をもどかしげに右へよじったり、切なげに左へよじったりして、甘美なすすり泣きの声を洩らし始めた。

友子の手と直江の手が左右から美沙江の白い二つの丘に触れ、包みこむようにして、ゆっくりと揉みほぐしていく。

「いいわね、お嬢さん。今日はお腹の中まですっかり女中さん達の眼に曝け出して、今までこき使った事のお詫びを云うのよ」

順子は、わざと直接攻撃はさけるようにして、肌に武器を這わせていく。

もはや逃れられないと知った美沙江は、自分の運命を諦めたかのように順子の蹂躪に任せてしまうのだ。

「これから友子さんと直江さんが処女のままお嬢さんを天国に遊ばせてくれるわ。そのままおとなしくしているのよ」

順子は甘美な責めを続行しながら、眼を輝かせた。

甘いすすり泣きと共に美沙江は、誘発されるまま悦楽の道を辿り始めている。その中に順子は、美沙江の女を発見した気分になったのだ。

カット・神戸狂四郎



折れ曲った慕情

女 中 ツ 子

中山 久 司

政己は玄関のガラス戸を開けかねて立ちすくんでいた。中から聞こえてくる華やいだ義母の声が、彼にはやりきれない不快音しか受けとれないのだ。

「また今日も出掛けるらしい」

せっかく学校から持ち帰ってきた心の明るさを、フツともぎ取られてしまったようにしか感じられない声なのだ。

政己には、その電話の相手が誰なのかわからない。だが誰にしる憎いと思った。彼のことはまるで無関心としか思えないその義母同様に、いやなヤツに違いない。顔を見ただけでも反吐が出そうなヤツでないと、こんな冷たい女と話の合うはずはないのだ。

××懇談会、○○委員会、□□改善相談会

……？ チェッ、バツカヤロウ！

政己は暴れ出した気持を辛うじて抑えていたが、ひとときわ声高に笑った義母が受話器を置いた気配に、つとめて静かにノブを廻した。玄関に入った彼を、義母は玄関脇の電話台の前で立ったままチラリと眺めただけでクルリと背を見せ、キンキン声で女中の悦子を呼んで、出掛ける準備を命じた。

テラスのついた南向きの六畳ほどの部屋が政己のたった一つの気の休まる場所だ。本棚の上に置いておいた虫籠の中で、数匹のトンボと黄金虫が、ドアの開かれた気配に羽音を立てて彼を迎えた。政己は籠に手を差しこんでトンボを摘まもうとした。トンボは飛び廻って狭い籠の中でもすぐには掴めなかった。

彼は舌打ちして乱暴にその一匹を追いつめ、摘まみ出すなりその羽根をむしり取った。

たった一枚だけ残った羽根を震わせて机の上をクルクル這い廻っているトンボを見詰める彼の眼は悲しげだった。

女中の悦子はハイヤーを見送るとすぐキッチンに入り、夕食の準備に掛かっていた。背後に政己の気配を感じて、濡れた手を振って水をきりながら振り向き、ニッコリと笑って話しかけた。

「お母さまはどこかで会食だそうです。お父さまも今夜はお帰りかどうか……。また、お夕食は二人きりですねえ」

政己は返事もせず、持った虫籠を眺めると

もなく見詰めていた。

「殆ど、毎晩のことじゃないか。オヤジの顔なんて月に一度か二度しか見ることはない。ゴルフだ、宴会だ、接待だなんて、まるでこの家の人じゃないみたい」

声には出さず、政己は胸の内つぶやいていたのだ。

「せめてお母さまだけでも一緒にだと淋しくないですのにねえ……」

「あんなヤツは、ずっと居ないほうがいい」
「でも、坊っちゃんに却って……フッフフ」

悦子は洗いのものを続けながら、彼に背を向けたままで返事のない会話を続けた。

「お夕食は早くしますけど、オヤツ召し上げるならパイがありますよ」

政己は要るとも要らないともいわない。

「今夜はテキのつもりですけど、何かほかにご注文があれば……。テキでいいですね、おいしく焼きますから」

やはり黙ったままで、彼は悦子の背中を眺めていた。中学二年、そろそろ異性を意識する年頃の政己には、丸くしなやかな肩がクリクリと微妙な動き方をするのが、面白いらしいのである。

いつもこうなのだ、二人だけの間では、悦子は政己が聞いていようがいまいがおかまいなく、次から次へと話しかける。政己が黙っているだけでも、悦子はいやな顔をするわけでもな

いし、返事も要求することもないのだ。又、政己にとっても悦子の独り言が、わずらわしいものでもなかった。むしろこの二人の間では、悦子がしゃべり、政己は何もいわずにいる方がシツクリいく感じになっている。

テーブルの上に置いた虫籠から、トンボを一匹取り出した政己は、四枚の羽根をむしり取るようにして悦子に近づいていった。

ニットの着の下は何もない。いつものように手をさし込んでいく。悦子の肌はすべすべしている。温かい。

腋下に政己の手がふれた時、悦子の炊事の手が一瞬とまったようだったが、すぐに何事もない顔付で仕事を続ける。政己が背後から子供が母親の乳房をまさぐるようにしても、何ひとついわずに立ち働いている悦子には、自分の感覚がないようにも思われた。

政己は、悦子のストラックスのゴムを指ではじき、さつき羽根をむしったトンボをその中へ入れた。

苦しいのだろう、悦子の肌と、白い肌着とにはさまれて、ゴリゴリ動くトンボの様子はストラックスの上からでもよくわかる。続いて残りの数匹のトンボも、今度は羽根をむしりもせず背中やストラックスの下へ押し込む。悦子は体をゆすりながらもジッと耐えていたが、あまりの気持ち悪さに声を出した。

「だまれ」

その大声で悦子の体の動きは止まった。政己の手で、ストラックスのホックは簡単にはずれた。チャックを下ろしても若い悦子を包むそれは、ストンと下へおちるわけにはいかなかった。

白い肌、それを包むようにして体の線を示している、更に白いパンティ。ストラックスを引き降ろされ、こんな姿にされた時、再び悦子は身もだえをして、やめてくれるように政己にたのんだ。

だが政己は知らん顔で一匹だけ残っていた黄金虫を取り出すと、悦子のふくらはぎの所へとそれをとまらせてみた。右へ左へノロノロとしながらも黄金虫は上へと登っていく。スベスベした白い柱をラセン状に廻りながら登ってゆくのだった。白い柱はヒクヒクと慄えていた。しかし振り落とそうとはしなかった。

いつ頃からだろう、政己が悦子にこんな事をするようになったのは。

家事の嫌いな継母の為に、父が田舎のツテをたよって悦子を家に迎えたのは、政己がまだ小学校へ通っていた頃だった。それ以来、留守の多い母にかわって政己の世話をしてくれる悦子に、兄弟のいない政己は次第に親しみをもちようになり、学校から帰ると、悦子の後を追いまわすかのように、一日中ついて廻るようになった。

白いパンティへはい上った黄金虫はパンティにかくれて苦しんでいるトンボの頭を踏んずけるようにして上着の中へと姿を消した。

肩をすくめて堪えている悦子のパンティのゴムへ手を掛けた政己は「うごくな」と一言あびせて、それを下へとさげた。それまで圧迫されていた数匹のトンボがパラパラと床の上へとおっこち、くちゃくちゃになった羽根を僅かに動かしながら床を這い回るだけだった。

それを見詰めているうちに、政己はふと小学生時代のことを思い出していた。

継母へあまえることを知らない政己は、優しくしてくれる悦子のひざにのったり、無意識のうちに懷をまさぐるようになり、又、悦子もそれをいやがりもせず、時としてギョッと抱き締めて政己をおどろかせる事もあるようになった頃のある夜、尿意で目をさまし階下への階段を下りる政己の眼に、暗い廊下の突当たりから一直線に明りがとびこんだ。近づいた彼が襖の隙間から何気なく覗き見たのは、今まで彼が見たこともない悦子の姿だった。

布団の上に膝を立てて胸に枕をあてがい、胸元まで夜着がずりおちてきている。しかもその手には、政己が初めて見る太い注射器が握られているのだ。何をしているのだろうか？と思う間もなく、その注射器は布団の上へ投

げ出され、悦子はそこへ顔をうずめるようにして伸び、奇妙な呻き声が僅かに聞こえた。政己は、悦子が病氣になったのかと、心配と怖さが湧き上って立ちすくんだ。

暫くすると、悦子はおし殺したような声をあげて体を慄かせはじめた。苦しいのだろうか、両手でしっかりと枕をつかみ、顔を伏せたりそらしたりして、何かを堪えている様子なのだ。

突然起き上った悦子が襖に手を掛けたのも気がつかないほどに、政己の心は動転していたのだった。そこに政己が居たのに気づいた悦子の顔は一瞬血がひいたようだったが政己を突き倒すようにトイレへと走って行った。果然として政己が見つめる布団の上には、悦子がさきほどまで手にしていた注射器が転ってキラキラと光っていた。

水音がきこえる。政己は反射的に部屋に入った。悦子はすぐに戻ってくるだろう。それを手にとってもいいだろうか。廊下のきしむ音が近づいてくる。そっと触れたそれは、政己の手に冷たく固い感触を与えた。

その時、トイレから戻ってきた悦子が横あいからひったくるようにしてそれを取り上げ布団の上に跪ずいて肩をふるわせるだけで、何もいわない。

注射器が憎らしい。悦子をいじめるこれが悦子を苦しめる注射器が憎い、とても憎い。

自分を仲間はずれにして、こんな注射器とたわむれる悦子も憎らしい……。政己は衝動的に腹がたった。

悦子を迎え入れてから今まで、すっかりなじんだ政己は何をするにも悦子と一緒にだっどこへ行くにも。その悦子が、自分にとって一番大事な悦子が政己の知らないおもちやで遊んでいた。

めちゃくちゃに手を振り上げた。ゴツンゴツンと政己の手に、悦子の頭が、体が当たった。だが悦子は、政己の拳を避けようともせず、低い声を出した。

「坊っちゃま、ゆるして下さい。ゆるして」幼ない政己には、そんな悦子ののしる言葉を知らなかった。ただ「バカ、バカ」と拳を振り上げるだけだった……。

流しに両手をつき肌を剥き出されている悦子の後ろ姿は異様だった。そのアンバランスな感じも、西日が照りつける台所の背景があるからなのだろうか。

父はやはり今夜も帰ってこないようだ。悦子が入る、しまい湯の音が二階のこの室まできこえる。めずらしく早目に帰った母も、今は自室で夢を見ているはずだ。秋も深まった気候の階段は素足にはすこし冷めたい。

脱衣室のドアは音もなく開いた。湯気で曇った浴室へのガラスは悦子の丸い体の影を

ぼんやりとうっしている。湿っぽいその部屋の片隅には、悦子の脱ぎ捨てた衣類が籠の半分ほどを占領している。風呂あがりの悦子の肌をつつむ筈の花模様のパジャマが、一番上にチョコンとのっている。

籠の中身に手をかけた政己の掌に、暖かそうな感じを与えるレモンイエローのパンティが、するりとナイロン特有の感触をのこして下におちた。

突き当たりの女中部屋で待つ政己のもとへなかなか悦子は戻ってこなかった。自分の下着類がすべて姿を消しているのに気づいた悦子はどうしているだろう。

こんな事をするのは政己に決まっている。すぐにわかることだ。パジャマだけで部屋を出てきた政己には、今の季候はしばらくすると肌寒かった。悦子が敷いていった布団にもぐり込み、ジッとしている政己のもとへ、しばらくしてバスタオルを胸にまわした悦子が戻ってきた。

「坊っちゃん、返して下さい。パジャマだけでも……。早く」

「ダメだ」

「お願いしますから」

こんなやりとりをしながら、片手でバスタオルの裾をおさえながら、政己がしっかりと握っている下着を手に入れようと、布団の中をまさぐってくる。

「駄目だ、返さない」

「お願いだから返して下さい。いつまでもこんな格好だったら、風邪をひいちゃいますから」

それは二人にとってひとつの遊びに近いやりとりだった。

「なんでも言う事を、ききますから」

「ほんとうか」

「ハイ、なんでもききます」

二人して朝に夕に散歩させて歩いた大型の秋田犬が去年の暮れに死んだ。その時も政己は、悦子にやりきれない気持をブツつけてこまらせたのだった。

「犬を返せ、おまえが犬になっちゃえ」

それ以来、時として悦子は政己の気の向きようで犬のかわりをさせられる様になった。大きな、いかにもゴツゴツとした犬の首環をはめられて、パンティだけを返してもらった悦子は、狭い部屋の中を政己を背にしてグルグルと何度ぐらいまわっただろう。

「もっと走れ、走らないとぶつぞ」

政己の声が背の上から飛ぶ。

そんな行為を中学生の政己は、異常なものと感じてやっているのだろうか。

「悦子は犬だ、僕の犬だ、ぶたれろ」

振り下ろされる自分のビニールベルトの痛みをこらえて、四つん這いになったまま動か

ない悦子の尻に、太腿に、はじけるような音がした。

それは主従の関係にある二人だから出来ることなのだろうか。じっとして政己の苛責を耐えている悦子の心には、単に不幸な「坊っちゃん」を慰める気持以外に、なんの感情もないのだろうか。

翌朝、政己は普段と変わりなく学校へ出掛けた。悦子もまた、いつもと変わりなく政己の後ろ姿に挨拶を送っただけであった。

この二人が昨夜くりひろげた痴態はいったい何だったんだろうか。途中から入り込んできた母という名の女には、子供という名の政己と、お手伝いの悦子が、昨夜そんな痴態を演じたなどとは想像もつくまい。

政己が登校し、母親の食事すみ、さて自分の食べる段になり、悦子はイスに腰をかけるようとして、それまでわすれていた腰の痛みを感じた。その痛みに昨夜の自分を想起しながら、そっと手を回してみる悦子だった。

その夜の政己は、いつも以上に悦子を責めたのだった。

学校から早々と帰った政己は、二階へ上ったきり夕食時になってもおりてこようとはしなかった。今夜も又、二人きりでの夕食なのだが、エプロンはずししながら、悦子が呼んでもドアの開く気配がなかった。

ノックして開けた室内に、庭園灯の明りで写し出された政己の影はあったが、悦子の声にも動かず、じっとしている。

悦子は、ドアの陰にあるスイッチを押して室内が明るくなった時にハッとなった。外を向いて坐わっていたとばかり思っていた政己が、こちら向きに椅子に腰を降ろし、椅子をジイッと睨んでいたのだった。

次の瞬間、椅子を蹴ってヒョウのように飛びかかった政己の勢いに負けて、悦子はその場に尻もちをついた。

たしかに今日の政己はおかしい。学校でいやなことでもあったのだろうか。それは中学へ通う子供としては考えられないおねだりだった。ガムシヤラに悦子の上半身を裸にした政己は、そのふっくらした胸元に顔を埋め、大声で泣き始めたのだった。

母に甘える事の出来ずに育った政己を思うと、悦子はむしろに可哀そうになり、なすがままにさせていた。しかし政己の泣きじゃくりは、悦子への甘えから不満をぶつける責めへと移っていった。素肌に食いこんだ政己の爪が悦子を幾度も叩かせ血を滲ませるまで責め立てた。それでも逃げ出しもせず、やめてくれるよう政己に頼む悦子だった。

「ここで待ってるんだぞ」

そういつて一旦部屋を出た政己が、悦子の部屋から捜し出した浣腸用注射器を手にして

帰ってきた時には、サイドボードから父が大切にしている、ジョニ黒も持ち出してきていた。

昨夜の首環をはめさせられた悦子に対し、犬になるよう、四ん這いを命じた政己は、プラスチックの容器に少し残っていたピーナッツをぶちまけて、そこへ父のジョニ黒を半分ほど注ぎ入れた。

四つん這いにさせた悦子に、床に散らばったピーナッツを犬のように直接口で拾って食べるように指示し、机の上の物差でピタピタと背を打ちすえていた政己は、それが済むや否や、洋タンスより出した自分の黒バンドで床に這う悦子のウエストを結び、首環より下がった鎖と連結させて悦子を後ろ手に縛ったのだ。

今は捕われの状態の悦子の前で、プラスチック容器にうつしたジョニ黒を、浣腸用注射器にゆっくりとうつしていく政己の手は、訳けのわからぬ慄えでカチカチと鳴った。

悦子をいじめてやる。こわがらせてやる。どうせ悦子は犬なんだ。そんな叫び声が、政己の脳いっばいに反響しているようだった。

悦子は、これからされることを察した。何とかして、ゆるしてもらおうと哀願した。しかし、内心では覚悟をしていた。

二百CCほどのジョニ黒の苦痛は耐えられないはげしさだった。よじれ、きれぎれにな

ってしまったような腸の痛み。胸までつき上げ、はき出されるような感じの胃。

後ろ手に縛られた全身を憐れせる悦子に対し、政己はそのまま部屋の中を廻るようにと物差をふるった。

限界に達した悦子は、後ろ手の鎖だけは解いて階下へ行く事をゆるしてくれるよう懇願し、再び縛られることを約束して政己の部屋を出ようとした。しかし、切迫した苦痛が立ち上る事を拒否していた。犬と化した悦子は政己の持つ鎖を引っばるようにして、階段を下りていった。

早く行かなくては、我慢出来ない。早く、しかし、政己の手に連なる鎖が悦子の焦りを邪魔していた。

早く。早くこの苦痛を取り除きたい。

悦子が首輪の締まるのを耐えて引張った時背後で無情にも政己の声が飛んだ。

「悦子、止まれ！」

こんな時間になつては、もう政己の母も、帰らないだろう。私は、私は明日の朝までにどうなっているのだろう。

これからきつと続けられる種々の責めを考えると、気の遠くなる思いの悦子だった。

なぜ坊っちゃん私は私をいじめるのだろう。

なぜ、なぜ……？

だが、悦子は首輪の鎖を振りきろうとはしなかった。

(終)

告

白

プレイの夢想

ロマン派生

私の好むプレイといえば、まず縛った女を引廻しにかけたい。しかしこの際、女があまりに協力的に胸を張って歩かれては困る。うつむき加減に背中を押されて、ためらい勝ちに歩いて欲しいものだ。次に、キチンと正座させ「私は貴男の奴隷です。うんと恥かしい責めにかけて下さい」などと云わせたいのだが、これも猿轡をかけたままでは、はっきりと云うように迫る。

猿轡と云えば口の中にパンティや、靴下などを詰めるのが流行のようだが、私は脱脂綿を詰めることが多い。これは口の中にケバケバが残るので女は嫌がるが、私にとってはなぜか非常にセクシーな感じが強いので愛用している。時にはこの脱脂綿にウイスキーをし

み込ませたりしてみるが、ものの本によると針を二・三本、含ませると、声を出させないという猿轡本来の目的には大変良いそうであるが、プレイとしてはどうかと思う。

髪の毛を握って顔をもたげ、まつ毛、耳たぶ等を軽くキスしてから本格的な責めにとりかかる。

鏡の前に引き据えて、背後から乳房を責めたい。パイプ、筆、ローソク等もよいが、大きい毛皮のようなものでスッポリと乳房を覆い、軽くもんでやるのもなかなか味があると思う。この毛皮は、その他にも何かと、使い途がありそうで面白い小道具である。

乳房や腹に、墨で文字や絵を書くのも楽しいが、入れ墨となると一寸手が出ない。

目隠しをかけておいて、不意にコンニャクを押しつけたたり、「針で刺すぞ」とおどかしておいてマッチ棒か揚子で突いたりすると、女は思わず悲鳴をあげるが、これは同じ女に何回もやるわけには行かないようだ。

片足を吊るして腰を浮かせておき、剃毛したりローソクを立てたり、花を活けたりしてその状態を、女に詳しく口で、云わせてみたい。もちろん写真をとっておきたい。

ひとしきりこんなプレイをした後は、軽い運動会をやってみたい。まず後エビに縛った女を、部屋の片隅に投げ出し、部屋の中央には布団を畳んだものや低いテーブルなどを置いておく。用意ドンでスタートして、十秒以内にこちら側まで来いと命令する。若しうまく十秒以内に來てしまったら、転がって来るのは反則だとかなんとか難ぐせをつけて何回もやり直しをさせてやりたい。

エビ縛りにして仰向けに転がし、二十秒以内に起き上がれたら縄をほいてやるなどと約束しておいて、若し起き上がりそうになったら、えんりょなく足げにして転がしてしまふ。

鼻まで覆う猿轡をかけた上、ローソクの火を吹き消すように命令し、消せなければ、口



読者ギャラリー 『実験材料』 岡 たかし

ーソク責めにかけるといってやりたい。

両足を拡げて足首を棒に縛り、そのまま歩かせてみたいが、転ぶと一寸危いのですぐに支えてやれる体勢をとっておかないと不可なりと思うが、横着な女はわざと倒れかかるだろうから、その棒を利用して逆さ吊りにするなど、たっぷりお仕置してやるつもりだ。膝に花など挟んで落とさないように歩かせ

てやるのも面白いと思う。なかなか落とさない時は羽根はたきなどでくすぐってやろう。マーブルチョコレート等を畳の上に沢山ばらまいておき、後手に縛ったまま口で拾わせるのも面白そうだ。

この外、考えればいろいろな運動会が楽しめるそうだが、若し出来ることならば出場者は一人ではなく、二人、三人と複数で運動会をや

ってみたいものだ。縛った女を二人使って、腰縄を連結させて綱引きをさせたり、女プロレスのように格闘させて、相手を縛り上げた方を勝ちとしたり、なんて想像だけでも面白い。負けた女は罰として、いろんな縛り方の実験台にしてやろう。

いけにえは女一人で、これを三・四人の男がよってたかって責めるなんてえのは、マゾ女にとっては最高の喜びであろう。中華料理のテーブルの上にあぐらに縛り、テーブルをグルグル廻しながら、周囲に坐った男達が勝手なことを云いながら交代に責める。或いは目隠しをかけて、身体のとどこかにキスをしてそれが誰かあてさせるといようなゲームがしてみたい。

色々と責め上げ、汗や脂などで汚れた女は最後に風呂場でシャワー責めをかけてやるのがエチケツトであろう。適温の湯でも激しい勢いで顔面や柔らかい部分にあてるとかなり苦しいものだが、冷水にしたり熱い湯にしたり温度をかえて身体中たんねんに流してやったら女はどういうだろうか？ ついでに石鹸を塗りたい、スポンジ等は使わないで、素手で洗ってやるのが、哀れなマゾ女に対するロマン派サジストのねぎらいの気持といっ

てよいだろうと思う。

M 小説

鬼女の面

浅羽 やすし

(1)

夢のなかに、かなり激しい雨の音を聞いて
信吉は、眼をさました。

二段ベッドの上段に、よく寝入っている筈
のみどりも、どうやら眼をさましたらしく、
寝返りをうった。頑丈なベッドだが、ギシッ
ときしみ、その震動が、じかに、信吉のあた
まから足の先までひびく。

「何時かしら? 信吉」

みどりは、天井を向いたまま言った。

「ハイ。四時ですね」

「もう明け方なの? まだ深夜劇場をやって
る頃だと思ったのに」

「雨のようですね。かなり降っています」

「ヘンな時間に眼がさめちゃった。雨といえ
ば、あたしも、雨だわ」

サヤサヤと、衣ずれの音といっしょに、信
吉の顔の上に、高貴な香料がにおってきたの
は、どうやらみどりが起きあがったためだろ

う。

パチッ! とスタンドに明りが入り、

「ええと、ああ、あったわ」

みどりは、はずんだ声をだした。

信吉も、あわてて、枕もとの、顔の上にゆ
れている透明のビニール・パイプを手さぐり
にさぐりあて、そのはしを、これも枕のそこ
ろにつねに用意してある、ツボの口にさしこ
んだ。ツボは、二リットリはたっぷり入る、
大きなものである。



カット・春川ナミオ

ベッドの上段と下段をつなぐビニールパイプは、本郷の医療器具会社から特別にわけてもらったものである。

みどりのベッドに伸びているほうの末端には、直径十五センチの、これもプラスチックでできたジョーゴがとりつけられている。

これがあるおかげで、みどりはいちいち、ベッドの段をおりてトイレへゆく煩わしさがなく、いつでも、おもしろいままにこれを使用できるわけである。

「あーあ、と、軽くあくびをしたみどりが、ベッドに起きあがり、同じように、ビニールパイプを手にとったようだ。

ベッドが、リズムカルにゆれるのは、みどりが、なにかをやっているからだ。やがて、彼女は、低い声で、

「いいね？」

念を押す。

「ハイ」

信吉は、天井にむかって答えた。

それが「OK」のサインなのだ。

みどりは、そのままの姿勢をくずさず、軽く眼をつむり、深く息をはきだしたようだ。

五秒……十秒。

上段からたれさがって、信吉の顔に届くパ

イプを、そのとき見たら、うす黄いろの、酒のようなものが、流れくだるところをつぶさに見ることができらるだろう。

その酒は、あくまで澄み、いちめん細かな水泡を含んでいる。

流れはあとからあとから、ベッドの上段から下段へ落下し、信吉は、それをうけるのに懸命になった。

少しでも油断があったら、ツボの口から溢れて、フトンをぬらすだろう。さらに、顔いちめんを水びたしにしかねない。

信吉は、上段から届くスタンドの明りに、キラキラと、きれいな輝きをみせるビニールパイプに、食い込むような眼をむける。

うす黄色の、なにか高貴なものさえ連想させる液体の流れであった。

ツボのなかに、かすかに音がするのは、だいたったためだろう。

いちじは、激しかった流れが、ようやく小さくなり、やがて止んだ。

ほんと、ため息をついて、パイプをカベにとりつけた、ヒートン金具のクサリにまきつけ、あらためて、ツボのなかみをのぞく。

まだ明けきらない時刻というのに、これから信吉の大切な仕事が始まるのだ。

ツボを捧げもち、しずかに、顔をよせる。

信吉は、ツボをそっと、枕もとのサイドテーブルにもどし、正座しながら眼をつぶる。
「利き酒」というのがある。

秋、できあがった新酒を口に含み、香りをためし、その味を目ききする。清酒づくりには、なくてはならない大切な仕事なのは、その利き酒で、できた清酒の良否を鑑別し、品質と等級をきめるためだからである。

万一、なにかの拍子で、せっかくできた清酒のなかに、チリや不純物が混入していたり味が悪かったらメーカーの信用問題だから、利き酒の担当者は全神経を投入して、二三口と、その酒を舌にのせ、のどで味わい、香りをハナでみわけける。

いまの信吉が、ちょうどその利き酒の専門家と同じであった。ツボのなかみが清酒でないこと以外には。

「どお？ なにか変わったとこない？」

上からみどりに問われて我れにかえる。

「はい、よろしいですね」

みどりは、じぶんの体調にとっても神経質であった。商売がら、病気になるやすいほうだったが、万一健康状態に変化が生じたら、ま

っさきに、でてくるもののなかに異常が生まれると信じている。

信吉をやとい、常時でてくるものの状態を調べさせるのは、そのためであった。

すべて、彼女から出るものは、まず信吉に与えられる。

だから、信吉は彼女にとっては検尿係りであり、もちろん検便係りでもあった。

みどりは、信吉を身のまわりの世話をさせるドレイのつもりでいる。そして、信吉もまた、おのれの任務をよく守る、忠実な下僕の地位に甘んじていた。

「はい、よろしいですね」

みどりは、その返事に満足したらしく、もうひとことも、ものをいおうとはせず、ベッドをギシギシ言わせ、寝返りうちながら、はやくもスースーと、軽いイビキをかきはじめるのである。

口の中にのこるかすかな苦が味と、アムモニヤの快い刺激を反すうする信吉は、まだボンヤリと目のうえ五十センチに横たわるご主人さま——みどりのことを、考えつづけていた。

みどりは、寒中でも、ベッドに入るときはなにも身につけない。それは、信吉がここへ

買われてくる前からの習慣であった。

彼女は、あたまを南むきに、足を北の窓へむけて寝る。そして、その下の段にもぐるように横たわる信吉は、それとは逆に頭のほうを北に、足を南にするように、命ぜられていた。それは、信吉のイビキや、歯ぎしり、さては寝息がけがらわしいからという理由からであった。

(2)

信吉が、ベッドの天井をみあげて、まだ、のどにたしかにのこる刺激をかみしめていると、南の室とのさかいの、アコーデオンカーテンが五十センチほど開き、美代子がねぼけたような顔をだした。

ねぼけてはいるが、美代子の美しさは、こんなときでも少しもかわっていない。テレビに出演させたら、たちまち人気女優ナンバーワンにのしあがりそうなエキゾチックな容ぼうの持ちぬしであった。

年は、みどりより八つ年下の二十一才。くわしいことはわからないが、信吉が住みこむ前からここに住んでいる。

いまは、ファッションモデルとかだが、なぜか売れず仕事はあまり回ってこない。

美代子は、しどけなく開いたネグリジェの前を合わせようとせず、室へ入ってきた。かわいいアクビをしながら室の中央まで進むと、足を大きく開いてその場にしゃがもうとする。

このあけ方に、いったいなにをやるうというのだろうか。

あつけにとられて見守る信吉の視線なんか気にするふうもなく、ネグリジェをふわりと両わきへはねあげる。形のよい、白い可憐なヒップの丘が眼にまぶしい。

美代子は、おすもうさんの土俵入りのように、両の足を外に向けて八の字にひらき、ようやく明るくなりはじめた、窓のほうに顔を向けたが、その視線はうつろだった。

ベッドが、またギシギシと鳴った。寝入りばなだったみどりが、物音に眼をさましたのであろう。

彼女は眼をこすりながら、眼下にうごめく美代子を見おろしていたが、

「美代子。あんたは……」

悲鳴のような声をあげた。信吉も、美代子のように、じっと眼を向けている。

入浴のとき、手や足の先まで洗わせられる

世話や、トイレへのお供を命ぜられるのはし
 よっ中なので、しどけない恰好の美代子をみ
 てもなんとも感じはしない。

でも、トイレの内部で、彼女が、信吉にす
 べてを預け、自身はまったく手をくださず
 信吉の手や、ときには顔まで汚すようなこと
 をされても、平気なのに、このように、寝室
 のタタミの上で、便器もないのに、そこへし
 やがもうとするのをみるのは、めったにない
 ことであり、いささか面はゆい。

みどりの悲鳴なんか耳に入るようすもなく
 のろのろと、しかし正確に、美代子はなにか
 をはじめようとしている。みどりが、それ
 とがめるのも無理はない。

みどり自身は、ベッドの中でも、ときには
 信吉にツボを捧げさせたままでも、あるいは
 興がのれば、横にならせた信吉の顔のすぐそ
 ばにおいた便器を平気で使用したりはする。
 しかし、いまタタミの上にしゃがむ美代子の
 からだの下には何もおいてない。もしも、い
 つものクセをだされたら、つい十日ほど前に
 表替えをしたばかりの、新しいタタミは台な
 しにされてしまうだろう。

美代子は、夢遊病をもっていた。

それかなり程度の進んだ、発作時には手

のつけられないくらい厄介なものなのだ。

夜中にキッチンへ入って、目玉焼きを六つ
 も焼き、それを平然とたいらげ、またゆうゆ
 うと寢床へもどって熟睡を続けたり、これも
 ゆっくりとフロにはいり、丁寧に髪まで洗
 って、ドライヤーまでちゃんとかけて、再び
 床に入ったり、かと思うと、用もないのに室
 内をうろついて、やたらにテレビのスイッ
 チを入れ、ステレオのレコードを廻し、ガラ
 ラと窓という窓のサッシを開けて歩き、ひと
 さわぎをやってのけると、あと始末なんかし
 ようともせず、そのまま無心の表情で、ふと
 んにもどってもぐる――。

おもしろいことは、そうして、キッチンに
 入ったことも、髪を洗ったことも、本人は全
 然気づかず、ユメの中でやってのけているの
 である。あとから、みどりが指摘しても、
 「あら、あたし、そんなこと絶対やってない
 わ、ひどいわ」

おこり、しまいには泣きじゃくる。
 いちどなどは、何を寝ぼけたのか夜中に、
 ガスのセンを全開にし、そのまま、ふとんに
 もぐってしまった――。

あぶなくて目がはなせないのだが、その症
 状がおこるのは、月に一回、女性特有の、れ

いのブルーデイの前ときまっていた。

だから、予定日が近づくと、みどりは夜寝
 てからも目がはなせない。信吉に、そのこと
 を説明しておかなかったのは失敗であった。

「いやだ、美代子、そこはトイレじゃないの
 よ、だめよ」

みどりの大きな声にも、答えようともせず
 彼女はじっとしゃがんでいる。おそらくこの
 まま放っておいたら、トイレのなかと同じこ
 とをやったのけるだろう。

「だめだわ。信吉！ タタミが汚れるウ、は
 やくとめて！」

それまで信吉は、命令を待ちかねていたよ
 うである。

ガバと身を起こし、ベッドからおりると同
 時に身を投げかけた彼の行動が、そのことを
 物語っている。

まさに間一髪であった。

そして、雨はやんだ……。

美代子は、そんな信吉の存在など気に留め
 るふうもなく、ふわっと立ちあがり、回れ右
 して、自分の寝どこにきめられた南の室へ戻
 っていった。何事もなかったような、美しい
 童女のような、しかし、夢遊病者特有の放心
 した顔は、暁の光をうけて、まるで能面のよ

うであつた。

信吉はそのままジュタンに伸びていた。

みどりからパイプ越しに与えられる雨にはもはや完全に慣れ、問われれば、そのときそのときの異常くらいはわかるつもりである。

しかし、美代子が、そんなスタイルをみせつけるのは、はじめてのことだけに、感動は別であつた。

雇人である以上、ご主人さまと、その身内のかたのために用をするのは当たり前のことだろう。だが、あの美しい美代子にと思うと思ひは、ひとしお深くなる。

「起きな、信吉。へんなときに美代子に起こされちまって。ついでにすませちゃうから、ついでで」

みどりは、文字通り、身をなげだして、美代子が、タタミを濡らそうとした危機を、事前に交わした信吉に、賞讃とともに、ねたましさを感じたらしい。

美代子がやったのなら、飼いぬしのあたしがやるのはあたりまえ。やる以上は、美代子のより、もっともっと徹底したものを、という気になったのはやむをえないことかもしれない。

信吉のミミをちぎれるばかりにつまみ、さ

つさと廊下の左手のトイレのドアを開く。

「めんどうだから、こっちのほうも、ベッドでできるといいんだけど……。信吉！ ツボだけでなく、こっちも早く慣れるんだね」

半ばは、自分にいいきかせる口調で、トイレの、汽車式に一段高く据えられた便器のところにのぼり、むこうむけに腰を落とした。

「おまえ、どこをみてるの？ よく研究しなけりやだめじゃない！」

気の遠くなりそうな、特有の香気を嗅いで信吉はまごまごしている。やっと滝の始末に慣れたところに、これはあまりにも醜悪で、思わず吐き気のどの奥から湧いた。

しかし、この世でたった一人の、ご主人さま——みどりにたいしては、絶対に、反抗はゆるされない。

パチッと、スイッチを切る音がして、トイレの中は、まっくらになった。

さすがに、気がさしたのか、みどりが、天井の電灯を消したのである。

正直のところ、信吉はホッとした。いくらなんでも、それは、みるべきものではないのだ。

おそらく、みどりも、ここまで連れてはきたものの、信吉と同じ思いに、恥かしくなっ

て明りを消したのだろう。

「ヨシ」

というみどりの許しを待ちわびながら、暗い廊下に、信吉はじっと立っていた。

ばかりしい気もしないでもないが、たとえばだらないとしか思えない命令にも服従せねばならない身のうえなのだ。

なにも、こどもではあるまいし、夜中に、トイレのお供をさせなくてもよいのに、と思う。だが、そんなことを態度にだしたら、たいへんなことになる。どんなことにも、この家に飼われているかぎり、拒むことは許されない。

でも、差し迫ったその思いが、かえって、身を灼くような屈伏感となつてかえってくるのはふしぎだった。

「なによ、わかってるくせに。どうして、ペーパーの用意をしてこなかったのよ！」

みどりの声が、追い打ちをかけるように、耳をうつ。

このトイレには、いつもペーパーはない。みどりと美代子が使用したあと、ころ合いを見はからって、ペーパーを届けるのは信吉の役目であつた。戸のあいだから、ペーパーをわたすと、ときには、

「入って、手伝いしないの？」
と、命ぜられる。

しかし、手伝いのあいだはタオルで目かくしさせられ、手さぐりでなければいけないことにきめられていた。それは、信吉に、まだ人間としての感情がのこり、「イヤらしい目をして不愉快だから」という理由からであったが、実は、これは、みどりが、だんだんと飼いならしてゆくために、わざと焦らす考えからであった。

眼が、まったくタオルでかくされ、手さぐりしながら完全にあと始末の奉仕をするのはかなり難しかったが、みどりは、

「イヌでもネコでも、眼かくししてもご主人さまの用を足すものだよ」

ときめつける。せめて、見当をつけるためうすぼんやりとでも、みえるようにタオルをゆるめさせてほしいとの、信吉のねがいは許されていない。

それが、けさにかぎって、はじめから、タオルを許されたのは、やはり、みどりの教育のしかたが進んだことを示すものだろう。

(3)

“生命売ります”

それだけの文字を大書したプラカードをか
ついで、信吉が銀座の並木通りの歩道を行き
つもとどろつ、行きかう人々の、あざけりの視
線を浴びながら歩いたのは、夏も終りに近い
いまからひと月前の、小雨の降る木曜日の午
後のことであった。

銀座は、あいも変わらない人出で、ことに
秋もののセールがはじまった並木通りは、有
名店が軒を並べているからであろうか、肩と
肩のぶつかりそうな混雑であった。

むかしから、銀座人種は、他人のことには
無関心でつめたいといわれる。

たとえば、老人が、道ばたに倒れていても
声をかける人はまずいない。

そのくせ、知った同志は、肩を抱き、顔を
ふれ合はんばかりに親密さをみせる。

あせくさいシャツに、粗末なプラカードの
信吉などは、イヌ以下の存在で、蹴とばされ
るのがオチである。

火、水、木と、きょうで三日め。思いあま
って手を染めた、自分自身を売るためのサン
ドイッチマンに。しかし、買い手は現われず
ガッカリしていた。雨はひどくなるし、日は
暮れかかる。もうやめようか、と、ふと弱気
になった信吉の肩を軽く手が叩いた。

ふりむいたら、和服のよく似合う、色の白
い、いかにも水商売の女性といったタイプの
細っそりした美女が、蛇の目の傘を開いて立
っていた。年令は、二十七、八くらいだろう
か。雨のなかに、惜しげもなく着ている和服
は、金のかかったものにみえる。いかにも氣
位の高そうな女性であった。

「いくらで売ろうというの？」

「きめていません。値をつけてください」

「たった一つしかないイノチでしょ。そんな
売り方は損だわ。事情がありそうね。相談に
のったげる。ついてくるのよ」

ついてゆくには、相手があまりに美しすぎ
てこわくなった。でも、女は、そんな信吉を
問題にせず、さっさと歩きだした。

「みっともない、そんなカンバンなんか、す
てちゃうのよ！」

女のことばは鋭い。

「おなががすいてるんだろ、かんたんによ
トもしなくちゃ。ウナギでも食べよう」

ビルのとなりに、しゃれたつくりの料亭が
のれんをかけている。なにか、なまめいた、
秘密めかした店構えだった。

「部屋あいてるかしら、いつもの」

かなりのなじみらしく、彼女は、さっさと

あがりこみ、小部屋に連れ込んだ。

「よろしくね」

さしだされた小型の、金ブチの名刺には、

△江藤みどり▽の名が読めた。

「クラブをやっているの。この近くだわ。住みこみのボーヤがほしかったのよ。あんた、とにかく買ったわ」

みどりは、ゴールドのシガレットケースから、細身のタバコを抜きだし、なれた手つきで火をつけ、プーッと真正面から、むらさきの煙を、信吉の顔に吐きかけた。どうやらそれは、相手をケンセイするゼスチュアらしくそしてタバコを吸わない信吉には、百パーセントの威力を発揮したのであった。

煙を吐きかけられて、信吉は、ショックをうけた。相手の足もとにひれ伏したみたいにシユンとした。信吉は二十三歳になる。身よりはなく、島根県松江在の、オジサンという遠縁の農家に世話になり、とにかく曲りなりにも、高校だけは卒業した。

オジさんは、行く行くは、信吉を自分が所有している広大な山林の管理人に使うつもりで、信吉にむかって、

「一生、わしのとこにいろ」

という。飼い殺しである。でも、そんな人

生に甘んじたくはなかった。東京へ行こう。

行けば、なんとかなるだろう——。そう決心

して家を抜け出したのは、半月前のことだ。

だが、東京へ出ても、そう思い通りになんとかなりはしなかった。小遣いをためた七万円的全財産は、半月でなくなっていた。

まともな就職には、保証人がいる。広い東京に一人の知り合いもない信吉に、もとより保証人になってくれる人はいなかった。

仕方がない。保証人なんなくても、自分を正しく評価してくれる人と、めぐり合うためには、自身街頭へ立って「生命売ります」の奇抜なキャッチフレーズを掲げる以外に方法はないのだった。

「売値は、あたしに任せるわね」

みどりはもう一回、念を押し、

「ちょっと風変わりな仕事なんだけど、住み込みの、三食つき二万円どうかしら」

まあ相場だろうと、あたまで下げる信吉の前に、ビールと、うなぎのクシが運ばれてきた。

「じゃ、いいのね、べつにむづかしいことはありやしないわ。あたしの命令に、ただハイハイって従ってりゃいいのよ。ただし、だいいじなことがあるわ。あたしの命令は絶対神聖

よ。そむくことは許されないの。わかったかしら」

信吉はあがっていたため、気がつかなかったが、そのとき、みどりの片頬に、ふと惨忍な、ぞっとするような微笑が走った。

「じゃ、固めの盃の用意をするから、あんた目をつぶりなさい。あたしが、もういいよというまでみちゃだめ」

そのあと彼女は、ガラガラとサッシュの窓の格子をあけ、外へ手をつきだしたようだ。

そしてまた、着物のすそを直すようなサヤサヤという音もたしかにきいた。

「もういいよ」

といいながら、彼女は、目を開いた信吉の視線など眼中にないようすで、つとグラスを手にとり、着物のすそのかげにかくした。

外の雨は、まだ続いていた。室内には、換気扇のモーターの音が、かすかにひびいている。気のせいかな、雨の音にまじって、かすかな水の音みたいな物を、裾のかげで聞いた様だが、それが何の音だかはわからなかった。

「カンパイよ。あたしの命令。さ、のんでごらん」

無理にとらされたグラスには、茶いろの妙に濁った水が半分ほどゆれている。

「これなんだかわかる？ あたしのおしっこかもしれないよ。あんだ、のめる？」

信吉は、あっと思った。やっぱり着物の裾の水音はそうだったのか。不潔感に胸が一杯になり、グラスを叩きつけたくなった。

しかし、短気はソン気だ。おこっただめだ。

ハッキリわかることは、これを呑みくださなければ、就職口はフイになるという、重要なことであった。躊躇は許されない。

思いきって、コップを手にとり、目をつぶって一気に呑みくだした。

それは、思ったより、まずくもなければ、うまくもない。だが、みどりのいうことを考えると、軽い嘔吐感があったが、しかし、絶対に屈伏の条件付きの乾杯とあれば、これも仕事のうちだろう。信吉はこみあげてくる嘔吐を、懸命におさえるしかなかった。

「よしよし。いい子だわ、よくいつけが守れたね。じゃ、いまから信吉はあたしのボーイよ。仕事はそうつらくはないわ。すぐなれる、楽しい仕事よ」

みどりは、上きげんでしゃべり、「ねえボーヤ。さっき乾杯って、のみ干したものの、あれ、なんだかわかる？」

「……？」

「あたしのおしっこかもしれない、っていうも、あんだ、ちゃんとのんだわね。ほんとはおしっこじゃないのよ。いくらなんでも、こんなところでは、できるものじゃないわ。あれは、雨水よ」

「雨水？……」

「そうよ。あんだをためしたかったの。たいたいま、窓の外の軒からおちる雨水をコップにとったのだわ」

はかられた。でも、雨水とわかって、やや安心した。おしっこなんかのまされたら、いくらなんでも、就職は考え直さなければならぬ。

「どう？ おどろいた？ 実はね、あたし、あなたに、おしっこだとウソを言ったのにはわけがあるのよ。説明しようか？」

「なぜ、そんなウソをつくのですか？」

「どうしても、あなたが素直にのむかどうかをみる必要があったのよ、ごめんね」

みどりは、坐り直すと、信吉の顔をのぞきこんで、理由を語りはじめた。

「そのお顔じゃ、見当がついたわね。そう、お察しのとおりだわ。でも、おこっちゃだめよ。これには、わけがあるのよ。ねえ、ボー

ヤ、あたしを助けて」

みどりは、ビールのグラスを、グイグイ干しながら、信吉をおこらせまいとしてか、しゃべりはじめる。

「あたしねえ、病気なのよ。ううん、伝染病とか、タチのわるいものじゃないのよ。一種のゼイタク病」

むりにのまされたビールのアルコールが、酒に弱い信吉の胃に、ジワジワとしみこみ、床の間もみどりもグルグル廻って見える。

「私の病気と、あんだの仕事に、とても深い関係があるのよ。医者にも言われたわ。おしっこでも、平気でのむような雇い人を至急やといなさい、って」

(4)

美食と不摂生がたたって、みどりは糖尿病にやられていた。

病状は一進一退で、商売が客からのまされる酒も、てきめんに害となって現われる。いったん糖が多くなったら、絶対禁酒を命ぜられていた。

糖尿病の診断には、まず、本人の尿が調べられる。ふつうは、排出した尿に、検査紙片をひたして、変色具合を調べるのだが、みど

りのは、病氣の状態が複雑だとかで、医局に届けた尿の検査には三日を要した。

今日の状態が、三日もまたなければわからないのでは不安がつる。そんな悩みを親しい客に打ちあげたら、

「そんなの、わけないよ。誰かをアルバイトに雇って、まいにち、味をためさせるのさ。

糖尿は、甘くなるから、その場でわかる。どうだい、名案だろう」

冗談とはわかっていても、ワラにもすがりたい彼女は、誰か適当な人間がいまいかと、思った。

糖尿病患者の尿は、糖の排出のために、たしかに甘い味がすると言われている。

ひどい人は、道ばたにした放尿に、アリがたかり、その甘味を吸うという。みどりは、いちど、自分のものを味見してみようと思っただが、でも、いざとなると、グラスにとったそれをみただけで、不潔感が胸にくる。

だから、こんどこそと、思いきって、採りはするものの、それを、トイレにすてたことは、五回や六回ではきかない。

人間を検尿につかうというアイデアは、なんとなくおもしろそうなので、これも店の客の、大学の泌尿器科の先生に相談してみたら

「学問的には、ナンセンスだが、あんたの心が晴れるなら、ためしてごらん」と言われた。

「でも、わしが思うのには、出たてのヤツより、朝、はじめてでるぶんのほうが、前夜からのものだけに濃度も濃いいし、正確なものが得られるのではないかな」

医師は、みどりの相談を、ほんの座興と取ったらしい。一度は賛成しながらも、

「これは、医師としてのわしの意見じゃないんだよ。一種の世間話さ」

世間話でも、冗談でもかまわない。自分の病気を背負ってくれる人が……と思うところへ「生命売ります」と、信吉が現われたのはタイミングがよかった。ちょうど、店で使う雑役のボーイも入用だったので、積極的に、雇う気になったのである。

その夜から、信吉は、みどりのマンションに飼われる身になった。

マンションには、美代子が居候をしていたから、彼女は、先輩にあたるわけである。

美代子は、みどりの遠縁の娘であったが、血のつながりはない。

本職は、ファッションモデルだが、仕事は月に十五日もあればいいほうで、あとは遊び

になってしまふ。勿体ないので、みどりの店のレジ係をやっているのであった。

美代子は、はじめ信吉の同居には、抵抗を示した。

それは、自分の持病である夢遊病を、かくしたかったからである。

「あなたの言うこと、あべこべだわ、信吉はドレイよ。あなたが、夢遊病の発作で、いろいろやるでしょ。そのあと始末をさせるにはもってこいの人間だわ」

いくら発作だからって、キッチンのまん中を、トイレ代わりに使うようなひとの世話にあたしにはできないからと、つきはなすような一言は、みごとに、美代子の反対を封じてしまった。

だが、どうしたわけか、信吉が、ここで暮らすようになってからというもの、美代子の夢遊病は、また一段とひどくなったようである。

以前は、だいたい二十八日めぐらいにおこっていた発作が、このごろでは三日に一回。美代子は、そしらぬ顔をしていたが、二人のベッドをつなぐビニールパイプのことは、わかっていた。

そのパイプには、たしかに、二人にしか通

じないなにかがある。それが証拠には、深夜かなり高い水音をきくことがあるからだ。

だが、それが、何に使われているのかはわかっていない。

「信吉。このまえはじめて会ったときカンパイしたときの気持、忘れてないだろうね」
からかい半分に問いかけるみどりの声をぬすみ聞いて、好奇心は、ますます、つのるのである。

乾杯とは、なんのことかしら。

どうにも好奇心をおさえきれず、そつとアコーデオンカーテンのすきまからのぞいたときの異様なシーンが、美代子のひとみに灼きつけられた。

パイプから伝わったものが、信吉の手で、処理されてゆく、そのありさまをついに、みてしまったのだ。

美代子は思わず顔をおおったものだった。

はじめは、いやがった信吉だったが、正式に、みどりの雇人となってからは、平気で利き酒の役を買ってでるようになっていた。

それには、みどりの熱心な求めがあったのと、やはり、二万円のサラリーがものをいったらしい。

いまの信吉には、とにかく、寝るベッドと三度のぜいたくな食事が、みどりのもとを、離れ難いものにしてしまっているのである。

いくらドイレだからって、あんなひどいものを強要したりしてよいものだろうか。

でも、おこるどころか、楽しそうに、歓喜の笑いさえ浮かべる信吉の表情は、どうしたことだろうか。

無理に、のませたり、のませられることが、なぜ、楽しいのだろうか。

そのときから、美代子は、毎夜のように、夢遊病を装うことにきめた。

みどりが、トイレのお供に、信吉を使うのなら、先輩のあたしだって、使ってもよいはずだし、夜、寝ているときに、眠いのをがまんしてトイレへ起きるのはいやで仕方がないから、あたしだって、みどりのように、ベッドに横になったまま信吉に命じて、思い通りに使ってもよいはず——と美代子は、考えたのである。

それには、あらためて二人に交渉して、OKさせるより、夢遊病のフリをするのが、最もスマートで、二人を納得させるだろう。

どうやら美代子の計算は当たったらしく、いらい、夢遊病を装えば、どんな不作法も許

されるようになっていく。

ボードにしまっている、バーボン・ウイスキーをカラにしまおうが、みどりのベッドに寝てしまおうが、みどりが、とくべつ大切にしている高価な化粧品をじゃんじゃん使おうが、二人の目の前で、堂々とやってのければ、みどりは、大ていことに驚かず、「まあまあ、また発作をおこして仕方ないコだわねえ」

口では叱りながらも、目をつぶり、ときには、つくりもののイビキをかきながら室内をあるき廻る美代子を止めようもしないのは完全に、夢遊病と思いこんでいるためであるう。

たしかに、寝ている信吉の顔の上へ、うしろ向きに腰をおとしてやったら、反射的に、大口あけたのにはびっくりした。でも、そのときの、めくるめく奇妙な感情は、肌にしっかり灼きついたようだ。

あわてて、飛びのいたら、信吉の眼が、異様に光ったのは、美代子の夢遊病をニセモノと見破ったためであろうか。

考えてみれば、信吉は、美代子のニセ夢遊病をたしかに見破っているように思える。

みどりのように、ベッドの上段からたれ下

がったビニールパイプを、信吉にささえさせて、平然と、用をたすほどの度胸は、まだ美代子にはない。

しかし、こうして、ここに楽しくくらすためには、夢遊病を装うのが、最も良い方法のように思え、美代子は、いちど、信吉に、手ひどい打撃を与え、なにかの方法で、いやというほどの目に合わせて、口を封じてやろうと考えていた。

(5)

「あたしも、あんたを買うことにしたよ」

床に、両手両足をつかせ、ちょうど長イスみたいなスタイルにさせた信吉の、せなかにどっかと腰をおろして、美代子はいった。

みどりは、上客の一人と、三日間の予定で京都へ遊びにいらっている。実は、この三日間美代子も、雑誌社のグラビア写真撮影のしごとで、茨城県の大洗海岸へ出張の予定であった。

「ちょうどいいわ。あんたたち若い二人を置いていくのは気がかりだったけど、信吉が一人になるなら、あたしも安心して遊んでこられるわけね」

みどりはそういったが、大洗へ出かける当

日の朝になって、雑誌社の予定が変更になり美代子の出張は、一週間先に伸ばされてしまった。

「かまやしないよ。かえっていいチャンスじゃない。三日間、あたしが、みどりの代りにあんたを使ってやるわ」

美代子は、願ってもないチャンスとばかりに言う。

みどりが、旅に出た日の夜から、彼女はあたり前という表情で、二段ベッドの上段に横になり、そしてれいのパイプを使用した。みどりと信吉二人だけの秘密としてあったパイプの使いかたを、いつ知ったのか、美代子はちゃんと知っている。

「あたしは、糖尿病なんて、としよりくさい病気ではないから、いちいちツボへうけるなんて、めんどうなことはしないでいいよ」

美代子のアイデアどおりに処理すれば、だいいち、ツボのなかみをすてたり、洗ったりの手間が省けるじゃないと、サバサバというのである。

そして、いま、美代子は、室の中央に、信吉にイスを命じ、

「あんた、食べて、寝て二万円だってね。なら一日七百万円でわけだわ。ハイ、三日間二千

百円、百円はサービスしなさいね」
くちやくちゃの千円サツを二枚、信吉の目の前に投げ、

「さ、今夜あたり、お客さんがやってくるかもだわ。したく、したく」

そのお客さんとは、男性でもなければ、女性でもない。月にいっぺんの、女性特有の生理とおしえられ、信吉は、はっとした。

美代子が、そのブルーデリーの前後、ひとしおひどく夢遊病の発作におそわれることは知っている。みどりが在室のときなら、まだよかった。しかし、一対一の今夜あたりフラフラと夜中に、起きだして、室中荒らし回ったり、暴力をふるわれたら、どんなことになるだろう。

美代子が、ブルーデリーの直前に、残虐なまでの行動をおこすことは、よく知っているし、そんなとき、暴力の前にさらされるのは信吉なのだ。

だが、果して信吉の予感当たったようである。

「あたしは、お前を買ったんだよ。だから、買いぬしのあたしが何をしようと、文句をつけられる筋はないさ」

ヒラリと、信吉の背からおりた美代子は、

かたわらにおかれた、ロッキングチェアに、どしんと腰かけた。

ロッキングチェアは、脚の下に、内側に反った弓のような脚があり、このチェアに坐してからだを前後にゆすると、ゆりかごのようにゆれて、疲れ休めにはもってこいだ。

「さ、信吉、レッツゴー」

美代子の目が、八の字に開いた足のあいだにひざまずけと命じている。

まるで、催眠術をかけられたように、すんなり伸びた両の足のあいだに、吸いよせられた信吉は、眼の前に、異様なものをみて、アツと驚きの声をあげた。

思いがけなくも、木彫の鬼女の面がそこにあったからである。

ツノを生やし、カッと眼を開き、キバをむきだした朱ぬりの鬼女は、おそろしい形相で信吉をにらむ。

これは、みどりが、ひいきの客からもらった木彫の工芸品で、高名な彫刻家の作品であり、みつめると、鬼気が迫るようであった。

なんでも、これを彫った彫刻家自身が完成後あまりの物すごさに、アトリエに飾るのをためらったという話である。

みればみるほど、怖ろしい表情で、黄色い

キバや、銀いろのかみが、リアルであった。

気のよわい人なら、眼をそむけるだろうその鬼女の面を、なぜ、カベから外して、美代子は、身にまとったのだろうか。

美代子は、みどりや信吉が、こわがるこの面をひどく気に入っていた。

このアイデアを思いついたとき、これで信吉をおどかしたら、さぞ、気もちがスカッとするだろうと思った。

しかも、面のグロテスクなところが、よいじぶんのプロポーションを引きだてる筈と計算した。計算は、適中したようだ。その鬼女は、チェアのロッキングに調子を合わせて上に下にめまぐるしく動いている。信吉は、思わず息をのんだ。

「ハハ。ハハハ……」

美代子は、男みたいに、大声でわらい、いきなり、彼の首をワシづかみにつかみ、ぐいと引きよせ、チェアにこすりつける。

わけもない恐怖が、信吉の全身をつらぬいたのは、そのときであった。

「ああ、ねむくなった。あたしは、このままねるよ、お前は、徹夜でこの面を拝むのだ」

えらい力で、ジワジワと首を絞められ、呼吸がとまりそうになって、信吉は、あえぎに

あえいだ。呼吸の困難が続く。どうやら、美代子は、本ものの夢遊病の発作をおこしたらしい。発作には、全身の硬直がつきものである。とくに下肢には、ものすごい力が湧く。信吉は、ジワジワとおそってくるその力に、ともすれば絞められそうになる首を抜こうともがく。

ミミがキーンと鳴り、口の中に、血らしい苦いものが溢れそうになったのは、口の中を切ったのか、それとも、絞めてくるものを噛んだのか、わからない。……そして、信吉はついに、気を失った。

でも、ロッキングチェアは、美代子をのせたまま、ゆっくりゆっくり上下動をくり返していた。ロッキングにつれて、美代子のからだも上下に動き、そして信吉も、ぐったり伸びたからだを、しっかりとさみこまれたまま鬼女の面といっしょに、ゆっくりゆっくり上下していた。どこからかの出血は、やがて、信吉のほほを伝わり、床に流れる。二人のうちのどちらかが、かなりのケガをしているのだろうに、二人とも、別に、苦痛の表情をみせないのは、なぜだろうか。

そして、信吉と美代子は、めいめいそんな異様な格好で、朝を迎えることになるのである。

った。

(6)

「上林さんから、おみやげにもらったわ」

いつものように、十一時のカンバンまで店のフロントで愛想よく客の送り迎えをしていたみどりが、大きなフロシキ包みを抱えて、マンションにもどってきたのは、夜中の二時すぎであった。京都へ旅行した、十日後のことである。

信吉は、十一時のカンバンと同時に、まっすぐマンションに戻って、室の片づけをしななければならぬことになっていたし、美代子は、明日、三浦三崎と城島へのロケとかでもう、ベッドにもぐっていた。

上林というのは、クラブの上客で、いま流行の大人のおもちゃ、ピンクトイの卸会社の社長である。

金離れはよいし、遊びはきれいだし、友人をたくさんひっぱってくるし、言うところのない客であった。

「カミさんがねえ、これ使ってごらんって」みどりは、上林社長をカミさんとか、カミサマとペットネームで呼ぶ。

そのみやげというのは、鞭やら、クサリや

ら、ポータブルトイレという、女性用の携帯便器やら、ハンドチャックという名の、プラスチック製の手錠やら、これも女性用の乗馬グツ、流腸器から、サルグツワなど、いまその道で、流行の、SM器具の山であった。「これも、これも、これも。あら、どれもこれも、まるで、あたしと信吉にピッタリのものばかりじゃない！」

ボードから、愛用のスコッチのびんをとりだし、ストレートにあおるのは、いちばんきげんのよいときだし、そして酔ったあとは、きまって残酷になるのが、みどりのくせであった。

「さあ、信吉、両手を出してごらん」

プラスチックに、金の塗装をほどこした手錠をとりだし、信吉の前につきだす。SM玩具というのだが、こんなものをどうやって使うのかは、二人ともわかってはいない。

「とにかく、手を縛ってみようよ」

みどりはニヤニヤしながら言う。

手には手錠、足はクサリで巻かれ、ロープでグルグル巻きにされ、声をだせないようにきつくサルグツワを噛まされると、もう信吉は、反抗心を失い、完全に、生体家具みたいになってしまった。

「いいね、とてもいいカッコ」みどりは、スコッチをのむ手を休めようとせず、

「では、あたしも」

よろよろと立ちあがり、着ているものを、下着ものこさずかなぐりすてると、いきなり乗馬グツをはき、鞭をさぐりだすと、ピューと一閃、空を切った。

「カミさんがいったわ。クシャクシャしてるときは、この鞭で、男をたたくと、スカッとして、ヒスが治るって」

いきなり、横顔に、乗馬グツのつま先をあてられ、信吉は、ごろりと、ひっくり返された。

「信吉！ おまえ、このあいだ、あたしが、京都へ行ったあと、美代子と何をしたの」
「……」

問われても、あの流血さわぎのことは返事したくない。いや、返事をしたくても、サルグツワをはめられているので、声ひとつたてられないのだ。

「あたしねえ、帰ってきてから、なんだか様子がへんなので調べたわ。雑誌社へも問い合わせたわ。そうしたら、雑誌社の人が言ったわよ。八大洗ロケは中止でした。中岡美代子

さんは、当日、全然会社へは見えませんでした。念のため、管理人のナカさんにもそれとなく聞いてみたわ。そうしたら、ナカさんも△はつきりわからないが、三日間、お二人さんとも一歩も外出しなかったようで、三食とも、外から仕出しを取っていたようです。すゝって」

「……………」

「答えたくないのなら、答えなくてもいいのよ。からだに答えてもらうから。いいね」

いきなり、鞭を背中にあてられて信吉は、激しい痛みにうめいた。

この鞭は、よくしなう皮製だったから、まともに食らったら、まず皮膚が破れ、血が流れたすのはきまっている。鞭に添えられた説明書にも、

△この鞭は、ロマンティックな、SMムードを味わうために使ってください。力一杯叩いたり、男女を問わず、素肌をじかに叩くのは危険です。かならず衣服の上から間接に当てるよう注意してください。と、念を押してある。

しかし、正体をなくすほど酒に酔い、理性をうしなっていたいまのみどりに、そうした注意が届くわけがない。

「ええい、ドロボーネコみたいに、私のるすをねらって、美代子の便器にまでなりやがったんだね。恩しらず」

鞭の手ごたえが、よけいみどりをそそのかす結果となり、みどりは、口ぎたなくのしりながら、鞭の手を休めようとはしない。それどころか、

「この口がいけないんだ！」らんぼうにサルグツワをむしりとり、両手を信吉の口にかけて、くちびるを裂けんばかりにこじあけた。

「このブタやろう。美代子に、散々きたないものを食わされたんだろう」

そこで彼女は、激しい嘔吐におそわれた。深酒のために、胃のおくからこみあげた吐瀉物が、パツと信吉の顔いちめんひろがる。

そのときであった。

となりの室との境のアコーデオンカーテンがスルスルと音もなく開き、眼をひきつらせ髪をおどろにふりみだした美代子が、鬼女に負けない、おそろしい形相をのぞかせた。

下着まで、かなぐりすてた輝くばかりの裸身に、例の鬼女の面がキバをむいている異様なすがたであり、その顔には、はげしく発作を起こした表情がうかがわれる。

放心したように、みどりの顔の前にたった美代子は、突然みどりにおそいかかった。思いがけない攻撃にうろたえる彼女の手から、信吉を存分に叩いた鞭をもぎとり、ものものわすに、とってかえして、ハッシとみどりの顔を叩きつける。

あとはメチャクチャであった。

天星社刊

△限定版グラビア写真集△

在庫案内

山原清子「刺青の魅力を探ぐる」一部一〇〇〇円（送共）略号「美7」

◎刺青の女王の魅力を抉ぐり出し、その美しさを最高度に発揮した緊縛フォト結集版。

M写真集「女王様に飼育される日々」一部一〇五〇円（送共）略号「M特」

◎M男性が色々の女王様に奉仕し、飼育される生態のかずかずを網羅した写真資料。

◎以上の写真集は一般の書店にては一切販売しておりませんから、直接、大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号天星社に代金同封の上、お申込み下さるようお願いいたします。

「ギャッ」

ものすごい絶叫とともに、顔をおさえたまどりの手の指のあいだから、タラタラと、血しおが流れだしたのは、美代子が叩きつけた鞭が、その眼にでもあたって、深いキズを与えたのだろうか。

美代子は、無言で、血をながすみどりの顔を蹴りつけ、その場へ倒すと、身をひるがえして、うしろ向きに、のりかかった。

すべては、一瞬のできごとであった。

相かわらず、焦点の定まらない、うつろな瞳をしながら、しかし美代子の動作はスピーディーである。

そのままの姿勢で、うーんと力をいれたのは、そこを、トイレとまちがったためだろうか。

みどりは惨めであった。

とめどなくおそう美代子の攻勢を交わす余裕もなく、激しくせきこんだ。

みどりの嘔吐はまたいちだんと激しく、ゲーゲーとこみあげる吐瀉物は、のどまできては、美代子の足に押されて、ふたたび逆流し食道へ押しもどされ、その一部は、肺のほうへ流れこんだようである。

肺を病む患者が、ときとして喀血にみまわ

れ、吐瀉物がのどをふさいで、思わぬ、ちっ息という不幸なアクシデントにみまわれることが少なくないという。いまのみどりはその状態によく似ていた。

美代子の足で、力まかせにのどを踏まれながら、しかし、ひどい酔いのために、それを押しもどす体力はないらしく、ゼイゼイと、のどを鳴らしながら、しだいに、血の気を失ってゆく。

このままおいたら、彼女は絶息するしかないだろう。

みどりの、そうした危機を目の前にしながら、しかし信吉は全身をギリギリに縛られているため、からだの自由をうしない、ただ、むなしくもがくだけである。

ついに、ヒューツ、と胃の底から、身の毛のよだつような声をふりしぼると、みどりは息をとめた。

仮死の状態がながく続けば、やがて死にみまわれるだけだ。信吉は、なんとか、美代子をおさえようと、ただイモムシのようにごろごろところがり廻る。

そのさまをみた美代子は、ぐったりしたみどりを放りだし、身をひるがえして、信吉にとびかかった。

プツンと、鬼女の面を支える細紐が切断され、面はそのままタタミへころがった。

ずっしりと重い美代子のからだにつぶされて、信吉はあえぎにあえぐだけである。

たとえ縛られていなくとも、もはや、彼女をはねのけるだけの体力は、完全に失われていたようだった。

歯を食いしばり、重圧をこらえる信吉の、口中から、両眼から、ハナから耳から、ツツと、ほそい絹糸のような鮮血が流れはじめ、美代子のからだを赤く染めて、あたりににじむ。

もはや、信吉は、もがくこともできず、さながら死んだように、白い顔がのぞけるだけである。

しかし、美代子は、残忍な、それでいて、美しい顔に微笑をたたえながら信吉を許そうともしない。

タタミにころがった鬼女の面は相変わらずカッと眼を開き、口を裂けんばかりに大きくあけて、キバを現わし、ピンクのムードランプの光を満面にうけて、キラキラと、異様な光をあたりに放っていた。

セ ミ 体 験 記

魅 惑 の
. . . ブルーマー

田 中 央 人



SM生・画

「どうだい。二、三時間、私につき合ってくれるかい？」

タクシーの座席で、その少女は少しコケトリーを含んだ目で私をみながら、おさげあたまをこっくりさせた。

上六の手前で車をおりたのは夕方七時前。看板とネオンが『上町運動具店』とある店へ私は黙って入る。少しあわてて少女もついて入った。

ふり返ってすぐそばにあるその顔を明るく蛍光灯の下でみると、ついさっきまでプールではしゃいでいた様なほったの黒さ、全く化粧気のない顔、まつげ、まゆげ、うぶ気の濃い耳たぶ、そして白のブロードのブラウスとサージらしい紺のひだスカート。車の中できいた高等学校一年生以外の何者でもない少女だ。

店の奥に人の気配はなく、二階あたりでわずかにテレビのコマーシャルが聞こえて来る。

「今晚は」をくり返しかれた私にかわり、少女が階段の下から上をのぞき乍ら意外に明るい声で「おじゃまします」と声をはりあげると漸く誰か答えた気配。少女はおそらく、私がスポーツシャツでも買いに来たと思っていたと思う。

道頓堀の橋のらんかん両ひじついたまま川面をみていてまるで十分間も動か

ない少女に、「ついて来なさい。困った事なら相談にのろうよ」と、うしろをゆっくり歩いて話しかけ、橋のたもとでタクシーを止めてふりむいたら、小走りに車にかけ込んで来た。十五分程前迄は全く関わり合いなし。そのあと今まではんのわずかのとし互いに喋らない。

湯上りの匂いのする女店員に私は言った。

「この子に合うブルーマーを下さい」

「ちよっとおまち下さい」

店員は右手の白い小箱の壁一面に積み上げであるあたりへ行き、下から上へ、又下から上へ眼を走らせていたが、下の方のうすよごれた一つを、上の箱が倒れない様片手でおさえながらひっぱり出した。

中身はメリヤス地のそれだった。私にとって、ブルーマーはブロード地でなければならず、又、新品であってはならず、それは、褐色のはち切れそうなるふとももと、弾力あるお尻によって使いならされ、すりへり、色あせていなければならぬのだが……。

「それしかありませんか」

「今のところは……。もしよろしければご希望のものを予約させて戴きますが」

「いや、今これから要るのです」

まさしく今これから要るのです。そしてその他に使う機会は全くないのだった。

「困ったな。……このあたりには他に運動具

店はないのですか」

少女は私のうしろで、恐らくげんな顔でこのやりとりをきいている事だろう。

私のほとほと弱り果てたような演技に、女店員（彼女はこの家の娘の様であった）は、「あのう、もし古いのでよろしければ……」

と、やや気恥かしそうに言うのを聞き乍ら「ああ古いものでも結構なんです。助かります」

と私。

「でも、私が高校時代に使ってたもので、ぼろ寸前なんです、よろしければどうぞお使い下さい」

「そうですか、いや結構ですとも。すみませんがお願いしますようか」

娘は一階の店の奥の暗い方へ入り、ほどなく手に一枚のブルーマーを折りたたんで持って出て来た。

私は連れの少女に言った。

「折角だから君、そのかげでちょっとはいて合うかどうかみてみなさい」

不審気ながら、白のズック靴をぬぎ、靴の上に不安定に立ち、白いくつ下をそのまま少女はブルーマーに足を通し、スカートの中へ引きあげた。

「どうだ？」

「ええほんの少しだけ大きいようですけど」

五〇〇円札を店の娘に黙って手渡し、辞退

する彼女にかまわず、

「はいたままでいいよ、急ごう」

と出口へずんずん歩き、とびらの外で振り返ると、白いブラウス、セーラー服のスカート、白いくつ下、白いくつ、おさげの少女がそのスカートの中に、使い古したブルーマーをはいて小走りについて出てくる。

○

直径五米位、約三十人程で満員のハイボールスタンドのカウンターに坐り、私は安くもなく高くもない国産ウイスキーを舐め、少女は、自分で織ったらしい紙ひもの、あみ目の大きな手さげをひざに「カカオフィーズとチヨコレイトみたいでおいしいですけど、男の人ってどうしてこんなにがいビールなんかよくのむのかしら」なんて、話しかけてくる。そのうち、ふっと耳のそばへ顔をよせて、「向こうにすわってるおじさん、私の中学校の担任の先生が年とったみたい。ちょっとハンサムな感じでしょう。私、その先生にひいきしてもらってると云って、友達にひやかされたわ」

「へえー」

「このブルーマーのゴムちよっときついわ。……ねえ、カカオフィーズでよくまわるお酒のこと？」

「どんな感じなの？」

「ゴムのこと？ お酒のこと？」

「オシッコのことさ」

「いやア、どうして分かるのよ」

「お勘定！」

少女が次のことばを言う前に私は先に高い椅子を降り、少女の手さげを手にもった。

少女は、おこづかいが三千円もあれば、家に帰らずに静岡へ行った中学の同級生の所へ泊りに行くんだがなあと云った。

こんな少女に、どんな思いつめた事があったのか。今夜は家へ帰らないつもりなのか。時間がおそくなるにつれ、ふと心細げな感じのする首もと、まなざし。だが私は今、ここに少女が居って、ゴムのきついブルーマーと若干の酔いに上気している少女だけでよい。「さっきのおじさんに似てた中学の先生っていうのは、どうして印象が強いのか？」「さっきも言ったでしょう。ひいきしてもらったって、それと……」

「それと他にどうしたんだ」

「いやよ。あんなこと、よその人に言うの。」

ああ私、又ゴムの痛いこと思い出したわ

「恥ずかしい失敗とちがうの？」

「おじさんにかかったらもう何もかも先まわりされてるみたいで……。いいわ、何でも言っちゃう。しくじったのよ」

「どんなことを？」

「だから言ってるでしょう。ブルーマーのゴムの痛いのと、私の今の状態よ」

「オシッコのことか」

「もう、私いや。はずかしい」

「トイレのほかでやっちゃったの？」

「うん」

「どこで」

「運動場で」

「いつ」

「一学期の、それも最後の体操の時間が終わってね、みんな整列したのよ」

「どうしてそんなことになったの」

「暑かったから朝からよくお水のんだのね。」

それに午後の二時限目迄、気がついたら一度も行っていなかったの。でも授業中だし、バレーボールの練習してたら、急に先生が18人呼び出してクラス内の紅白試合するって言うでしょう。それで私かっこよく腕まくりしてブルーマーを上になぐってあげて、張り切ってたの。今更ちょっとなんて云えない具合になったのよ。我慢してただけど、レシーブでころんだ時、つまり回転レシーブよ、しまったと思ったわ。あわててとびおき乍らそっとブルーマーの裾をみたら黒っぽくなってたけど、他の人に分からない位だったから、時間一杯辛抱したわ」

私は自分の昂ぶる気持をもて余した。

「あのお、あのね、正直に言うわ。さっきも洩らしちゃったの」

「え？ どのぐらい？」

「脚に少し、つたつたわ」

「去年のバレーボールの時は？」

「さあ、たばこの箱位濡れてたかな。でも脚につたつたのは一すじか二すじで、そんなのはふともをこすり合わせてごま化したんだけどブルーマーは冷たくてちよっと変な気持ちだった。さっきはほんのちよっとよ。辛抱しながらだから余り濡れてないと思うんだけど靴下ちよっと見て」

「大分、濡れてるよ。靴の中に入ったら」

「おじさん、小説書く人とかがう。そんな人の感じがする。こんな事でもやっぱり小説に書く時はよく観察したりするんでしょね。もし私のこんな事で役に立つのなら、もうしくじったあとだし、あきらめムードで何でもするわ」

「スカートは濡れないか」

「あのね、女の子は椅子にすわる時、フワッとスカート開いて、お尻をじかにして坐るのよ。今つめたい感じ」

「それから？」

「そうねえ、恥かしいみたいで、秘密のお遊びしてるみたい」

「そして？」

「うまく云えないけど、ドキドキしてるみたいに感じて、ふとももの内がわが、足をくんだら、しめったままプリプリとして面白い感じよ」

私はまたも自分の気持が騒ぎ出すのを覚えた。しかも今度は、絶えず夢見ていた状況が具体性を帯びて湧き上ってきたのだ。

「この少女を引き倒して、暴れるのを抑えつけ、ブラウスを引き裂き、スカートを引き取り、そして目指す濡れたブルーマーやパンティを剥ぎとって……」

想念がそこまで進んだ時、そのブルーマーが私の顔を包みこんだように思えた。私はカッツと頭に血が昇った思いで、思わずその場にしゃがみこんだ。大地がクルクル廻る感じであった。

「どうしたのよおじさん、気分でも悪い？」
われに還った私の目の前には、心配そうに覗きこむ少女の顔があった。

○

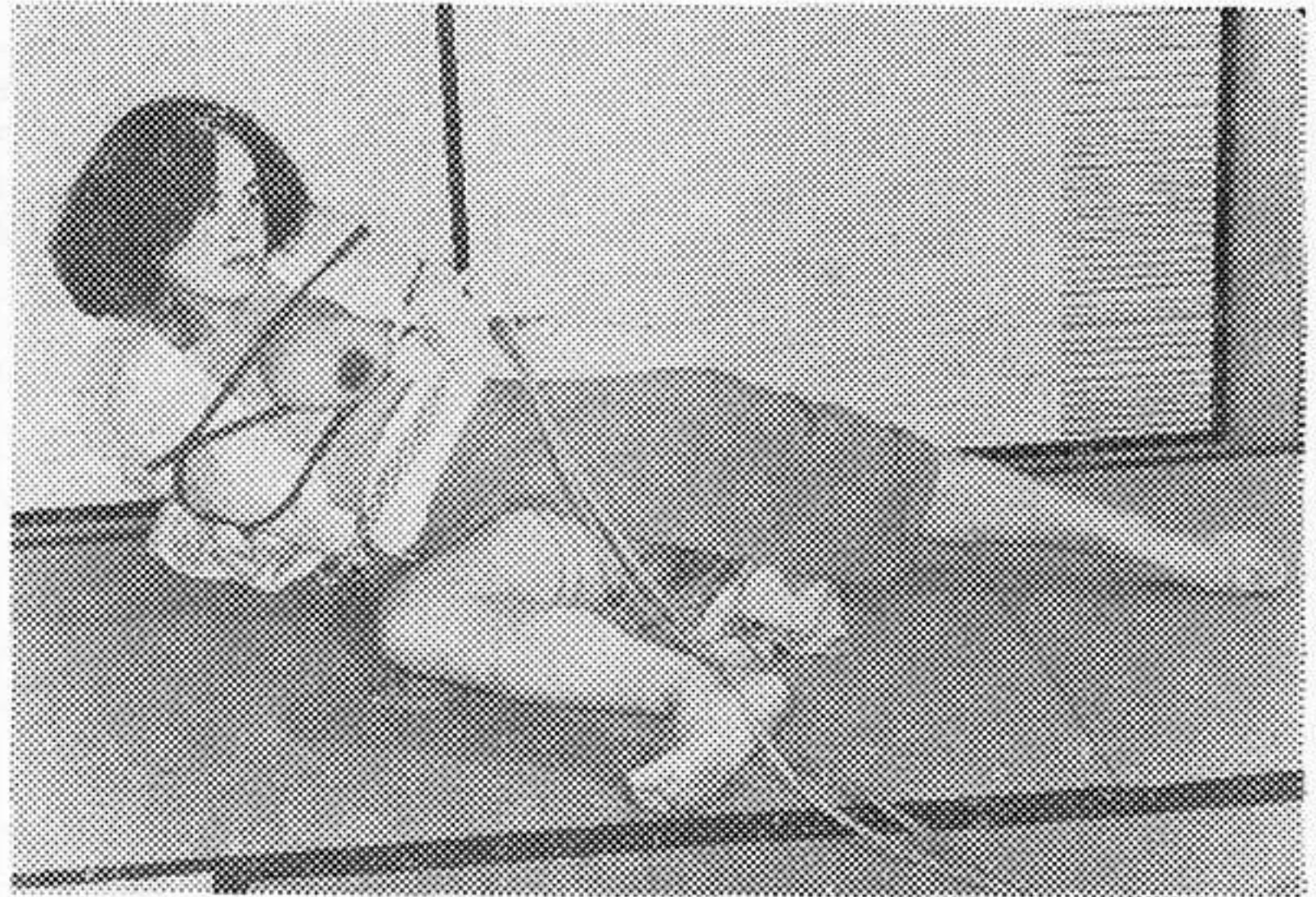
私は黙ったまま、たばこを半分ほど灰にすると、傍でじっと立ったまま私の様子を窺っていた少女に、千円札三枚を握らせた。そしてタクシーに手を挙げた。

「キミの自由だけれど、おじさんは、やはり家へ帰ったほうがいいと思う」

ポカンとした表情の少女を、タクシーに押し込むようにしながら私はいった。

走り出したタクシーの窓から、少女の手を振るのを見送って、私は当てもなく夜空の下を歩き出した。

(おわり)



今年になってから、私はカメラ・ルポの記事を数回掲載してもらったが、それに対する反響については大袈裟だが、読者からの批評の手紙の中で誌上に発表しなかったもののコピーを見せてもらった。

まあ、この程度の読者の支持があるのだから、毎月引続いて書くように、という編集部

カメラ・ルポ

M 女 の 生 態

塚 つか

本 もと

鉄 てつ

三 ぞう

の意図であると思うのだが、次に引用した文章のような投稿者のことを考えると、一つ頑張ってみようという気持ちも起きる。

——『……ところで、塚本氏のカメラルポは非常にエキサイトした。本誌には珍しく外人の金髪美女モデルを登場させたというのが心憎い。日本人とは違った体型、違った顔立。すべてが感覚的におニューで、すべてがセックスアップルそのものだった。白桃のよう

なずば抜けた肌、美しくウェーブしたブロンドの髪、きれいな中心のデルタ地帯。日本人等の羨望的であるプロポーション。一度でいいから、彼女みたいな白人美女を自由にし

てみたい。責めてもみたくいし、責められてもみたい。但し責められる方は、どうやら僕としては彼女の肉体に顔をはさまれたり、ボールのように巨大な乳房で圧せられたりといったむしろ女性上位のペッティング程度を希望するのであるが、これはチャンスがあれば是非共、世界親善のためにも実行してみたいものである。……』

そんなわけで今月も拙い筆ながら、寸暇を費してルポ記事を書き、読者の方々の御機嫌伺いをしたいと思うのだが、こうした文章を書くということは私にとって必ずしも楽しいこととは限らない。書く材料は沢山あるのだ

から、只それを纏めればよいじゃないかと編集長あたりから、よく言われるのだが、フィクションでないだけに、なんとなく心の底に抵抗といったものを感じるのだ。

さて、今回、参考に見せてもらった読者通信のコピー（勿論住所氏名の部分は抹消されていたが）の中で二通、注目すべき文章があった。その一通は、マゾ女性というものは、果たしてこの世に存在するのだろうか、という素朴な疑問を訴えた内容である。

『——本誌なんかには、よくマゾ女性のことを書いてありますが、自分はマゾ女性がいるということに疑問を持ちます。自分の周囲のどこを見回しても、それらしい女性が一人として見当たりません。それが何よりの証拠ではないかと思えます。——云々』

という文面である。こうした疑問を持つ読者の方も案外多いのではないかと思う。そして私も、一面、この方の抱いている疑問に対しては同感である。

たしかに、自分の知っている範囲の女性を見渡してみても、マゾのマも感じられない女性ばかりというのが実情である。

へこの世の中に、マゾ女性なんて居る筈はな

い。雑誌に出ているのは、すべてツクリモノに違いない！と、そう考えるのも至極当然のことだと思う。

ましてや、自分にSの気があって、「女を縛りたい、女を責めてみたい」と常日頃乞い願っている者にとっては、欲求不満の果、そういう極端な考えに立ち至ったとしても、無理からぬことであろう。

言われる通り、△マゾ▽の看板をぶらさげたり、△マゾ▽のバッジを胸につけて、街の中をうろうろしている女性は見当たらない。

しかし『叩けよさらば与えられん』という言葉がある通り、その気になりさえすれば、案外、手近かなところに青い鳥が囀っていることがあるのだから、世の中とは面白いものである。

嘗て、私は次のような経験をした。

私の家の近くに新興住宅街がある。以前は私鉄の駅の傍を旧街道が通っているだけの淋しい町並だったのが、一軒ばかり離れたところに住宅公団の団地が出来て以来、急速に発展して、駅前には、食堂、喫茶店、タクシー会社、スーパーマーケット、カメラ店、ボーリング場、電気器具、レコードを売る店などが目白押しに立ち並んだ。まるで田圃の中に西

部劇のセットが建ったような街である。

私は、この駅前をよく利用した。

車を駐車出来る空地が、いくらでもあったし、この駅から、大阪市内まで十数分で行ける便利さから待合わせにもよく使った。

駅前に△喫茶軽食▽と看板したクラウンという店があった。軽食といっても、カレーライスとオムライス、それにスパゲッティぐらいしか出来ない小さな喫茶だが、気のおけない店なので私は、ちょいちょい利用した。

その日——。

喫茶クラウンの電話をかりて取引先へ電話したところ、一週間ぐらひは余裕があると思っていた注文の仕様書を、今すぐ見せて欲しいという返事である。それで、私は飲みさしのコーヒーをテーブルの端へ寄せて、鞆から出した書類を一杯に拡げて未完成の部分を書き出した。

もう少しで書き終るといふ頃、ドヤドヤと七、八人のお客が入ってきた。狭い店なので忽ち卓が足りなくなる。私はあわてて書類を鞆の上に重ねて立ち上った。

そのとき、ママさんが近寄ってきて

「こちらで良ければ、お使いになって——」と調理室の傍にあるプライベートルームを

貸してくれた。そのお蔭で私は急ぎの仕事を済ますことが出来たのだが、そのとき、ママさんが、最近店の女の子の出入りが激しくて困る、田舎から連れてきた子も、二カ月か三カ月して慣れてくるとすぐ他所へ変わってしまうとこぼしていたので、私も写真のモデルになるような若い女の子を探しているのだが、中々適当なのがいないので弱っていると相槌を打っておいた。

「写真のモデルというと、ヌードなの？」

と、ママさんが急に興味を持って身を乗り出してきた。「いや、ヌードはヌードでも縛

りや責めだ」と返事したら、上品なママさんの目玉がでんぐり返って、びっくりしてしまふと思ったので、

「まあヌードもあるが主としてコスチュームなんだ。若し心当りがあつたら頼みますよ」余り期待もせず頼んでおいた。

それから一カ月程して、私が喫茶クラウンを訪れたとき、入るなりママさんが、私を店の片隅へ呼んで耳に口を寄せて囁いた。

「来たんですよ、来たんですよ」

私の上衣の袖を引っばって言う。私は何のことか、さっぱりわからないので「えッ？」

とあっけにとられていると、

「オッパイ小僧の妹が来たんですよ」

と、如何にも手柄顔に説明してくれる。

『オッパイ小僧』といえば、たしか、東郷青児が中村立行か誰か写真家と一緒にあって、素晴らしい日本一のボインで売り出したモデルである。あの洋梨をぶら下げたような凄いポリュームの乳房は印象に残っている。

ママさんの話によると、オッ

パイ小僧の正真正銘の妹が、この店のウェイトレスとして来ているというのである。

そして、ママさんの口ぶりによると、どうやら、彼女をモデルに使ってほしいという棚からボタ餅式の話である。

数日前、小雨のそぼ降る中を体格のよい若い女の子（十八才とかいった）が使ってほしいといって訪ねてきたのだそう。人手の足りない時だから早速、店を手伝って貰うことにしたのだが、何しろ着のみのまま傘どころかハンドバッグさえ持っていない。

ハンドバッグはママさんの古いのを一つ与えたそうだが、いつまでも店の二階に置いておくわけにもゆかないので、アパートを借りる権利金の足しにもと、この際モデルになつてはとすすめたところ、私は東京から来たオッパイ小僧の妹だと、名乗ったと言うのである。それでは、と渡りに舟と私にその話を持ってきたのだ。

早速逢ってみると、たしかにオッパイ小僧にそっくりで、よく似ているばかりか妹だけあって年も若くてピチピチしている。

大人しくて素直な性質のようなので、出来たら長く勤めて欲しいと思っている。差し当たり服装や身の廻り品は私の方で何とか都合



するから、モデルの方でアパートの権利金が稼げたら、落着いてくれるだろうと、ママさんは大変な肩の入れ様なのである。

そこで私は彼女を外へ呼び出して、モデルとしての報酬や内容について詳しい説明をしたのだが、彼女は私に対して何一つ質問することなく、一々納得して、こちらの条件をそのまま鵜呑みに承諾するのだった。

△縛り▽とか△責め▽について、誤解してはいけないと思って、出来るだけ具体的に話したけれど、彼女は別に驚いた風もなく、「はい、はい」と、素直にうなずいているばかりで、却って私の方が張り合いがないくらいだった。

さて、始めて縛りポーズの写真を撮る日。

大阪市内の郊外電車のターミナルにある割合わかりよいレストランを待ち合わせ場所に選んでおいた。彼女は遅番の日だったので午後六時までに店に出ればよいというわけで正午に落ち合い、それから簡単な食事を済ませてから、出かけようと、心づもりしていた。

約束の時間きっちりに私は行ったのだが、すでに彼女は来ていて、隅っここのテーブルにつつましく待っていた。卓の上に置いてあるコーヒーが空になっているところを見ると、

大分私を待っていたのかもしれない。私は気の毒になって言った。

「何か好きなものを注文して、先に食べて下さったら、よかったのに——」

「いいえ、私、食事はいいんです」

「そんなこと、おっしゃらずに、何か栄養のつくものをとられたら。私はビーフカツとサラダを貰いますが、貴女は？」

「私、少食なんです。それに肥りますから」

「御遠慮なさらなくともいいですよ。もし美容食がいいと云われるんなら、フルーツにサラダとミルクぐらいにされたら——」

至って控え目な彼女に、私の方から品名を挙げてすすめてみたが、一向に興味を示す風でもない。

待ち合わせて、食事を一緒にするときの女性に、いろいろの型がある。

遠慮してか、恥かしくてか、中々注文品を言わない女性があるかと思えば、席へ着くなり三品も四品も矢つぎ早やに注文した上で、「貴方は何にするの？」とくる女性もある。

中には待ち合わせの店を自分で指定しておいて私が約束の時間に行くと、すでに三十分も早くきていて、その店で一番高い料理を喰いちらかした挙句、ビールの三本も飲んで、

「ごめんね、私、朝御飯食べてこなかったものですから——」

というのなんかは待ち合わせを利用した計画的な行動のような気もするが、ほろ酔い機嫌の女を相手に、その女の食いちらかした食事より遙か見劣りのする品に箸をつけるのなんか、全くイカサナイこと夥しい。といって女と同じものを注文するのも業腹だし、なんといっても、先にその店で最上級の品を注文しているのだから、手がつけれない。

しかし、こんなときは、後の△責め▽は至ってスムーズにやれる。なにしろ、こちらには遠慮しないでもよいという心があるから、情容赦なくビシビシと縛り上げることが出来る。それに女の方は酔っぱらって、全身がぐにゃぐにゃに柔らかくなっているから、縄もよく締まるし、極端なポーズでも、た易くとれるというものである。

だが——、今日のように、食事もしないというのは、初めてのことだから、食事咽喉を通らない程緊張しているのか、それとも、本当に肥るから節食しているのか、或は単に遠慮しているのか、それはわからない。

単に遠慮しているのなら、私の方で勝手に注文したら、あとは、がばちょ、がばちょと

食べてくれるから、心配はいらないが。

彼女のために、サラダとサンドイッチ、それにミルクとミックスジュースを注文した。

私は、しげしげと彼女を観察した。

ぱっちりした大きな目。秀でた額。賢そうな顔つきであるが、その反面、外部からの侵入は何者も許さないという警戒心も伺える。背が高いので、そう目立たないが、肩、胸、胴と、相当な肉づきである。

洋服を剥いでヌードにしたら、どんなだろうかと、いつものことながら、私は胸がわくわくする思いだった。

私の口下手のせいもあるが、彼女は自分のことについて話したがらない風であった。「はい」とか「ええ」とか「いいえ」とかいふ返事は嫌味なく受け答えるのだが、自分から積極的に何も話さない。そのかわり、こちらに対しての質問も一切、口に出さない。

休みなく喋りまくる饒舌も、時には困るが、こう無口でも肩が凝って弱る。

で、そうそうに食事をすませて、行きつけのホテルの一室に落ち着いた。

脱いでゆく彼女の洋服や下着は年頃の水女としては至って粗末なものであった。化粧品とて何一つ持っていない有様で、ただ、はちきれそうな若さに溢れる肉体だけが輝いていた。

ママさんから借りたというハンドバッグが彼女の唯一の持物だが、その中身と云うたって、ハンカチとチリガミぐらいではなからうかと想像される。

今日、私の与えるモデル料。それは今の彼女にとっては、大きなウェイトを占めるものになるのかもしれない。

そんなことを考えると、私の縄を持つ手もなんとなく、しめり勝ちになる。

だが、彼女は――

私の合図で最後の一枚も脱ぎ捨てた。

私の目に飛び込んできたのは、素晴らしいボリュウムにはち切れそうな女体だった。

予想にたがわぬ二つのポインが、小山のように盛り上って目の前にあった。私はオッパイ小僧の乳房は写真で見ただけだが、この妹の方が遙かに立派のように思えた。

乳房ばかりでなく、噴火口のように窪んだ臍窩は皮下脂肪の並々ならぬ厚さを示していたし、臀部には笑窪が可愛く、いくつも、ほえみかけていた。

全く観念してしまったのか、私がじろじろと眺めまわしても、恥かしがる風もなく、両手をだらりと左右に垂らしたまま棒立ちになっていた。むしろ、若い肉体を誇らしげに晒しているといった風でさえある。

私は両腕を背後に捻じ上げて両手首に縄を掛けていった。むっとする若い女特有のむせかえるような体臭が私の鼻をつく。

両手首を縛り終った縄を更に二の腕から豊胸へと伸ばしていったが、彼女は乳房の上を通る縄にチラッと眼を移しただけで、初めて



裸身を縛られことに、さして驚く風もなかった。私は縄をはじき返すような弾力性のある肌に抵抗するように力いっぱい縄を締めつけていった。

それから――

私は無我夢中で、じつとりと汗ばむ彼女の全身に縄を掛けていった。

股間縛りにもした。開股縛りにもした。

この無表情な物体に、人間の、いや若い女性としての、ナマナましい表情を出させようと、懸命に縄を片手に活躍した。と、自分ではそう思った。

だが、彼女は、自分の置かれた運命に諦観したのか。

或は報酬を得るために、自分の身体を異性の為すがままに任せているのか。

若しくは、縄にて縛られることなんか、平気の平左なのか。過去に於いて、もっともつとひどい境遇にあったというのか。

それとも、縛られることが好きなのだが、表情に出すことを押し殺しているのか。

彼女は相変わらず不平一言いうでもなく、ましてや、嫌な顔一つ見せず、私のするがままに縛られ、言われるままにポーズをとってカメラの前にその見事な全裸を晒した。

やっと撮影が終った。

私が約束のモデル料を手渡すと、彼女は初めてニッコリ微笑んだ。

「次のお仕事は、いつですの？」

すがりつくような必死の目^{まな}ざしで、私を見るのであった。

その翌日。

私はハクラウンVを訪ねてみた。

ママさんは私に走り寄ってきて言った。

「あの子、帰ってきて、大変喜んでますの。

あんなことで、お金になるんなら、毎日でも行きたいですって。これからも、よろしくお頼みしますわ」

ママさんは、仕事の内容を聞いていないらしい。私は適当に言葉を濁しながら、内心、ほっとした気持で店を出た。

それから、私は三日にあげず彼女を呼び出して、ポリウムのある肉体を縛った。

二回目、三回目、四回目。

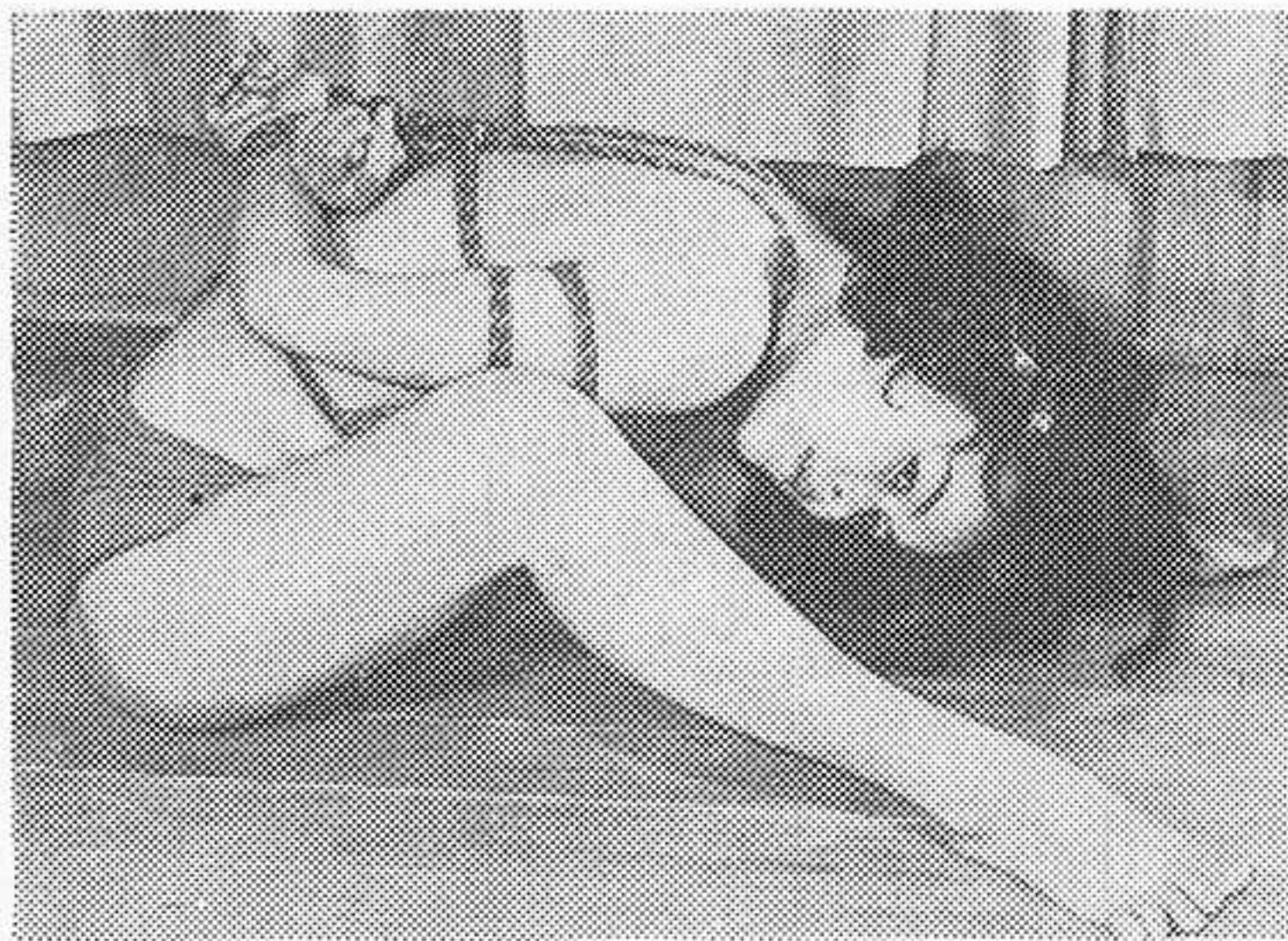
極端なポーズをとらしても、彼女は平気だった。麻縄が肌に喰い込んで赤い縄跡をつけても、嫌な顔さえしなかった。肘が畳にすれて皮膚が破れて血がにじんでも痛がらなかった。

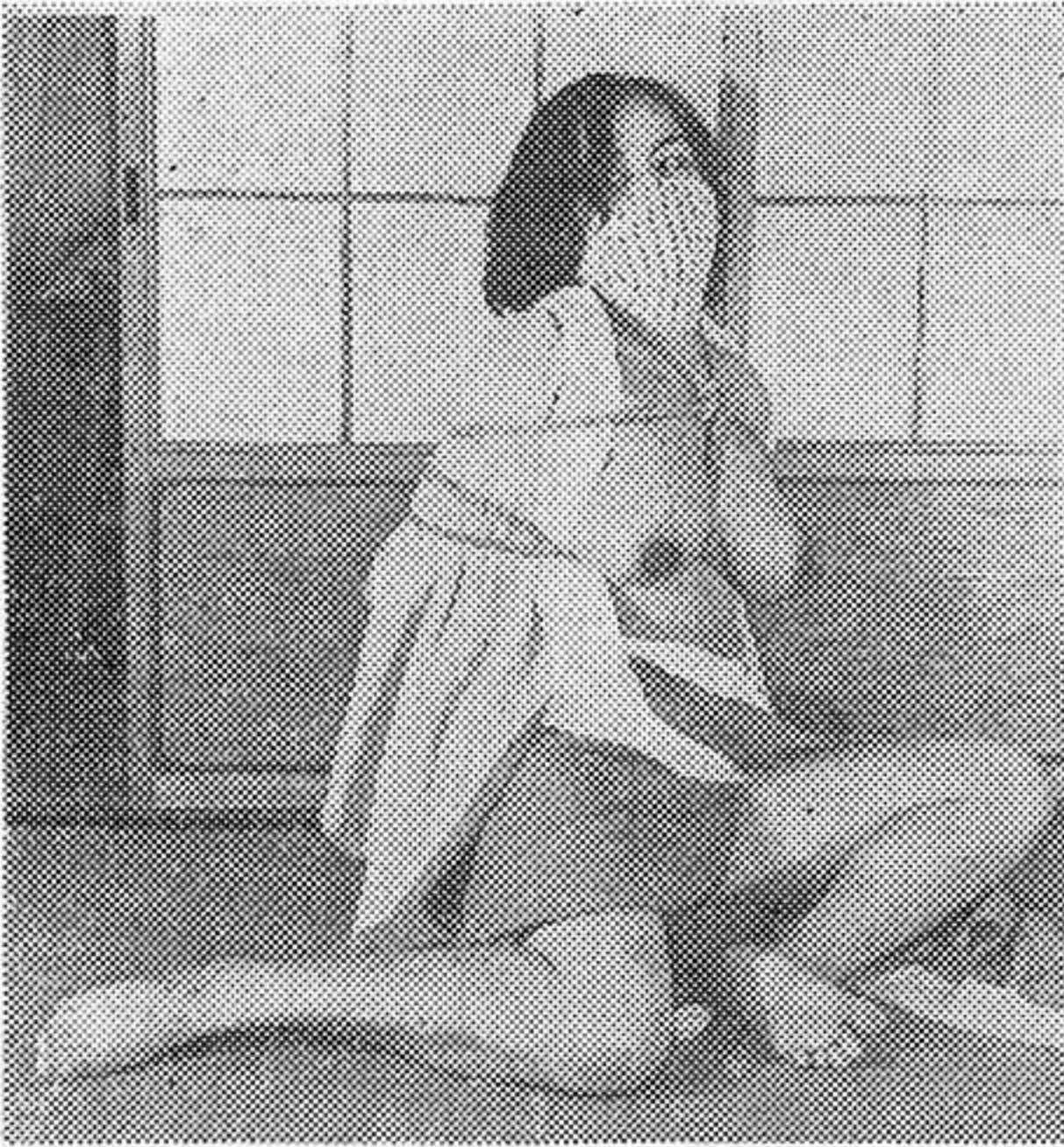
五回目、六回目。

縄や縛りに無表情だった彼女の顔に、かくしきれぬ喜悦の表情が洩れはじめた。

それよりも、彼女の肉体の変化が、縛りに対して並々ならぬ執着を示しているのを如実に私の目に知らしていた。

時折り逢うクラウンのママは、何か今まで打ちしおれていたような彼女が、最近はずっとうとしてきて笑顔さえ見せるようになったと喜





んでいた。貯金も大分出来たそうだから、近
い中にアパートが借りれるだろうと、自分の
ことのように浮々と言っていたのだが、私に
は、そんなことより従順過ぎるくらい従順な
彼女の肉体に、縄で以って挑戦してみたい気
の方が強かった。彼女よりも彼女の肉体の方
にひかれているといつてよいかもしれない。
私は次第に縄に馴れてきたというか、縛り
そのものに、没入してくるような気配を見せ
る彼女に強い魅力を感じながら、その反面、
はじめから羞恥心が余り顕著でないことに、

いささか不満を感じていた。

全裸の女体を思いのままに縛らせ、そして
だんだん縛られることに興味を持つようにな
ってきたのだから、緊縛モデルとしては、そ
れで十分ではないか、と言われるだろう。

だが『望蜀』と言われるかもしれないが若
し彼女がマゾ女性だとしたら、思わず取り乱
して、こらえ切れない衝動に慟哭するような
場面をこの手で誘発させてやろうと期待した
のであった。

もっとも、私はマゾ女性ですVと、勇敢
に名乗ってきた女性の中でも、関谷
富佐子さんのように、鞭打ちに対し
て限りなく燃えあがる人もあれば、
中河恵子さんのように、縛られた自
分の肉体が、あられもなくカメラの
前に晒されることに無上の歓喜を味
わう人もある。木村洋子さんなんか
は、露出症的な興味に加えて、異性
に強要されて足の指をはじめとした
肉体を舐めさせられることに依って
激しい興奮を示した。

例えば、男性が食べ残した菓子を
足の指の間に挟んで無理に食べさせ
ることによって単に縛られただけで

は味わうことの出来ない身ぶるいするような
M的な愉悅を覚えた、木村洋子が告白した
ことがある。

しかし、そういった女性の心の中の微妙な
動きに至るまで告白させるには、余程その女
性と親しくならなくては駄目だし、その時の
ムード作りも必要であろう。

八回目、九回目、十回目。

その頃になると、もうどのような、あられ
もないポーズをとらしても、平気な女になっ
てしまっていた。力の限り厳しく縛り上げて
放置しておいても、一向にたじろがないタフ
な女に変わり果てていた。

これがマゾ女性というものか。

私は憑かれたように、これでもか、これでもかと強烈な縛りを敢行した。いや、むしろ
情性でやっていたとしか思えない。

囚衣を着せて戸外を引き回したこともあつた。このときは、数人の男たちに、ばったりと出逢って私の方は驚いたが、彼女の方は、ただ黙々と歩いていただけで顔色一つ変えないでいた。襟に番号の書いた白い布切れをつけた囚衣姿で後手に縛られた女が、林の中から現れたのだから、あの男たちもさぞ驚いたことだろうと思う。

後手に縛って松の木に高々と吊り下げたことがあった。一本縄だったので縄を中心にして、吊った身体がくるくると廻るため、シャッターチャンスが中々掴めなくて、長い間、吊りっぱなしにしておいたが、彼女は必死に苦痛に耐えて中々降ろしてくれとは言わなかった。もし仮りに彼女の体重があればともなかつたら、私はきつと逆さ吊りを敢行していたことだろう。

十一回目。

この時、私は編集部から八流腸フォトVを撮ってほしいという注文を受けた。

大体、普通の場合、若い女性ではVよりもAに対して、より強い羞恥心を示すというところは、今までの経験でよくわかっていた。だが、彼女は、その何れに対しても特別にきわだった反応がないので（もっとも、主として視覚面からだけであつたが）、私は不感症じゃないかと考えていた。

だから、その日も無造作に、黒い嘴管のついたゴム管を附属品とした一〇〇CCCのイルリガートル。エネマシリンジ。それにイチジク流腸数個。ガラス製の流腸器は二〇CCCと五〇CCC、それに一〇〇CCCの三種類を準備していったのだが、特別に何らかの期待を

持っていたわけではない。

また流腸の道具が揃っているからといって私が流腸とか流腸責めに関心を持っているかと思うかもしれないが、それも当たってはいない。いずれも偶然、目についたから買ったに過ぎない。

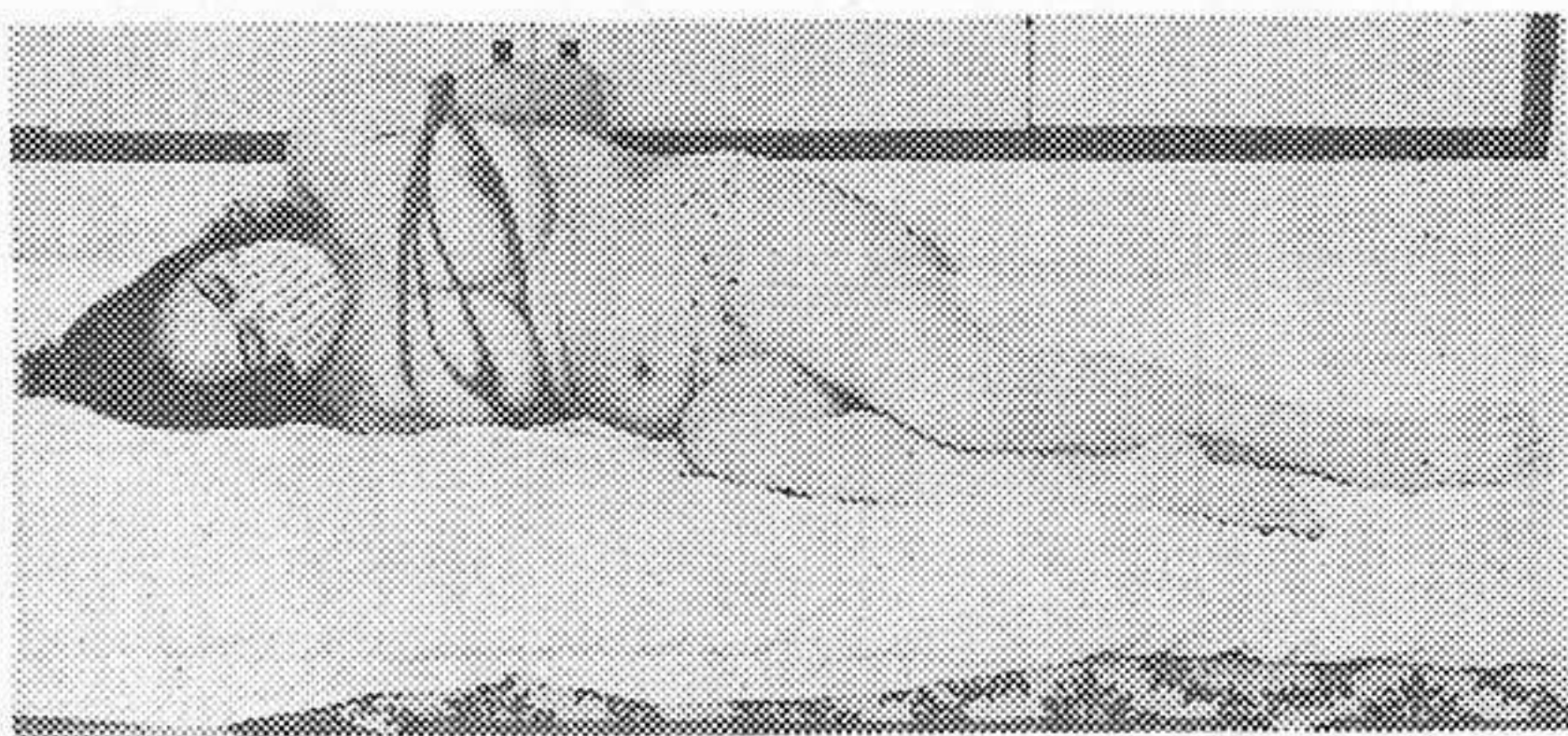
道修町の裏通りを歩いていたら倉庫の入口で木箱の中からイルリガートルを取り出している一人の店員が目についた。

「それは売ってくれるのか」

と尋ねたら「御入用だったら売ります」と言う。附属品一式について五六〇円というのは卸売り並みか大変安かったと思う。

エネマシリンジは、松坂屋の薬品売場の陳列棚に並んでいた。導尿用のブージーや腔開孔器のクスコなんかと一緒に買った。

一〇〇CCCの馬鹿でかいガラス製流腸器は天王寺駅前にある薬局のウィンドーに飾ってあるのをみつけた。女店員に出して貰って、その素晴らしい大きさに



感心していると、白衣を着た主人らしい女性

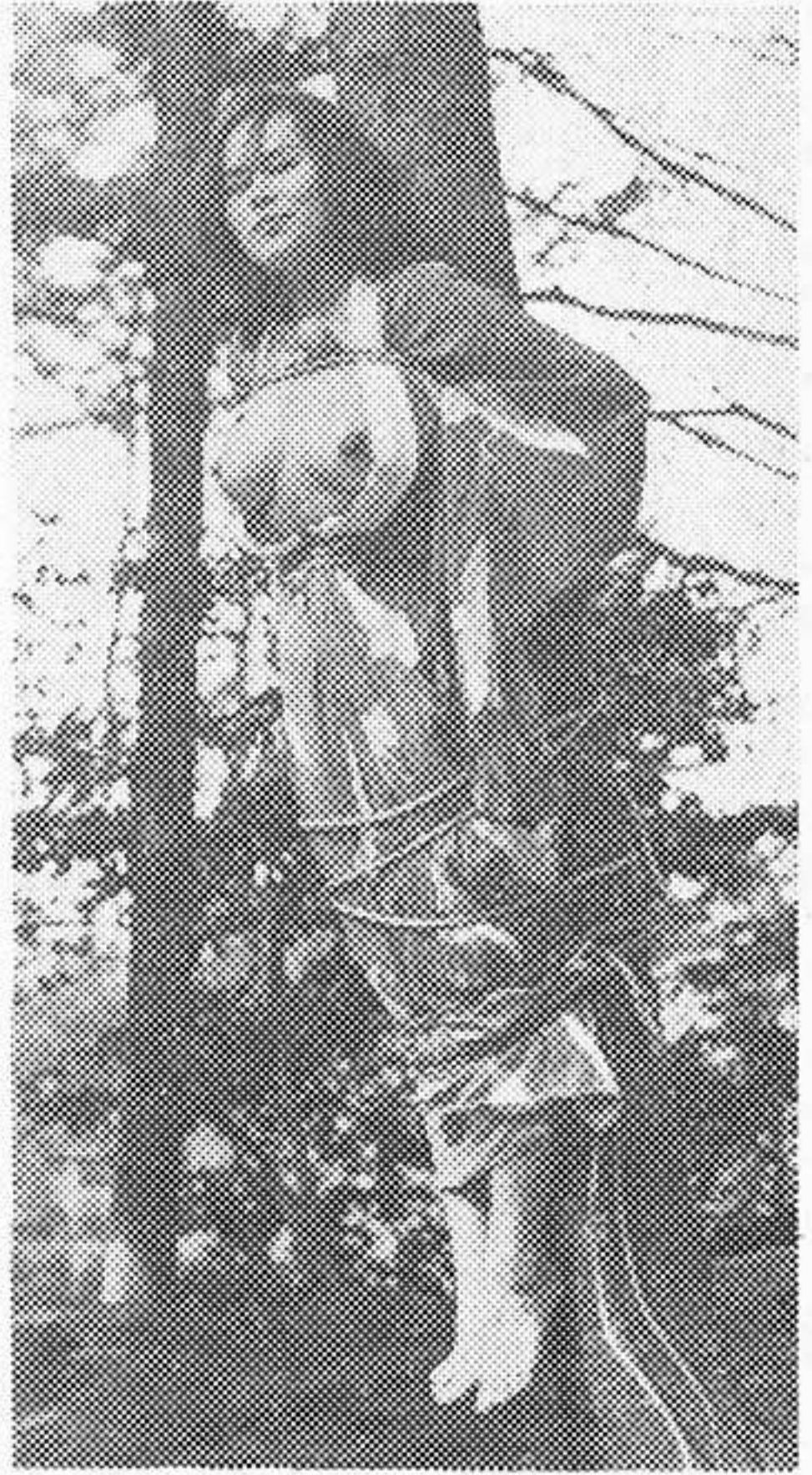
が、「家庭用としては、それは大き過ぎます。これなんか、適当ではないでしょうか」

と言って、二〇CCCの可愛い流腸器を出してくれた。私は、この薬局で流腸器二本とイルリガートル一個を買い求めた。

さて、その日――。

私は彼女を後手に縛り上げて膝立ての前屈みのポーズをとらして、お尻を高々と突き出させた。テールの上でそんなポーズをとらしたので、無防備にさらけ出された見事な臀部が私の目の前にあった。

私がイルリガートルに石鹼水をなみなみと満たしてそのゴム管の水止めを掴んで嘴管を近づけたとき、今まで一言も声を出さず無表情だった彼女の口から、はじめて真に迫った言葉が吐き出された。



「ああ、やめて！　お願い。それだけは、やめて、お願い！」

彼女の顔は、一瞬、朱がさしたように真赤になった。緊張した身体の線がくずれると、テーブルに額で支えていたのが支えきれず、頬をつけてしまったので、突き出した臀部が一層あらわになった。

全く健康的な非の打ちどころのない見事な菊花であった。

哀願の言葉も、今や次第に許容に代った。「わたし、それには弱いんです。とても、耐えられそうに、ありませんわ」

黒光りする悪魔のような浣腸器の嘴管は、自分の使命を忠実に果たすべく活躍した。

両膝で全身を支えているのが、やっとという有様なので、私は矢つぎ早やにシャッターを切った。

それが合図のように、彼女の体はどさりと横倒しになり、太腿のあたりの筋肉をびくびく痙攣させている。投げ出した足の指がくの字に曲っているのは、必死になって便意を耐えているのだろうか。

彼女はしきりにトイレへ行かせて呉れとせがんだ。しかし、私は嘴管の水止めを握ったまま放さなかった。

テーブルの上へ仰向けに寝かしたままでの排便の光景は具さにフィルムに印せられた。そんなことがあってから、私は彼女に対し

一〇〇CCの石

鹼溶液を満たしたイルリガートルの水面が、徐々に下降を辿るに従って彼女の取り乱しうは容易ならぬものがあつた。すべすべとしていた肌に、みるみるトリ肌が立った。もう

ては浣腸とA責めに集中した。

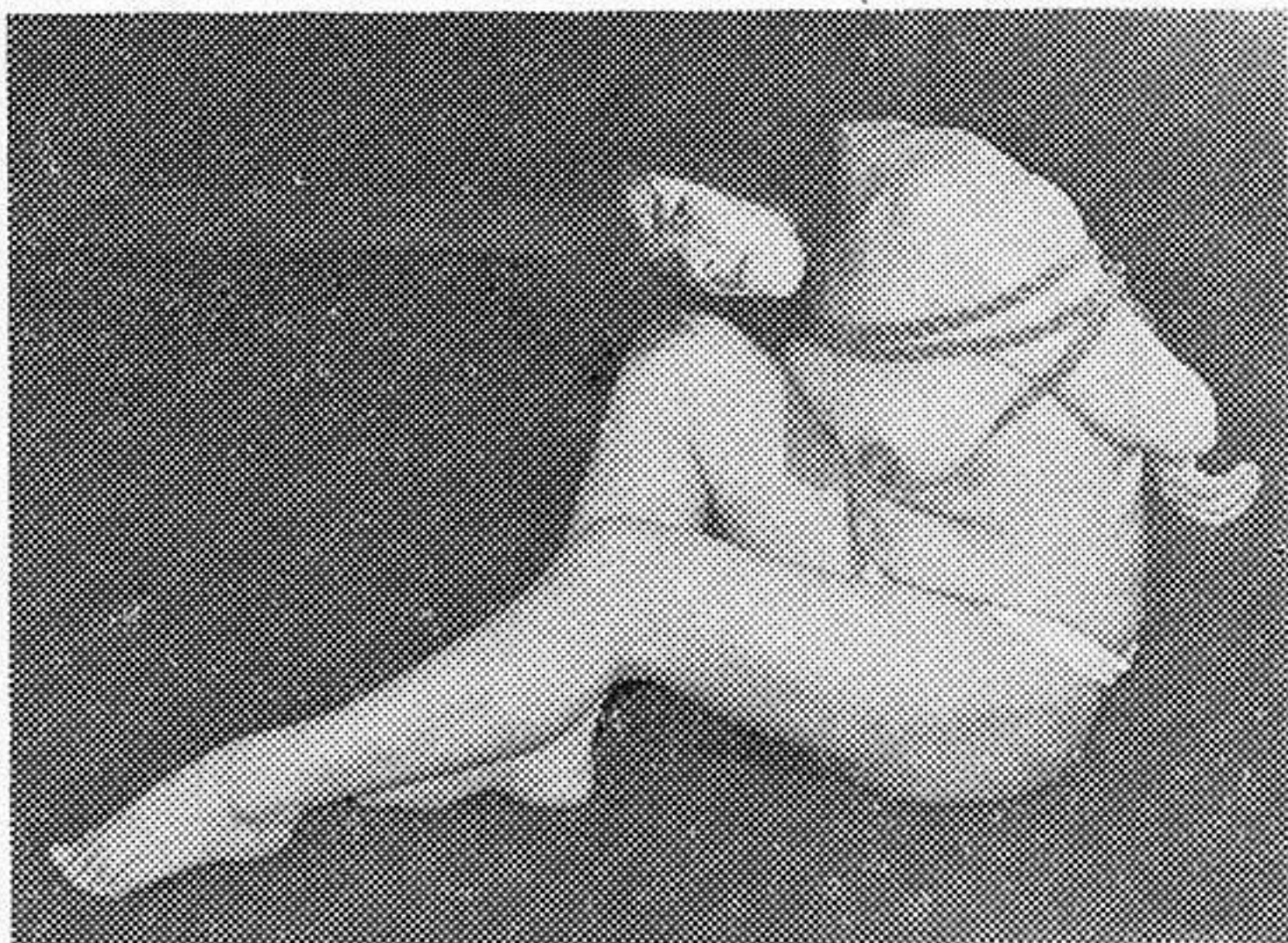
風呂場でイルリガートルの温湯を八〇〇CC近くも注いだこともある。漏斗を利用したのは彼女の希望だったが、お尻を上向きにするポーズのため、腹部を圧迫して苦しく、予想した程注入出来なかった。

蒲団の上に横臥させてエネマシリンジで空気を圧注したときは、まるでタイヤに空気を入れるようで、ドンドンやっていると、下腹がまるで妊婦の腹のように膨らんできた。

空気を入れるのは容易だったが、これを外へ排出するのは大変だった。というのは、放屁のときと同じ音が、連続して出るものだから、二人して腹を抱えて大笑いした。もともと、後になって、音をさせずに空気を排出させる方法を考案したことはしたが。

『浣腸』と『A責め』という羞恥責めをやり始めてからは、彼女は私の前では、完全にM女性に変貌していった。しかし、店でウェイトレスをしているときの彼女は、大人しくって無口で、そんな片鱗さえ見せないでいた。

若し、私が喫茶店で働いている彼女だけを見たとしたら、／＼ああ、この世の中にM女性なんて果たして、いるのだろうか／＼という慨嘆を、きつくりかえしていたことだろう。



しかし、私が彼女の変貌に有頂点になっている時、彼女は忽然と、私たちの前から姿を消してしまったのである。私は、そのときのいきさつをママさんから聞いて、何とも割り切れぬ思いに、未だに釈然としないでいる。彼女を知ってから、半年も経った頃だろうか。例の通り、私がふらりとクラウンを訪ねたら、慌てて走り寄ってきたママさんが、す

がりつくようにして言うのだった。

「あの子が、おとといからいなくなったの。」

ねえ、あんた、探して下さいよ」

「あの子がいなくなったって？ まあ落ち着いて、事情を話してごらんさい」

「無一文で出ていったのよ。夕方、服もお金もとられて。私、おこらなければ——」

四離滅裂なことを、とりとめもなく喋るママに、私は先ずコーヒを注文した。

興奮するママさんをなだめすかして聞き出したその事情は——。

四日前のこと。今まで一回だって外泊したことのない彼女が、急にその夜帰ってこないで、不思議に思っていたところ、翌朝十時頃、彼女から電話がかかってきて「お金と洋服を持って迎えにきて、お願い。私、下着のままで帰れないの」

と泣き声で言うので、ママさんが慌てて言われたホテルへ駆けつけてみると、昨夜一緒に泊まった男が彼女の虎の子のハンドバッグ（ママさんが与えたもので彼女の全財産が入っていた）を持ったまま、彼女が寝ている間に逃げてしまったというのである。

それに、行きがけの駄賃とばかり、新調したばかりのスーツも盗み、ホテル代も払わず

にドロンしてしまったのだ。

「今まで貯めたお金をすっかり盗まれてしまった、あの子もショックだったと思うんだけど、私も頭にきてしまって、思わず口汚く怒鳴りつけてしまったんです」

ママさんは涙ぐんで目頭を押えている。

「貴女って、大馬鹿の頓馬ね。お金を入れたバッグを放り出しておくんて——」

罵倒しても彼女は一言の口答えもせず、黙って二階へ上っていったのだが、それから暫くして、しょんぼりと裏口から出てゆく後姿を朋輩の女店員が見ているのである。

金も持っていない、着のみ着のままの若い女が、三日間も一体どこへ行っているのだろうか。どうせ遠くへは行っていないだろうから、私に心当りを探してくれというのであるが、私にもさっぱり見当がつかない。

私は、純情で世間知らずの彼女が、悪らつな男に騙されて、虎の子の金と洋服を奪われた上、頼りにしていたママさんに叱りつけられた、その時の彼女の心情を思うと、胸を針先で突かれたように切なく思った。

特別に心当たりがあるわけではなかったがママさんに頼まれるまでもなく、私も何とかして彼女を探し出したいと思った。

金を持っていないとなれば、近くの住込みで働ける店をしらみつぶしに探してみるより仕方がない。

それから一週間ばかり、私は暇を見ては、クラウンから歩いて行ける範囲内の喫茶店、スタンド、スナック、小料理屋など、それも住込みで働けそうな所を探しまわった。

新開地のこととて、該当する店は多くはなかったが、そんな努力も徒労であった。電話でも掛かってこないかと淡い期待を心頼みにしたが、それも無駄であった。

あとで他のウェイトレスに聞いたところに依ると、彼女が失踪する前に三回ばかり若い男が客として訪れ、親しうに話していたが彼女がいなくなってから、その男もぱったりと来ないということであった。

もしかしたら暴力団なんかに誘拐されて売られたのかもしれないと考えた私は、それから暇を見ては足を伸ばして大阪市内の盛り場殊に、釜ヶ崎や飛田周辺のゴミゴミとした飲屋街をうろついて、もしや彼女が働かされていないかと探しまわった。万一のことを考えて、或る程度のまとまった金を懐中にして、ドヤ街の路地裏の奥まで足を伸ばした。売春婦やポン引きオカマなどのたむろする通称地

獄谷にまで探りをいれたが、何の手掛かりも掴むことが出来なかった。

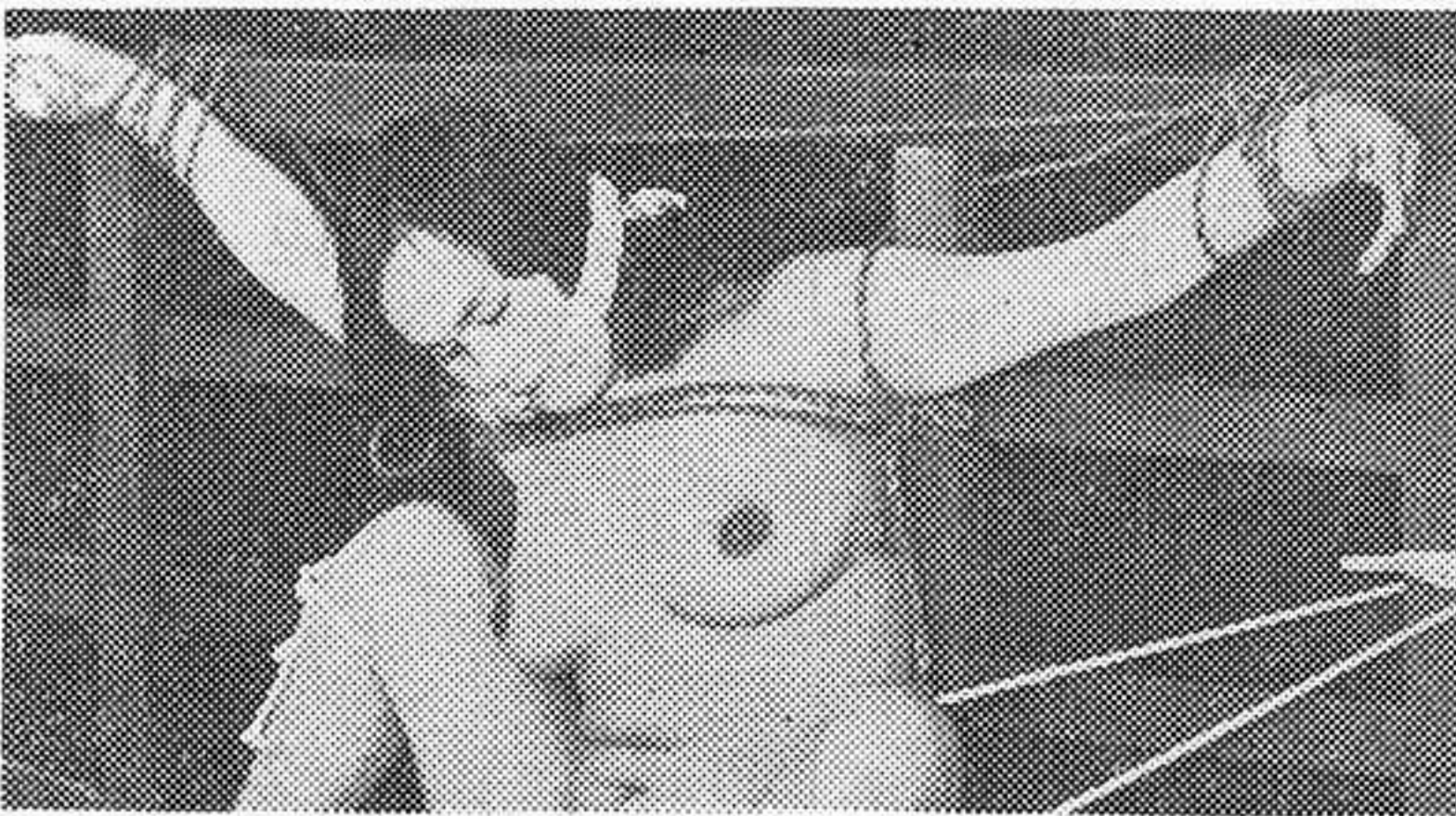
喫茶店でウェイトレスをしていて、いつでも呼び出せた時は、そうは思わなかったが、いざいなくなってみると彼女のM性が惜しく思われてならなかった。

あれから、どのくらいの年月が経っただろうか。その後、杳として彼女の消息はない。

ただ私の手元には、数百枚に達する彼女の緊縛フオトのネガが、徒らに焼付けされることなく、未整理のまま放置されていた。

彼女が果してマゾ女性であったのか、なかったのか、それは私にはわからない。

ただ、縛られて浣腸されたときの彼女の取り乱し方はいくらもなかったし、その時の喜悦に満ちた表情や肉体の変化があ



りありと、今でも残映となって目の中に浮かび上ってくる。

何一つ不服を言うことなく縛らせる女性をマゾと言うのであったら、たしかに彼女はマゾ性を持っていたと見てよいだろう。だが、私は、その点について、何となく齒切れの悪い思いを拭いきれないでいる。

両手をひろげて私を迎え入れてくれる温い態度を示す彼女でありながら、いざその時になつて極めて淡泊なのは、年がまだ若いからか、或は過去に大きなショックを受けるほどの事件にあっているのか、彼女が何も喋らないので、私にはわからなかった。

行先不明になった彼女、若し本当に困っていたら、私の連絡場所の電話番号を知らせてあるのだから、電話ぐらいしてきてもよさそうに考えるのだが、電話することすら出来ない境遇にいるのだろうか。

今はただ、彼女が幸福に暮らしていることを心から願う

ばかりである。若し、この文章を読む機会があったら、編集部気付でよいから、便りを寄せて欲しい。勿論、前に知らした電話番号で連絡してくれても構わない。クラウンのママさんも、貴女のこととは大変心配しているのだから。

次に読者からの、もう一通の手紙――。

それは編集部から「君がもし紹介してやる人があれば考えてあげてほしい」といって転送してきたものである。

『拝啓、御誌益々の発展に心からお喜び申し上げます。暑さに眠れぬ夜のひと時に書いてみました拙稿同封致します。手を加えていただいても物になるような代物ではありませんが、只、何か書かずにはられない自分の気持の発露とでも申しましょうか、御一読願えば幸甚です。』

それから、これは大変身勝手なお願いになるのですが、現在の私には、同好の方々に知己もなく、自分の気持の持って行き場所も見当らず、つまるところが編集部の方にと、厚かましくも決心致した次第です。

私は今日まで、いつも一度、SMプレイを心ゆくまで実現してみたいと念願（執念と云

った方が正しいかも知れません）してありました。しかし、それには、やはり入縛られたV/A責められたいVという気持を持つ女性でないと黙目ですね。単に街角で知り合った或いは水商売の女性に、それを試みようとしても、それがいかに至難な事であるかというのは、今迄に何度も身を以って知らされてきました。長い年月には家内にも試みてみましたが、こちらは全然理解が無く、下手をする和家庭まで毀しかねませんので止しました。夫婦プレイの出来る方は、人生最高に倖せだと、貴誌の記事を読む度に羨ましく一人で僻んでおります。

そこで、たまたま編集部の方々は、多くの女性よりプレイの希望が寄せられているとか適当な女性が居られましたら是非紹介していただけないでしょうか。経済的な面でも少しは余裕を持っておりますし、一泊程度の行程であれば、自由に時間も取れます。編集部に御迷惑をかけない事は勿論、私も常識や体面を守らなければならない大人である事を堅く御約束致します。

一面識も無い私のお願いが、非常識であり無理な事は重々承知致しておりますが、あえてお願い致す次第です』

編集部でこの手紙を私に転送してきた意図は、電話連絡に依ると、この手紙の主は大阪市在住の熱心な読者であり、文章もしっかりしている。写真の方の腕はわからないが、その方は君が指導するとして、何なら助手にでも使って、一つ後継者として育ててくれないか、というのである。

しかし、この手紙の主を含めて、便りを寄こす殆どの人が、『女を縛りたい、女を責めたい』或いは『SMプレイをしたい』と願っているのであって、そんな対象に出来る女性を紹介してほしいと求めているのである。決して編集部の希望しているようなハントやルポの写真を撮ったり、文章を書いたりしようと考えているのではないということである。

それに第一、私には人を指導したりする器なんか持ち合わせていない――。

そう回答しておいたら、折返し更に一通の手紙をコピーして送ってきた。

若い女性のポートレートが二葉、同封されている。

その文面は――。

『前略、御免下さいませ。お恥かしい事ながら、私、奇クの虜になってしまいました。と申しましても、縛られた経験など一度もござ

いません。結婚して丁度七年。子供がまだないせいでございましょうか、常々正常位しか知らない主人に、なんとなく不満めいたものを感じる今日この頃でございます。

束縛されたい、柱に縛りつけられたい、吊られたりエビ責めにあいいたいと思っても、それを主人に頼む事も出来ず、時々主人の留守に一人で自分の身体を縛ってみたりしますが相手のいないむなしさは、かえって私の心をみじめにします。いても立っても、いられないのです。

逃げだそうとする私を捕りおさえ、恥かしさに嫌がる私を強引に掴まえてM開眼させてもらいたいのです。

「今から縛りましょう」とか、「これから、こんな責め方をします」とか前ぶれみたいな事をやめて、私を無理矢理監禁同然にして、一寸も休むことなく、三日三晩でも、四日四晩でも、責め続けて下さる人はいないでしょう。ロー責めとか、浣腸は嫌いです。専ら縛りを中心とした責めをお願いします。

短時間で終わってしまうような責めは好みません。連続的に責めてほしいのです。身体は至って丈夫で、今まで一度も病氣したことはありませんから、少々の責めなら十分耐えら

れると思います。

勝手な事ばかり書いて申し訳ありません。

私、二十六才。モデルとしては、いささか年を重ねすぎた平凡な家庭の主婦です。

バスト九二、ウエスト六八、ヒップ九五、身長一六二と大柄です。顔は丸顔で自分で申すのも何ですが二十人並です。

最近の写真がありませんので、二年前に写したのですが二枚同封しておきます。

子供がないので暇をもて余し、現在近所の海産物問屋にパートタイマーとして働いております。大体、毎日午後は出勤しておりますし、出勤しております間は、ずっと私が電話番をしておりますから、もし御連絡下さるのでしたら、(〇七七六×××)へお電話して下さい。午後でしたら、私が電話口へ出る事が出来ますから。

主人に内緒で後めたく感じるのですが、私の実家が京都の郊外で、親戚は京都市内や大阪に何人も居ります。もし私をモデルに使っ



て下さるのでしたら、実家を訪ねがてら、大阪へ遊びに行くといつて、一週間ぐらい暇をもらうことが出来ます。

今までパートで貯めたお金が相当額になりますので、一度大阪へ遊びに行こうと考えていたところです。

奇クを読んで、△モデル募集Vの記事を見たら、自分の気持を押さえきれなくなり、こんな手紙を書いてしまいました。責められることを願って眠られぬ夜もありますが、こんな女でよかったら、是非モデルに使って下さい。電話で御連絡下されば、すぐ上阪致します。申し込んではおりますが、家にはまだ電話はついておりませんので、電話での連絡は私の勤め先の方をお願いします。御都合で、お返事は手紙でも結構です。そのときは自宅



の方へ出して下さい。

よろしく、お願いします。

かしこ

編集部さま

同封された写真は、二年前に撮ったものだというだけあって、とても人妻とは見えない若々しさで、まるで娘さんのようである。

プロポーションも容貌も、これではたしかに十人並以上の持主である。

添付された編集部からの書面によれば、この女性の住所は福井県の敦賀市で、すでに書面と電話で連絡済ということである。

ただ彼女のアルバイトに行っている店の都合で五日も一週間も休めないで敦賀まで来て欲しいと言っているため、御足労でも一っ走り行ってくれないか、という依頼で、詳細は電話にて打ち合わせするというものである。

早速、編集部へ電話すると

「あの女性の手紙を読んだら、君なら横っ飛びに行くだろうと思って、コピーを送ったのだが——」

と自信満々の編集長の言葉が返ってきた。

そればかりでなく、小浜市に在住の或る女性読者から、奇クのバックナンバー百五十冊を譲るからと言ってきているので敦賀からの帰り小浜へ寄って、それを貰ってきてくれ、という厄介な頼みなのである。

たしかに、私の家からだったら、名神高速道路を利用して車をぶっ飛ばしたら、三時間ぐらいで、敦賀まで行けるだろう。だが、私はこの女性には、何となく気がすまなかった。文面で、三日三晩、四日四晩、ぶっ続けで責めてほしいというのは、誇張もあるだろうが、とても、私では相手が出来かねるよう
に思えてならない。

で、婉曲にお断り申し上げ、そして旧号の運搬の方は運送屋にまかして——と答えておいたのだが、それが、次のような事情で、ど

うしても行ってほしいというのである。

なんでも、一五〇冊もの奇クの旧号を手放すというその婦人は、四五才になる未亡人とかで、夏場は民宿にも使っている屋敷で一人住居。亡夫の大切な遺品である奇クの旧号を譲り渡す条件として、奇クの編集部員が直接引き取りにくるのなら、と提案してきたそうである。では、当方から塚本鉄三が近くへ撮影に行った序でに寄ります、と答えておいたから、どうしても行って貰わないことには困るというのである。

夏は海水浴客目当ての民宿として、アルバイトの近所の娘さん達を雇って賑やかなのだが、今はシーズンオフで、庄屋屋敷と呼ばれている旧家も、ガランとして火の消えたような淋しさだという。

亡くなった御主人が奇クの創刊号からの愛読者だということだから、きっと面白いSM話が聞けるだろうと、そそのかす。

私が返事をためらっていると、それでは敦賀と小浜の方は、他の人にやって貰うとして君には、この女性を頼もうか、と見せられた一葉の写真と手紙を見て、私は思わず「うーん」と唸った。食指が動いたのである。

私は快諾した。



奇ク回顧二十年 塚本剛水

過日、仕事関係の資料あさりに（輸出品の日本画山水花鳥を描いている）町はずれの本屋を訪れたところ新刊の奇クを見つけ、いや実になつかしく思った。カメラマンの塚本鉄三氏、現役活躍中の辻村隆氏。編集長の箕田氏。当時は編集諸氏や読者も皆若かったし、奇譚クラブも若かった。

それらが一体となって、未知の世界へ猛牛のように猪突突進して数々の名作を残した。その頃の奇クを毎月手にした時の陶醉と興奮

は未だに忘れることは出来ない。今から十数年前には、いろいろな人が活躍していた。が、今日に至っても依然として、その艶な色彩は決して色あせていない。結構楽しませてくれる。責めの歴史の足跡を辿ってゆくと、我々の生活の中に、すっかり溶け込んでいくことに気がつく。

緊縛プレイというものがセックスと不即不離の関係にあるということは誰でも納得ゆくであろうがしかし、緊縛写真について考えれば、それは肉体の交渉を離れた、目で見て感じるセックスである。何百年の昔から伝えられてきた社会、個人を問わず一つの掟であった『罪を犯したから縛る。手数がかかるから縛る。逃亡するかも知れないから縛る』といった人間本来の本能である。

だから、私はこれを異常であるとか、変態であるとか思わない。女を愛する型が変わっていないと同様に、責めたり縛ったりする型も全く変わっていないことを知って私は安堵したものである。

家へ帰ってから、早速古い奇クを引っ張りだして、しみじみと味わってみる。その頃の自分がそこに見出されるようで、たまらなく

懐しい。私は当時、肥満体の女性を思うさまに縛り上げてみたいという強い願望を抱いていた。

現実には、そういったチャンスはなかったが、都合がよいことに私は絵を書くことが本職だったから、私の頭の中には、どんなタイプのモデルだっていたし、どんな無理なポーズだっていた出来た。

そこで運動不足で太った女の子を縛ることにした。縛り役は黒人女性を脇役にして、出来上ったら奇譚クラブに投稿しようと思ったが、きびしい股間縛りの日本女性が正面向いて立ったのなんか、遠慮なくあるべきものを正直に描いたので発表されるべくもない。

従って、塚本剛水という名で奇ク誌上に発表された画や文章は、極く僅かではない。特に私は文章を書くことは苦手で、誤字や脱字が多くて、それを直して掲載してくれる編集部のことを思うと投稿する気にはならない。

それで専ら誌上に載った緊縛写真を切り抜いたり貼り合せたりして、自分なりのコレクションを作った。だから、当時の奇譚クラブにしても、まともな形で残っているのは少ない。殆どは私の好みに応じて『昔なつかしい東と西の緊縛画』といった具合に自作の絵入り表紙をつけて切り抜いた緊縛写真を集めている。

その表紙をめくった第一頁には奇クがはじめて天然色の全裸の女性緊縛ポーズをグラビアにしたのを載せている、もう十年以上も前だろうが、年月が書いていないのでわからない。さんさんと降りそぐ陽の下に晒した若い女性の全裸の姿態は天然色だけに美しい。

『緊縛美のオンパレード』と題した合計二五〇枚の小型写真は、未だに色あせることなく、私の目を楽しませてくれるコレクションの一つになっている。

すべて一糸まとわぬ全裸の緊縛女体のグラビアが頁をめくる毎に私の目の中に飛び込んでくる。年月号もモデルの名前も今となってはわからないが、私好みの豊満なグラマーの縛られた女体が、次々とあらわれては、私の目をこよなく楽しませてくれる。

あの頃の奇譚クラブは、若かった。雑誌も二十年経ってみると、今のようにならぬ。何年も続いて発行される奇クに私は絶大な信頼感を持つが、若々しさだけは失ってほしくないと。奇クよいつまでも若くあれ。

＜短詩＞

剃毛開眼

清水康子

冷やかな風が吹きぬけてゆく
涼しさは、私の心を今までと違っ
た世界へ誘ってくれる。

今年の夏、私は陽よけのサング
ラスをはじめ掛けてみた。

目に見える、すべてのものが、
深い紺色の世界に沈んでしまっ
て、まるで私が、そんな深海の中に、
最初から住んでいたような気持ちに
錯覚させてくれる。

彼が冗談に、私の剃毛のことを
口にしたとき、今、そのような流
行があるの？ と軽く聞きただし
ただけで、純情な彼は耳たぶまで
真赤にして口ごもってしまった。
そんな彼が、むしろように好きに
なってしまった、思わず、いいわ
と返事してしまった私。

涼しい風が、私の白い肌を今も
過ぎてゆく。私はそのすがすがし
い感触を直接肌に感ずるたびに、
私は彼のことを想う。

今では、ちくちくとする異様な
刺激が、私の心を開眼して、一つ
の鬱積したかたまりが、胸の中か
ら吐きだされるように、剃ってほ
しいわ、とつぶやいていた。

鼻責めの同志

東京 Y Y 様へ

増田喜代司

あやしいムード溢れる奥さんの
鼻責め写真を拝見して、長い間、
沈滞気味だった私の鼻責め意欲に
又々火がつけられたような感じで
した。

夫婦たるもの、いつもいつもエ
クスタシーばかりしては、又
来るべき新鮮味が味わえないもの
で、勢い、プレイにもマンネリ化
を感じ始める時もあるでしょうが、

その打開を求めるあなた様の様な
勇気ある呼び掛けも、一策かもし
れません。

女房の鼻に穴をあけるといっ
とも一昔前のことでした。あれは
いいムードでした。鼻責めファン
同志のために先達になるつもり
の作業も又、違った悦びでした。あ
なたと同様、特に変わった趣向と
て、あろう筈はありません。

しかし御相談ぐらいは、つと
まりました。やはりムードで
穴を開けるべきでしょう。もし
この文があなたの目に届きまし
たら何卒お呼びかけ下さい。

全国の鼻責めファンの方々、
是非、グループを作ろうではあ
りませんか。

私の夫婦プレイの状態と、みゆ
きの近況を報告します。

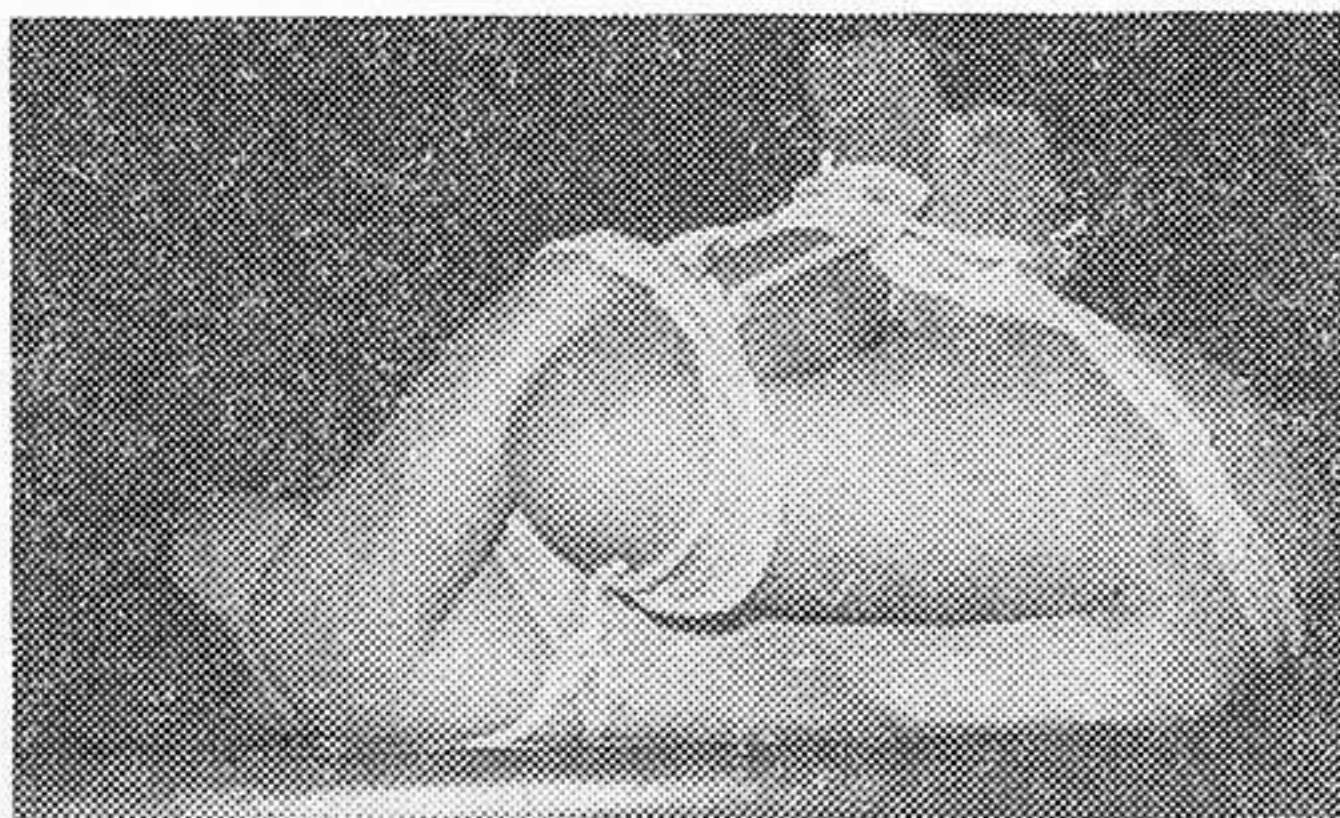
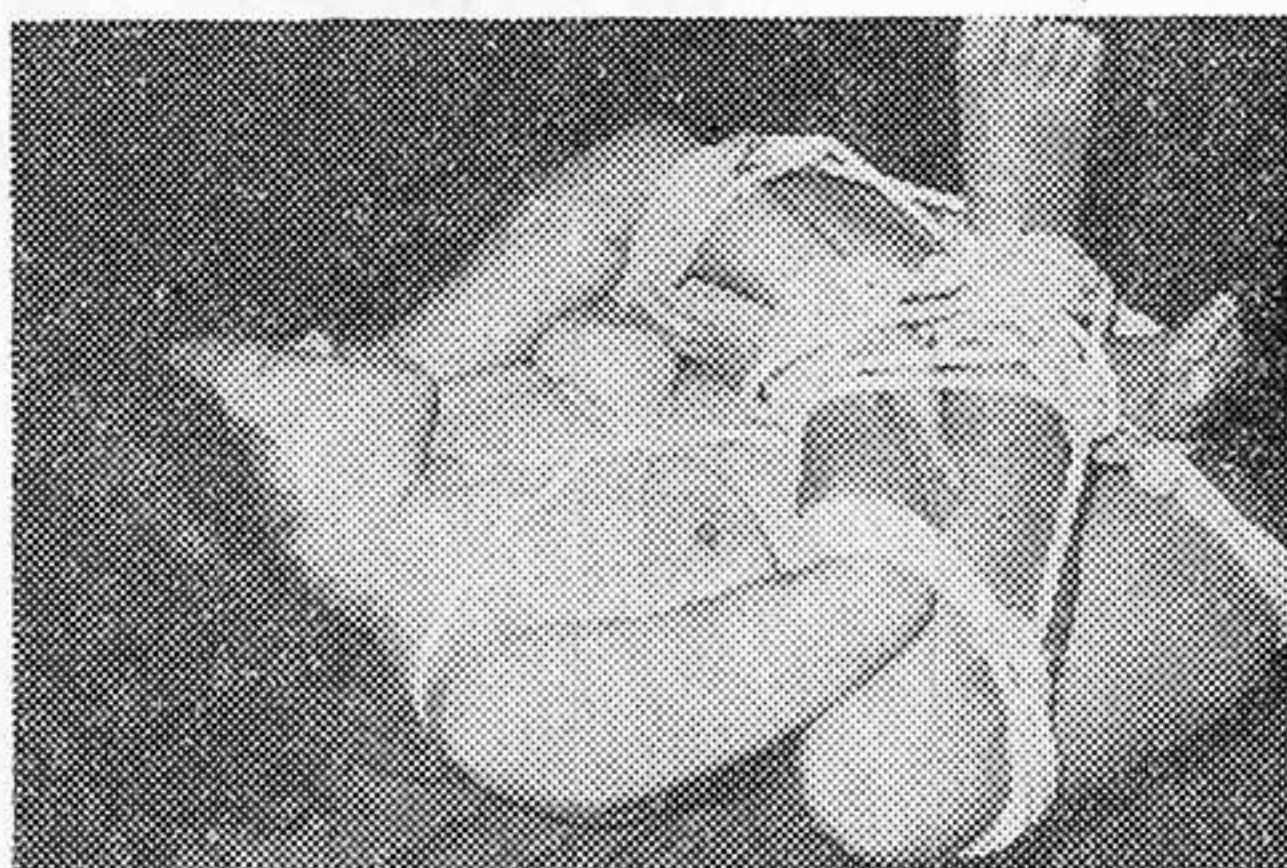
双胎腹で皆様にお目にかかっ
たと思う間もなく、ピーナツを
出産して早や四年。いまや四才
の悪戯ざかりになった二人に、
追っかけられるような忙しい毎
日を送っています。

その気をゆるせなくなったピ
ーナツに気を配りながら、最近

の、みゆきを撮りました。

喜代司の緊縛には不可欠の鼻責
めも、その度合い、いちじるしく
強度化して、いつも鼻責めの限界
一杯にプレイが進行し、フォトを
撮影する余裕もないままに終わっ
てしまいます。

秋の夜長を利用して気楽に、又
違った感覚の鼻責めフォトを作成
したいと、新しい意欲をもちやして
おります。





—第七十八回—

辻村 隆

剣の道に『急々緩々』という言葉がある。心の燃焼度のバロメーターであるが、剣道をやり始めた頃は面白くて堪まらず、せっせと稽古に励むが、初段あたりから、一つの大きな壁にぶつかって、いつしか初志を忘れて、寒稽古、土用稽古もつらくなり、その俤やめてしまうものが多い。一つの壁にぶつかることは、剣道に限らず、スポーツ全般、芸能、歌謡、小説、詩歌、勉学、研究、信仰と、すべての面で、こうした頭打ちの状態に一度は逢着するものである。

と論じているのが『急々緩々』の意味だそうである。リバイバルソングのオールド歌手にしろ、緩々の時代はあったが、今は又せっせと稼いでいるではないか。

SMのプレイにも、この『急々緩々』は大いに適用され、さしずめ、先日私宅を訪問された新宮夫妻や、万博を口実に出てくるといつて遂にその約を果さなかった岐阜の水野夫妻など、正に『緩々』たるところであろうか。それに引換え、『急々』の最先峰は、渡部夫妻、三浦夫妻など、SMプレイが面白くて堪まらぬ人達であろう。カメラ・ハントの女性や、モデル志望の女性にしても、激しく心の傾斜している『急々』の機会にプレイしないと、時折、悔を残すこ

とがある。いつでも出来るタカをくくって、日を延ばしたり、あれこれ渋っているうち、いつしか心の燃焼がさめて、『緩々』になり遂には通してしまふことになる。

SMのプレイが面白くて堪まらぬ時期が『急々』なら、どちらでもよくなってくる時期が『緩々』であろう。一時期、夜乃探郎という人が、三つぐらい名前を使いわけて、戯文、寸評、小説など書いていたが、それは彼の『急々』の心の時で、近頃はトンと音沙汰すらも分らない。彼のことはホンの一例で、彼は決して、SMに対する情熱を失ったのではないが、何かの折に、チョットした壁にぶつかって、書く意欲をなくして、『緩々』の冬眠時期に入ったのだろうと思う。二十数年、こうして奇くを讀んでいると、投稿する方々の『急々緩々』の心が分かって面白い。

東京へ転勤して、千葉市の団地に住んで居る増田喜代司から、珍しく奥さん以外の女性の、鼻責めフォトを数葉送ってきた。同じ団地の奥さんで、みゆき夫人とすっかり心易くなり、よく遊びに来るそうである。或る機会に、偶々み

ゆき夫人不在の折、その奥さんが来訪して、彼はフトその奥さんの気を引く気になって、奇くなどみせ、自分の掲載されているハントや、鼻責めシリーズをみせたというのである。奥さんは随分、驚いたらしいが、彼がせめて、鼻だけでいいから撮らせてくれと頼んだ処、みゆき夫人さえよければということになって、第一回、第二回は着衣の俤で、単に鼻先を摘んだり、握ったりする程度のもので終わったらしい。彼は、みゆき夫人を説得して、第三回目の折、その奥さんの前で、みゆき夫人を全裸にして緊縛し種々器具を使っての鼻責めを行ない、傍らで怖そうに見守る奥さんも、抜目なくみゆき夫人と一緒に撮したのである。怖いものみたさと、好奇心で訪れる奥さんにそれを見せ、顔を撮さぬという約束で、遂に全裸強烈な緊縛の鼻責めに成功したというのである。少し話がうま過ぎるが、同封のフォトは、確かにみゆき夫人ではなかった。年齢は二十八才で一児の母というが、全身の露出緊縛像など、若さに溢れている。夫唱婦隨で、SMプレイに励むなど、彼も仲々味なことをやるものである。

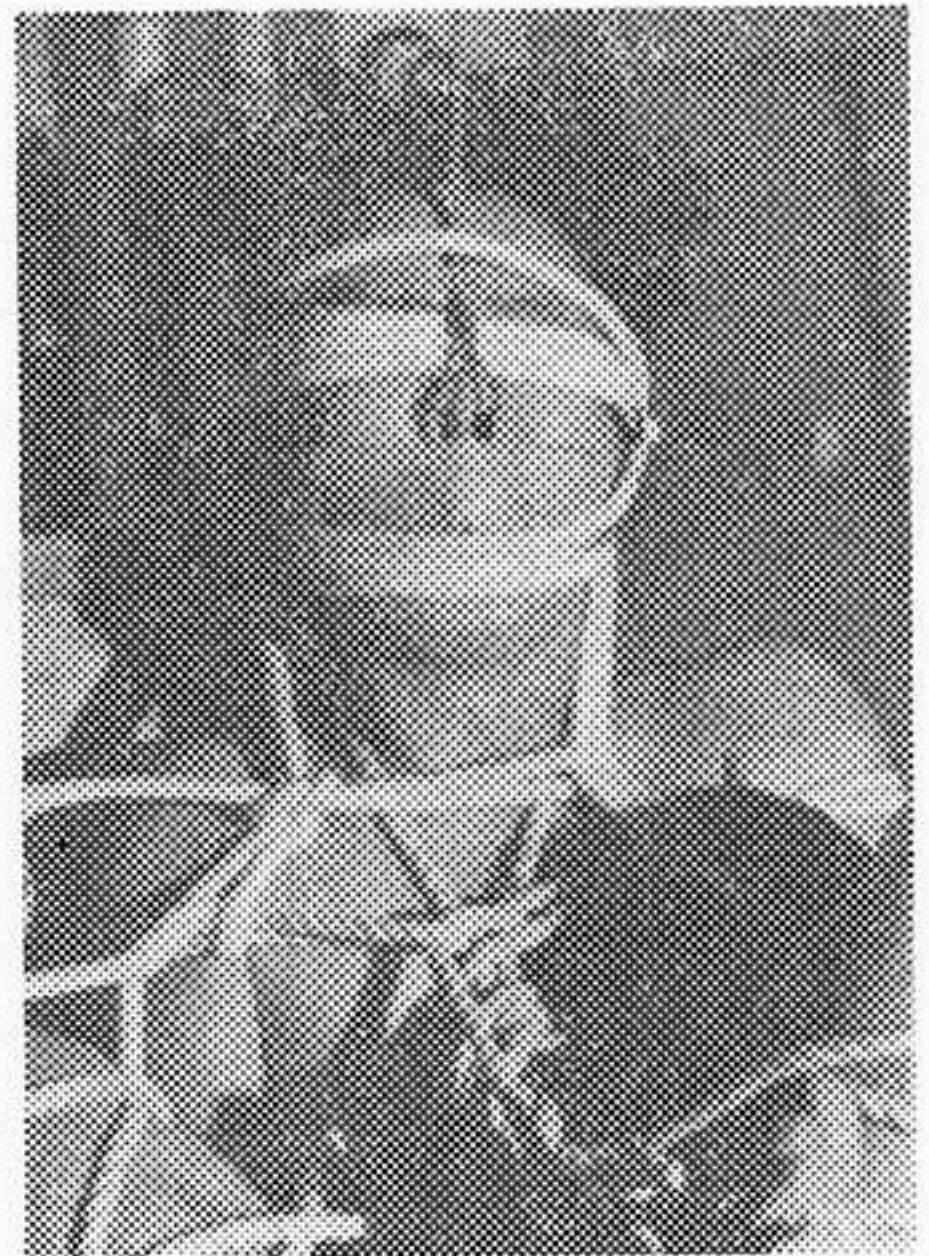


自分が書ければ発表するのだが近頃、久しく筆もとらず、書けそうにもないので、この欄で、鼻責めの同好者の方のために発表して欲しいと書き添えてあった。

私とよく似た緊縛法の、雁字搦目で、愛用の鼻責め具を使っている。荷造用の粘着テープで両眼を覆ったり、猿轡の代用にするなどかなり凝ったもので、眼隠しの奥で、奥さんの苦痛のさまが、まざまざと滲み出ていた。そのうち、私好みの様な緊縛も撮って送るから期待してくれと結んであったが増田喜代司は「緩々」にもならず健在である。

嫁いだ長女に子供が生まれ、私

に初孫が出来た今頃になつて思いもよらぬ風流極道軒氏から娘の結婚祝を送ってこられ、大いに間誤つた。相当大きい「姫達磨」である。余程お返ししようかと思つたが、折角わざわざ買求めて、デパートから送って下さったものを突っ返すのも反って失礼と思ひ有難く頂戴した。長女に早速届けたら、誰方から？ と訊ねられ返答に困ってしまった。極道軒氏とは梨花悠紀子のフォトを送つて以来音信なしで、私も既に忘れていた方の一人である。彼の、巧妙な時代小説は、いつも面白く読ませてもらっているが、所詮はもう、路傍の人と思つていたし、事実、数度の文通のみで未だ一面識もなく、彼の職業、性格、年令、容



貌、履歴など、何一つ知らない。長女には何とかお茶を濁したものの、恐縮して、慌てて百貨店で内祝を整え、別便で、近々のハント女性のフォトなど数葉送って丁重にお礼申し上げた。御縁あらば是非、一夜を共にして、夫婦プレイに打興じてみたいと、お互いに願望しているものの、やはり遠隔の地、その悲願、果していつ実現するやらと当てのない望みを抱いている。極道軒氏はポラロイドのカメラで、美しい奥さんの被虐体を中心のおもむくままに悠々自適、とっておられ、彼から贈られたその一枚が、大切に私の筐底深く眠っている。是非一度はお目にかかりたい人である。

ほんの数日前、かねて念願の人妻二人をつれての一泊旅行が実現した。貞淑な渡部好美夫人と、豹変すると性に狂奔する川路叢子夫人との三人で、山陰の城崎温泉に車で飛ばし、温泉ホテルの一室で、夜もすがら、爛れた様なプレイに耽溺した。いずれ精しくは、来月号のハントに発表するつもりであるが、女と男のお話は、所詮むつかしきもの。その日、初の御対面の女性二人が、私という男を中に挟んで、SMプレイのかけひきは、心中丁々発止と火花を散らし、忠ならんと欲すれば孝ならずで、流石に閉口してしまった。

やはり、プレイの秘めごとの愉しさは、一対一のもの。げに女心とは不可思議なものであることをつくづくと思ひ知らされた恰好である。不可思議といえば「孤独より遁れて」の伊藤圭子さんから昨日電話があつて、妊娠三カ月だときいてビックリ。相手はと、せきこんで問うと、一度は振ったことのある、飾磨のU君だときいて結局はSMの相寄る魂で結ばれた仲と知り、それも或いは当然の帰結の様に思われるのであった。余り

短信往来

妊婦ファンの皆様へ

佐野みさ子

十一月号で、高野原美さんが私に対していろいろとご期待下さっていることを知りました。

高野さんのおっしゃるように、妊婦モデルとして辻村さんのカメラに収めてもらえればいいのですが、いろいろ事情もあり、わざわざ関西まで出掛けることは出来ませんし、又、こちらへ来ていただくにしても、人妻である身では主人の都合もあって、前以て日時を定めることも出来ません。

私としても、信頼出来る辻村さんに羞恥めをやっていたきたい

目立ちぬうち、結婚式を挙げるつもりだが、彼からの連絡はありませんでしたの？と訊ねられ、私は又ぞろ腹の虫が立ち始める。肝心の紹介してやった男の方からは、その後たえて、一度の挨拶も連絡もなかったからである。こうした不義理な青年も一寸、珍しいが、夢中になれば、もう第三者のことなど

構っておられないという程の熱の上げようだろうか。そんな奴だから、やめておけといったかったが既に萌えた胎児のことや、彼にすっかり傾斜している彼女の心を思いやるとそうともいえず、口まて出かかった言葉を殺して、まあしあわせにやりなさいと力づけておいた。

のはやまやまなのですが、どうしても事情が許さないのです。

それでいつもその時々隙をみつけては、手近にいる特定のS男性にお相手をしていただいているのですが、その為の場所としてその方と共同で一時的にアパートの一室を借りてあります。

大きなお腹をして、ホテルや連れ込み旅館にはいることを、私はともかくとしても、相手の方がいやがるのでそうしたのですが、プレイ専用の部屋を借りておくのも大変にいいものだづく感じています。

同じ十一月号に、私の投稿も載せていただきましたが、写真がやはりダメだったようで、残念でたまりません。ピンボケかな……とは思いますがお送りしたのですけれど……。あれは七カ月の時のも

軽佻浮薄な現世であっても、やはりSMのプレイにも、おのずからルールというものはあるはずである。孤独より遁れて今、明るい人生を進もうという彼女に、ケチをつける気は毛頭ないが、願わくば、こうなる以前に、もう少し、彼の人間性を見極めて欲しかったと、悔まれるのである。

そんなシオリシイことを考えるテーマ自身、人妻を二人も連れて一夜をプレイに過ごし、何をいってらんだいと、弾劾されればそれまでであるが、一方は御主人承認のもとに、一方は自から求めてきつつある女性であるとすれば、これも長年ハントを書きつづけて来た、私の役得のようなものではなからうか。これを書かねば誰も知らない事、それをわざわざ恨まれ、羨望させるように書く私自身も、やはりどこか露出趣味があるらしい。

六十五才、七十才という様な年配の方でも、壯者を凌ぐ元氣のよい人もおれば、四十才前にして、既に老化現象をまざまざとあらわし、肉体の衰えを歎く人もある。私も大正十年生まれだから、最早、齢い五十才になんなんとしつ

つあり、しかも孫をみているが、先日同窓会に出掛けたら、私など若く見える方の関脇クラスで、髪にこそ、既に白いものを混えていいるが、精神、肉体の年令共に、未だ未だ若い方で、大いに羨まれたものであった。

糖尿という持病を背負ってはい

るものの、ホドホドの摂生で、兎も角、元氣である。

要は心の持ち方に起因するのでなからうか。

ハントの女性はずべて私より若い。そうした女性群とプレイのひとときを過ごし、さしたる悩みもなく、暇があれば、妻と数泊の旅行をして、気がむけば、妻を相手にSMプレイに打興じ、嫁いだ娘のことも、孫のことも案外気にならぬ私など、人にいわせればエラク徳人らしい。

のんきに無理せず暮すことが、若さを保つ一つの手段としても、やはり、人生の大半を過ごしてくると、時にはフト無情を覚え、せつせと溜めた数万枚のフォトコレクションは、墓場まで持ってゆけるわけでもなし、さて、その始末、どうしたものやらと、いらぬ取り越し苦労をする様になった、昨今である。



渡部光雄様、十一月号の私に対するアドバイス、誠に有難うございました。私も、妻の協力によって、私なりに満足出来る緊縛を得ております。九月号、十月号に掲載して貰いましたフォトは、私達

渡部光雄、好美様へ

阪東 太郎

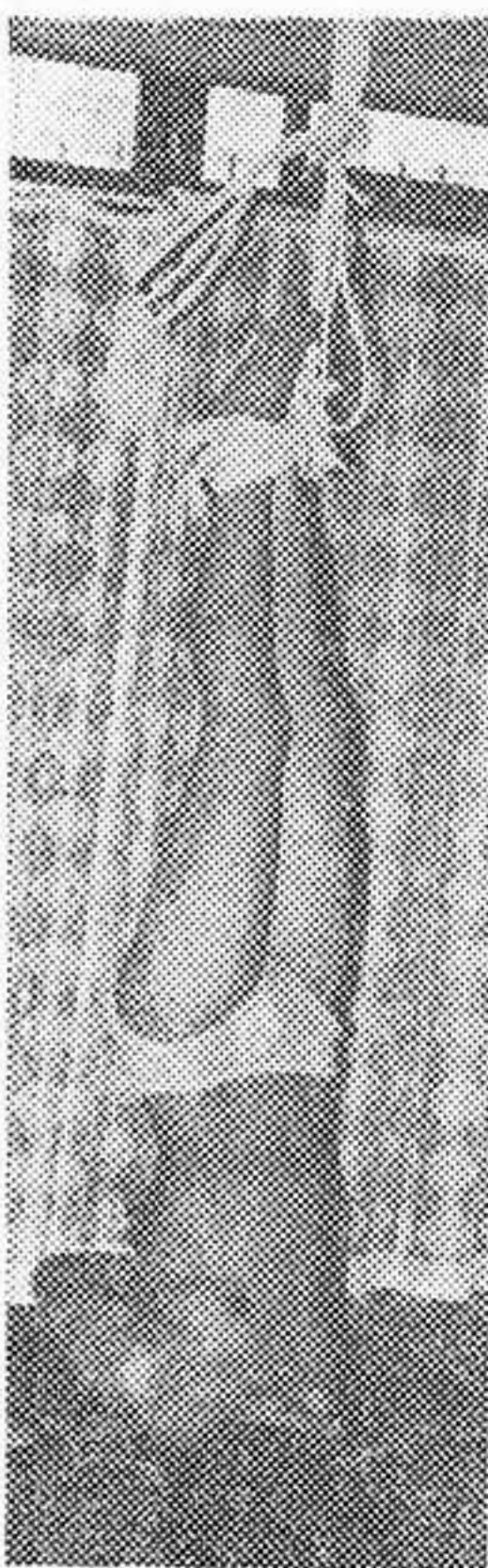
のでしたが、九カ月になりましたら、金原さんの逆吊りに負けにくらいのプレイをしてみたいと思っています。今度はピンボケにはよく注意してもらおうように相手の方をお願いして、高野さんのわ

ければならないでしょうし、全裸でなければ私としてもつまりませんし、載せていただく写真としては多少不満が残るのは仕方ないことなのでしょうね。でも、誌上で私自身の縛られた姿を見られるのは、プレイとはまた違った、なんともいえないたのしさがあるものです。

のプレイの進行状態がよく現れていると自分では思っているのですが、全然その気のなかった妻に縄らしきものをかけ、七月号に載せて貰ったフォトを撮った頃からみると、ずっとプレイらしい緊縛だと思えます。

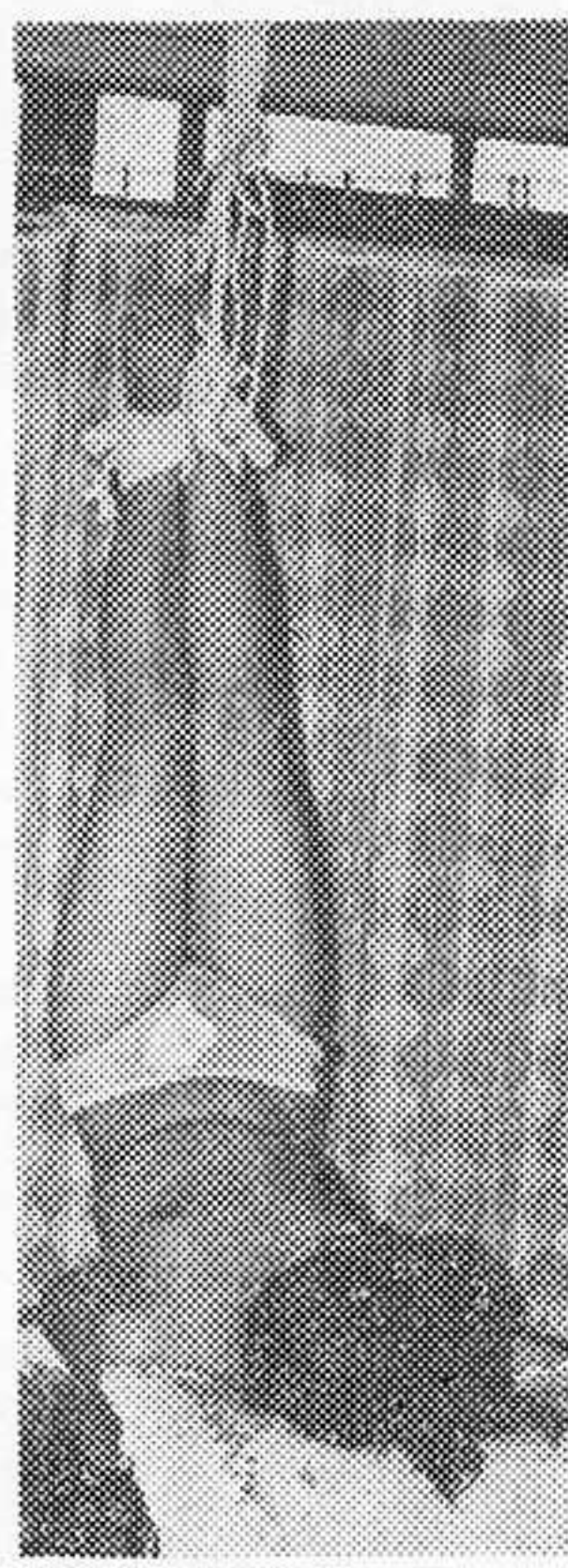
“こんなことをするのは変態だ”
と言われながら日々妻をくどき

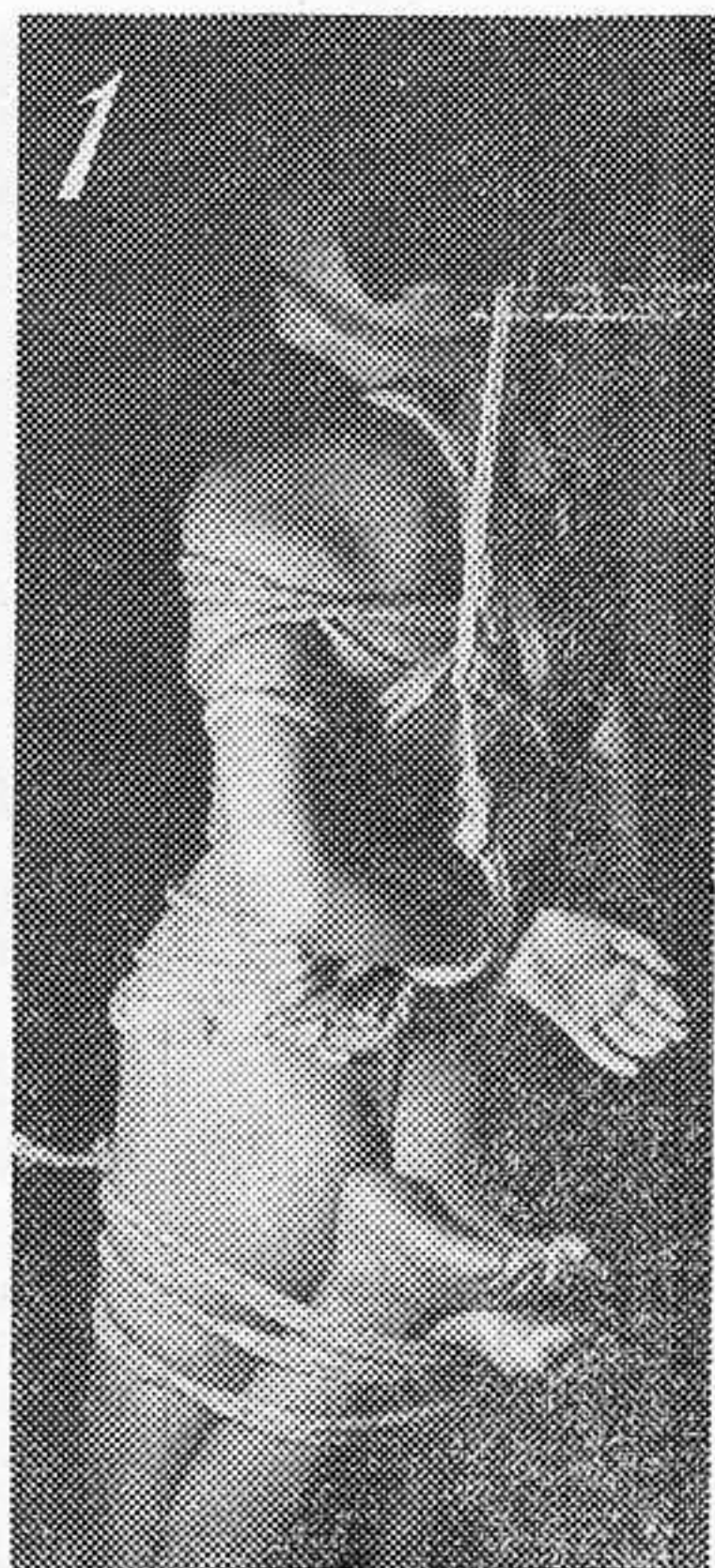
続けて、やっと縛らせてくれるようにはなったもの。いまだに妻は、緊縛される喜びというものは湧いていないようです。私は、どうにかしてプレイ中に妻にも喜びを与えようと努力しているつもりなのですが、つ



私のS本能が先に走り、自分本位のプレイになってしまうのかも知れません。私の体も、渡部様と同じような傾向がありますので、つい自分自身で、より強い刺激を求めてしましますが、夫婦としての交りは、いつもプレイ後であったことが、妻にプレイ中の喜びということを知らしめない結果を生じたのでしょうか。

後ともよろしく御指導下さるようお願い致します。又、十月号に於いて好美奥様のカメラ・ハント登場を拝見致しまして、辻村氏の名文もさることながら、奥様のM性にはつくづく羨望させられました。このように双方が心から満足し、喜び合えてこそ本当のSMプレイといえるのだろうと思った次第です。その意味ではまだまだ落第だとは思いますが、曲りなりにも私の気持ちに協力してくれるようになった妻の、吊り上げポーズを、ご覧下さい。





新婚縛り行脚

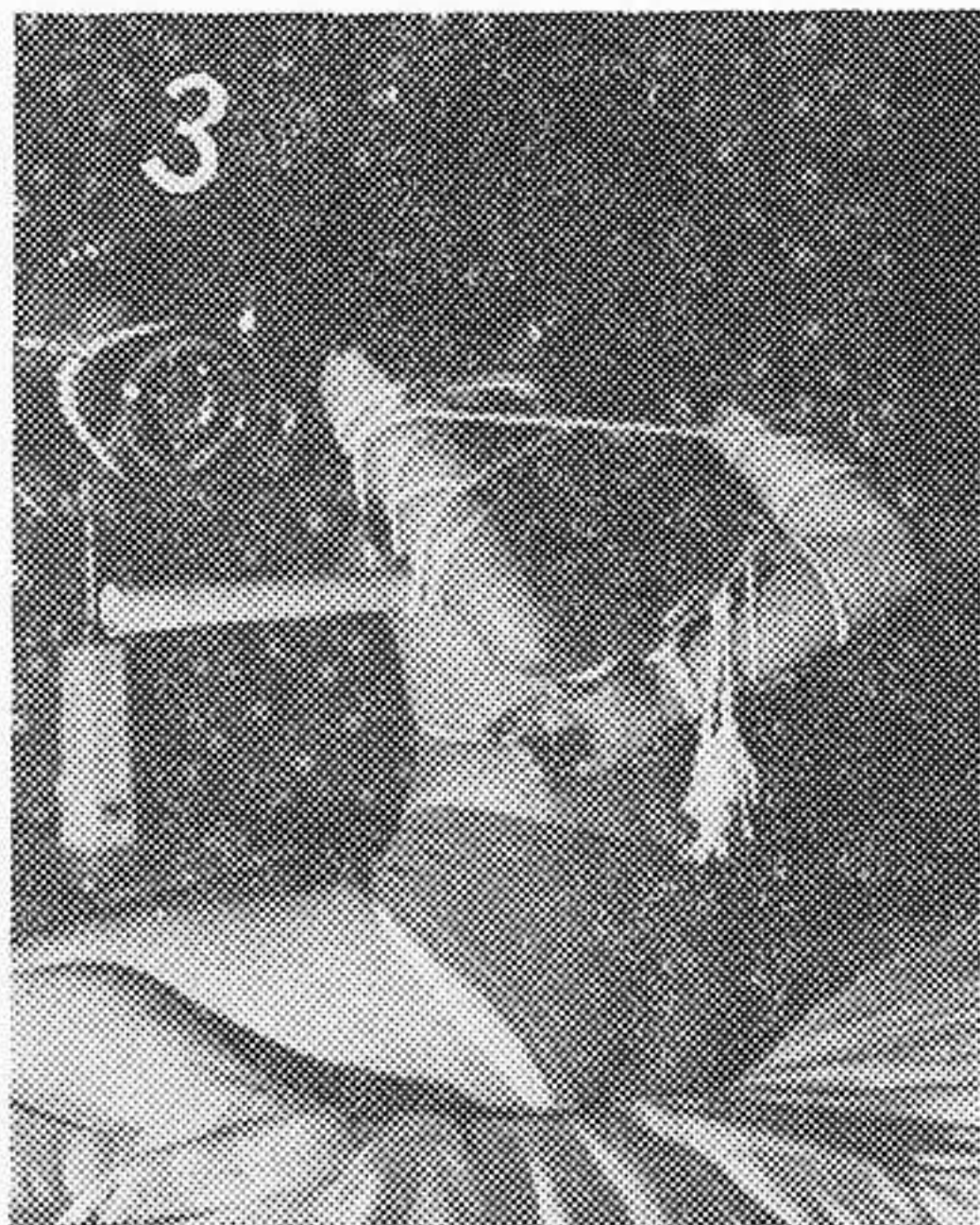
福井 太郎

れに荒縄は、あとにミミズばれが出来、十日程も消えません。残酷

始めて投稿します新参です。私達は今春結婚したばかりで、式を挙げてまだ半年にもなりません。妻の緊縛写真は、すでに数百枚にもなっていました。最初は出来上った写真を、妻と共に反省しながら鑑賞していましたが、なかなか良い写真が撮れず残念に思っております。そこで読者の皆様の批評、縛り方など、御指導して頂きたく、こうして投稿させて頂いた次第です。

同封しました写真は――、

①は、荒縄で高手小手に縛り、ハリから膝を折って吊るしたものです。ですが、縄が胸をしめつける為、苦しがって長時間は無理です。そ



美はありますが、私達には、ちょっと不向きのようなのです。

写真②③は、海水着の上からパイプを背負って、綿のロープで縛り上げたものです。今年の夏は仕事に忙しくて、海へは一度も連れて行けず、買ったばかりの水着はこうして、縛られる為だけのものとなってしまいました。

写真④⑤は、細引きで乳房を浮き出す様にくくったものです。やはり縄目の入ったロープの方が縛り上げたと言う感じが出来ます。

写真⑥⑦は、妻にガーターとストッキングだけをつけさせて股間縛りの上、あぐら縛りにし、パイプを背負わせたものです。

写真⑧⑨はトリコットの生地を細く切ってロープにし、後手股間縛りにして吊ったものです。

が、トリコットの比較的小く、のびて、膚にぐっと喰い込み、見た目にはすこぶる

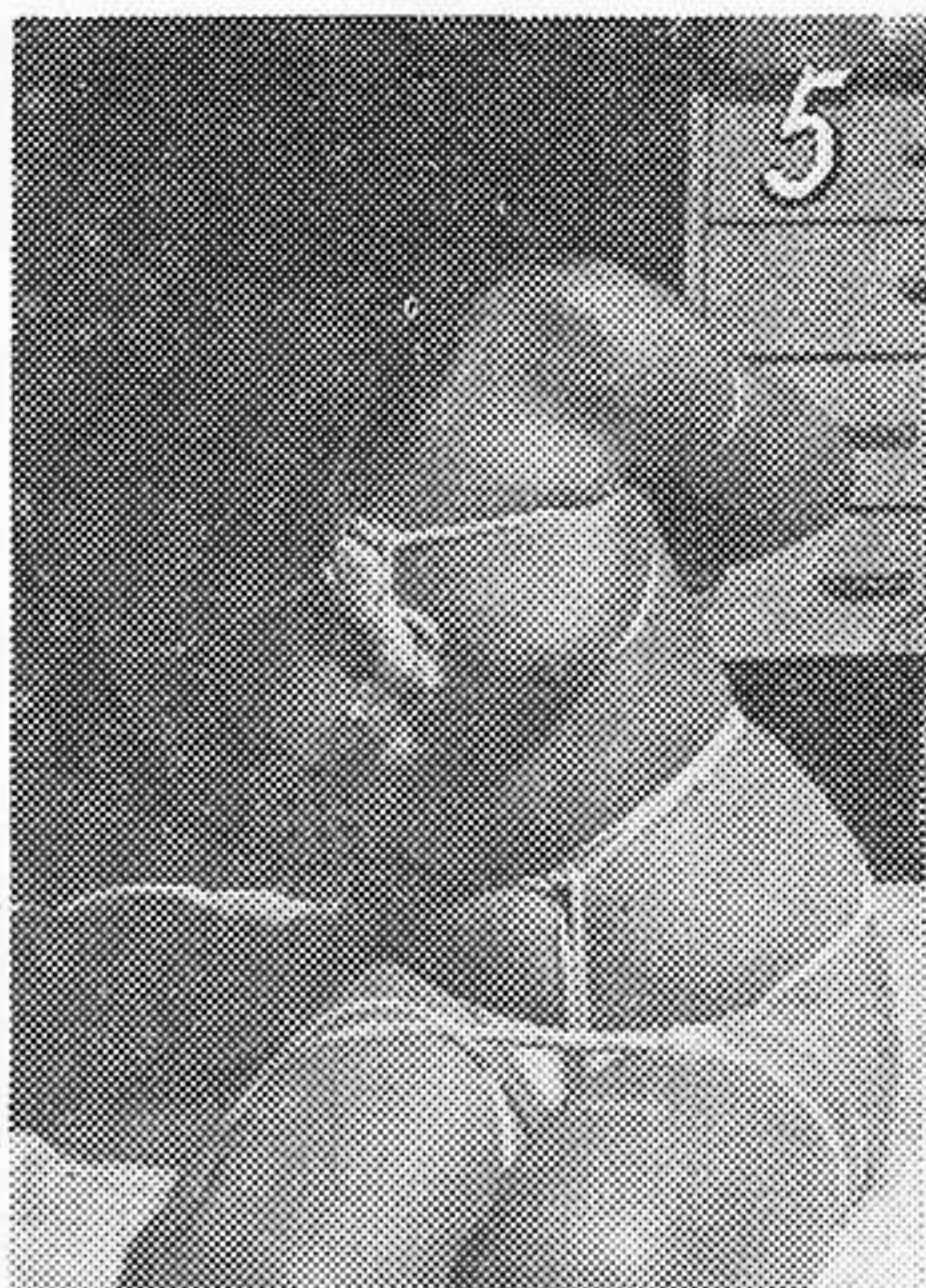
編集部だより

○ひと頃、あれほど吹き荒れたSMブームも大分おさまったようです。愈々これからは浮かれ気分ではなく落着いて編集する時期だと部員一同張切っておりますが、先ず手初めに、ファン待望の臨時増刊の写真集を刊行いたします。

○特写カラーの緊縛写真を中心に豊富なモデルのとおっておきの緊縛フォトを一気に公開します。尚、辻村隆、塚本鉄三両氏の責め写真入りの体験談、モデルの告白談などを取りまぜて写真集を一層豪華にしたいと考えております。

○印刷が不鮮明なので折角の写真が残念だと嘆いておられた方々のストレス解消のためにも最高の贈物だと確信いたします。定価は一部千円で新年号発売の前後に完成出来るよう鋭意企画を進行させております故御期待下さい。

○十月号に『夫婦プレイ写真』の大量掲載に引続いて十一月号にも二、三発表しましたが最近の勇敢な『夫婦プレイ信奉者』の写真や手記が次々と投稿されてきます。差し支えないものは極力誌上で紹



緊縛感が出ます。

以上、御紹介したものは、ほんの一部ですが、これから皆様の助言を得て、逐次すばらしい写真を

あゝの娘 青井松造

私が思い切って云い出した時、あのパッチリした眸が不審気に見返してきたっけ。いま、なんていったの？ と……。

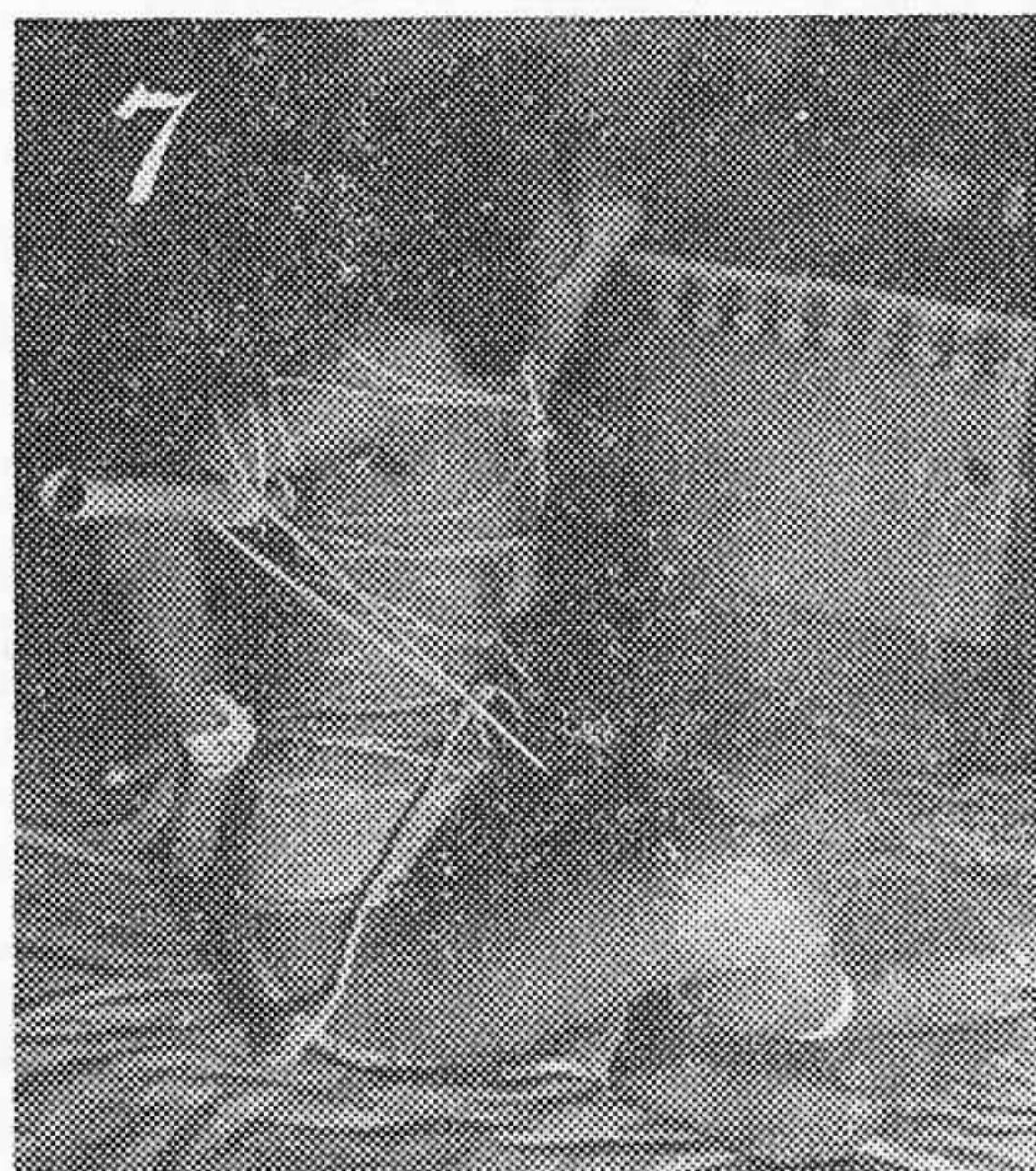
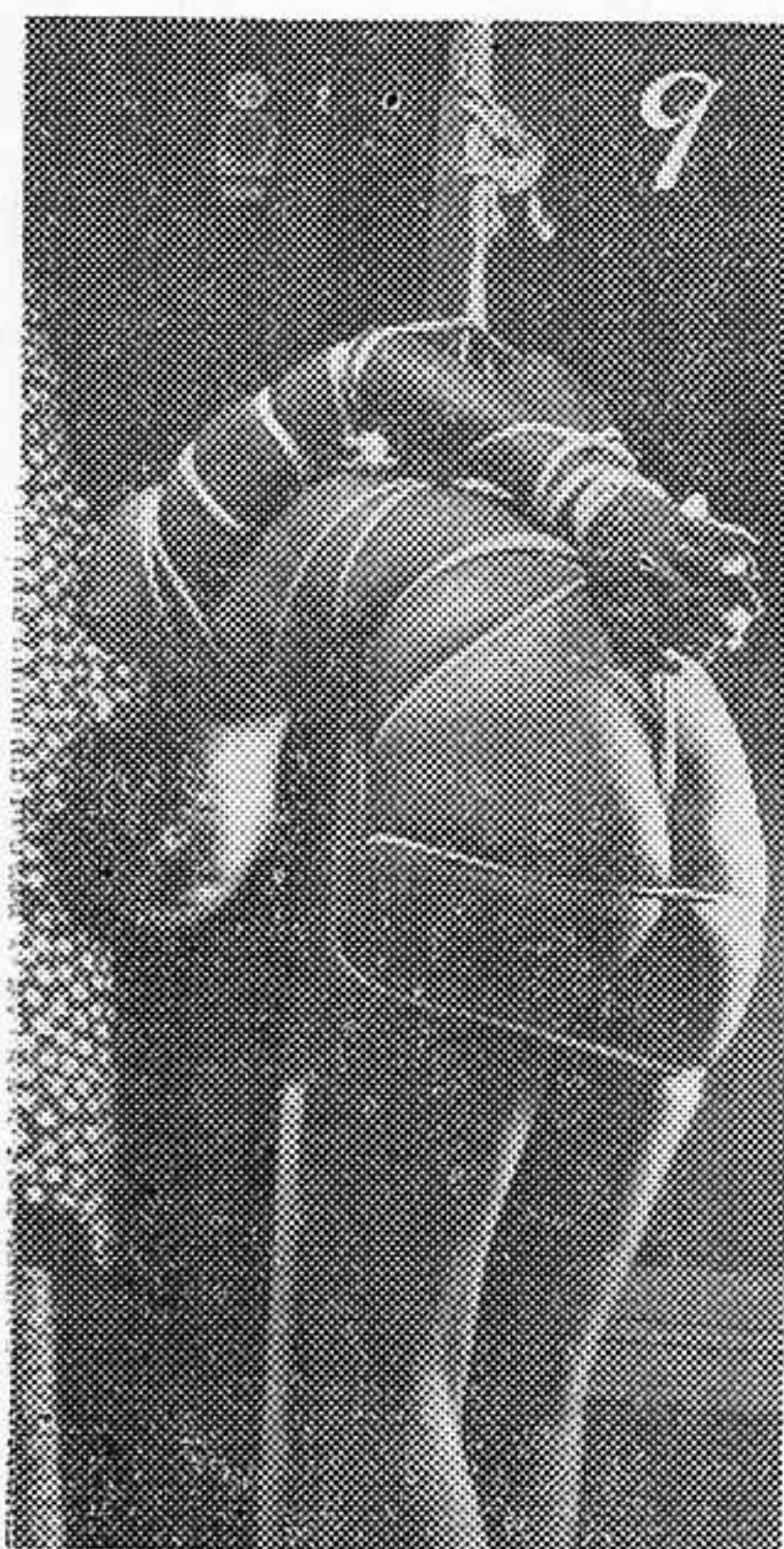
私が再び云った時、あの長い睫が慄えて伏せられたっけ。そんなことを？ というように……。

私がロープを見せた時、あのフックラした頬に赤味がさし、小さく囁いたっけ。いいけど、あまりひどくしないでね、と……。

作成して、発表させて頂きたいものと思っています。

尚、読者の方で、お互いの写真を交換して研究材料としたい方は

特に小生、福井市在住の為、福井に住んでおられる方、お便り下さい。



介させて貰います故、どうか、どしどし御寄せ下さるよう、お待ちします。尚、掲載不可のものは、その旨添記下されば、そのように取りはからいます。

○本誌旧号をお譲り下さるとの通信を多数頂き、厚く感謝しております。余りにも一度に多量のお便りを貰いました為、折り返し直ぐお返事を差し上げることが出来なかった方もありましたことを、お詫び致します。

○非常に多くの写真の投稿と共に近頃は絵画の投稿も次第に多くなり漸次八奇クサロンVなどの誌上に掲載してまいりましたが、残念なこと、製版効果を考えずに鉛筆を用いたり薄墨ばかりでぼかしたり、色鉛筆で色どったりしたものがあります。又発表の限界を超えてリアルに描き過ぎたりなどで発表を見送る作品もあります。腕に自信をお持ちのイラストレーターの読者の方は、一度自作品を送り下されば詳細について、お返事差し上げたいと思います。

○尚、度々申し上げているのですが、当方の手違いで原稿料や賞金或は贈呈の写真などが遅延した際は御手数ながら御一報下さるようお願い申し上げます。

十一月号読後感：加瀬好男

十一月号は、僕にとって、久しぶりに楽しい号でした。目次をザッと見て、「アッ、あった、あった」と喜んだのは、僕の大好きな『せとよしや』さんが出ていたからです。（以前は『せとヨシヤ』って片仮名で書いてあったと思ってたけど、どうしたのかな）Mを扱った物でがっかりしましたが、読んでゆけば、例の通り、とりとめがなく、リズムミカルで、屁理屈調（セトさん、ごめんなさい）の文章に、なんなく乗せられてしまいます。

ところでこの『マリオネット』本年一月号の『カメレオン』とはうって変ったM小説。『カメレオン』は軽快なS小説で、S初心者が一人の娘をいじめる経過を追って行った物で、『花と蛇』のような濃艶さはありませんが、ストーリーを追っていった、軽く読める部類のものでした。「娘は本調子で泣き、二上がりで喚く」あたりのリズムは絶妙で、リズムミカルに読者を次から次へとさそい込みます。では今度の『マリオネット』は、と言うと、あの軽快なリズム

でどうやってM小説を書くのかと興味を持って読んだのですが、すっかり重厚な文章に衣更え、基調にある氏特有のリズムがなかったら同一人物とは思えなかったでしょう。『カメレオン』の様な一話一行という形式をやめるなど氏の苦心の跡が随所に見られます。氏の幅の広さ（性向、文章とも）にあらためて感心しました。でもこの『マリオネット』玲子タンの攻めの過程に中心をおき、宏の心理描写はまず無く、代りに氏独特の屁理屈調（再びごめんなさい）でかわしている所を見ると、SとMは裏表とは言いますが、やっぱりSが強いんじゃないかなあと思っています。どうですか。

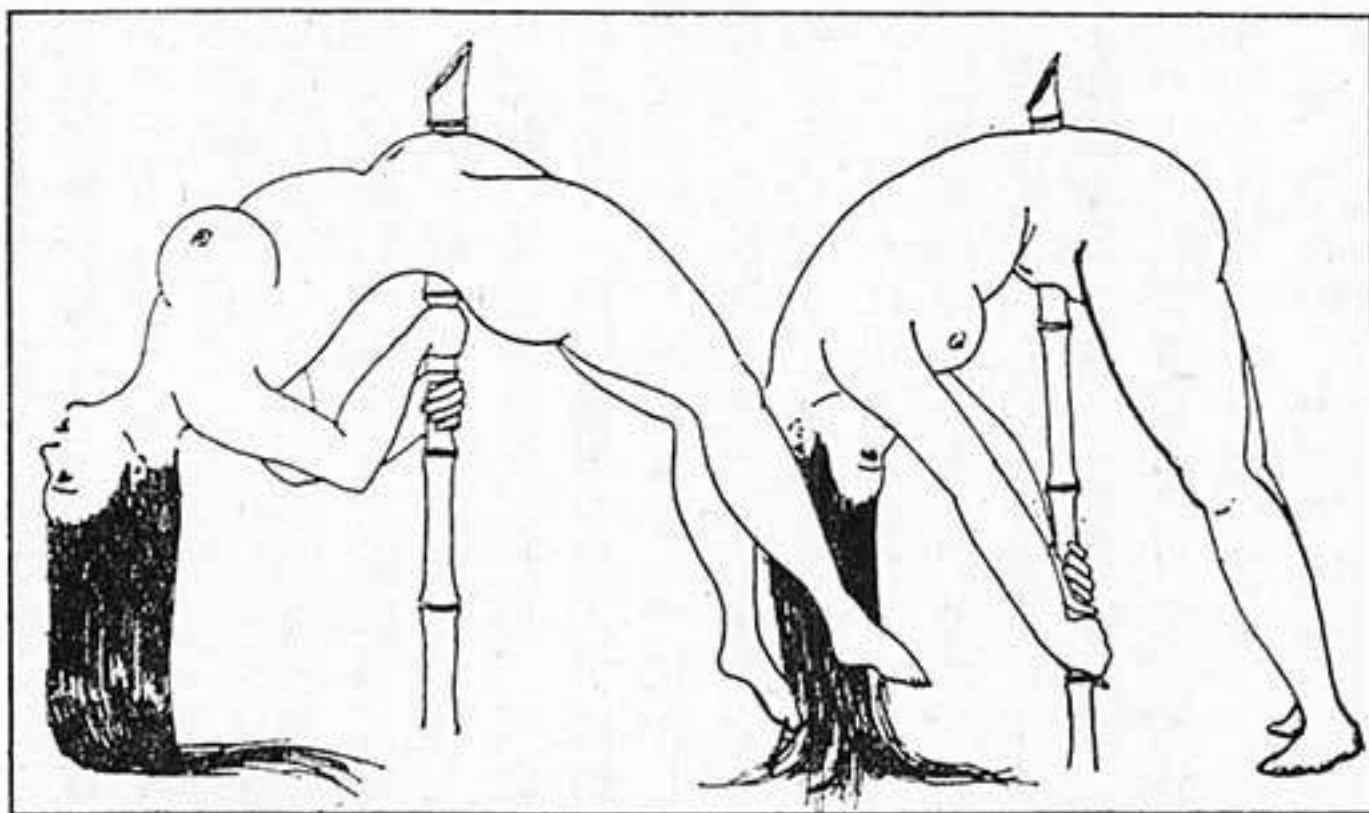
それから面白かったのは、『進化都市』。僕は、以前からSM小説にSF（これはサイエンス・フィクションの略の方ですよ）を取り入れたら面白くなるんじゃないかかと思っているんです。空想にまかせて、現実ではありえない、それでいて魅力的なSMが書けたらどれだけ楽しい事でしょう。SFを取り入れたSM小説。奇

クでは、去年、火星だか金星だかへ行くというのがあったと思います。それから、高浜満六氏の『鳥獣戯画』もはいるでしょう。あとは、三月号に『新・天路歷程』がありました。どれもみな面白い。

そして十一月号の『進化都市』あの当て字は、傑作でした。僕はケラケラ笑っちゃいました。『威覆』の当て字なんて、いかにもおどろおどろしくって、あの雰囲気にはぴったりで可笑しいですよ。でも、この文を読んだあとで、マルキ・ド・サドの小説を思い出して故郷へ帰ったような懐しさを感じました。そう感じませんでしたか。ところで、牧麗子さんで、どういうつもりでこの小説を書いたんでしょう。性（SM）の終着駅は殺人だと考えたのでしょうか。いずれにしても牧さん、あれだけの当て字、御苦労様。

SFだってその意味を広義にとれば、『鳥獣戯画』まで入って来るんだから面白いでしょう。餓飢趣味だなんて言わずに、もう一度考えなおしてみませんか。

次は、『オフィス・ガール』。すべて会話だけで書かれている割には、読者の想像力とびったりマツチして、うまく状況が書かれて

無惨画秘帖 桐原紫門
『竹藪の怪』（その2）

いますよね。可愛らしくまとまった（生意気言ってごめんなさい）いい掌編だと思います。すっかり好きになってしまいました。

今日は、SM小説をサイドから眺めてみました。もし、「そんな事は、一般文学にまかせておいて、あくまでも特

密室の怪事件

津 軽 嬢



『拷問開始』 旭
イメージ坂 須

風がゴォーと木の葉を散らしながら吹き抜けてゆく。窓という窓には、しっかり鍵がかけられ、外界とはすっかり遮断されてしまっている。シーンと静まりかえった部屋の中。重苦しい空気が、さっきから流れていた。

そこには男と女だけ……。

男（前に俯いている女のすき通るような首すじに、後から異様な目をギラギラ光らせながら）

「くそッ、今にたっぷりとおがましてもらうからな」

女は、そんな気配を感じたのかわずかに身をよじる。

男（太く低い声で——）

「おい、せっかくの物を、そんなに隠しておくのは、もったいないじゃないか」

女は一瞬、ビクッとしたように体を固くする。

男「見たって、減るもんじゃねえ。早く見せちまいな」

女（わずかに首をふりながら）

「イヤッ、そんなの」

男「後でいい物をたっぷり御馳走してやるぜ。さあ早く、手を上げるんだ。そうそう、ゆっくりと」

女（あきらめたように、ゆっくりと少し宛、手をずらしつつ）

「これでいいの？」

男（イライラしてくる気持を抑えきれず）

「まだはつきり見えねえぜ。もっと上へ上げるんだ」

女「仕方ないわ」
そう言いながらも、なおも手を

殊風俗文献であれば良い」と考える人がいらっしやったら、それは間違いだと思えます。団氏も「最近はいつとりとした文章を書く人が少なくなつた」と書いておられたのを覚えております。団氏の意

見に百パーセント賛成はしかねますが、やはり小説は、読ませる物だと考えている以上、こういう見方も面白いのではないかと思ひます。なお、手記はこの範疇には入りません。

男「思いきって、グワーと広げてみなよ」

女（待ちきれなくなつて）

「早くしてよ。ねえ、まだなの。こんな格好をしてるの、もうイヤよ」

男「そんなにあせるなよ。今に楽にしてやるから。こういうことは、ジックリと念入りにやるのがコツなんだぜ。あんまりきめ細かく並んでるんで、よく見るのに、手間がかかるぜ」

女「もうガマン出来ないわ。もうこれ以上イヤよ。お願い、もういいって云ってよ」

男「まだすっかり見てないんだぜ。これからいいところだから、そんなに隠さず、もっと、よく見えるように体を浮かせよ」

教師「こらッ、そこでカンニングしてるやつは誰だ！」

女「だから、早くしてって、あれほと言つたのに……」

——某高校テスト風景——

男（興奮に、うわづった声で）
「いいじゃねえか、上の方をすっかりさらけ出しちまつてるっていうのに、今更下の方は駄目だってことはねえだろう」

女は不安に胸をしめつけられるように、首すじまで朱に染めながら、腰をひねり、ジツと下を向いたまま、ゆっくりと拡げ、すべてをさらけ出してゆく。周囲の真白な部分と対照的な黒々としたものがチラチラと男の目にとび込む。

ゴム衣裳デザイン 婦人用ゴム引雨具 梅川 幸子

十年前まではあれほど多く見られた婦人用ゴム引レインコートや女児用ゴムマントも、いまではごく一部のゴムマニアのコレクションとして秘蔵されているか、あるいは想い出の中に存在するだけとあっては淋しい限りです。そこで私は、『こんな婦人用ゴム引雨具はどうかしら?』と考え、アイデアをまとめてみました。

① ゴム引ドレススリデザインとしては特に変わったものではなくつま先が隠れる程の丈長のワンピースです。肩幅、胴まわりは体にぴったりと仕立て、腰には巾広いベルト、スカートにはフレヤーを沢山つけます。袖口には、お台所仕事に着るエプロンのようにゴムを入れて手首をびっちり締め、着る時には頭からかぶり、背中のファスナーで締めます。生地は婦人用ゴム引レインコートと同様に裏にゴムを引いた羽二重や絹で、色は赤、ピンク、緑、うす茶、ブルー、薄鼠色などいろいろ欲しいものだと思います。

② ゴム引レインコートⅡ懐しい婦人用ゴム引レインコートのリ

バイバルです。着丈はうんと長くマキシコートのようにつま先が隠れるように致します。フードは大きいめに作り、男物のゴム合羽やゴムマントのフード同様、鼻から下を隠すベルトマスクを付け、風雨の激しい時は、これまで婦人用ゴム引レインコートには無かったために顔がビショ濡れになったりフードをとばされたりした欠点を補いましょう。なお袖口にも小さなベルトを付け、雨水が入らないように致しましょう。また、腰に巾広いベルトを付けるのは勿論でございませう。着丈は、特大サイズで一メートル三〇センチぐらいなら私にぴったりだと思えます。生地は①のゴム引ドレスと同様でも良いようですが、バイク用の合羽のように、やや厚手の裏ゴム防水布にしたいと存じます。色も①のゴムドレス同様各色にして、フードの裏は、女らしさを見せるためチエック模様の生地にしたいと思えます。

③ ゴム引マントⅡ何と書いても私にとってゴム引マントこそ書き落とすことはできません。着丈



乗馬の女性 アマゾンの面影

佐野 寿

日本では若い女性が馬に乗るということにはまだ一種のネタミや偏見があるようです。

う憶測は全く正当性のないものですが、外国では女性の乗馬が、生来の馬好きと母性愛の発芽的現象としてごく当たり前のことで別にとりたてていうべき事柄ではなく多くの婦人が乗馬を楽しんでいられるのです。

馬術そのものが、学生馬術を除き未だ一般には普及していません。乗馬をなさる婦人はサディステインであるうなどとい



はうんと長く、特大サイズで一メートル三十五センチぐらいにしましょう。問題はフードの形で、十年前までよく見た女児用ゴムマンツのように、フードに飾りのヒダが沢山附いて、大きな折り返したひさしがあり、雨の激しい時はそれを立てるようにしたものを参考ににして、この形のものを大きめに作り、ゴム引マンツにボタン止めにして、男物のような鼻から下を隠すベルト(マスク)のうんと巾広いものを取りつけて、襟も首すじも完全に包みこめるものを作りたいと思います。生地は①②のレインコート同様の厚手の裏ゴム防水布。又は普通のゴム引マンツ同様の表にゴムを張った木綿地。さらに表裏共総ゴム引きの布地などを考えています。色は、赤、ピンク。ブルーの三種は揃えたいものです。

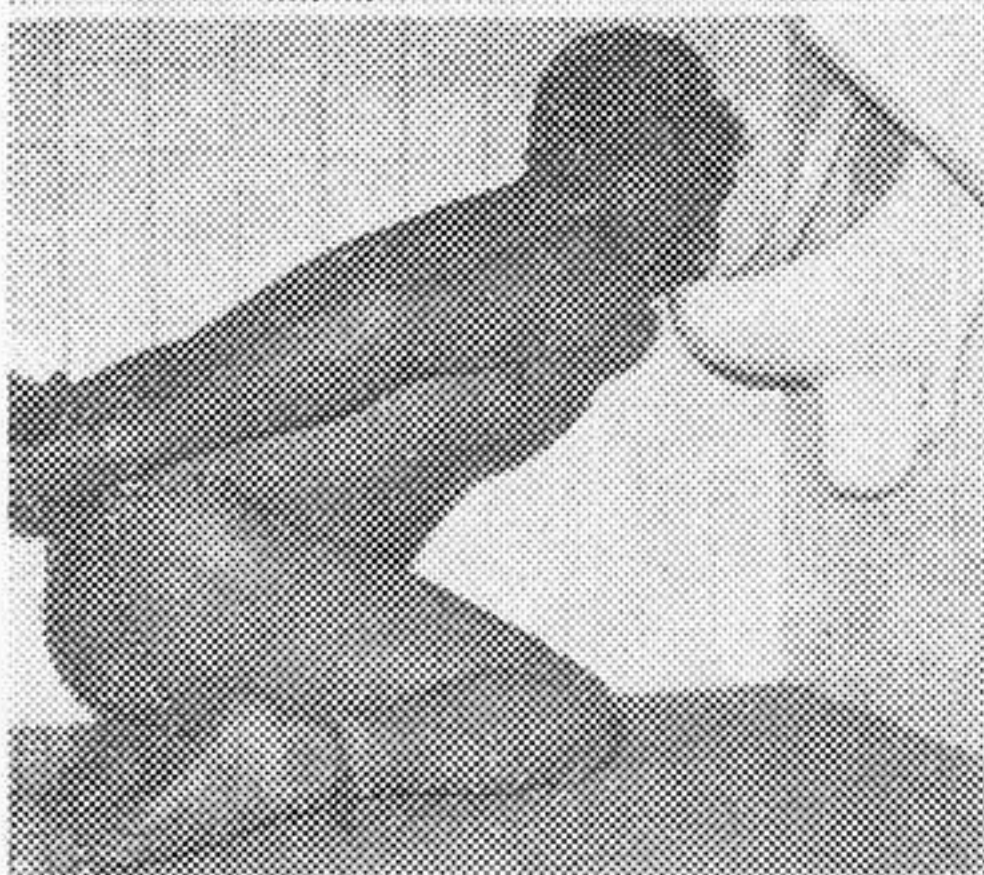
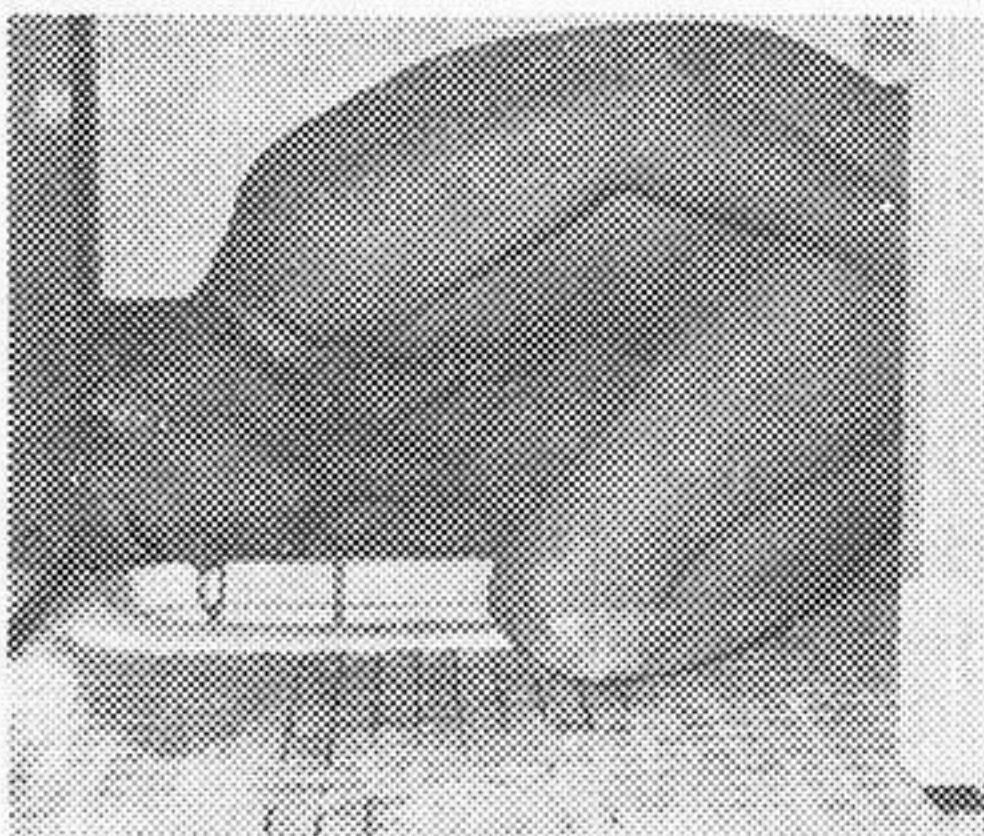
④ ゴムブーツ(長靴) 最近ハイレインという商品名で婦人用ゴムブーツがいろいろ売り出されていますが、私にはもうひとつもの足りません。もっとうんと踵を高くしたものが欲しいと思いますし大ききも二十四・五センチ(十文半)まで各種揃えられれば楽しいのですが……。もちろん、長さ

は膝まで届くもので、裏布付と裏布なしのものを作りたいものですし、色は赤、白、黒の三種は欲しいと思います。

⑤ 腰まで届くゴムブーツ 穿き口にベルトを通し、ぴったり締めつけて脱げないようにしたもので、色や文数は④と同様、いろいろ揃えたいものです。

M プレイ・フォト 犬 畜 生 変態犬のトイレ掃除

兼ねてより願望し、計画していたMプレイを実現出来ましたのでご覧いただきたいと思います。女ご主人さまの命令により、汚



左の写真は、雪景色をバックにシツクな馬装をして、これから遠乗りにも出掛けるところなのでしよう。

真冬の大地をさっそうと、手綱捌きもあざやかに馬を御して駆け廻る勇姿が、容易に想像し得るポーズだと思っています。右のは、乗馬学校の女流教師ブ

リジットさんだそうですが、このようなこともなげに、しかもしつくりと板についた馬装をした女性には、とても日本ではお目にかかれないと思います。

彼女は少女時代からの馬好きで毎日、数時間は馬をせめる、生来のアマゾンといえる方だそうで、馬術大会の優勝者です。

酷いお仕置が待っています。この醜い犬畜生は、トイレ掃除を一生懸命にやるのですが、あまり綺麗にしてしまうと、お仕置をしてもええないかも知れないので、きつとわざと少し汚れたところを残しておくことでしょう。

奴隷妻八重子の近況

橋 本 二 郎

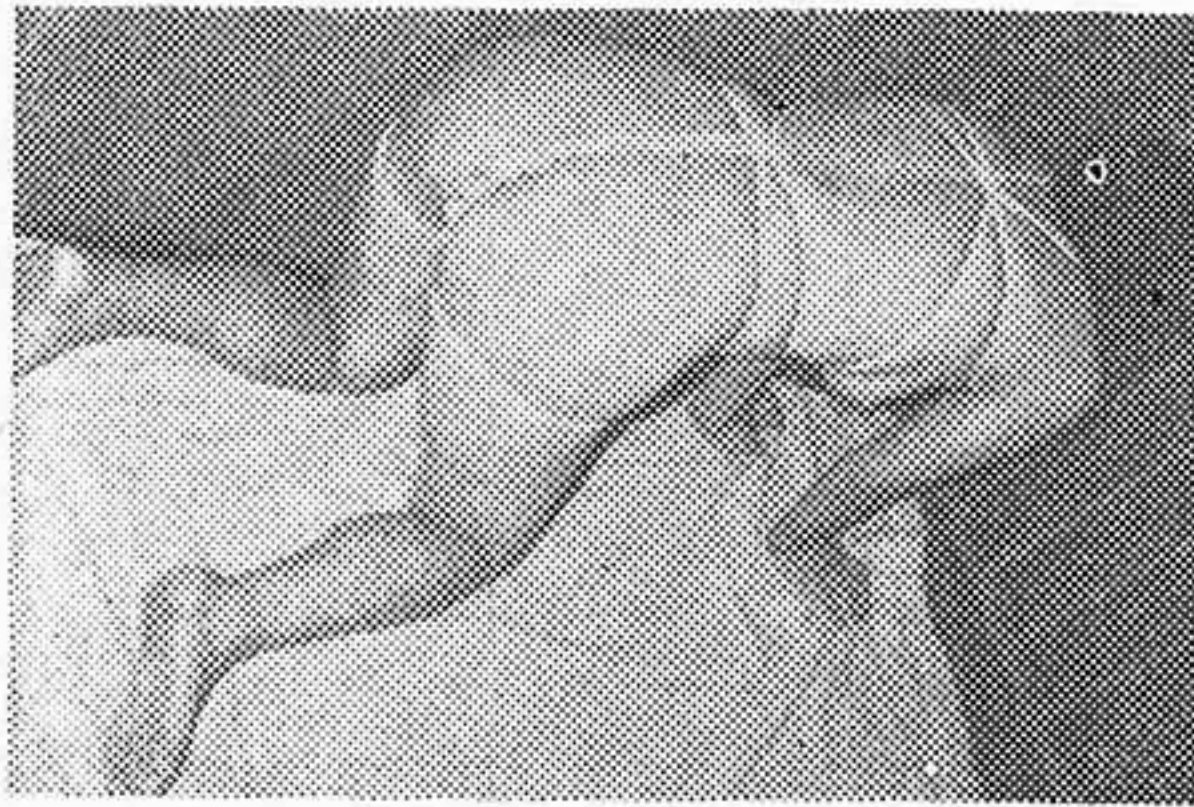
11月号で柴利好氏の一文を拝見しました。そのなかで、小生の妻八重子についても言及されているのを読ませてもらいました。

私のこのみは、肉体的苦痛を与えることより、いわゆる羞恥責めにあり、夫の行為をひたすら受け入れるように飼育しています。妻の地位は、ただただ夫への奉仕、よろこびを感じさせるようにつとめることが大事と観念させています。それは単に性的、肉体的な場面に限定されてはいませんが、ここでは、その側面について報告します。

昨年9月号の文章と写真でも述べていますが「飼育されている」ということを常時、意識させるこ



とが剃毛と鎖丁字帯の目的です。

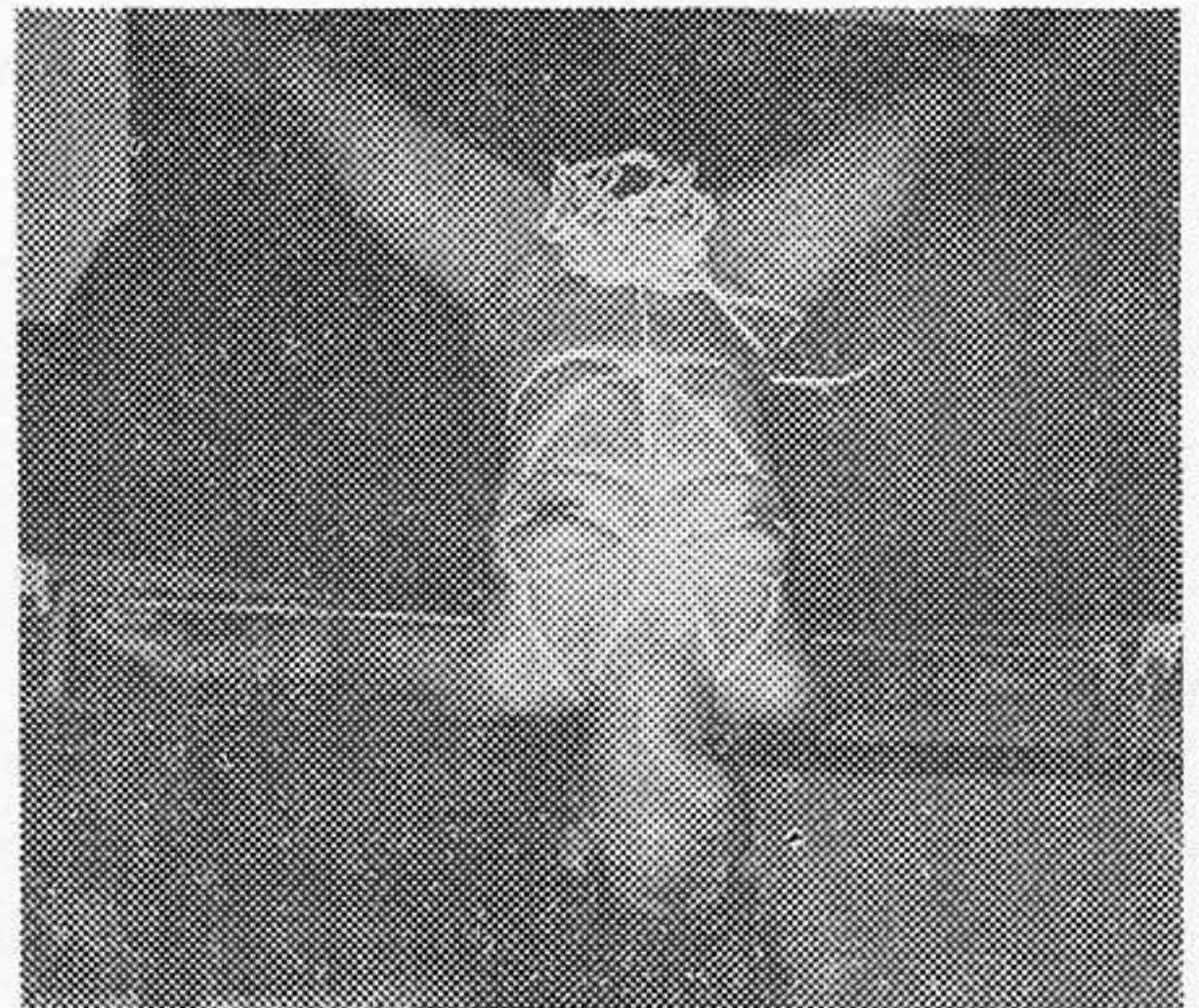


肉体的な苦痛に主要な目的はありません。それでも時々文字どおり胴鎖や縦鎖の締めつけをきびしくします。日常的にそのようなことは不可能です。肉体を傷つけ、病気にさせることになってしまいます。

八重子の日常の服装などについて記しておきましょう。特別の指示はしませんが異様にならない程度に配慮しつつ外出時など、あるいは室内で来客のあるときなどはシースルーのブラウスや胸のきれこみの深いセーターにミニのスカートを着用するようにしているようです。このときいたずら心をだして、下着をつけないでいることも、ままあります。

私と屋内で食事をしたりテレビなどをみるときや台所仕事をするときなどは、素肌にスケスケの超ミニのワンピースや、エプロンだけの姿にさせます。そして、できるだけ口実をもうけて肌を接触して刺激してやると、期待で眸がうるんできます。

ここから本格的な緊縛を実施の



うえ、牝犬のようにひきまわし屈辱にあえがせたあと、パイプと愛咬・鞭うちなどの併用によって悦虐の世界をさまよわせます。しばらく間をおいて深い結合によって八重子を夢の世界に送ってやるというのが昨今です。

(追記)

十月号で渡部好美夫人が辻村氏にカメラ・ハントされているのを見て、たいへんうらやんでいる様子。八重子もまた複数、交換プレイの実行を期待して待っている感じです。

夢の殿堂 プレイ用住宅 黒田 貴夫

この道に心を動かされてから永い年月が過ぎたが、考えれば考える程、本格的なSMプレイにふさわしい舞台というか、殿堂が欲しくなってきた。

たいていの人は、簡単に手の届くところで妥協しているのだろうし、かくいう小生とてホテル程度で間に合せているのが現状なの

だが、建築家という職業上、つい夢の殿堂を思い浮かべてしまうのである。

まず建物の規模としては、2階建てで一部が完全に地階になって、庭自体もプレイの場なのだから、附近に堀越しにのぞき込まれるような高い建物や、山などがあっては困るのである。庭木は、縛りつけ可能な枝ぶりを重視したい。

構造的には、少なくとも地下室部分は鉄筋コンクリート造りで防水層を完全に設置、床面は汚物汚水を流せる溝と、末端で完全処理の出来る浄化設備を完備する必要がある。

1、2階部分は、防音さえ完全ならば木造でもいいのだが、なんとか日本古来の土蔵造りの感じを出し、一部をヨーロッパ大陸にある石造り建築の感じを出したいものだ。勿論、鞭は縦横にふるえるよう、天井は充分高くして置く必要もあるし、固定鑑以外に、その折々に吊り及び張りに使用する鉤を取り付け得る梁や横木を埋め込んでおくことも忘れてはならな

いことである。

プレイ場を優先しての設計とはいえ、元来が住宅なのだから、もちろん居住性を失ってはならないので、住宅として必要な間取りは絶対条件だが、その一間毎に随時活用出来る責め用具設置を工夫しておきたい。

例えば、寝室や便所でも、二の部屋ともいえる小間を附して置き

・感想と批評・

ある新聞記事から

石部 金吉

先日、スポーツ新聞だったかと思うが、読んでいると次のような記事が載っていた。この記事は大きな新聞には載っていないかったかと思うので紹介してみると、
△新聞広告で募集した数人の女学生を使ってサジズムショー的なことをやろうとした犯人が逮捕されたVという簡単なもので詳しいことは書いていない。

新聞記事には、なにやら変態の青年が色々なサド的なことを女学生に強要するというもの。その中には、浣腸をして何分もつかでア

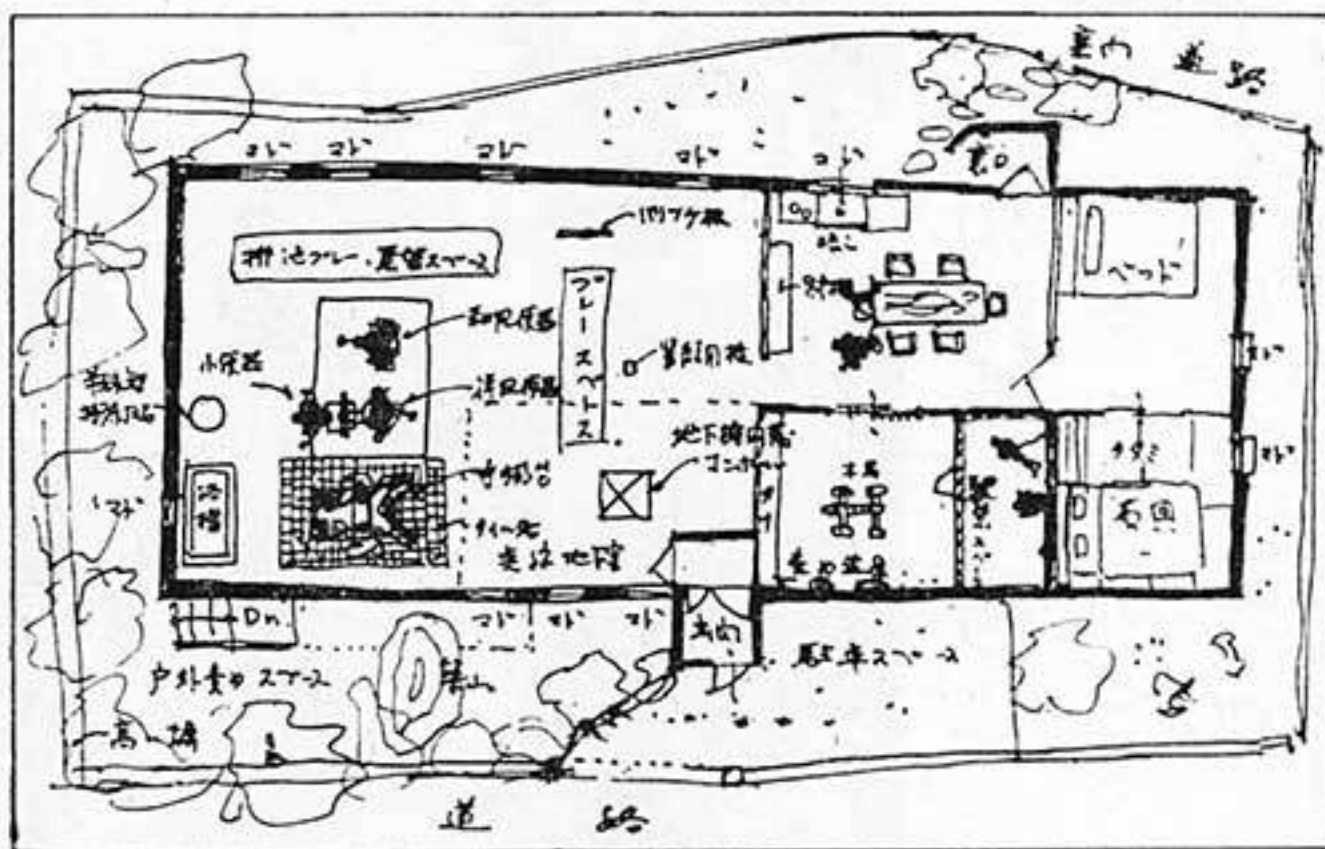
そこで縛り直したり浣腸施行などが出来るようにしたいし、便所自体にも、壁とか床に、小さなフタを開ければ丸環が顔を出すというような、隠し鉤を埋めこんで置くというようなのだ。

いつの日にか、こんなプレイ用住宅を建てて、愛する奴隷と住んでみたい。さぞ、勤めからの帰りが、楽しみになることだろう。

アルバイト料を払ったという。小生、思うに人間誰しも程度の差こそあれ、SMの気があると思

う。この新聞記事は平和なSM愛好家にとつて、決して良い記事とはいえないだろう。少なくとも、SMを犯罪行為と直接つながる方法で楽しむことは邪道である。

この犯人に言いたいことは、女学生を金でつって、変なことをするとは言語道断である。小生らSMマニアが迷惑することは勿論だが、SMプレイそのものが世間から悪く見られる。まあ、理解している者だけが楽しめばよいのだ。その点、平和的なSMプレイたるものが、もっと広く多く人に世間の中で理解してほしいという小生の願いに対して、こんな事件は逆効果になるのを恐れる。





『和装縛り』の

マニアから

山本五郎

某日、昭和三十三年三月号、同年七月号を馴染の古書店にて入手しました。なつかしい白表紙の雑誌です。牧高志先生の女体風俗、和装開眼の巻、相変らずの先生の艶筆に私の制作意欲も湧いてくるのですが、反面、圧倒されて私如きはほんの真似事、劣等感さえ覚えます。

牧先生のユーモア溢れる着物談義は楽しく又美しく、私の夢も広がってゆくのです。文中「女体は哀しく」が先生の御友人の話とし

て一寸出ていましたが、私も乙羽信子（だったと思います）のオイラン姿に魅了されたものです。

まさに江戸時代の華、現代ではわずかに吉原、島原に文化的遺物としてしか残っていませんが、和装趣味（緊縛）としての私にとっては垂涎物でした。伊達高尾の吊し斬りは夢にまで見たものです。

実際、私も日によって今日は着付も満足に出来て、体型も仕上り縄で最後の仕上げをした振袖人形を、そのままこわしてしまおうのが惜しくて、そのままの姿をガラスの人形ケースに入れて何時までも観賞していたという欲求にかられます。

デパートの人形売場に行けば日

本人形の舞踊人形が、さまざま並んでいます。そんな人形を見るにつけ、いわゆる緊縛人形もあってもいいと思うのです。左甚五郎じゃないけれど、京人形の踊子姿より縄にもだえる責め人形こそ私の夢なのです。テレビドラマの罪人形前手錠であつたけれど、花嫁のもたえ、私も必ず花嫁姿の責めをやってみせると心に固く誓っています。

只今新刊十二月号を御送付願いました。今手元にある白表紙の三十三年七月号とつくづく比較しています。十二年の開きがあるとはいえ、一貫した編集方針、あくまでも読者サービス

に徹した姿が見受けられます。その時代の読者の好みをよく反映しているのがその証左であると思います。時代の



流れと申しましょうか、好みといましようか、SとかMとか大別してみても、スタイルこそ違え根底に流れるものは一緒ではないでしょうか。七月号に載っているバックナンバーの総目次に時代物、着物談義の多かったことを知り、残念無念至極に尽きるといったところでは

主なるものを拾ってみても、昭和三十三年九月号より三十三年六月号までに、滝れい子画『いけにえの町娘』『舞妓』『舞妓受難』牧先生の『女体風俗』『白金紅次氏の『和装教室』今はときめく辻村塚本両先生の『腰元折檻』今月号

でなつかしの対面をした花坂道子さんの『和装縛り』等々きりがありません。

牧先生の『振袖人形』を読んで古いネガを探し出し焼付けてみました。御批評をお願いします。

実は私もこの二年程、カメラを手にしていません。私達二人に結婚以来十一年ぶりに子供が出来たのです。今、妻は育児に懸命になっていきますのでプレイの方は小休止の状態です。機会があれば、ぼちぼちやってみようかと思っています。まだ、今まで撮影に使っていない衣裳も残っていますので、その時を楽しみにしています。

最後になりましたが、十一月号の奇クサロンで丸出様より八夢は夜ひらくVと題した素晴らしい詩を頂き本当に有難うございました。私に貴方様の半分でも詩才文才が

ありましたらと羨しく思います。



『あなる・せっくす』について

阿部 丘 志

“アナルセックス”と“A責め”とは、似た点はあるけれども根本的に違うもので、なぜかというところは目的からいってクドクドしく述べるまでもあるまいと思います。

九月号に長谷田亀治氏が「あなる・せっくす」なる一文を発表されていましたが、氏のご体験はどちらを目的とされたもののなのだろうかとかクビをひねりました。

引用文から推察して、運搬用に訓練するために、あまり聞きなれない「塩酸ジブカイン」とか「バイブ」を駆使なさったのかとも思いますが、題名通りなら、私の体験からいって、一体なんの必要があるのだろうか、理解に苦んだからです。

氏は、団鬼六氏にアドバイスされるほどだから、経験豊富なお方とお見受け出来ますが、あの発表文は“A責め”が目的でなされた時のことだろうと思います。

題名の「あなる・せっくす」ということになる、なるほど容易なものとはいえないことは確かですが、私の体験上、氏のなされたほどの訓練は不要だと思っています。

問題は当事者同志の積局性如何に依ることだけでしょう。

長谷田氏は、小杉さんの通信文を、A拒否の文章として素直に受けとっておられるようですが、私としてはあの文面から、体験者のみが知る強烈な願望が脈々として波打っていると感じとれます。

“アナル・セックス”は別に今に始まったことではなく、我が国にても古来から“男色”の歴史があったことは周知のことですが、それらの昔の人々や、現在、少なからず居るホモの諸君が、長谷田氏のなされたような苦勞を経た人達ばかりとは思われません。

SM心理が、その強弱は別として大部分の人間共通のものであるのと同様に、私は、男女逆転願望も多くの人に内潜している心理ではないかと思うのですが、工夫一つでそれが出来ると思います。女が攻撃的な男になったような気分になれば、男が征伏される悦びを味わうという、全く転倒した倒錯の世界を私は好みますし、夫婦の倦怠感もずいぶん救われてきたと確信しているのです。

「最新版」 美貌女体緊縛写真コレクト集

X組百態 大手札型印画紙 (9×13 ㎝) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇円

十組十枚 一〇〇〇円

二十組二十枚 一八〇〇円

五十組五十枚 四〇〇〇円

百組百枚 七〇〇〇円

郵便番号 545-91

最近撮影の新しいモデルの緊縛写真の中で一粒選りの美しいものばかりを集めました。各組一枚です。お好きなものをお求め下さい。御注文の際の御指定はX組の何番とお書き願います。

☆

1 正面強烈亀甲縛 (大島 照代)
2 美貌は鞭に泣く (関谷富佐子)
3 襲う影に慄く (佐々木真弓)
4 弾む裸身に縄目 (佐々木真弓)
5 柱縛りで鞭打ち (関谷富佐子)
6 縛られて困るわ (金原奈加子)
7 私を襲わないで (左近麻里子)
8 縛られて嬉しい (中河 恵子)
9 麗わしの縛女体 (中河 恵子)
10 蒲団の上に狂う (関谷富佐子)
11 豊満女体の縄目 (大島 照代)

12 二つ折りの裸身 (川越美佐子)
13 痛打に哭く美貌 (関谷富佐子)
14 長身の脚を伸す (佐々木真弓)
15 若肌は縄に美し (長井葉津子)
16 恥らいの女体美 (中河 恵子)
17 何故私を縛るの (金原奈加子)
18 感泣する胴縛り (ローズ秋山)
19 猿ぐつわの悦虐 (関谷富佐子)
20 荷造り縛りの女 (中河 恵子)
21 足指はくの字に (佐々木真弓)
22 麻縄の柔肌責め (金原奈加子)
23 美しき亀甲縛り (左近麻里子)
24 柱縛りの隙間見 (長井葉津子)
25 緊縛全裸の極美 (左近麻里子)
26 海老責めの苦悶 (佐々木真弓)
27 全裸の縄は輝く (佐々木真弓)
28 猿轡と縄に泣く (川越美佐子)
29 縄に喘いだ童顔 (長井葉津子)
30 出脛を晒す縛り (佐々木真弓)
31 後手吊りの全裸 (長井葉津子)
32 首膝縄にあえぐ (長井葉津子)
33 大の字で晒す裸 (関谷富佐子)
34 全裸緊縛の哀愁 (佐々木真弓)
35 高手小手の全裸 (佐々木真弓)
36 真迫の縛プレイ (ローズ秋山)
37 豊満な裸身縛り (左近麻里子)

38 竹棒責めに悩む (大島 照代)
39 亀甲縛りで寝る (左近麻里子)
40 縄目に喘ぐ表情 (中河 恵子)
41 開股縛りの正面 (中河 恵子)
42 猿轡に喘ぐ緊縛 (左近麻里子)
43 縛りの肌を見て (金原奈加子)
44 私は縛りが好き (金原奈加子)
45 強烈縛りを味う (金原奈加子)
46 麗身を横たえて (左近麻里子)
47 二つ折に弾む胸 (佐々木真弓)
48 柔肌に縄は厳し (長井葉津子)
49 柔肌に痛む麻縄 (左近麻里子)
50 全裸の女体引廻 (中河 恵子)
51 開股縛りを諦観 (左近麻里子)
52 突き出した尻 (中河 恵子)
53 あどけなき緊縛 (金原奈加子)
54 首縄股間縛の女 (長井葉津子)
55 強烈後手で括る (佐々木真弓)
56 恥しい縛り初め (金原奈加子)
57 海老縛りで悶ゆ (関谷富佐子)
58 囁かれる緊縛女 (長井葉津子)
59 豆絞りの猿轡で (金原奈加子)
60 もう虐めないで (金原奈加子)
61 畳に転す股間縛 (金原奈加子)
62 女体は縄に映ゆ (左近麻里子)
63 全裸の縛を見て (長井葉津子)
64 答は柔肌を乱打 (関谷富佐子)
65 臀部に答は炸裂 (関谷富佐子)
66 この裸身を捧ぐ (佐々木真弓)
67 諦観の縛り表情 (長井葉津子)
68 足吊りで晒す肌 (長井葉津子)

69 美体は縄に映る (中河 恵子)
70 逞ましき臀部晒 (左近麻里子)
71 両手吊りに喘ぐ (長井葉津子)
72 左近麻里子の裸 (左近麻里子)
73 開股縛りの羞恥 (中河 恵子)
74 捧げられる女体 (中河 恵子)
75 鉄砲責めの女体 (左近麻里子)
76 麗わしの肌を縛 (佐々木真弓)
77 後手縛りの連続 (ローズ秋山)
78 開股の股間縛り (大島 照代)
79 強烈な縄目の女 (川越美佐子)
80 逆エビ責め地獄 (ローズ秋山)
81 豊麗な裸身の美 (関谷富佐子)
82 羞らいの流し目 (佐々木真弓)
83 肌を喰い込む縄 (長井葉津子)
84 胴締縛りと猿轡 (長井葉津子)
85 投げ出された裸 (金原奈加子)
86 正面の亀甲縛り (左近麻里子)
87 開股縛りの女体 (左近麻里子)
88 後手縛りの全裸 (中河 恵子)
89 柱に晒す強烈縛 (長井葉津子)
90 羞恥の脚挙げ姿 (佐々木真弓)
91 豊かな乳房誇示 (佐々木真弓)
92 美しい女の縛り (佐々木真弓)
93 股間縛りに羞う (長井葉津子)
94 ホステスの緊縛 (佐々木真弓)
95 椅子坐開股縛り (中河 恵子)
96 無防備な両手吊 (関谷富佐子)
97 息づまる猿轡 (川越美佐子)
98 人身御供の乙女 (長井葉津子)
99 両手吊で晒す肌 (金原奈加子)
100 爪先立つ強烈縛 (ローズ秋山)

「最近版」粒選り麗美女体緊縛力作写真

Z組 百態 大手札型印画紙 (9×13 縦) 極鮮明焼付

各組 一組一枚 (送料共)

四組四枚 五〇〇円
十組十枚 一〇〇〇円
二十組二十枚 一八〇〇円
五十組五十枚 四〇〇〇円
百組百枚 七〇〇〇円

(郵便番号 545-19)

大阪阿倍野郵便局私書箱第十四号
天星社宛お申込み下さい。

一枚一枚、いずれも一粒選りの素晴しい緊縛フォトばかりを集めました。お好みのモデルの、好きなポーズをお選び下さい。

☆

☆

11 10 9 8 7 6 5 4 3 2 1
鞭打条痕の臀部(関谷富佐子)
後手は高く縛る(佐々木真弓)
八の字の開股縛(左近麻里子)
狂う女体の表情(ローズ秋山)
縄に苦しむ長身(川越美佐子)
弄ばれる全裸縛(長井葉津子)
ゴム衣縛りの極(木村 洋子)
白肌輝く股間責(山原 清子)
全身縛りを吊る(大塚 啓子)
悦虐に悲泣する(関谷富佐子)
亀甲股間縛り晒(山原 清子)

37 36 35 34 33 32 31 30 29 28 27 26 25 24 23 22 21 20 19 18 17 16 15 14 13 12
開股強烈羞恥責(木村 洋子)
妊婦の太鼓腹縛(中河 恵子)
縛りの好きな顔(一宮百合子)
美貌の妊婦緊縛(中河 恵子)
縛りの全裸を見て(金原奈加子)
憂愁の佳人縛り(左近麻里子)
前面を晒す裸像(長井葉津子)
亀甲縛りの正面(左近麻里子)
後手縛を見せる(川越美佐子)
鞭は女体に炸裂(ローズ秋山)
逞ましき臀部晒(左近麻里子)
真白の柔肌責め(左近麻里子)
ムチ責めの果て(安井喜久子)
鉄砲逆海老縛り(関谷富佐子)
湯責めにあう女(山原 清子)
変型高手小手縛(川越美佐子)
洋子をいじめて(木村 洋子)
緊縛のホステス(佐々木真弓)
柔肌に喰込む縄(長井葉津子)
均斉のとれた体(佐々木真弓)
蜷涙責めの熱演(ローズ秋山)
脚吊りで責める(ローズ秋山)
片足吊りの狂態(大塚 啓子)
猿轡の開股縛り(木村 洋子)
股間縛の縄掛け(ローズ秋山)
妊婦仰臥猿轡責(中河 恵子)

68 67 66 65 64 63 62 61 60 59 58 57 56 55 54 53 52 51 50 49 48 47 46 45 44 43 42 41 40 39 38
二つ重ねの裸女(佐々木真弓)
縛られた洋裁生(長井葉津子)
椅子開股羞恥責(左近麻里子)
責め抜いた挙句(安井喜久子)
黒髪をいたぶる(大塚 啓子)
全裸の股間縛り(山原 清子)
黒総ゴム衣縛り(木村 洋子)
パンティを剥く(大塚 啓子)
緊縛に頬赤らむ(一宮百合子)
猿轡の妊婦縛り(中河 恵子)
全裸高手小手縛(長井葉津子)
黒髪をいたぶる(ローズ秋山)
後手の嚴重縛り(左近麻里子)
麗わしの妊婦縛(中河 恵子)
炸裂する革ムチ(安井喜久子)
剥がされた布片(金原奈加子)
浴槽と荒縄の責(山原 清子)
髪吊りの操り責(ローズ秋山)
高手小手の裸女(左近麻里子)
海老縛りに泣く(関谷富佐子)
恐怖の滑車吊り(大塚 啓子)
悶える全身縛り(一宮百合子)
伸びやかな素足(一宮百合子)
卓上の人身御供(左近麻里子)
皮紐の柔肌責め(中河 恵子)
股間縛を羞らう(金原奈加子)
宙吊りにもがく(木村 洋子)
裸身を晒す表情(金原奈加子)
輝く全裸の悶え(関谷富佐子)
全裸をもがく女(ローズ秋山)
豊満な臀部晒し(佐々木真弓)

100 99 98 97 96 95 94 93 92 91 90 89 88 87 86 85 84 83 82 81 80 79 78 77 76 75 74 73 72 71 70 69
乳房強調縛猿轡(左近麻里子)
媚を撒く縛り女(佐々木真弓)
縄のブラジャー(左近麻里子)
逆手吊りの鞭打(関谷富佐子)
逆エビで責める(ローズ秋山)
美しき緊縛立像(関谷富佐子)
悶える緊縛全裸(金原奈加子)
鞭で責める女体(ローズ秋山)
両手吊りで晒す(金原奈加子)
豆絞りの猿轡縛(川越美佐子)
あどけなき表情(金原奈加子)
厳しい縄目の肌(金原奈加子)
白肌にむごき縄(左近麻里子)
両手大の字吊り(関谷富佐子)
首縄縛りの裸女(佐々木真弓)
美しき全裸肢体(佐々木真弓)
柱に繋がれた女(長井葉津子)
尻挙げ海老縛り(安井喜久子)
鑑賞用全裸緊縛(川越美佐子)
荒縄縛りの刺青(山原 清子)
股裂きで責める(ローズ秋山)
ドレイ洋子の姿(木村 洋子)
後手に縛上げる(ローズ秋山)
滑車吊りの裸女(大塚 啓子)
若々しき緊縛美(佐々木真弓)
S男がいたぶる(佐々木真弓)
強烈縛りに喘ぐ(山原 清子)
正面全裸柱晒し(長井葉津子)
開股縛りに羞う(左近麻里子)
白肌に喰込む縄(大塚 啓子)
尻立て股間縛り(木村 洋子)
悦虐に泣く美女(安井喜久子)

〔優秀緊縛写真特選集〕

〔光沢印画紙極鮮明焼付〕

緊縛女体撮影風景

大手札四枚一組 略号 (むら) 五〇〇円

足挙げ開股責め

大手札三枚一組 略号 (あけ) 四〇〇円

猪 吊り三態

梨花悠紀子 略号 (いの) 四〇〇円

責め衣縛り

大手札三枚一組 略号 (せめ) 四〇〇円

強烈エビ責め

大手札三枚一組 略号 (ねむ) 四〇〇円

後手首の高縛り

玉田美佐子 略号 (ねへ) 四〇〇円

椅子またぎの責め

大手札三枚一組 略号 (ねと) 四〇〇円

全裸脚挙げ縛り

大手札三枚一組 略号 (てい) 四〇〇円

全裸アゲラ縛り

大手札三枚一組 略号 (てへ) 四〇〇円

全裸屈伸縛り

大手札三枚一組 略号 (てほ) 四〇〇円

強烈エビ責め

松本アサ子 略号 (まと) 四〇〇円

吊り打ち

大手札三枚一組 略号 (やり) 四〇〇円

股間縛り法悦境

大手札三枚一組 略号 (ぬこ) 四〇〇円

踊り子緊縛

大手札三枚一組 略号 (りこ) 四〇〇円

月経帯のまま縛り

遠藤百合子 略号 (ゆす) 四〇〇円

縄目に悶える夫人

関谷富佐子 略号 (ほく) 四〇〇円

髪を引き回される夫人

関谷富佐子 略号 (ほむ) 四〇〇円

膨満正面縛り

長野 良子 略号 (へな) 四〇〇円

マニヤ全裸緊縛フォト

栗本ミチ子 略号 (いな) 四〇〇円

強烈エビ縛り

関谷富佐子 略号 (もい) 四〇〇円

乳房責の苦悶

関谷富佐子 略号 (もろ) 三〇〇円

全裸ムチ打ち

関谷富佐子 略号 (もた) 五〇〇円

強打に泣く裸身

関谷富佐子 略号 (むち) 五〇〇円

裸身の晒し

関谷富佐子 略号 (わあ) 四〇〇円

全裸股間縛

関谷富佐子 略号 (せら) 五〇〇円

双胸の強調縛り

長野 良子 略号 (そう) 四〇〇円

動感海老責地獄

一塚 啓子 略号 (とう) 四〇〇円

色禪の開股縛り

長野 良子 略号 (いふ) 四〇〇円

鼻責めのアップ

大塚 啓子 略号 (はす) 四〇〇円

乳房しばり

長野 良子 略号 (うは) 四〇〇円

鼻責めと緊縛

大塚 啓子 略号 (うい) 六〇〇円

木馬責三態

大塚 啓子 略号 (もく) 四〇〇円

椅子責めの果て

大塚 啓子 略号 (いす) 四〇〇円

檻に入れられた女

山原 清子 略号 (もの) 三〇〇円

浴室の全裸刺青

山原 清子 略号 (よな) 六〇〇円

鼻いじめ三態

山原 清子 略号 (はね) 四〇〇円

鼻責め万華鏡

山原 鈴木 略号 (はた) 二〇〇円

碧玉裸身緊縛

刑部 典子 略号 (のん) 四〇〇円

くすくす責め地獄

大塚 東浦 略号 (きす) 四〇〇円

灼熱の蠟涙責め

大塚 東浦 略号 (きせ) 五〇〇円

豊満な乳房を責める

大塚 東浦 略号 (きそ) 七〇〇円

女奴隷を飼育する

大塚 東浦 略号 (きて) 七〇〇円

凌辱されるマゾ女

大塚 東浦 略号 (きと) 七〇〇円

鼻責め悦楽

大塚 東浦 略号 (きな) 三〇〇円

全裸強烈羞恥縛り

東浦 ひかる 略号 (なの) 四〇〇円

猿ぐつわにあえぐ裸女

東浦 ひかる 略号 (なむ) 四〇〇円

全裸の緊縛姿態開陳

遠藤百合子 略号 (ゆり) 五〇〇円

☆浣腸関連資料の部☆

只今浣腸実施中

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かみ)

強制空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かく)

百CCのポンプ浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かな)

浣腸責の極致

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かむ)

女体浣腸シリーズ

大手札十二枚一組 略号 (一五〇〇円)
梨花悠紀子 略号 (れち)

強制女体浣腸三態

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
絹川 文代 略号 (きか)

イルリガートル浣腸

大手札十二枚一組 略号 (一五〇〇円)
梨花悠紀子 略号 (いるり)

太い浣腸器で浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
東浦ひかる 略号 (かふ)

自分で浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆか)

浣腸器と女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
絹川 文代 略号 (ほの)

エネマ・シリーズ

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るい)

イルリの嘴管挿入

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るは)

女体浣腸プレイ

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ほは)

進ばしる浣腸液

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ほい)

浣腸後の排便

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (へき)

便意に苦悶する女体

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (へか)

浣腸される清子

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
山原 清子 略号 (かる)

浣腸に興ずる女

大手札八枚一組 略号 (一三〇〇円)
山原 清子 略号 (かへ)

浣腸に悶える女

大手札七枚一組 略号 (一二〇〇円)
山原 清子 略号 (かに)

イルリガートルの浣腸

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けか)

オシメと下着着脱

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けひ)

イルリガートル

大手札十枚一組 略号 (一五〇〇円)
山原・東浦 略号 (かも)

オシメの中へ排便

大手札五枚一組 略号 (七〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けま)

浣腸後カバー装置

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
大塚 啓子 略号 (けさ)

浣腸と便意の苦悶

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (のけ)

高圧空気浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (むい)

浣腸場面大写真

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (むは)

施される浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (むろ)

浣腸をする女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
遠藤百合子 略号 (ゆか)

自ら施す浣腸

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ちぬ)

浣腸器を弄ぶ女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ちり)

浣腸を施される女

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ちら)

浣腸後介添排便

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かね)

グリセリン溶液注腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かて)

シリンドーにて浣腸

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かた)

イルリガートル嘴管挿入

大手札六枚一組 略号 (一〇〇〇円)
山原・東浦 略号 (かち)

ア・ヌス浣腸補助

大手札四枚一組 略号 (七〇〇円)
山原・東浦 略号 (かの)

浣腸に興ずる清子

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
山原 清子 略号 (うも)

浣腸される浣腸マニア

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
山原 清子 略号 (うわ)

浣腸悦楽独りプレイ

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
美木乃々子 略号 (ぬる)

施される浣腸の美味

大手札五枚一組 略号 (六〇〇円)
美木乃々子 略号 (ぬか)

挿入された嘴管

大手札四枚一組 略号 (五〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るて)

襲いくる浣腸器

大手札二枚一組 略号 (三〇〇円)
大塚 啓子 略号 (るち)

女体浣腸独り遊び

大手札三枚一組 略号 (四〇〇円)
大塚 啓子 略号 (ると)



いうのは、さびしいことだ。これは奇クにあるまじき現象である。

（東京・石神井生）

先月お送りしましたフィルムにはピンボケが多く誠に申しわけありませんでした。今回は十分に注意をしてみましたので多分大丈夫だと思います。臨月腹切腹、臨月股間縛り、臨月排泄、臨月腹鞭打ち、臨月立姿と五つのポーズが写されております。

（東京・佐野みさ子）

十一月号はM小説が多かったので非常に良かった。中でも『マリオネット』は坂野スタイルで、どちらかと云えば陽性なムードをたたえていて独特であった。これは「Mポルノ」として全面緊迫に満ち、一つのしっかりとした作品に一応まとまっているのだが、八洋子Vの出現（洋子の洋は大洋を連想させるではないか）によって、より興味ある展開を暗示された読者としては、作者に続篇を願うのは当然デアルと思われる。それからS関係のシバリ写真は沢山載っているのに、女王様に組みしかれたり、足をなめさせていただいているようなMの写真が全く無いと

豊田慶子様、正直いってびっくりしました。私も延岡に住んでいます。まさか延岡にSMに理解のある人が住んでいたとは。奇クを愛読し始めてから約五年になりましたが、その間SMについて話し合える友もなく、さびしかったですね。こんなすばらしいことを、何故理解してくれないのだろうか、世間の人が憎かったです。ふとんに入って、いろいろ想像するの、これが私の一番の楽しみであり喜びでした。私も二年前、東京から帰って来ました。東京にいた時は奇クを買うのも苦労しませんでした。延岡に帰ってきてからは苦労のし通しです。市内の本屋

を片っぱしから探して、やっと見つけた時のうれしさ。しかし、その本屋も入荷するのはたったの二冊、それも入荷しない時があるそうです。そのため、買えない時もありました。買えない時のくやしきは、その日は、やけ酒です。しかし延岡も、ちょっとすてたもんじゃないですね。何故なら、Mの女性がいたんですからね。私はもちろんS。ただ残念なことに年が若い。22才です。本当は年令なんて関係ないんですけどね。今、私の財産といえば、車とステレオ、それにギター、カメラ、これだけ。カメラは持っているけど女性をとる機会がなかったため、お世辞にもうまいとはいえません。でも、貴方と接触したい。お便りお待ちしております。

（宮崎県延岡市・花井保）

御誌を読み始めるようになってから約五年になります。大阪地下街古本店で初めて知ってから、気のつくまま読んでいましたが、今回転勤になったのを機会に直接購読にしました。これによって、今まで時々買えなかったりした事になくなり、毎月きちんと送られてくる楽しみは又格別です。

買いに行く必要もなく、買いはすれもなく、また密封して送ってくれるのも都合よく、直接購読にして、本当によかったと思います。それに毎月新刊を手にしてみて、読みごたえのある点、やはり御誌の伝統の力でしょうか。ずらりと揃った雑誌を並べてみて、時折り返し読み返したりしています。最近では六月号のカメラルポ「金髪碧眼の美女を縛る」に最も感心しました。金髪緊縛は今までになかった事で今回が初めてではないかと思えます。日本女性とはまた違った格別の趣きがあり、本当に新鮮な作品でした。ライティングも良く、とくに一九四頁の、何かの台に縛られ髪をひっぱられている写真、二〇〇頁の逆海老縛りが良好でした。ただグラビアでない悲しさで、やはり鮮明さに劣る点があった一つは残念な点です。最近の御誌はS、M、ホモ、レズなど非常に多くの分野を取り上げているため、昔に比べて総花的になってきているような気がします。そこである月はS特集、またはM特集をするなど重点特集をやってはどうか。もし特集が無理なら隔月刊ぐらいで本誌とは別にS特集号、M特集号などを刊行できな

いでしょうか。最近各書店からS M世界文学、日本文学など出ておりますが、これらは何かもうひとつ、つっこみが足りない感じで、うわべだけの描写に終わっている感じがします。やはり長い伝統の奇くにはかなわないというところでしょうか。今まで奇くに掲載されて評判のよかった各読物の中から、S、M、その他の三つ位にわけ、リバイバル特集などをやってはどうでしょうか。ずっと昔の奇クの名作に接するというのは思うだけでも胸おどる気がします。いろいろ書きましたが、最近になってやっとS、M、その他が世間に堂々とまかり通るようになってきた現在（すなわち、気の弱い一般の人々もやっと自分が望んでいた事がかなえられる様になった今）伝統ある奇クの発展を祈ります。

（三重県・丸木戸砂土）

〓御送金についてのお願い〓

現金を普通郵便物に封入することは、郵便法によって禁止されています。現金での御送金の場合には必ず「現金書留」でお願い致します。他に、振替等の方法もあります。ご利用下さる方も、便宜上「切手代用」にても結構ですが、必ず一割増にお願い致します。

〇

はじめてお便りを差上げます。

結婚後三年余り日夜、主人の飼育を受けまして今ではすっかりマゾの世界に溺れきってしまいました。今二十六才の人妻でございます。今宵も夜の白む頃まで生まれたままの丸裸を雁字搦めに縛り上げられ浅ましくも羞かしい数々の調教を受けました挙句、わずかにペンを握れるだけの右手の自由を許され主人に強制されつつ、このお手紙を認めております。わたくしたち夫婦プレイは、団鬼六先生の「花と蛇」の被虐の場面をお手本にさせて頂き、それに時には主人が新しい責めのアイディアをつけ加えて下さいまして、実演しております。わたくしは静子の役、主人は捨太郎様等、一人でいくつもの役を兼ねております。毎月奇ク誌を手に入れますと、主人はすぐ「花と蛇」をシナリオ風に書き改めまして、わたくしを一糸まとわぬ全裸にして縛り上げ、革鞭を片手に静子の台詞を、徹底的に覚えこませるのでございます。この場合、一言一句の間違ひも許して貰えずもし間違えますと、それはそれはげしい鞭打ちのお仕置をされま

すの。わたくし自身、あまりひどい苦痛を伴いますようなお仕置を好みませず、何とか鞭打ちだけは止めて貰うよう頼むのですが、主人は容赦してくれません。この点羞恥責めが主体で鞭打などの責めを余り使わない森田組の女奴隷静子を本当に羨ましく存じますわ。台詞を覚えますと実演に移るのでございますが、口のきき方、身のこなし方など、わたくしが身も心も静子になりきっておりますと主人は承知しませんの。このため今までどれほど鞭の洗礼を貰ったか分かりませんわ。幸い、わたくしは静子と同じ年でございまして体つきも自分自身で申し上げますのもおかしいのでございますが、どちらかといえば静子に似て肌の白い豊満なタイプでございますので、心の底から静子になりますように一生懸命に努めまして、今では実演中、すっかり静子になりきることができるようになりました。主人が撮りましたわたくしの全裸の緊縛写真とか、セルフタイマーを使いましたの夫婦プレイの写真も、アルバムは何冊分も溜まっておりまして、主人は二、三枚でもよいから是非お送りして誌上に発表して頂くようにと申してお

りますが、わたくしには、とても全裸の浅ましい写真を読者の皆様に御覧になって頂く勇気がございませんの。写真の現像焼付はすべてわたくしの仕事でございましてこのときだけは手足の自由を許されるものの、主人が勤務に出ました留守の間、ずっと暗い暗室の中に丸裸のまま閉じ込められ、自身の惨めな被虐の写真を何枚も何枚も焼付けなければなりませんの。わが家には地下室のようなものがございましてこの暗室が女囚の牢獄を兼ねておりますの。金盥一つ、毛布一枚を与えられ、静子と同じように身を隠す一片の布切も許されぬまま、幾夜この暗室に閉じこめられて過ごしましたか分かりません。「花と蛇」を毎月欠かさず連載して下さいませ。それに毎月、必ず静子を登場させて下さいませ。「花と蛇」の載っていない奇ク誌は全然、魅力がございませんし、静子の登場しない「花と蛇」も余り魅力がございませんわ。できれば静子の台詞をなるべく多くして頂き、静子になるべく淫らな言葉を使わせて下さいませ。主人は毎月、静子の台詞を考えますのに、かなり苦勞しているようです。その他、わたくし自

身、静子になりきってその役を何
度も実演させられ、このような責
めを是非、静子にも強制して頂け
ればとか、このような場合は女の
身にとりまして、とても惨めで、
とても耐えきれぬほどの屈辱を感
じますような、数々の希望とか、
思いつきがございしますが、それは
また別の機会にお便りを差し上げ
たいと存じております。このわた
くしは、このお手紙を書き終えま
すと、素裸のまま主人の朝食を準
備しまして、また暗い牢獄へ戻り
一日中閉じ込められて昨夜の写真
を現像しなければなりませんの。
右手だけの自由を許して頂きまし
て認めましたこのお手紙、さぞか
しお読み難いことと存じます。ど
うかお許し下さいませ。最後に主
人はこのお手紙の末尾に、女の身
の一番羞かしい箇所ペンを持ち
かえまして「まりこ」とサインす
るように申しております。しかし
そのような羞かしいことは、とて
もわたくしにはできません。この
ため今夜は、またひどいお仕置を
頂戴する覚悟でございます。どう
かそのようなことは何卒お許し下
さいませ。
(北川まりこ)

○
浜口里子さん、貴女がもし本当

にお手紙のようなことで苦しんで
おられるとすれば、それは大変、
よくありません。そればかりか、
神聖なる教壇での仕事にさしつか
え、果ては自分のM性にうしろめ
たさを感じ、二十八才ですでにオ
ールド・ミスなどと自らを言わし
め、やがて固くその身を貝のカラ
に閉ざしてしまおうでしょう。不健
康なことですよ。一日も早く、良き
理解ある夫を得、第二の人生を送
るべきではないでしょうか。夫婦
でSMを楽しめる先輩として、忠
告します。さて、貴女の恥かしい
という願いごとですが、東京には
無数のSMハントグループがある
と言われているもの、実際に
は週刊誌やマスコミ等で取り上げ
るほど、その数と質は、さだかで
はありません。プレイそのものは
始まってしまえば、もう妄想も空
想もありません。ただ、深く深く
貴女の身体に、心の奥底に、被虐
を甘味する、もう一人の貴女が宿
りゆくのです。見知らぬ男達に着
物を破り捨てられ、素裸のままキ
ュツと縄をさばき、自由を奪われ
て行く里子——乳房を真二つにく
びるように喰い込む胸の縄。手首
は背の後ろで痛々しく縛り上げら
れ、数人の男が両の足首を力一杯

安井・中川・金原緊縛写真

大手札印画紙極鮮明焼付フोट

開股羞恥責めの姿態

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八しう

髪吊りで強烈ムチ打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八した

片足首引きつけ縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八しち

尻立て鞭打ち艶姿

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八しつ

柔肌に炸裂するムチ

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八して

エビ縛りの鞭打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八しと

貞操帯着用鞭打ち

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八しや

痛打にもがく美女体

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八しゆ

あぐら縛りの羞恥責

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
安井喜久子 略号 八しよ

片脚挙げで晒す裸身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とは

強烈エビ縛りで苦悶

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とに

膝頭縛り開股竹棒責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とほ

竹棒開股足首縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とへ

股間縛りの裸身表情

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とち

菱縄縛り猿ぐつわの表情

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とり

乱痴戯騒ぎの結末

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とぬ

菱縄縛りで床に喘ぐ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とる

浣腸責めの甘い恐怖

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とか

浣腸液の注入直後

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とま

強制浣腸の各姿態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とみ

浣腸責め的美態開陳

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とめ

浣腸を待つポーズ

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
中河 恵子 略号 八とも

左右に引きさいて行くのです。こうして屈辱を受け、やがて鞭やロースク、パイプ等で責められ、Mの世界で歓喜の声を上げる貴女の肢体を、小生の腕で写真に撮ってみたいと思います。いかがでしょう。腕には十数年の自信があります。女体にモチーフする縄の味を知った喜びの表情や、苦痛にもかく裸身の己れの美しさを、一生、残しておくのも一案と存じます。勇気を出して、人の前に現われてくれることを願ってやみません。

(東京・井上雅人)

小杉千恵様、ご結婚なさるそうで、心から、おめでとうと申し上げます。あなたのようなすばらしい女性を妻にする男性が羨ましく小生も、せめて十年若ければ……と残念でなりません。小生は現在西宮に、住んでいます、生まれは神戸です、勤務先も三宮です、非常身近かな感じがし、まだ見ぬあなたに強くあこがれている次第です。どうか結婚後も本誌のために、ご健筆をおふるい下さい。

(西宮・長谷田亀治)

私は当四十二才の自活している女性です。妊娠した経験がござい

ません故、肌と乳房に自信を持っております。現在、十才年下の男性と割り切った交際をしており、その彼が奇譚誌五年來のファンで毎月欠かさず購入した奇譚誌を手に本に？ 私はいつのまにかM女に飼育されてしまいました。しかし例にもれず、そのプレーにも少々マンネリ化をおぼえ、それを裏づけるが如く最近の彼は真剣にプレーに取り組んでくれません。だが一度マゾに飼育された私の女体は、この快美な被虐感を、もはや止めるすべをしらず、もちろん、読者通信に投稿するなど彼の半強制的許しがあったること。こんな中年女でもプレーと交情を求められる方がおられたら……と、お便りした次第です。

(東大阪市・鯖 初子)

辻村隆様、貴方のカメラ・ハントを毎号楽しみにしております。でも最近、どうも人妻ハントに片寄っており、少し残念に思っております。なるほど、他人の手活けの生花の味、風情ともに辻村様ならずとも撮りたいテーマに違いありませんが、二十才代のマニヤにとっては、たまには若い子の縄に悶える姿も鑑賞したいと考える

可憐表情の全裸縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆめ

立縛り正面裸晒し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆえ

両手吊り全裸晒し

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆひ

雁字搦目後手縛り

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆあ

股間縛り柔肌責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆも

猿ぐつわ開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆに

豊満な臀部強烈責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆほ

強制全裸開股責め

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆみ

股間縛り悶える

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆる

全裸縛りに羞らう

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
金原奈加子 略号 八ゆへ

私の妊娠腹を見てね

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八ゆわ

縛られた妊婦横臥す

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八ゆよ

被虐に燃える全裸妊婦

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八ゆぬ

尚も見せたい妊婦腹

大手札四枚一組 略号 五〇〇円
中河 恵子 略号 八ゆる

股間縛り首縄正面

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よれ

両手吊り正面晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よそ

全裸高手小手の麗身

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よの

全裸股間縛りの媚態

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よや

強烈な変型エビ縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よい

正座猿ぐつわの仕置

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よふ

凄絶海老責め地獄

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よえ

女体二つ折り縛り

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よぬ

あぐら縛り全裸晒し

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よあ

イルリの浣腸責め

大手札三枚一組 略号 四〇〇円
長井葉津子 略号 八よた

のも無理からぬことでしよう。かつての小池美喜や佐々木真弓は最高でした。どちらも別々の相手とはいえ、レスビアンヌであると聞き及んでいます故に、ぜひ辻村様が仲人役をしてあげた上で、二人の歓喜を撮影なさっては如何がでしようか。二人のマニヤを相添わせるのはマニヤである貴方の義務かと存じます。ぜひ、美喜か真弓を再々度登場させて下さい。

(明石・ミキマユミのファン)

東京の浜口里子様、ぼくもSMという世界にとりつかれて苦しんでいるものの一人です。何度か止めよう、忘れてしまおうと思ったことでしょう。けれども欲求は大きく激しくなるばかりでした。ぼくはSMなしでは、とても生きていけないだろうと思います。ぼくは空想しています。あなたを丸裸にして荷物のように縛りたいと思います。丸いお尻には「奴隷、里子」とマジックで書き、脱がせたばかりのあなたのパンティで猿ぐつわをし、ぐるぐる縛って一日中押入れの中にとじこめておいてもいいと思います。あなたが言われるように首輪をはめて四つん這いにして丸裸で生活させてあげても

いいと思います。ぼくの空想は無限に広がり果てしなく続きます。

(東京・川口治)

積極的な佐野みさ子様よりのSMを求める寄稿が十月号に見出せず非常に残念に思っております。満足せるパートナーでも現われて今頃あの堅肥りのむちむちした肉体をのけぞらせていらっしゃるかもしれないと思うと、嫉妬さえ感じております。妊娠なさったそうですが、それなら少しずつ膨らみを増すお腹を毎月、鑑賞させて下さい。貴女らしいSMフォトを、ぜひ発表して下さい。(乃美対造)

毎月、奇クサロンを読むのが楽しみです。十月号は編集後記でも述べられていたように「夫婦プレイ特集」の感じでしたが、こういった特集もよいと思います。どのご夫婦もSMプレイを夫婦生活にプラスされ、お幸せなかりで羨ましく思います。三浦敬一さまのフォトは非常によろしいが、ただ乳首の処に縄がぶら下っていたのが気がかりでした。兵庫・収さまのレス・プレイのフォトに縛りのないのが不満で、SMも加えてほしいところです。井風呂秋於さ

大手札印画紙焼付

〔緊縛女体美のシリーズ〕

両手吊りに悶える女体

大手札印画紙焼付 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もえ▽

強烈なる甘いムチの洗礼

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もゆ▽

ムチに狂い哭く美貌の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もよ▽

半吊りでムチ打つ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もす▽

逆エビの味に感泣する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もせ▽

ムチの一打に反りかえる

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もれ▽

関谷夫人の女体陳列

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もる▽

尻立ての鞭撻ポーズ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もて▽

片足吊り挙げて喘ぐ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もな▽

私をムチ打って頂戴ネ

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もね▽

脂ぎった女体を縛る

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もむ▽

鞭は柔肌に炸烈する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もう▽

滑車吊りに甘い鞭

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もき▽

両手万才吊りに鞭打ち

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もこ▽

狂う鞭に哀切表情の夫人

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△もみ▽

浴後の剃玉子縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はゆ▽

投げだす白い緊縛裸身

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はよ▽

待望の脚挙げ緊縛姿態

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はて▽

二つ折り女体エビ責め

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はお▽

柱の前に緊縛された全裸

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はの▽

神妙なプレイ寸前の女身

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はひ▽

ま、編集部を通じてお送りくださいました、あなたさまの女装フォト八葉は確かに入手しました。お礼の言葉が大変遅れたことを深くお詫び致します。いずれもよいできばえで、本当の女性と較べても全く負けません。カメラアングルによっては、私の好きな歌手の園マリや女優の野添ひとみに似たところがあります。とても美しく、私などは、とても足もとには及びません。私も近く女装フォトを撮るつもりです。できればお礼のしるしに差し上げたいと存じています。十月号の実験「責めの部屋」を拝読いたしました。作品に出てくるような彼は、本当にいるのでしょうか。プレイの相手としては好ましくないとします。フィクションとしてならば、これも刺激を高めることでしよう。先日、思わぬ夢を見ました。井風呂さまとプレイしている夢です。女装の私がブラジャーとバタイだけという恥かしい姿にされて十字架にかけられ、女装した井風呂さまからいろいろ責められているというものです。とんでもない夢で、ごめんなさいね。では、これにて……。

(大阪・中村 純)

○ 貴社発行の奇譚クラブを偶然のこととて手にして読む内に、SMの本能に強い衝動と共鳴を感じ、日増につのる空想を現実化したい欲求にかられ、御手紙を差し上げる次第です。SMについては、まるっきり知識がなく、率直に申しまして縛ってみたい、縛られてみたい本能に悩まされ、具体的な方法がなく、貴社の企画の中で愛好家の集いの折に加えていただき、SMの御指導がええる女性にお引き合わせいただきたい、おねがい申し上げます。何分、新入生の小生は縛ったことも縛られたこともなく御教えねがう身であります。また貴社の企画におすがりして御紹介を受け、女性にハントされる身では、Sとして女性を責めたい欲求は満たしていただけないと思えますが、Mとしてみにくい裸身をさらす覚悟です。御配慮ねがえれば幸甚です。また御照会の折とは、とても苦痛でございますので女性のひととして御企画の中に重ねて御配慮いただきとうございませう。写真撮影については記録をとっておきたい欲求はございますが誌上公開にふみ切れず、おゆるし

開股縛りに喜悅する女

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はわ▽

全裸の女体立ち縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はふ▽

黒縄は白肌を酷に彩る

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はほ▽

悦虐に身もたえる美女

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はあ▽

菱縄は白肌をくびる

大手札三枚一組 四〇〇円
中河 恵子 略号△はう▽

柱に立縛りでさらす

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はさ▽

卓上の開股羞恥責め

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はめ▽

無防備の女体を開陳

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はし▽

遠山静子夫人の立縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
中河 恵子 略号△はも▽

若妻の魅力を発散する

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△へむ▽

後手縛り全裸身の魅力

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△へめ▽

悶える猿轡の裸身

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△へも▽

ムチ打ちの陶醉境

大手札三枚一組 四〇〇円
関谷富佐子 略号△へさ▽

両手吊りで痛める女身

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△へし▽

後手縛りの竹棒責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△へす▽

強烈開股強制縛り

大手札三枚一組 四〇〇円
大島 照代 略号△へせ▽

両手吊りであえぐ女体

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△へゆ▽

竹棒強烈開股責め

大手札三枚一組 四〇〇円
大島 照代 略号△へた▽

厳しき緊縛の正坐責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△へち▽

責めの魔手に屈伏する

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△へつ▽

竹棒の胴絞め責め

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△へて▽

竹棒開股胴絞め縛り

大手札四枚一組 五〇〇円
大島 照代 略号△へと▽

ねがいたいと存じます。S Mの御指導をねがえる女性愛好家、またはグループの方々、よろしくおねがい申し上げます。

(横浜・笠井明雄)

○ 小塚守子様。貴女の通信、拝見いたしました。S性六十パーセントの小生は勇を起こし初めてお便りしました。小生と奇クの出会いには十年ほど前からです。読書好きな小生が本屋を漁っているとき奇クを知り、それ以来、ずっと愛読しております。最初、奇クを見たとき、このような性癖は自分一人ではないと安心もし、また不安でもありました。しかし、同好の方が、多数の通信を寄せられているのを拝見して、勇気が湧いてきました。小生は恥辱責めが好きで、体に傷つけることなく、その心を責めさいなむ浣腸などを最高であると思ひますが如何でしょうか。小塚守子様、小生のプランをひとつ。男性ばかりの薬局へ、イチジク浣腸、エネマ器具等の浣腸用具を貴女自身が買いに行くのです。貴女のポケットか手に、今流行のワイヤレスマイクを持ち、ぼくがトランジスタラジオでその様子をたのしむというのは、また

一つの責めであると思ひます。お互に大いにたのしもうではありませんか。(大阪市・結城尚弘)

○

金原町子様。お便り楽しく拝読しました。アメゴムで体にピツタリと喰いつくような、オムツカバーをお探しの由、私が作って差し上げましょう。貴方様の寸法をお知らせ下さい。きつとピツタリとフィットする素敵なゴムのオムツカバーを作れることを、お約束します。色はアメ色のほか、薄いゴム生地でピンク、黒、黄、白、赤、カバ色があり、御希望の色デザインがあれば、お知らせ下さい。なおゴムカバーによるオシメについてゴム器具の嘴管を二又にして、御二人同時に浣腸します。迫り来る強烈な便意が同時に訪れても便所は一つ。オムツを当てていても排泄欲は日頃の習性からトイレを希望するでしょう。そのようなとき御二人は、どのようななさるでしょうか。なお強烈に責めるとすればゴムカバーの上から御二人にバイブレーターを当てて差し上げたと思います。ただし両手両足を縛つての上でプレイするのです。

(神戸・弾 六夫)

最新撮影総天然色
カラー・プリント写真

両手吊りに悶える女

大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号八てき

後手裸身柱縛り
大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てか

縄目にあえぐ裸女
大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てく

豊麗な裸身をくびる縄目
大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八てこ

後手高手小手縛り
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
大塚 啓子 略号八てま

長襦袢の緊縛色模様
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てみ

緋の腰巻緊縛色模様
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てむ

猿ぐつわに呻く女
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てめ

柱宙吊り強烈縛り
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八ても

ポリウムを縛りあげる
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てん

縄に苦悶する裸女を狙う
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
東浦ひかる 略号八てる

真紅の腰巻着用姿態

大手札二枚一組 略号八〇〇円
大塚 啓子 略号八うお

縄に悶える緊縛色模様
大手札二枚一組 略号八〇〇円
東浦・大塚 略号八うて

真紅の腰巻着用縛り
大手札四枚一組 略号一二〇〇円
大塚 啓子 略号八うこ

華麗なる緊縛裸身
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るむ

みだらな開股縛り
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るの

責めに疲れた諦観
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るお

真紅の腰巻姿で緊縛
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るま

羞らいの真正面縛り
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るけ

若肌に喰い込む縄目
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るふ

高手小手後手縛り
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
一宮百合子 略号八るや

股間縛りの開股姿態
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八れよ

羞らいの股間縛り
大手札三枚一組 略号一〇〇〇円
中河 恵子 略号八れに

初めてお便りします。私は二十
五才の男性で、奇クを最初に見た
のは二年ほど以前ですが、それ以
来ずっと購入して拝見しておりま
す。特に辻村氏や塚本氏のカメラ
ハント、カメラルポを拝見するの
が最大の楽しみです。店頭で奇ク
を手にとってパラパラと頁をくっ
て見て、十数葉の写真があるのを
見たときは胸がドキドキします。
ただ、すばらしい写真が白い帯で
カットされていたりするのは、止
むを得ないことではありますが、残
念で仕方がありません。それと紙
質のために、せっかくの写真が不
鮮明なものになります。アートの
紙であればよいのと思いますが、
これも奇クの主旨から止むを得な
いのでしょうか。いずれにしまし
ても、両氏のこれからの作品に期
待します。私は、どちらかとい
うと、鞭打ちなどより羞恥責めが好
きです。特に股間縛りと猿ぐつわ
に魅かれます。全裸の女性を後手
に縛り上げ、彼女の着ていた下着
を口中に押し込んで、その上から
手ぬぐいか縄で嚴重に猿ぐつわを
かませ、様々な羞恥責めを加える
……などと、考え出しますと時の
たつのも忘れます。最近、写真の

焼付をやり出しました。一度はす
ばらしい女性とプレイしてカメラ
に収めたいと思っております。ど
なたか理解ある女性の出現を願っ
ています。尚、同封の絵はヒマな
時に書いたものですが、編集部諸
兄の御高評をいただければ幸いで
す。
(名古屋・佐田麗児)

清水民子様。貴女の御写真を見
て、あまりに美しいので見惚れて
しまいました。その上、幼女のよ
うに、すべすべした白い肌の持主
と知り、たえきれずお便りしまし
た。無毛の美女を求め、無為に過
ごした歳月が、民子様によって叶
えられることを願っております。
剃毛後の皮膚はどうしても不自然
で、また直ぐに生えて来ます。あ
るものを剃るといふことは、興味
よりもわずらわしさが先にたちま
す。ぼくは剃ることよりも磨くこ
とに喜びを感じます。神より授け
られた珍品を誇ってSM道に没頭
せられることこそ、貴女の幸福か
と存じます。
(京都・大西生)

小塚守子様。私は貴女と同年令
の男性です。貴女が私と同様、流
腸に興味があることを拝見し、非
常に嬉しく思いました。けれど貴

双胎臨月蛙腹鮮烈写真

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号△れや▽

双胎臨月腹強烈縛り

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号△れゆ▽

臨月腹裸身の媚態

大手札六枚一組 二〇〇〇円
増田みゆき 略号△れえ▽

黒縄縦縛りの媚態

大手札三枚一組 一〇〇〇円
中河 恵子 略号△れぬ▽

立縛りにあうの裸女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村 洋子 略号△れね▽

開股された股間縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村 洋子 略号△れの▽

豆絞りの猿ぐつわ縛り

大手札三枚一組 一〇〇〇円
木村 洋子 略号△れむ▽

柱宙縛りに喘ぐ刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△やか▽

高手小手に悶える全裸

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△やき▽

緊縛に映える入墨の肌

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△やく▽

脱がされた緊縛刺青女体

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△やも▽

縄にのたうつ入墨裸身

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△やし▽

腰巻一つで縛られる刺青女

大手札三枚一組 一〇〇〇円
山原 清子 略号△やみ▽

女相撲迫力投業連続動作

大手札十二枚一組 五〇〇〇円
大塚・東浦 略号△なる▽

恵子の妊孕美観賞

大手札四枚一組 一二〇〇円
中河 恵子 略号△ぬめ▽

孕み若妻の羞らい

大手札四枚一組 一二〇〇円
中河 恵子 略号△ぬね▽

八の字の開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知 葉子 略号△しい▽

足枷強制開股責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知 葉子 略号△しみ▽

全裸強烈逆エビ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知 葉子 略号△しけ▽

両手吊り足枷責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知 葉子 略号△しこ▽

両腕逆手吊り責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知 葉子 略号△しら▽

豊満なる臀部責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知 葉子 略号△しれ▽

大の字縛りと足挙げ責め

大手札三枚一組 一〇〇〇円
愛知 葉子 略号△しわ▽

お申込みは大阪阿倍野局私書箱
第14号天星社宛へ願います。

女は、まだ実際に浣腸をしたこと
はないようですね。ぜひ実行に移
してみても如何ですか。空想では
味わえない素晴らしいものが浣腸に
はあります。私は、このお便りを
書く前に、すでにイチジク浣腸を
しました。まだ見ぬ貴女のお顔を
思い浮かべながら、苦しみにあた
てペンを走らせています。もしも
貴女と浣腸プレイができたなら、私
は貴女にオシメカバーを装置し、
また貴女は私に浣腸を施し、とも
に便意に苦しみ抜きたいと思っ
ています。
(横浜・太郎)

初めてお便りします。私は福岡
在住の、ぐっと若い男性です。ま
だプレイの経験はありません。去
年、ある古本屋で奇クを見て以来
すっかり本誌のファンになりました。
た。本屋には色々この種の雑誌が
並べてありますが、やはり奇クが
いちばん秀れていると思います。
でも残念なことは、奇クサロンに
しろ読者通信にしろ、いずれも東
京や関西の方の投稿ばかり、九州
地方にお住いの人の発表がないの
は非常に残念なことです。どうか
女性読者の方も勇気を出してお便
り下さい。
(福岡・竹内)

前田カオル様。ぼくは創刊号よ
り二十数年間、奇クを愛読してい
る孤独なサラリーマンです。この
東京、しかもぼくの住む近くに同
好の女性がいるということは、ぼ
くの最高の喜びです。ぜひ緊縛に
ついて、よき理解者となっていた
だきたい、お便りするものです。
お互いのプライバシーは必ず守り
ます。好みとしては色々あります
が、緊縛は全裸にて、後手、高
手、小手縛り。両足は思いきり開き、
Aにアクセサリとして、造花を
一輪。またベッドに大の字縛り、
エビ縛りなど、色々緊縛につい
て空想しています。きつと貴女を
心ゆくまで満足させられるものと
思います。この孤独なS生に対
し、貴女様よりの良き御返事お待
ちしています。(東京・高橋清)

左海敏江様。貴女の願いのうち
一つだけ叶えてあげましょう。ば
くは貴女を快く指導するほどの人
間ではないので、プレイは無理で
す。しかし奇クの旧号は少しずつ
買い求め、二十八年頃からの臨
時増刊号、フォト集もほぼ揃って
います。失礼ですが必ず返しても
らうことを約束してお見せしまし
よう。実は旧号は失うと再入手は

編集部特写緊縛女体資料

逆さ吊りの臨月妊婦	大手札三枚一組	略号△さめ	五〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さめ	五〇〇円
両手吊りの臨月妊婦	大手札三枚一組	略号△さめ	五〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さめ	五〇〇円
若妻初妊娠の哀歓	大手札三枚一組	略号△さい	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さい	四〇〇円
妊婦の全裸縛り全身	大手札三枚一組	略号△さい	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さい	四〇〇円
妊婦腹の緊縛側面	大手札三枚一組	略号△さみ	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さみ	四〇〇円
強烈縛り妊婦責め	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さる	四〇〇円
若妻の緊縛妊孕美	大手札三枚一組	略号△さま	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さま	四〇〇円
膨満の妊婦乳房責め	大手札三枚一組	略号△さむ	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さむ	四〇〇円
臨月腹の全裸晒し	大手札三枚一組	略号△さち	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さち	四〇〇円
躍動する妊婦の裸像	大手札三枚一組	略号△さほ	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さほ	四〇〇円
妊娠という異常美の女体	大手札三枚一組	略号△さへ	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さへ	四〇〇円
見てほしい臨月腹	大手札三枚一組	略号△さと	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△さと	四〇〇円
妊婦全裸の全身肢体	大手札三枚一組	略号△ささ	四〇〇円
金原奈加子	大手札三枚一組	略号△ささ	四〇〇円
全裸正面の縄掛け	大手札三枚一組	略号△れろ	四〇〇円
小池美喜	大手札三枚一組	略号△れろ	四〇〇円
柔肌の高手小手縛り	大手札三枚一組	略号△れほ	四〇〇円
小池美喜	大手札三枚一組	略号△れほ	四〇〇円
後手首を縛られた少女	大手札三枚一組	略号△れと	四〇〇円
小池美喜	大手札三枚一組	略号△れと	四〇〇円
飼育された美少女縛り	大手札三枚一組	略号△れと	四〇〇円
小池美喜	大手札三枚一組	略号△れと	四〇〇円
縛られた美女二人	大手札三枚一組	略号△とそ	四〇〇円
小池・松山二嬢	大手札三枚一組	略号△とれ	四〇〇円
全裸の美女を連縛する	大手札三枚一組	略号△とわ	四〇〇円
小池・松山二嬢	大手札三枚一組	略号△とわ	四〇〇円
白肌に喰い込む縄目	大手札三枚一組	略号△とら	四〇〇円
松山真樹子	大手札三枚一組	略号△とら	四〇〇円
一糸まとわぬ柔肌縛り	大手札三枚一組	略号△とゆ	四〇〇円
松山真樹子	大手札三枚一組	略号△とゆ	四〇〇円
開陳した華麗縛り肢体	大手札三枚一組	略号△とえ	四〇〇円
松山真樹子	大手札三枚一組	略号△とえ	四〇〇円
縄に喘ぐ諦観の相	大手札三枚一組	略号△とえ	四〇〇円
松山真樹子	大手札三枚一組	略号△とえ	四〇〇円

殆ど不可能ですから悪しからず。

(東京・清水弘)

仲山知子様。貴女の呼びかけを嬉しく拝見いたしました。当方二十三才の独身サラリーマンです。同じ年頃の貴女が、浣腸責めやA責めのマニアとは、大変すばらしいことです。永年、探し求めた彼女に、やっと巡り会えたような気持ちです。貴女を、きつと満足させるプレイメイトになれると思います。ぜひ一度、心ゆくまで浣腸責め、A責めを実行いたしましう。ぼくの永年の夢をぜひ叶えて下さい。(八千代市・香月伸也)

○

高崎エネマ様、有田治様、岡部一夫様、秋山明様、佃和夫様、皆様のお便り、嬉しく拝見させて頂きました。お便りを読みながらプレイしますと、現実には責められていたような気持ちを味わうことができました、でもボールペンを愛用している私にとっては、化粧品の容器は、ちょっと無理でしたわ。また高圧浣腸器というのは、どこで手に入れることができるのか、お教え下さい。十一月号で小塚守子様の通信を拝見いたしました。実は私も浣腸の実験材料になって、表情の変化や直腸内の変化

便の形態などを克明に観察してほしいという空想をしております。

あまりにも私の気持と同じです。で、守子さんに対して嫉妬のようなものを感じました。夜、浣腸器を持ち出してビニールの風呂敷の上に横になってシリンドーを押しますと、グルグルグルとグリセリンが腸内に満ちています。その感触に狂い、一人ではつまらない、誰か覗いてくれたら誰かこの浣腸器を押してくれたらと悶える毎日です。はしたない女だと、お笑い下さい。(東京・仲山知子)

○

私はKK誌を知り、もう二年になるが、読み切りが一番いいと思う。だけど連載ものでも、読まない部分を自分で想像するから、けっこう楽しい。さて、団鬼六氏の「花と蛇」は相変わらず読みごたえがある。読んでいる間に、全くゾクゾクするぐらいに官能をくすぐるものがにじみでてる。いろんな人から意見がでているようだが、非常にすばらしい読物である。また辻村氏のカメラ・ハントは、ハントした女性との知り合いたきっかけからプレーにおよぶまで、そしてプレーの最中、結末と、上手に話を運んでいる。フオ

SとMの甘い一瞬

大手札三枚一組 略号△とさ▽ 四〇〇円

松山・小池二嬢

大手札三枚一組 略号△とけ▽ 四〇〇円

相愛の極致を描く二女

大手札三枚一組 略号△とな▽ 四〇〇円

マキとミキ

大手札三枚一組 略号△らて▽ 四〇〇円

鞭に狂う悦虐表情

大手札三枚一組 略号△らあ▽ 四〇〇円

足吊りの被虐肢体

大手札三枚一組 略号△こよ▽ 四〇〇円

美しきマソの境地

大手札三枚一組 略号△こわ▽ 四〇〇円

裸後手柔肌縛り

大手札三枚一組 略号△こお▽ 四〇〇円

乳房強烈膨隆責め

大手札三枚一組 略号△こね▽ 四〇〇円

海老責めに苦悶する

大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円

全裸の緊縛全身晒し

大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円

煙草責めに喘ぐ女

大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円

抱擁する美女二人

大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円

ミキとマキ

大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円

柔肌と柔肌のレス狂態

大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円

緊縛麗姿に映えるライト

大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円

臀部強調後手縛り

大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円

羞恥に悶える全裸緊縛

大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円

ホステスの緊縛姿態

大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円

二つ折りで責める女体

大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円

脈打つ全裸の臨月腹

大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円

臨月腹の革紐股間縛り

大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円

中河恵子

大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円

猿轡の臨月妊婦腹縛り

大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円

卓上の股間縛り狂態

大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円

羞恥の足挙げ責め

大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円

長井葉津子

大手札三枚一組 略号△こほ▽ 四〇〇円

次号(一月号)は十一月二十五日に発売いたします

トも、どの一枚をとっても緊縛された女性の無残美がにじみ出ていて読者を魅了させるものがあると思う。また、同質の塚本氏のカメラ・ルポも、すばらしいの一言につきる。
(名古屋・茂野庄一)

私は二十二才の工務店つとめです。非常なSマニヤで、自分の抑圧不可能な性癖を早くから自覚していましたので、早々幼い妻をめぐり、一生懸命に調教しました。

十八才の幼い妻は純心で、写真など見せて教育しましたところ一年足らずの間に見事な飼育調教の成果を現わし、夫の私でさえ驚くほどのM女に成長し、私を喜ばせていますが、更に最高のM女に昇めたく思い同好の士を求める次第です。妻が恍惚の姿態を曝すためには、妻と同年輩のS女を含む男女混合グループによる責めが最適だと思っています。妻の白い豊かな臀部が皆様の手に震える日を夢見て筆をおきます。(須磨・若いマニヤ)

前略、数年来の貴誌の大ファンです。最近に興味本位なものも含

めて、週刊誌にまでSM関係の記事が、かなり出てきています。つい先日週刊誌にも、団鬼六先生が東京新宿でSMスナックを開店した由、出ていましたが、東京に住む人が羨ましく思いました。大阪を中心とした関西にも、このような同好の士が集まるようなところはないでしょうか。どなたか有志の心意気で、このような店を開いてほしいものだと思います。自身はS四十パーセント、M六十パーセント程度の標準的なSMマニアで、プレー歴など皆目ありません、みなさんよろしく。

(京都・久保生)

東京Y様、十一月拝見しました。奥様もSMに協力的で、うらやましいかぎりですね。さて鼻の穴あけの件ですが、以前奇クに載っていたものを紹介します。銅線がありましたら、両方の先端をヤスリでとがらします。それを輪にまわめまして、先をよくローソクの火で焼いて消毒し、赤チン(キシロ軟膏の方がよい)を厚目につけて鼻の両穴よりさしこみ、一番

うすいところを両指で持って銅線強く押ししますと簡単に穴があきます。あとにキシロをよくなすつて、あいた穴がふさがらないように、小さなネジボルトをさし込んでおけば良いと思います。私の女房はMに関心はありませんが、私の自由になりますので、縛ったり下ばきをとって街に連れて行くこともあります。以前、妻の妊婦腹の写真を安原さゆりの名で出したこともあります。私は四十二才、妻は三十七才です。これから、ぜひよいお友達になりたいと思います。よろしく願います。

(埼玉・安原)

読者の一人として一度はこの欄に投書して見度くてペンを取りました。貴誌を知り十年近くなりですが、かつては時折り思い出したかの様に、古本屋で月遅れを買って読む程度でしたが、最近はずっかり奇クファンになり毎月の発売を楽しみにしております。一口にSMと申しても、人それぞれに違った趣向がありましようが、私は特に吊り責め、羞恥責めなどに興味を覚えます。貴誌の中ではかつて山本氏の「痴人の糧」や最近益々充実してきたカメラハントな

ど私の最も好きな読物です。読者通信欄をみても、それぞれにSでありMであることで、お互いに自分のそうした気持を満たしてくれようという良きパートナーを求めている方がかなり多い様ですが、私も一人のS的人間として良きMの人を求めている者です。結婚して五年になりますが、妻は私のそうした欲求をどうしても理解してくれず、いくら本や写真を見せたとしても、唯見るだけで、それ以上どうしてもついてこないのです。私も無理に飼育しようとは思いませんが、夫婦で思う存分プレイを楽んでいらっしゃる方を思うと、何か悶々としたものが心の中をよぎります。本当に羨ましい限りです。悩める者同志が、お互いに信頼し合い、たとえ、そのプレイのみのつながりであったとしても、その様な機会が得られるとしたら本当にすばらしいことです。この欄の中にM女性の方の文面にも出ておりますが、仮に「そのつもりで信頼して参りますもの、受身の女の弱さでやはり不安である」と書かれてある様に個人プレイとなると色々難しい点が多いようです。夫婦交換プレイにしろ、個人個人のプレイにしろ、お互いが

編集後記

○次々とお寄せ下さる投稿に、根強いご支援を感じつつ心強い想いと共に、ボヤボヤしとられんという思いがします。以前にも書いたことですが、原稿用紙を埋めるという作業は、ある程度手慣れた人でも楽なものではないでしょうし、想いを文字にするこの難しいこともよく承知しているつもりですから、その労を謝する意味でも、出来るだけ到着後速かに、掲載を前提として目を通して貰うよう努力しています。何よりも、限られた日数で遅滞なく発刊の必要に迫られているのですから、いやでもセイを出さざるを得ないわけですが、総じて「自己本位」であることは当然ながら、それが度を越して「同調強要型」や

「指導者自認型」となると、やたらな「自己陶醉型」以上に、後味の悪さが残るように思えて仕方がありませんし、近頃は一般誌ですら、すごい性交描写をしているじゃないかとばかりに、SEXそのものを強調したもの、意図も分からなくはないのですが、肝心のセクスアピール要因については影が薄くなり、単なる煽情ものに陥ってしまうようです。○文としてはたどたどしくとも、各種の特殊な性衝動について注目してこそ読むに価するものが生じ、長々とした行為の羅列や直接的煽情のメイ文より、遙かに人の心に訴えるものが残ると思うのですが、どんなものでしょうか。いくらスピード時代とはいえ、ジェット機や新幹線で味わえない「心の旅路」の曲折こそ必要事ではないのでしょうか？

懸賞原稿募集

△体験、告白、手記▽

読者の皆さまが自分で親しく体験されたことや、かくされた性癖や性向について語ってみたいと思われたこと、或はこれだけは、どうしても書き残しておきたいと考えられた事を大胆にお寄せ下さい。採用しました原稿には三千元以上の賞金を贈呈します。

△創作、小説、物語▽

本誌の編集内容に適した特異な素材を駆使した力作をお待ちします。すべて自作の未

発表作品に限ります。これはと思う作品は必ず誌上に取り上げます。腕試しの意味で奮って御投稿願います。採用篇には賞金十万元迄贈呈。

△感想、論評、批判▽

本誌に関連したものでしたら話題の内容は問いません。忌憚なき皆さまの御意見をお待ちします。採用篇には二千元以上の賞金を呈します。

△(映画、雑誌)通信▽

映画、雑誌、演劇、新聞、単行本或はその他見聞などで特に興味をお持ちになった事項の通信をお待ちします。出

処は詳しく明記願います。採用篇には本誌三月分以上又は二千元以上の賞金贈呈。◎御送付下さいました原稿は原則として返却の求めに応じないことになっております。故に悪しからず御諒承願います。◎本文記事中に各種の「懸賞原稿募集」を致しております。故、御応募の方は項目を御明記の上御送稿下さい。

△読者通信原稿▽

巻末の読者通信欄は読者の皆さま方のための公共の広場として開放してあります。御遠慮なくお寄せ下さい。

☆ 本誌御購読の葉 ☆

予約に限り
一月分(1冊)三五〇円△送20円▽
三月分(3冊)一〇五〇円△送共▽
半年分(6冊)二一〇〇円△送共▽

本誌は毎月二十五日に全国各地の有名書店にて一斉に発売いたしますが、入手困難の方は直接代金御送付の上、御予約下さい。重包装して確実に発送申し上げます。局留の方々は二十五日頃受領して下さい。

奇譚クラブ 定価 三五〇円

十二月号

(第二十四巻第十二号)
(通刊第二百七十三号)

昭和四十五年十一月二十日 印刷
昭和四十五年十二月一日 発行

編集人 杉原 虹児
発行人 吉田 稔
印刷人 北村 俊夫

大阪市住吉郵便局私書函第四十一号

発行所 暁出版株式会社

郵便番号558
(昭和三十一年四月二〇日第三種郵便物認可)
(昭和四十二年四月二一日)
国鉄大塚特別取扱承認雑誌第二二〇号

☆書店の皆様方へお願い☆

○本誌は口絵、グラビア写真の廃止、挿絵の削減、内容の改訂等につとめ、青少年の健全なる育成に努めることと致しております。いよいよ充分に注意して編集いたしました。すい、本誌は成人として発行を企図しております。売下さらないよう、特にくれぐれもお願ひ申し上げます。